千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書 2

－東金市大谷台遺跡他18遺跡－

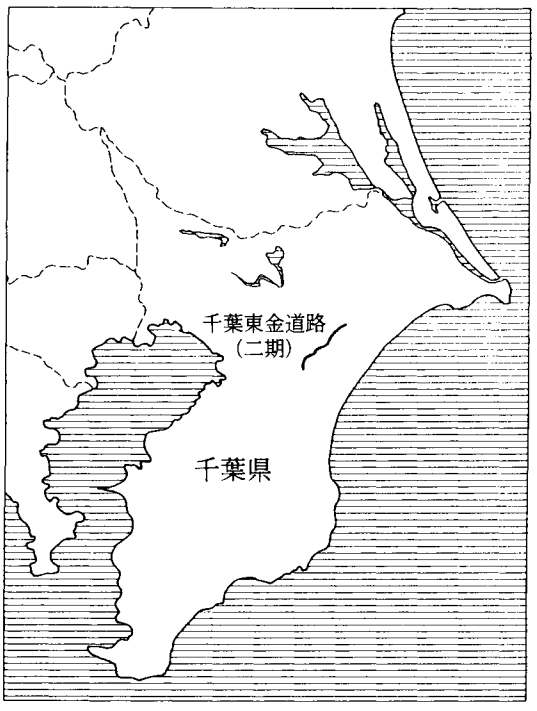
平成10年 3 月

日　本　道　路　公　団

財団法人　千葉県文化財センター

千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書 2

－東金市大谷台遺跡他18遺跡－



序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第331集として、日本道路公団の千葉東金道路（二期）事業に伴って実施した東金市大谷台遺跡ほか計19遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代に始まり縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世にわたっての遺物・遺構が検出され、千葉県山武郡地域の広範にわたる歴史を知る上で貴重な成果が得られております。特に縄文時代草創期の土器は、研究上極めて貴重な資料となるものであります。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土研究の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年３月31日

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　中　村　好　成

凡　例

1　本書は、日本道路公団による千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査に伴う報告書の第二冊目である。

2　本書に収録した遺跡は、別記一覧表のとおり千葉県東金市滝字大谷台144ほかに所在する大谷台遺跡を初めとする19遺跡である。

遺　跡　名	所　　在　　地	遺跡コード
大谷台遺跡	東金市滝字大谷台144ほか	213-020
丹尾台遺跡	東金市滝字大山台151-1（八街市滝台字丹尾台1727）ほか	213-019（230-001）
万才楽遺跡	東金市滝沢字高見塚620-1ほか	213-012
万谷遺跡	東金市滝沢字清水田559-1ほか	213-013
新堀遺跡	東金市滝沢字新堀546-1ほか	213-014
市谷遺跡	東金市滝沢字市谷481ほか	213-010
油谷（1）遺跡	東金市滝沢字油谷498-1ほか	213-015
油谷（2）遺跡	東金市滝沢字油谷498-1ほか	213-015
岡田遺跡	東金市酒蔵字岡田126ほか	213-016
岡田山遺跡	東金市酒蔵字岡田山147-1ほか	213-017
鹿穴遺跡	山武郡山武町森字鹿穴1811ほか	405-008
小田山遺跡	山武郡山武町植草字小田山1795ほか	405-009
原山之神遺跡	山武郡山武町森字原野山801-1	405-010
道塚遺跡	山武郡山武町森字道塚244-1ほか	405-011
東嵐山遺跡	山武郡山武町椎崎字東嵐山1585ほか	405-003
里守遺跡	山武郡山武町戸田字里守835-3ほか	405-007
向畑遺跡	山武郡山武町戸田字向畑425-1ほか	405-006
榎谷遺跡	山武郡松尾町古和字外台565-1ほか	407-005
大谷遺跡	山武郡松尾町谷津字大谷279ほか	407-010

上記は発掘調査時のもので、本書では油谷（1）遺跡と油谷（2）遺跡を一つにまとめ油谷遺跡として報告しているので遺跡数は計18遺跡となっている。

3　発掘調査から報告書刊行に至る業務は、日本道路公団東京第一建設局の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業は、調査概要の別記一覧表の職員が実施した。

5　本書の執筆・編集は、加藤正信、矢本節朗、安井健一、廣瀬和之が行った。

6　報告書内での各遺跡の遺構・遺物等の番号は、それぞれ調査時のものを用いたが、一部に整理作業時に振り替えたものがあり本文中に表示している。

7　発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、日本道路公団東京第一建設局千葉工事事務所、東金市教育委員会生涯学習課、八街市教育委員会社会教育課、山武町教育委員会社会教育課、松尾町教育委員会社会教育課及び多くの地権者・周辺住民の方々の御指導、御協力をいただいた。

本文目次

I　はじめに

1　調査に至る経過……1

2　調査の経緯・経過……1

3　遺跡の位置と周辺の遺跡、歴史的環境……2

II　大谷台遺跡

1　遺跡の概要……10

2　検出した遺構・遺物……10

III　丹尾台遺跡

1　遺跡の概要……40

2　検出した遺構・遺物……43

IV　万才楽遺跡

1　遺跡の概要……50

2　検出した遺構・遺物……53

V　万谷遺跡

1　遺跡の概要……54

2　検出した遺構・遺物……56

VI　新堀遺跡

1　遺跡の概要……57

2　検出した遺構・遺物……57

VII　市谷遺跡

1　遺跡の概要……79

2　検出した遺構・遺物……82

VIII　油谷遺跡

1　遺跡の概要……104

2　検出した遺構・遺物……107

IX　岡田遺跡

1　遺跡の概要……132

2　検出した遺構・遺物……133

X　岡田山遺跡

1　遺跡の概要……134

2　検出した遺構・遺物……134

XI　鹿穴遺跡

1　遺跡の概要……154

2　検出した遺構・遺物……157

ⅩⅡ　小田山遺跡
1　遺跡の概要 ……176
2　検出した遺構・遺物 ……178
ⅩⅢ　原山之神遺跡
1　遺跡の概要 ……179
2　検出した遺構・遺物 ……181
ⅩⅣ　道塚遺跡
1　遺跡の概要 ……193
2　検出した遺構・遺物 ……195
ⅩⅤ　東嵐山遺跡
1　遺跡の概要 ……197
2　検出した遺構・遺物 ……200
ⅩⅥ　里守遺跡
1　遺跡の概要 ……202
2　検出した遺構・遺物 ……206
ⅩⅦ　向畑遺跡
1　遺跡の概要 ……208
2　検出した遺構・遺物 ……210
ⅩⅧ　榎谷遺跡
1　遺跡の概要 ……213
2　検出した遺構・遺物 ……215
ⅩⅨ　大谷遺跡
1　遺跡の概要 ……217
2　検出した遺構・遺物 ……220
ⅩⅩ　まとめ
1　旧石器時代 ……232
2　縄文時代 ……233
3　奈良・平安時代 ……234
4　結語 ……235
報告書抄録　巻末

挿図目次

第1図　遺跡位置図……4
第2図　大谷台遺跡周辺地形図……11
第3図　上層調査状況・遺構等配置図……12
第4図　下層調査状況図……13
第5図　遺構配置図……14
第6図　土坑等（1）……15

第７図　土坑等（２）……17
第８図　ＳＩ－１住居跡……18
第９図　シシ穴……19
第10図　縄文土器（１）……21
第11図　縄文時代石器（１）……21
第12図　縄文土器（２）……23
第13図　縄文土器（３）……25
第14図　縄文土器（４）……26
第15図　縄文土器（５）……27
第16図　縄文土器（６）……28
第17図　縄文土器（７）……31
第18図　縄文土器（８）……34
第19図　縄文土器（９）……35
第20図　土製品……35
第21図　縄文時代石器（２）……37
第22図　縄文時代石器（３）……38
第23図　丹尾台遺跡周辺地形図……40
第24図　上層調査状況・遺構等配置図……41
第25図　下層調査状況図……42
第26図　土坑等（１）……44
第27図　土坑等（２）……45
第28図　土坑等（３）……46
第29図　土坑等（４）……47
第30図　馬土手……48
第31図　万才楽遺跡周辺地形図……50
第32図　上層調査状況・遺構等配置図……51
第33図　下層調査状況図……51
第34図　土坑等……52
第35図　縄文土器……53
第36図　万谷遺跡周辺地形図……54
第37図　上層調査状況図……55
第38図　下層調査状況図……55
第39図　新堀遺跡周辺地形図……58
第40図　上層調査状況・遺構等配置図……59
第41図　下層調査状況図……60
第42図　上層遺構配置図……61
第43図　土坑等（１）……62
第44図　土坑等（２）……63
第45図　土坑等（３）……65
第46図　土坑等（４）……66
第47図　００２住居跡……68
第48図　００２住居跡出土遺物……68
第49図　００３住居跡……69
第50図　００３住居跡出土遺物……69
第51図　０１１住居跡……70
第52図　０１１住居跡出土遺物……71
第53図　０１２住居跡……72
第54図　０１２住居跡出土遺物……72
第55図　縄文土器（１）……74
第56図　縄文土器（２）……75
第57図　縄文時代石器……77
第58図　グリッド出土遺物……77
第59図　市谷遺跡周辺地形図……79
第60図　上層調査状況・遺構等配置図……80
第61図　下層調査状況図……81
第62図　第１ブロック器種別分布……83
第63図　第１ブロック出土石器……84
第64図　第２ブロック器種別分布……85
第65図　第２ブロック出土石器（１）……86
第66図　第２ブロック出土石器（２）……87
第67図　第２ブロック出土石器（３）……88
第68図　第２ブロック出土石器（４）……89
第69図　単独出土石器……89
第70図　土坑等（１）……90
第71図　土坑等（２）……91
第72図　土坑等（３）……93
第73図　００１塚・００２塚……95
第74図　００３塚……96
第75図　００３塚土層断面図……97
第76図　縄文土器（１）……98
第77図　縄文土器（２）……99
第78図　縄文土器（３）……100
第79図　土製品……101
第80図　弥生土器……102

第81図　縄文時代以降石器 ……102
第82図　油谷遺跡周辺地形図 ……104
第83図　上層調査状況・遺構等配置図 ……105
第84図　下層調査状況図 ……106
第85図　第１ブロック・２ブロック器種別分布 108
第86図　第１ブロック出土石器（１） ……109
第87図　第１ブロック出土石器（２） ……110
第88図　第１ブロック出土石器（３） ……111
第89図　第１ブロック出土石器（４） ……112
第90図　第２ブロック出土石器 ……113
第91図　第１礫群・第２礫群出土分布 ……115
第92図　遺構等配置図 ……118
第93図　土坑等（１） ……119
第94図　土坑等（２） ……120
第95図　縄文土器（１） ……122
第96図　縄文土器（２） ……123
第97図　縄文土器（３） ……124
第98図　縄文土器（４） ……125
第99図　縄文土器（５） ……126
第100図　縄文時代石器……130
第101図　グリッド出土遺物……131
第102図　岡田遺跡周辺地形図……132
第103図　調査状況図……133
第104図　出土遺物……133
第105図　岡田山遺跡周辺地形図……135
第106図　上層調査状況・遺構等配置図……136
第107図　下層調査状況図……137
第108図　第１ブロック出土状況……138
第109図　第１ブロック出土石器……138
第110図　遺構配置図……139
第111図　土坑等……140
第112図　００２住居跡……141
第113図　００２住居跡出土遺物……142
第114図　００３住居跡……143
第115図　００３住居跡出土遺物……144
第116図　００５住居跡……145
第117図　００５住居跡出土遺物……145
第118図　００６住居跡……146
第119図　００６住居跡出土遺物……147
第120図　００９住居跡……148
第121図　００９住居跡出土遺物……149
第122図　０１１住居跡……150
第123図　０１１住居跡出土遺物……150
第124図　縄文土器……151
第125図　縄文時代石器……153
第126図　グリッド出土遺物……153
第127図　鹿穴遺跡周辺地形図……154
第128図　上層調査状況・遺構等配置図……155
第129図　下層調査状況図……156
第130図　土坑等……157
第131図　ＳＩ－００１住居跡……158
第132図　ＳＩ－００１（Ｂ）住居跡……158
第133図　ＳＩ－００１住居跡出土遺物……159
第134図　ＳＩ－００２住居跡……160
第135図　ＳＩ－００２住居跡出土遺物……160
第136図　ＳＩ－００３住居跡……161
第137図　縄文土器（１）……162
第138図　縄文土器（２）……164
第139図　縄文土器（３）……165
第140図　縄文土器（４）……167
第141図　縄文土器（５）……168
第142図　縄文土器（６）……169
第143図　縄文土器（７）……170
第144図　縄文土器（８）……173
第145図　土製品……173
第146図　縄文時代石器……175
第147図　グリッド出土遺物……175
第148図　小田山遺跡周辺地形図……176
第149図　上層・下層調査状況図……177
第150図　縄文土器……178
第151図　グリッド出土遺物……178
第152図　原山之神遺跡周辺地形図……179
第153図　上層調査状況・遺構等配置図……180
第154図　下層調査状況図……180

第155図　第１ブロック器種別分布……181
第156図　第１炭化物集中地点分布……182
第157図　第１ブロック出土石器（１）……183
第158図　第１ブロック出土石器（２）……184
第159図　炭焼窯……185
第160図　１号住居跡……186
第161図　１号住居跡出土遺物（１）……187
第162図　１号住居跡出土遺物（２）……188
第163図　縄文土器……190
第164図　縄文時代石器（１）……190
第165図　縄文時代石器（２）……191
第166図　道塚遺跡周辺地形図……193
第167図　上層調査状況・遺構等配置図……194
第168図　下層調査状況図……194
第169図　単独石器出土状況……195
第170図　単独出土石器……195
第171図　縄文土器……196
第172図　縄文時代石器……196
第173図　東嵐山遺跡周辺地形図……197
第174図　上層調査状況・遺構等配置図……198
第175図　下層調査状況図……198
第176図　第１ブロック出土状況……199
第177図　第１ブロック出土石器……199
第178図　縄文土器……201
第179図　グリッド出土遺物……201
第180図　里守遺跡周辺地形図……202
第181図　上層調査状況・遺構等配置図……203
第182図　下層調査状況図……204
第183図　００１土坑……205
第184図　縄文土器……205
第185図　縄文時代石器……205
第186図　グリッド出土遺物……206
第187図　向畑遺跡周辺地形図……208
第188図　上層調査状況・遺構等配置図……209
第189図　下層調査状況図……209
第190図　溝１……210
第191図　縄文土器……211
第192図　縄文時代石器……211
第193図　グリッド出土遺物……211
第194図　榎谷遺跡周辺地形図……213
第195図　上層調査状況・遺構等配置図……214
第196図　下層調査状況図……214
第197図　単独石器出土状況……215
第198図　単独出土石器……215
第199図　縄文時代石器……216
第200図　グリッド出土遺物……216
第201図　大谷遺跡周辺地形図……217
第202図　上層調査状況・遺構等配置図……218
第203図　下層調査状況図……219
第204図　土坑等（１）……220
第205図　土坑等（２）……221
第206図　土坑等（３）……223
第207図　土坑等（４）……224
第208図　土坑等（５）……225
第209図　ＳＩ－１住居跡……227
第210図　ＳＩ－１住居跡出土遺物……227
第211図　ＳＩ－２住居跡……228
第212図　ＳＫ－７土坑出土土器……229
第213図　縄文土器……229
第214図　縄文時代石器……231

表　目　次

第１表　遺跡一覧……3
第２表　執筆者一覧……3
第３表　縄文時代石器属性表(大谷台遺跡)……39
第４表　縄文時代石器属性表(新堀遺跡)……77
第５表　第１ブロック石器属性表(市谷遺跡)……84
第６表　第２ブロック石器属性表(市谷遺跡)……86

第７表　単独出土石器属性表(市谷遺跡)……89
第８表　縄文時代以降石器属性表(市谷遺跡) …102
第９表　第１ブロック石器属性表(油谷遺跡) …113
第10表　第２ブロック石器属性表(油谷遺跡) …113
第11表　第１号礫群属性表(油谷遺跡) ……116
第12表　第２号礫群属性表(油谷遺跡) ……117
第13表　縄文時代石器属性表(油谷遺跡) ……130
第14表　第１ブロック石器属性表(岡田山遺跡) 139
第15表　縄文時代石器属性表(岡田山遺跡) ……153
第16表　縄文時代石器属性表(鹿穴遺跡) ……175
第17表　第１ブロック石器属性表(原山之神遺跡)
……185
第18表　縄文時代石器属性表(原山之神遺跡) …192
第19表　単独出土石器属性表(道塚遺跡) ……195
第20表　縄文時代石器属性表(道塚遺跡) ……196
第21表　第１ブロック石器属性表(東嵐山遺跡) 200
第22表　単独出土石器属性表(東嵐山遺跡) ……200
第23表　縄文時代石器属性表(里守遺跡) ……205
第24表　縄文時代石器属性表(向畑遺跡) ……211
第25表　単独出土石器属性表(榎谷遺跡) ……215
第26表　縄文時代石器属性表(榎谷遺跡) ……216
第27表　縄文時代石器属性表(大谷遺跡) ……231

図版目次

図版１　大谷台遺跡（全景、シシ穴）
図版２　大谷台遺跡（№６、№９シシ穴）
図版３　大谷台遺跡（土坑群、竪穴住居跡、包含層調査風景）
図版４　大谷台遺跡（土坑）
図版５　大谷台遺跡（土坑）
図版６　丹尾台遺跡（野馬土手）
図版７　丹尾台遺跡（陥穴）
図版８　万才楽遺跡（遠景、土坑）
万谷遺跡（遠景）
図版９　新堀遺跡（遠景、標準土層、００２住居跡）
図版10　新堀遺跡（００２住居跡、００３住居跡、０１１・０１２住居跡）
図版11　新堀遺跡（０１１住居跡、０１２住居跡）
図版12　新堀遺跡（井戸、土坑）
図版13　新堀遺跡（土坑、陥穴、井戸）
図版14　新堀遺跡（土坑）
図版15　新堀遺跡（土坑）
図版16　新堀遺跡（土坑）
図版17　市谷遺跡（００３塚）
図版18　市谷遺跡（００３塚、土坑）
図版19　市谷遺跡（土坑）
図版20　市谷遺跡（土坑）
図版21　市谷遺跡（土坑、縄文包含層、旧石器ブロック）
図版22　油谷遺跡（縄文包含層、土坑）
岡田遺跡（遠景）
図版23　岡田山遺跡（遠景、全景、００２住居跡）
図版24　岡田山遺跡（００２住居跡、００３住居跡）
図版25　岡田山遺跡（００５住居跡、００６住居跡）
図版26　岡田山遺跡（００６住居跡、００９住居跡、０１１住居跡）
図版27　岡田山遺跡（土坑）
図版28　鹿穴遺跡（００１住居跡、００２住居跡、００３住居跡）
図版29　鹿穴遺跡（土坑）
図版30　鹿穴遺跡（包含層）
小田山遺跡（遠景、トレンチ）
図版31　原山之神遺跡（１号住居跡、２号炭焼窯）
図版32　道塚遺跡（遺物出土状況）
東嵐山遺跡（全景、旧石器ブロック）
図版33　里守遺跡（土坑）
向畑遺跡（調査前状況、調査風景）
図版34　榎谷遺跡（全景、遺物出土状況、下層確認

調査）
図版35　大谷遺跡（ＳＩ－１住居跡、ＳＩ－２住居跡、土坑）
図版36　大谷遺跡（土坑）
図版37　市谷遺跡旧石器時代第１ブロック・第２ブロック（１）
図版38　市谷遺跡旧石器時代第２ブロック（２）
図版39　油谷遺跡旧石器時代第１ブロック（１）
図版40　油谷遺跡旧石器時代第１ブロック（２）
図版41　油谷遺跡第２ブロック・岡田山遺跡・道塚遺跡・榎谷遺跡・東嵐山遺跡旧石器時代
図版42　原山之神遺跡旧石器時代第１ブロック
図版43　大谷台遺跡縄文時代石器
図版44　新堀遺跡・市谷遺跡・油谷遺跡縄文時代石器
図版45　鹿穴遺跡・原山之神遺跡縄文時代石器
図版46　大谷台遺跡縄文土器（１）
図版47　大谷台遺跡縄文土器（２）
図版48　大谷台遺跡縄文土器（３）
図版49　大谷台遺跡縄文土器（４）
図版50　大谷台遺跡縄文土器（５）
図版51　万才楽遺跡、新堀遺跡縄文土器
図版52　市谷遺跡縄文土器
図版53　油谷遺跡縄文土器（1）
図版54　油谷遺跡縄文土器（2）
図版55　油谷遺跡縄文土器（3）
図版56　油谷遺跡縄文土器（4）・岡田山遺跡縄文土器
図版57　鹿穴遺跡縄文土器（１）
図版58　鹿穴遺跡縄文土器（２）
図版59　鹿穴遺跡縄文土器（３）
図版60　鹿穴遺跡縄文土器（４）
図版61　鹿穴遺跡縄文土器（５）
図版62　鹿穴遺跡縄文土器（６）・大谷遺跡縄文土器
図版63　小田山遺跡・原山之神遺跡・道塚遺跡・東嵐山遺跡縄文土器
図版64　岡田山遺跡・道塚遺跡・榎谷遺跡・里守遺跡・向畑遺跡縄文土器、石器
図版65　新堀遺跡・岡田山遺跡出土土器
図版66　岡田山遺跡出土土器
図版67　岡田山遺跡・鹿穴遺跡・原山之神遺跡出土土器
図版68　原山之神遺跡・東嵐山遺跡・里守遺跡・向畑遺跡・榎谷遺跡出土土器

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過

千葉県を初めとする首都圏一円では、道路交通の慢性的渋滞の解消、並びに東京地域への不必要な自動車の流入を制限するために首都圏を巡る広域環状道路の必要性を感じ、首都圏中央連絡自動車道（略称－圏央道）を建設することとなった。その一貫として、千葉県では東京湾を挟んだ対岸の神奈川県から東京湾を横断する東京湾横断道路と、それに接続する連絡道路と房総半島を南に向かって延びる東関東自動車道館山線の一部はすでに完成している。日本道路公団は、前述の圏央道の建設を推進するために一部を事業化し、千葉東金道路を現在の終点である東金市から北東に延伸し、横芝町迄の16.1kmの区間にわたって、千葉東金道路（二期）建設事業として道路建設を行うこととなった。この道路建設に際し、日本道路公団は周辺の自然・文化環境保護等に最大の注意を払い、その中で路線の策定等を行っていった。この際に事業地内に所在する埋蔵文化財の所在の有無が千葉県教育委員会に照会された。これに対し千葉県教育庁生涯学習部文化課では、予定地内の埋蔵文化財の所在の有無を慎重に踏査し、合計39か所の包蔵地等が所在する旨の回答をした。この埋蔵文化財の取り扱いについて、日本道路公団と千葉県教育庁生涯学習部文化課との間で協議が行われたが、事業の性格上道路の建設は必要で、現状保存は不可能であり、事業地内に所在する埋蔵文化財は記録保存することで協議が整った。

これにより、千葉県教育庁生涯学習部文化課の指示により、発掘調査機関は財団法人千葉県文化財センターが指名され日本道路公団と財団法人千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託契約が締結され、ここに平成４年度から発掘調査が実施されることとなり、平成５年１月から山武郡山武町の栗焼棒遺跡の発掘調査が開始された。これを端緒として東金道路（二期）用地内の遺跡の発掘調査が開始され、以後平成５年度から９年度までの計６年度にわたって発掘調査が行われた。

2　調査の経緯・経過

平成４年度の後半期から発掘調査を開始したが、事業の性格上時間的な制約が多く、発掘調査のための時間が多くは見込まれていなかったことから、当センターとしても発掘調査のために最大限の勢力を投入し、発掘調査の進捗を図った。そのため平成５年度からは数多くの遺跡の発掘調査が同時に行われ、平成５年度では11遺跡、平成６年度は21遺跡、平成７年度は９遺跡の発掘調査を実施した。これにより平成８年度には発掘調査の山は越え、買収が遅れた地区を中心とした７遺跡の調査となっていった。平成９年度には４遺跡の調査をもって東金道路（二期）の発掘調査は終了した。以下に発掘調査を実施した遺跡名を年度ごとに列記する。（平成９年度分まで、太字は今回報告の19遺跡）

平成４年度　栗焼棒遺跡

平成５年度　栗焼棒遺跡、**東嵐山遺跡**、小川崎台遺跡、大長作遺跡、ヲフサ野遺跡、上人塚遺跡、**向畑遺跡、市谷遺跡、里守遺跡**、駄ノ塚遺跡、久保谷遺跡

平成６年度　上人塚遺跡、**新堀遺跡**、久保谷遺跡、**市谷遺跡、道塚遺跡、原山之神遺跡**、大長作遺跡、**岡田遺跡、小田山遺跡、万谷遺跡、油谷（１）遺跡、油谷（２）遺跡、万才楽遺跡、鹿穴遺跡**、中谷遺跡、**榎谷遺跡**、ヲフサ野遺跡、**岡田山遺跡**、大山遺跡、**大谷遺跡**、小川崎台

遺跡

平成７年度　**大谷台遺跡、丹尾台遺跡**、前畑遺跡、赤羽根遺跡、一本松遺跡、羽戸遺跡、大山遺跡、四ツ塚遺跡、久保谷遺跡

平成８年度　羽戸遺跡、前畑遺跡、滝台遺跡、ビンダライ遺跡、一本松遺跡、赤羽根遺跡、駄ノ塚遺跡

平成９年度　前畑遺跡、板橋遺跡、大山遺跡、赤羽根遺跡

発掘調査と並行して基礎的な整理作業にも着手したが、本格的な整理作業は平成７年度から開始した。まず調査が終了した遺跡の中で、多数の遺構・遺物が検出され整理作業に時間を要する遺跡を選び、整理作業を開始した。第一冊目として、それらの中から一遺跡で比較的まとまった内容の栗焼棒遺跡を選び刊行することとした[1)]。またそれと並行して比較的遺物・遺構の検出の少なかった19遺跡を選んで、報告書刊行のための整理作業を平成８年度から実施した。平成８年度に水洗・注記等の基礎整理から整理作業を開始し、平成９年度に原稿執筆を行い刊行することとなった。

本報告書に関連する事業担当者、調整者等は以下の通りである。(該当遺跡担当者は太字)

平成５年度　調査研究部長　高木博彦　　成田調査事務所長　矢戸三男

発掘調査　　副所長　豊田佳伸（～９月）　**高田博**（10月～）　　主任技師　**森本和男　宮城孝之**　永沼律朗　川島利通　**渡邊高弘**　　技師　半澤幹雄

平成６年度　調査研究部長　西山太郎　　成田調査事務所長　矢戸三男

発掘調査　　副所長　**高田博**　　研究員　**平松長寿**　　主任技師　鈴木文雄　**萩原恭一**　宮城孝之　平野雅一　**酒井宏　荒木清一　井上哲朗　矢本節朗**　　技師　渡邊高弘　**豊田秀治　半澤幹雄　沖松信隆**

平成７年度　調査研究部長　西山太郎　　成田調査事務所長　石田廣美

発掘調査　　副所長　高田博　　研究員　平松長寿　　主任技師　平野雅一　荒木清一　**萩原恭一**　井上哲朗　矢本節朗　大谷弘幸　高柳圭一　　技師　沖松信隆

平成８年度　調査部長　西山太郎　　東部調査事務所長　石田廣美

整理作業　　副所長　加藤修司　　芝山調査室長　**加藤正信**　　研究員　**菅原修**　糸川道行　主任技師　平野雅一　荒木清一　石塚浩　矢本節朗　**高梨俊夫　安井健一**　技師　**永塚俊司　黒沢崇**

平成９年度　調査部長　西山太郎　　東部調査事務所長　石田廣美

整理作業　　副所長　加藤修司　　芝山調査室長　**加藤正信**　　主任技師　**矢本節朗　安井健一　廣瀬和之**　荒木清一　　技師　黒沢崇

各遺跡の所在地、調査期間、調査面積・担当者・執筆者等は別記の第１表・第２表のとおりである。

３　遺跡の位置と周辺の遺跡、歴史的環境

ここに報告する18遺跡（調査時は19遺跡＝うち油谷（１）遺跡と油谷（２）遺跡を油谷遺跡として併合したため１遺跡減）は、道路路線長16.1kmの事業範囲の内から整理作業の都合上選択した遺跡であるので、連続して立地する遺跡もあれば、隔たっていたりと、様々な状況を呈し、ほぼ16kmの範囲にわたって分布している。今回の東金道路（二期）の事業範囲では行政区画でいうと、北端は山武郡横芝町から始まり、松尾町、山武町、一部成東町と八街市を横切り東金市へと連なる。内訳は、松尾町２遺跡、山武町７遺跡、

第1表　遺　跡　一　覧

遺　跡　名	所　在　地	遺跡コード	対象面積	上層確認面積	下層確認	上層本調査	下層本調査	発掘調査期間	発掘調査担当者
大谷台遺跡	東金市滝字大谷台144ほか	213-020	2,800㎡	284/ 2,800	54/ 2,800	520㎡	0㎡	7.9.4～7.10.16	萩原恭一
丹尾台遺跡	東金市滝字大山台151-1ほか	213-019(230-001)	10,017㎡	1,062/10,017	204/10,017	0㎡	0㎡	7.7.3～7.10.11	萩原恭一
万才楽遺跡	東金市滝沢字高見塚620-1ほか	213-012	3,850㎡	452/ 3,850	80/ 3,850	0㎡	0㎡	6.7.8～6.8.18	半澤幹雄
万谷遺跡	東金市滝沢字清水田559-1ほか	213-013	600㎡	60/ 600	12/ 600	0㎡	0㎡	6.6.6～6.6.15	半澤幹雄
新堀遺跡	東金市滝沢字新堀546-1	213-014	10,000㎡	1,000/10,000	200/10,000	2,390㎡	0㎡	6.4.1～6.7.8	酒井宏、荒木清一、半澤幹雄
市谷遺跡	東金市滝沢字市谷481ほか	213-010	9,300㎡	1,040/ 9,300	388/ 9,300	塚2	454㎡	5.10.1～6.2.18	高田博、渡邊高弘
			5,400㎡	610/ 5,400	222/ 5,400	0㎡	0㎡	6.4.6～6.5.25	高田博、井上哲朗
			490㎡	50/ 490	20/ 490	塚1	0㎡	6.11.8～6.12.21	平松長寿
油谷（1）遺跡	東金市滝沢字油谷498-1ほか	213-015	10,800㎡	1,080/10,800	432/10,800	3,050㎡	225㎡	6.6.6～6.11.28	高田博、酒井宏、沖松信隆
油谷（2）遺跡		213-015	2,700㎡	340/ 2,700	54/ 2,700	0㎡	0㎡	6.9.12～6.11.28	高田博、酒井宏、沖松信隆
岡田遺跡	東金市酒蔵字岡田126ほか	213-016	2,200㎡	380/ 2,200	0/ 0	0㎡	0㎡	6.6.1～6.6.16	高田博
岡田山遺跡	東金市酒蔵字岡田山147-1ほか	213-017	6,200㎡	620/ 6,200	280/ 6,200	1,020㎡	0㎡	6.11.21～7.3.30	高田博、平松長寿、矢本節朗
鹿穴遺跡	山武郡山武町森字鹿穴1811ほか	405-008	8,000㎡	800/ 8,000	160/ 8,000	1,500㎡	0㎡	6.7.13～6.10.31	平松長寿
小田山遺跡	山武郡山武町植草字小田山1795ほか	405-009	5,800㎡	640/ 5,800	58/ 5,800	0㎡	0㎡	6.6.6～6.8.1	豊田秀治
原山之神遺跡	山武郡山武町森字原野山801-1	405-010	1,200㎡	120/ 1,200	186/ 1,200	948㎡	0㎡	6.4.6～6.6.3	豊田秀治
道塚遺跡	山武郡山武町森字道塚244-1ほか	405-011	4,000㎡	520/ 4,000	160/ 4,000	0㎡	0㎡	6.4.6～6.5.20	豊田秀治
東嵐山遺跡	山武郡山武町椎崎字東嵐山1585ほか	405-003	5,800㎡	828/ 5,800	112/ 5,800	0㎡	0㎡	5.5.6～5.6.30	森本和男
里守遺跡	山武郡山武町戸田字里守835-3ほか	405-007	2,930㎡	386/ 2,930	108/ 2,930	0㎡	0㎡	5.11.1～5.12.24	森本和男
向畑遺跡	山武郡山武町戸田字向畑425-1ほか	405-006	1,310㎡	131/ 1,310	52/ 1,310	0㎡	0㎡	5.10.18～5.11.15	宮城（蜂屋）孝之
榎谷遺跡	山武郡松尾町古和字外台565-1ほか	407-005	2,050㎡	205/ 2,050	113/ 2,050	0㎡	0㎡	6.8.2～6.9.22	豊田秀治
大谷遺跡	山武郡松尾町谷津字大谷279ほか	407-010	5,900㎡	605/ 5,900	48/ 2,390	308㎡	0㎡	7.1.23～7.3.30	萩原恭一

第2表　執　筆　者　一　覧

Ⅰ　はじめに	加藤正信
Ⅱ　大谷台遺跡	概要・住居跡・シシ穴－加藤正信、遺構－廣瀬和之、縄文土器－安井健一、縄文時代以降石器－矢本節朗
Ⅲ　丹尾台遺跡	概要・馬土手－加藤正信、遺構－廣瀬和之
Ⅳ　万才楽遺跡	概要・遺構－廣瀬和之、縄文土器－安井健一
Ⅴ　万谷遺跡	概要・遺構－廣瀬和之
Ⅵ　新堀遺跡	概要・遺構－廣瀬和之、縄文土器－安井健一、縄文時代以降石器－矢本節朗、住居跡・グリッド遺物－加藤正信
Ⅶ　市谷遺跡	概要・遺構－廣瀬和之、旧石器時代・縄文時代以降石器－矢本節朗、縄文土器－安井健一、塚－加藤正信
Ⅷ　油谷遺跡	概要・遺構－廣瀬和之、旧石器時代・縄文時代以降石器－矢本節朗、縄文土器－安井健一、グリッド遺物－加藤正信
Ⅸ　岡田遺跡	概要－廣瀬和之、遺構・遺物－加藤正信
Ⅹ　岡田山遺跡	概要・遺構－廣瀬和之、旧石器時代・縄文時代以降石器－矢本節朗、縄文土器－安井健一、住居跡・グリッド遺物－加藤正信
ⅩⅠ鹿穴遺跡	概要・遺構－廣瀬和之、縄文土器－安井健一、縄文時代以降石器－矢本節朗、住居跡・グリッド遺物－加藤正信
ⅩⅡ小田山遺跡	概要－廣瀬和之、縄文土器－安井健一、遺構・遺物－加藤正信
ⅩⅢ原山之神遺跡	概要・遺構－廣瀬和之、旧石器時代・縄文時代以降石器－矢本節朗、縄文土器－安井健一、住居跡－加藤正信
ⅩⅣ道塚遺跡	概要－廣瀬和之、旧石器時代・縄文時代以降石器－矢本節朗、縄文土器－安井健一
ⅩⅤ東嵐山遺跡	概要－廣瀬和之、旧石器時代－矢本節朗、縄文土器－安井健一、グリッド遺物－加藤正信
ⅩⅥ里守遺跡	概要－廣瀬和之、縄文時代以降石器－矢本節朗、縄文土器－安井健一、グリッド遺物－加藤正信
ⅩⅦ向畑遺跡	概要－廣瀬和之、縄文時代以降石器－矢本節朗、縄文土器－安井健一、遺構・グリッド遺物－加藤正信
ⅩⅧ榎谷遺跡	概要－廣瀬和之、旧石器時代・縄文時代以降石器－矢本節朗、グリッド遺物－加藤正信
ⅩⅨ大谷遺跡	概要・遺構－廣瀬和之、縄文土器－安井健一、縄文時代以降石器－矢本節朗、住居跡－加藤正信
ⅩⅩまとめ	旧石器時代－矢本節朗、縄文時代－安井健一、奈良・平安時代・結語－加藤正信

1 **大谷台遺跡** 2 **丹尾台遺跡** 3 **万才楽遺跡** 4 **万台遺跡** 5 **新堀遺跡** 6 **市谷遺跡** 7 **油谷(1)遺跡** 8 **油谷(2)遺跡**
9 **岡田遺跡** 10 **岡田山遺跡** 11 **鹿穴遺跡** 12 **小田山遺跡** 13 **原山之神遺跡** 14 **道塚遺跡** 15 **東嵐山遺跡** 16 **里守遺跡**
17 **向畑遺跡** 18 **榎谷遺跡** 19 **大谷遺跡** 20 尾亭遺跡 21 羽戸遺跡 22 前畑遺跡 23 ビンダライ遺跡 24 滝台遺跡
25 板橋遺跡 26 酒蔵城跡 27 ヲフサ野遺跡 28 栗焼棒遺跡 29 駄ノ塚遺跡 30 上人塚遺跡 31 小川崎台遺跡・古墳群
32 久保谷遺跡 33 大長作遺跡 34 一本松遺跡 35 大山遺跡 36 赤羽根遺跡 37 中谷遺跡 38 千神塚群 39 四ツ塚遺跡
40 大網山田台№3遺跡(北前野遺跡) 41 山田水呑遺跡 42 小野城跡 43 作畑遺跡 44 油井古塚原遺跡・古墳群 45 滝東台遺跡
46 東金城跡 47 妙経遺跡 48 久我台遺跡 49 平蔵台遺跡 50 道庭遺跡・古墳群 51 滝台遺跡(滝沢遺跡) 52 家之子古墳群
53 森台古墳群 54 板附古墳群 55 真行寺廃寺跡 56 真行寺古墳群 57 嶋戸(南・北・東)遺跡 58 胡摩手台古墳群 59 山室城跡
60 中台古墳群(芝山古墳群、殿塚古墳・姫塚古墳) 61 中台遺跡・貝塚 62 中台A遺跡 63 角田遺跡(鴻巣貝塚・角田貝塚)
64 姥山貝塚(山武姥山貝塚) 65蕪木古墳群 66 松尾台古墳群(大塚古墳群) 67 大堤古墳群

(国土地理院発行1：50,000地形図　成田・東金を編集)

第1図　遺跡位置図

東金市８遺跡、東金市と八街市にまたがる１遺跡の計18遺跡となり、今回の報告分には横芝町、成東町の遺跡は含まれていない。

千葉県北東部の太平洋側には海岸長約60kmの九十九里浜が弧状に長く連なり、北端は屏風ヶ浦から銚子犬吠埼、南端は太東岬から外房の岩礁地帯に連なっている。九十九里浜は波打ち際から台地の縁辺部までの海岸平野部の奥行きが７km～10kmほどあり広範な海岸平野が構成されている。海岸平野内には台地上から流れ出た中小の河川が蛇行しながら太平洋に流入し、その途中で氾濫原、自然堤防を形成し、一方汀線とほぼ平行に幾本もの砂丘列の微高地が存在している。つまり全体的には平坦な海岸平野ながら、その中には微高地が多く存在し、微地形が多く観察される。

一方海岸平野から隔たり台地方向に目を転ずると、下総台地の南東端部にあたる千葉県山武郡地方は、下総台地に端を発する中小河川が海岸平野を経て太平洋に流入し、その河川によって台地上は樹枝状の浸食谷によって複雑に開析されている。下総台地の旧印旛郡・香取郡・千葉郡に相当する部分では河川が北及び西方向から浸食し、太平洋側とは反対側へ河川が流れ出している。その傾向は南へ向かうにつれその程度を増し、今回報告する南端の大谷台遺跡から南方に約５km離れた、千葉市土気地区では印旛沼側（鹿島川）と東京湾側（村田川）と太平洋側（南白亀川）への３方向への分水嶺となっている。

九十九里の海岸平野は古くから隆起を続けていることから、台地寄りから海岸沿いに向かって徐々に時代の新しい生活の痕跡が認められ、それらの多くは砂丘列、自然堤防上の微高地に立地するといわれてきている。しかし、調査の技術的な問題が大きな障害となって台地上ほど簡単に遺跡の認識が出来ないために、遺跡の発見例・調査例も台地上よりかなり少なく、海岸平野における生活痕の検証・復原への資料となるような例はあまり多くない。古くから水田の圃場整備事業等に伴って独木舟の出土例が比較的多く知られてはいるが、それも独木舟単独の出土例が多く、遺跡としての総合的な調査対象となった例は少ない[2]。自然地形の観察・表面採集等の方法による遺跡の表面調査も有効であるが、最近の重機類を用いる大規模な圃場整備事業では事業が広範に施行され、地形の改変の規模が大きく、遺跡の復原に際し大きな支障となることが多く、また重機の強力な作業能力の故に独木舟の発見すら難しい状況である。海岸平野に限らず台地を浸食した開析谷内についても低湿地であるがため、同様の理由によって遺跡としての認定等が難しく、最近一部の低湿地遺跡の調査である程度成果が得られてきてはいるが、それらだけでは台地上の遺跡と比較するには資料的には乏しい。一方台地上に目を転ずると、山林・畑地に対して古くから探査の手が加えられ、遺跡・遺物の検出状況は良好であった。ただ近年まで開発行為の手が及ぶのが遅れ、開発に伴う規模の大きな発掘調査の例が少なく、小規模な学術調査等によって文化の一部が知られるのみであった。近年になって大規模開発の手が山武地方にも及び、記録保存による遺跡の消滅という大きな代償と引き替えに大規模発掘調査の成果が知られるようになってきた。今回のように長距離にわたる大規模な開発行為は希有な例であり、今まであまり発掘調査の手が及ばなかった山武地区の台地上を、横断する大規模な確認調査のトレンチを掘り込んだような状況で、これによって山武地区の台地上の文化・遺跡の様相を少しはうかがうことが出来たことは、貴重な例と言えよう。

今回報告の遺跡の分布が広範にわたるので、南から著名な遺跡等を見ていくと、南端にあたる大谷台遺跡の西約2.5kmに、昭和50年代始めに奈良・平安時代の大規模集落の調査が行われ、山邊郡山口郷の一部で開拓村とみられる東金市山田水呑遺跡[3]が所在し、万才楽遺跡・万谷遺跡の南約１kmには『山邊郡印』が出土し周辺に山辺郡衙の所在が想定される八街市滝台遺跡[4]が所在する。山武町の東嵐山遺跡の南側約300m

～400mには、町界を越えて成東町となるが、古墳時代後期の全長90mの大型前方後円墳、西ノ台古墳を含む板附古墳群、同終末期の金銅製歩揺付飾金具を出土した一辺60mの大型方墳の駄ノ塚古墳[5]等の作田川流域の古墳群があげられる。成東町にはさらに、里守遺跡・向畑遺跡の南東約2kmに武射郡の郡寺と見られ、紀寺系の瓦と瓦積み基壇が検出された真行寺廃寺[6]が所在し、古墳時代から奈良・平安時代の律令時代にかけての武射郡の中枢地区と見られる地区では武射郡衙の存在も想定されている（嶋戸南・北・東遺跡）。次にやや隔たるが北端の大谷遺跡の北西約3kmに国指定史跡の横芝町中台古墳群（通称　芝山古墳群）の殿塚古墳・姫塚古墳[7]が所在する。殿塚古墳は全長約80mで、横穴式石室の主体部が設けられ、姫塚古墳は全長約50mで横穴式石室の主体部が設けられている。両者の古墳共に、葬列を表現したと見られる形象埴輪の列が検出されたことが特筆される。埴輪は人物埴輪として島田髷の女性、帽子をかぶり髭を生やした男性、鍬を担ぎ鎌を腰紐に差した農夫、琴を膝に乗せた人物、ひざまずく男性、甲冑で武装した男性などがあり、形象埴輪では靭、鞆、翳、家形埴輪、馬、水鳥、犬、猪などが見られる。

次に遺跡周辺で、時代別に遺跡の分布を見てみると、旧石器時代はローム層中の調査が始められた時期が新しく遺跡数はそれほど多くないが、成果としては良好な資料が認められる。千葉東金道路（二期）用地内の遺跡では、今回報告の大谷遺跡のすぐ北側の松尾町四ツ塚遺跡[8]で第2黒色帯下部のブロックが環状に展開する「環状ブロック」を2か所形成していたことである。一つの環状ブロックから1,300点以上の石器が出土し、2か所の環状ブロックが検出された例は非常にまれである。他に榎谷遺跡と大谷遺跡の間に位置する松尾町赤羽根遺跡[9]でも、低位河岸段丘上の緩斜面の第2黒色帯上層から遺物が8,000点以上の数で広範に検出されている。石器は楔形石器の素材となる小惰円礫を主体とするもので、今後の整理作業の進展が待たれる。また、隣接する台地上の大山遺跡でも遺物が検出されており、赤羽根遺跡との対比に期待ができるかもしれない。今回報告の遺跡の中では市谷遺跡、油谷遺跡で比較的良好なブロックが検出されている。

縄文時代では、今回報告する大谷台遺跡から出土した草創期の微隆起線文土器は特筆される。今までの出土例に比べて大型の破片は形状を窺うことができ、県内の出土例から見て極めて貴重な資料といえよう。早期撚糸文期の遺跡は今回報告の油谷遺跡、岡田山遺跡等にややまとまった資料の出土が見られる。又、太平洋岸とは異なり貝塚の数は少なくなるが、横芝町に集中して所在する。姥山貝塚（山武姥山貝塚）[10]は中期から晩期にかけての貝塚で、加曽利B、堀ノ内、安行、千網式などがみられる。中台貝塚（鴻巣・角田貝塚）[11]は中期から後期の貝塚で、加曽利E、称名寺、堀ノ内式などがみられる。

弥生時代では岡田遺跡、岡田山遺跡の南東約3.5kmに、十文字川谷下流で台地と海岸平野との境の最後の台地上に東金市道庭遺跡[12]が所在し、中期から後期にわたって環濠集落が営まれ、環濠内に竪穴住居跡群、環濠の外側に方形周溝墓群という、標準的な弥生時代の集落構成の窺える大規模な遺跡である。目立った遺物としては銅鏃、鳥形土製品、東海系の水神平式の土器片などがあげられる。また、道庭遺跡の南西1.5kmには東金市平蔵台遺跡[13]があり、中期の集落が調査されている。

古墳時代は、先述の横芝町中台古墳群、成東町板附古墳群等の他に、東金（二期）路線内では人物・馬形埴輪などの形象埴輪と、墳丘をほぼ全周する円筒埴輪の検出された小川崎台古墳群（前方後円墳1基、円墳3基）[14]、後期円墳群の調査された一本松遺跡[15]があげられる。それ以外で北から主要な古墳群を見てくると、全長117mの大形前方後円墳大堤権現塚を中心とする松尾町大堤古墳群[16]、全長約70mの朝日の岡古墳を中心とする蕪木古墳群、65mの円墳松尾姫塚を中心とする大塚古墳群、山武町では全長85mの前方

後円墳を中心とする胡摩手台古墳群、全長79mの前方後円墳を中心とする根崎古墳群、森台古墳群、成東町では直径45mの円墳経僧塚古墳を中心とする真行寺古墳群、東金市では39mの前方後円墳を中心とする家之子古墳群、道庭古墳群等があげられるが、規模から見ると松尾町周辺地域に大型古墳を含む古墳群が多く所在していることがうかがわれる。一方集落遺跡では、東金(二期)路線内では松尾町大山遺跡[15]、赤羽根遺跡、山武町では栗焼棒遺跡[18]、久保谷遺跡[19]等があげられる。東金市道庭遺跡[20]、久我台遺跡[21]、妙経遺跡[22]、作畑遺跡[23]等は大型の集落遺跡である。集落の立地が前期・中期の低地に面した道庭遺跡から後期になるとやや内陸部に入り込んだ久我台遺跡、妙経遺跡、作畑遺跡と集落が移っていくように観察され、集落の内陸部への展開という表現ができるかもしれない。

奈良・平安時代の遺跡は、東金（二期）路線上の遺跡では、東金市前畑遺跡、山武町栗焼棒遺跡、久保谷遺跡、松尾町大山遺跡等が竪穴住居跡と掘立柱建物跡によって構成される集落を形成している。路線部分以外では、先述の東金市山田水呑遺跡、他に油井古塚原遺跡[24]、滝東台遺跡[25]、作畑遺跡、羽戸遺跡[26]、妙経遺跡、久我台遺跡、道庭遺跡等が竪穴住居跡、掘立柱建物跡からなる集落を構成し、豊富な遺物が出土している。特徴的な出土遺物としては、(金)銅製の帯金具、墨書土器、鉄製農具などがあげられる。先述の八街市滝台遺跡からは、『山邊郡印』が出土し郡衙関連遺跡の想定を抱かせる。仏教の興隆に伴い寺院遺跡も見られ、先述の成東町真行寺廃寺跡が特筆され、それ以外では集落内寺院として知られる大網山田台No.3遺跡[27]の主堂と礼堂の建物は注目されよう。東金(二期)路線内では、今回報告の岡田山遺跡の竪穴住居跡内から「前寺」の墨書土器、新堀遺跡・鹿穴遺跡から鉄鉢形鉢の出土が見られ、寺院関連遺跡の一部とみることができよう。

中世以降の遺跡については、路線内遺跡として東金市前畑遺跡[28]の中・近世の墓地、集落、館跡、松尾町中谷遺跡[29]、山武町久保谷遺跡[30]の中・近世の墓地、集落、東金市市谷遺跡、山武町栗焼棒遺跡、松尾町千神塚群(四ツ塚遺跡)[31]の塚群の調査などがあげられる。路線に近い主要な中世城館をあげると松尾町山室城跡[32]、東金市東金城跡[33]、小野城跡[34]などがあげられる。東金(二期)路線内では、今回報告の東金市油谷遺跡と岡田遺跡の間に位置する、東金市酒蔵城跡が一部道路用地内に含まれるということで、道路工事の際に立ち会い調査を実施したが、用地内からは城跡に関するような遺構・遺物は検出されなかった[35]。

注1　財団法人千葉県文化財センター　1998『東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書1　－山武町栗焼棒遺跡－』

2　例として柿沼修平ほか　1986『八日市場市矢摺泥炭遺跡発掘調査報告書－独木舟の調査』　借当川遺跡調査会等がある。

3　松村恵司ほか　1977『山田水呑遺跡』　山田遺跡調査会

4　丸子　亘　1969「新発見の『山邊郡印』をめぐって」　『古代文化』21－1

5　白石太一郎ほか　1996『国立歴史民族博物館研究報告　第65集　東国における古墳の終末≪附編≫』千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告　国立歴史民族博物館

6　財団法人千葉県文化財センター　1984『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』　千葉県教育委員会

財団法人千葉県文化財センター　1985『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』

財団法人千葉県文化財センター　1986『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』

7　鈴木喜久二ほか　1956「千葉県芝山古墳群殿塚第5号墳発掘略報」　『古代第19・20合併号』　早稲田大学考古学会

8　財団法人千葉県文化財センター　1996　『千葉県文化財センター年報　No.17』

9　財団法人千葉県文化財センター平成７・８・９年調査

10　清水潤三　1964　「千葉県山武郡姥山台貝塚」　『日本考古学年報12』　日本考古学協会

財団法人千葉県文化財センター　1990　『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』　千葉県教育委員会

渡辺修一　1992　「横芝町山武姥山貝塚出土の縄文晩期浮線文土器群」　『研究連絡誌』第35号　財団法人千葉県文化財センター

11　横芝町史編纂委員会編　1975　『横芝町史』　横芝町

12　有沢　要ほか　1983　『道庭遺跡　第１分冊』　道庭遺跡調査会

財団法人千葉県文化財センター　1994　『東金市道庭遺跡』－農業大学校バイテク棟建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』

13　丸子　亘ほか　1970　『東金市平蔵台遺跡　発掘調査概報』　千葉県教育委員会

14　財団法人千葉県文化財センター平成５・６・７年調査

15　財団法人千葉県文化財センター平成７・８年調査

16　軽部慈恩　1957　「千葉県山武郡大堤権現塚前方後円墳の発掘調査」　『古代第25・26号合併号』　早稲田大学考古学会

千葉県教育委員会　1990　『千葉県重要古墳群測量調査報告書　－山武郡地区古墳群（２）－』

財団法人山武郡市文化財センター　1993　『千葉県松尾町　大堤権現塚古墳　－確認調査報告書－』　松尾町教育委員会・(財) 山武郡市文化財センター

17　財団法人千葉県文化財センター平成６・９年調査

18　注１に同じ

19　財団法人千葉県文化財センター平成７年調査

20　注10に同じ

21　財団法人千葉県文化財センター　1988　『東金市久我台遺跡』

22　財団法人千葉県文化財センター　1994　『東金市　妙経遺跡・井戸谷９号墳　房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書III』

23　桐谷　優ほか　1986　『作畑遺跡発掘調査報告書』　作畑遺跡調査会

24　平岡和夫ほか　1983　『油井古塚原古墳群』第１号墳発掘調査報告　山武考古学研究所

財団法人山武郡市文化財センター　1993　『東金市内遺跡群発掘調査報告書　平成４年度　－油井古塚原遺跡（丑子台地点）・込前馬土手－』　東金市教育委員会

財団法人山武郡市文化財センター　1994　『東金市内遺跡群発掘調査報告書　平成５年度　油井古塚原遺跡(丑子台地点)』　東金市教育委員会

財団法人山武郡市文化財センター　1994　『油井古塚原遺跡丑子台1037地点』

財団法人山武郡市文化財センター　1995　『油井古塚原遺跡群』

財団法人山武郡市文化財センター　1995　『東金市内遺跡群発掘調査報告書　平成６年度　油井古塚原遺跡(丑子台1037－40地点)』　東金市教育委員会

25　財団法人山武郡南部地区文化財センター　1986　『滝東台遺跡・油井古塚原遺跡』

財団法人山武郡市文化財センター　1995　『油井古塚原遺跡群』

26　財団法人山武郡市文化財センター調査
　財団法人千葉県文化財センター平成７・８年調査
27　財団法人山武郡市文化財センター　1994『千葉県東金市・大網白里町　大網山田台遺跡群Ⅰ　－概要篇－』
　財団法人山武郡市文化財センター　『山武郡市文化財センター年報』他
28　財団法人千葉県文化財センター平成７・８・９年調査
29　井上哲朗　1996　「松尾町中谷遺跡の中近世墓地と集落－中近世における谷津景観の復元－」　『研究連絡誌　第45号　特集「東上総地方の中近世遺跡」』　財団法人千葉県文化財センター
30　鳴田浩司・渡邊高弘　1996　「山武町久保谷遺跡の中近世の墓域について」　『研究連絡誌　第45号　特集「東上総地方の中近世遺跡」』　財団法人千葉県文化財センター
31　鳴田浩司　1996　「東上総の塚について」　『研究連絡誌　第45号　特集「東上総地方の中近世遺跡」』　財団法人千葉県文化財センター
32　財団法人千葉県文化財センター　1992　『松尾町山室城跡』
33　財団法人千葉県文化財センター　『千葉県中近世城館跡研究調査報告書　九　－東金城・城山城跡発掘調査報告－』　千葉県教育委員会
34　財団法人山武郡南部地区文化財センター　1986　『小野城跡』
35　平成６年１２月当センターにて立ち会い調査実施

II　大谷台遺跡

1　遺跡の概要（第２・３・４図、図版１）

本遺跡は、東金市滝字大谷台144他に位置する。調査対象面積は2,800㎡で、上層については確認調査を対象地のほぼ全面にわたって284㎡の面積で実施し、そのうち縄文時代早期の遺物の包含層が確認された範囲520㎡と、一部のシシ穴の本調査を実施した。本遺跡では、痩せ尾根上に地表からの観察で、シシ穴が18基観察されたが、それらの内の３基を調査したところ遺物は検出されず、形態的にもほぼ同一であるので、すべてを調査することはせず残りは位置を記録するに留めた。上層の本調査は、重機による表土層の排土後に、縄文土器の包含層であるテフラ層と、ソフトローム漸移層を精査した。精査中に一部で縄文時代草創期の土器片が少量検出されたので、さらに丹念に精査したがそれ以上の検出はなく、遺構の検出もなかった。包含層からは縄文時代早期を主体として前期・後期の土器が検出され、遺構として炉穴・土坑が調査された。一方、東側調査区域外に延びて奈良時代の竪穴住居跡が検出され、狭いながらも遺構・遺物の分布が痩せ尾根の狭い平坦部に続いていることがうかがわれた。次いで、下層の旧石器時代包含層の確認調査を行ったが、遺物は検出されず下層については本調査は不要と判断された。調査期間は平成７年９月４日から平成７年10月16日までであった。

遺跡は、九十九里平野を経て、太平洋に流れ込む真亀川の支流、北幸谷川の流域に位置し、周辺には下総台地が小河川に浸食され樹枝状に入り込んだ谷が多く見られる。千葉県山武地区の下総台地は南東端の九十九里平野に面する台地上で、油井台を形成する南側の谷である田中谷（北幸谷川谷）が入り込み、さらに丘山支谷が枝分かれし入り込んでいる台地上に位置している[1)]。本遺跡は油井台の付け根部分に近く、また太平洋側と印旛沼側との分水嶺に近い。ここから次節で取り上げる丹尾台遺跡の位置する台地の一部が、非常に細く痩せ尾根状に南向きに突出しているが、その突出部分の痩せ尾根が本遺跡である。標高は約60m前後で急斜面下の水田面との比高は約30mを測る。

2　検出した遺構・遺物

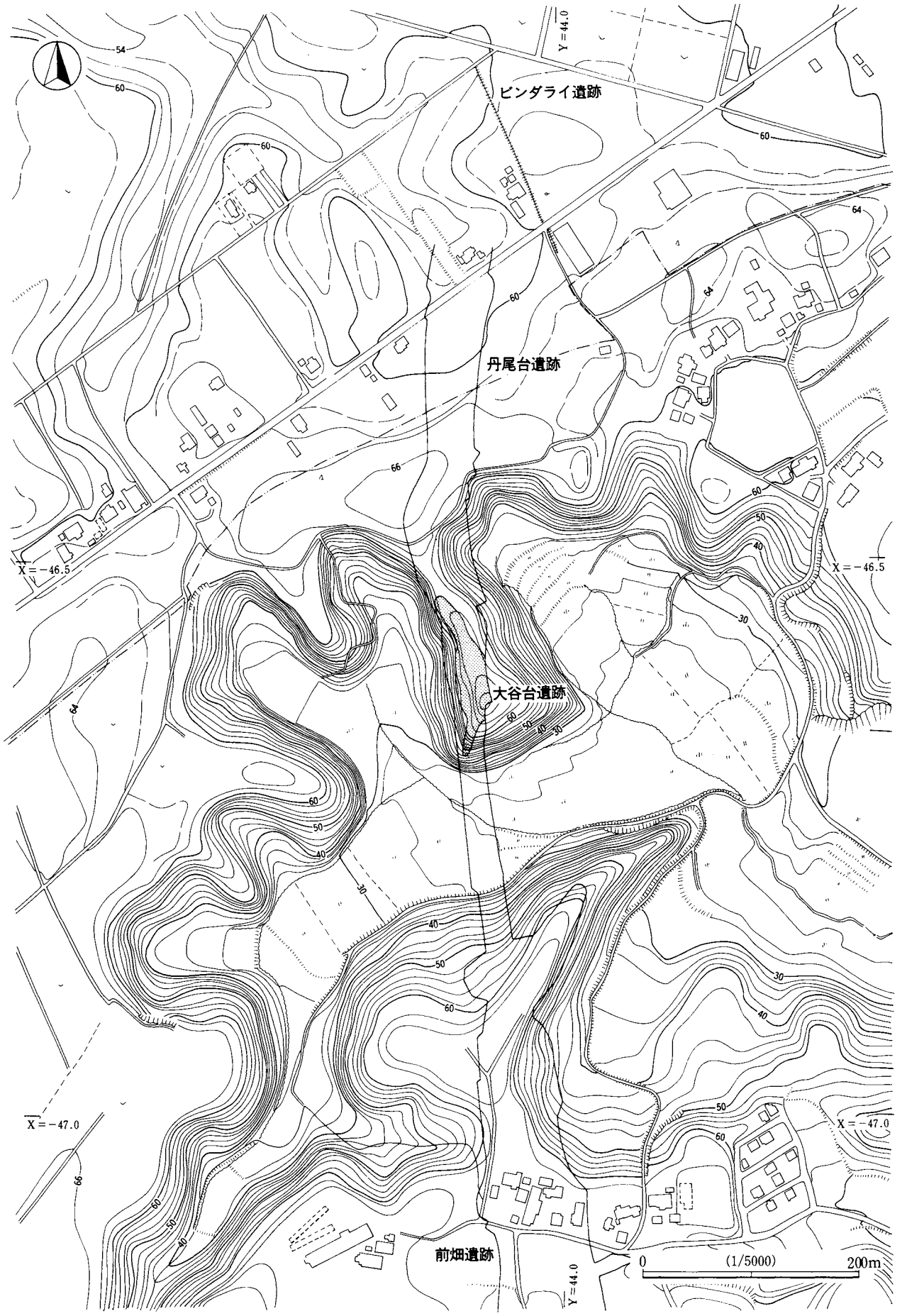
遺構

ＳＫ－１炉穴（第６図）

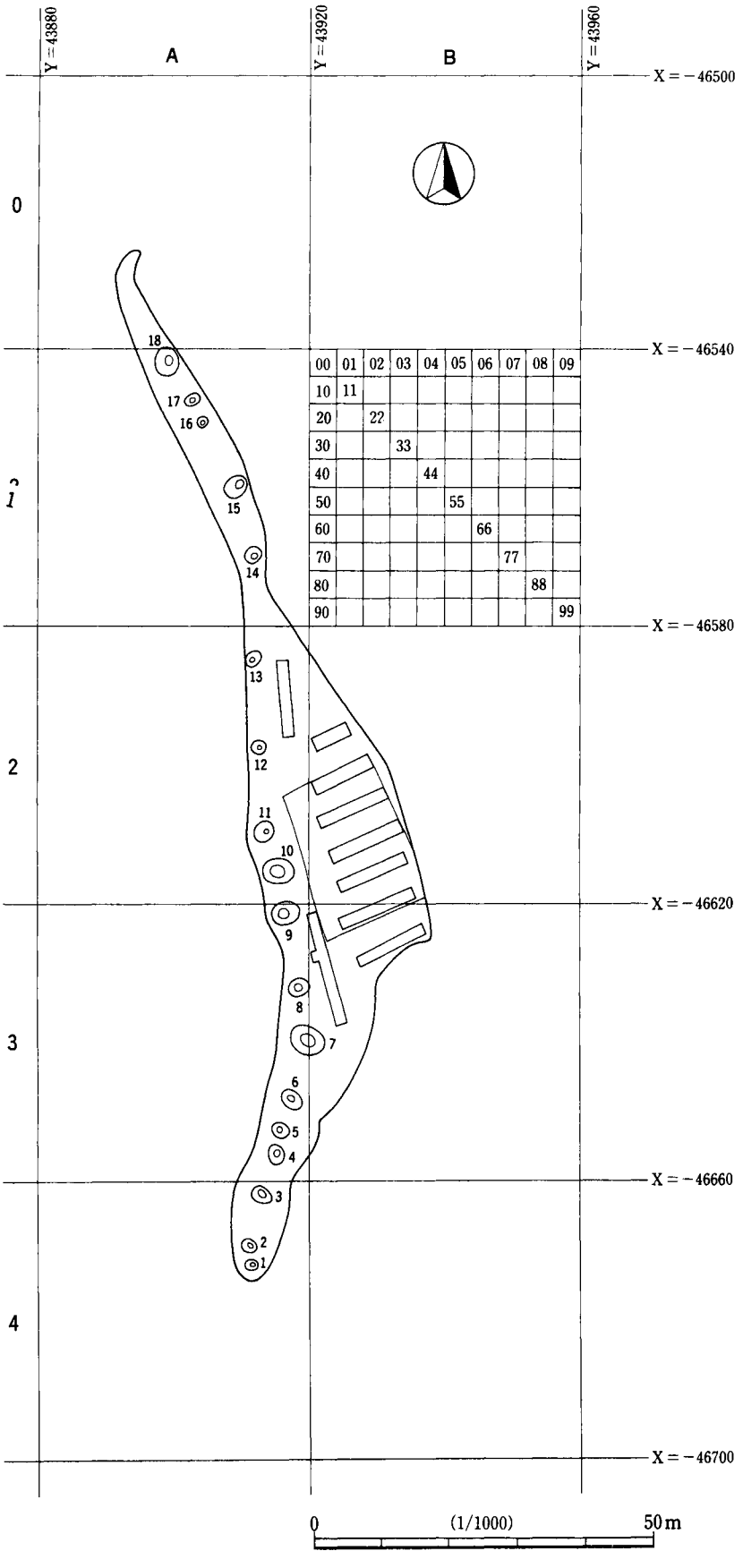
本遺構は、遺構密度の高い２Ｂ－62グリッドに位置する。規模は1.3m×0.85mの楕円形で、長軸方向は北からやや東に傾いている。掘り込みの深さは約0.4mで、北西側を深く掘り込み、なだらかに南東に傾斜している。焼土は一番深く掘り込まれたところに0.6m×0.4mの範囲で広がるが、炉床はよく焼けているわけではない。

ＳＫ－３炉穴（第６図）

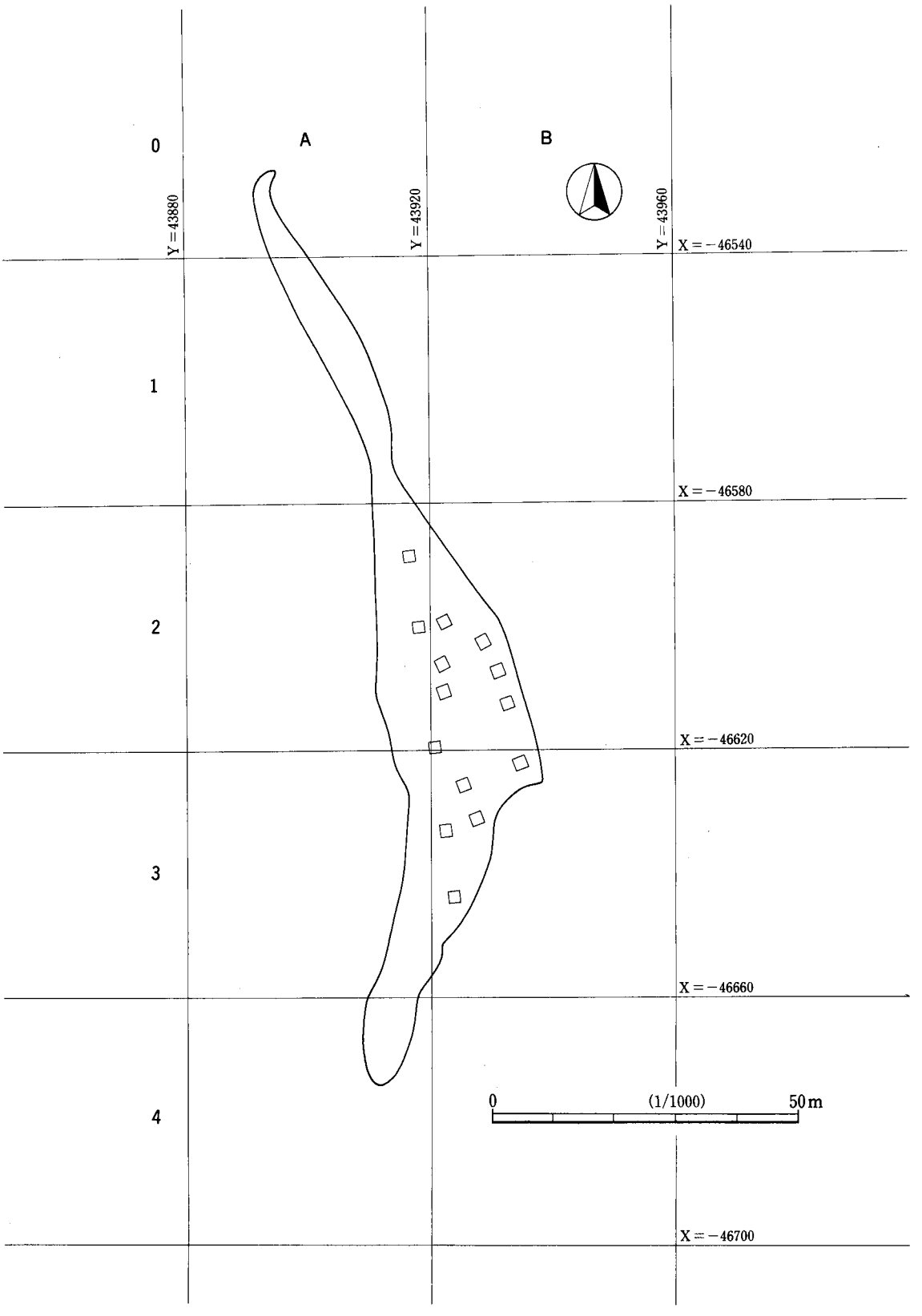
本遺構は、２Ｂ－72グリッド周辺に位置する。規模は1.95m×1.25mの長楕円形であるが南側がややふくらんでいる。長軸はおおよそ北東方向を向く。掘り込みの深さは約0.2mと浅く、底面には直径0.3mの円形と0.3m×0.4mのＬ字型の２つの炉床がある。炉穴の形と２つの炉床が見られることから、本遺構は２時期にわたって使われていた可能性が考えられる。



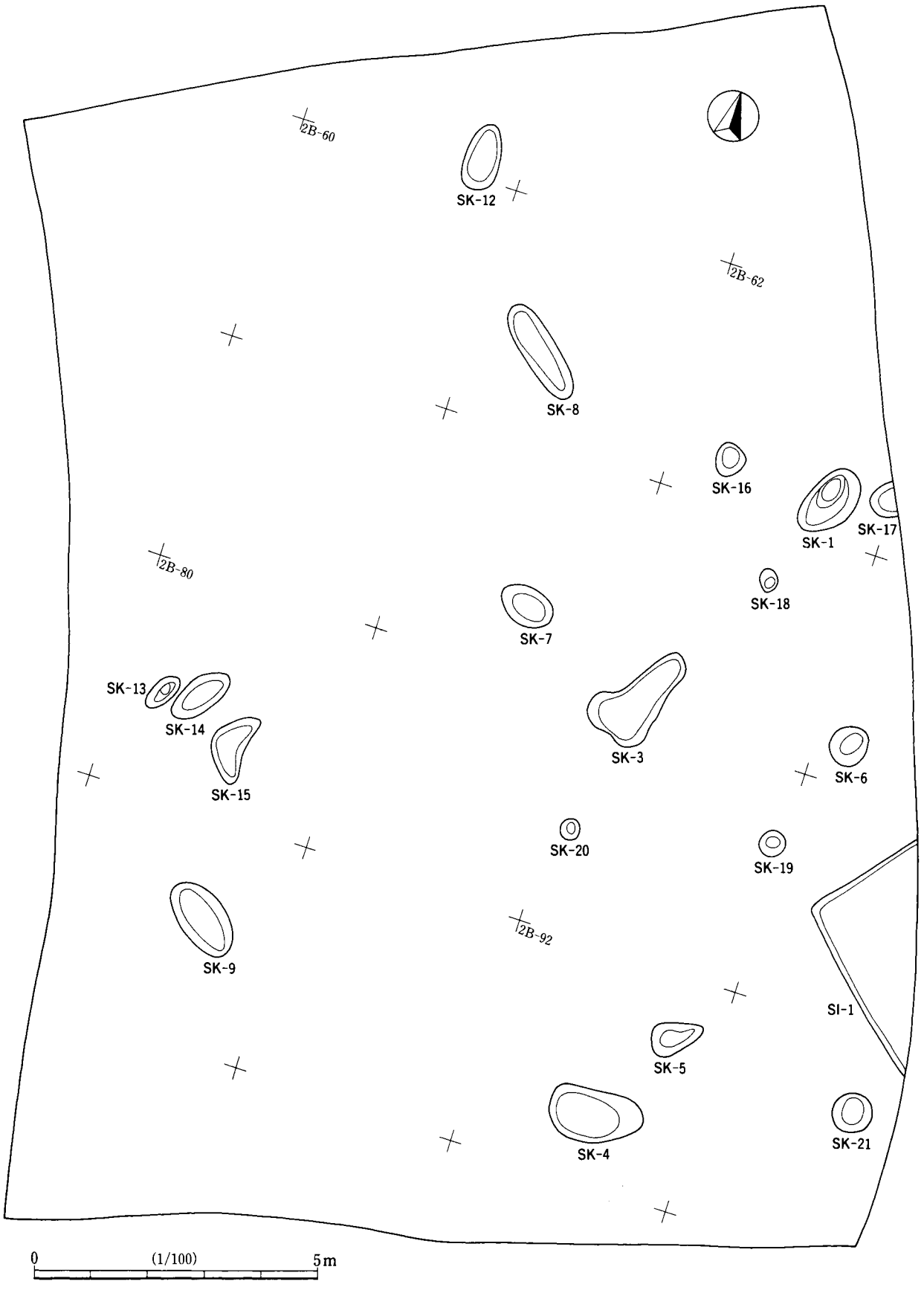
第２図　大谷台遺跡周辺地形図



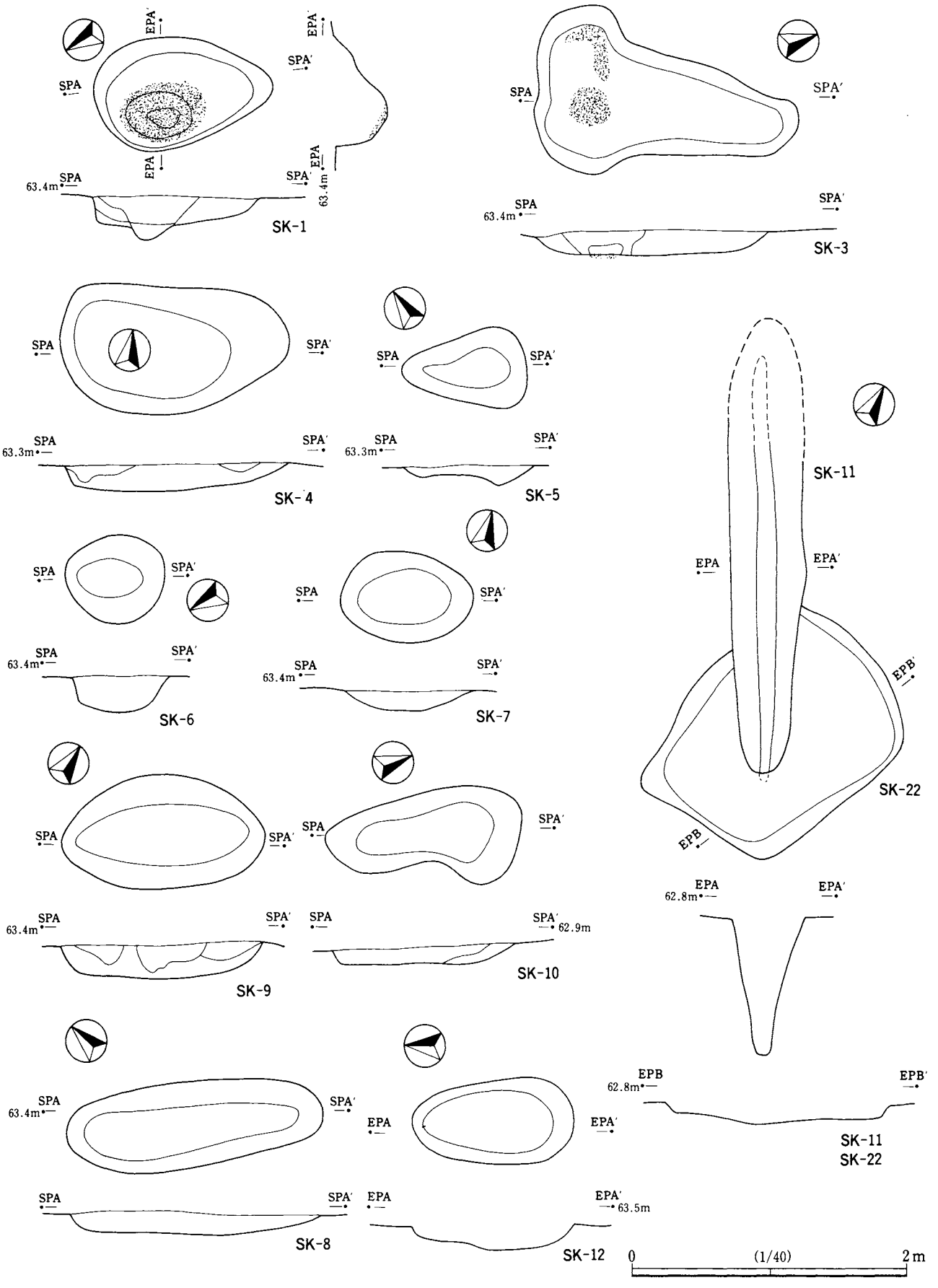
第３図　上層調査状況・遺構等配置図


0
1
2
3
4
A
B
Y＝43880
Y＝43920
Y＝43960
X＝－46540
X＝－46580
X＝－46620
X＝－46660
X＝－46700
0
(1/1000)
50m

第4図　下層調査状況図


12B-60
SK-12
12B-62
SK-8
SK-16
SK-1
SK-17
12B-80
SK-18
SK-7
SK-13
SK-14
SK-15
SK-3
SK-6
SK-20
SK-19
SK-9
12B-92
SI-1
SK-5
SK-4
SK-21
0
(1/100)
5m

第5図　遺構配置図


SK-1
SK-3
SK-4
SK-5
SK-6
SK-7
SK-9
SK-10
SK-11
SK-22
SK-8
SK-12
SK-11
SK-22
SPA
SPA'
EPA
EPA'
EPB
EPB'
63.4m
63.3m
62.8m
62.9m
63.5m
0
(1/40)
2m

第6図　土坑等（1）

ＳＫ－４炉穴（第６図、図版４）

本遺構は、２Ｂ－92グリッドに位置する。規模は0.85m×0.45mの楕円形で、長軸方向は東を向いている。掘り込みの深さは約0.2mと浅く、掘り込みの東側より直径約0.3mの範囲で円形に広がる焼土層を検出したので炉穴とみられる。

ＳＫ－５土坑（第６図、図版４）

本遺構は、２Ｂ－92グリッドに位置する。規模は0.95m×0.6mの楕円形であるが南西部がややふくらみ、長軸方向はおよそ北東である。掘り込みの深さは平均すると約0.1mと浅いが、南西部では深くなり約0.2mを測る。

ＳＫ－６土坑（第６図、図版４）

本遺構は、２Ｂ－73グリッドに位置する。規模は0.8m×0.6mの楕円形で、長軸方向は北からやや東に傾いている。掘り込みの深さは約0.25mで、底面は丸く掘り込んだ形となっている。覆土は暗褐色土を中心とする土であった。

ＳＫ－７土坑（第６図、図版４）

本遺構は、２Ｂ－71グリッドに位置する。規模は0.5m×0.35mの楕円形で、長軸方向は東からやや南に傾いている。掘り込みの深さは約0.15mで、底面に向けてなだらかに掘り込んである。底面に薄く焼土の散布が検出されたが、底面の形状等から炉穴とはいいきれない。

ＳＫ－８土坑（第６図、図版５）

本遺構は、２Ｂ－61グリッドに位置する。規模は1.8m×0.7mの長楕円形で、長軸方向はおよそ北西を向く。掘り込みの深さは浅く約0.15mで、底面は平坦である。覆土は新期テフラを主体とする暗褐色土であった。

ＳＫ－９土坑（第６図）

本遺構は、２Ｂ－90グリッドに位置する。規模は1.5m×0.8mの楕円形で、長軸方向はおよそ北西を向く。掘り込みの深さは約0.25mで、底面は平坦である。覆土は新期テフラを主体とする暗褐色土であるが、底面に近づくほど新期テフラを多く含む土であった。

ＳＫ－１０土坑（第６図）

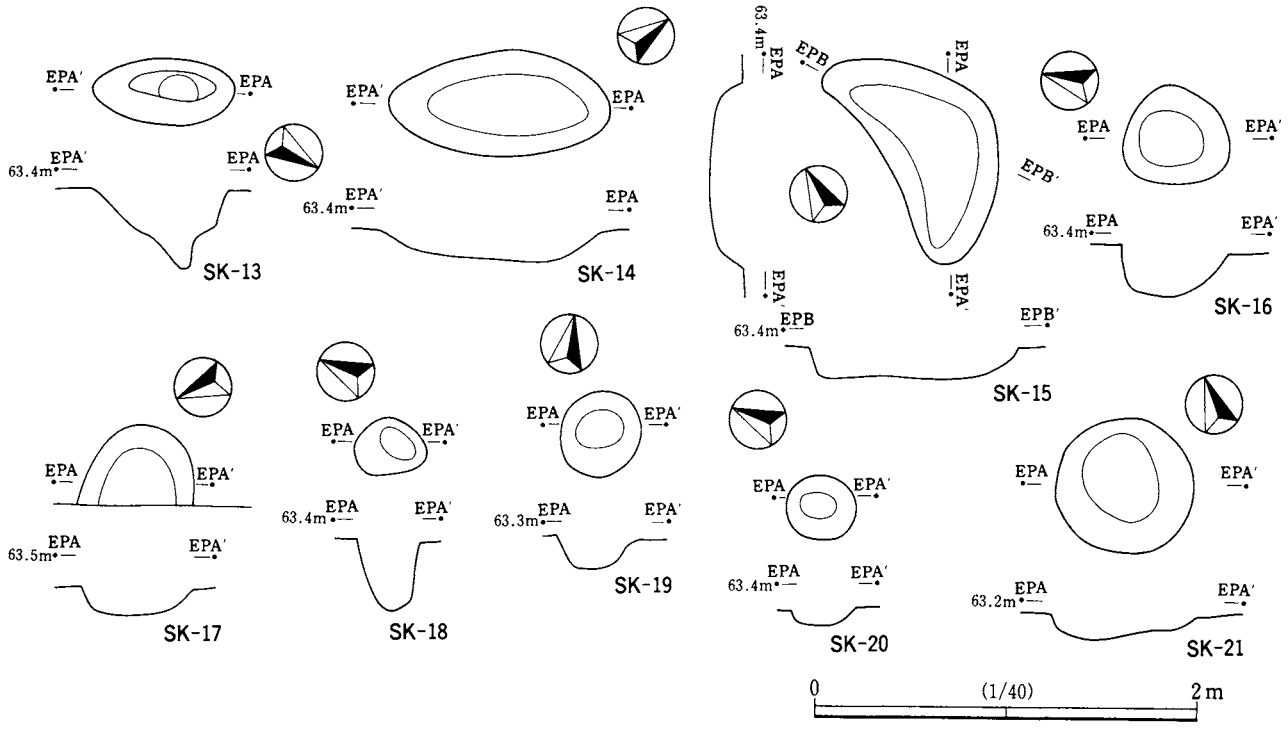
本遺構は、３Ｂ－10グリッドに位置する。規模は1.5m×0.7mの長楕円形で、北側が少し大きくふくらむ形で、長軸方向は北からやや東に傾いている。掘り込みの深さは約0.1mで、底面は平坦である。掘り込みの北側0.5mほどの範囲で底面に焼土を含む層を検出したが、底面の硬化もなく炉穴であるとはいいきれない。

ＳＫ－１１陥穴（第６図）

本遺構は、３Ｂ－10グリッド付近に位置する。規模は3.2m×0.5mの長楕円形で、長軸方向は北からやや西に傾いている。掘り込みの深さは約0.95mで、底面に向けて急角度に掘り込まれている。調査区域の関係で本遺跡の北側約0.8mは範囲を確認するだけで掘ることはしなかった。縄文時代の陥穴と考えられる。

ＳＫ－１２炉穴（第６図）

本遺構は、２Ｂ－50グリッドに位置する。規模は0.6m×0.3mの楕円形で、南側がややふくらむ形で、長軸方向はほぼ北を向いている。掘り込みの深さは約0.15mで底面にはやや凹凸がある。覆土中から広く焼土を検出し、炉穴とみられる。



第７図　土坑等（２）

ＳＫ－１３土坑（第７図、図版５）

本遺構は、遺構の密度の高い２Ｂ－80グリッドに位置する。規模は0.8m×0.4mの楕円形で、長軸方向は北からやや東に傾いている。掘り込みの深さは0.4mで、北西部が深く、南東部に向けてゆるやかに浅くなってくる形となっている。

ＳＫ－１４土坑（第７図、図版５）

本遺構は、遺構の密度の高い２Ｂ－80グリッドに位置する。規模は1.2m×0.6mの楕円形で、長軸方向は北からやや東に傾いている。掘り込みの深さは0.15mで底面はほぼ平坦である。同じグリッドにＳＫ－１３，ＳＫ－１４，ＳＫ－１５と３つの土坑が接して同じ方向に長軸方向を向けて位置している。

ＳＫ－１５土坑（第７図、図版５）

本遺構は、遺構密度の高い２Ｂ－80グリッドに位置する。規模は1.2m×0.6mの半円形で、長軸方向はおよそ北を向く。掘り込みの深さは約0.2mで、底面はほぼ平坦である。

ＳＫ－１６土坑（第７図、図版５）

本遺構は、遺構密度の高い２Ｂ－62グリッドに位置する。規模は0.6m×0.5mで、ほぼ円形である。掘り込みの深さは約0.25mで、底面は丸く掘り込んだ形となっている。

ＳＫ－１７炉穴（第７図、図版５）

本遺構は、遺構密度の高い２Ｂ－62グリッドに位置する。調査範囲の端にあるため遺構の形を完全にとらえられなかったが、調査した規模は0.6m×0.5mで、円形か楕円形を呈すると考えられる。覆土中より広く焼土が検出され、炉穴とみられる。

ＳＫ－１８土坑（第７図、図版５）

本遺構は、遺構密度の高い２Ｂ－62グリッドに位置する。規模は0.3m×0.4mでほぼ円形である。掘り込みの深さは約0.4mで、周辺にある土坑とは掘り方が違い、急角度に深く掘り込まれている。

ＳＫ－１９土坑（第７図）

本遺構は、２Ｂ－81グリッドに位置する。規模は0.4m×0.4mで円形である。掘り込みの深さは約0.4mで、底面は丸く掘り込んだ形となっている。

ＳＫ－２０土坑（第７図）

本遺構は、２Ｂ－81グリッドに位置する。規模は0.3m×0.3mで円形である。掘り込みの深さは約0.1mと浅い。

ＳＫ－２１土坑（第７図）

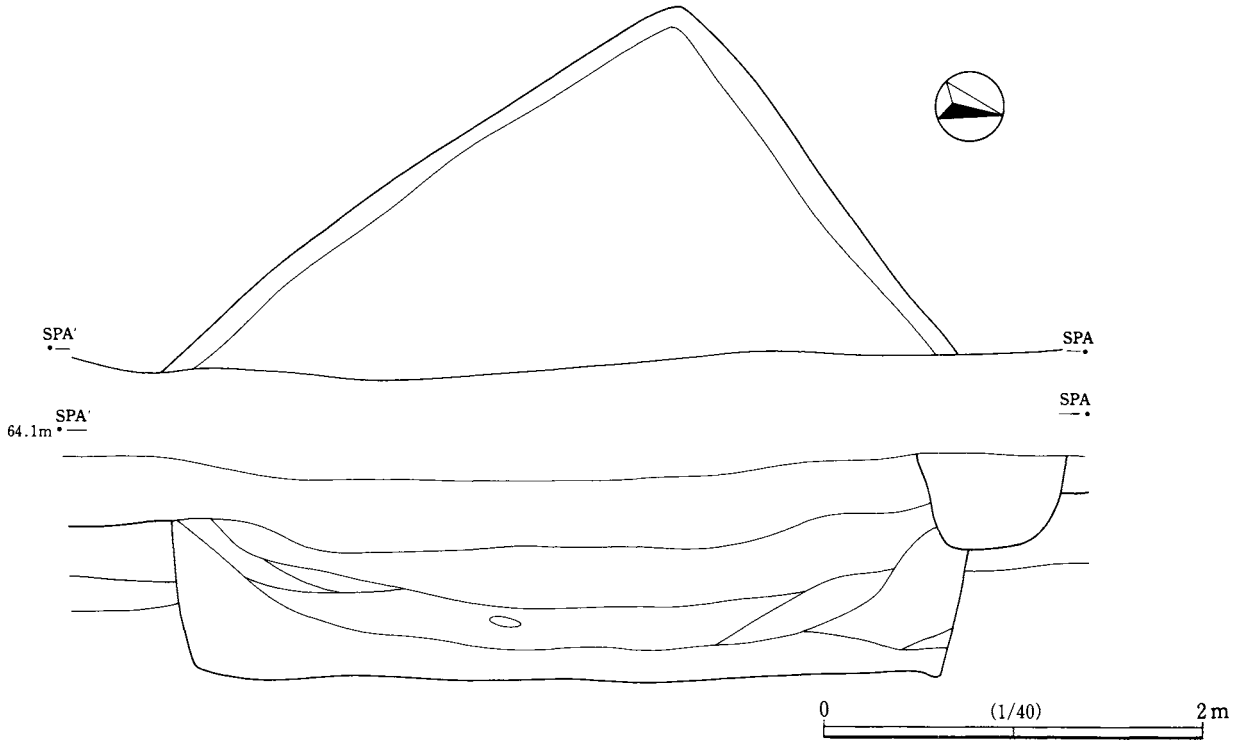
本遺構は、２Ｂ－93グリッドに位置する。規模は0.7m×0.7mで円形である。掘り込みの深さは約0.15mで、底面には少し凹凸がある。

ＳＫ－２２炭焼窯（第６図）

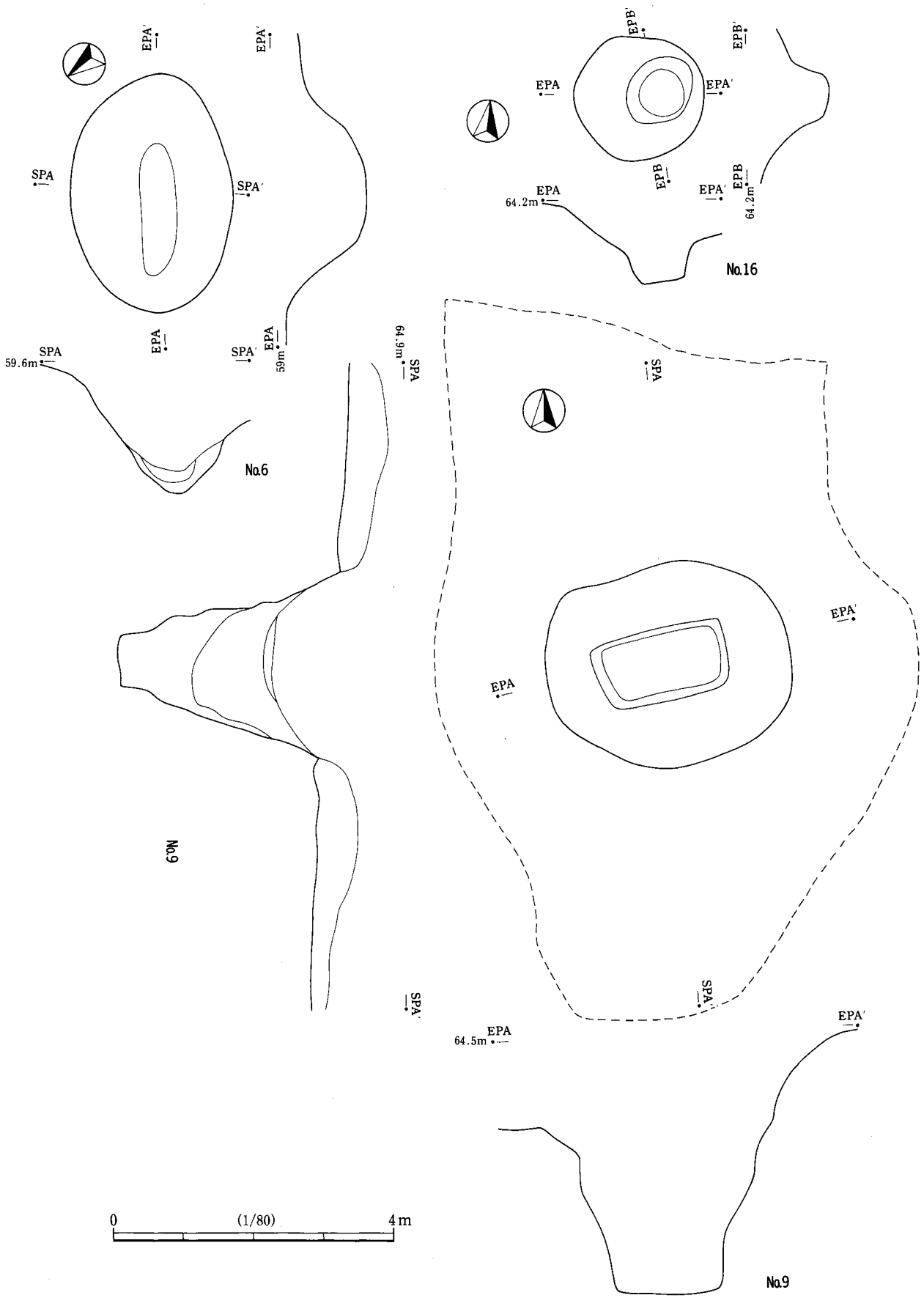
本遺構は、３Ｂ－10グリッドに位置する。ＳＫ－１１土坑の南半分と本遺構は切り合って位置している。規模は1.8m×1.4mで、隅丸四角形を呈する。掘り込みの深さは約0.15mで、底面には少し凹凸がある。底面はやや硬化しており、中央部は黒く炭化していた。炭焼窯とみられる。

ＳＩ－１住居跡（第８図、図版３）

調査区ほぼ中央の２Ｂ－83グリッドに位置する。調査区東端に位置し調査区外に続いているために遺構の全部は調査できなかった。約1/3程度の部分の調査と見られる。形態は隅丸方形と見られ、調査できた分でみると辺長3.4m以上の長さになるものと見られる。掘り込みはテフラ上から確認され深さ0.8m、ソフトローム上からだと深さ0.4mとなる。覆土はレンズ状の堆積状態を示している。床面は平坦で、ピット等の掘り込みや炉は検出されなかった。遺物も図示できるようなものは出土していない。時期は確定できないが、竪穴住居跡と見られる。



第８図　ＳＩ－１住居跡


EPA'
EPA'
SPA
SPA'
EPA
SPA'
EPA
59m
SPA
59.6m
No.6
EPB'
EPB'
EPA
EPA'
EPB
EPA'
EPB
64.2m
EPA
64.2m
No.16
64.9m
SPA
No.9
SPA
EPA'
EPA
SPA'
EPA
64.5m
EPA'
0
(1/80)
4m

第9図　シシ穴

シシ穴列について（第３・９図、図版１・２）

本遺跡の南北方向に長い痩せ尾根上に、ほぼ尾根伝いにシシ穴が調査着手前から確認されており、調査範囲の中に計18基が確認された。全体の配置は遺構等配置図に掲載したが、全数を調査するだけの余裕がなかったので、その中から３基を選んで調査を実施した。南のものからNo.１とし、北のものはNo.18という様にした。それらの中からNo.６、No.９、No.16の３基を選んで調査を実施した。シシ穴全体からみると尾根上の最高所に尾根の延長方向に従って、４ｍ～10m間隔の不規則な間隔で並び、同一でなく最少約２ｍから約５ｍまでと大きさのばらつきが大きい。深さも同様に一様ではないが配置は一列に並んでいる。縄文時代早期等によくみられる陥穴に似るが、規模が大きく配置も線的に並んでいる。台地上を区画するために掘り込まれたものと考えられ、近世にみられるシシ穴列と考えた。害獣の進入を防いだり、狩猟のために掘り込まれたものと見られるが、本遺跡のような痩せ尾根上に掘り込む必要性と用途は不明確である。

No.６シシ穴（第９図、図版２）

本遺構は、３Ａ－78グリッドに位置する。規模は3.4m×2.4mの楕円形で、長軸方向はおよそ北西を向く。地山が傾斜しているため深さは一様でなく、斜面下から測ると約1.2m、斜面上から測ると約1.8ｍとなる。底面はやや細長くなっており、全体的に丸く掘りくぼめた形となっている。

No.９シシ穴（第９図、図版２）

本遺構は、３Ａ－07グリッドに位置する。規模は1.8m×1.4mの隅丸方形であり、底面も0.9m×0.5ｍの隅丸方形に掘られている。長軸方向は東からやや北に傾いている。掘った土を周りに盛り上げてあり、掘り込みの深さは斜面上部で3.5mをはかり、一番浅い斜面下部でも2.5mをはかる。平坦に成形した底面に急角度で落ち込むように掘りこまれている。

No.１６シシ穴（第９図）

本遺構は、１Ａ－36グリッドに位置する。規模は1.9m×1.8mのほぼ円形である。底面も円形で平坦に掘られているが、底面は斜面の下の方に片寄って位置している。掘り込みの深さは斜面上部から見ると1.1m、斜面下部から見ると0.7mとなる。穴は、上部はゆるやかに傾斜するように、底部0.5mほどをほぼ垂直に掘り込んである。

遺物

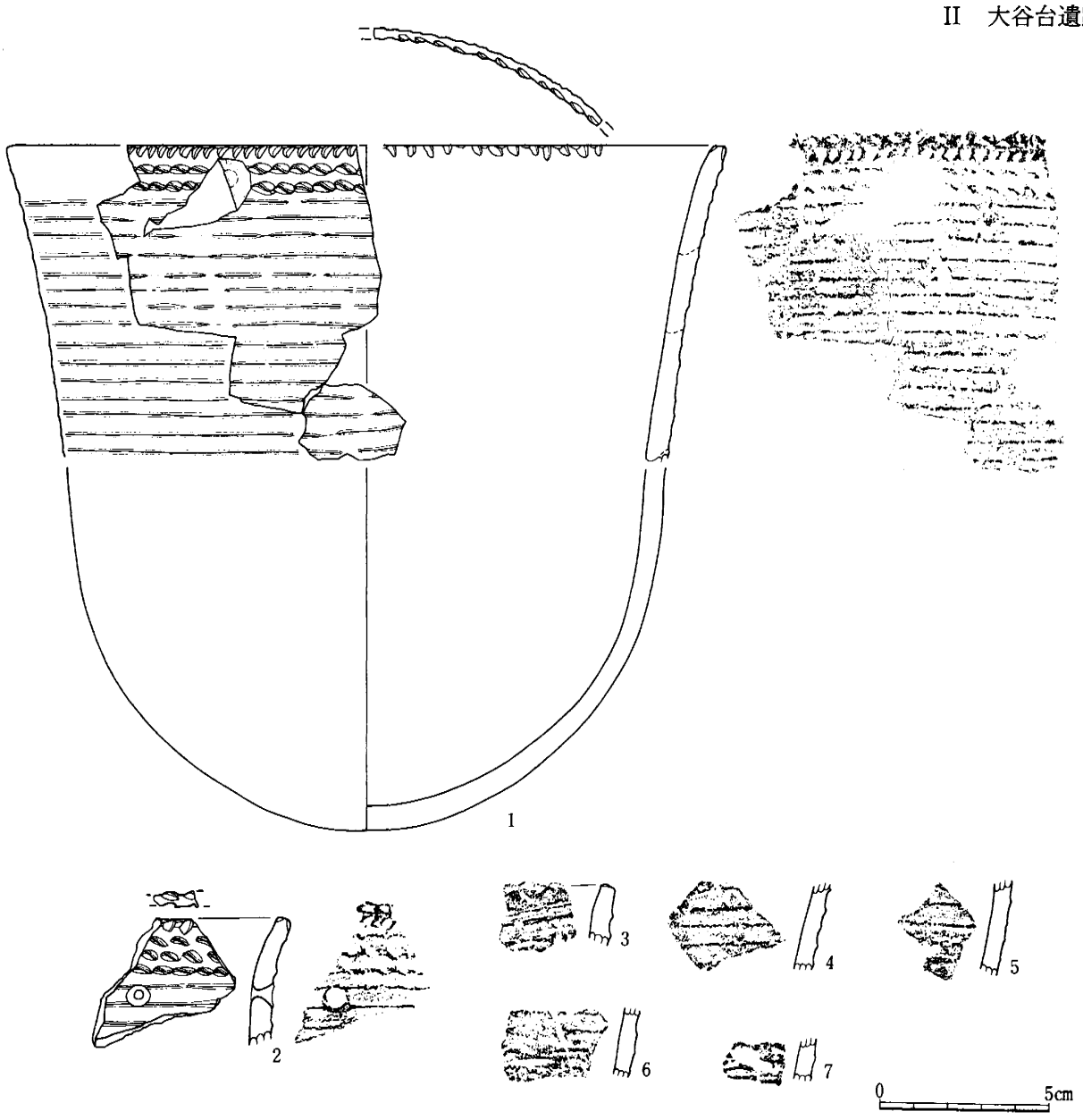
縄文土器（第10～18図、図版46～50）

全部で810点ほどの遺物が出土している。ほとんどが調査区東部の遺物包含層から出土している。

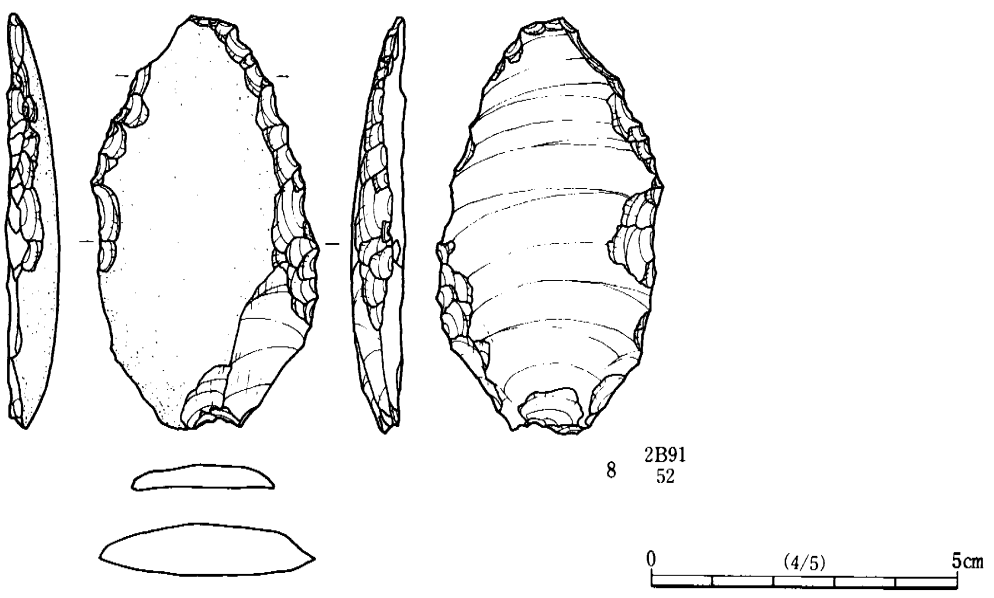
なお、遺物は土器と石器に分けて説明しているが、第Ⅰ群に伴う石器に関しては一括資料としての重要性を考えて、土器と一緒に説明した。また、通常土器の拓影図は縮尺３分の１、器形復元を行った実測図は４分の１で掲載しているが、第Ⅰ群の土器については、すべて縮尺２分の１で掲載した。

第Ⅰ群（１～７）

草創期の微隆起線文土器およびそれに伴うと考えられる石器を一括する。出土した資料をすべて図示している。１～３は深鉢で、すべて別個体である。１は口縁部から胴部にかけて高さ9.5cmまで残存している。口縁部の遺存度は８分の１程度であるが、ほとんどゆがみのない円弧を描いていたので、口径21.2cmで推定復元した。胎土は粒子がやや粗く砂粒の混入が目立つ。外面は淡褐色、内面は濃褐色に発色し、焼成は良好である。口縁部が外反し、胴部がやや直立して底部へとつながる。口唇部上面は平らに削がれ、内側と外側の端部に斜めに爪形のキザミが施される。キザミの配置は外側２に対し内側１である。口唇直下に



第10図　縄文土器（1）



第11図　縄文時代石器（1）

は波状微隆起線が２条配される。爪でひねり出したものと考えられる。その下には水平微隆起線が確認できるだけで15条めぐらされる。微隆起線そのものは幅、高さとも１㎜前後で、それぞれの間隔は４㎜前後である。微隆起線の間は横方向のケズリ痕が顕著である。この微隆起線が貼り付けたものか、線と線の間を削り取ることによって、線を浮かせるような製作法をとっていたのかは判断に迷うところであるが、所々にみられる欠損部を観察する限り、貼り付けた微隆起線が剝落した印象を与える[2)]。内面は横方向の擦痕が目立つが、摩耗が進んでいる。口唇直下に浅いへこみが観察されるが、補修孔をあけようとした痕跡とみられる。なお、底部側は全く出土しなかったが、神奈川県横浜市花見山遺跡などの出土例を参考に推定復元した。器高は口径とほぼ同じ値であり、丸底の形をとった。ただし平行微隆起線が胴部のどこまでめぐらされるかは判断が難しいため、この図には入れなかった。２は胎土は１と似るが、やや粒子が細かい。内、外面とも灰褐色に発色し、焼成は良好である。口縁部は１より強く外反する。口唇部上面は１と同じく平らに削がれ、内、外両端部に爪形のキザミが施される。キザミの配置は現存する資料では両側とも同じ位置である。口唇直下には１と同じ方法で作られた波状微隆起線が３条配される。その下の胴部には水平微隆起線が３条確認できる。微隆起線の大きさ、間隔とも１とほとんど同じである。微隆起線の間には、１と同じく横方向のケズリ痕が顕著に見られる。内面は横方向に擦痕が入り、遺存状況は良好である。補修孔が１か所あけられている。３は胎土は１に似るが、黒雲母の混入が目立つ。内、外面とも淡褐色に発色し、焼成はやや良好である。器形はうかがえないが、いくらか外反すると考えられる。口唇部上面は平らに削がれ、斜め向きの爪形のキザミが一列に施される。口唇直下は水平微隆起線が２条確認できる。微隆起線の大きさや間隔は１とほとんど同じである。微隆起線の間には横方向のケズリ痕が顕著に見られる。内面は器面がやや荒れており、詳細は不明である。４～７は深鉢の胴部と考えられる破片である。胎土や焼成などはいずれも１から３に似ているが、１と７がほぼ間違いなく同一個体であることを除けば、具体的にどれとどれが同一個体かは判別できない。いずれも基本的に文様構成や器面調整は口縁部と同じで、微隆起線の大きさや間隔などもほぼ同じである。

８は尖頭器である。原礫面のカーブを生かすように偏平に剝がされた縦長剝片を素材としている。器体の基部側に素材の打点を設定して、背面で器体の上半分に細部加工が、腹面で部分的な細部加工が見られ、それぞれ調整加工は器体の周囲に止まる周辺加工となっている。器体の形状はやや細身で下半部が膨らむ木葉形を呈している。石材は凝灰岩で、最大長67.0㎜、最大幅37.6㎜、最大厚8.8㎜、重量24.2ｇである。２Ｂ－91グリッドから出土している。

第II群（９～45）

早期の土器を一括する。沈線文に伴うと考えられる無文土器と、条痕文土器が出土している。

１類（９～12）

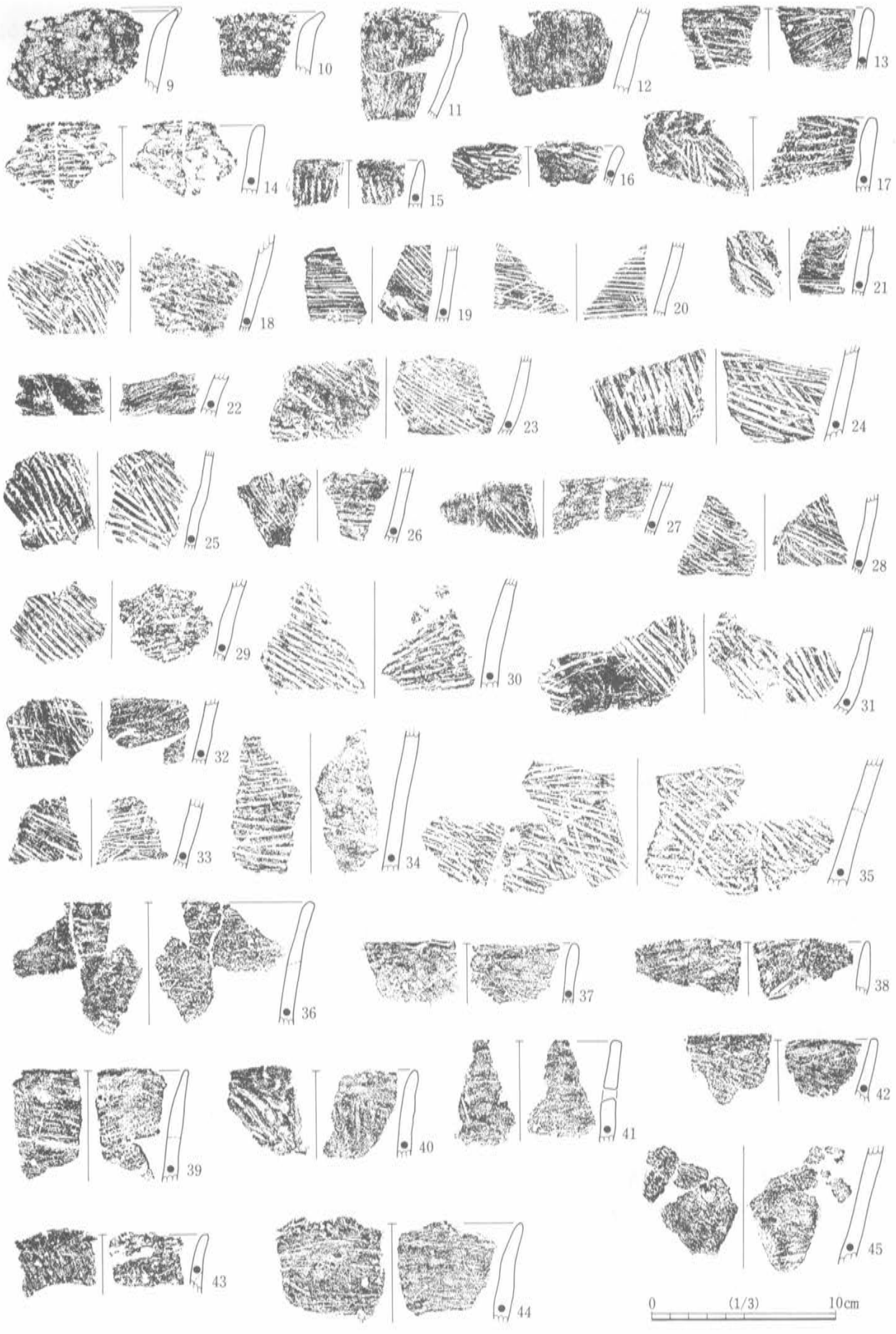
無文土器である。図示したものがすべてである。胎土に繊維を含まず、器面はケズリ調整される。手がかりに乏しいが、胎土や調整の状況などからここに含めた。９、10は同一個体である。

２類

条痕文土器である。全部で90点弱出土している。時期決定の手がかりに乏しいが、貝殻条痕文の土器が多数を占めること、繊維の含有量が多いことなどから、条痕文期の後半になるものと考えられる。

A種（13～21、23～35）

貝殻条痕が施されるもの。繊維の含有量が少なく焼成が良好なものと、繊維の含有量が多くもろいもの


9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
(1/3)
10cm

第12図　縄文土器（2）

とに分けられる。13～17は口縁部である。13、15、16は繊維の含有量が少ないもので、焼成は良好である。13、16は内・外面とも横方向の条痕が施される。15は縦方向の条痕が施されるもので、口唇直下に指頭による横方向のナゾリが観察される。14、16は繊維の含有量が多いものである。14は焼成が不良で、特に内面は剝落が著しい。16は口唇部上面に斜めのキザミが入る。18～21、23～35は胴部である。19、20はほとんど繊維が混入せず、条痕も他の土器より細かく異質な印象を受ける。施文具は貝殻ではなく木板を原料としたハケ状のものであった可能性が強い。

B種（22、36～45）

擦痕が観察されるもの。施文具は不明だが、ヘラ状の工具であると考えられる。胎土はいずれも粒子が粗く、砂粒が多量に混入する。また、22と39を除いて繊維の混入が顕著である。黒浜式に伴う無文土器は、繊維の含有量が多いことでは共通するものの、胎土が全体に細かく、また、器面調整がかなり丁寧である。36は外面に条痕を磨り消したような痕跡が観察される。40はほとんどケズリと言っていいような強い擦痕が観察される。41は口唇上が平らに削がれている。43は焼成が不良で、内面の剝落が著しい。

第III群（46～187）

前期前半の関山式、黒浜式土器を一括する。700点近く出土し、当遺跡の中心的な時期である。ここでは基本となる文様をもとに分類している。なお、この群に限り種別のA種は口縁部、B種は胴部を表し、それぞれの細分はA－○種、B－○種と表記している。

1類

ループ文を主文様とするもので、斜位に施文されて菱形を呈するものも多い。50点ほど出土している。やや小さめの底部からいったん胴部に向かって開き、胴部中間でくびれたあと、口縁部に向かって大きく開く器形を呈する深鉢が多い。器形の変化点にはループが配されるように施文されている。沈線による幾何学文や貼り付け瘤、片口土器などが見られないことから、基本的には関山II式に属すると考えられるが、A－1種に見られる小波状突起や縦位の短沈線は、関山I式の残滓と考えられる。

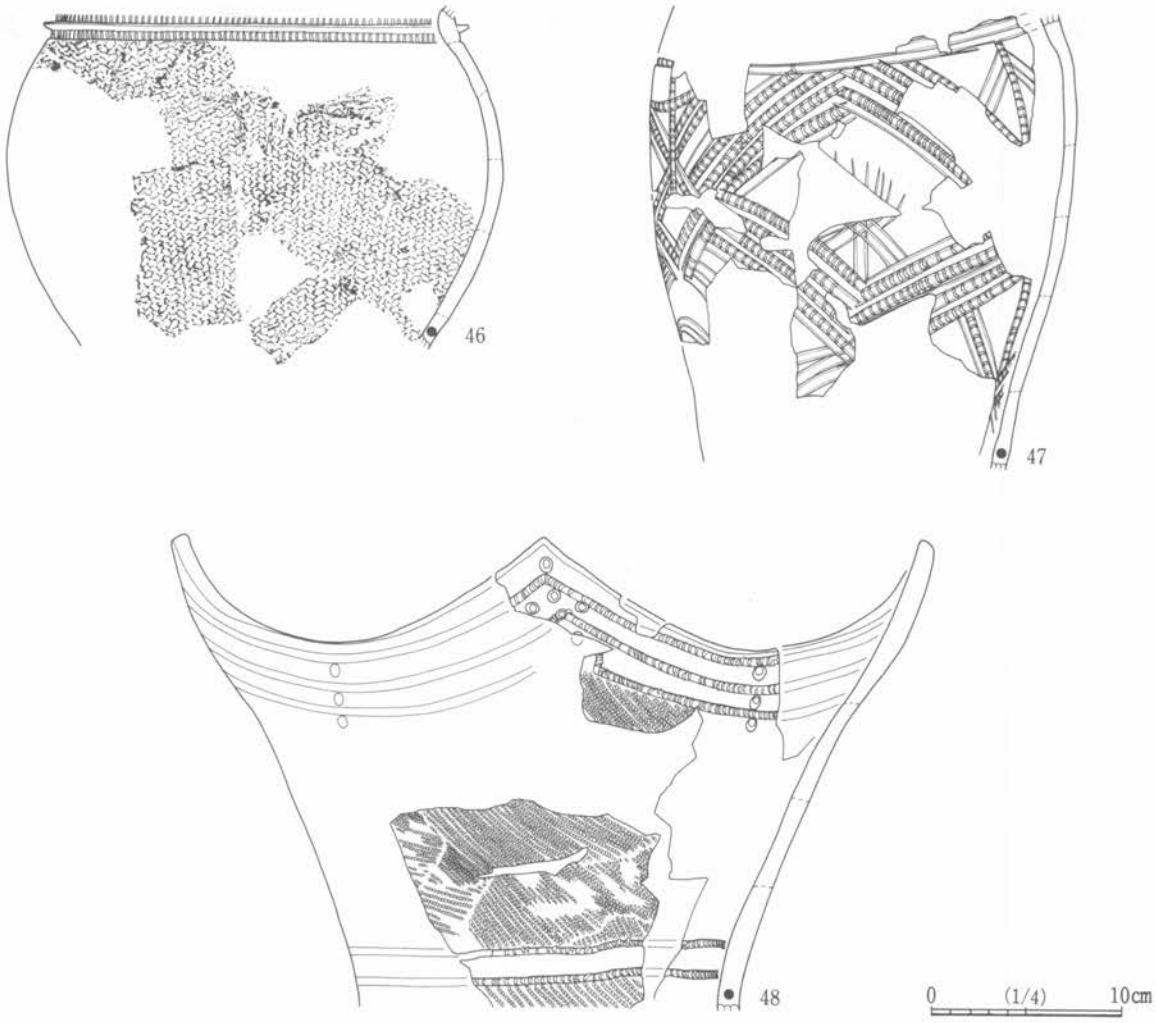
A－1種（49～52）

口唇直下に棒状工具による縦位の短沈線が施されるもので、すべて同一個体である。波状口縁の深鉢で、口唇部上面には小波状の突起がつけられる。胎土は植物繊維の混入が顕著であるが、粒子は細かく焼成は良好である。器形は胴部で大きく外反し、口縁部でやや強く内湾するものと考えられる。外面には7条に及ぶループが撚られたRL単節縄文が施される。内面は丁寧なミガキ調整がなされる。

A－2種（53～57、59）

口唇下側がすぐ縄文帯となるもの。53と55は同一個体の平口縁の深鉢で、胎土は植物繊維が多量に混入し、粒子も砂粒が多量に混入して粗いが、焼成は良好で明褐色に発色する。器形は胴部から口縁部にかけて広がる形態を呈し、胴部の屈曲部と口唇直下に多条のループ文が施文され、その間に羽状縄文が施文される。54と56はやはり同一個体の平口縁の深鉢で、口唇部上面は平らに削がれ、口唇直下に幅7㎜ほどの空白をおいて多条のループ文が配される。57は波状口縁の深鉢で、注口をもつものである。3条のループをもつ原体を口縁に添って施文したあと、注口を中心に菱形になるように同一原体が施文され、下側はループが水平になるように施文される。59は平口縁の深鉢で、口唇直下に横方向に2条のループ文が施され、その下にループが斜位に施文される。破損している下側と併せて菱形を構成していた可能性が強い。

B－1種（58、60～62）



第13図　縄文土器（3）

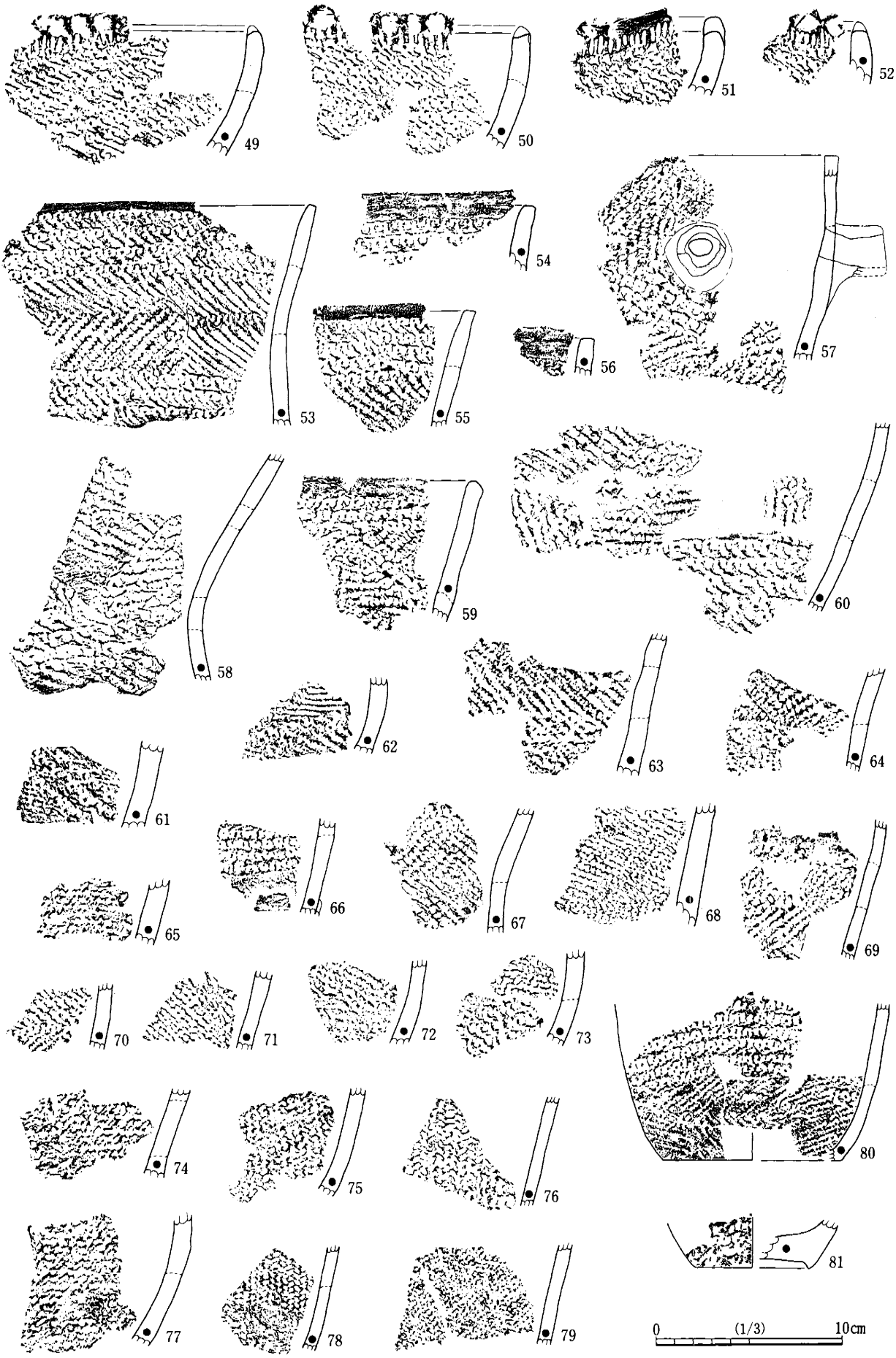
胴部破片で、ループ文が菱形になるように斜位に施文されるもの。羽状縄文による菱形文は、視覚的には類似する効果を生むが、基本的に横方向ないしは縦方向に施文するので、ここには含めていない。58は深鉢の胴部で、口縁部に向かって大きく開く器形を呈している。屈曲部に水平のループ文、その上に菱形のループ文を配する。60は深鉢の底部に近い胴部と考えられ、下側には７条に及ぶループが水平に配され、上には菱形のループ文が施文される。

Ｂ－２種（63～70、80）

胴部破片で、ループ文が水平に施文されるもの。62は同じような器形の深鉢であるが、ループは水平のまま羽状縄文が菱形になるように施文される。66は多条のループが水平にめぐらされるもので、貼り付け隆帯が観察される。67は内面にススが付着している。70と80は底部付近の破片で、同一固体である。底部から胴部にかけて撚りが反対の単節縄文が菱形の羽状縄文になるように施され、その上に多帯のループ文がめぐらされる。

２類（71～79、81）

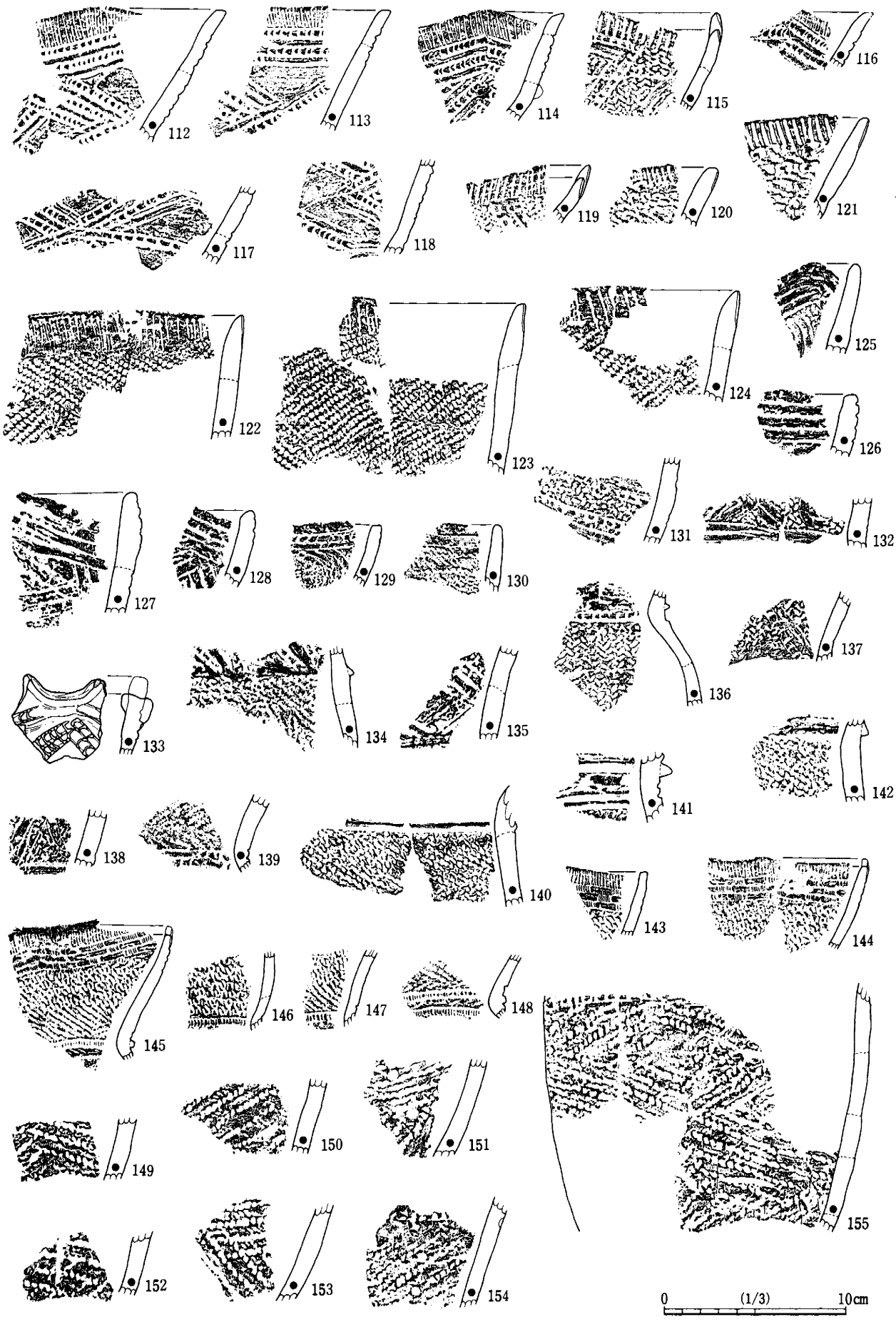
組み紐文が施されるもの。貼り付け隆起線を伴うものも出土しているが、それについては５類の項で説明する。しかし、それらを合わせても20点ほどしか出土していない。いずれも胎土は１類よりかなり粗くなり、石英、長石粒の混入も顕著になる。植物繊維の混入も多い。81は底部で、上げ底になっている。底


49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
0
(1/3)
10cm

第14図　縄文土器（4）

82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
0　(1/3)　10cm

第15図　縄文土器（5）


112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
0
(1/3)
10cm

第16図　縄文土器（6）

径は約6.2cmである。全体に極めてもろく、また、器面の摩耗も目立つ。

3類（82～111）

単節縄文が施されるもの。総数250点弱を数え、最大多数を占める。82は波状口縁の深鉢である。口径は約21.6cmで、4分の1が残存している。胎土は粒子が細かく植物繊維が多量に混入し、焼成は良好である。口唇部上面は平らに削がれ、内面は横方向のミガキ調整が顕著である。外面はＬＲの単節縄文が施されるが、剝落がやや目立つ。83は平口縁の深鉢である。口径は約19.4cmで、6分の1が残存している。胎土、焼成とも82と類似している。口唇部は丸く成形され、内面はミガキ調整が顕著である。外面には帯状のＬＲ縄文が2段にわたって施される。84～86、88～90はいずれも平口縁の深鉢である。84～86や90は83などに比べると胎土は粒子がやや粗くなり、砂粒の混入が目立つようになる。いずれの個体も口唇部上面は軽く削がれ、内面にはミガキ状の調整が施される。89はかなり大型の平口縁の深鉢で、器肉は出土資料中最も厚い部類に属する。撚りが反対の別の原体を段状に施文して羽状縄文を構成する。87は波状口縁の深鉢で、2対の小突起状の波頂部を持つと考えられ、小突起の間に把手がつけられる。外面には水平にＲＬ縄文が施される。91～110は胴部である。いずれも胎土は左右や植物繊維を多く含み、個体によっては器面の剝落が著しい。羽状縄文を構成するものは、すべて撚りが反対の別々の原体を段状に施文する。91と97、102と105はそれぞれ同一個体である。94は貼り付けた隆起線を棒状工具で押しつぶしている。103はＲＬ単節縄文と1無節縄文を帯状に施文するものである。108は底部直上の破片である。111は底部である。底径は約11.0cmで、若干上げ底になる。底面はミガキ調整がかけられるが、内面は剝落が著しい。

4類

半截竹管による連続爪形文ないしは沈線を主体とするものである。約90点出土している。当遺跡では連続爪形文によって菱形を描くものが顕著である。

Ａ－1種（112～114、116～118）

地紋がない口縁部文様帯に、連続爪形文が幾何学的に施されるもので、口唇直下に縦位の短沈線を施す。112～114、116～118は同一個体で、胎土は粒子が細かく植物繊維が多量に混入するが、焼成は良好である。口縁部が大きく開き、口唇部は内そぎ状に成形される。口唇直下は縦位の短沈線がめぐらされ、その下側に口縁に添って2条の連続爪形文が施される。そしてその下側に連続爪形文が菱形に配される。114は波頂部であるが、貼り付け瘤も観察される。

Ａ－2種（115、119～124）

縄文地紋に口唇直下に縦位の短沈線を施すもので、半截竹管による沈線ないしは連続爪形文が施されるものと、縄文のみのものがある。115と119は同一個体で、胎土は細かいが長石粒の混入が目立つ。器肉は薄くなり口唇部は尖り気味に成形される。口唇直下に縦位の短沈線がめぐらされる点では112などと同様であるが、そこから下は組み紐文が施され、連続爪形文は斜めに配されるだけになる。120、121はループ文が施されるもので、口唇直下の短沈線はやや太めの棒状工具が使用されている。122～124は同一個体で、胎土はやや粗く植物繊維を多量に含む。口唇部は尖り気味に成形され、口唇直下の短沈線は細くて鋭い棒状工具が使用される。その下側は撚りが反対の単節縄文が縦位に交互に施されたと考えられ、全体として羽状縄文を構成していたとみられる。

Ａ－3種（48、125～130、133）

口縁部に添って連続爪形文ないしは沈線を施すもので、地紋は縄文である。48は波状口縁の深鉢の上半

分である。波頂部での最大径は約38.8cmである。胎土はかなり細かく、植物繊維の混入が顕著である。口唇部上面は丸く成形され、内面は横方向のミガキ状の調整が施される。胴部に2条の連続爪形文がめぐらされ、そこから上が口縁部に向かって大きく開く形状を呈する。口縁に添って3条の連続爪形文がめぐらされ、波頂部と波底部では爪形文の間に縦列の円形刺突がつけられる。地紋はＲＬ縄文で、連続爪形文の間は縄文が磨り消されている(実測図右側縁付近は縄文を省略している)。施文技法や形態などから、諸磯ａ式に位置づけられてもおかしくない資料であるが、植物繊維の混入が顕著であることから黒浜式終末とした。125は波状口縁になるもので、口縁に添って半截竹管による沈線が施され、下側には弧状の沈線が施される。132は同一個体である。126～128は半截竹管による沈線が3条施され、その下にやはり半截竹管による沈線が幾何学的に配される。129は連続爪形文が施される。130は沈線の下にループ文が施されるもの。133は2対の小突起を持ち、その間に連続爪形文と隆起線が収束するもので、下側には菱形文が配されるとみられる。

Ｂ－1種（47、135、138）

連続爪形文ないしは半截竹管による沈線が幾何学的に施される胴部破片で、地紋は無いかもしくは磨り消されている。47は深鉢の胴部で、下側はこのまますぼまって底部に至り、上側は大きく広がって口縁部に至る形態を呈すると考えられる。残存している部分の推定最大径は22.5cm、高さは23.7cmである。胎土は粒子が細かく繊維が多量に混入するが、焼成は良好である。半截竹管を使用した平行する連続爪形文と沈線によって、大きな菱形文が形作られ、その中に樹木ないしは炎を思わせる意匠が描かれる。菱形文の左側には小型の菱形文が配され、その中心に縦位の連続爪形文と円弧状の連続爪形文ないしは沈線が描かれる。上側の破損面に平行して沈線が描かれているが、そこから上が口縁部にあたるものとみられる。135と138は同一個体で、半截竹管による沈線が幾何学的に配される。

Ｂ－2種（131、132、137）

縄文地紋に、連続爪形文ないしは半截竹管による沈線が施されるもの。131は胴部破片で、組み紐文を地紋として斜行する連続爪形文が配される。

Ｂ－3種（46、134、136、139）

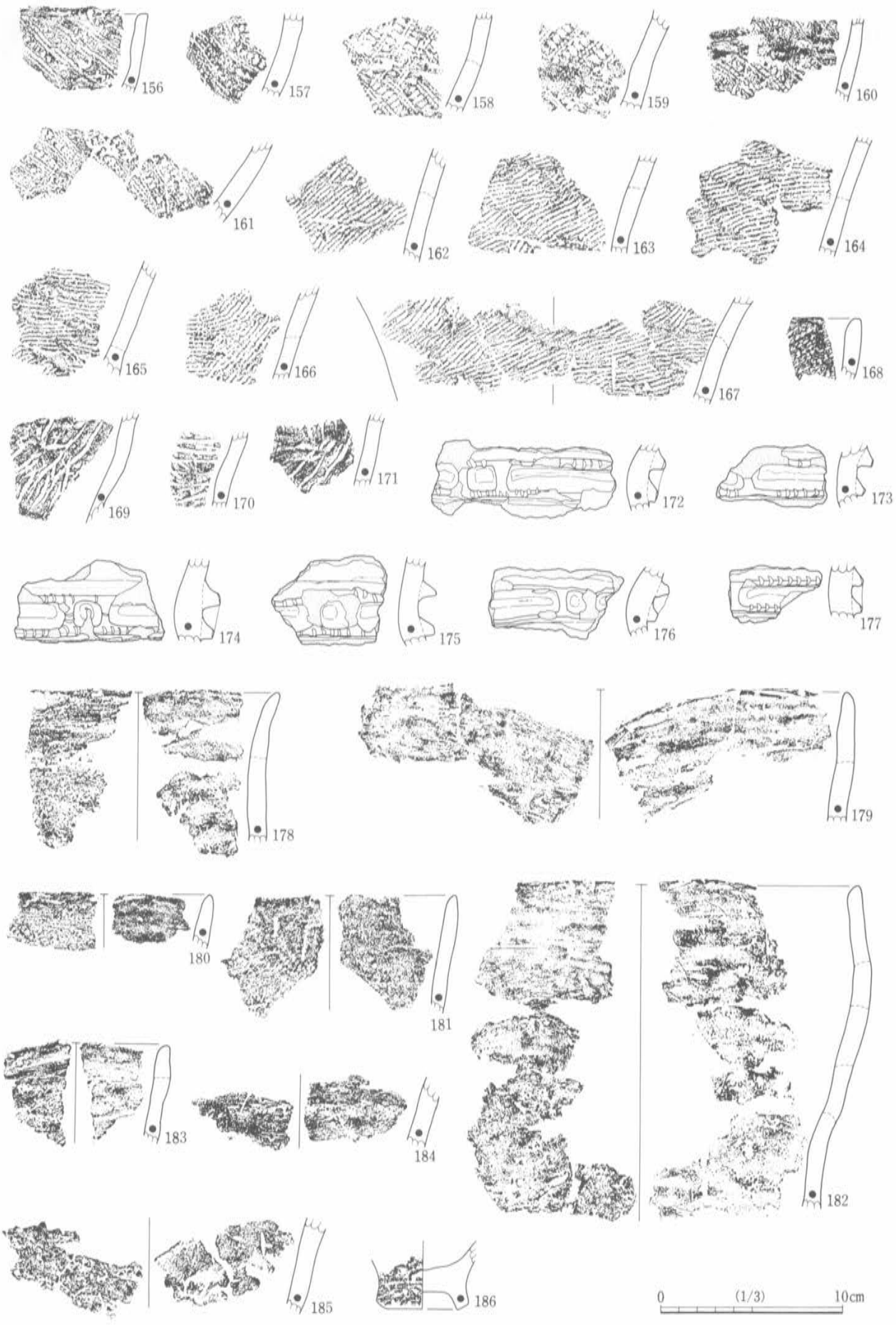
連続爪形文と隆起線を併用するものである。46は深鉢胴部で、底部からやや大きく膨らみ、いったん強く屈曲したあと、口縁部に向かって大きく開く器形を呈すると考えられる。136も同一個体であろう。胎土は粒子がやや粗く長石粒の混入が目立つほか、植物繊維が多量に混入する。焼成は良好であるが、部分的に摩耗が目立つ。外面は組み紐文を地紋とし、屈曲部には貼り付け隆起線がめぐらされ、その上下に連続爪形文が施される。内面は丁寧なミガキ調整が施される。134は胴部に水平に隆起線が貼り付けられたあと、隆起線と連続爪形文がペアになって幾何学的な文様が施される。

Ｃ種（143～148）

Ａ－2種とＡ－3種との組み合わせのような文様構成をとるが、胎土、焼成などが他の土器とは全く違う一群である。ほぼすべての資料を図示している。口唇直下に縦位の短沈線を施し、口縁部に添って連続爪形文ないしは沈線を施す。地紋は縄文もしくはループ文で、内面は極めて丁寧なミガキ状の調整がなされる。胎土に繊維があまり含まれず、器壁が薄く焼成は良好である。搬入品の可能性が強い。

5類（140～142）

隆起線をもつものである。いずれも地紋は縄文で、やや太い貼り付け隆起線を持つ。140、141は沈線を


156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
0
(1/3)
10cm

第17図　縄文土器（7）

伴うもの、142は隆起線のみのものである。

6類（149～155）

大振りな原体を棒状工具に巻き付けて転がすことによって菱形文を描出するもので、全部で14点出土している。施文技法としては撚糸文と同じであるが、施文効果の大きく違うことから別に分類した。中部地方の有尾式は列点状刺突文による菱形文を特徴とするが、同様の効果を狙ったものとみられる。ただし、胎土は砂っぽく繊維が多量に混入するなど黒浜式そのものであり、在地産であろう。151、154は円形刺突が観察されるほか、154には連続爪形文が施される。155は器形復元できる深鉢胴部で、上側破損面に平行して連続爪形文が施される。

7類（156～161）

附加条縄文が施されるもので、32点出土している。いずれも附加条は2本加えられている。156はやや小型の深鉢の口縁部で、口唇部上面は平らに削がれている。

8類（162～167）

無節縄文が施されるもので、34点出土している。162～167は同一個体で、植物繊維を多量に含むものの、焼成は良好で硬質である。

9類（168～171）

撚糸文が施されるもので、10点のみの出土である。168は単節撚糸を横方向に施文するもの。169～171は同一個体で、無節撚糸を施文するものである。

10類（172～177）

隆帯をもつもので、図示したもの以外は1点のみである。172～177は同一個体で、深鉢胴部の屈曲部に2本一組の隆帯が水平に貼り付けられ、所々で両者をつなぐ縦隆帯によって円孔状の文様が作出される。隆帯上には連続爪形文が施され、隆帯間はナゾリ状の調整がなされる。

11類（178～186）

無文のものである。先述したとおり、胎土に繊維を多量に含み、胎土が細かく器面調整が丁寧なものを、早期の土器と分離してここに含めた。植物繊維を含む無文土器は全部で150点近く出土しているが、厳密に区別が付けられなかったものもある。口唇部はいずれも尖り、器面にはケズリもしくはナデ状の調整が施される。186は底部で、かなり上げ底である。

このほかに、掲載しなかった底部破片が8点存在する。

第IV群（187～222）

前期後半の土器を一括する。全部で30点余りと少ないが、器形が復元できる深鉢が出土しているほか、搬入品とみられる特異な遺物の出土が目立つ。

1類

半截竹管による沈線または連続刺突文を主とするもの。201と同一個体とみられるものを除いて18点出土している。

A種（201）

連続爪形文が施されるもの。201はかろうじて全形が復元できる深鉢であるが、欠損が多く底部から積み上げてモザイク状に推定復元した。平口縁で推定口径は29.6cm、器高は39.4cm、底径は約13.5cmである。底部から若干膨らむように器壁が立ち上がり、胴部中央でわずかにくびれたあと、口縁部にかけて大きく

外反する器形を呈する。胎土は砂粒の混入がやや目立つが、焼成は良好である。外面はＲＬ縄文が全面に施され、口縁部に添って無文帯をはさんだ３条の連続爪形文がめぐらされる。内面は縦方向にミガキ調整され、口唇部は外側に肥厚する。諸磯ａ式である。

Ｂ種（187～192）

縄文地紋に沈線が幾何学的に施されるもの。胎土は粒子が細かいものの長石粒が多量に混入する。いずれも濃橙色に発色し、焼成は良好で硬質である。内面は横方向のケズリ調整が顕著である。

Ｃ種（193、194）

沈線のみ施されるもの。いずれも同一個体である。193は折り返し口縁になるもので、沈線は口縁部と胴部の区別なしに施される。

Ｄ種（197）

半截竹管による押し引き文が施されるもの。197は口縁部が折り返し口縁となって外反するもので、口唇上に棒状工具によるキザミが施される。口縁部には連続爪形文の間隔を間延びさせたような、押し引き状の半截竹管文が４条施される。内面は横方向のケズリ調整が顕著である。

２類（195、196）

波状貝殻文が施されるもので、全部で４点出土した。胎土はやや砂っぽく、焼成は良好である。内面は縦方向にケズリ調整される。

３類（198、199、208）

縄文のもので、199の破片を除いて全部で８点出土した。198は胎土がやや粗く、赤色スコリアが混入する。口縁部が外反し、口唇部上面に縄文が施文される。199は波状口縁を呈する小型の深鉢で、縄文地紋に円形刺突が波頂部と波底部の下側に、縦列に施文される。胎土は細かいが、石英粒、長石粒や赤色スコリアがやや多量に混入する。焼成は良好で、内面は横方向のミガキ調整がなされる。208は口唇部直下にナゾリ状の無文帯を作出し、その下に結束文を施す。胎土などは５類に近い。

４類（200）

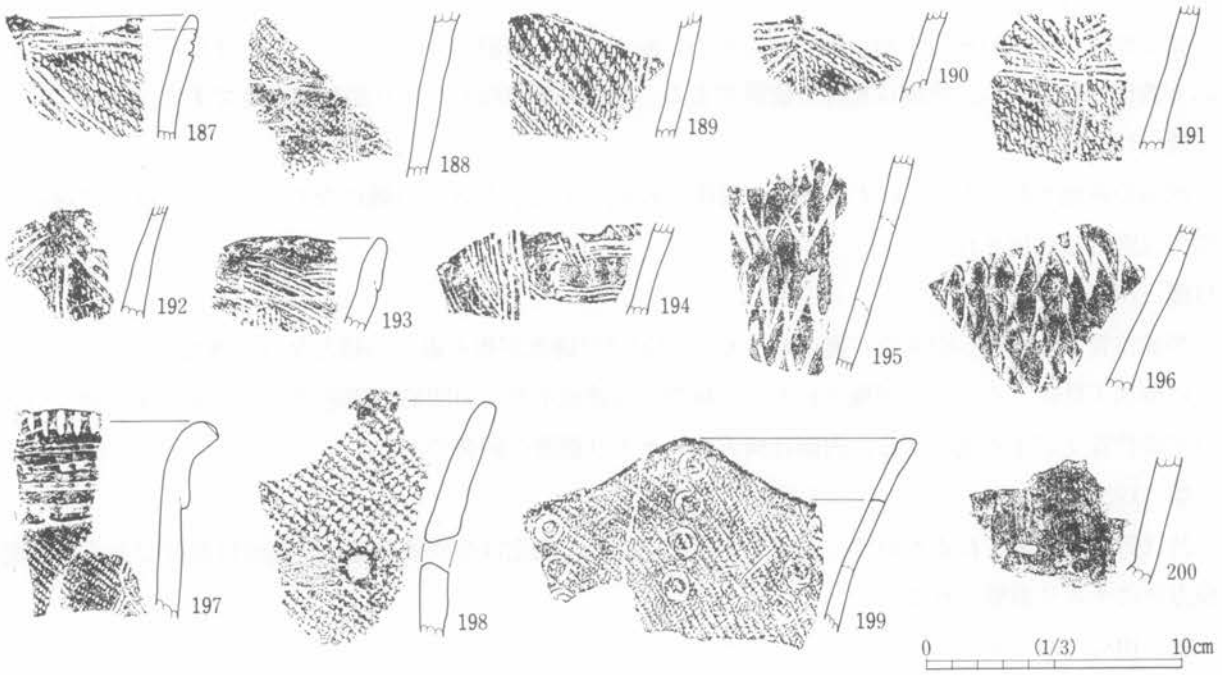
無文土器であるが、胎土や焼成を観察した上でⅣ群に含めた。全部で20点余り出土している。200は胎土が細かく、赤色スコリアの混入が顕著である。外面は横方向の、内面は縦方向のケズリ調整が目立つ。

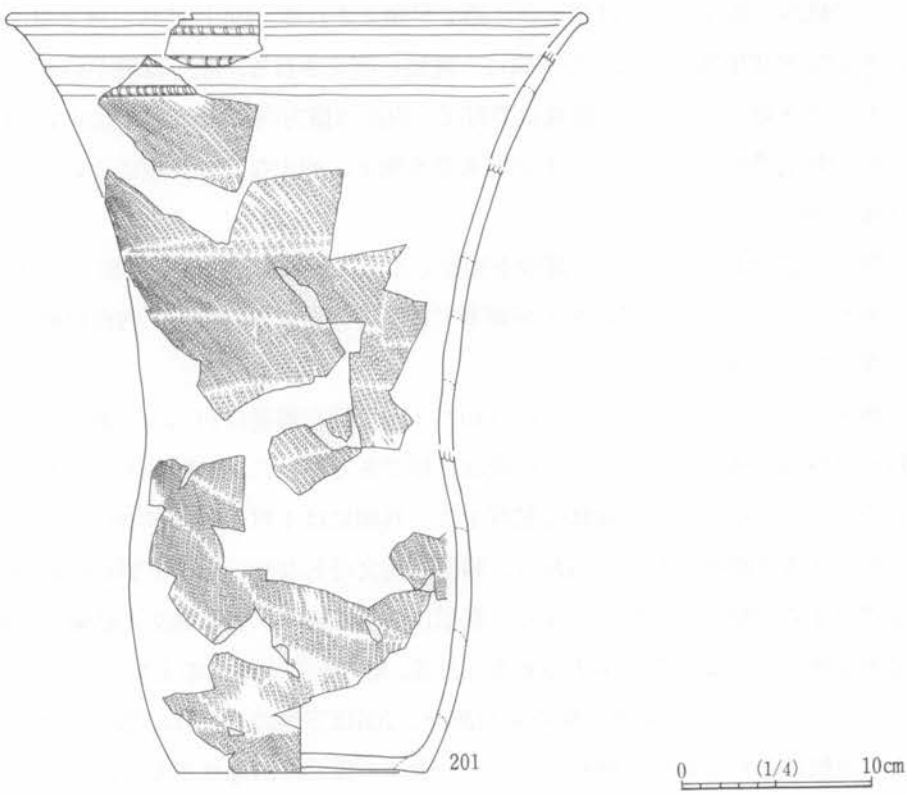
５類（202～208）

甕状を呈する深鉢である。口径は約27.0cm、残存器高は19.5cmである。胎土は粒子が粗く、石英、長石粒や黒雲母が多量に混入する。焼成は良好であるが、二次加熱によるとみられる剝落が著しい。口縁部が強く外反し、折り返し口縁状に肥厚する。外側には４対、突起がつけられる。折り返し部分の下側に棒状工具による連続刺突が加えられる。頚部は無文帯となり、その下側に隆起線が貼り付けられ、やはり棒状工具による連続刺突が加えられる。胴部は強く膨らみ、ＲＬ縄文と結束文が施される。下側は強くくびれて円筒状になって底部に達するとみられる。器形から大木系の土器とみられる。203～207は202と同一個体で、203、204、206は胴部の膨らんだ部分、205は下側のくびれた部分、207は底部である。残念ながら202より下側にあたる破片が極めて少なく、全体の復元は断念せざるを得なかった。

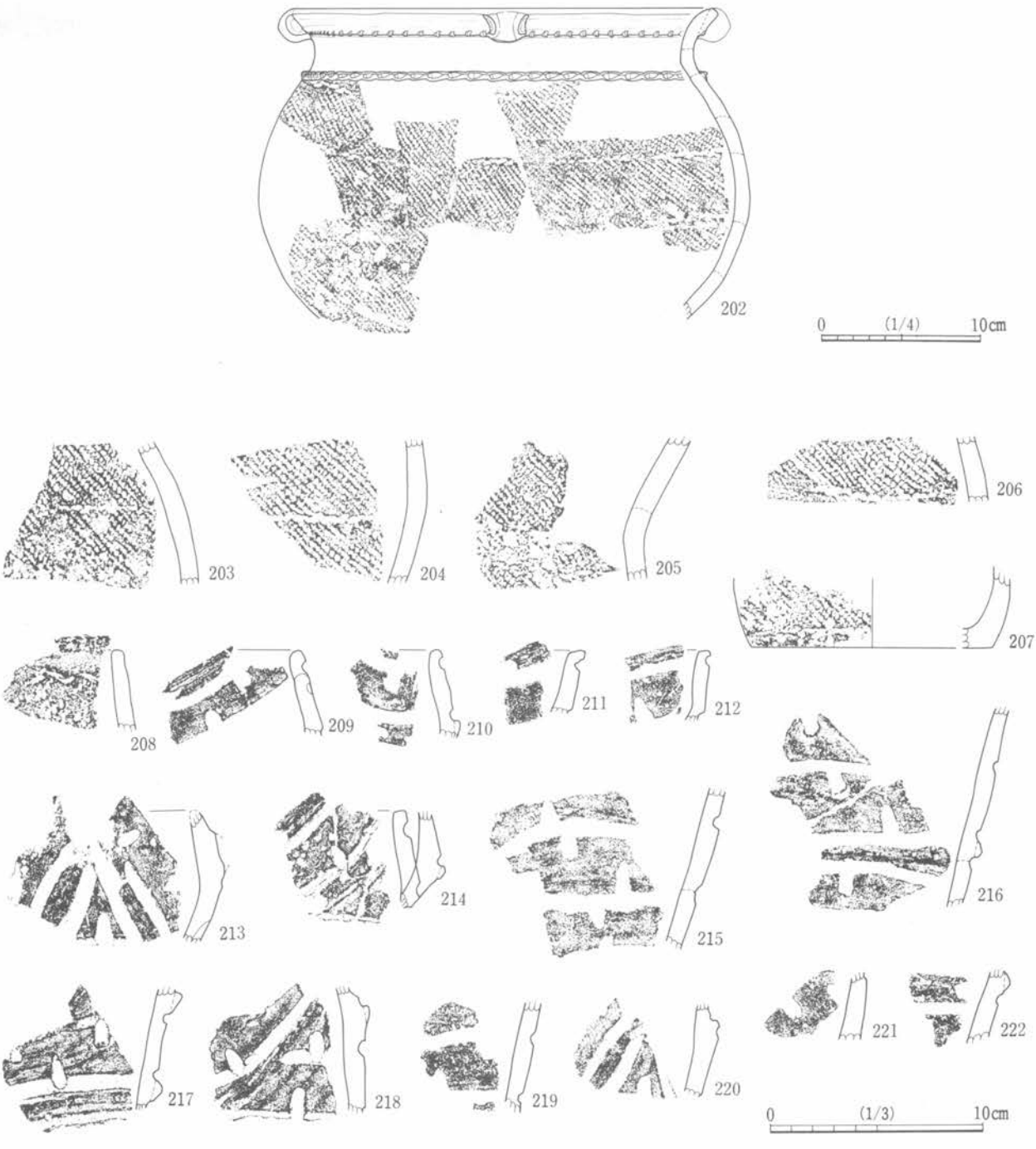
６類（209～222）

極端な波状口縁を呈する資料で、全部で16点出土している。いずれも同一個体で、胎土は粒子がやや粗く砂っぽい。口縁に添って沈線を伴った隆起線を配し、それに付属するように棒状工具による列点を入れ

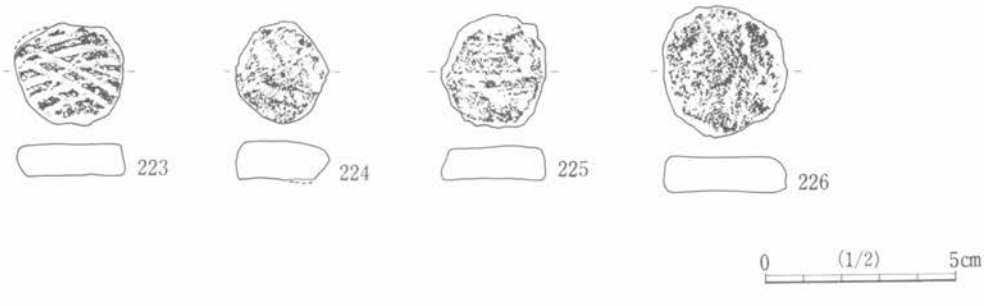

187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
0　(1/3)　10cm


201
0　(1/4)　10cm

第18図　縄文土器（8）



第19図　縄文土器（9）



第20図　土製品

る。口縁部は隆起線部分で大きく屈曲する。胴部は沈線のみで隆起線は伴わない。列点は沈線両側に、やや位置をずらして施文する。沈線および列点の施文に使われた棒状工具は直径６㎜前後になり、この種の施文具としては異例なほど太い。類例に乏しいが、中部地方の前期末に位置づけられる可能性が強い。

土製品（223～226）

土製円盤が４点出土している。223は直径28.0㎜、最大厚9.0㎜、重量7.0ｇである。条痕文土器を素材とし、周縁はほぼ全面研磨調整を施す。224は直径26.1㎜、最大厚10.4㎜、重量6.2ｇである。植物繊維をわずかに含む無文土器を素材とし、周縁は打ち欠き調整がなされ、一部に研磨痕が観察される。225は直径28.7㎜、最大厚8.7㎜、重量7.8ｇである。植物繊維を含む擦痕が施される土器を素材とする。周縁は打ち欠き調整のみで、ほとんど研磨されない。226は直径33.6㎜、最大厚9.4㎜、重量11.8ｇである。植物繊維を含む擦痕が施される土器を素材とする。周縁はほぼ全面研磨調整されるが、一部に打ち欠き痕が残る。

縄文時代以降石器（第21・22図、図版43、第３表）

本遺跡より出土した石器はまとまって２Ｂグリッドを中心に検出されている。石器総点数は36点を数える。器種組成は尖頭器１点、石鏃・石鏃未成品７点、楔形石器４点、磨製石斧１点、打製石斧１点、二次加工を有する剝片（以下、Ｒ剝片と略称する。）３点、使用痕を有する剝片（以下、Ｕ剝片と略称する。）２点、石皿１点、剝片４点、礫12点である。

１～７は石鏃・石鏃未成品である。１は石鏃である。小形のもので、両側縁はやや膨らむ。基部は逆Ｕ字状に深く抉れ、脚部が棒状に延びる。２～６は石鏃未成品である。２は縦長剝片を素材として、先端部を尖らせるような細部調整と平坦調整が見られるが、裏面には細部調整がほとんど及ばない。３は裏面が平坦調整で整形されるが、表面には調整が及んでいない。４は比較的幅広な調整加工により素材を三角形状に整形している。５は素材の下端部を切断して、打面部を中心に調整加工が見られる。６は三角形状の素材の打面部に抉入するような調整加工が表裏面に集中する。７は石鏃の片脚部と考えられる。

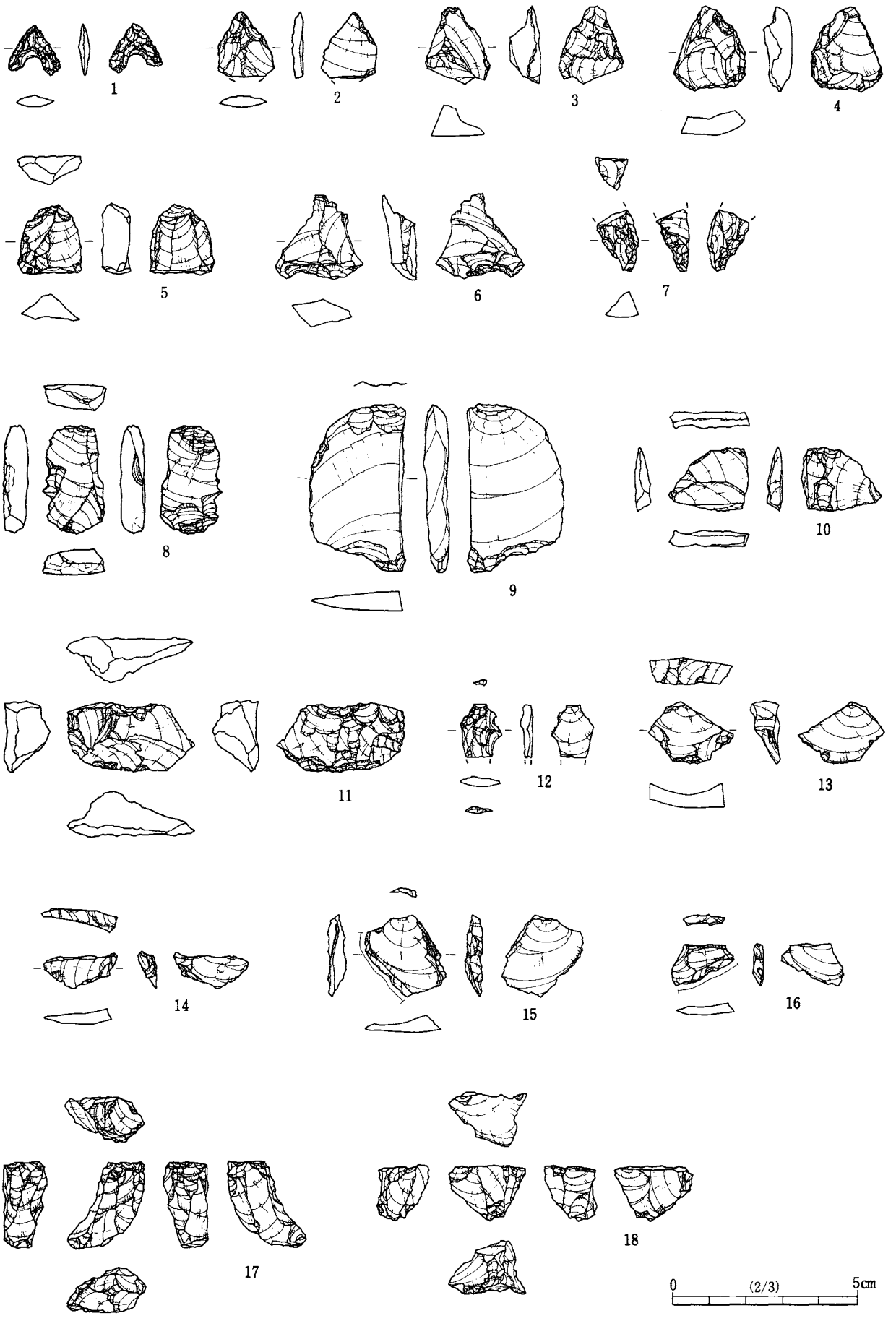
８～11は楔形石器である。８は縦長の器体の上下端部が線状となり、潰れと階段状剝離が顕著である。９は安山岩Ａ（黒色微密安山岩）を石材とする大形のもので、縦長剝片の上下端部に階段状剝離が集中する。更に下端部は抉れるような細部加工が施される。10は縦長剝片の両側縁を上下端に設定して、両極技法が行われる。上下端部には潰れがみられ、上下端部からの細長い剝離痕が看取される。11も10と同様に縦長剝片の両側縁を上下端部に設定した両極技法が見られるが、その両極技法に先行して素材の打面部と末端部を軸とする両極技法が看取される。

12～14はＲ剝片である。12は背面右側縁に鋸歯状の調整加工が見られる。13は素材の下端部に細かな調整加工が連続する。14は背面左側縁に細部加工が顕著である。15～16はＵ剝片である。15は左側縁に、16は下端部に刃こぼれ状の微細剝離痕が連続する。

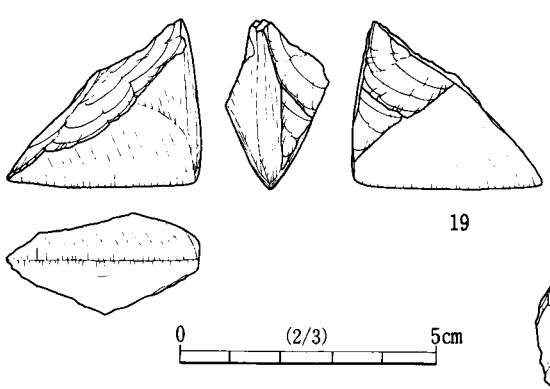
17・18は石核である。17は上面を打面として、打面を打点が巡るような剝片剝離作業が見られ、作出した剝片は小形で細長い縦長剝片が想定される。18は上面からの剝片剝離作業を基調としながら、90度の打面転移を行い、先行する作業面を打面とした剝片剝離作業も看取される。作出された剝片は小形のやや幅広な横長剝片が想定される。

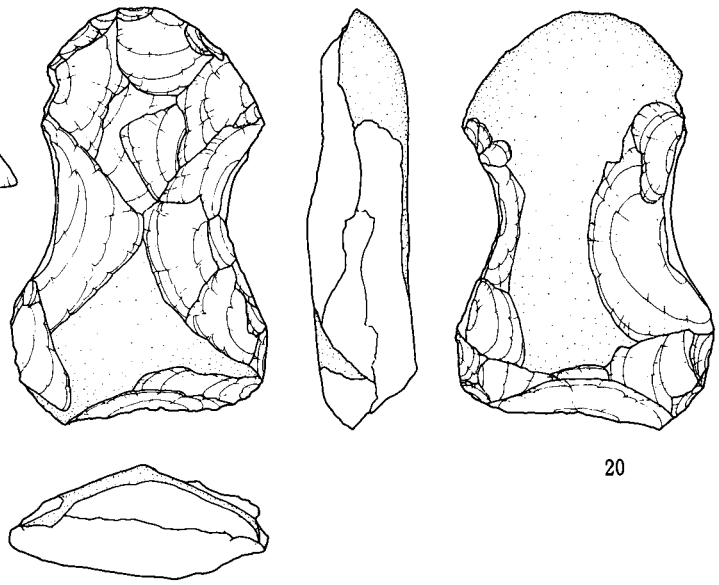
19は磨製石斧である。刃部のみの欠損品であるが、いわゆる「定角式」の磨製石斧と推定される。比較的厚味があり刃部は直線的である。

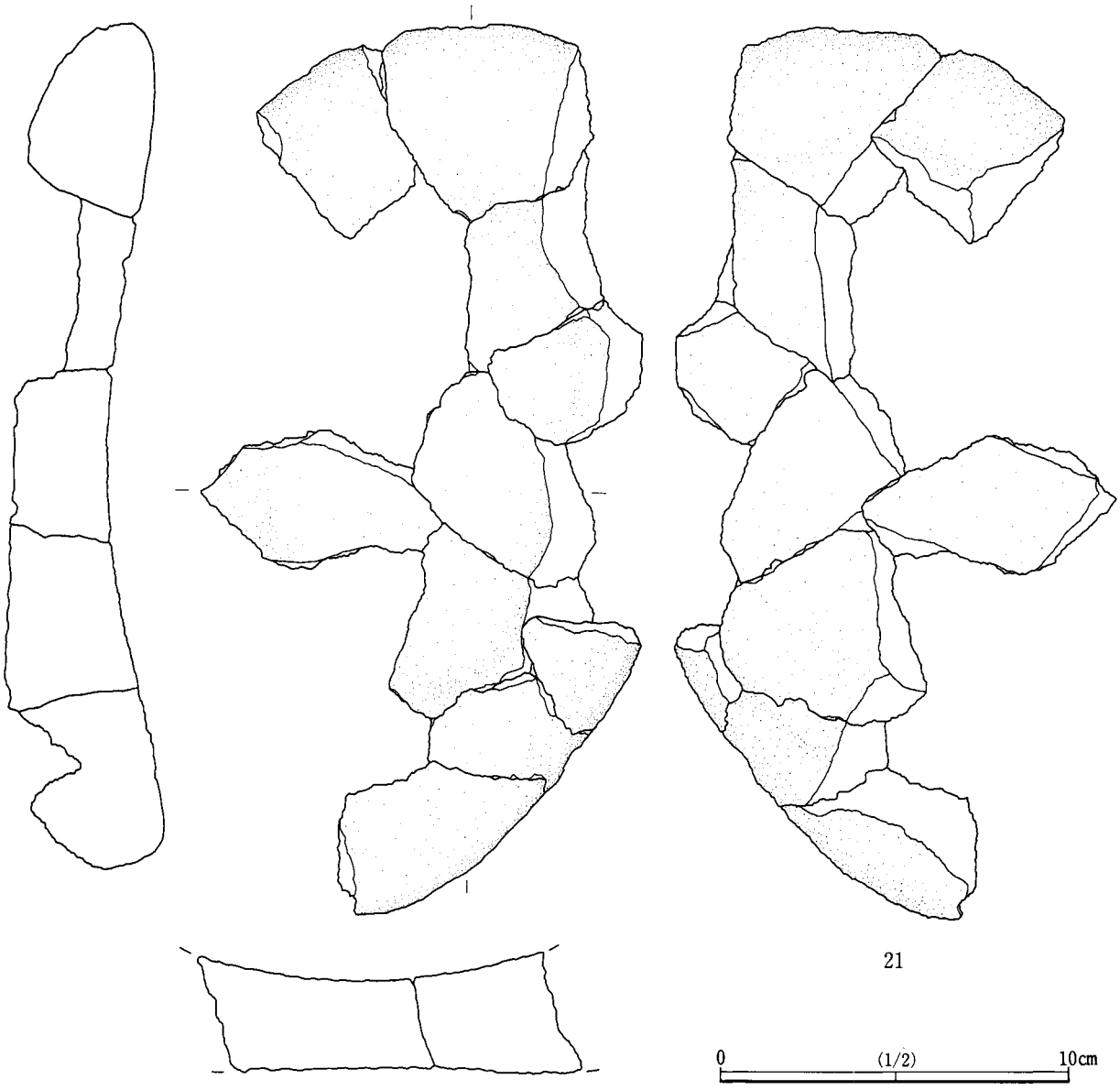
20は打製石斧である。表裏に自然面が残置し、偏平な楕円礫を素材としていることが理解される。両側



第21図　縄文時代石器（2）







第22図　縄文時代石器（3）

第3表　縄文時代石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号	No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号
1	石鏃	チャート	13.6	14.2	3.0	0.3	2B91-28	12	R剥片	黒曜石	14.0	11.3	3.2	0.3	SK1-1
2	石鏃未成品	安山岩	17.8	15.0	2.9	0.8	3B02-6	13	R剥片	黒曜石	16.4	22.9	7.6	1.8	2B81-35
3	石鏃未成品	黒曜石	20.9	17.3	8.6	1.8	2B72-5	14	R剥片	黒曜石	9.3	19.7	4.5	0.5	2B72-28
4	石鏃未成品	黒曜石	23.0	19.1	7.5	3.0	2B60-27	15	U剥片	黒曜石	21.4	22.1	4.6	1.4	2B62-7
5	石鏃未成品	黒曜石	19.0	17.3	7.6	2.1	2B61-17	16	U剥片	黒曜石	15.3	20.7	13.8	0.5	2B52-2
6	石鏃未成品	黒曜石	22.7	23.5	9.6	2.8	2B80-171	17	石核	黒曜石	23.0	20.9	13.8	4.6	2B90-3
7	石鏃	黒曜石	16.5	11.2	8.6	1.1	拡張区一括	18	石核	黒曜石	10.7	16.8	2.8	3.3	2B52-2
8	楔形石器	黒曜石	29.1	16.6	6.8	2.8	2B80-23	19	磨製石器	粘板岩	33.2	38.1	20.0	17.4	3B10-1一括
9	楔形石器	安山岩A	44.5	26.2	6.8	10.0	2B91-15	20	打製石器	粘板岩	109.1	68.2	28.2	227.3	3B10-1一括
10	楔形石器	チャート	16.7	21.4	4.2	1.8	2B70-15	21	石皿	安山岩	250.2	127.0	46.4	800.0	2B90-26他
11	楔形石器	黒曜石	18.0	34.3	12.5	5.4	2B60-15								

縁から広く抉り込むような調整加工が見られ、形状は分銅型を呈する。刃部が素材の表皮面のカーブを利用して刃部としている。下端部は刃部が直線的になり、或いは欠損した部位の再加工途中のものかもしれない。当然上端部も刃部として機能していたものと考えられる。

21は石皿である。2B－80グリッドを中心として10点が散在して検出されている。擦り面はかなり薄くなり、長期の使用が考えられる。器体は被熱しているが、10点以上に破損しているのは被熱による欠損よりは、意図的に小破片に割ったように思われる。

注1　台地・支谷等の名称は財団法人山武郡市文化財センター発行の年報No.11によった。

(財)山武郡市文化財センター　1996　『財団法人山武郡市文化財センター』

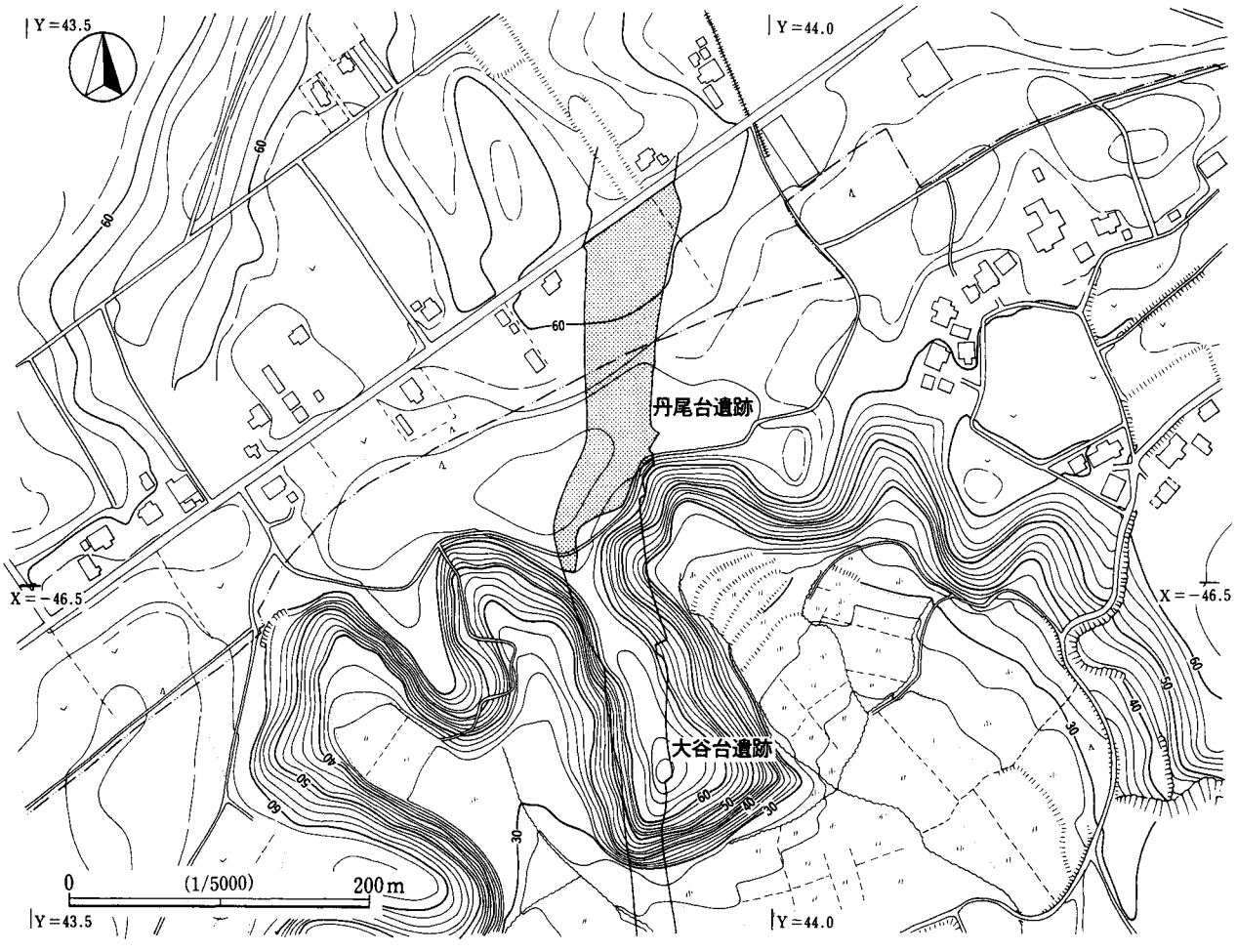
2　以前この資料について、線と線の間を削り出すことによって、線を浮かせるような製作法をとっていたと報告したことがあるが（『房総の文化財』vol.15)、訂正させていただきたい。

III　丹尾台遺跡

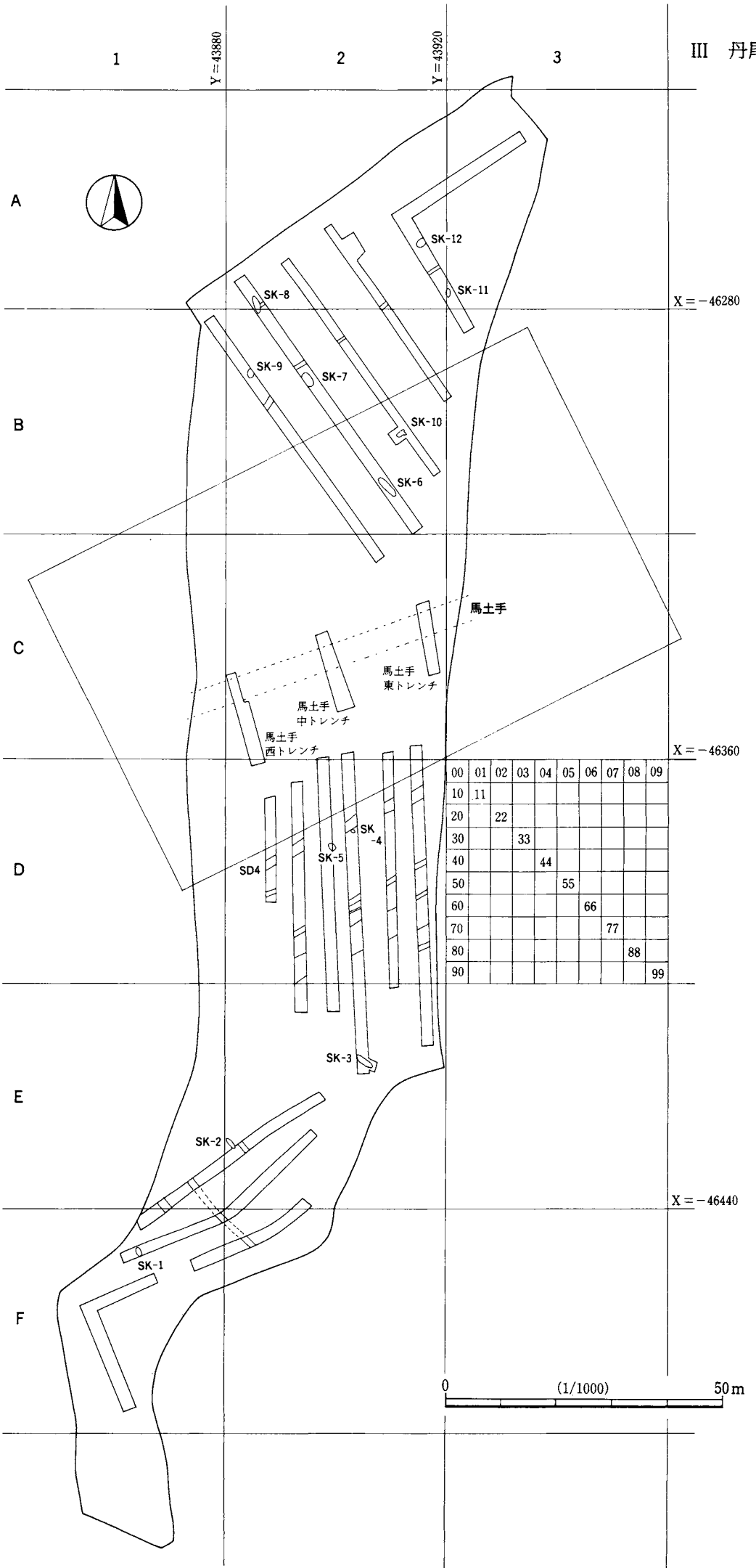
1　遺跡の概要（第23～25図）

本遺跡は、東金市滝字大山台151－1他（遺跡コード213－019）と八街市滝台字丹尾台1,727他（遺跡コード230－001）の両市にまたがり、ほぼ遺跡の中央に東金市と八街市の境界となる野馬土手・野馬堀が所在する。調査対象面積は10,017㎡で、上層遺構の確認調査をほぼ全域にわたって、約10％にあたる面積の1,062㎡で実施し、下層の旧石器の確認調査を約２％に当たる面積の204㎡で実施した。確認調査の結果、縄文時代早期の陥穴８基と野馬土手・野馬堀一条、その他に溝・シシ穴・土坑などを検出したが、遺物の出土が少なくまた遺構の分布も密度が低かったため、確認調査で検出された遺構の調査のみを実施し、拡張して本調査を実施することはしなかった。下層も旧石器類が検出されなかったので本調査を実施することはしなかった。調査期間は平成７年７月３日から平成７年10月11日までであった。

遺跡は、九十九里平野を経て太平洋に流入する真亀川の支流である北幸谷川の流域に位置し、周辺は下総台地が小河川に浸食されて樹枝状に開析されている。千葉県の下総台地は山武地区では台地南東端が九十九里平野に面し、台地上に流れを発する小河川が多く見られるが、本遺跡はその中の真亀川の支流である北幸谷川の源流部に位置している。北幸谷川の源流部は下総台地東端部の油井台南側に田中谷（北幸谷



第23図　丹尾台遺跡周辺地形図



第24図　上層調査状況・遺構等配置図

第25図　下層調査状況図

川谷）を形成し、その一支谷の丘山支谷によって丹尾支台が形成されている。本遺跡は太平洋側へ注ぐ真亀川と印旛沼へ注ぐ鹿島川との分水嶺部分に近く、その南側は一部で痩せ尾根上に細長く突出し、この痩せ尾根上に前節で取り上げた大谷台遺跡が所在する。そういう意味では前述の大谷台遺跡と本遺跡とはほぼ同一遺跡と見ることもできる。北側は標高約60mの台地平坦部が広がり、南側の丘山支谷に広がる水田の標高は約30mであるので、その間は比高約30mの急斜面となっている。

2　検出した遺構・遺物

遺構

ＳＫ－１陥穴（第26図、図版７）

本遺構は、１Ｆ－05グリッド付近に位置する。陥穴の南端部の少しが調査区域外であったので完全な形はわからなかったが、調査した範囲での規模は3.3m×0.8mで、長楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北を向く。掘り込みの深さは斜面上部から測ると約1.9mで、短軸方向からみるとＴピットとよばれる形に掘り込まれている。縦断面両端はほとんど垂直である。

ＳＫ－２陥穴（第26図、図版７）

本遺構は、２Ｅ－60グリッド付近に位置する。規模は3.9m×1.0mで、長楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はおよそ北西を向く。掘り込みの深さは約1.3mで、下側0.2mほどを垂直に掘り、その上は急角度で立ち上がるように掘り込んである。長軸右側がやや広く掘られており、下部でも袋状に広がっている。縦断面両端も袋状に掘り込んであり、下にいくほど広くなる。

ＳＫ－３陥穴（第26図、図版７）

本遺構は、２Ｅ－36グリッドに位置する。規模は3.7m×0.9mで、長楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向は北西よりやや西に傾いている。掘り込みの深さは、斜面上部から測ると最も深い部分で約1.8mある。また、短軸方向からみるとＴピットとよばれる形に掘り込まれている。縦断面両端はほとんど垂直であるが、北西部の斜面上部だけは下を袋状に掘り込んである。

ＳＫ－４陥穴（第27図）

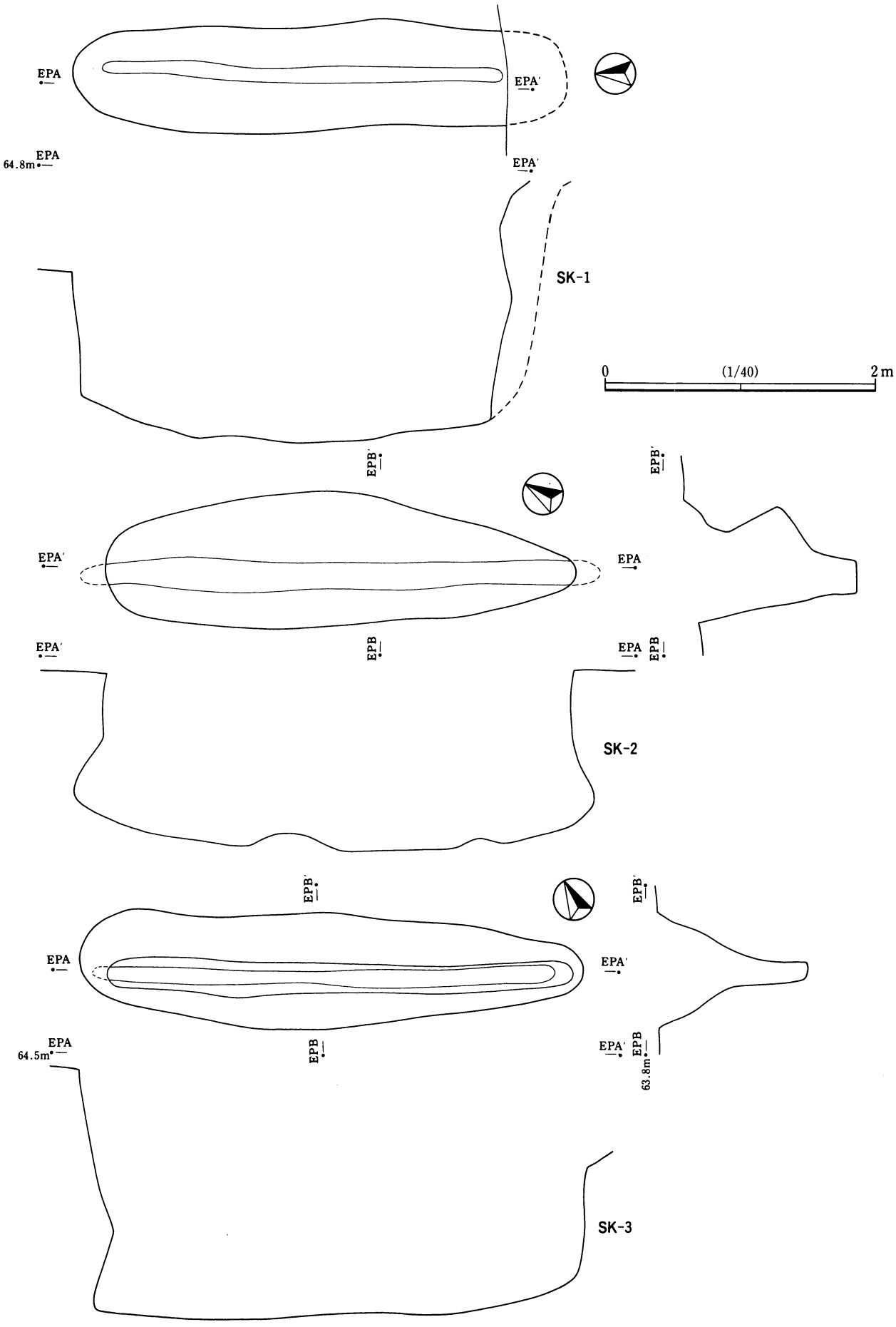
本遺構は、２Ｄ－35グリッド付近に位置する。規模は1.8m×1.4mの楕円形で底面は隅丸長方形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北西を向く。掘り込みの深さは約2.3mで、短軸方向からみると、幅は広いがＴピットとよばれる形に掘り込まれている。縦断面両端はほとんど垂直である。土層断面の観察の結果、大きさの異なるローム粒が何層にもわたり見られ、人為的な埋め戻しが考えられる。

ＳＫ－５陥穴（第27図）

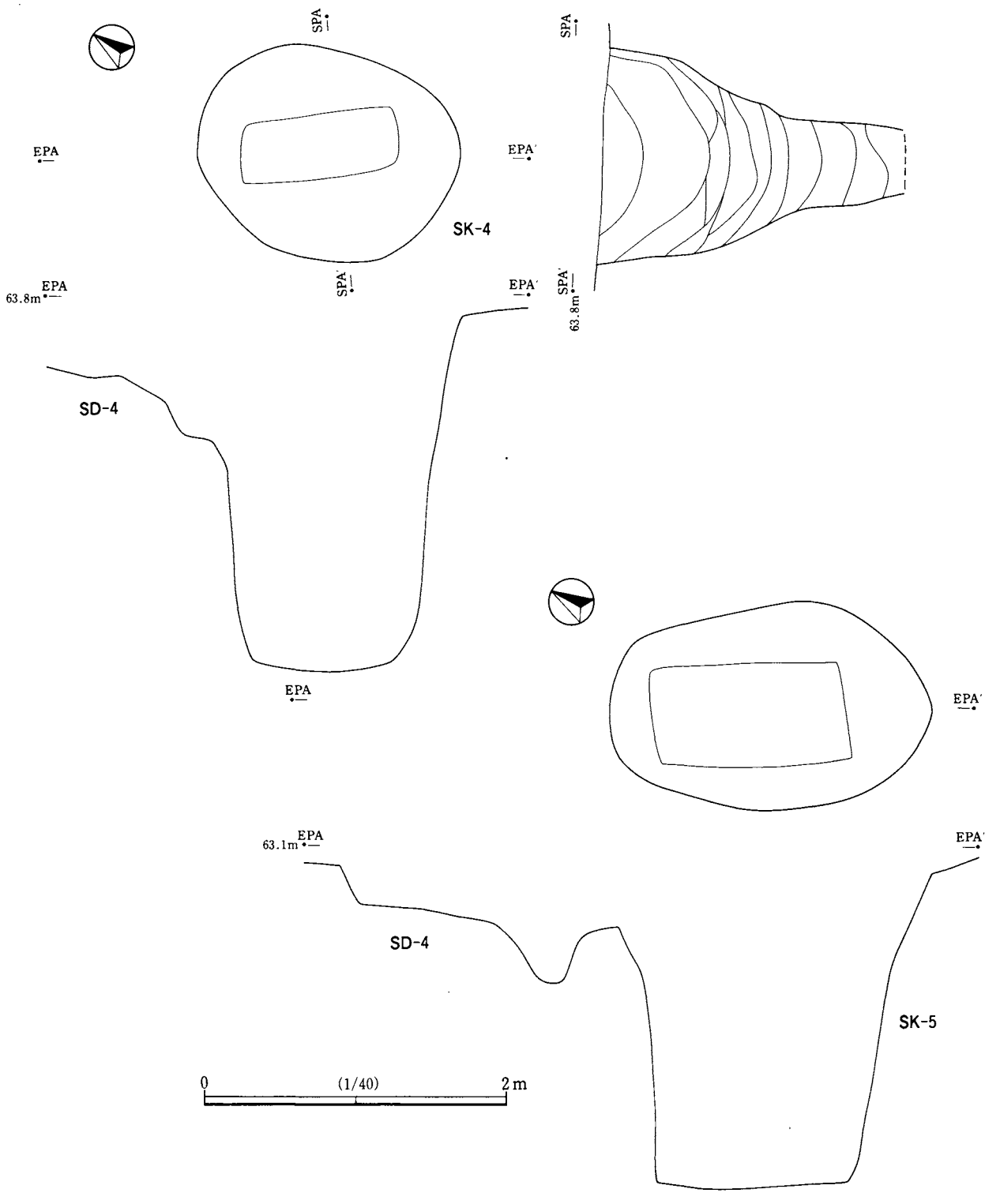
本遺構は、２Ｄ－34グリッドに位置する。規模は2.1m×1.4mの楕円形で、底面は隅丸長方形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。ＳＫ－４は３mほど離れた北東に位置し、並び方と形が酷似している。長軸方向はほぼ北西を向き、掘り込みの深さは約2.1mである。短軸方向からみるとＴピットとよばれる形に掘り込まれているが、形の割に幅は広い。縦断面両端はほとんど垂直である。

ＳＫ－６陥穴（旧遺構番号　230－001　SK－1）（第28図）

本遺構は、２Ｂ－77グリッド付近に位置する。規模は3.8m×0.7mの長楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北西を向く。掘り込みの深さは約0.8mで浅いものの、短軸方向からみるとＴピットとよばれる形に掘り込まれている。縦断面は急角度に掘り込まれ、底面は中程にいくほど丸く



第26図　土坑等（1）

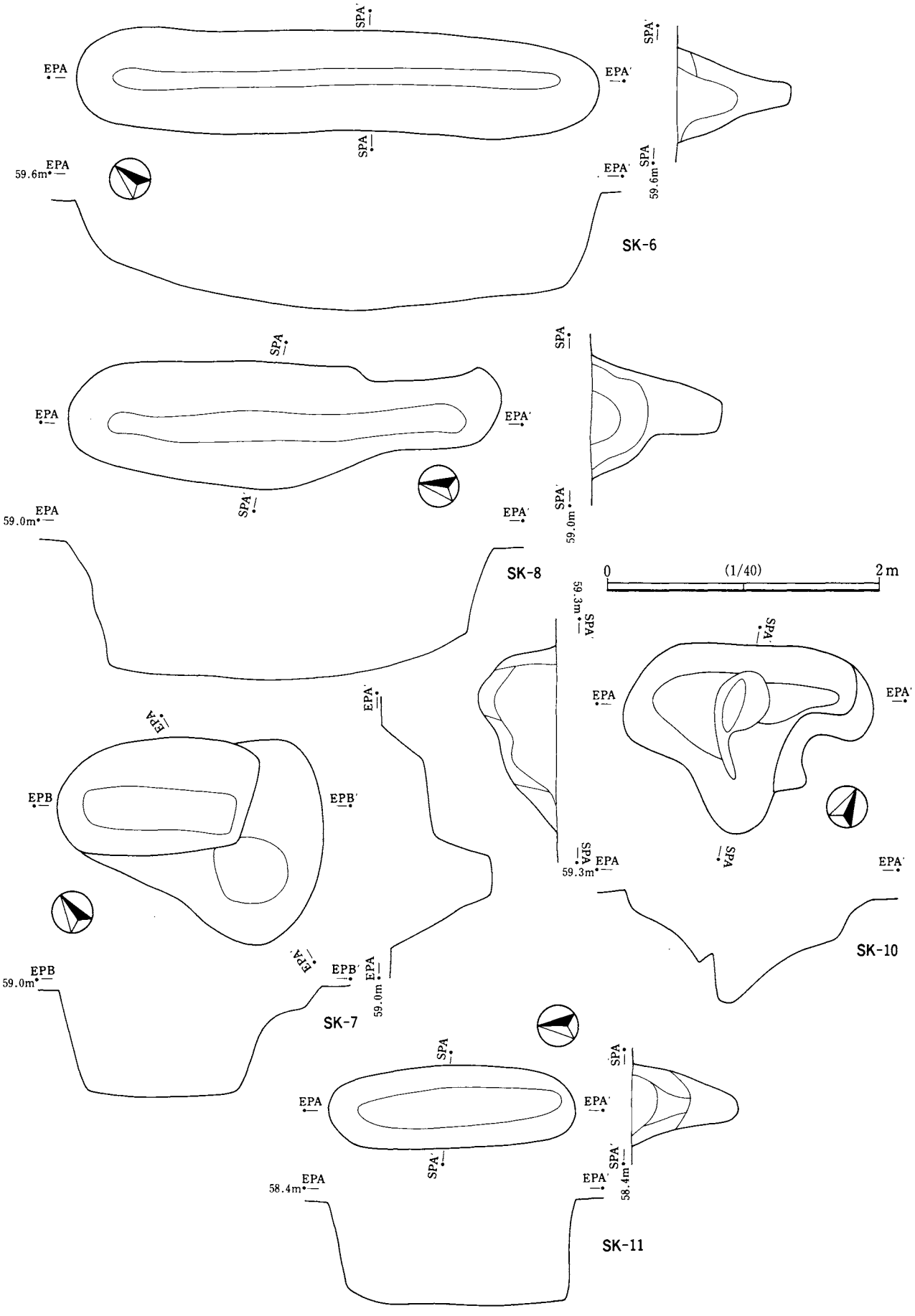


第27図　土坑等（2）

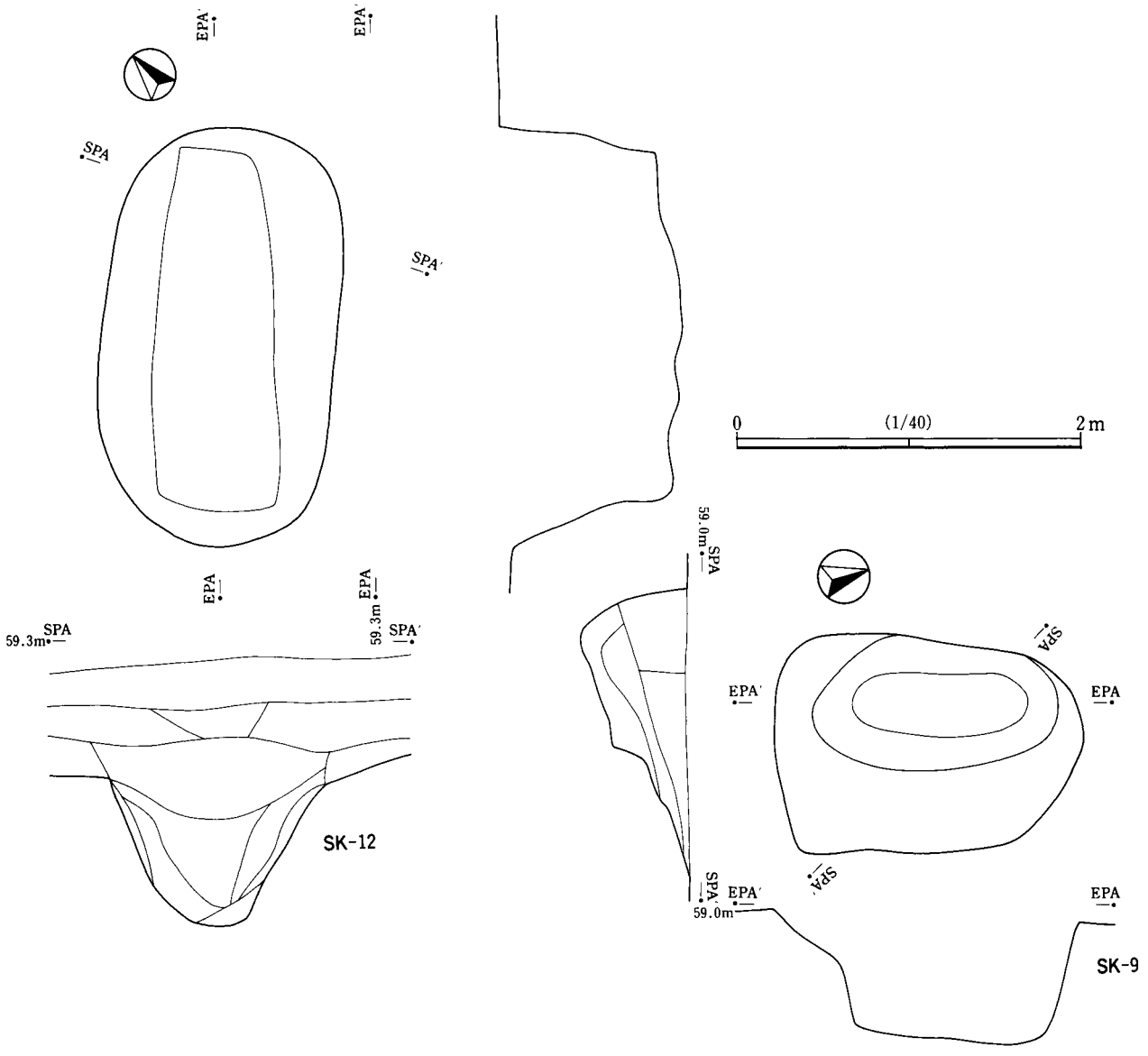
掘りくぼめられている。

ＳＫ－７土坑（旧遺構番号　230－001　SK－２）（第28図）

本遺構は、２Ｂ－33グリッド付近に位置する。規模は2.0m×1.5mで不整形であるが、1.4m×0.9mの隅丸長方形の陥穴状の土坑の南側に、深さ約0.3mの楕円形の土坑が重なったものということもできる。土層断面の観察によると、楕円形の土坑が掘られてから陥穴状の土坑が掘られたことがわかる。陥穴状の土



第28図　土坑等（3）



第29図　土坑等（4）

坑についてみてみると、長軸方向はほぼ北西を向き、掘り込みの深さは約0.8mである。縦断面は急角度に掘り込まれている。

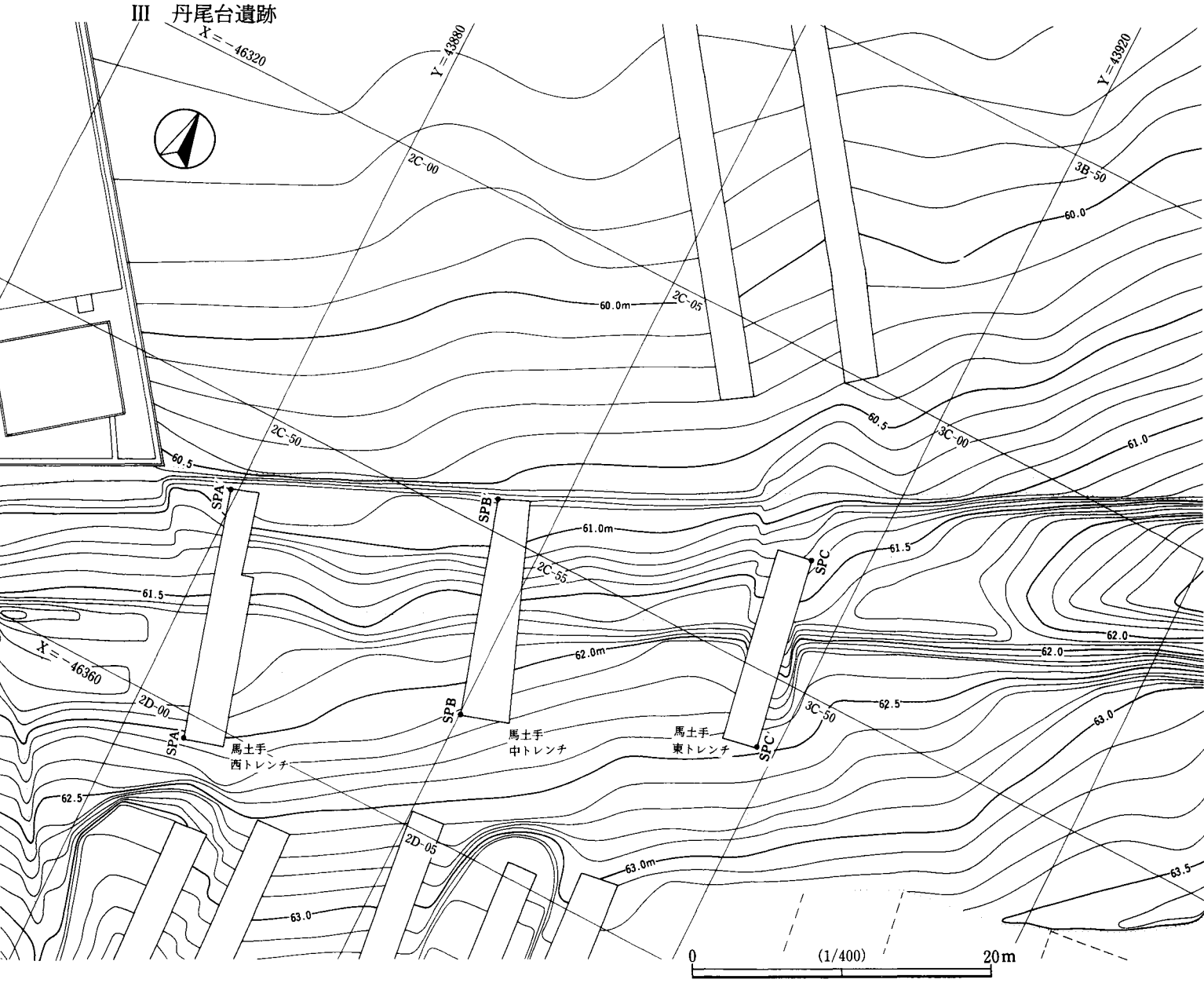
ＳＫ－８陥穴（旧遺構番号　230－001　SK－３）（第28図）

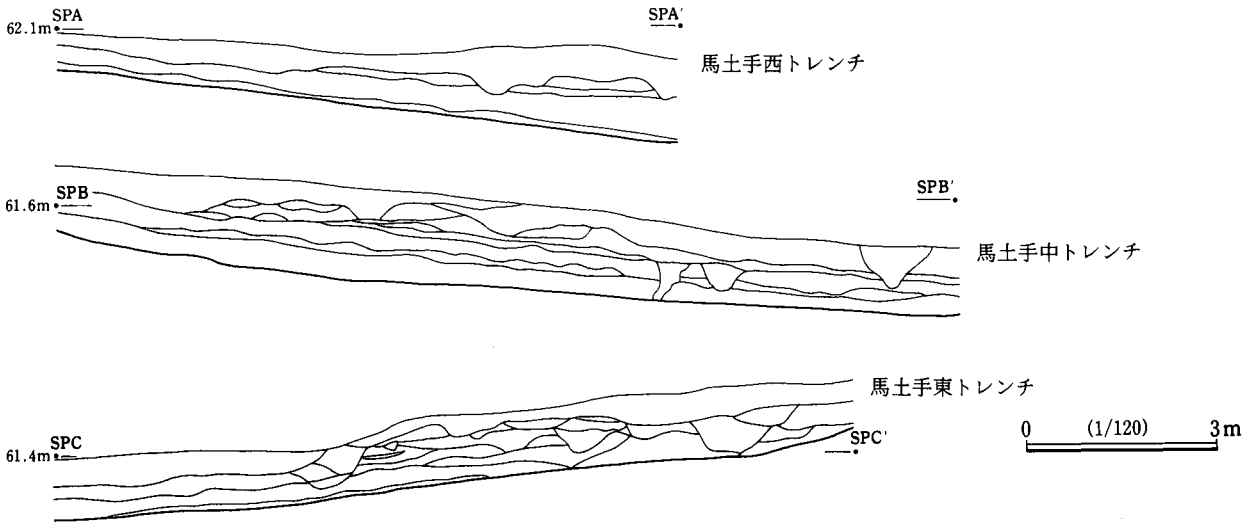
本遺構は、２Ｂ－01グリッド付近に位置する。規模は3.2m×0.9mで、長楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北を向く。掘り込みの深さは約１mで、陥穴としては深くないものの、短軸方向からみるとＴピットとよばれる形に掘り込まれている。縦断面は急角度に掘り込まれており、底面は中央にいくほど少し深く掘られている。

ＳＫ－９土坑（旧遺構番号　230－001　SK－４）（第29図）

本遺構は、２Ｂ－31グリッド付近に位置する。規模は1.8m×1.2mで、楕円形を呈する。長軸方向はほぼ北を向く。掘り込みの深さは約0.7mで、縦断面をみると北側は急角度に、南側は上半分をやや緩やかに掘り込んである。また長軸方向東側の掘りかたが広く緩やかになっており、西側の急角度な掘り方と異なっているが、これは土層断面の観察より始めから何らかの意図を持って掘られたものとみられる。

ＳＫ－１０土坑（旧遺構番号　230－001　SK－５）（第28図）





第30図　馬土手

本遺構は、２Ｂ－47グリッドに位置する。規模は1.8m×1.4mで、不整形を呈する。掘り込みの深さは最大で約0.85mで、掘り込みの形も不整形である。土層断面の観察より、本遺構は何回か掘り直されたも

のとみられる。

ＳＫ－１１陥穴（旧遺構番号　230－001　SK－６）（第28図）

本遺構は、３Ａ－90グリッドに位置する。規模は1.8m×0.6mで、長楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北を向き、掘り込みの深さは約0.7mである。短軸方向からみると掘り込みは急角度で、縦断面から見るとほとんど垂直であり、底面は平坦になっている。

ＳＫ－１２土坑（旧遺構番号　230－001　SK－７）（第29図）

本遺構は、３Ａ－68グリッドに位置する。規模は2.4m×1.4mで、楕円形を呈する。掘り込みの深さは約1.1mで、縦断面からみるとほとんど垂直に掘り込まれ底面も平坦である。しかし、土層断面をみると本遺構は何度か掘り返されていることがわかるものの、いずれも形からみて陥穴とはいいがたいところがある。

馬土手（第30図、図版６）

本遺構は、調査区のほぼ中央を東西方向に横切り、ちょうど東金市と八街市との境界の部分に位置している。東金市の埋蔵文化財分布地図で東還峠の馬土手とされている土手がこれであろう。この馬土手は江戸時代の佐倉七牧の内の小間子牧の南端部を区画する土手の一部とされており、この土手は調査区内だけでなく、更に遺跡の外側にも延びており両市の境界を形成している。この境界は台地上の分水嶺とほぼ同じ線をたどり、それがそのまま市の境界となったものと思われる。

地形的には南から北へなだらかに傾斜している台地上で、現状ではほんのわずか地面が盛り上がり土手を形成しているだけであるが、本来はもっと高く盛土されて土手を形成していたと見られる。土手は幅６ｍ～７ｍ、高さは約0.3m程度でほとんど平坦である。土手の両側の基底部にあたる斜面の一部が遺存しているのみで、土手の盛土部分はほとんど削平されてしまったのであろう。土層断面をみても盛土の基底部にあたるであろうブロック状の土層が確認はされたが、盛土として遺存しているのは高さ0.2mほどの分しかなく、土手としては非常に遺存が悪い。断面観察によると盛土両側には浅い溝が両側に掘り込まれていたらしく、幅約１ｍ、深さ0.5mほどの埋まった溝跡が認められ、埋め戻しの際には土手の盛土を用いて埋めてしまったようである。調査区内では東側の方が土手・溝の遺存がよく、西側では非常に遺存が悪く土手の痕跡もほとんど確認できなかった。

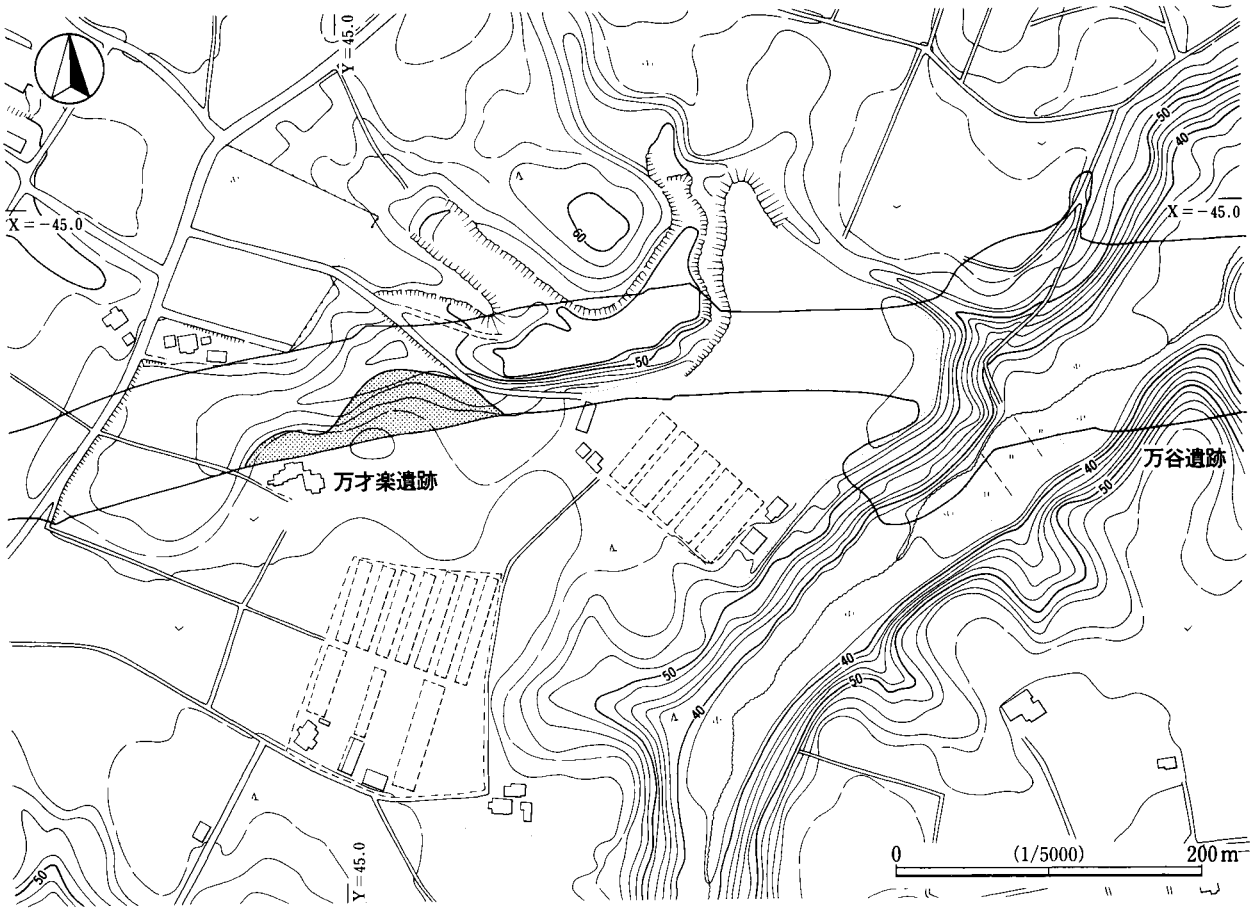
遺物は出土しなかった。

Ⅳ　万才楽遺跡

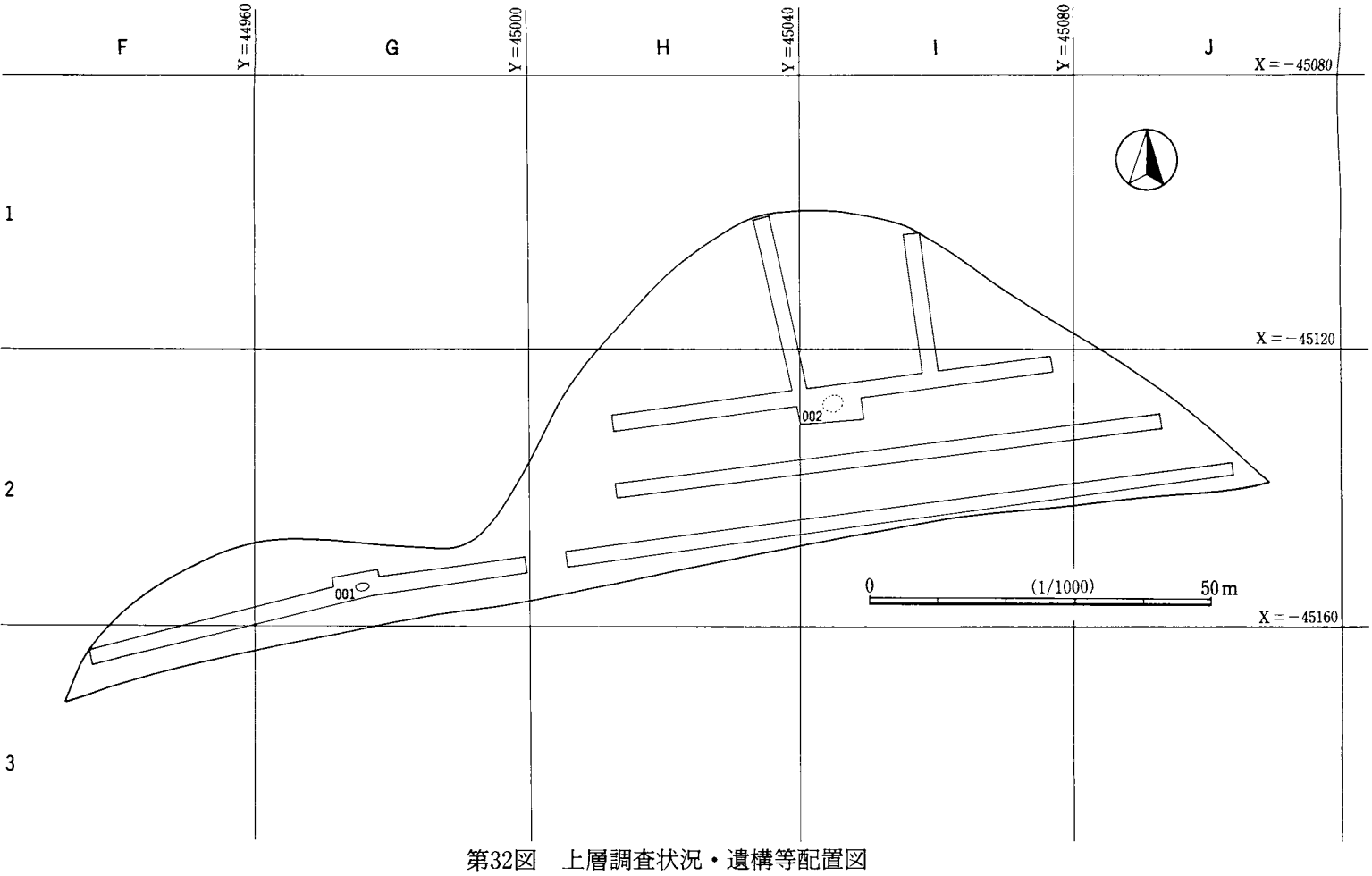
1　遺跡の概要（第31～33図、図版８）

本遺跡は、東金市滝沢字高見塚620－1他に位置する。調査対象面積は3,850㎡で、上層の確認調査を452㎡の面積で実施し、下層の確認調査を80㎡の面積で実施した。上層の確認調査の結果、縄文時代早期の陥穴１基と、縄文時代早期の遺物集中地点が１か所検出されたが、分布の密度も低く両遺構とも周辺に広く拡散している状態ではなかったので一部分の拡張によって調査を終了した。また、確認面上で奈良・平安時代の土師器・須恵器の散布を検出したが、遺構は確認できなかった。下層の旧石器包含層の確認調査も遺跡範囲にグリッドを設けて行ったが、遺物等は検出されなかった。調査期間は平成６年７月８日から平成６年８月18日までであった。

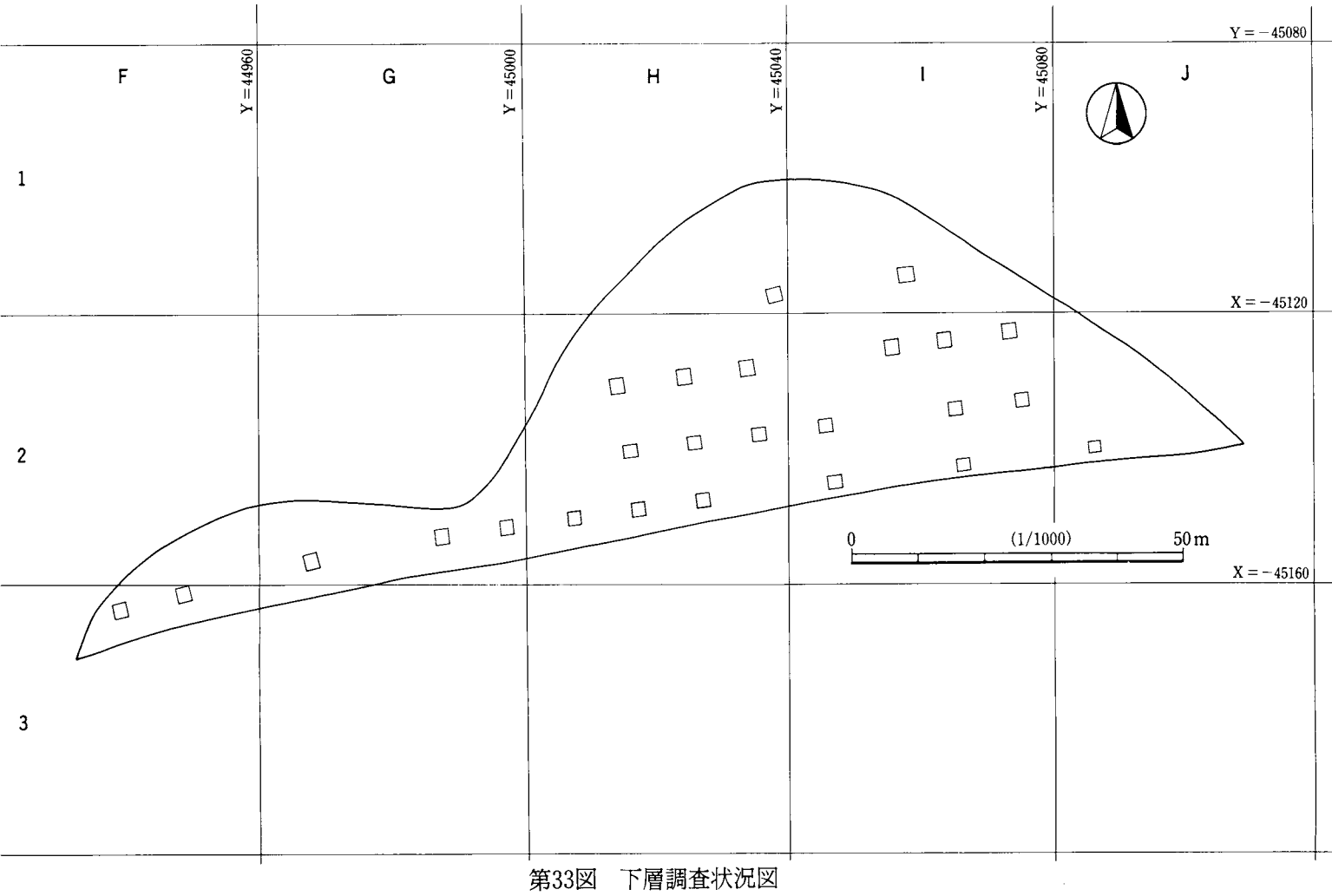
遺跡は、下総台地の東端で九十九里平野との境に位置する油井台に北側から入り込んだ真亀川の上流部、十文字川に開析された十文字谷の最奥部滝沢支谷の南側に位置し、油井台の北側から平坦部に深く樹枝状に入り込んだ浸食谷の奥深くにある滝支台の北側に位置している。遺跡全体のなかで、今回の調査範囲は最北端に位置している。そのため、遺跡の北部はすぐに斜面になっている。標高は約57mを測り、北側に入り込んでいる谷にある水田は標高34mであるので、その間は比高差23mで緩斜面となっている。なお、次節に述べる万谷遺跡は、この滝沢支谷のさらに分かれた谷をはさんだすぐ東側に位置しており、さらに続いて東側に新堀遺跡、市谷遺跡、油谷遺跡とつながって位置している。



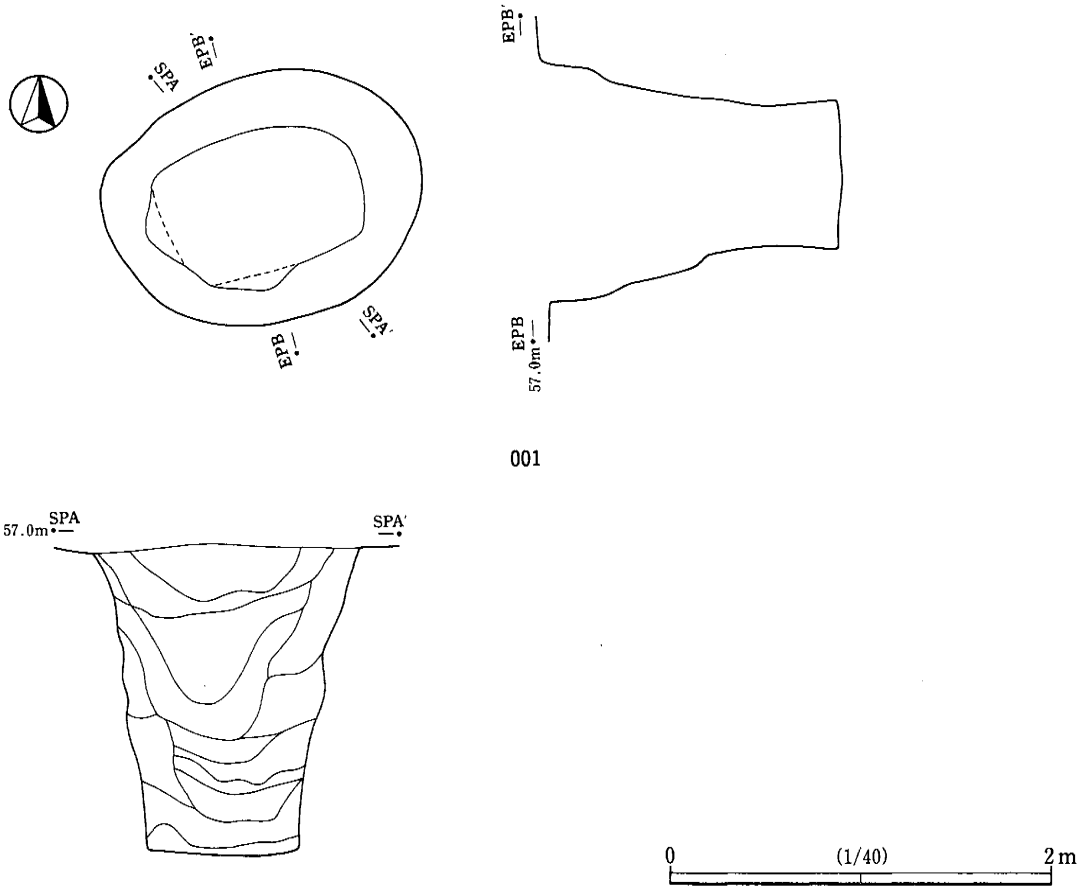
第31図　万才楽遺跡周辺地形図



第32図　上層調査状況・遺構等配置図



第33図　下層調査状況図


SPA
SPA'
EPB
EPB'
EPB
57.0m
001
SPA
57.0m
SPA'
0
(1/40)
2m
EPA'
EPA'
EPB'
EPB
EPA
EPA
56.9m
EPB
56.9m
EPB'
002

第34図　土坑等

2　検出した遺構・遺物

遺構

００１陥穴（第34図）

本遺構は、２Ｇ－83グリッドに位置する。規模は1.7m×1.3mで、楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向は西からやや南に傾いている。掘り込みの深さは約1.6mである。縦断面からみると掘り込みは急角度で、底面は楕円形を呈し平坦である。また底面直上から陥穴特有の黒色土を確認することができた。

００２土坑（第34図、図版８）

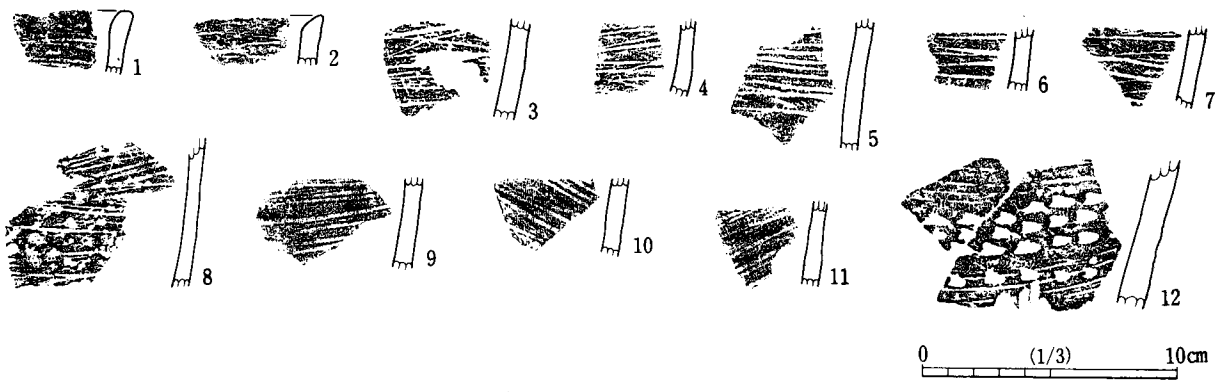
本遺構は、２Ｉ－11グリッド付近に位置する。規模は2.8m×2.9mで、円形を呈する。遺構内より縄文時代早期の土器を検出したので当初は住居跡として調査したが、表土が浅くしかも耕作による攪乱もみられたため残りが悪く、住居跡とは判断し難い。遺構の北半分は、約0.1mの深さで本遺跡外にまで広い範囲にわたって段差となり低くなっている。遺構の残りのよい南半分は約0.1mほど掘り込まれて、床面様の底面部は平坦になっている。

遺物

縄文土器（第35図、図版51）

全部で20点強出土している。すべてグリッド出土で遺構出土のものはない。

１～11はいずれも前期後半に属するもので、横方向の沈線が施されるものである。色調は異なるものの胎土はいずれも雲母片を若干含み、やや粒子の粗い砂っぽい土で、同一個体かと思えるほど似ている。１、２は口縁部である。いずれも内そぎ状を呈するが、とくに２はかなり顕著にそがれている。３～11は胴部破片である。12は他の遺物とは様相が異なり、胎土はキメが細かく雲母片の混入も少ない。文様も横方向の沈線の他に、棒状工具による斜め方向の刺突が４列にわたって施される。



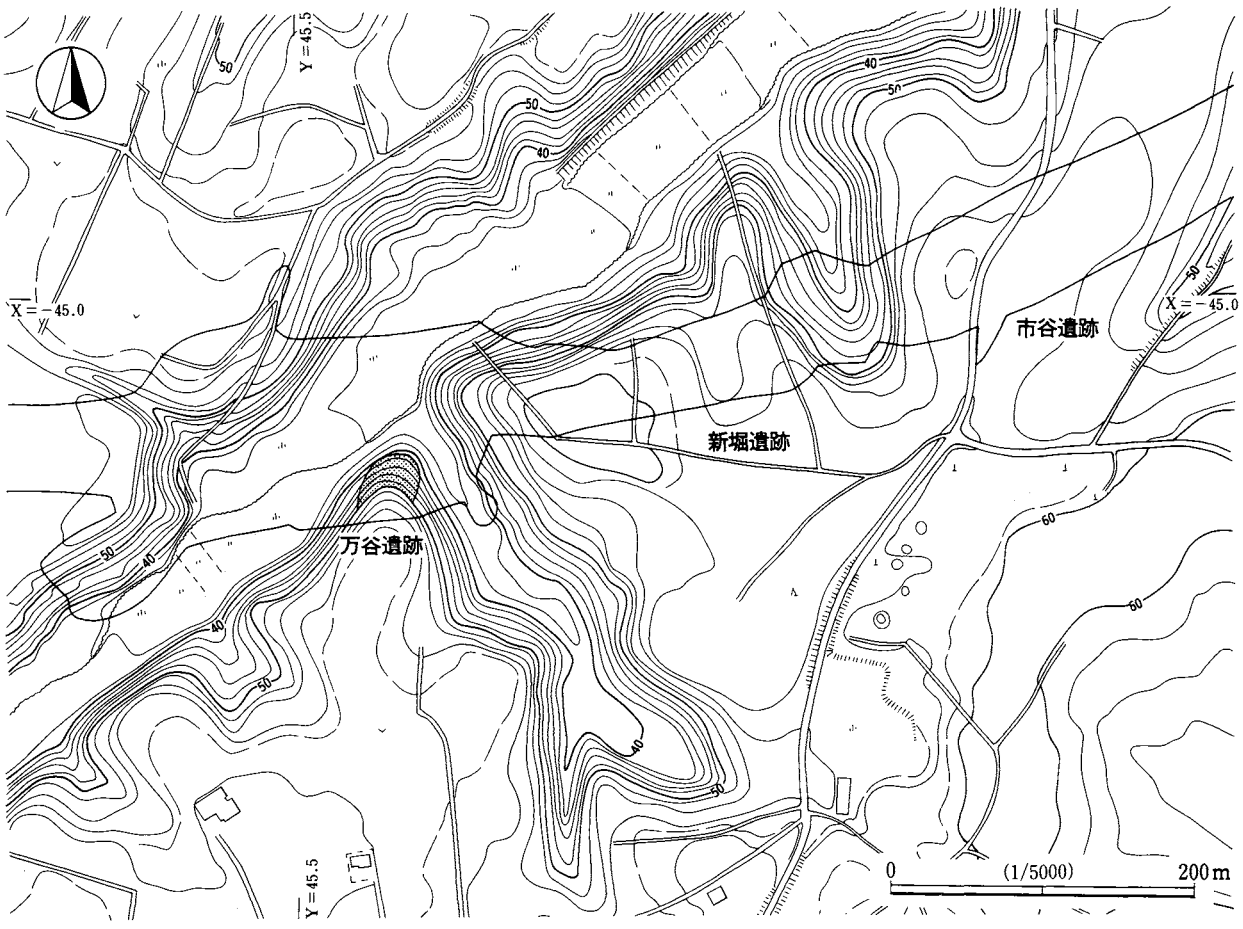
第35図　縄文土器

Ⅴ　万谷遺跡

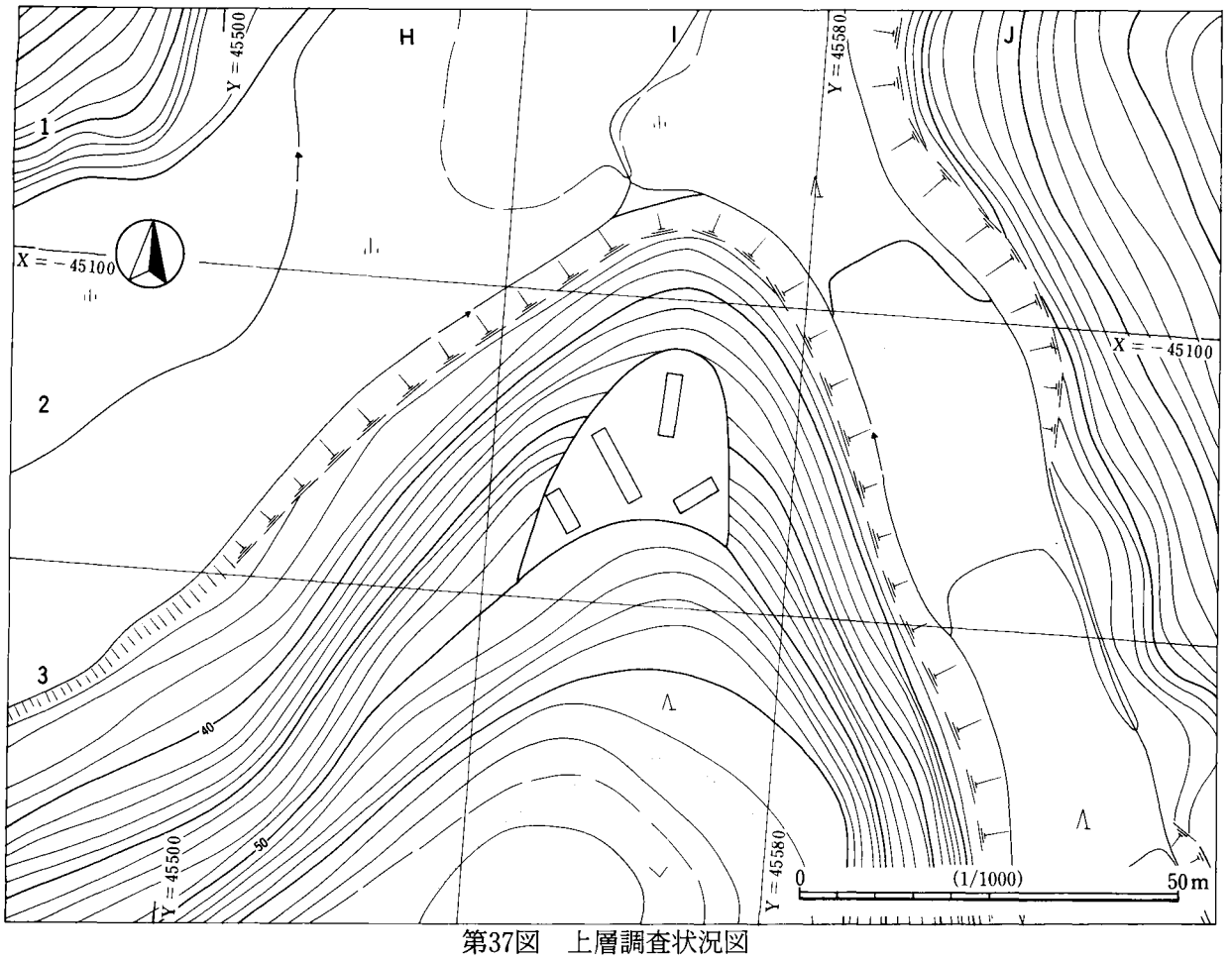
1　遺跡の概要（第36～38図、図版８）

本遺跡は、東金市滝沢字清水田559－1他に位置する。調査対象面積は600㎡で上層遺構の確認調査をほぼ全域にわたって10％の面積にあたる60㎡で実施し、下層の旧石器の確認調査を２％の面積にあたる12㎡で実施した。斜面に対して直角方向になるようにトレンチを４本設定し確認調査を行った結果、本遺跡はローム層の上にローム粒および褐色土粒が混じって堆積していることがわかった。人為的なものかと考えられたので精査したが、地形造成を行った痕跡が認められず遺構も検出されなかった。確認面上にごく少量の奈良・平安時代の土師器・須恵器が散布していただけであった。また、下層の確認調査でも石器類を検出することができなかった。そのため本調査は不要と判断された。調査期間は平成６年６月６日から平成６年６月15日までであった。

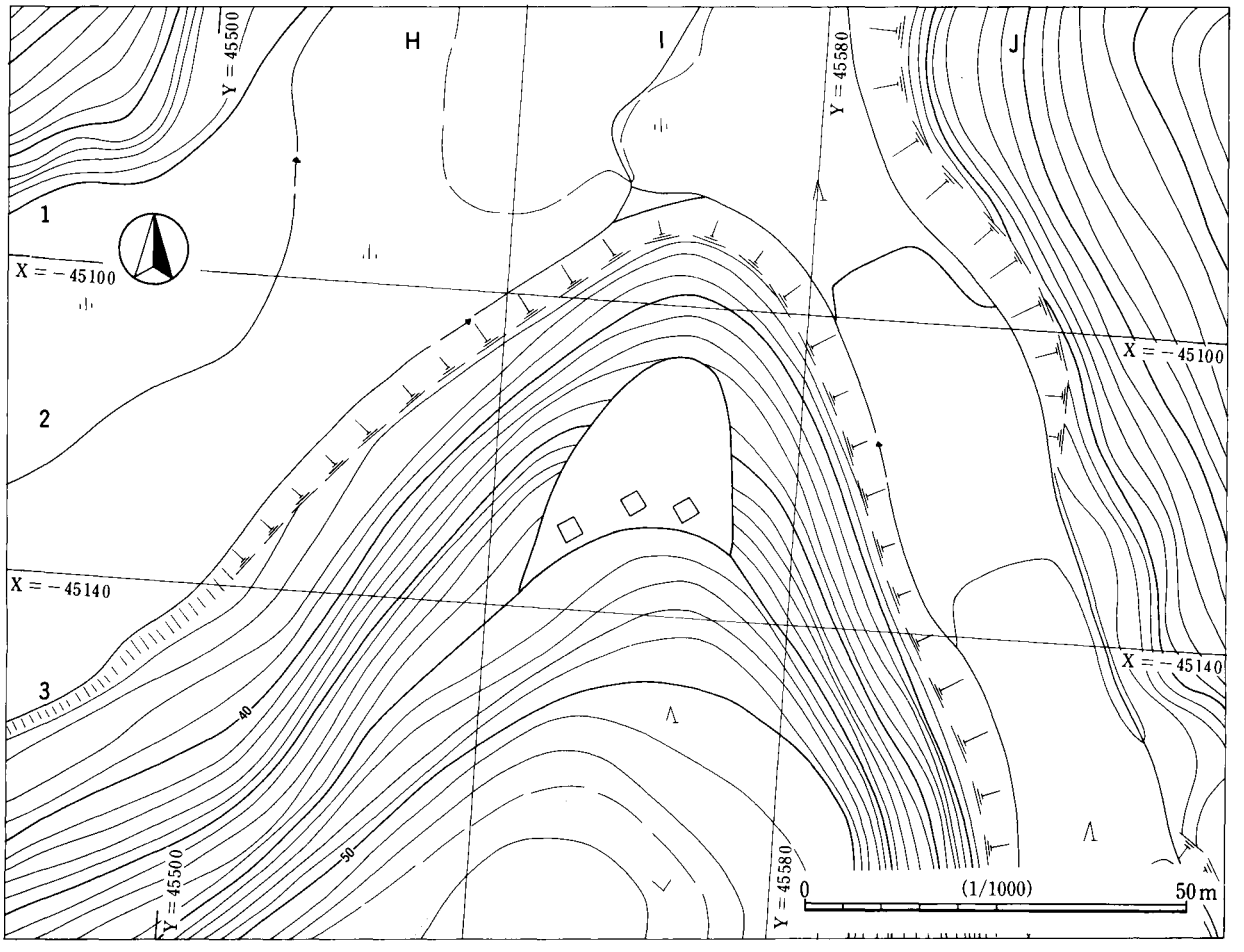
遺跡は、九十九里地域の海岸平野を経て太平洋に流れ込む真亀川の上流部、十文字川に開析された十文字谷の最奥部、滝沢支谷の南側に位置し、下総台地の東端にあたる油井台の最北端に位置する滝支台の突出部となっている。また、本遺跡は東金市の滝沢遺跡の北端に隣接しており、この滝沢遺跡は八街市の滝台遺跡とつながっている。滝台遺跡は「山邊郡印」が発見された遺跡であり、本遺跡はこのような遺跡と隣接して位置しているものの、それらと関連するような遺物・遺構の検出はなかった。今回の調査範囲は、



第36図　万谷遺跡周辺地形図



第37図　上層調査状況図



第38図　下層調査状況図

台地北端で、標高49mの緩斜面となっている。北側の谷は標高35mの荒蕪地となっており、比高14mを測る。今回の調査成果が台地上の遺跡の価値を低くするものとは考えられず、台地上平坦部の調査の際には十分な注意を払う必要があるだろう。

2　検出した遺構・遺物

検出した遺構はなく、出土遺物も土師器・須恵器がごく少量出土したのみで図示できる様なものはなかった。

VI　新堀遺跡

1　遺跡の概要（第39～41図、図版９）

本遺跡は、東金市滝沢字新堀546－1に位置する。調査対象面積は10,000㎡で上層の確認調査を行ったところ縄文時代早期の陥穴７基と奈良・平安時代の竪穴住居跡３軒、そして同時代の井戸２基を検出した。縄文時代の陥穴は集中して確認され、陥穴の集中地点である可能性が考えられ、また竪穴住居跡の確認された周辺は地形的に見ても、さらに奈良・平安時代の住居跡などの遺構が存在する可能性が高いと考えられたため、この２地点の周囲に本調査範囲を広げて精査した。その結果、陥穴がさらに４基検出され、縄文時代早期の陥穴は計11基となった。竪穴住居跡もさらに１軒検出され、奈良・平安時代の竪穴住居跡は計４軒となった。下層の確認調査では、石器類を検出することができなかった。そのため本調査は不要と判断された。調査期間は平成６年４月１日から平成６年７月８日までであった。

遺跡は、九十九里地域の海岸平野を経て太平洋に流れ込む真亀川の上流部、十文字川に開析された十文字谷の最奥部滝沢支谷の南側に位置し、下総台地の東端にあたる油井台の最北端に位置する滝支台の突出部となっている。前述の万谷遺跡のすぐ東隣りに位置するが、間に滝沢支谷のさらに枝分かれした谷が北西から南東に入り込み急斜面となっている。また、遺跡の南東には隣接して滝沢古墳群が位置している。本遺跡の中で今回の調査範囲は北部にあたり、すぐ北、東、西は斜面となっている。標高は54～57mで、谷部の水田との比高は約20mを測る。

2　検出した遺構・遺物

遺構

００１井戸（第43図、図版12）

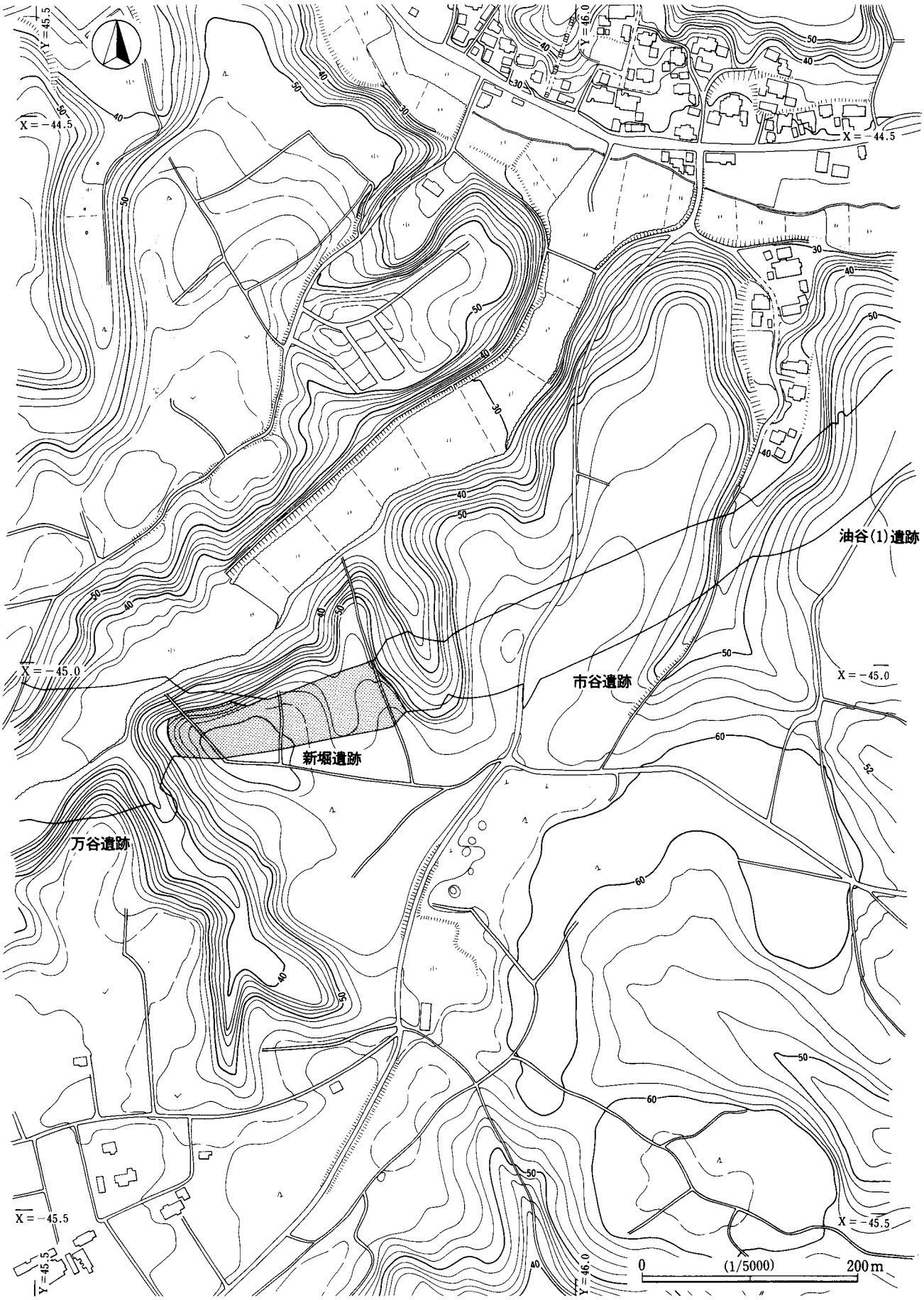
本遺構は、５Ｄ－16グリッド付近に位置する。規模は3.5m×2.3mで楕円形を呈し、掘り込みの深さは約2.8mである。１mほど掘り下げられたあと袋状に広がっており、ふくらみは最大0.5mを測る。これは遺構内の土層観察より壁面の崩落と考えられる。底面は白黄色粘土層で、土層のしまりから地山であると判断されたため、本遺構は井戸として使用されたとみられる。調査時点では、地下水の湧出はなかった。

００４陥穴（第44図、図版12）

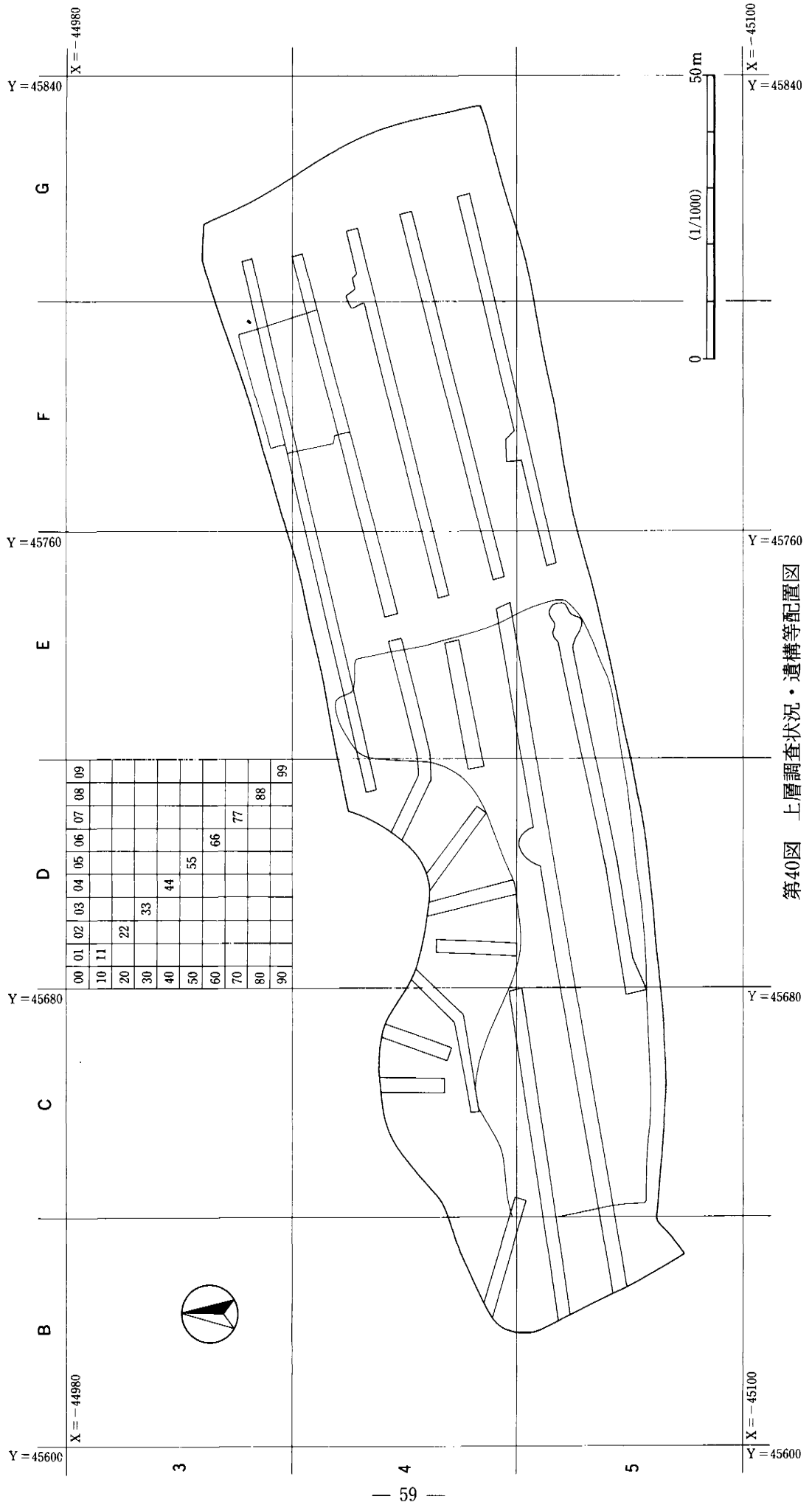
本遺構は、３Ｆ－96グリッドに位置する。規模は1.4m×0.6mで、隅丸長方形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北を向き、掘り込みの深さは約0.6mである。底面も1.2m×0.4mの隅丸長方形を呈し、地表から底面に向けて急角度に掘り込まれている。本遺構付近には、００５陥穴、００６陥穴と陥穴が５m以内に３基近接して位置し、そのうち００６陥穴とは形や向きが酷似している。

００５陥穴（第44図、図版12）

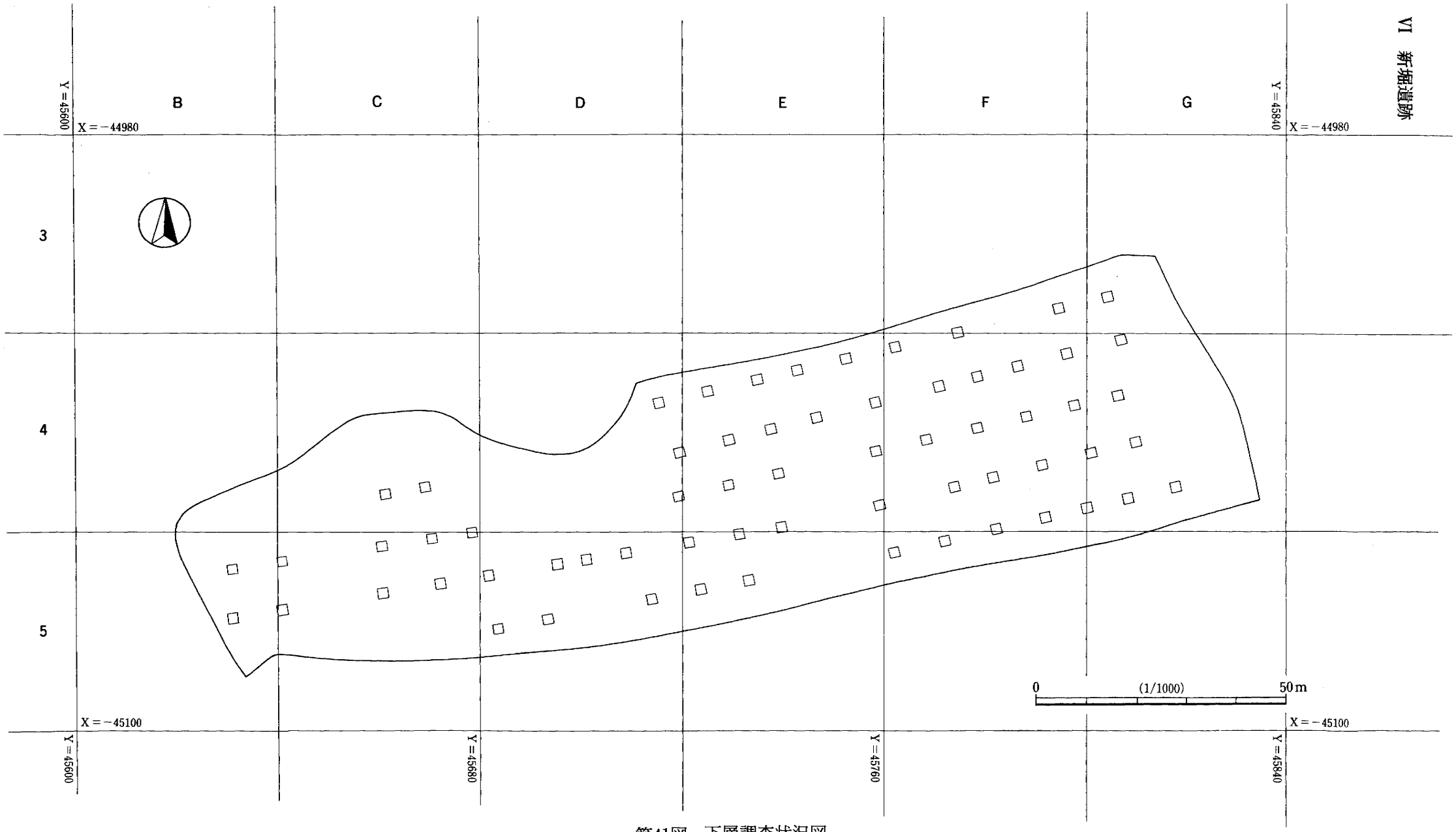
本遺構は、３Ｆ－95グリッドに位置する。規模は1.3m×0.8mで、楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北東を向き、掘り込みの深さは約１mである。底面の中心部に、小ピットが一つあり直径0.2m、深さ0.7mをはかる。底面の形状は0.8m×0.3mの隅丸長方形を呈し、地表から底面に向けて急角度に掘り込まれている。



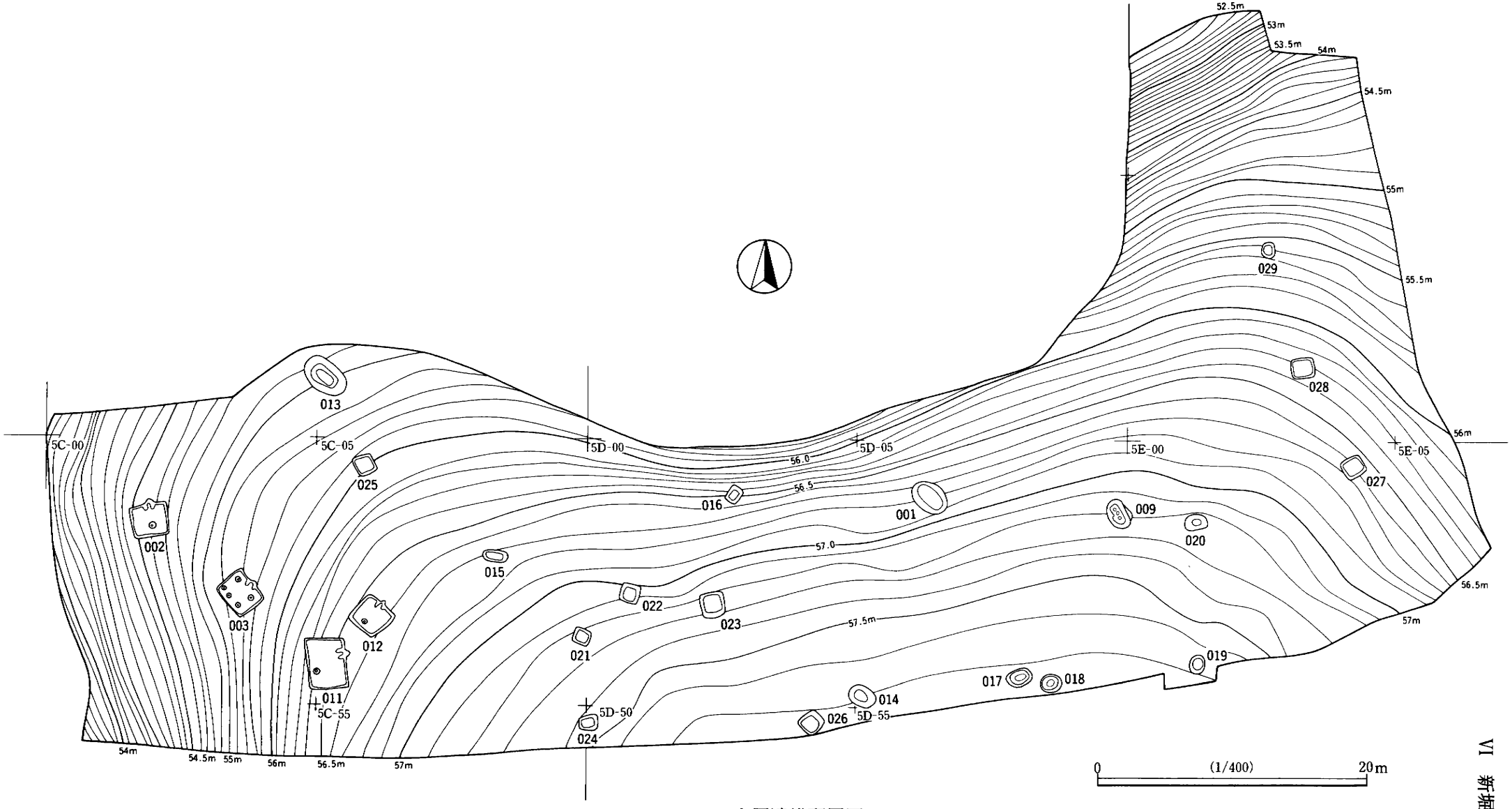
第39図　新堀遺跡周辺地形図



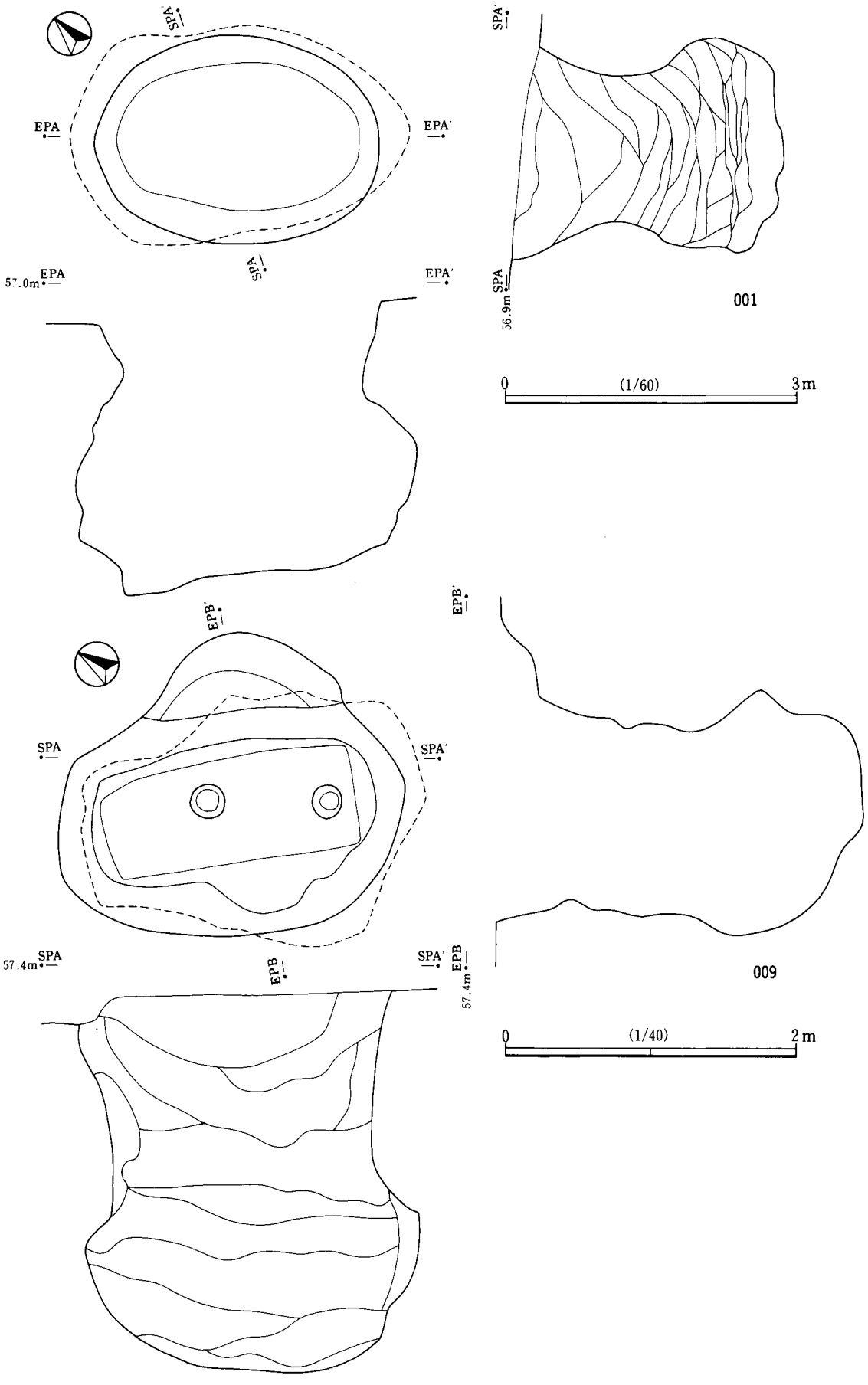
第40図　上層調査状況・遺構等配置図



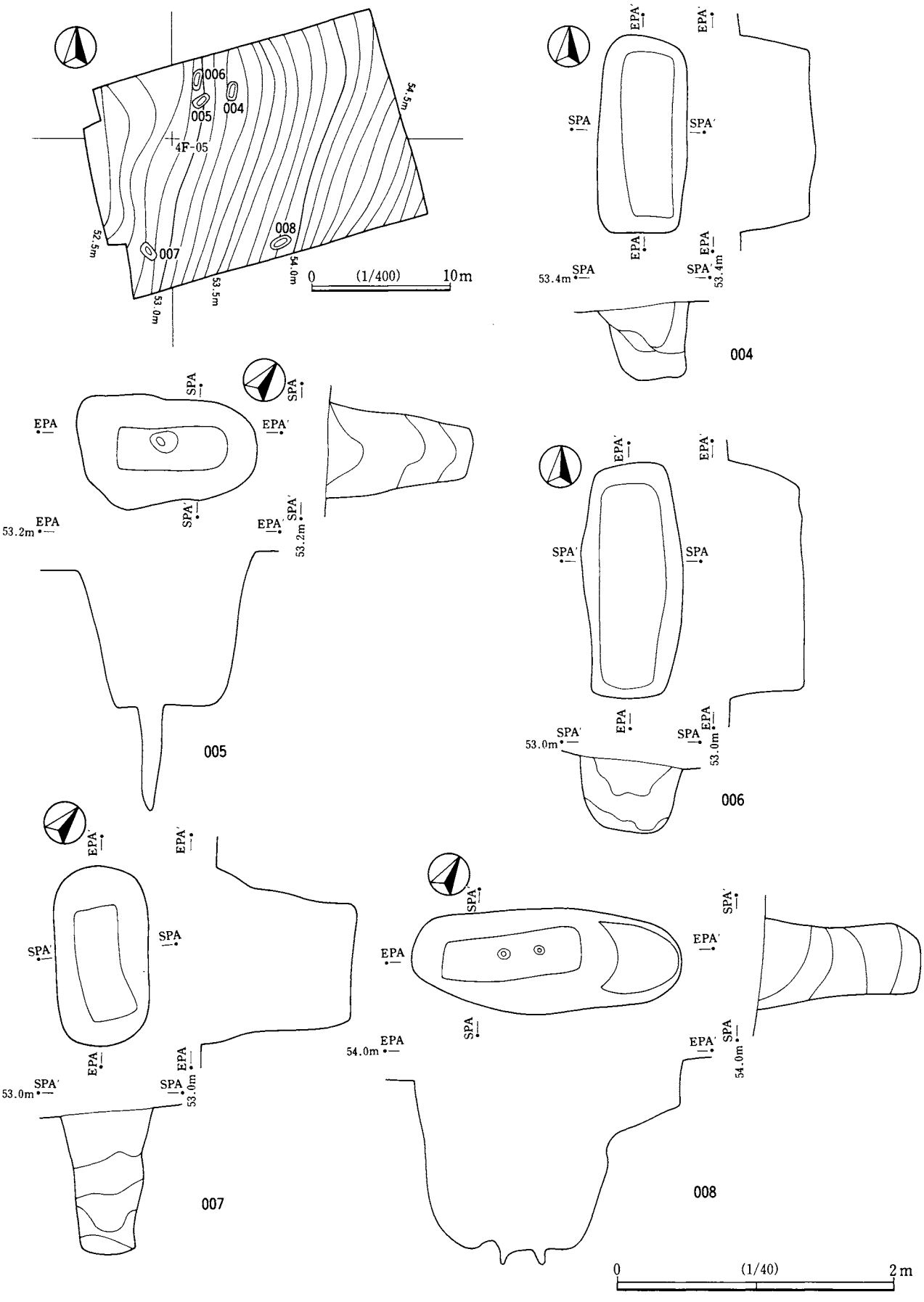
第41図　下層調査状況図



第42図　上層遺構配置図


SPA'
EPA
EPA'
SPA
57.0m
EPA
EPA'
SPA'
SPA
56.9m
001
0
(1/60)
3m
EPB'
SPA
SPA'
57.4m
SPA
SPA'
EPB
EPB'
57.4m
EPB
009
0
(1/40)
2m

第43図　土坑等（1）


006
005
004
4F-05
008
007
34.5m
32.5m
53.0m
53.5m
54.0m
0　(1/400)　10m
SPA
SPA'
EPA
EPA'
53.4m
004
53.2m
005
53.0m
006
007
008
0　(1/40)　2m

第44図　土坑等（2）

００６陥穴（第44図、図版12）

本遺構は、３Ｆ－95グリッド付近に位置する。規模は1.7m×0.7mで、隅丸長方形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北を向き、掘り込みの深さは約0.5mである。底面も1.4m×0.5mの隅丸長方形を呈し平坦で、地表から底面に向けて急角度に掘り込まれている。

００７陥穴（第44図、図版12）

本遺構は、４Ｆ－24グリッド付近に位置する。規模は1.3m×0.7mで、隅丸長方形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北西を向き、掘り込みの深さは約１mである。底面は0.8m×0.3mで、少し弧を描いた長方形を呈し、地表から底面に向けて急角度に掘り込まれている。

００８陥穴（第44図、図版13）

本遺構は、４Ｆ－16グリッド付近に位置する。規模は２m×0.7mで、楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北東を向き、掘り込みの深さは約1.3mである。北東部にある直径0.4mほどの半円形の掘り込み状のものは木の根の攪乱によるもので、これを除けば遺構の規模は長軸方向で1.5mとなる。底面には二つの同じ形状の小ピットがあり、直径0.1m、深さ0.1mほどである。底面の形状は1m×0.3mの隅丸長方形を呈し、地表から底面に向けて急角度に掘り込まれている。

００９陥穴（第43図、図版13）

本遺構は、５Ｄ－19グリッドに位置する。規模は2.4m×2mで不整形であるが、遺構の北東部にあたる半円状を呈する約0.3mの掘り込みを除くと、2.4m×1.5m程度の隅丸長方形となる。また、本遺構は底部に２つピットを有することから、逆茂木を設けた縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸はほぼ北西を向き、掘り込みの深さは約2.5mであり、底面に黄橙色の砂質岩盤層をみた。掘り込みの形は、下がふくらむ袋状であるが、これは崩落によるものと観察された。底面は1.7m×0.7mの長方形を呈し、二つの同じ形状のピットがあり、直径0.2m、深さ0.2mほどである。

０１３井戸（第45図、図版13）

本遺構は、４Ｃ－85グリッドに位置する。規模は3.4m×2.2mで楕円形を呈し、掘り込みの深さは約3mである。掘り込みの下半分が袋状に広がっているが、これは遺構内の土層観察より壁面の崩落と考えられる。底部は白色粘土層で、その上の３層まで粘土を含む。さらに上の層では粒子の大きさの異なるロームブロックを含むが、覆土の大半をしめる上からの３層ではあまり土層の差がなく、一気に埋め戻されたものと考えられる。

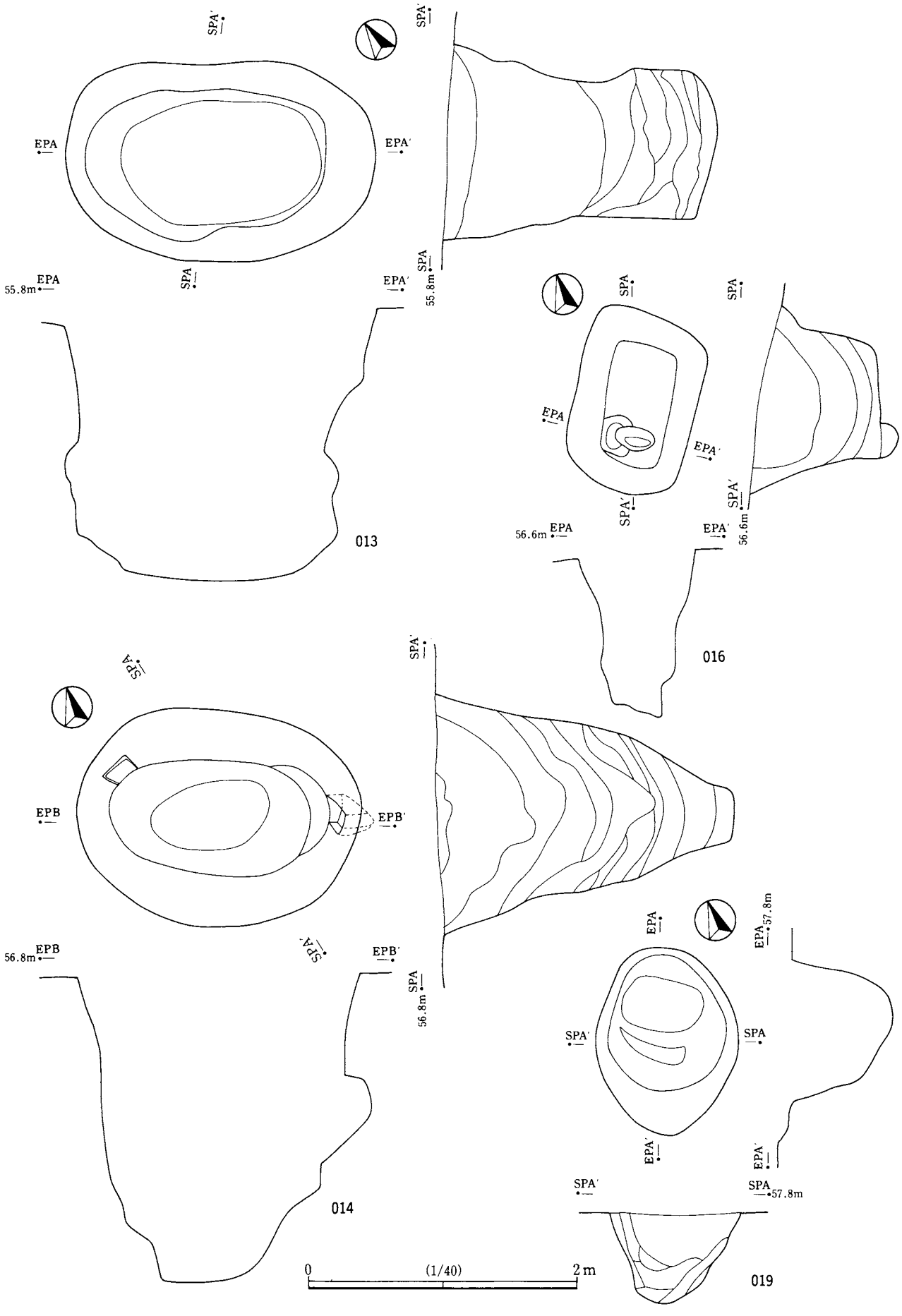
０１４陥穴（第45図、図版14）

本遺構は、５Ｄ－45グリッドに位置する。規模は2.1m×1.5mで、楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向は西からやや北を向き、掘り込みの深さは約2.2mである。また掘り込みの東側と北西側の２か所に、ほぼ垂直に掘り込まれたところがある。掘り込みは、底面から1/3のところまでは急角度に、それより下はやや緩やかに掘られており、底面の形状は0.8m×0.5mの楕円形である。

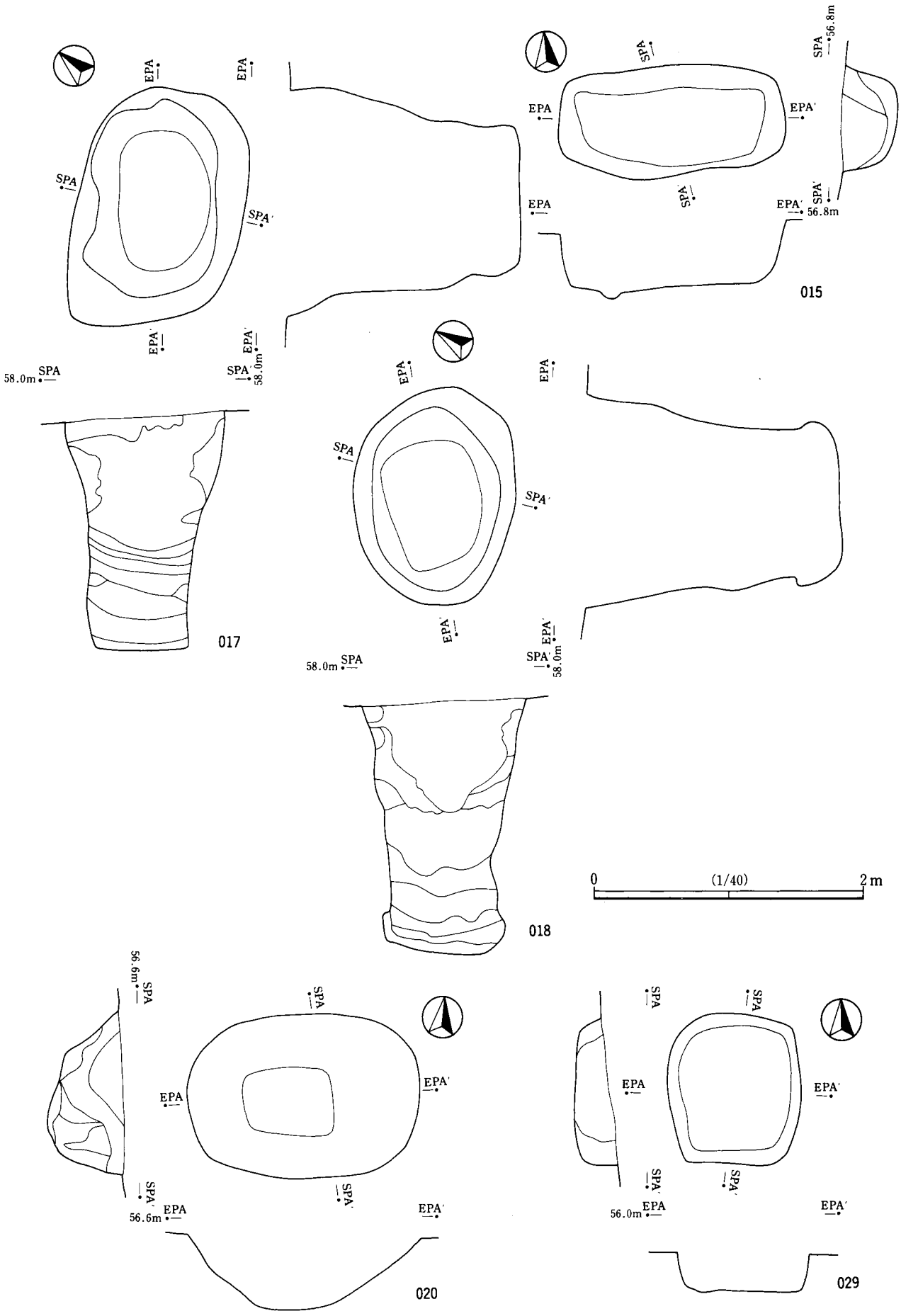
０１５陥穴（第46図、図版14）

本遺構は、５Ｃ－28グリッドに位置する。規模は1.7m×0.8mで、隅丸長方形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向は西からやや北を向き、掘り込みの深さは約0.45mである。底面も1.3m×0.5mで、やや凹凸のあるものの隅丸長方形を呈し、地表から底面に向けて急角度に掘り込まれている。

０１６陥穴（第45図、図版14）


SPA'
EPA
EPA'
SPA
55.8m
013
SPA'
SPA
55.8m
EPA
EPA'
SPA
SPA'
56.6m
016
EPB
EPB'
SPA
SPA'
56.8m
014
EPA
EPA'
SPA'
SPA
57.8m
019
0
(1/40)
2m

第45図　土坑等（3）



第46図　土坑等（4）

本遺構は、５Ｄ－12グリッド付近に位置する。規模は1.3m×0.9mで、隅丸長方形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北東を向き、掘り込みの深さは約１mである。底面南側には、小ピットが２基接して位置し、両方とも直径0.3m、深さ0.15mほどである。底面の形状は0.9m×0.45mの隅丸長方形を呈し、地表から底面に向けて急角度に掘り込まれている。

０１７陥穴（第46図、図版15）

本遺構は、５Ｄ－48グリッド付近に位置する。規模は1.8m×1.2mで、楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北東を向き、掘り込みの深さは約1.7mである。底面の形状は1m×0.6mの楕円形を呈し、地表から底面に向けてほぼ垂直に掘り込まれている。０１８陥穴も同じグリッドに位置し、本遺構の東側2mの所に位置する。

０１８陥穴（第46図、図版15）

本遺構は、５Ｄ－48グリッドに位置する。規模は1.6m×1.2mで、楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北東を向き、掘り込みの深さは約1.9mである。底面の形状は0.9m×0.6mの隅丸長方形を呈し、地表から底面に向けてほぼ垂直に掘り込まれている。底面から0.2mほど上までは全周囲が0.05m程度、袋状に掘り広げられている。

０１９土坑（第45図、図版15）

本遺構は、５Ｅ－41グリッドに位置する。規模は1.4m×1.1mで、楕円形である。掘り込みの深さは最大0.8mで、全体的に丸く窪むように掘り込まれているが、遺構の南西部は深さ0.1mほどの浅いテラス状になっている。

０２０土坑（第46図、図版16）

本遺構は、５Ｅ－11グリッドに位置する。規模は1.7m×1.2mで、楕円形である。掘り込みの深さは最大0.6mで、全体的に丸く窪むように掘り込まれている。

０２９土坑（第46図、図版16）

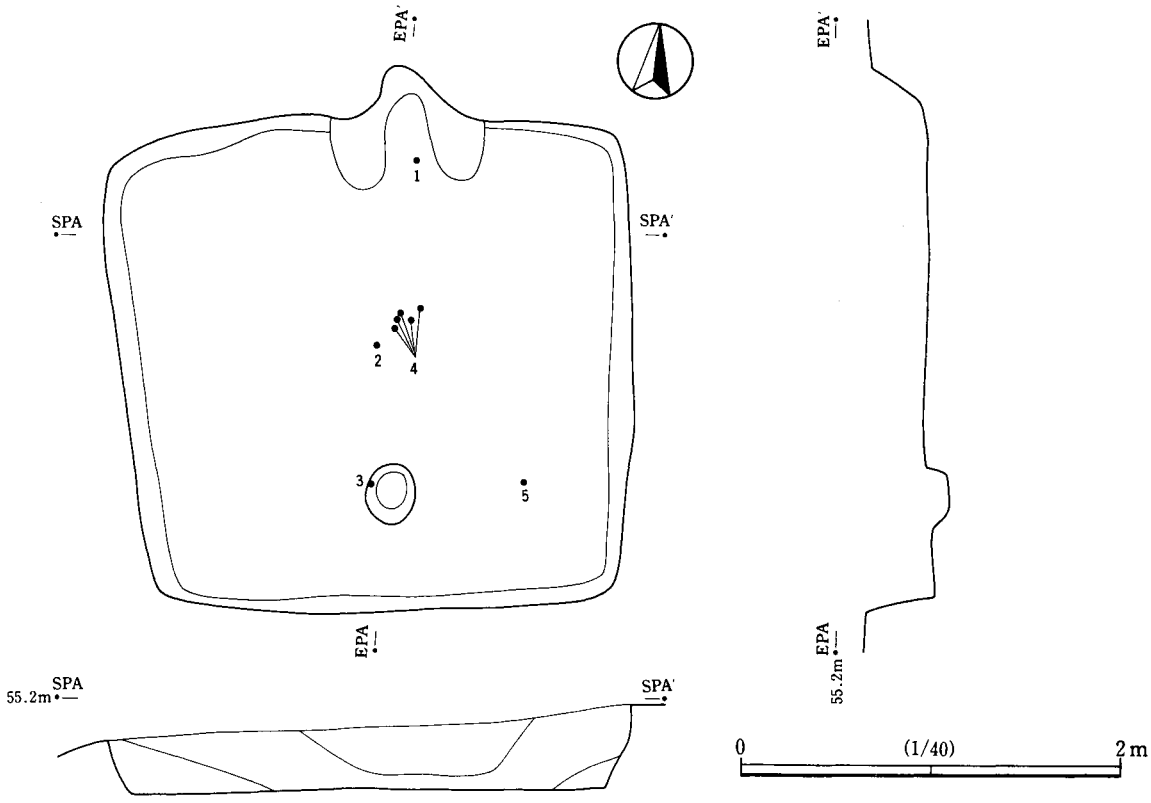
本遺構は、４Ｅ－62グリッドに位置する。規模は1.1m×1.0mで、隅丸方形である。掘り込みの深さは約0.25mで、底面に向けほぼ垂直に掘り込まれている。遺構の形態からは炭焼窯の可能性も考えられるが、覆土中に炭化物・炭が検出されず壁等も焼けていなかったので、土坑とみられる。

００２住居跡（第47・48図、図版9・10・65）

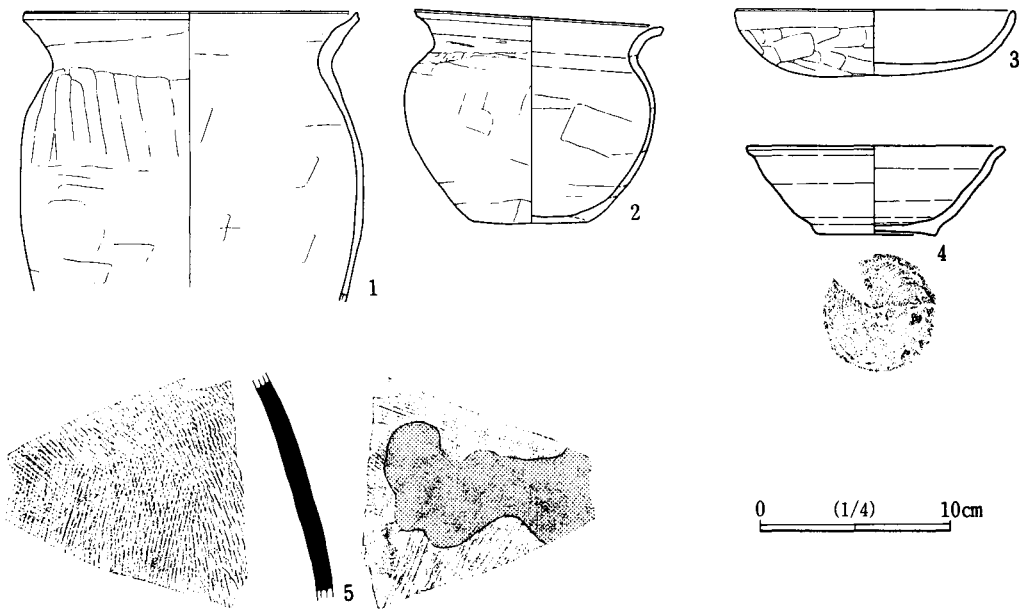
本遺構は、５Ｃ－11グリッド付近に位置し、南東約3mの所に００３住居跡が近接する。遺構の規模は、2.7m×2.6mの隅丸方形であるが、南側の幅がやや狭まる形をしている。主軸は、北からやや西に傾いている。遺構の掘り込みは、ソフトローム層の遺構検出面からは約0.3mであり、壁の立ち上がりも垂直に近く、しっかりした掘り込みである。壁溝および柱穴は、カマドの調査後に床面をさらに掘り下げて精査したが検出されなかった。梯子穴ピットが中央部の南寄りに１基位置し、直径0.3m、深さ0.1mを測る。

カマドは、北壁の中央やや東寄りに位置し、袖は白色粘土質の山砂で構築され、長さ0.4～0.5mの範囲で検出できた。火床部は平坦であるが、よく焼けて硬化しており、煙道部も遺構の掘り込みの外側まで延び、幅0.3m、奥行き0.2mほどの三角形状に掘り込まれていた。遺物は火床部に大型の破片がみられた。

遺物の出土量は多くない。１は土師器の甕である。口径17.3cmで口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリ後一部ナデが施されている。２は土師器の小型の甕である。口径13.1cm、底径6.1cmを測り、口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリ後一部ナデが施される。体部の一部にススの付着が認められる。３は土師器の杯である。

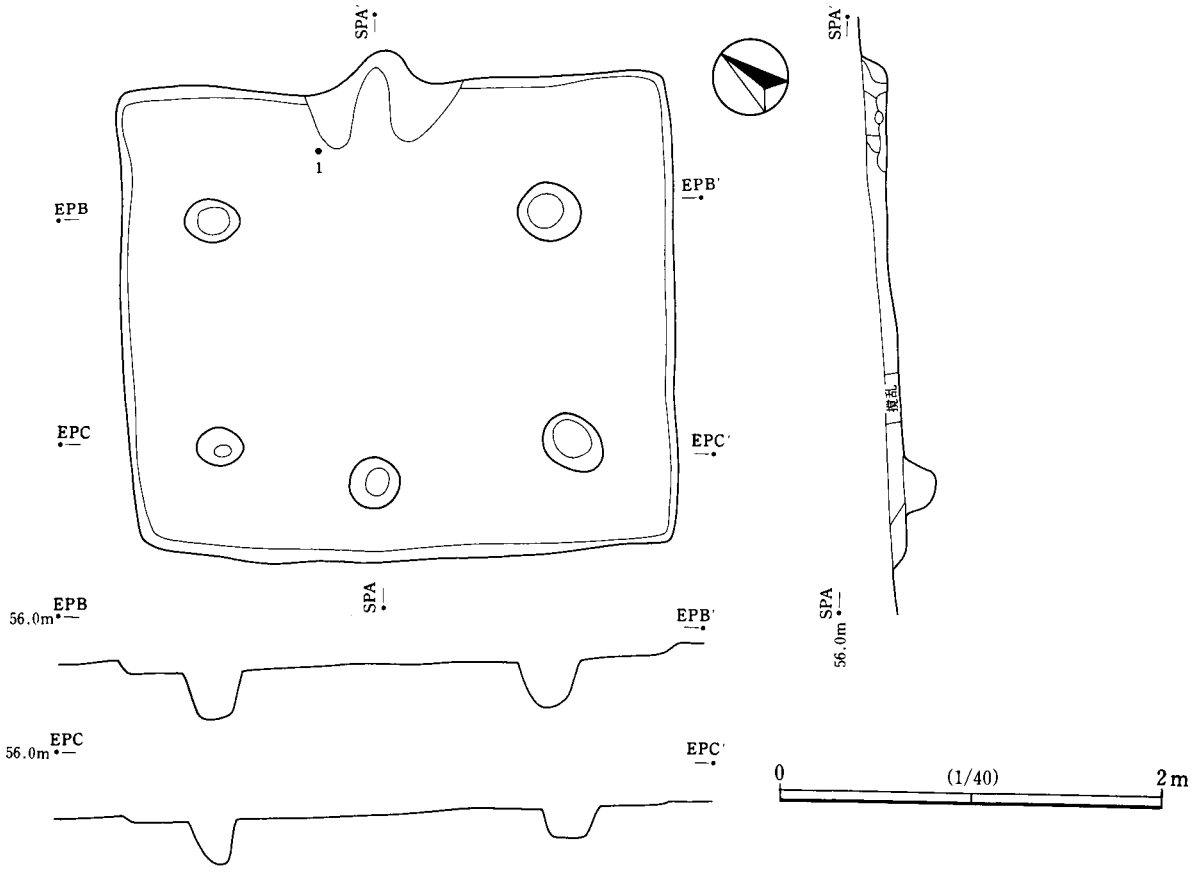


第47図　002住居跡

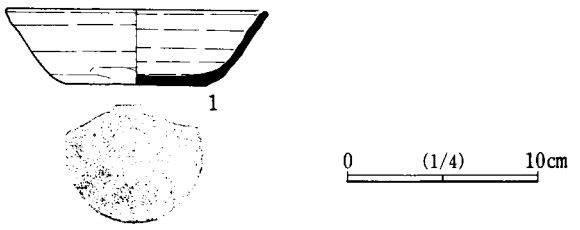


第48図　002住居跡出土遺物

浅く緩やかに広がる立ち上がりを示す。口径14.4cm、器高3.4cmを測り、口唇部には油煙が付着し灯明皿として用いられたことがわかる。4も土師器の杯で、口径13.2cm、底径6.2cm、器高4.6cmを測る。ロクロ成形で、ナデが施され、底部は回転糸切り離しでやや上方に反り返る。3と同様に口唇部に油煙が付着し、灯明皿として使用されていたことが窺われる。5は須恵器の甕の破片である。外面は縦方向のタタキ目がみられ、内面にも縦と横方向のタタキ目がみられる。内面の中央部は転用硯として使用されたようで、非常に平滑に磨耗している。



第49図　003住居跡



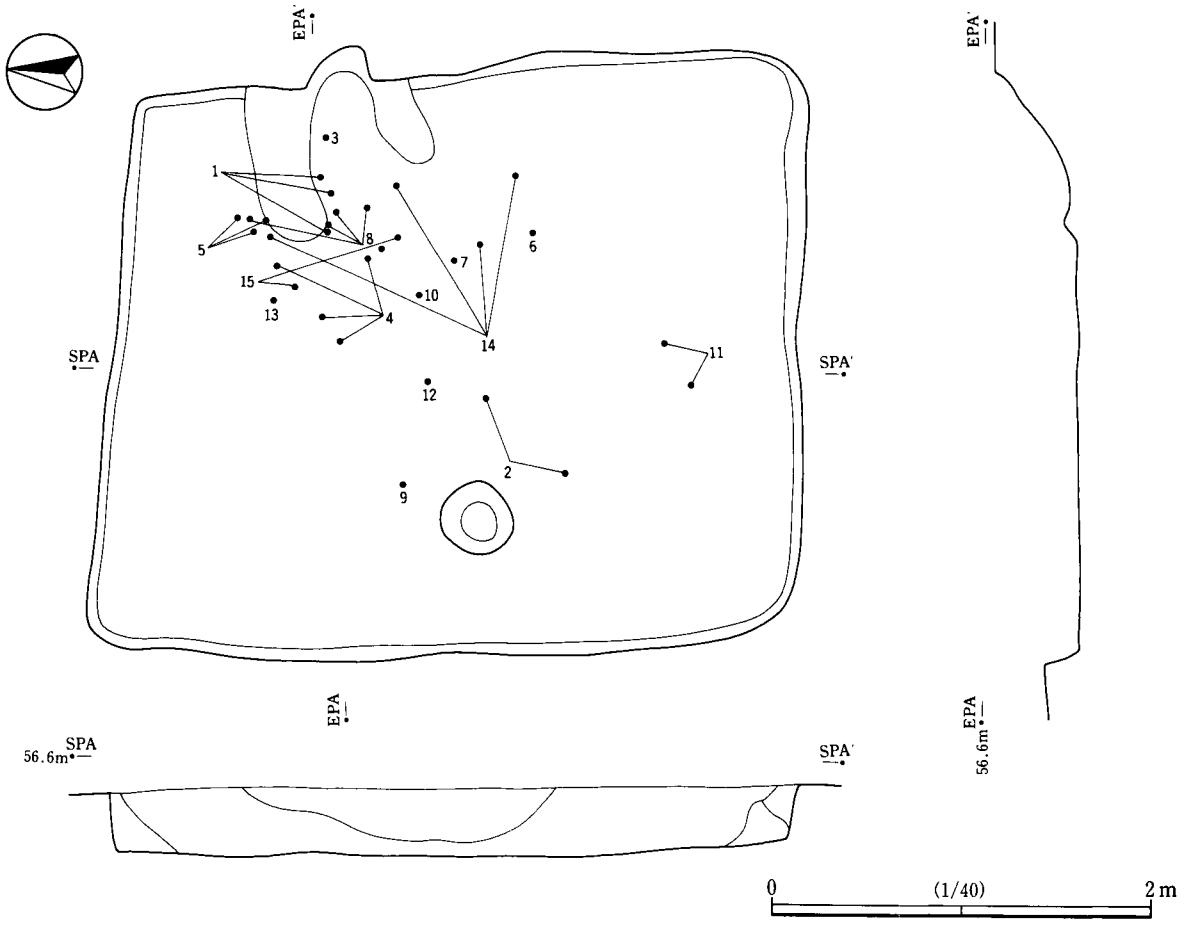
第50図　003住居跡出土遺物

００３住居跡（第49・50図、図版10・65）

本遺構は、５Ｃ－23グリッド付近に位置し、東南東約3mの所に０１２住居跡が近接する。遺構の規模は、2.5m×2.9mの小型の隅丸方形をしている。主軸は、北から約45°東に傾いている。遺構の掘り込みは、ソフトローム層の遺構検出面からは約0.1mと浅く、特に北東の壁面は数cmしかなく遺存状態がよくなかった。壁溝はなく、床面は全体的にやや柔らかく、硬化面はみられなかった。床面上からは広い範囲で、焼土粒と炭化物粒が検出され、焼失住居の可能性が高い。柱穴はほぼ対角線上に４本検出され、直径0.2～0.3m、深さ0.2m程度で浅い掘り込みである。梯子穴ピットが中央部の南寄りに１基位置し、直径0.3m、深さ0.2mを測る。

カマドは北壁の中央に位置するが非常に遺存が悪く、かろうじて長さ0.3mの範囲にわたって白色粘土質の山砂が袖を構築していたことが検出できたに留まる。火床部は平坦で、火による焼け方は少なかったが硬化しており、煙道部も火床部の高さからみて、遺構の掘り込みの外側に延びる様子が観察された。

遺物は、掘り込みの遺存が悪いため少なく図示できたのは１点である。１は須恵器の杯で、口径13.4cm、



第51図　011住居跡

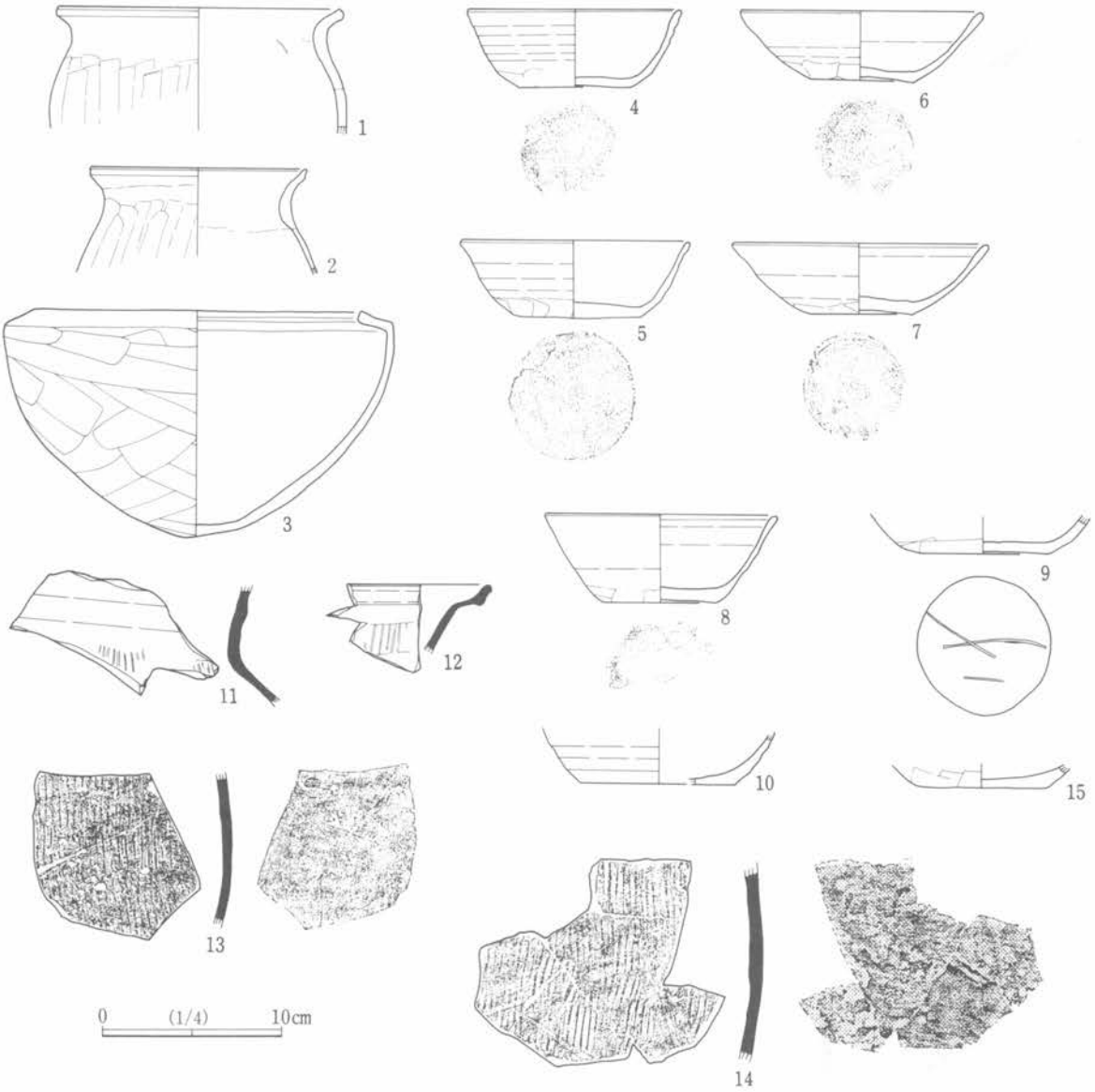
器高3.9cmを測る。ロクロ成形で、体下部はヘラケズリが施され、底面は切り離し後、手持ちヘラケズリがなされている。

０１１住居跡（第51・52図、図版10・11・65）

本遺構は、５Ｃ－45グリッド付近に位置する。遺構の規模は、3.1m×3.6mと横方向が長い隅丸長方形であるが、ややいびつである。主軸は、ほぼ東を向いている。遺構の掘り込みは、ソフトローム層の遺構検出面からは約0.3mであり、壁の立ち上がりも垂直に近く、しっかりした掘り込みである。床面中央部からは、焼土が少し検出された。壁溝および柱穴は検出されず、梯子穴ピットが中央部の南寄りに１基位置し、直径0.4m、深さ0.1mを測る。

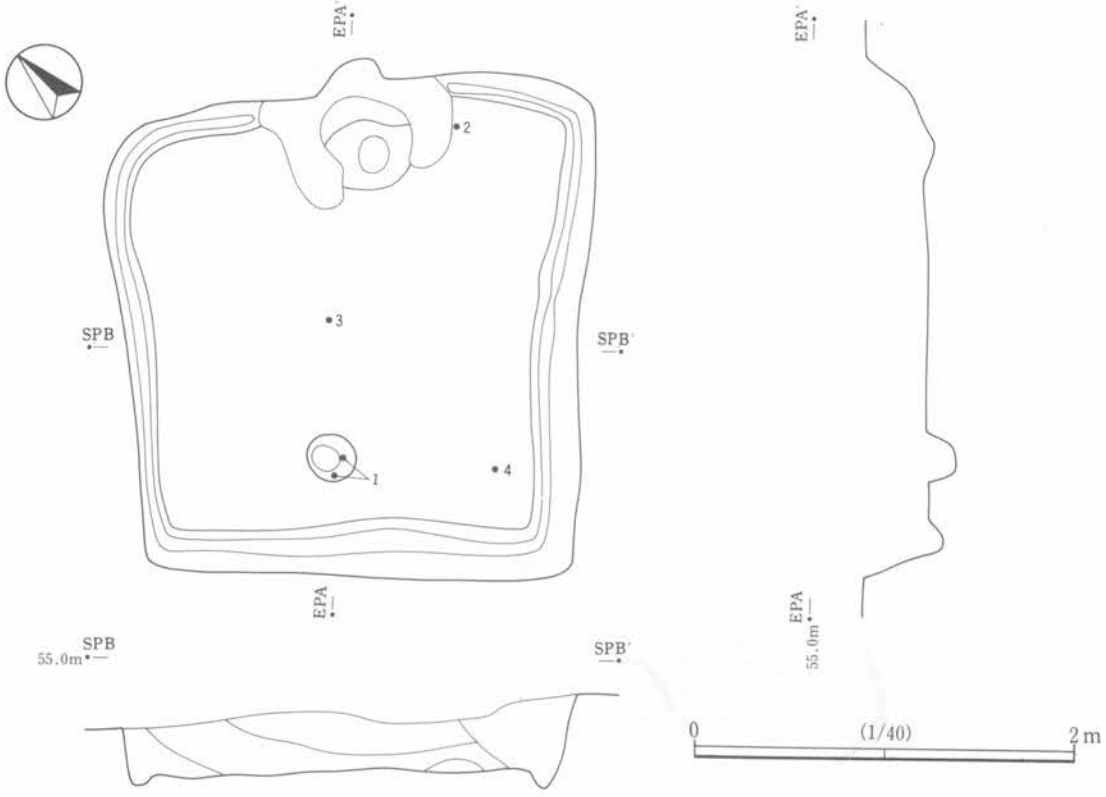
カマドは、東壁の北寄りに傾いて位置し、袖は白色粘土質の山砂で構築され、長さ0.4～0.8mの範囲で右袖よりも左袖が長くいびつに検出できた。火床部は0.1mほどの掘り込みで、袖の内面はよく焼けて硬化していた。煙道部も遺構の掘り込みの外側に延びる様子が観察された。

遺物は、カマド寄りにやや多く出土しており特徴的な遺物が出土している。１は土師器の甕である。口径15.6cmで、口縁部は横ナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面はナデが施されている。２は１よりやや小振りな土師器の甕である。口径11.8cmで口縁部はナデ、体部はヘラケズリがなされる。体部の一部にススの付着が認められる。３は特徴的な遺物である。土師器の鉄鉢形鉢で、遺存がよく、形態がはっきりと窺えた。底部は緩い砲弾型でそのまま開きながら体部となり、一度すぼまり急に立ち上がるようになって口縁部近くの最大径を示す。そこからほぼ直角に近く内湾し急激にすぼまり口唇部となっている。口径18.0

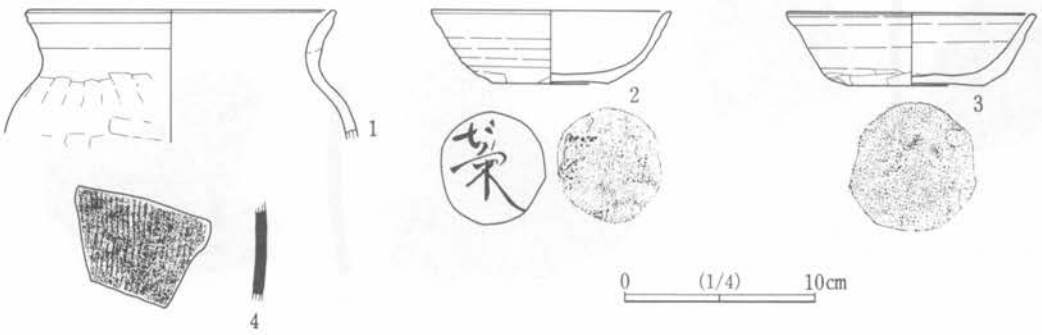


第52図　011住居跡出土遺物

cm、最大径21.6cm、器高12.5cmを測り、胎土はやや粗く砂粒をやや多く含み、長石を少し含んでいる。外面はヘラケズリがなされ、口縁部近くの折り返し部分は丁寧なナデが内外面共になされている。内面は丁寧なナデが施される。外面の上部にはススが付着し、底部近くは火熱を受けたようにも見受けられる。カマドの中の火床部付近から出土している。４～10、15は土師器の杯である。４は体部の立ち上がりのやや急な形態で、遺存が悪いが口径11.8cm、底径6.2cm、器高4.4cmほどとなる。外面上部は横ナデ、下部はヘラケズリが施されるが、内面は器表が剝落し不明である。底部は切り離し後手持ちヘラケズリが施される。５は口径12.7cm、底径7.0cm、器高4.3cmで、ロクロ成形で外面は上部はナデ、下部はヘラケズリ、内面はナデ、底部はヘラケズリが施される。６・７は底部からなだらかに広がるように開く杯で、６は口径13.3cm、底径5.7cm、器高3.9cmを、７は口径14.1cm、底径5.8cm、器高3.9cm測る。両者共にロクロ成形で、外面上部は横ナデ、下部はヘラケズリ、内面はナデ、底部は回転糸切り後周縁を手持ちヘラケズリしている。６・７共に底部は上方に反り返っている。８は口径12.8cm、底径6.2cm、器高4.9cmを測る。外面上部は横ナデ、下部はヘラケズリ、内面はナデ、底部は切り離し後手持ちヘラケズリが施される。９は遺存の悪い



第53図　012住居跡



第54図　012住居跡出土遺物

底部だが、底径7.4cmを測り、内面は一部にススの付着がみられる。底部外面には荒いヘラ状のもので刻んだ線刻があるが文字としては認識できなかった。10は底部で底径8.6cmとやや大振りな杯である。11～13は須恵器の甕の破片である。11は口縁部、12は体部から口縁部にかけての部分である。13は大甕の破片で、外面にはタタキ目がみられる。14は須恵器の破片であるが転用硯として用いられている。焼成の悪い黒色の須恵器で、内面ほぼ全面にわたり磨耗が認められ、部分的に細かく平滑になっている。本来はより大形の破片で硯として用いられたものであろう。15は土師器の杯の底部である。底径7.6cmを測る。

０１２住居跡（第53・54図、図版10・11・65）

本遺構は、５Ｃ－35グリッド周辺に位置する。すぐ南西に０１１住居跡が所在し４軒の住居跡群の中で最東端に位置する。形態はほぼ隅丸方形で、2.6m×2.4mでカマド側がやや膨らんでいる。掘り込みの深さは0.3mで壁はほぼ垂直に近く立ち上がっている。床面はあまり堅緻ではなく、壁際には幅0.1m～0.3m、深さ0.1mの壁溝が全周している。柱穴は検出されず、カマドと反対側の壁近くから、梯子穴ピットが検出された。径0.25m、深さ0.15mを測る。

カマドは遺存が悪く、白色系の粘土で構築した袖が確認され煙道の立ち上がりはややなだらかに掘り込まれていた。

遺物は、出土量は少なく図示できたのは以下の4点である。1は土師器の甕の上半部である。口径15.9cmを測り、口縁部はナデ、体部外面はヘラケズリ後ナデが施されている。2は体部外面に墨書のある土師器の杯である。口径は12.5cm、底径は6.0cm、器高3.7cmを測る。ロクロ成形で、外面はナデ、底部近くと底部はヘラケズリが施されている。体部と底部の境界の稜はやや不明瞭で、底部には墨書で文字が書かれている。墨痕は鮮明であったが、文字は判読できなかった。3は土師器の杯で、口径12.8cm、底径7.0cm、器高3.8cmを測る。ロクロ成形で、外面内面ともに、ナデが施され、底部近くはヘラケズリ、底部は切り離し後、ヘラケズリその後更にナデが行われる。口唇部に一部タール状ものが付着し、灯明皿として用いられていたものと見られる。4は須恵器の甕の胴部付近の破片と見られる。外面には縦方向のタタキ目がみられる。内面はナデが施されている。

遺物

縄文土器（第55・56図、図版51）

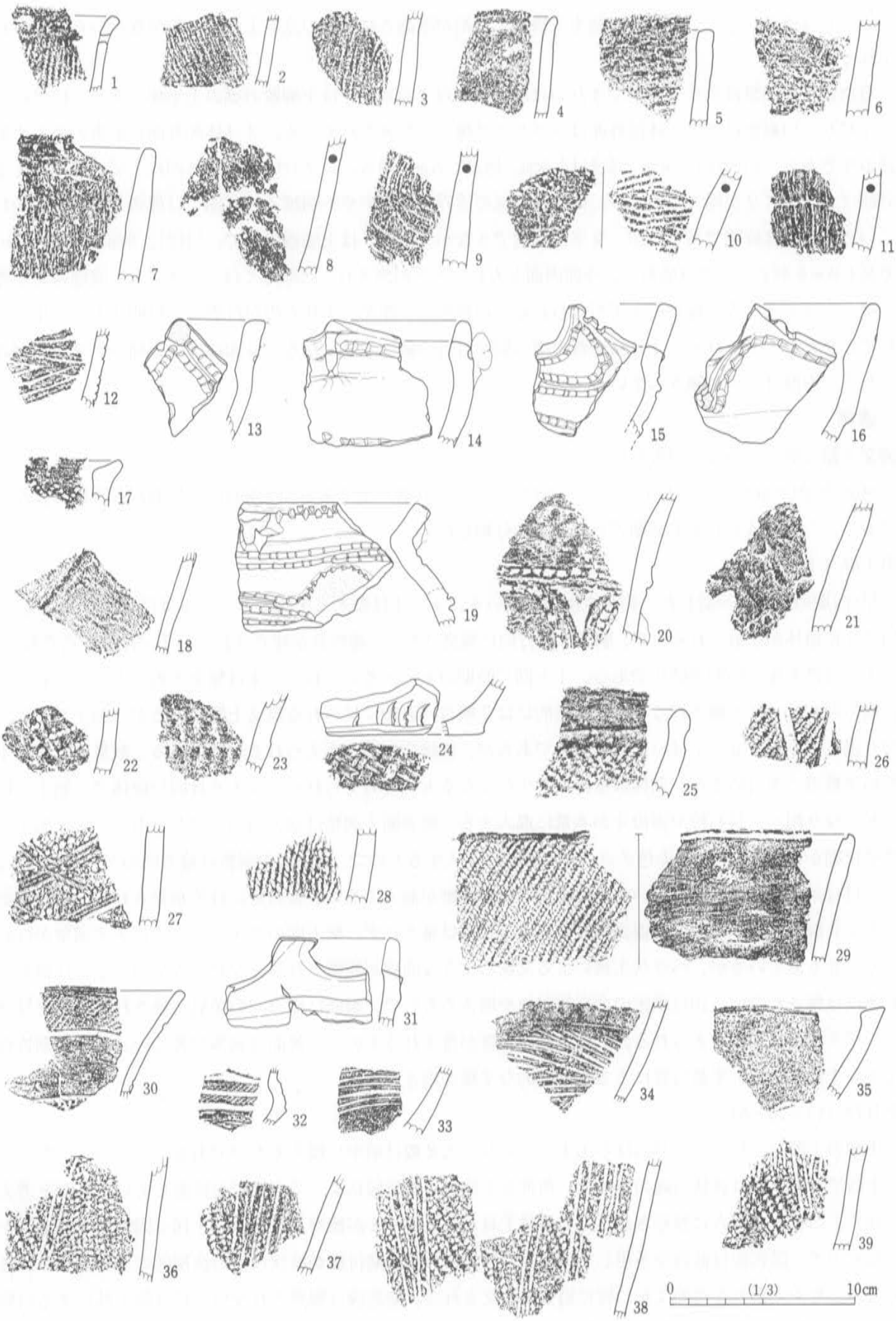
全部で180点余りの土器が出土しているが、すべて包含層出土である。時期的には早期から晩期に及んでいるが、ここではおおよそ時期ごとに4群に分類した。

第Ⅰ群（1～12）

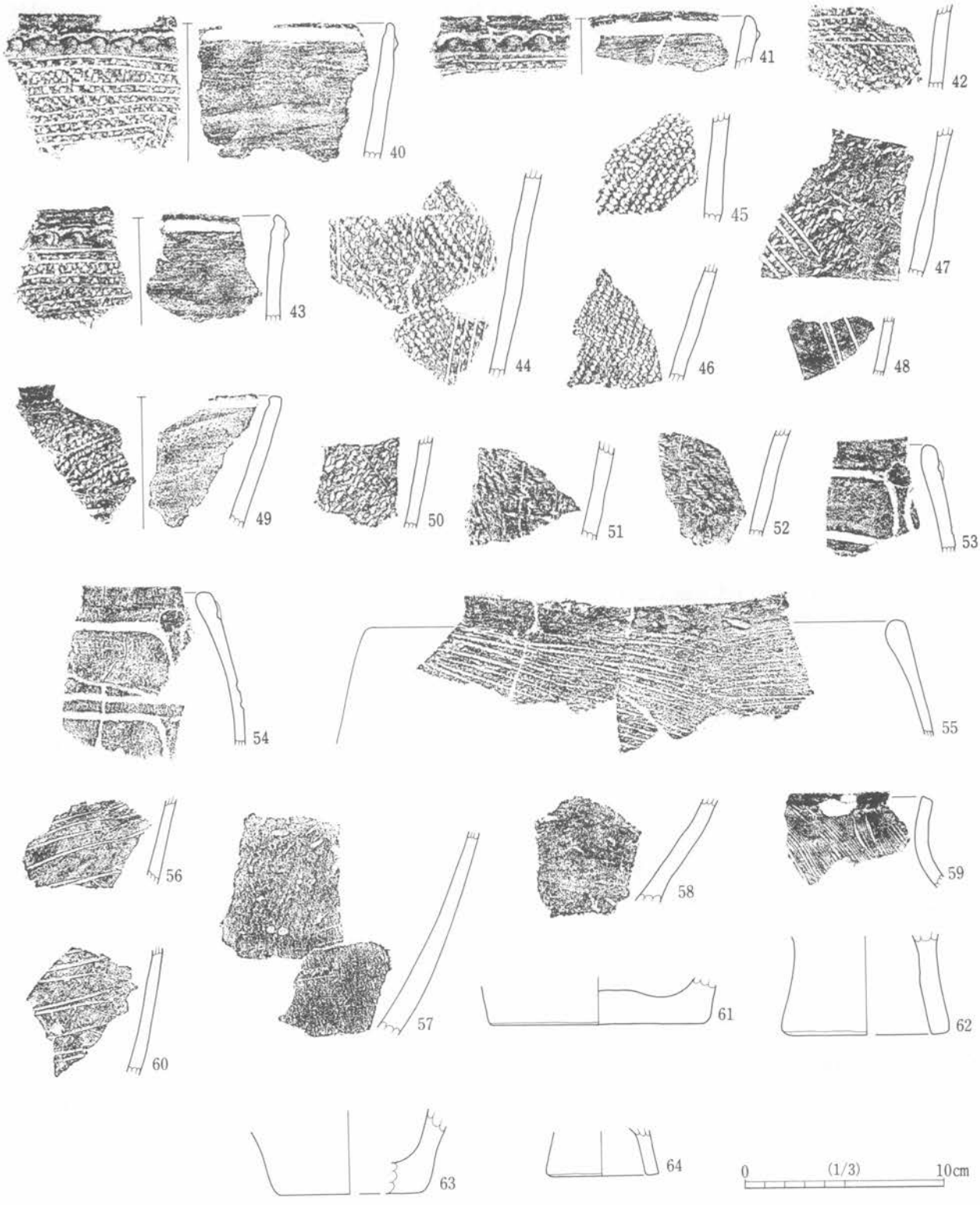
早・前期の土器を一括した。約40点出土している。1～4は撚糸文土器である。1は口縁が若干外反し、口唇部に原体が圧痕されるもの。胴部は縦方向に施文される。補修孔が穿孔されている。井草Ⅱ式である。2・3は撚糸施文の胴部破片である。1と同じ時期のものと考えられる。4は無文土器である。口唇直下に横方向のケズリが施されるもの。技法的には花輪台式直後に見られる無文土器に似るが、胎土などはかなり違っている。5～7はいずれも無文であるが、沈線文土器と考えられる一群である。数量的には第Ⅰ群の半数近くを占めるが、個体数はかなり少なくなるものと考えられる。5・6は同一個体で、胎土の粒子がかなり粗く、長石粒や雲母片が多量に混入する。器表面の調整は横方向のケズリである。7は胎土の粒子は細かくなるものの、赤色スコリアが多量に混入するもので、器表面の調整は縦方向のケズリである。8～11は条痕文土器である。いずれも胎土に植物繊維が混入するが、含有量には差が見られる。8は繊維があまり混入しないもので、器表面もいわゆる条痕は施されず、横方向のケズリもしくはナデ調整が行われる。9も似ているが、ヘラ状工具による文様のような曲線が観察される。なお、以上の2点には裏面にも条痕は施されない。10は繊維の含有量がやや増えるもので、裏面に横方向の条痕が施される。施文具はアナダラ属の貝殻と考えられる。11は多量の繊維が含まれるもので、裏面は剝落が著しい。12は前期竹管文系の土器である。半截竹管による幾何学的な文様が施される。

第Ⅱ群（13～26・61）

中期の土器を一括した。35点ほど出土しており、大多数は前半に属するものである。13～24は中期前半の土器である。13は波状口縁の破片で、角押文を伴った隆起線によって文様帯を区画しているものと考えられる。口唇上は平らに整形され、丸い棒状工具によるキザミが観察される。15・16も同様の文様構成をとるもので、隆起線は曲線を多用している。14はつまみ状の貼付瘤が波状口縁の波頂部の下につけられるもので、やや大振りな角押文が口唇に沿って施文される。隆起線は観察されない。17は強く外反する口唇に沿って小振りな角押文が鋸歯状に施されるもの。19は口唇部が強く外反し、強く屈曲してその下側がや


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
(1/3)
10cm

第55図　縄文土器（1）



第56図　縄文土器（2）

はり大きく膨らむ形状を呈する資料である。口唇の上側と前側には棒状工具による交互刺突が施される。屈曲部のやや下側に角押文が施される。円形の貼付突起が剝落しているのが観察される。18・20は胴部破片で、貼付隆起線が配される。22は隆起線と有節結線が施されるもの。23は胎土が粗く長石粒や雲母片が多量に混入するものである。24は底部破片で、底面にはアンペラの圧痕が観察される。25、26は加曽利E

式である。25は縄文に太沈線が施されるもの、26は文様帯が太沈線によって区画されるものである。61は底部で、推定底径は10.8cmである。胎土には長石粒や雲母片を多量に含んでいる。中期前半に属するものと考えられる。

第III群（27～52・58・62～64）

後期の土器を一括した。約60点出土しており、出土縄文土器中最も多い。中でも加曽利B式が圧倒的多数を占める。また、時期がはっきりとわからない無文土器も40点近く出土しているが、そのほとんどが加曽利B式を中心とした後期に属するものと考えられる。27・28は堀之内式である。全体にやや厚めで、器表面にはLR縄文が施文される。27にはやや平べったい板状の工具による沈線が施される。29～52は加曽利B式である。29は口唇部内側に沈線が施される。30は口縁部が大きく外反するもので、横方向の沈線によって区画された帯縄文が配される。31は鍵状の把手がつくもので、表面はミガキ状の調整がされている。32は浅鉢と思われる破片である。胴部に強い屈曲が見られ、縄文地紋に棒状工具による横方向の沈線を施している。焼成はきわめて良好で、内面は丁寧なミガキ状の調整がなされる。33・34・48は精製深鉢の胴部下半の破片で、斜行する条線が施される。35は大きく外反する口縁部で、口唇部は肥厚し、内そぎ状に整形される。無文であるが調整は良好である。36～47・49～52は粗製深鉢の破片である。40・41・43は口縁部で、紐線文が張り付けられ、その下側に縄文と条線が施される。いずれも口縁部内側にも沈線が施される。49は紐線文がない口縁部破片であるが、それ以外の特徴は他のものと違いがない。胴部は縄文地紋に条線が施されるものが多数であるが、全体に摩耗しており文様は分かりにくい。58は無文の胴部である。底部直上から大きく開く器形を呈している。加曽利B式の浅鉢と考えられる。62・64は台付き浅鉢の台部と考えられるもので、推定径は62が7.5cm、64が5.4cmである。文様は施されないが、いずれも横方向の丁寧なミガキ状の調整がなされている。やはり加曽利B式に属するものと考えられる。63は無文の深鉢底部で、推定径7.0cmである。胎土がやや粗く砂粒が多量に混入する。堀之内式の深鉢底部と考えられる。

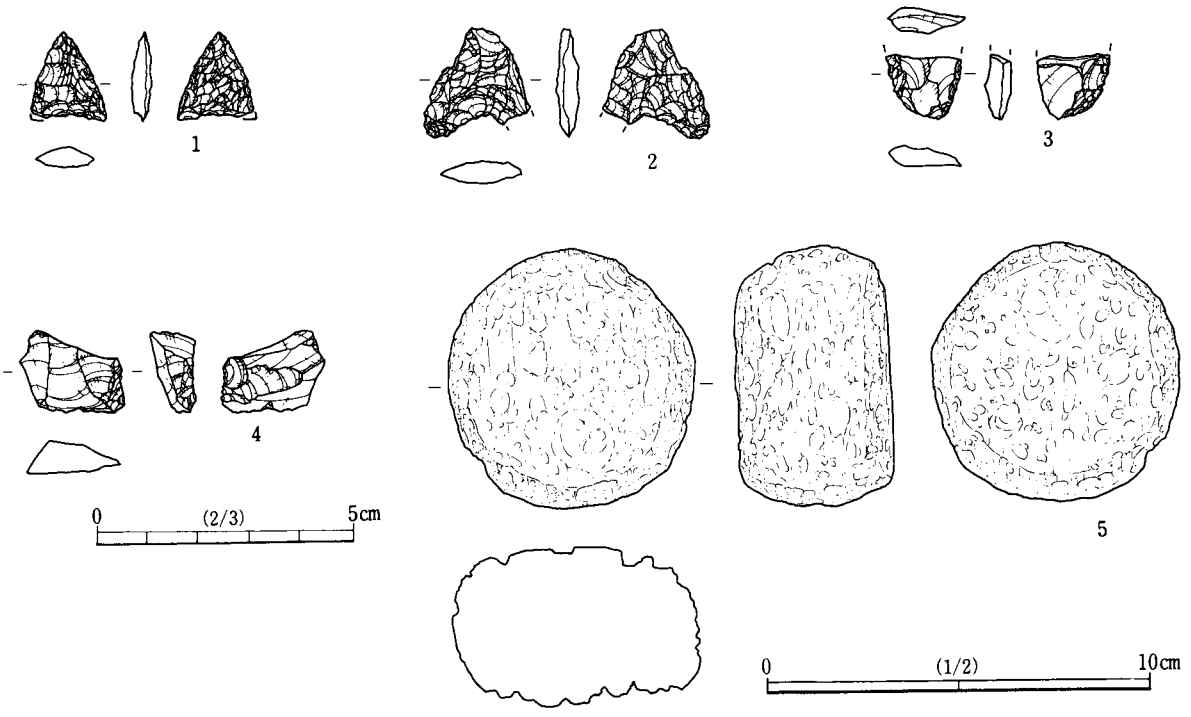
第IV群（53～57・59・60）

晩期以降の土器を一括した。15点ほど出土しており、そのほとんどが粗製深鉢の胴部である。53・54は晩期初頭の姥山II式に特徴的な枠状文が施されるもので、両者は同一個体とみられる。55は粗製深鉢の口縁部である。推定口径は26.5cmで、口縁部は強く内湾し、胴部には条線が施される。56・57・60は粗製深鉢の胴部と考えられるもの。57は底部直上である。59は口縁部がやや強く外反する深鉢型土器で、貝殻を使用したとみられる条痕が施される。晩期終末もしくは弥生初頭に位置する土器である。

縄文時代以降石器（第57図、図版44、第4表）

本遺跡より出土した石器はわずかである。石器総点数は18点である。器種組成は、石鏃3点、R剝片1点、磨石1点、剝片2点、礫11点のみである。

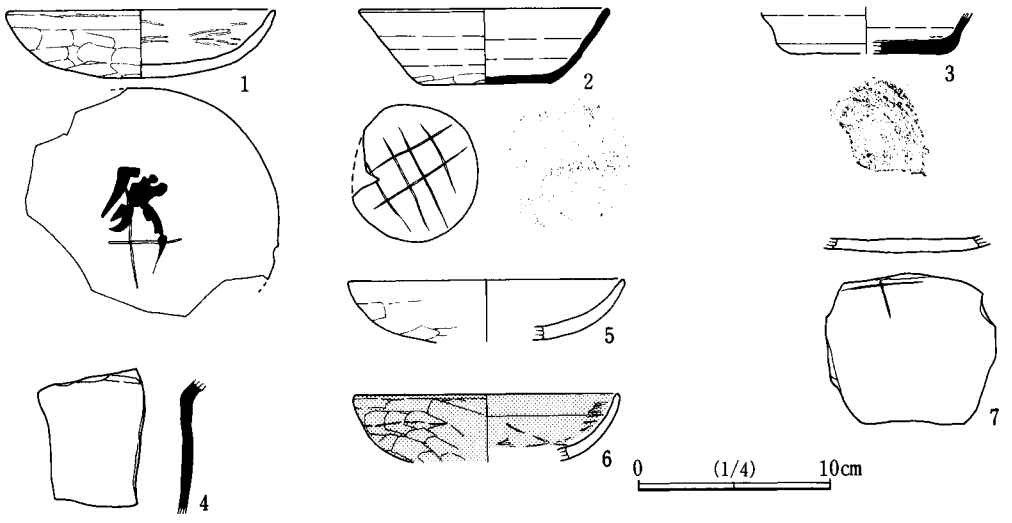
1・2は石鏃、3は石鏃未成品である。1は両側縁がやや膨らみ、基部は浅く弧状に括れる。脚部は片脚を欠損するが、端部が尖る。2は左側縁が括れ片脚の肩が張り脚部が延びる。基部は逆V字状に抉れる。3は器体上半部を欠損し形状は明確でないが、石鏃の基部と思われる。表裏面の両側縁に細部加工が連続する。4はR剝片である。背面下端部に微細剝離痕と、裏面左側縁に細長い剝離痕が集中する。5は磨石である。多孔質の安山岩を石材としている。表裏面の擦りが顕著で平坦になっている。側面にも擦り面がおよび、平面形状は円形を呈している。



第57図　縄文時代石器

第４表　縄文時代石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号	No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号
1	石鏃	黒曜石	17.6	15.1	3.8	0.7	4F45-1	4	R剥片	黒曜石	15.8	20.6	8.6	1.9	5C11-1
2	石鏃	黒曜石	21.3	20.8	4.2	1.5	4F39-1	5	磨石	安山岩	67.0	65.4	40.9	198.4	5C11-1
3	石鏃未成品	黒曜石	12.5	14.6	4.9	0.9	4F91-1								



第58図　グリッド出土遺物

グリッド出土遺物（第58図、図版64）

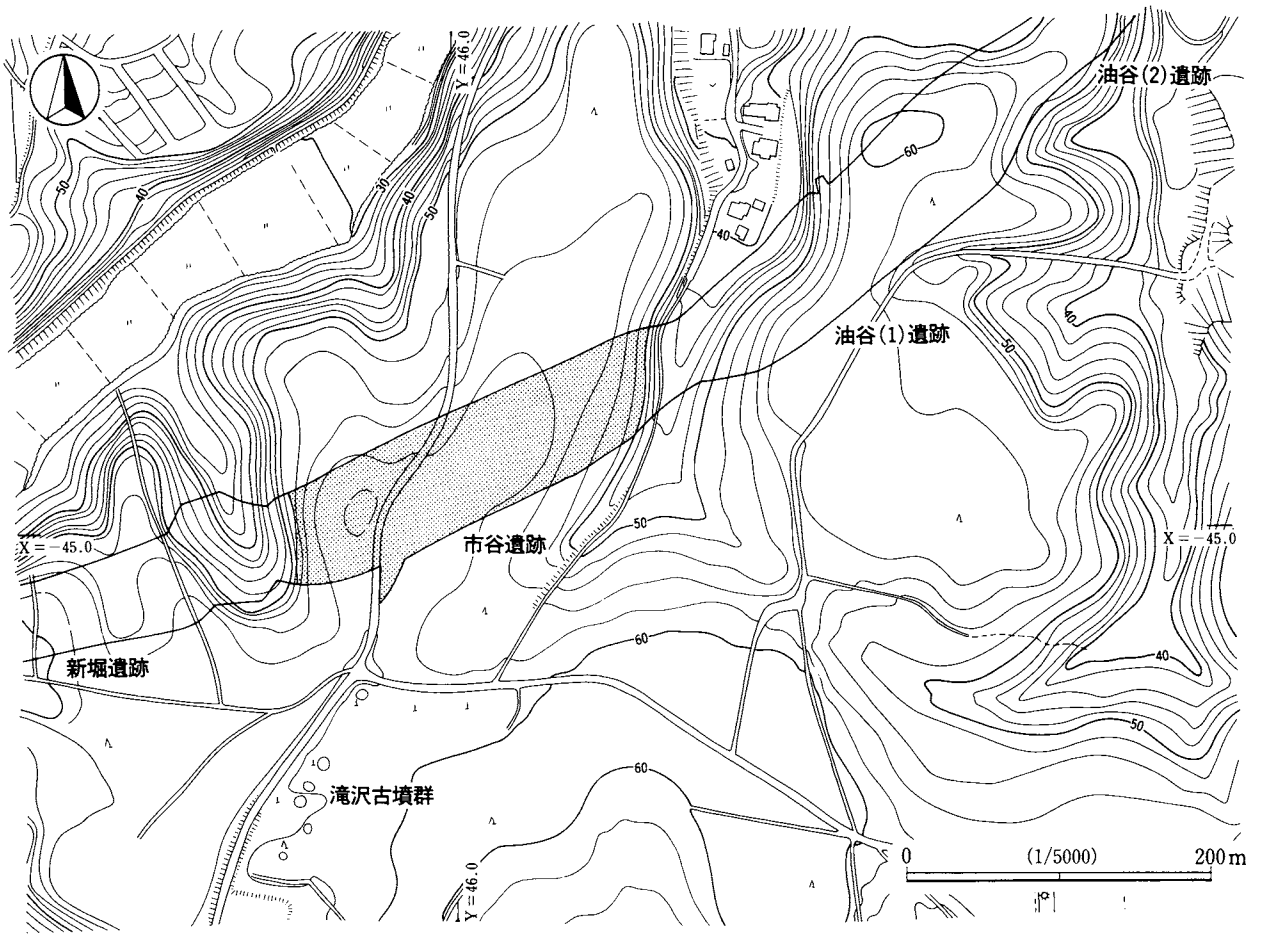
グリッド等出土の遺物をまとめてあげる。１は４Ｅ－71グリッド出土の土師器の杯である。杯蓋形態の杯で体部と底部の稜はない。径13.8cm、器高3.5cmを測る。外面口縁部はナデ、体部はヘラケズリ後ナデ、内面はヘラによるミガキが施されるが、器表の剝落が認められる。底面にはヘラによる十字の線刻がみられ、更に墨書による文字様の記号が描かれるが墨痕はやや薄く、赤外線も用いたが判読はできなかった。

線刻の後墨書による記入が行われている。２は５Ｃ－33グリッド出土の須恵器の杯である。口径13.0cm、底径6.6cm、器高4.0cmを測る。ロクロ成形で、底部と外面底部付近はヘラケズリが施される。底部にはヘラ状のものによる線刻が認められ、平行する４本の線と、直交する２本の平行線が描かれる。意味は不明である。３も須恵器の杯である。底径8.0cmで、底部近くはヘラケズリが施されている。４は００９土坑と５Ｄ－19グリッド出土の須恵器の甕の破片である。５・６は土師器の杯である。１と同じ様な器形で、５は口径13.8cm、器高3.5cm、６は口径14.3cm、器高3.2cmとなる。５は内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリが施される。６も同様に整形され、内外面共に赤色塗彩されている。器表が剥離しだいぶ磨耗している。７は土師器の杯の破片である。１・５・６と同様な器形の破片で、内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリが施され、外面にはヘラによる記号が刻まれる。破片外に続くため断定できないが、十字に交差する２本の直線と見られる。

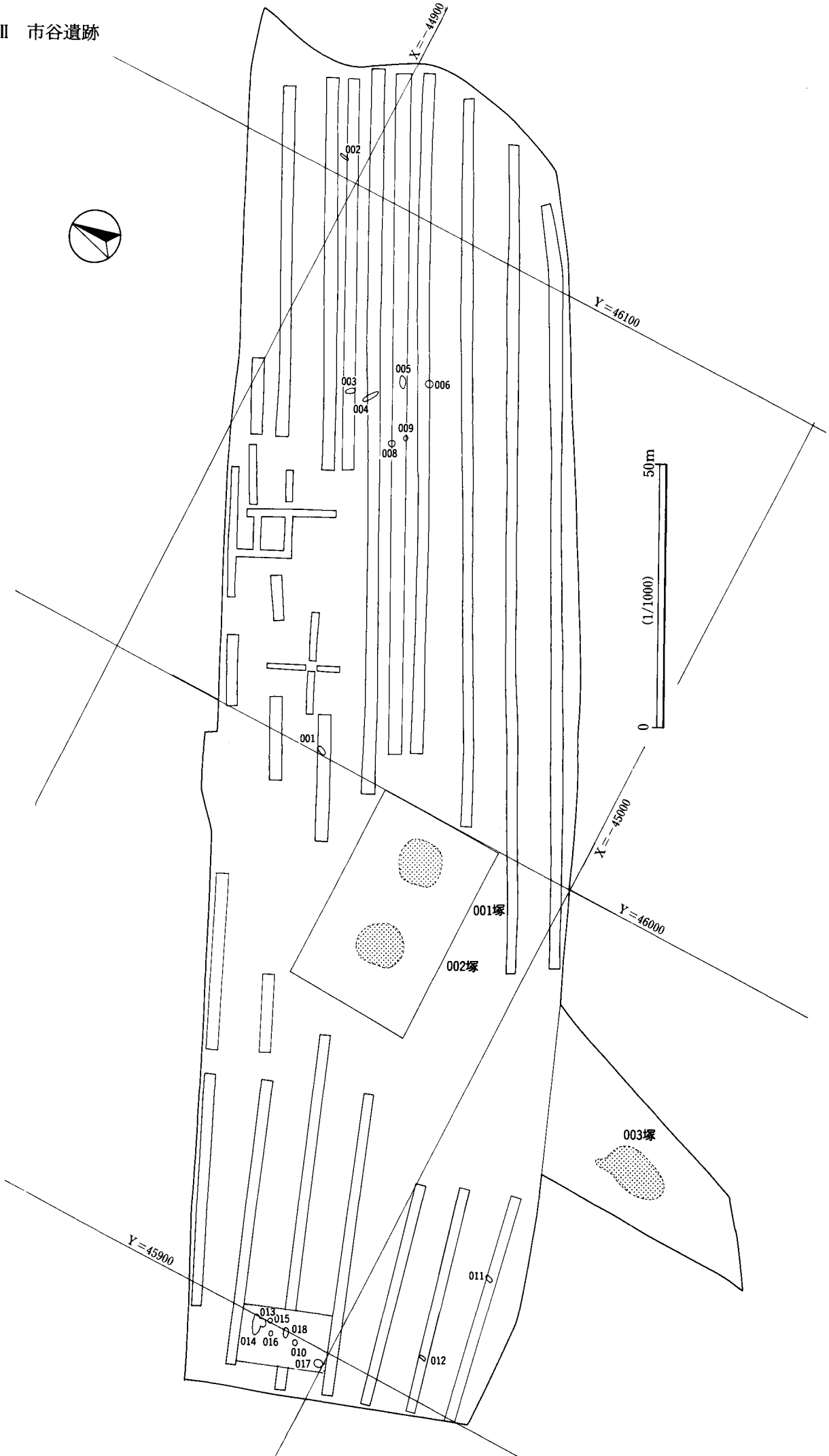
Ⅶ　市谷遺跡

1　遺跡の概要（第59～61図）

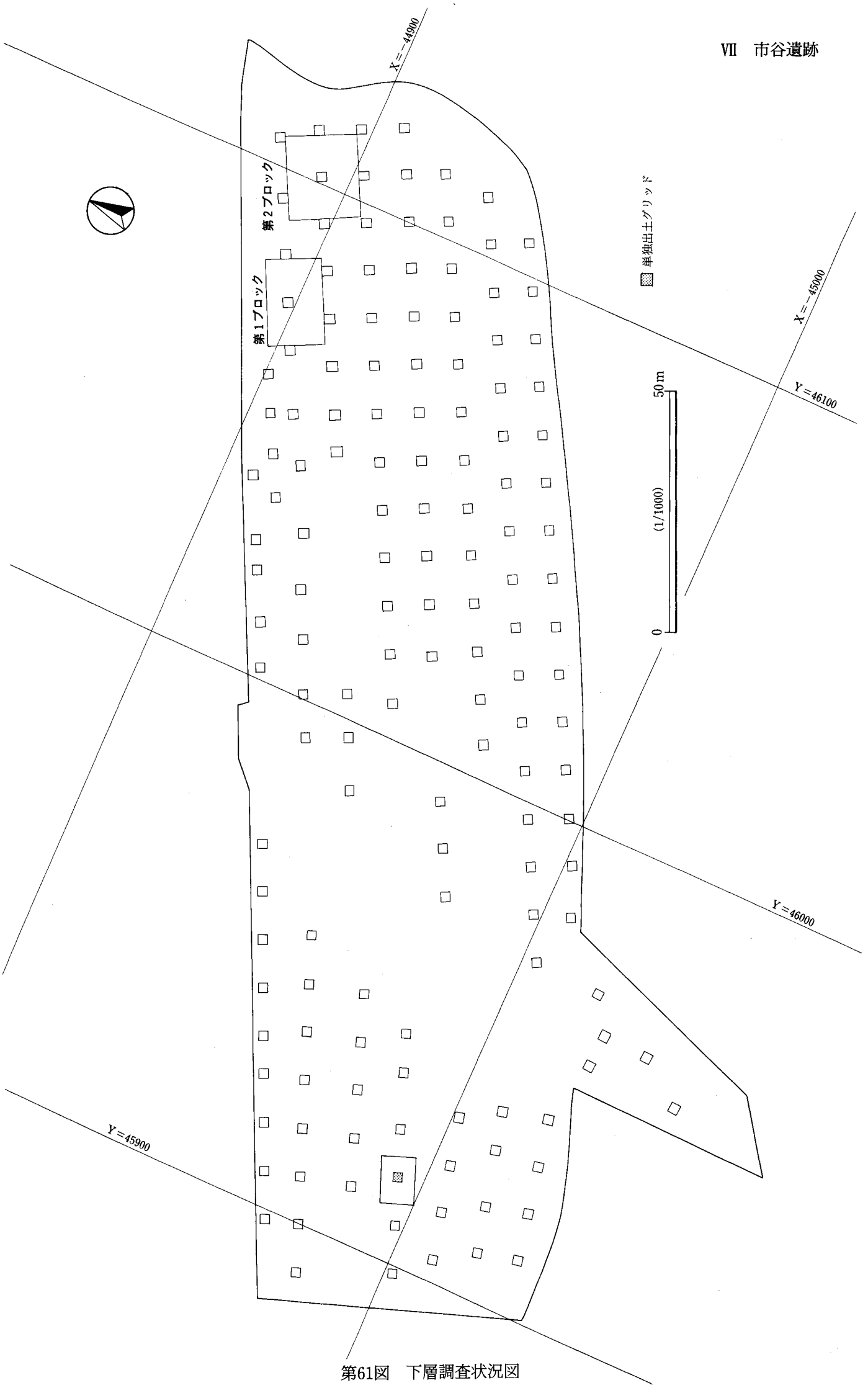
本遺跡は、東金市滝沢字市谷481他に位置する。調査対象面積は15,190㎡で、調査は用地取得の関係から3回に分けて行われた。第1回目の調査では、調査範囲の東側にあたる市道6067号線東側を調査した。上層の確認調査では、縄文時代の陥穴が何基か検出されただけであったので、その部分だけ広げて調査を終了した。地表から確認された塚2基の調査は、遺跡の立地条件から、滝沢古墳群の一部の古墳の可能性が想定されたため本調査を実施したが、やはり塚であることが判明した。下層の確認調査では旧石器が2地点より集中して出土したため、本調査をして、2ブロックを精査した。第2回目の調査では、前回の西側を調査した。上層の確認調査では、縄文時代早・前期の遺物包含層が一か所検出されたので、周囲を拡張して精査した。その他は遺構・遺物の密度が薄く、確認調査をもって終了した。下層の確認調査では、旧石器が1点検出されたので周囲を拡張したが、それ以上は検出されず確認調査をもって終了した。第3回目の調査では、第1回目の調査範囲のすぐ南側にある塚1基の周辺を調査した。塚からは盛土中から土器が検出されたただけであった。その他では上下層ともに、遺構・遺物は検出されず本調査は不要と判断された。調査期間は、平成5年10月1日から平成6年1月18日、平成6年4月6日から平成6年5月25日、平成6年11月8日から平成6年12月21日であった。



第59図　市谷遺跡周辺地形図



第60図　上層調査状況・遺構等配置図



第61図　下層調査状況図

遺跡は、九十九里地域の海岸平野を経て太平洋に流れ込む真亀川の上流部、十文字川によって開析された十文字谷の奥部滝沢支谷の南側に位置する。下総台地の東端にあたる油井台の最北端に位置している滝支台の北側にあたる。前述の新堀遺跡とは滝支谷の奥で更に枝分かれした谷をはさんだ、東隣りに位置する。また滝沢古墳群は南に接する。標高は56mを測り、北側の谷は標高30mで、比高26mを測る。

2検出した遺構と遺物

旧石器時代

旧石器時代調査は、15,190㎡の調査対象面積のうち、454㎡の本調査を実施した。ブロックは調査対象範囲北東側に近接して2地点で2か所のブロックが検出された。2か所のブロックは明確に出土層位が異なり二つの文化層が設定される。第Ⅰ文化層は、立川ローム層のIX層（第2黒色帯下部）に出土層位がある文化層で、2地点のうち西側で検出された1か所のブロックが該当する。このブロックを第1ブロックと呼称する。第Ⅱ文化層は、立川ローム層のIII層に出土層位がある文化層で、2地点のうち東側で検出された1カ所のブロックが該当する。このブロックを第2ブロックと呼称する。これらのブロックは各文化層で単独のブロックではあるが、2つの文化層を設定して説明していく。

第Ⅰ文化層

第1ブロック（第62・63図、第5表、図版37）

分布状況　調査区北東側で調査されたブロックである。調査区の南方向から樹枝状に延びる台地の付け根東側縁辺部に当たる。調査地点において現地形は緩やかに東側に傾斜している。

遺物総数は5点である。その分布は南側にまとまるが、1点が北側に離れて分布する。南北方向に細長い楕円形状に分布する。分布範囲は南北4.6m、東西2.0mを測る。垂直分布ではおよそ0.5mの高低差がある。土層断面への投影では、立川ローム層のIX層上部～X層上面に垂直分布が見られ、IX層下部に遺物集中が認められる。

母岩別資料　4母岩が認められ、点数のまとまる母岩はなく、すべて単独母岩あるいは2点ほどの点数構成となっている。母岩と器種の関係は、珪質頁岩2の単独母岩で石刃が出土している。

出土遺物　小規模なブロックであり、主要な器種は石刃1点と少ない。

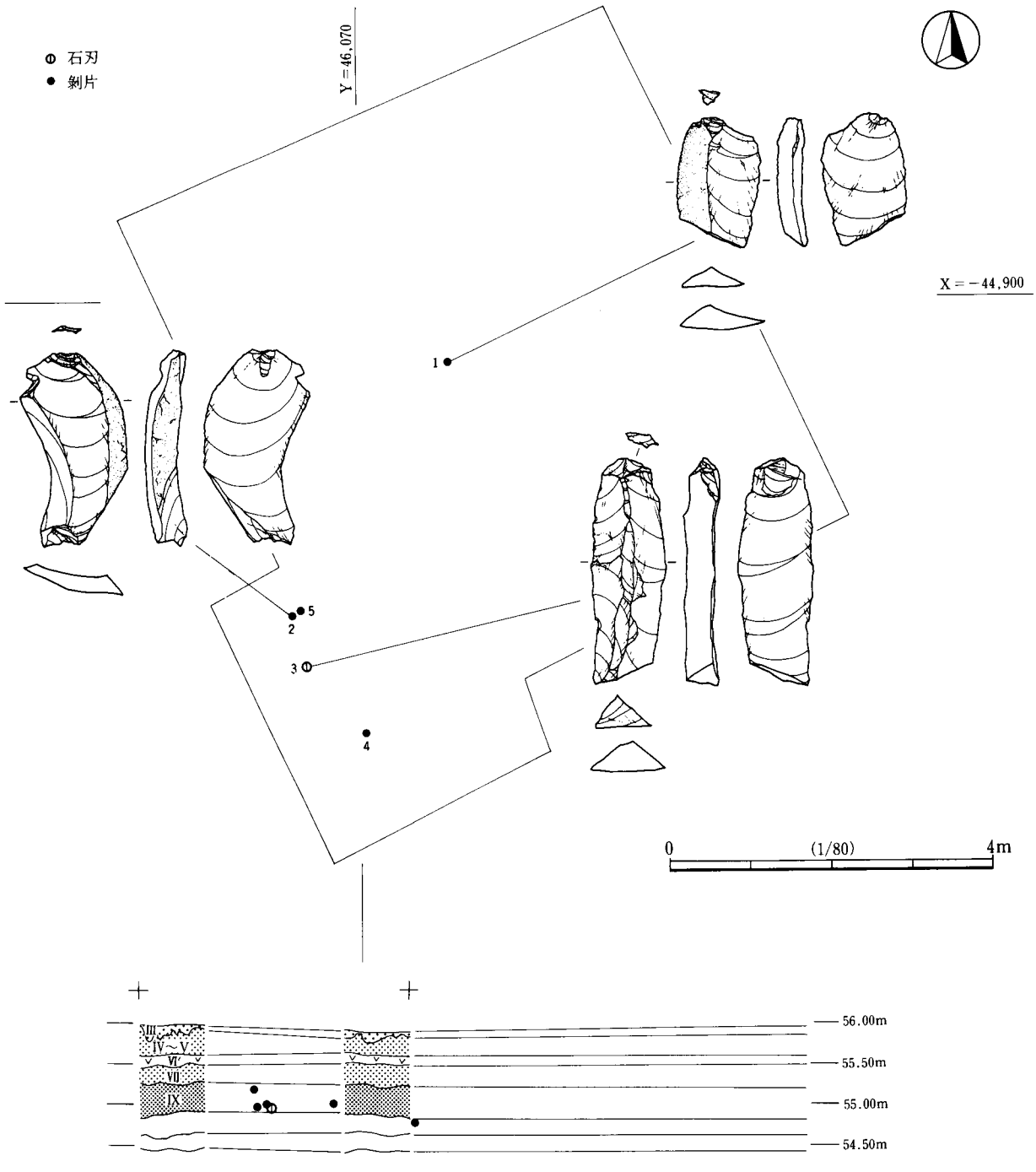
1は石刃である。中形石刃の範疇にはいる。平坦打面であり、比較的厚味のある幅の細いものである。背面構成を見ると、主要剝離方向と対向する剝離面が見られ、両設打面から剝片剝離された石刃であることがわかる。2～5は剝片である。2・3は縦長剝片で、4・5は横長剝片である。2・3共に石刃状の剝片で、縦長指向の強い剝片剝離手法が看取される。4・5は安山岩A2の同一母岩を石材とする。

第Ⅱ文化層

第2ブロック（第64～68図、第6表、図版37・38）

分布状況　調査区北東側で調査されたブロックである。第1ブロックの西側に近接する。調査区の南方向から樹枝状に延びる台地の付け根東側縁辺部から斜面部に当たる。調査地点において現地形は緩やかに東側に傾斜している。

遺物総数は16点である。その分布は西側にまとまるが、数点が東側に離れて分布する。東西方向に細長い楕円形状に分布する。分布範囲は南北3.2m、東西9.4mを測る。垂直分布ではおよそ0.4mの高低差がある。土層断面への投影では、立川ローム層のIII層上部～下部に垂直分布が見られ、III層上部に遺物集中が



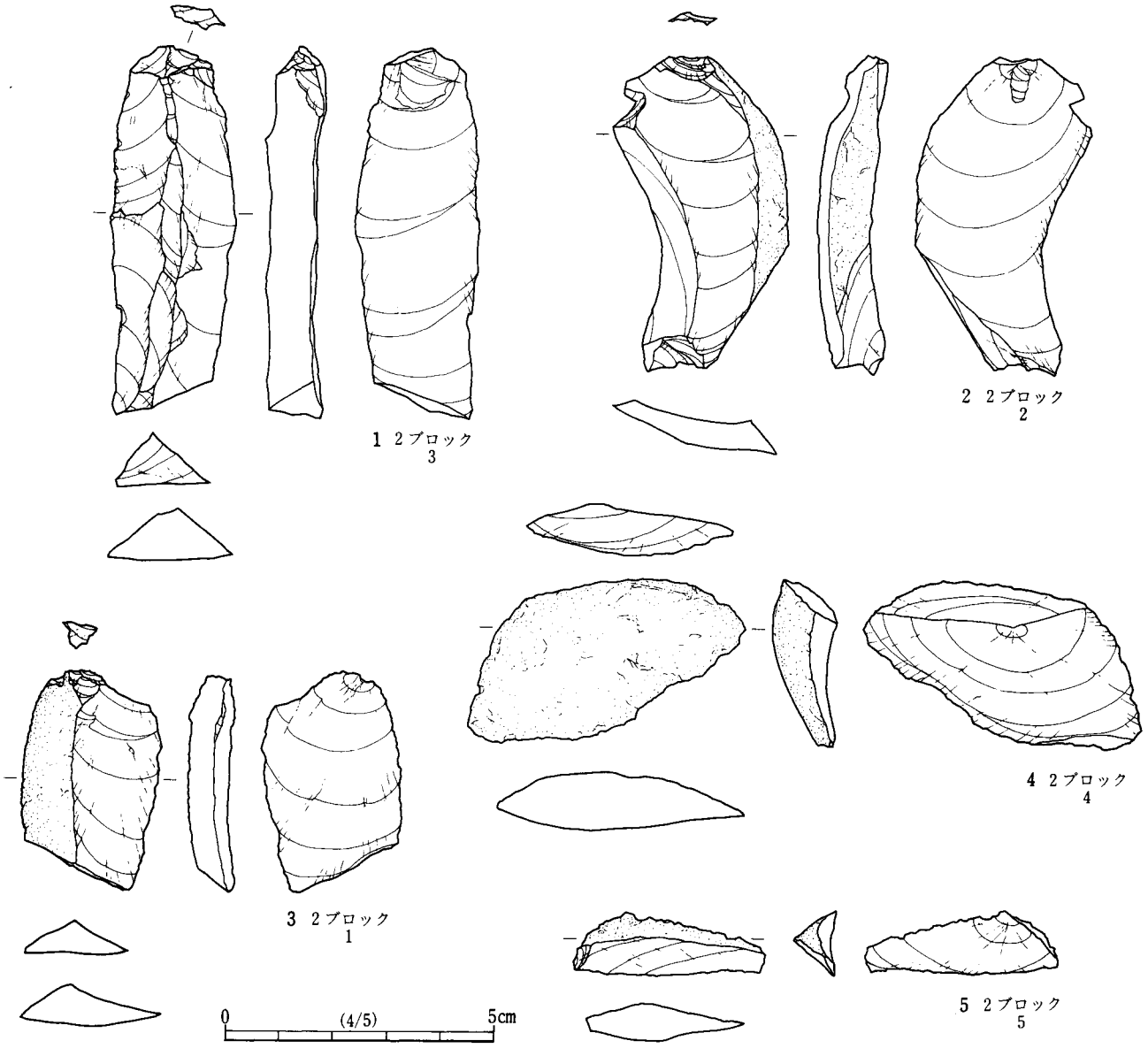
第62図　第１ブロック器種別分布

認められる。ブロック付近の立川ローム層の堆積は南西方向に緩やかに傾斜しており、土層断面は西側で投影しているため20cmほど高く投影されており、実際はⅢ層中部に遺物集中が想定される。

母岩別資料　８母岩が認められ、点数のまとまる母岩はチャート１で、他の母岩は単独或いは２点ほどの母岩となっている。チャート１は礫である。

出土遺物　小規模なブロックであり、主要な器種は石刃１点と少ないが、敲石・台石等の大型の石器が検出されている特殊なブロックである。

１は石刃とした。下端部を欠損し形状は明確ではないが、背面には平行した剝離面が観察され石刃としてよいと思われる。２はU剝片である。石刃状の剝片の下端部に刃こぼれ状の微細剝離痕が認められる。

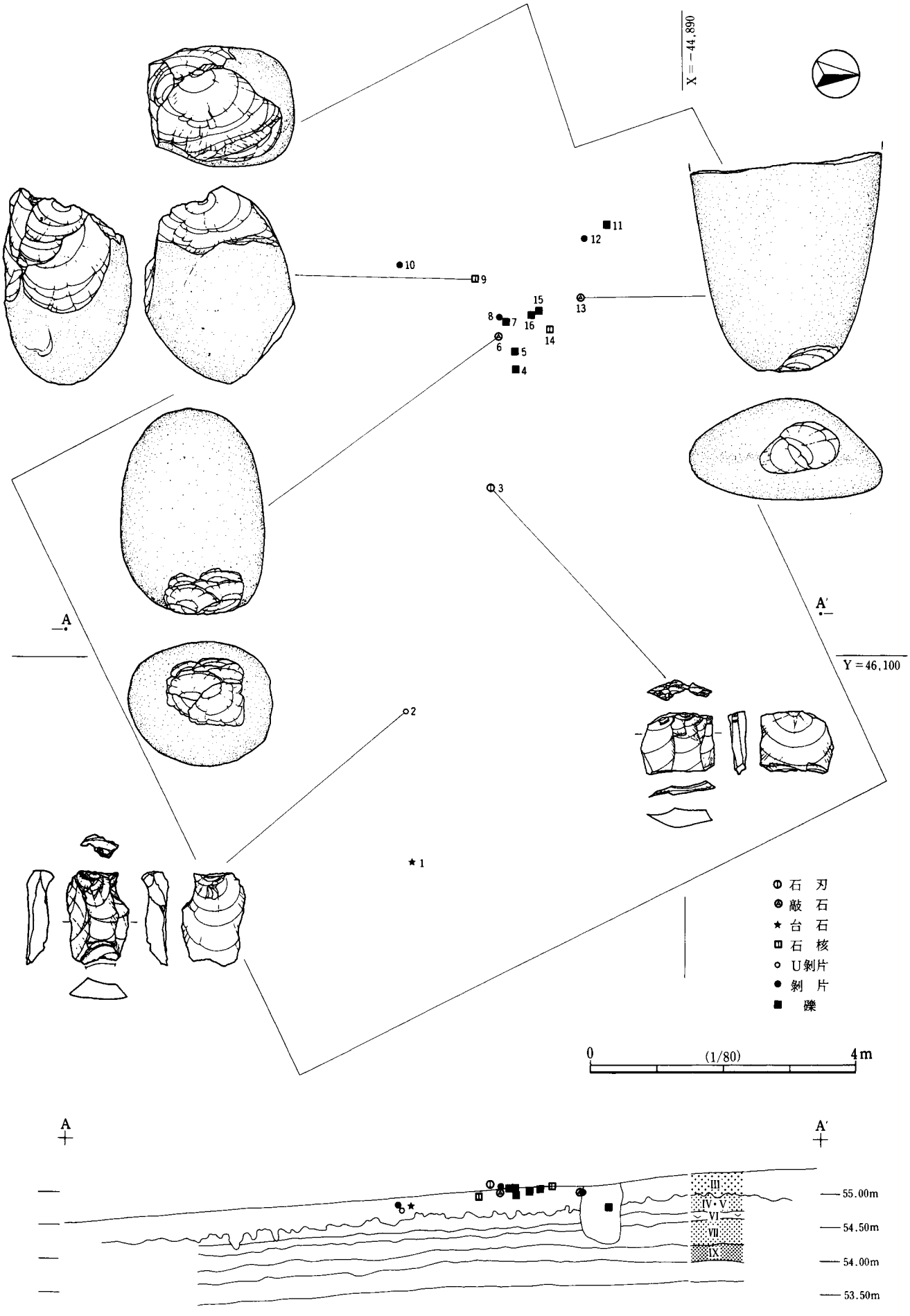


第63図　第1ブロック出土石器

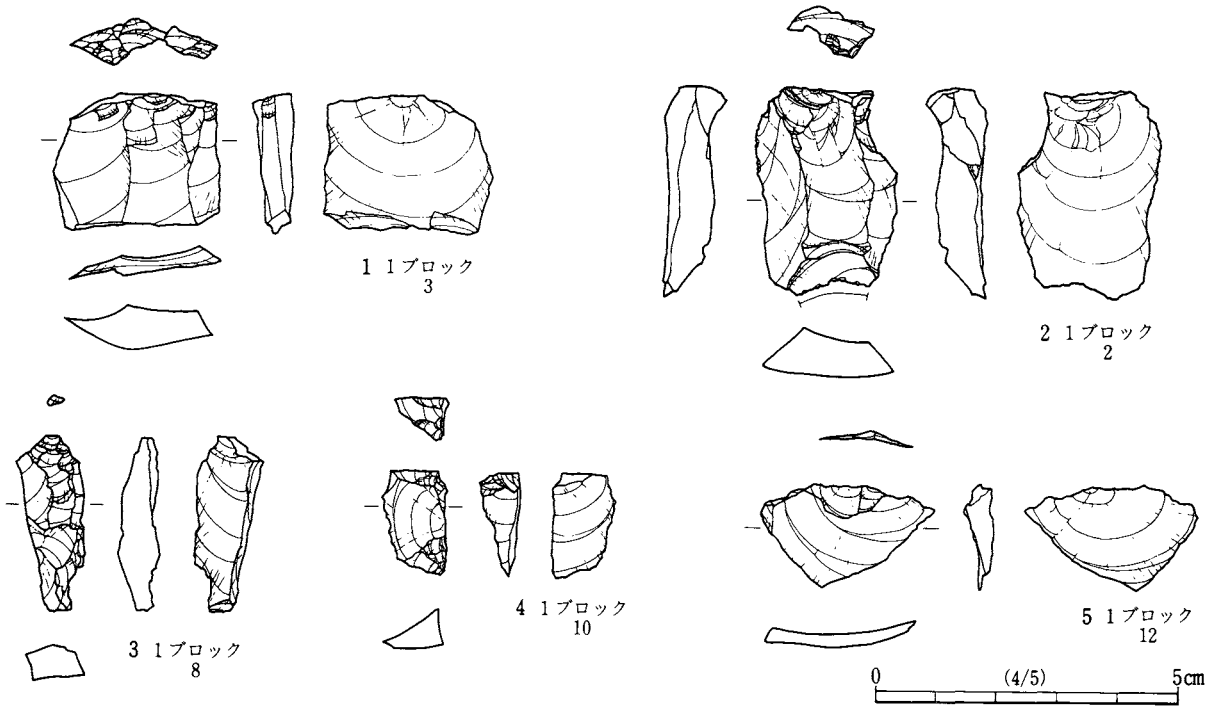
第5表　第1ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母岩
1	2ブロック1	剥片	38.9	25.6	8.2	7.9	3	H		○	○	1						−	B	安山岩A1
2	2ブロック2	剥片	58.7	33.0	12.8	14.9	2	H		○	○	2	2					O		珪質頁岩1
3	2ブロック3	石刃	68.6	23.3	11.4	16.0	1	H		○		4	3					−	B	珪質頁岩2
4	2ブロック4	剥片	20.3	52.1	11.8	16.1	4	H			○									安山岩A2
5	2ブロック5	剥片	11.5	36.0	8.4	2.1	5	C			○		1					F		安山岩A2

3～5は剥片である。3・4は縦長剥片、5は横長剥片である。6・7は敲石である。6は被熱しており、下端部に敲打痕と連続した敲打による剥離痕が看取される。7は上端部を欠損するが、下端部に敲打によると考えられる剥離痕が見られる。8は石核である。長軸7cmほどの楕円礫を素材としている。上端部を作業面として、剥片剥離作業が行われている。剥離作業は打面と作業面を交互に入れ替えるように進行し、少なくとも3回の剥片剥離が見られる。9は台石である。流紋岩を石材としている。大型のもので石皿のように中央部が窪む。風化が著しく明確な擦り面、打痕等は看取されないが、周囲を整形してあり台石と



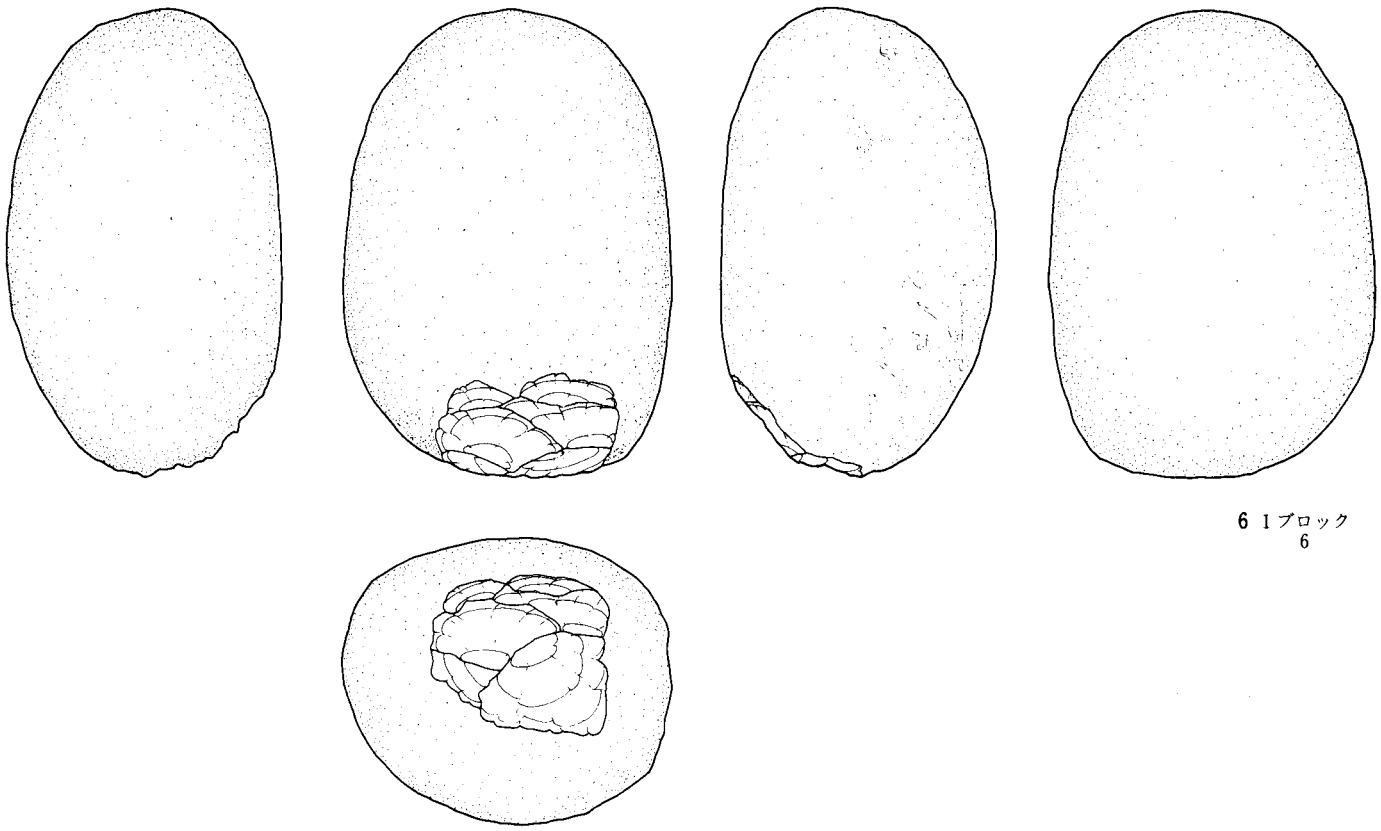
第64図　第２ブロック器種別分布

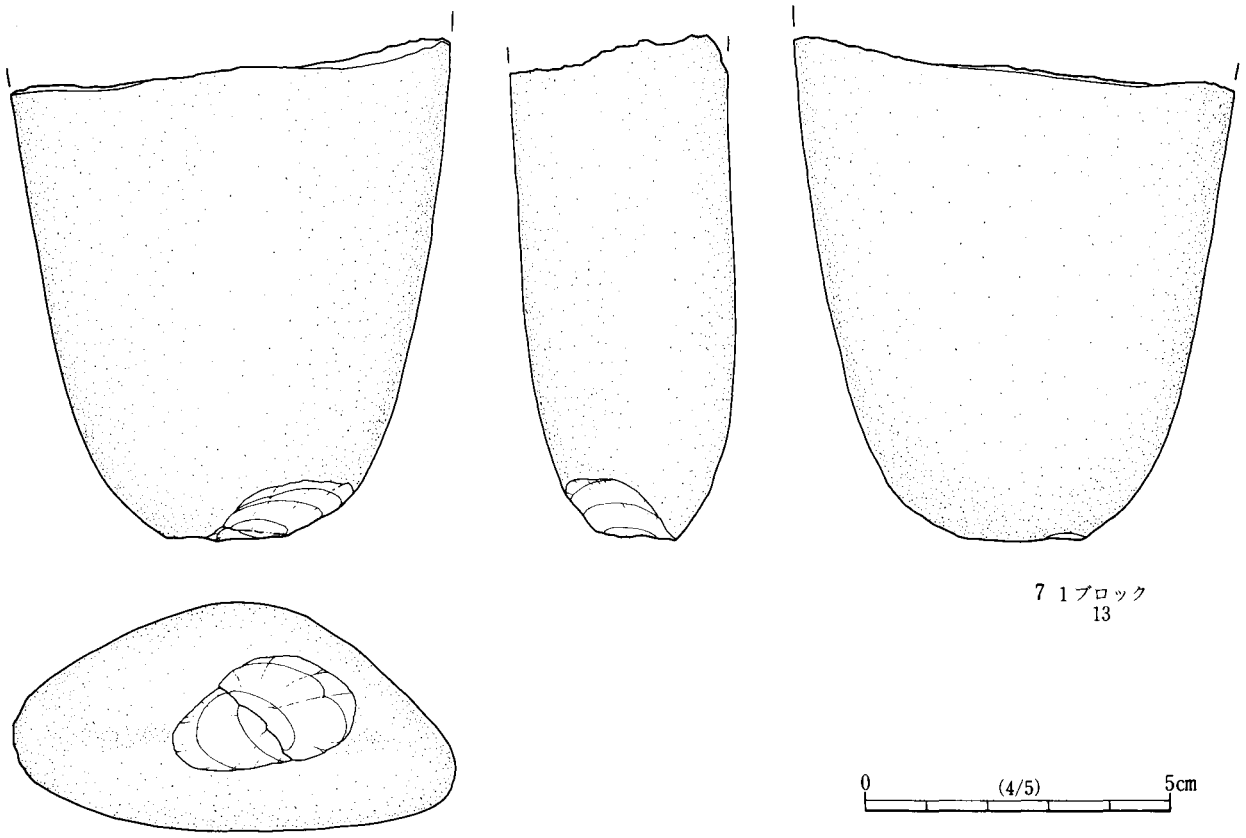


第65図　第2ブロック出土石器（1）

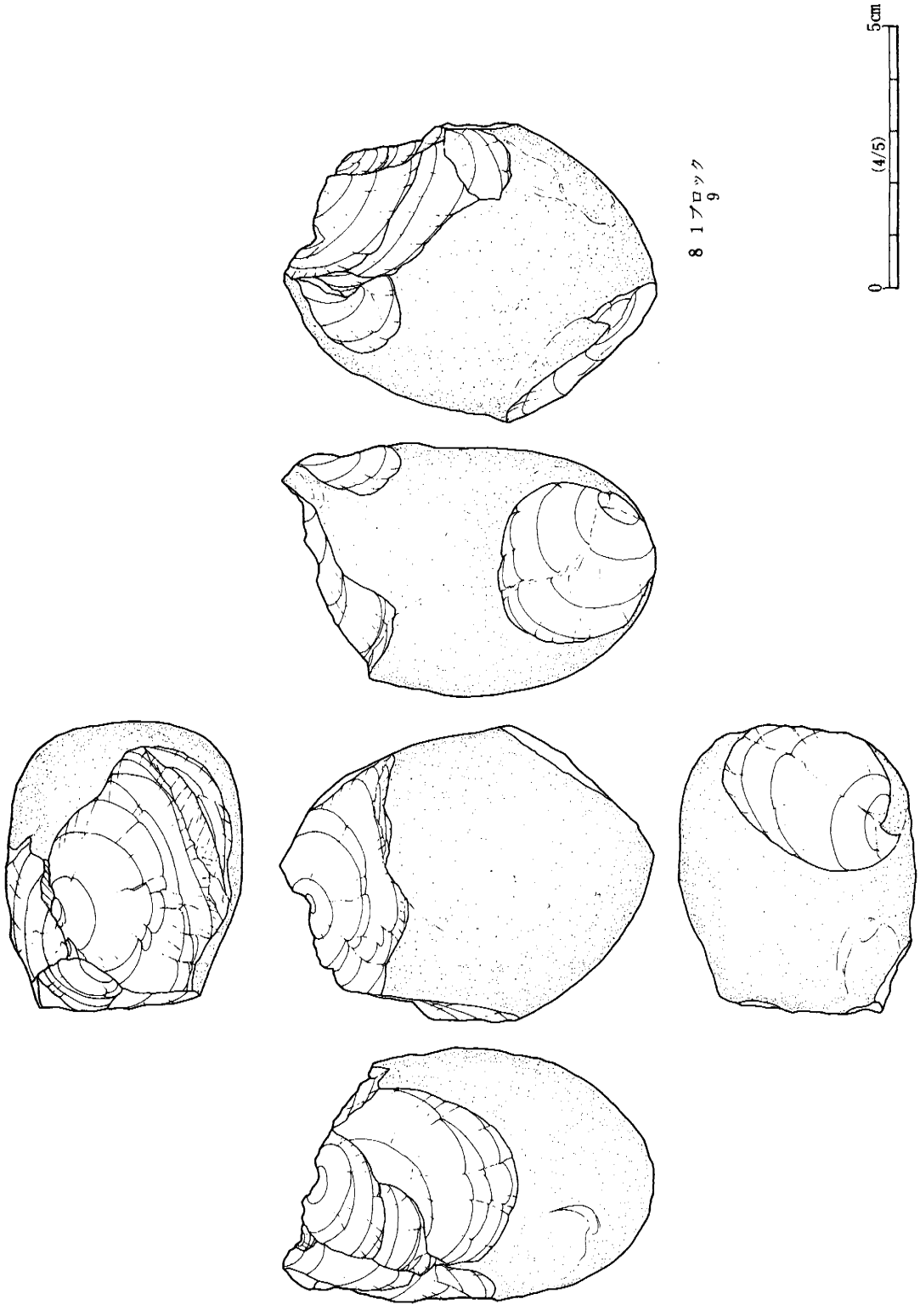
第6表　第2ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母岩
1	1ブロック1	台石	189.0	174.0	84.0		9													流紋岩1
2	1ブロック2	U剝片	34.8	22.9	9.1	6.6	2		○	○		3	1				B	F		珪質頁岩3
3	1ブロック3	石刃	22.1	17.7	6.6	4.7	1	3	○	○		3						—	M	珪質頁岩3
4	1ブロック4	礫	65.0	48.9	35.3	113.7														チャート1
5	1ブロック5	礫	73.0	39.5	24.2	71.0														チャート1
6	1ブロック6	敲石	76.1	54.0	46.0	67.1	6													石英斑岩1
7	1ブロック7	礫	23.6	14.7	11.7	2.4														チャート1
8	1ブロック8	剝片	28.3	10.8	6.6	2.0	3	H		○		4	1		2			O		珪質頁岩4
9	1ブロック9	石核	72.3	56.4	48.3	268.1	8													安山岩B1
10	1ブロック10	剝片	16.7	11.3	7.2	0.9	4	H	○					3				F		珪質頁岩5
11	1ブロック11	礫	25.8	15.5	12.2	3.6														チャート1
12	1ブロック12	剝片	16.6	28.3	3.5	1.3	5	—	—	—		3						H	H	珪質頁岩5
13	1ブロック13	敲石	81.0	72.7	37.0	284.2	7													ホルンフェルス1
14	1ブロック14	石核	137.0	91.3	56.0	725.0														ホルンフェルス1
15	1ブロック15	礫	60.1	53.1	17.7	72.6														チャート1
16	1ブロック16	礫	78.0	62.9	32.6	154.1														チャート1

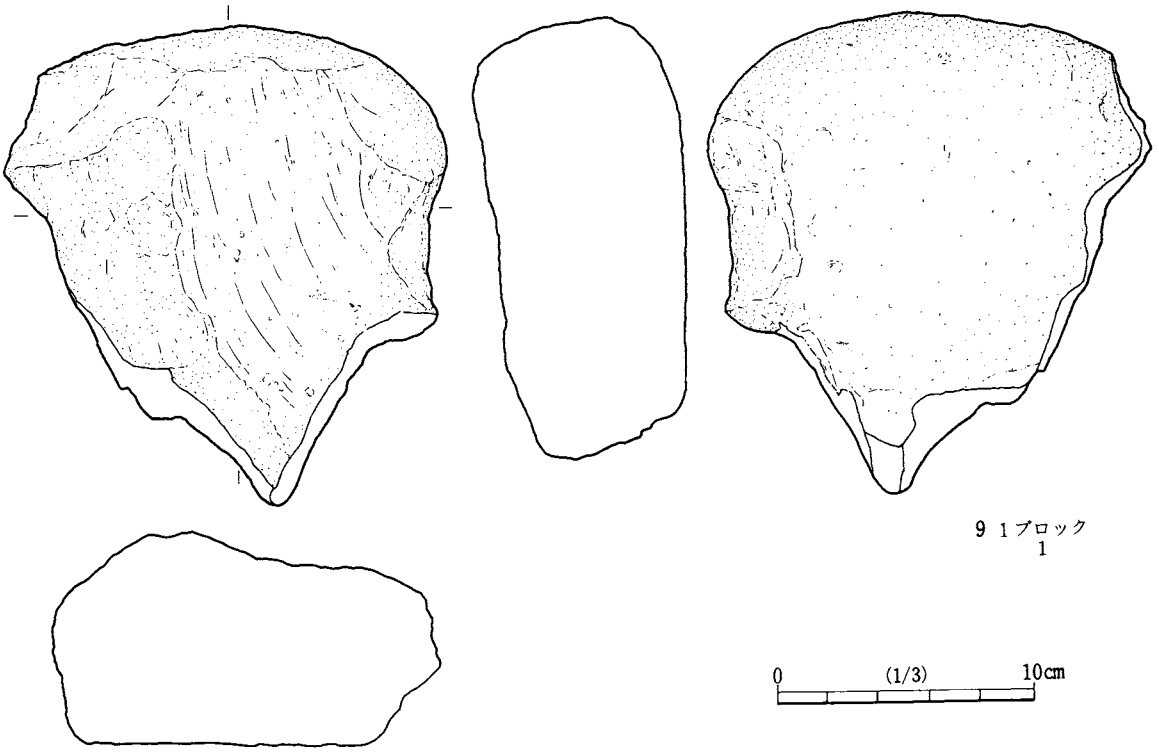




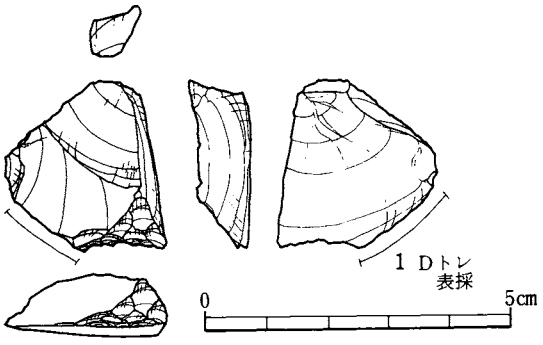
第66図　第２ブロック出土石器（2）



第67図　第２ブロック出土石器（3）



第68図　第２ブロック出土石器（4）



第69図　単独出土石器

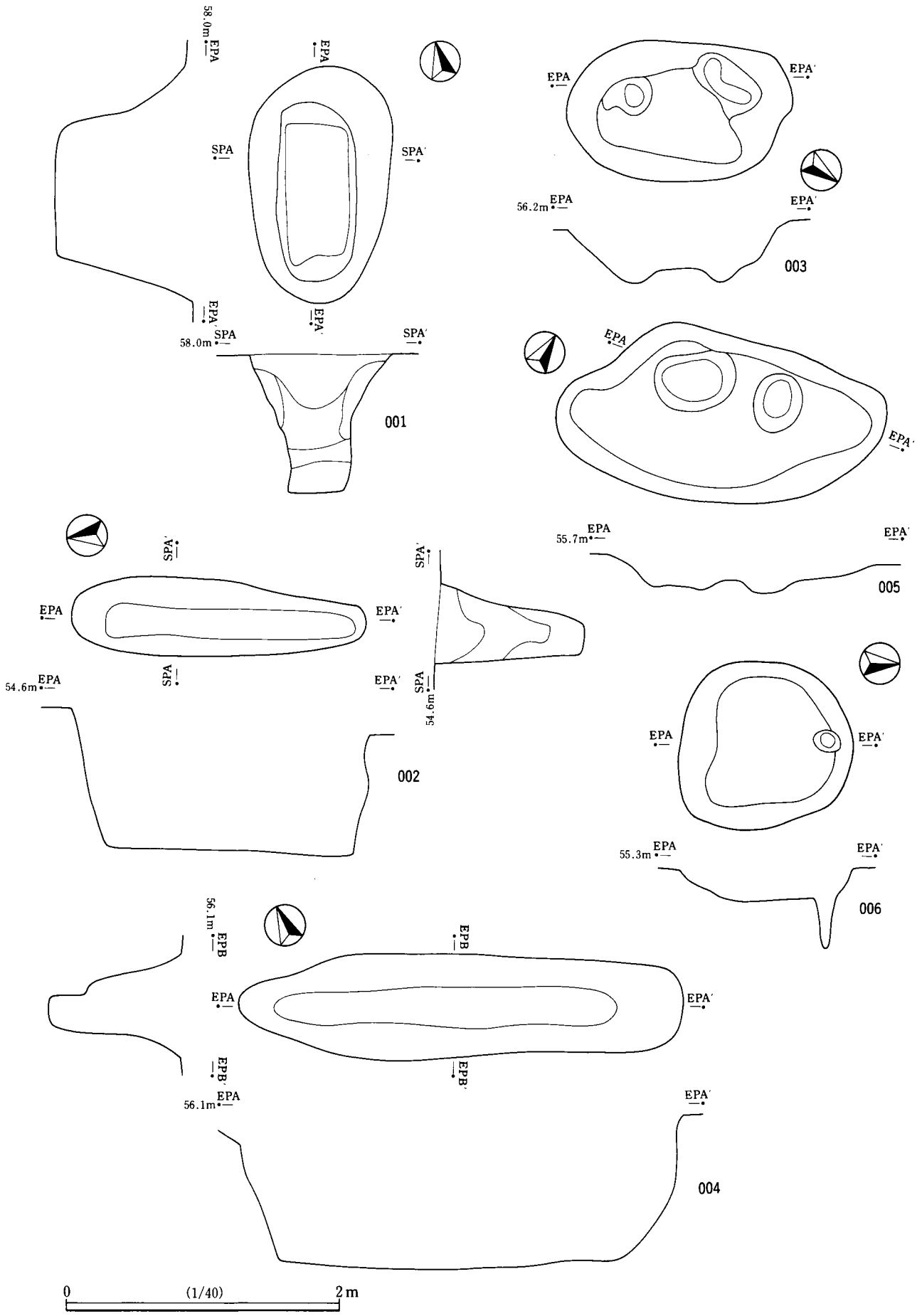
第７表　単独出土石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母岩
1	Dトレ表採	削器	25.9	26.1	12.7	5.7	1	H				1		1			B	F	R	チャート２

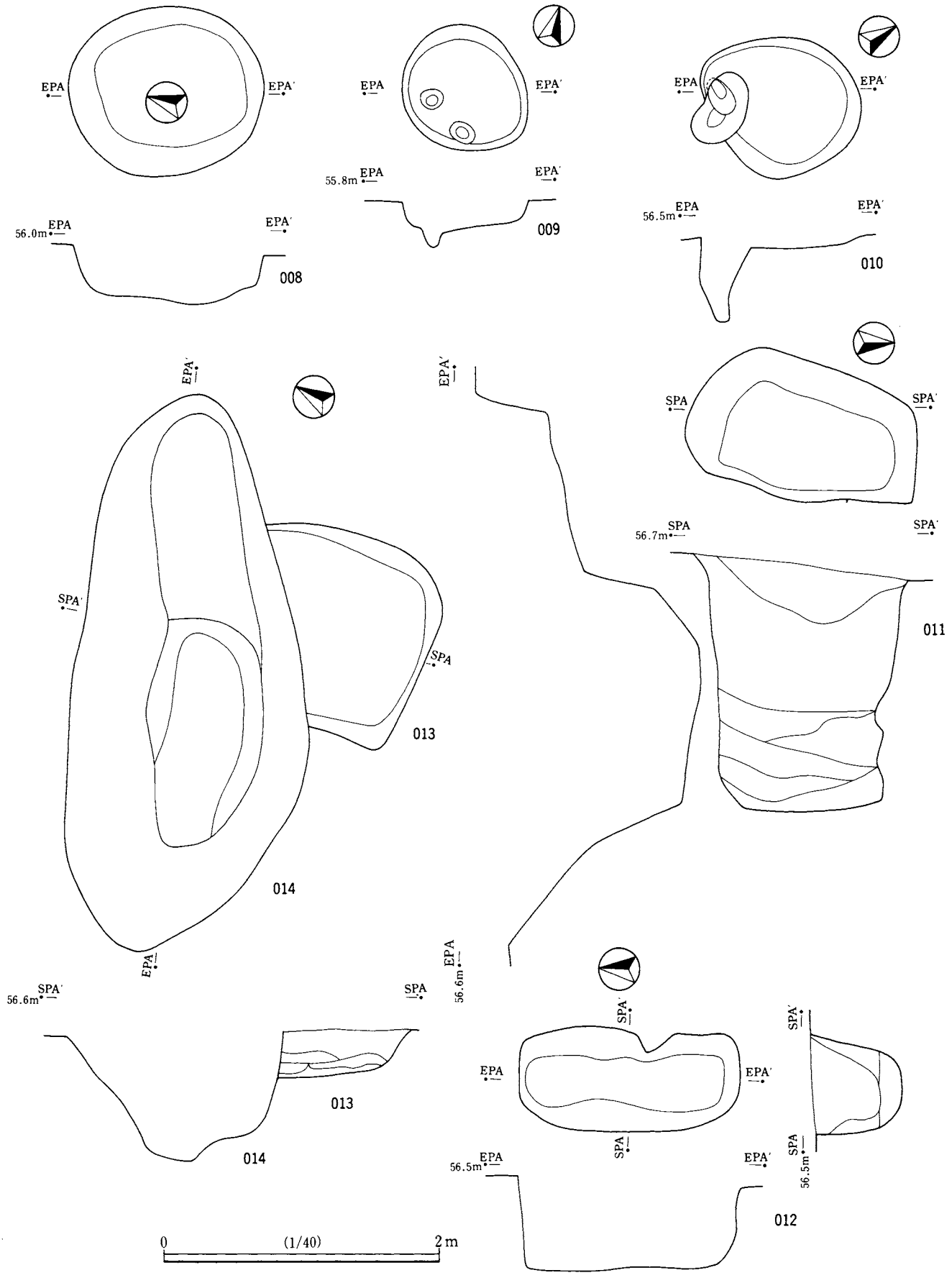
した。

単独出土石器（第69図、第７表）

Dトレンチからチャート製の削器が表採されている。やや分厚い剝片を切断して剝片の端部をノッチ状に調整を施している。また剝片縁辺には微細な剝離痕が観察される。


001
002
003
004
005
006
SPA
SPA'
EPA
EPA'
EPB
EPB'
58.0m
56.2m
54.6m
55.7m
55.3m
56.1m
0
(1/40)
2m

第70図　土坑等（1）


EPA
EPA'
56.0m
008
55.8m
009
56.5m
010
SPA
SPA'
56.7m
011
013
014
56.6m
012
0
(1/40)
2m

第71図　土坑等（2）

遺構

００１陥穴（第70図、図版18）

本遺構の規模は1.7m×1.1mで、楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。掘り込みの深さは約1mで、底面は0.9m×0.5mの長方形で平坦である。長軸方向はほぼ北を向き、縦断面両端は急角度に掘り込まれている。また短軸方向からみるとTピットとよばれる形に掘り込まれている。

００２陥穴（第70図）

本遺構の規模は2.2m×0.6mで、長楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。掘り込みの深さは約1mで、底面は1.8m×0.2mの長楕円形である。長軸方向はほぼ北を向き、縦断面両端はほとんど垂直に掘り込まれている。

００３土坑（第70図、図版18）

本遺構の規模は1.7m×1.1mで、楕円形である。掘り込みの深さは約0.35mで、長軸方向は北からやや西に向く。底面に二つ不整形な小ピットがあり、深さは0.1mほどである。掘り込みは底面に向けなだらかである。

００４陥穴（第70図、図版19）

本遺構の規模は3.3m×0.8mで、長楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。掘り込みの深さは約1mで、長軸方向はほぼ北を向く。掘り込みをみると縦断面両端は急角度に掘り込まれている。

００５土坑（第70図、図版19）

本遺構の規模は2.4m×1.3mで、不整形である。掘り込みの深さは約0.2mと浅く、底面には0.5m×0.4mと0.4m×0.3mの二つの小ピットがあり、深さは約0.05mである。

００６土坑（第70図）

本遺構の規模は1.3m×1.2mで、ほぼ円形である。掘り込みの深さは約0.2mで、底面に一つ小ピットがあり、直径0.15m、深さ0.4mを測る。掘り込み方はなだらかである。

００８土坑（第71図、図版19）

本遺構の規模は1.4m×1.3mで、少し角張った円形である。掘り込みの深さは約0.3mで、掘り込みの角度は急で、底面には少し凹凸がある。

００９土坑（第71図、図版20）

本遺構の規模は1m四方で、ほぼ円形である。掘り込みの深さは約0.2mで、底面に二つ小ピットがある。直径は二つとも約0.2mで、深さは一つは浅く、もう一つは約0.1mである。

０１０土坑（第71図）

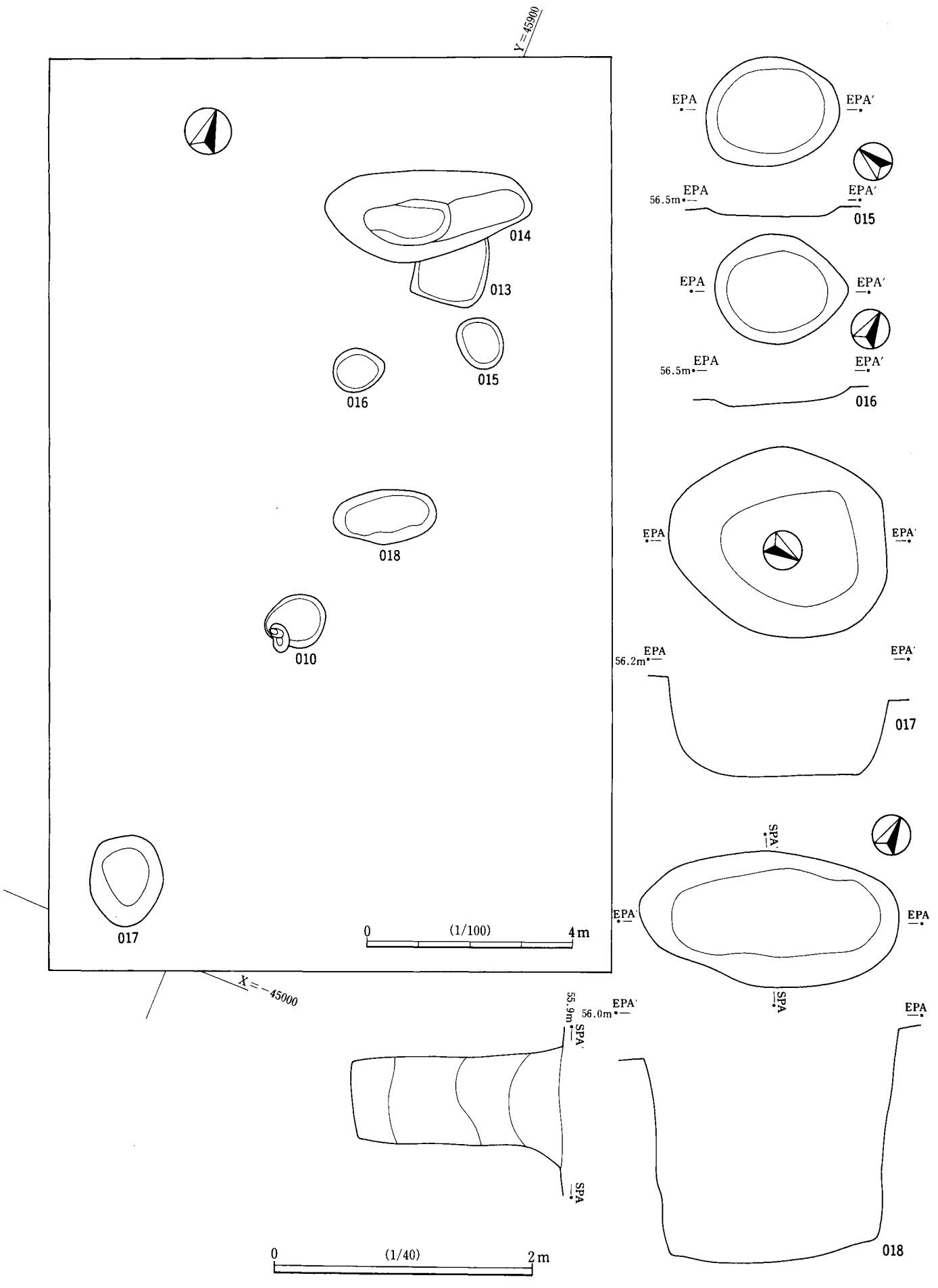
本遺構の規模は1.2m×1.0mで、ほぼ円形である。掘り込みの深さは約0.1mと浅く、底面南部に小ピットがあり0.6m×0.3mの楕円形を呈し、深さは0.6mを測る。

０１１陥穴（第71図、図版20）

本遺構の規模は1.7m×1.0mで、ほぼ隅丸長方形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。掘り込みの深さは約1.8mで、底面も1.2m×0.7mのほぼ隅丸長方形を呈する。長軸方向は北からやや東を向き、掘り込みをみると縦断面両端はほとんど垂直である。

０１２陥穴（第71図、図版20）

本遺構の規模は1.6m×0.8mで、ほぼ隅丸長方形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。掘り込みの


Y＝45900
X＝－45000
014
013
015
016
018
010
017
0
(1/100)
4m
EPA
EPA′
56.5m
015
016
56.2m
017
SPA′
SPA
56.0m
55.9m
018
0
(1/40)
2m

第72図　土坑等（3）

深さは約0.6mで、底面も1.4m×0.4mの隅丸長方形である。長軸方向はほぼ北を向き、掘り込みをみると縦断面両端はほとんど垂直である。

０１３炭焼窯（第71図）

本遺構は０１４土坑と接しており、０１４土坑の掘り込みと重なるため本遺構の南半分のみ形状が確認された。遺構の規模は1.4m四方の四角形を呈する炭焼窯とみられる。掘り込みの深さは約0.35mで、底部に接する層より炭化物と焼土を検出した。

０１４土坑（第71図）

本遺構の規模は4.0m×1.7mで、ほぼ長楕円形といえる。長軸方向は北東よりやや東に傾く。底面も長楕円形を呈するが、２段に分かれ長軸の南側が約1.6mと深く、北側が約0.6mと浅くなっている。

０１５土坑（第72図）

本遺構の規模は1.0m×0.8mで、楕円形である。掘り込みの深さは0.1mもなく非常に浅い。本遺構の北西数十cmのところに０１３炭焼窯が接している。

０１６土坑（第72図）

本遺構の規模は1.0m×0.8mで、楕円形である。掘り込みの深さは0.1mもなく非常に浅い。０１５土坑と０１８陥穴の中程に位置する。

０１７土坑（第72図）

本遺構の規模は1.7m×1.5mで、卵形を呈する。掘り込みの深さは約0.6mで、掘り込みをみると底面に向かって急角度に掘り込まれている。

０１８陥穴（第72図、図版21）

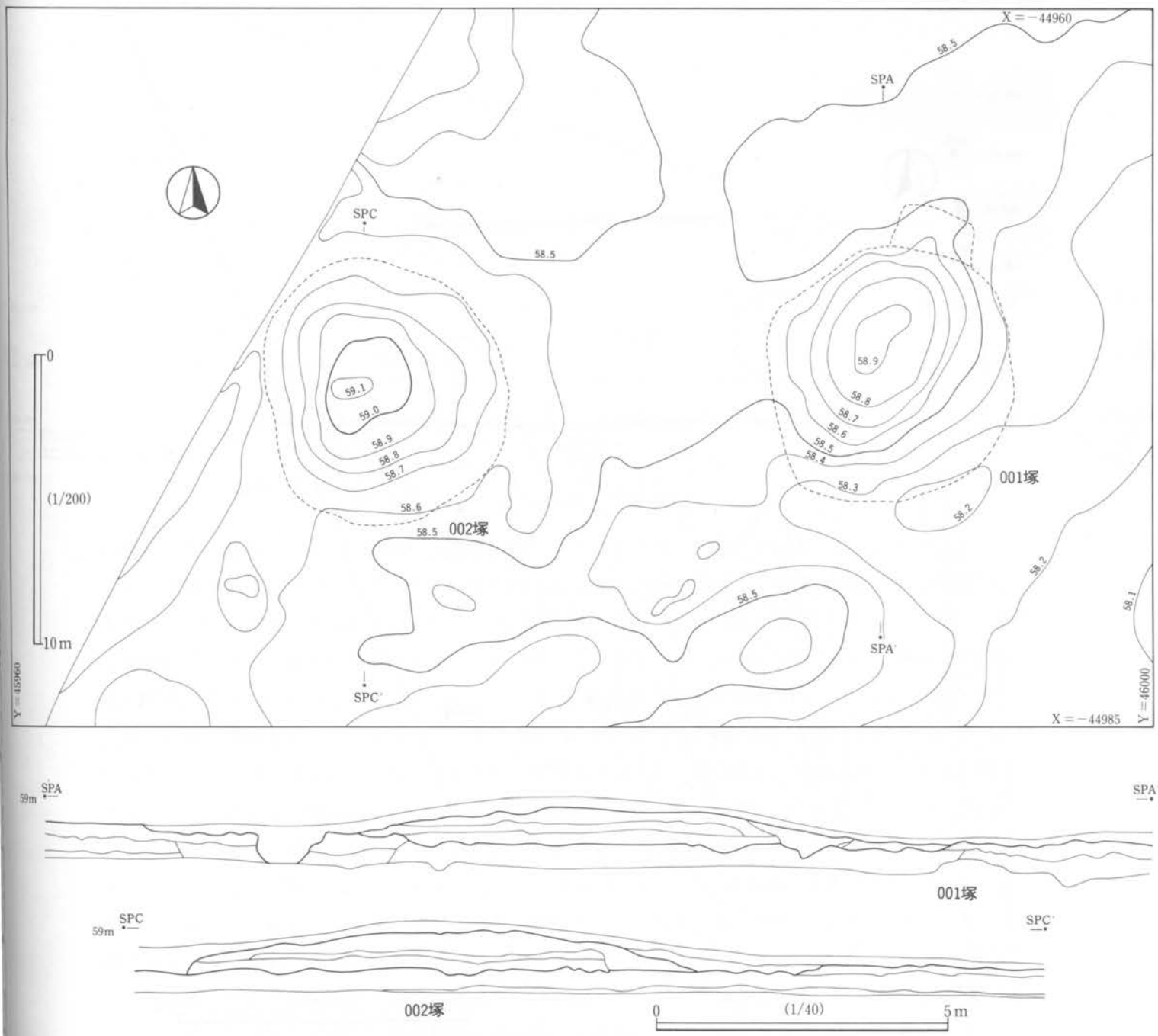
本遺構の規模は、2.0m×1.0mで、楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。掘り込みの深さは約1.7mで、底面も1.6m×0.6mの楕円形で平坦である。長軸方向はおよそ北東を向き、縦断面両端はほぼ垂直に掘り込まれている。

００１塚（第73図）

遺跡のやや西側をほぼ南北に縦断する市道の東側に接して２基の塚が存在し、西側のものは００２塚、東側のものを００１塚として調査を実施した。西側約10mには００２塚が存在し両者はほぼ東西方向に配置されている。調査着手前の状況では山林中に低い地膨れが存在するという状況であった。測量した結果によると、直径8.5m～9mの円形で、盛土の高さは約0.6mの低い盛土が遺存している。盛土の断面観察によっても明瞭な盛土の遺存範囲は7.1mで、高さは0.6mであった。ここから流出した分を考えても当初の規模は、直径10mほどの円形であろうと見られる。高さの復元は難しいがせいぜい２m程度のものであったと見られる。円形の形態の北側に幅2.5m、長さ1.5mの長方形の張り出し状の低壇があり約0.1m周囲より高くなっていた。本来北側に低壇を設けたものか、それとも盛土の崩壊の途中で壇状に整形されてものかは判断が付きかねる。盛土の周囲には古墳の周溝に相当するような溝等の遺構・掘り込みは確認されなかった。盛土はローム土を含む黒褐色系の土で盛り方は柔らかかった。盛土下には何の遺構も検出されなかった。盛土内には少量の土師器・須恵器片がみられたが図示できるようなものはなかった。００２塚共に、滝沢地区に多くみられる塚のうちの一つと見てよいだろう。

００２塚（第73図）

００１塚の西側約10mに位置し、西側すぐには市道がほぼ南北に走っている。この市道は古くから道と

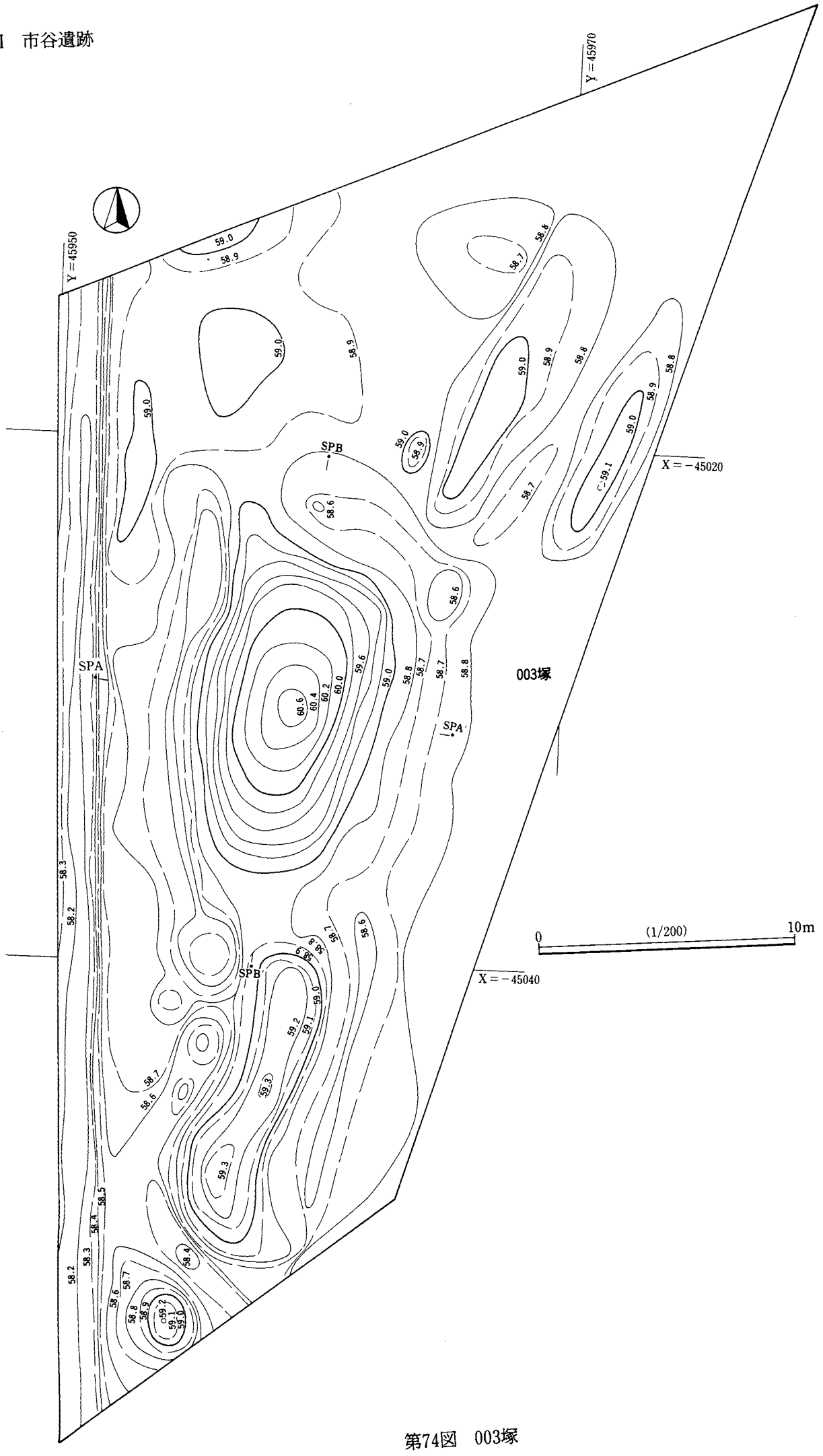


第73図　001塚・002塚

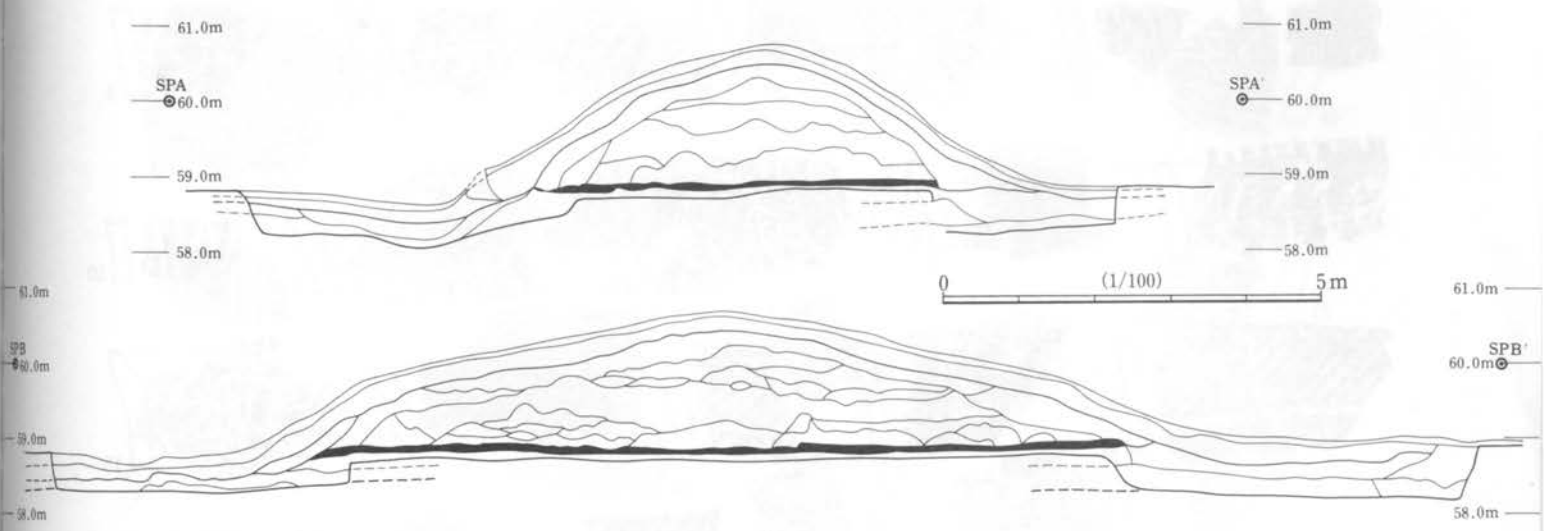
して使われていたようで、道に隣接して存在する東西に並存する２基の塚というとらえ方でよいと思われる。形態はほぼ円形で、直径約９m、現存する高さは００１塚よりやや低く0.5mであるが、その差はほとんどないといってよい。００１塚にみられたような張り出し状の低壇はなく、古墳周溝状の溝なども検出されなかった。盛土下にも遺構等は何も検出されなかった。盛土は００１塚と同様にローム土を含む黒色土の柔らかな堆積のものであった。００１塚、００２塚共に道の脇に位置する塚で、地区の境界、祭祀の土壇等の機能が考えられようが、現況では盛土の遺存も悪く、塚上に存在したであろう祭祀、供養等の際の供献物等も削平されて、流出して消滅したものと見られる。遺物は００１塚同様に盛土内から土師器・須恵器片が少量検出されたが、図示できるようなものはなかった。

００３塚（第74・75図、図版17・18）

先述の００１塚、００２塚とはやや隔たり、南方に約60m隔たっている塚である。００１塚、００２塚



第74図　003塚



第75図　003塚土層断面図

の存在した市道のすぐ東側に位置し、道脇の塚という立地は先の２基と変わらない。前者は２基並列しているが本遺構は単独で存在している。形態も前者と異なり円形ではなく、南北方向に長く、長楕円形とでも呼べばよいであろうか南北方向の長さ約13m、東西方向の長さ８～９ｍといびつである。但しこの形態は西側の道によって盛土が削平され土手状の形態になったとの地元の方の話もある。北側はやや直線的になり南側は弧状に盛土がなっている。盛土の高さは、約1.9mで比較的遺存がよいといえる。盛土はローム土を少し含む黒色土系のものが多く、しまりのないものであった。盛土内には焼土を含む層が認められ、旧表土上にも一部で焼土の分布がみられたが山焼き等で焼き払った炭化物と焼土と考えられる。盛土の遺存がよいため旧表土の確認ができた。盛土の東西両側を主として、南北側にもかろうじてわかる程度だが、南北方向のやや浅い溝状の窪みがみられ、深さは最大で0.2mほどある。また塚の南側には、高さ0.4mほどの高さの高まりが長さ12mほど認められ、更にその南側に径３ｍ～４ｍの不整円形の高さ0.6mの盛土状部分が認められ、極めて小規模な塚であった可能性も考えられる。塚上には石碑等の建造物はなかった。盛土中からは土師器・須恵器の小片が少量検出されたが、図示できるようなものはなかった。

００１塚、００２塚、００３塚の３基は共に道の傍らにあり、それも道の東側に位置し、古い道路の交差点（分岐点）近くに位置し、石造物等の構築物・埋蔵物はなかった。また調査区の南側には更に塚が存在し、滝沢古墳群とされているがこれらについても塚の可能性が十分に考えられる。

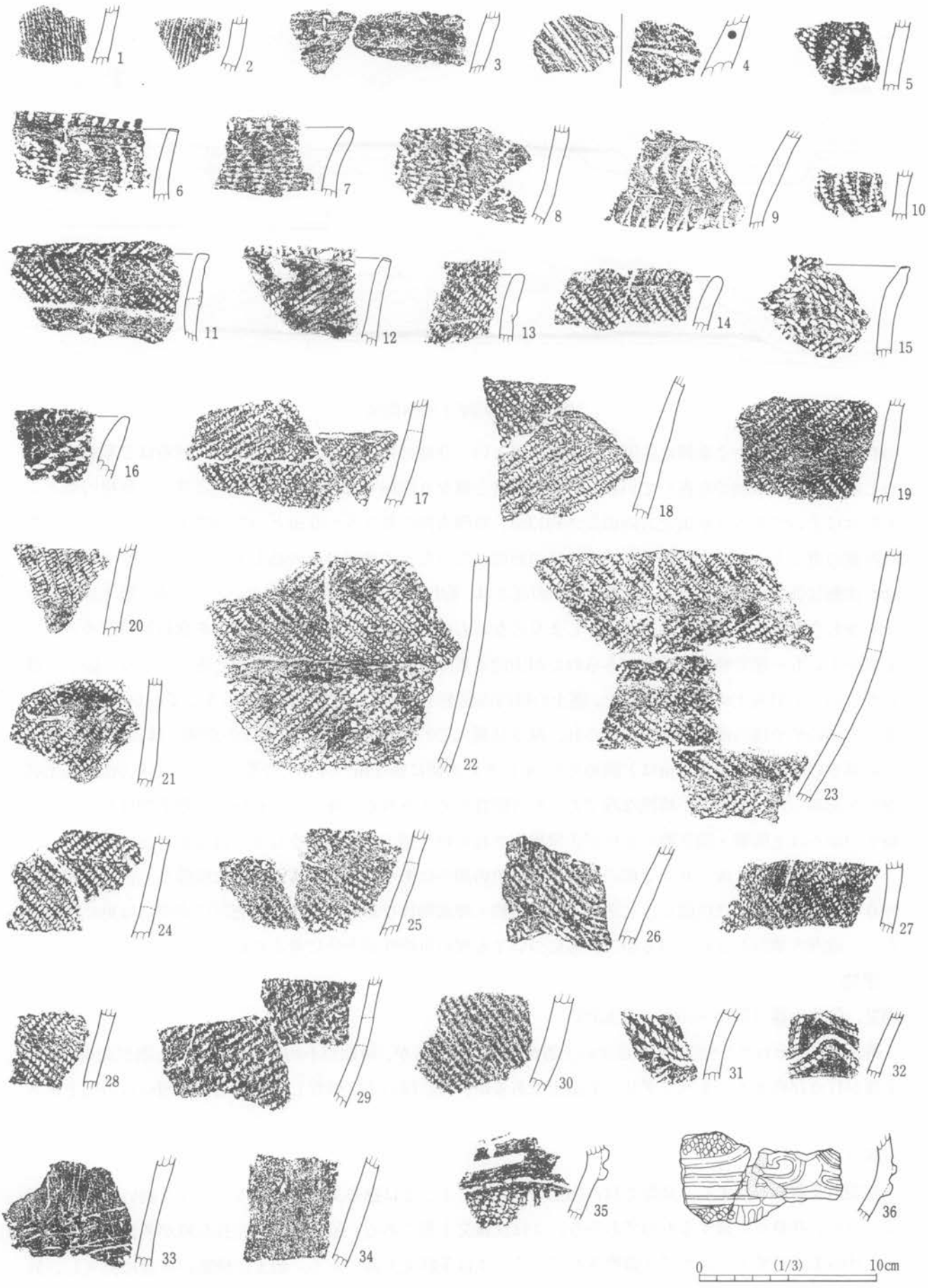
遺物

縄文、弥生土器（第76～80図、図版52）

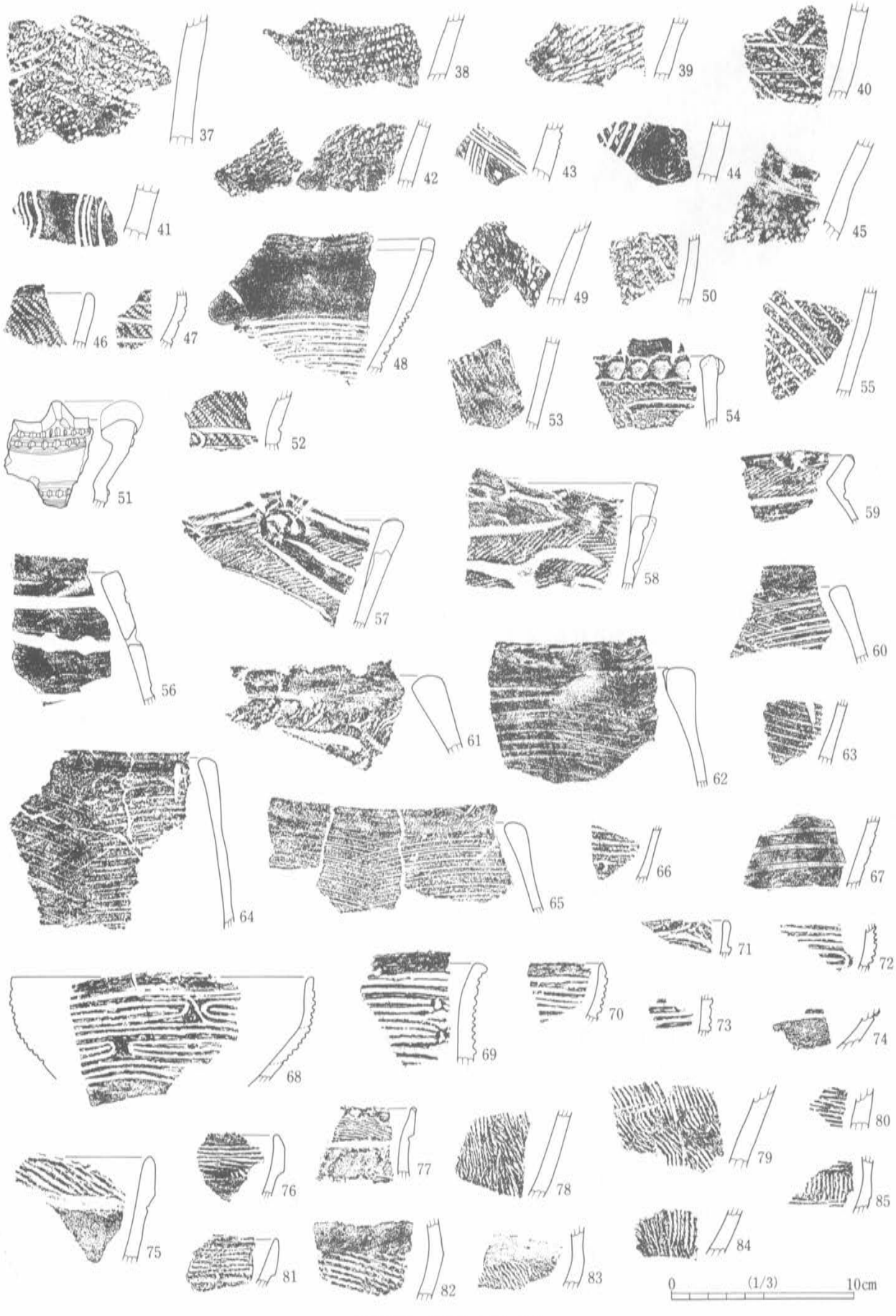
縄文、弥生あわせて全部で230点余の土器が出土しているが、時期が不明な縄文施文の土器が32点、無文土器が17点存在する。すべてグリッド出土であるが、特に塚の下に残存していた旧表土層からの出土が多い。

Ⅰ群（１～４）

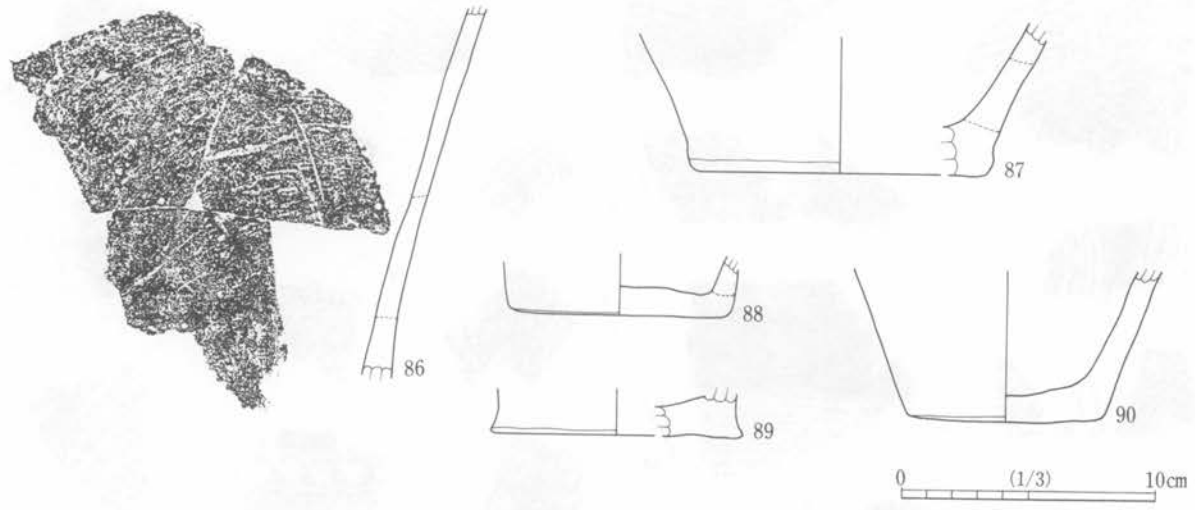
早期の土器を一括する。全部で14点出土している。１、２は撚糸文土器である。かなり細い原体を使用している。井草式に属するものであろう。３は沈線文土器である。胎土は石英、長石粒が多量に混入し、ヘラ状の工具で横方向にケズリ調整されている。４は条痕文土器である。胎土に繊維が多量に混入し、外面は斜め方向の、内面は横方向の条痕が観察される。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
(1/3)
10cm

第76図　縄文土器（1）


37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
0
(1/3)
10cm

第77図　縄文土器（2）



第78図　縄文土器（3）

II群（５～10）

前期の土器を一括する。全部で19点出土しており、図示したものも含めてすべて浮島式である。胎土はやや砂粒を多く含み、赤褐色に発色している。内面、外面ともヘラ状工具による横方向のケズリ調整がなされ、アナダラ属の貝殻を施文具とした波状貝殻紋が施される。６、７は口縁部で、やや外反し、口唇部上面に棒状工具によるキザミが施される。文様の特徴としては浮島II式からIII式に見られるものであるが、口唇部上面のキザミの存在から浮島III式に属すると考えられる。

III群（11～36）

中期の土器を一括する。全部で70点ほど出土しており、ほとんどが中期初頭の土器である。12～33は中期初頭の五領ヶ台式、下小野式に平行すると考えられる土器である。胎土はいずれも粒子が粗く、かなり砂っぽい。はっきりと確定できないが同一個体になるものも多いと思われ、個体数はかなり少ないとみられる。また、熱による剝落がかなり著しいものも存在する。11～16は口縁部である。いずれも口唇部上面に縄文が施される。11、13は輪積痕を強調して、折り返し口縁的な効果を上げている。15、16は原体圧痕が幾何学的に配置されるもの。17～34は胴部破片で、輪積痕からの破損が顕著である。17～30は撚りが反対の縄文を交互に帯状に施文し、前期の羽状縄文土器に似た文様構成をとる。31、32は原体圧痕が施されるもの。33、34は無文土器であるが、胎土が類似することからここに分類した。35、36は加曽利Ｅ式で、同一の深鉢の頸部から胴部にあたる部分である。胎土は雲母片や長石粒を多量に含む。屈曲が顕著なことや、貼り付け隆帯による渦巻き文や区画文が主体となっていることから、加曽利ＥⅠ式に属すると考えられる。

IV群（37～55、86～90）

後期の土器を一括する。全部で30点余り出土している。37～45は堀之内式である。37～40、42、45は縄文施文の深鉢胴部で、胎土に砂粒をやや多く含み、全体に厚ぼったい。41、43、44は櫛描文が施されるもので、同一個体である。46～55は加曽利Ｂ式である。46は口縁部で、内面はミガキ状の調整がされる。47、52は縄文地紋に平行沈線が施されるもの。48は波状口縁の精製土器で、口縁部が無文化され、胴部に横方向の集合沈線が施される。49、50、53～55は粗製深鉢で、いずれも縄文を地紋とし、一部は条線が施され

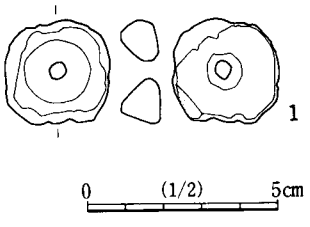
る。54は口縁部で、条線は半截竹管によって施される。51は波状口縁の波底部に当たると考えられる口縁部資料で、つまみ状の突起がつけられる。口唇に添ってキザミを持つ隆帯が二条配され、頸部にもキザミを持つ隆帯がめぐらされる。隆帯の間は無文化される。内・外面とも黒色処理されている。86～90は無文の胴部もしくは底部である。形態や胎土などから加曽利B式を中心とする後期であると判断した。86は外面は熱によるとみられる摩耗が著しいが、内面は黒色処理され丁寧なミガキ状の調整が施される。87～90は底部で、推定底径は87が11.2cm、88が8.4cm、89が9.8cm、90が7.6cmである。

V群（56～85）

晩期の土器を一括する。全部で50点出土している。56～67は晩期前半の土器である。56は平口縁の深鉢で、太沈線による枠状文が配される。補修孔が2か所穿孔される。57は波状口縁になるもので、波頂部に「の」の字を反転した形の貼り付け隆帯が観察される。口唇部上面には沈線が施される。58も波状口縁になるもので、入り組み三叉文が観察される。口唇部上面は突起と沈線が組み合わされる。59は頸部が強く屈曲するもので、口唇部上面にはやはり突起が貼り付けられる。61は剝落が著しいため分かりにくいが、縄文地紋に枠状文に似た太沈線が配される。60、62～67は晩期前半の粗製土器である。強く内湾する器形を持ち、口縁部は肥厚する。68～85は晩期後半の土器である。68、70、72～74は沈線による工字文が施される浅鉢で、すべて同一個体と考えられる。胎土には砂粒の混入が目立つが焼成は良好である。内面は横方向のヘラケズリが施され、部分的にミガキ調整が加えられる。69、71は変形工字文が施される土器である。69は胎土はやはり砂粒の混入が顕著であるが、焼成は良好。口唇部は肥厚し内面はミガキ調整が施される。71も同類と考えられるが、作りはやや粗くケズリの痕跡が顕著に残る。75～85は撚糸文を主体とする土器で、晩期終末の荒海式に属するものである。75、76、81は甕型土器の口縁部資料である。いずれも折り返し口縁となるもので、横ないしは斜めの撚糸文が施される。82、83は同じく甕型土器の肩部で、胴部下半に撚糸文が施される。77は壷型土器と考えられるもので、口径はかなり小さい。口唇部上面に爪形のキザミが施される。

Ⅵ群（第80図1～3）

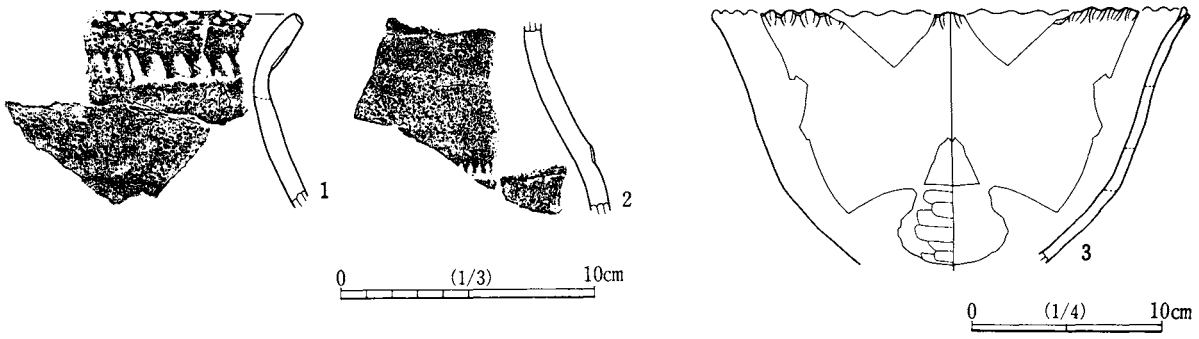
弥生土器を一括する。図示したもの以外は、3と同一個体の鉢形土器の破片のみである。1は甕型土器の口縁部である。強く外反する口縁部は折り返し口縁となっており、口唇部上面に先の丸い棒状工具（指頭？）によってキザミがつけられる。折り返し口縁の下側もヘラ状の工具によって連続刺突がつけられる。2は甕型土器の頸部である。輪積部分を段状に整形し、棒状工具による連続刺突を施す。3は鉢形土器である。推定口径は24.6cmで、胎土はやや粗くスコリア粒を多量に含む。器面は熱によるとみられる摩耗が著しく、細かい調整は不明である。口縁部は指頭による波状整形がなされる。



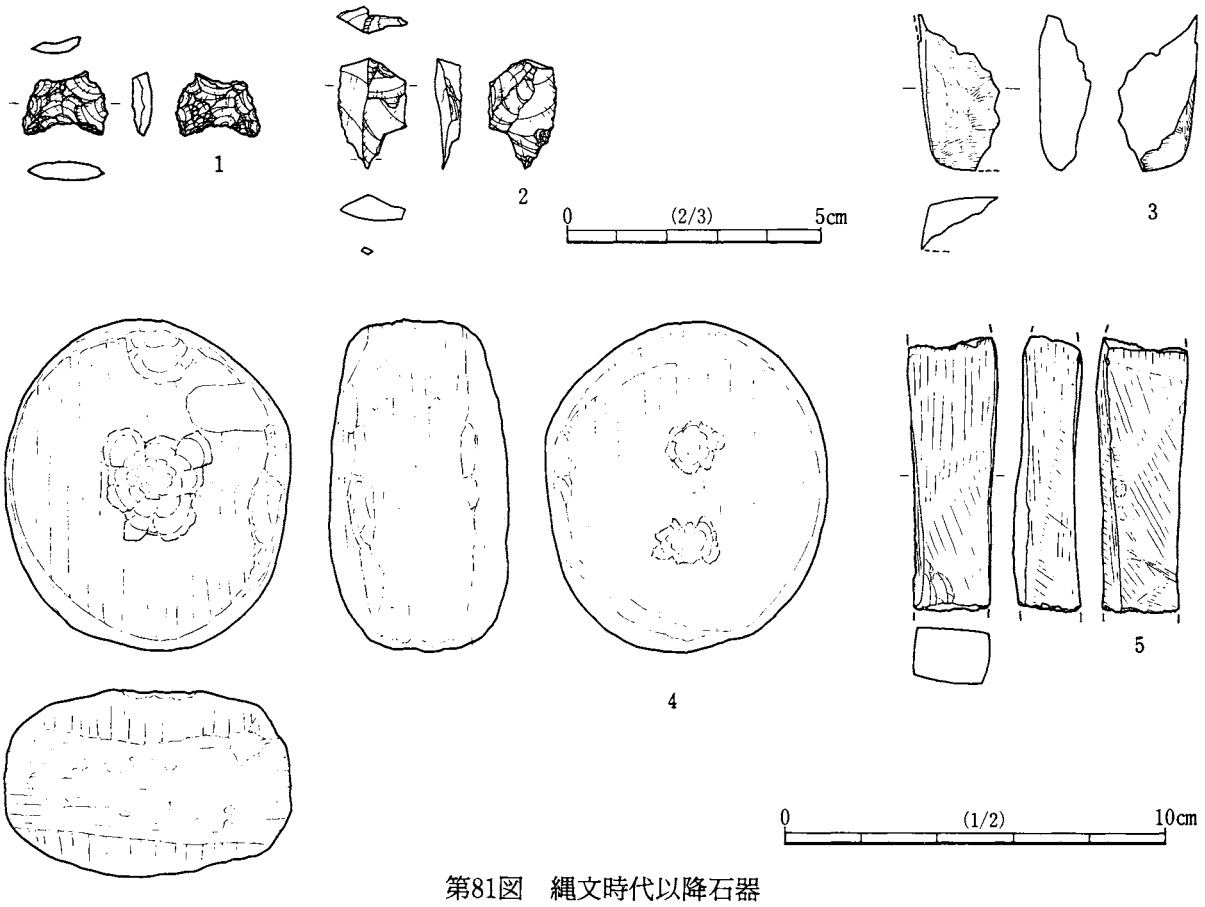
第79図　土製品

土製品（第79図1）

有孔円盤が1点出土している。外径26.7㎜～27.7㎜、内径4.5㎜、最大厚9.6㎜、重量8.3gである。後期のものと思われる無文の深鉢の胴部破片を素材としている。周縁は打欠整形のあと一部に研磨調整がみられるがあまり顕著ではない。穿孔は主として土器内面側から行われ、貫通直前に外面側からも手を加えている。



第80図　弥生土器



第81図　縄文時代以降石器

第８表　縄文時代以降石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号	No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大著 mm	重　量 g	遺物番号
1	石鏃	黒曜石	12.0	16.0	3.4	0.6	Cトレンチ２	4	磨石	砂岩	85.4	75.1	47.5	452.0	第１ブロック2
2	石錐	黒曜石	21.2	13.6	5.5	1.4	A区183	5	砥石	凝灰岩	71.0	24.0	18.0	43.1	塚003-B11
3	磨製石斧	緑泥片岩	30.2	15.7	9.9	10.1	Bトレンチ１								

縄文時代以降石器（第81図、第８表、図版44）

本遺跡より出土した石器はごくわずかである。石器総点数は12点を数える。器種組成は石鏃１点、磨製石斧１点、石錐１点、磨石１点、砥石４点、剝片２点、礫２点である。

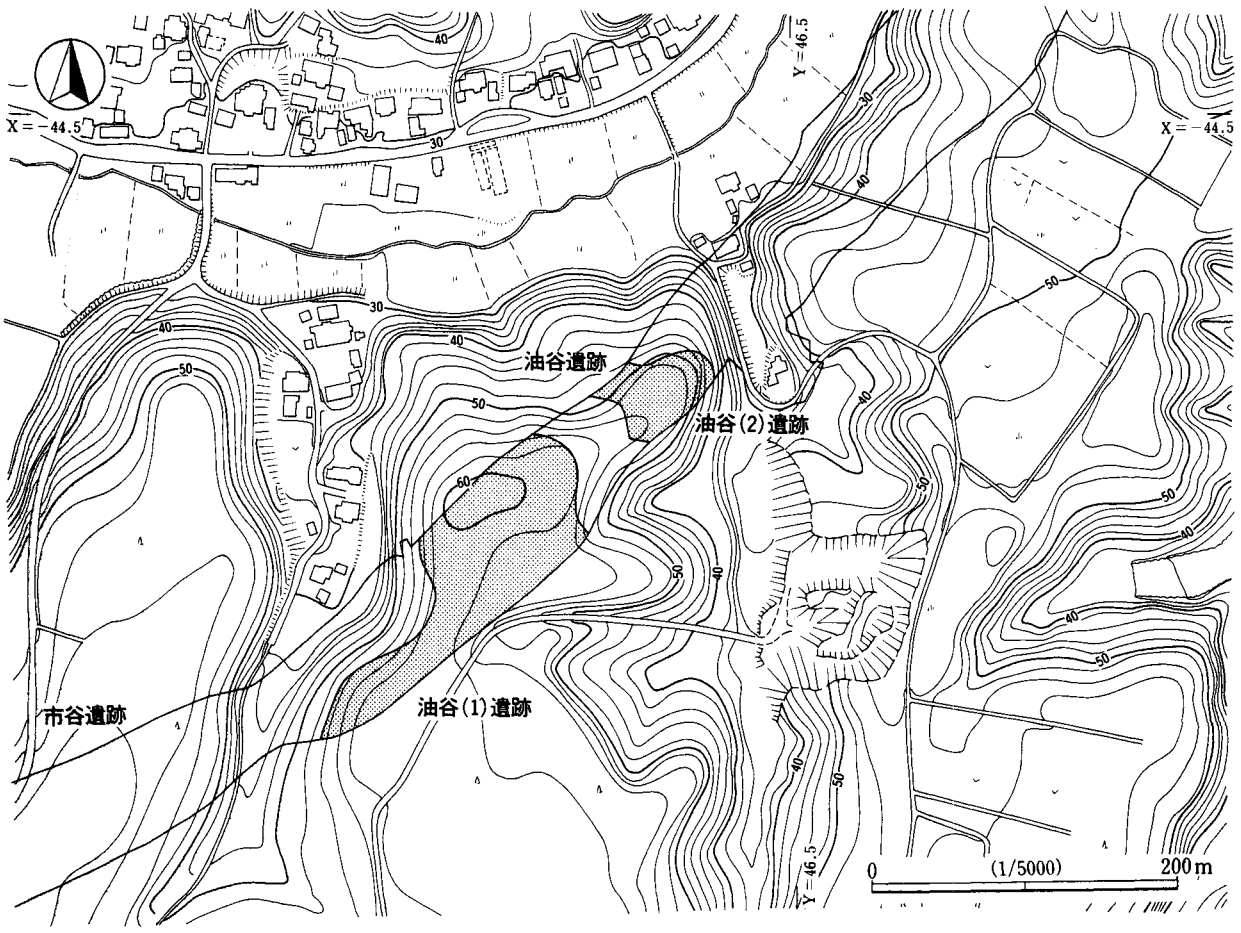
１は石鏃である。１は器体上半部を欠損するが、両側縁下半部が膨らみ、脚部は尖る。基部は浅く抉れる。２は石錐である。尖った末端部と背面左側縁に微細な使用痕が集中する。３は磨製石斧である。刃部片のみの検出で形状は明確ではないが、いわゆる「定角式」磨製石斧であり、全面に精緻な研磨による擦痕が看取される。４は磨石である。全面を擦り面とするが、表裏面の擦りが顕著で擦り面が平坦近くになっている。表裏面には、表面に１か所、裏面に２か所の敲打による窪みが認められる。５は砥石である。砥石は003塚より４点が検出されているが、すべて欠損品で形状の明確な１点を図示した。棒状を呈し、砥ぎにより器体が減じ側面がねじれる。

Ⅷ　油谷遺跡

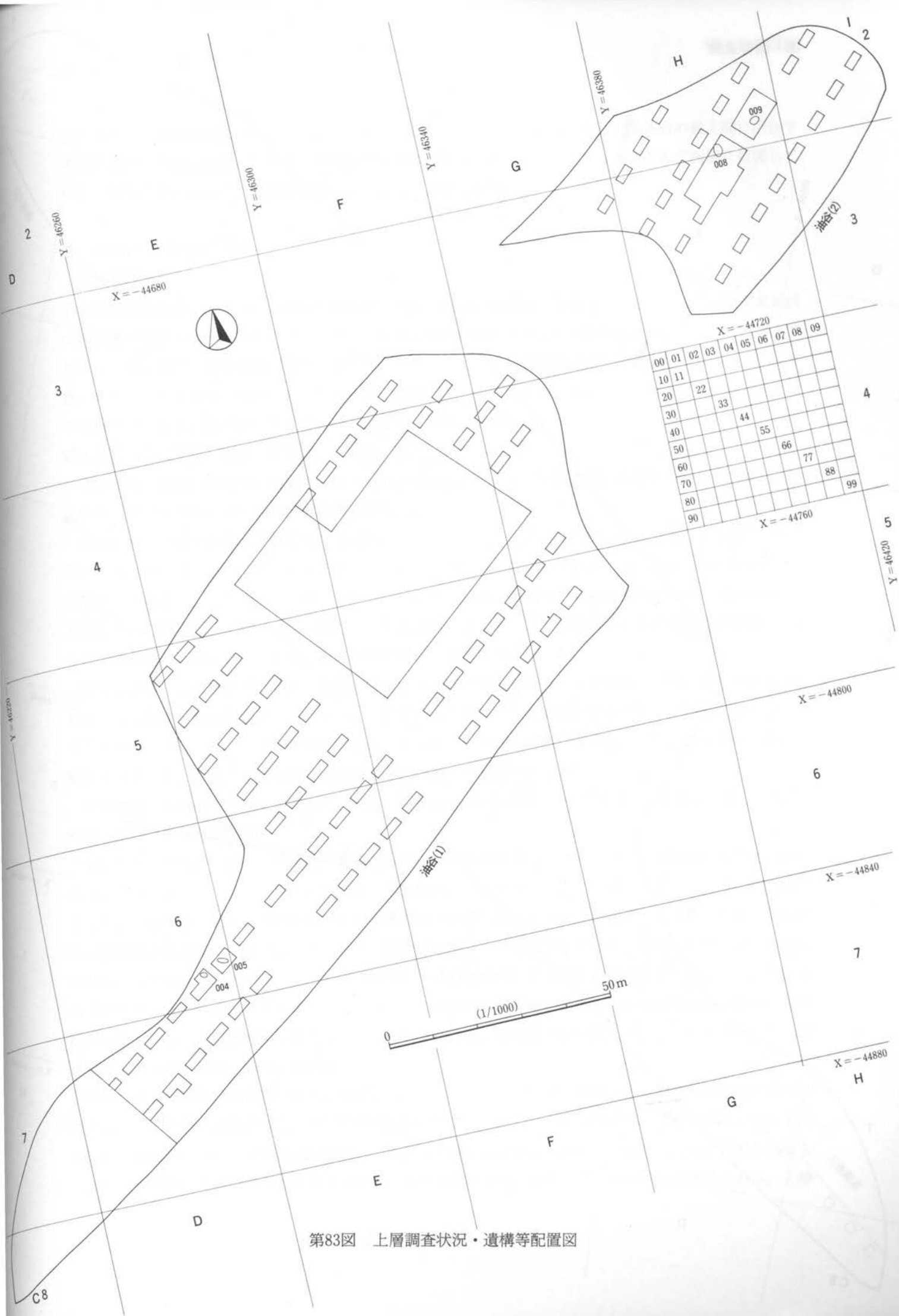
1　遺跡の概要（第82～84図）

本遺跡は、東金市滝沢字油谷498－1他に位置する。調査対象面積はあわせて13,500㎡で、遺跡の位置する滝支台の北部中央付近の広い範囲を油谷（1）遺跡といい、隣接した北東部の斜面上に油谷（2）遺跡が位置している。油谷（1）遺跡の上層の確認調査では、調査範囲の北東部および北西部より縄文時代早期の遺物包含層を検出したので、この2か所について本調査を行い、縄文時代の撚糸文土器をまとめて検出したが、遺構としては縄文時代の陥穴と土坑計7基を検出するにとどまった。下層の確認調査では、旧石器出土2地点について本調査を行い、旧石器時代ブロック2か所を検出した。これとあわせて、油谷（2）遺跡の調査をおこなった。上層の確認調査では、土坑を2基検出したので、周辺を拡張したがそれ以上は分布せず、また遺物の出土量も全域に希薄であった。下層の確認調査においても旧石器類を検出することができなかったので、本調査は不要と判断された。調査期間は油谷（1）遺跡が平成6年6月6日から平成6年11月28日まで、油谷（2）遺跡が平成6年9月12日から平成6年11月28日までであった。ここでは、調査時の遺跡の調査コードも同一で、同一遺跡内の別地点という観点から、両者を併合して油谷遺跡として1つの遺跡として報告する。

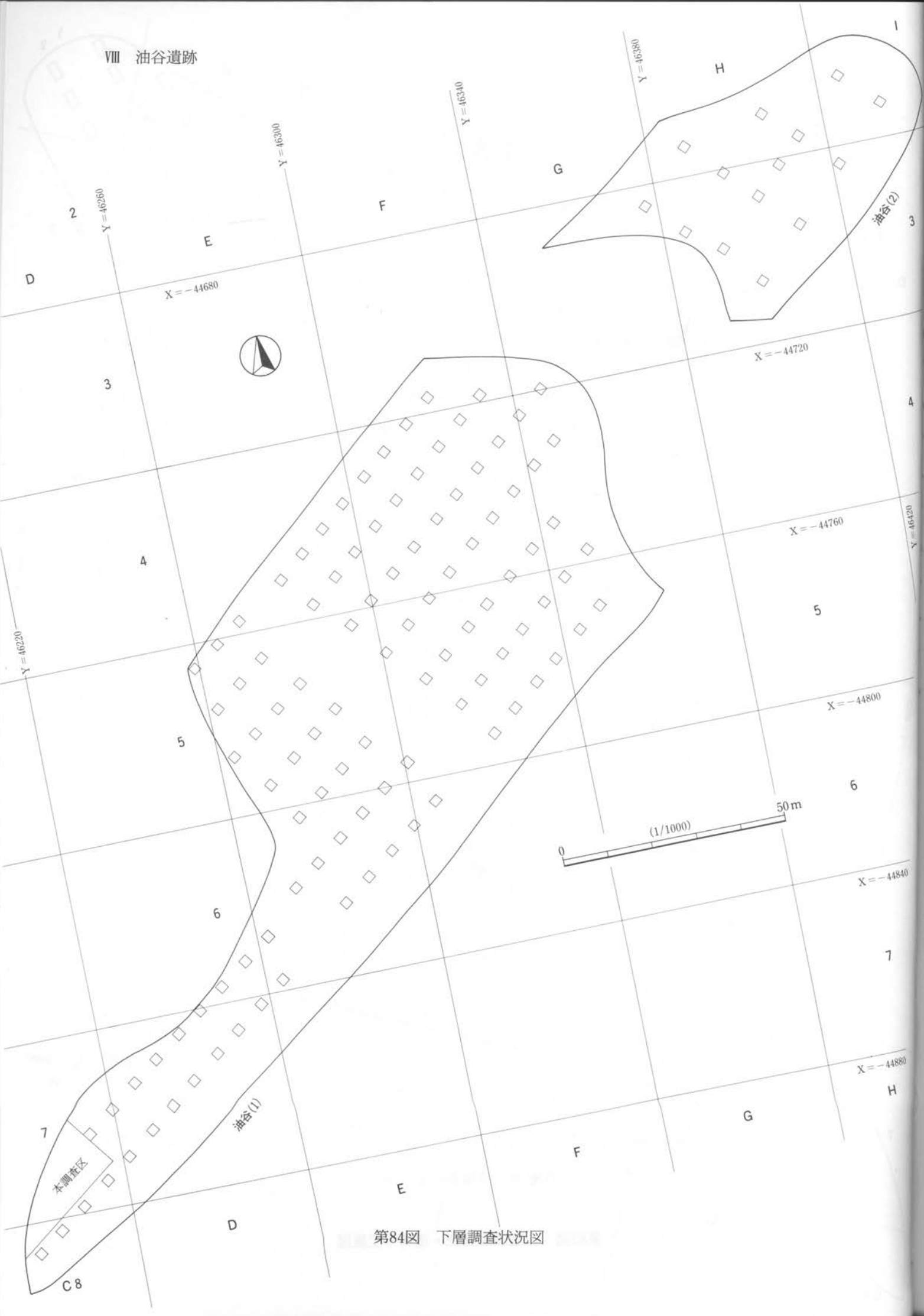
遺跡は、九十九里地域の海岸平野を経て太平洋に流れ込む真亀川の上流部、十文字川によって開析され



第82図　油谷遺跡周辺地形図



第83図　上層調査状況・遺構等配置図



第84図　下層調査状況図

た十文字谷の奥部滝沢支谷の入り口部の東側に位置し、下総台地の東端にあたる油井台の最北端に所在する滝沢支台の北側に位置している。前述の市谷遺跡はさらに入り込む小さな谷をはさんだ西側に位置している。標高は55～60mで、東側の谷部との比高は二十数mを測る。

2　検出した遺構・遺物

旧石器時代

旧石器時代調査は、13,500㎡の調査対象面積のうち、225㎡の本調査を実施した。ブロックは調査対象範囲の南西端で検出され、2か所のブロックと2か所の礫群が検出された。それぞれを第1ブロック、第2ブロックと第1礫群、第2礫群と呼称する。それぞれのブロック及び礫群は出土層位が立川ローム層Ⅳ・Ⅴ層にあたり、分布地点も重複することから同一の文化層と把握される。これらのブロック・礫群は少数ずつの検出ではあるが便宜的に第Ⅰ文化層を設定して説明していく。

第1ブロック（第85～89図、第9表、図版39・40）

分布状況　調査区南西側で調査されたブロックである。7Cグリッド南隅に位置しており、調査区の南方向から延びる台地の付け根北西縁辺部に当たる。

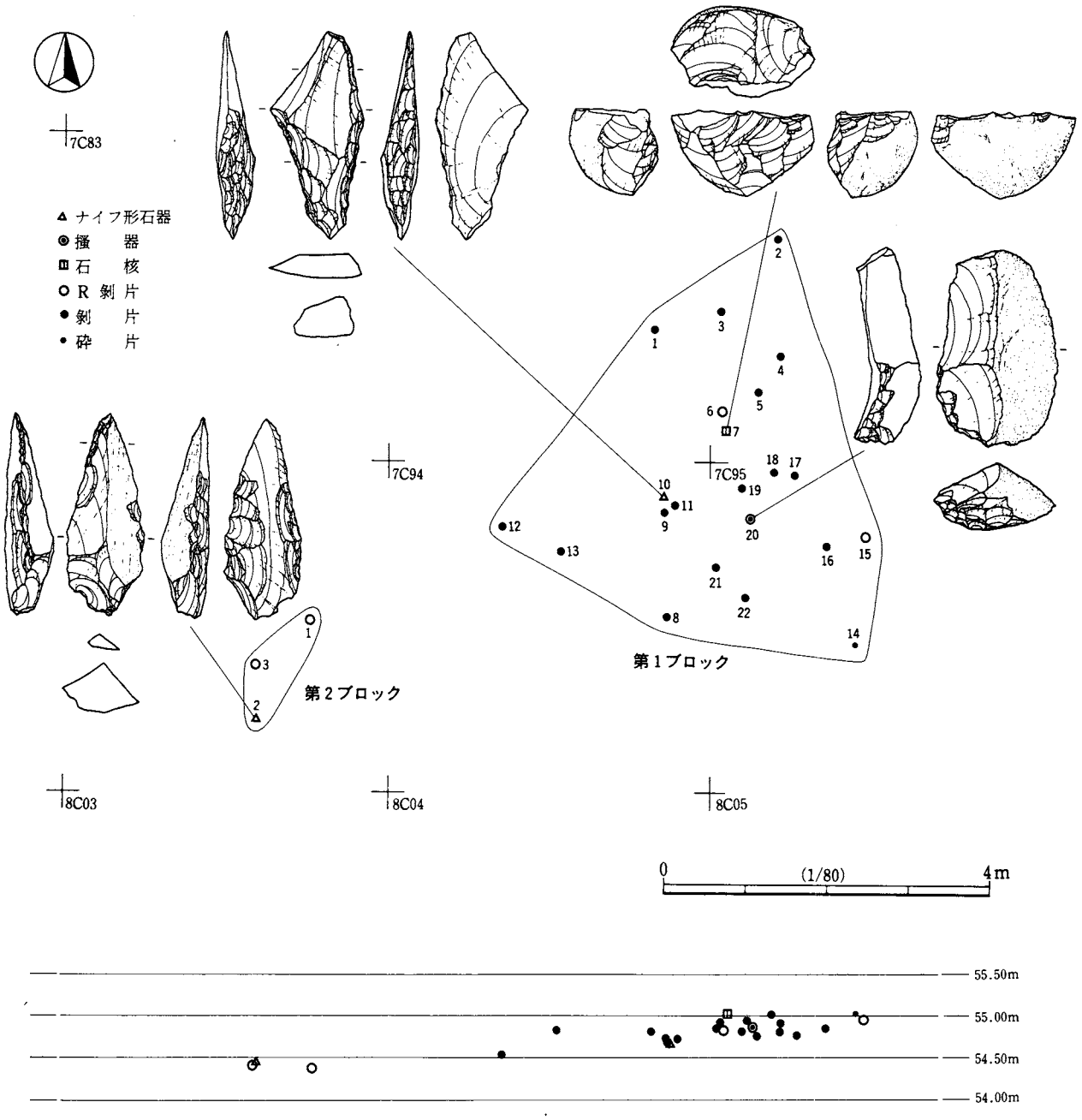
遺物総数は22点である。その分布は比較的まとまっている。ブロックの中心部に密集して分布し、周辺部が希薄になっていく。7C－84・85グリッドから7C－94・95グリッドにかけて南北方向にやや長い楕円形状に分布する。分布範囲は南北5.0m、東西4.5mを測る。垂直分布ではおよそ0.5mの高低差がある。土層断面への投影は、ブロックの範囲部分から北西側に急にローム層が傾斜するため投影図を作成してないが、調査時の所見ではⅣ・Ⅴ層とⅢ層の境界付近に遺物集中が見られた。

母岩別資料　5母岩が認められ、点数のまとまる母岩は安山岩A1の17点である。他の母岩は単独母岩あるいは2点ほどの点数構成となっている。安山岩A1はブロック範囲の全域に及んでいる。凝灰岩1の2点は南側に分布する。母岩と器種の関係は、安山岩A1で剥片剥離作業が見られ剥片が生産され掻器が製作される。また、ナイフ形石器は安山岩B1の石材から生産される。

出土遺物　中規模なブロックであり、主要な器種はナイフ形石器1点、掻器1点、R剥片2点と少なく、剥片主体のブロックである。

1はナイフ形石器である。横長剥片を横位に用い、背面右側縁は側縁すべてに、左側縁は基部側に抉り込むようなブランディングが施されている。平面形状はいわゆる「切出タイプ」であり、刃角はやや鈍角となる。2は掻器と剥片の接合資料である。掻器は下半部に最大幅を持つ縦長剥片を素材として、末端部から左側縁に急角度の調整加工が施される。剥片は寸詰まりの幅広剥片である。掻器の素材となった剥片の打面とはかなりの段差がみられ、打面再生もしくは打面転移による剥片剥離が想定できようか。安山岩A1を石材としている。3・4はR剥片である。3は幅広な剥片の左側縁下半部に細部加工と微細な剥離痕が看取される。4は末端部に疎らな二次加工が見られる。5～11・13は剥片である。5～8・13bは縦長剥片、9～11・13a・13bが横長剥片である。

12は石核と剥片の接合資料である。原石は、安山岩A1を母岩とする長軸7cm、短軸5cmほどの楕円礫である。この原石の長軸方向に上面1/3が剥離されて12bが作出される（打面設定の剥片剥離）。更に1回ほど剥片剥離が行われて平坦な面が形成される。この面を打面として正面で右側から左側に打面を巡るように打点が移動して剥片剥離作業が進行する。この剥離作業で、12c・d・eの剥片が剥離される。これ



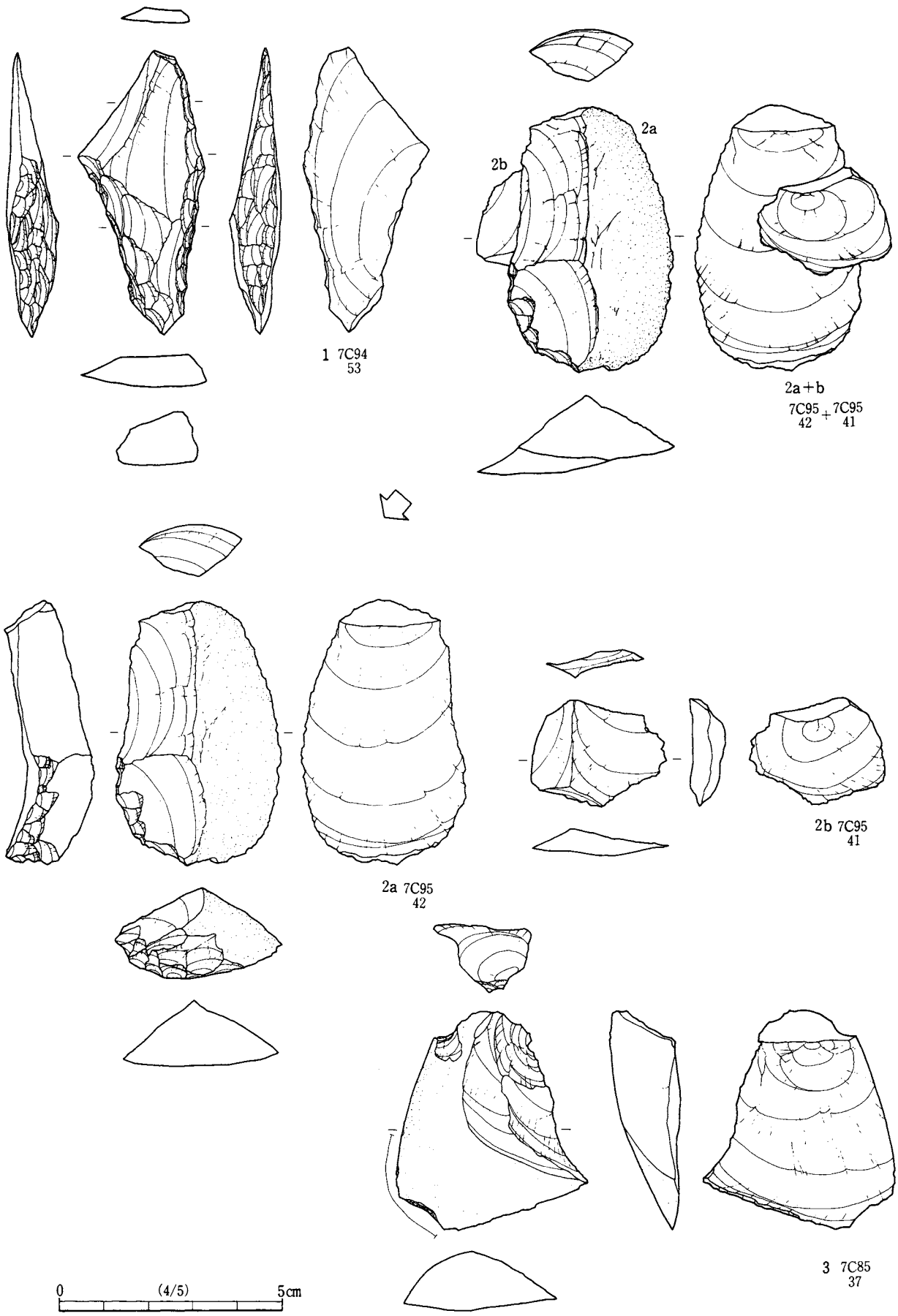
第85図　第１ブロック・２ブロック器種別分布

らの剝片は、すべて背面に自然面を残置する厚味のある幅広な剝片となっている。その後、上面で打面を更新するような剝離作業が看取される。石核（12ａ）は、裏面に自然面を残し、打面を上面に固定して、正面に限定して打面を巡るような打点の移動が看取される石核となっている。13は剝片同士の接合資料である。13ｂが剝離された後、打面を約45度転移して剝離作業が行われて13cが作出される。

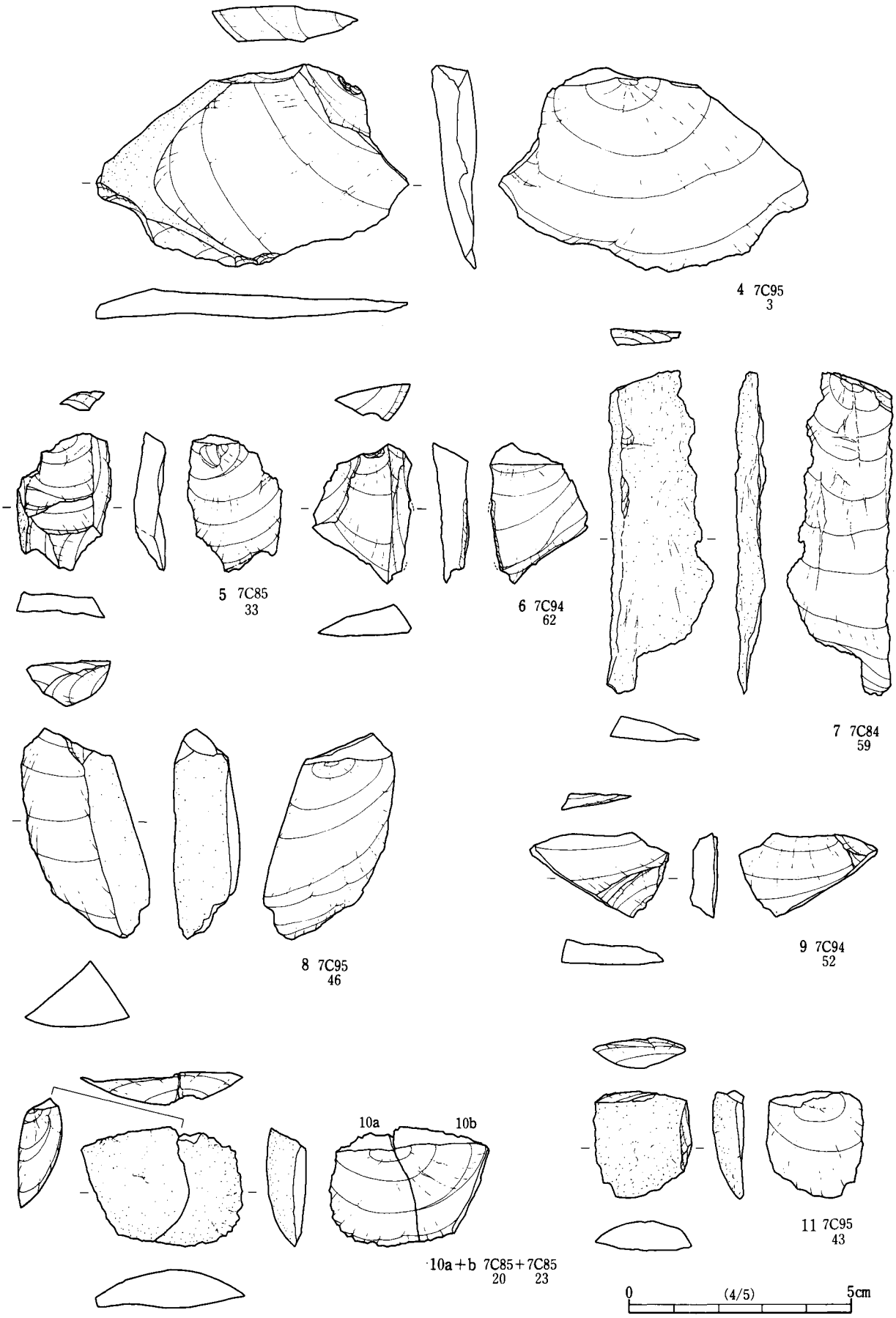
第２ブロック（第85・90図、第10表、図版41）

分布状況　第１ブロックと同一地点で調査されたブロックである。第１ブロックから南西に約2.6m離れて分布している。

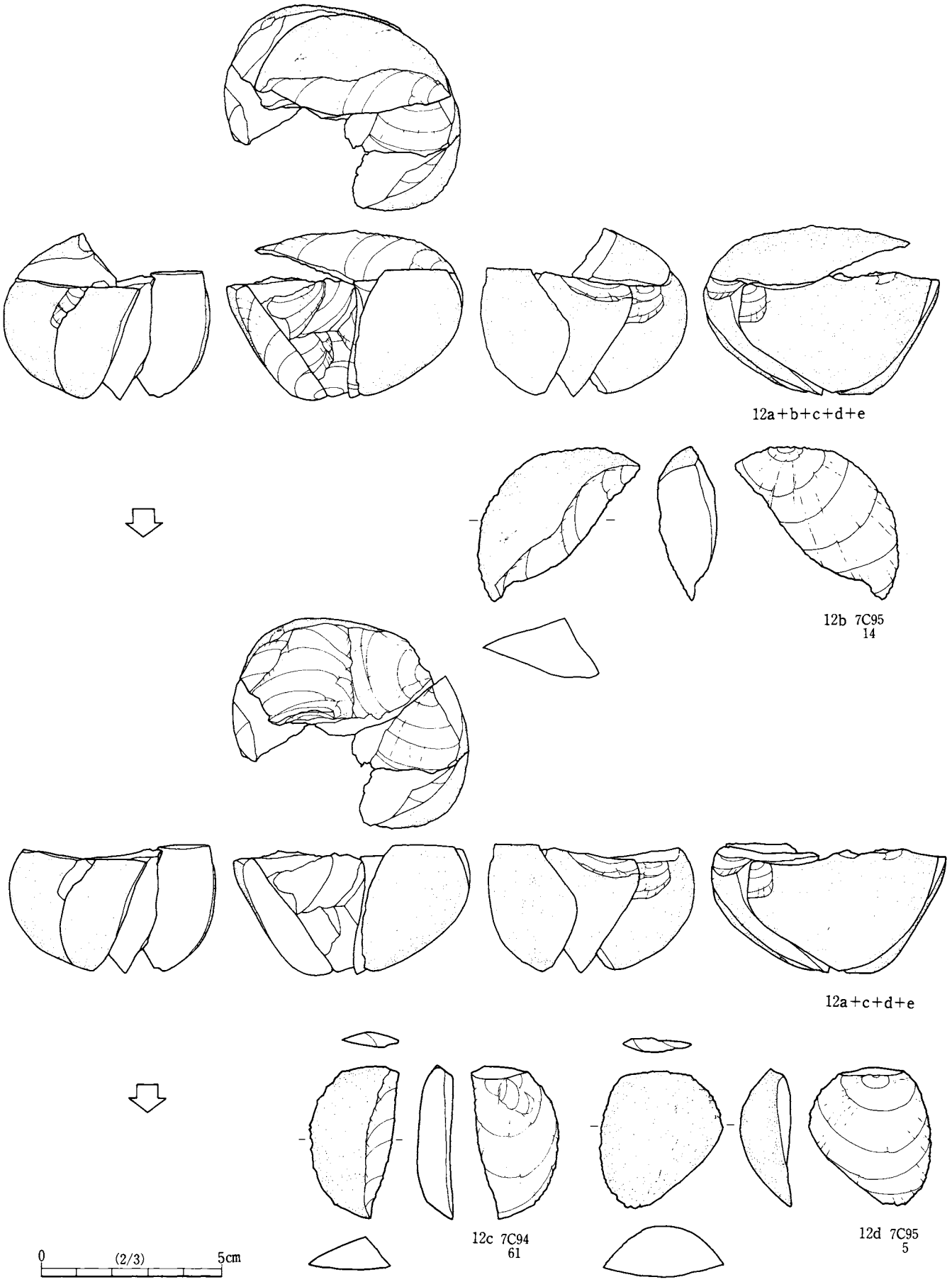
遺物総数は３点である。その分布はまとまり、狭い範囲に密集して分布している。７Ｃ－93グリッドで北東から南西方向に細長く分布する。分布範囲は南北1.2m、東西0.6mを測る。垂直分布ではおよそ0.1m



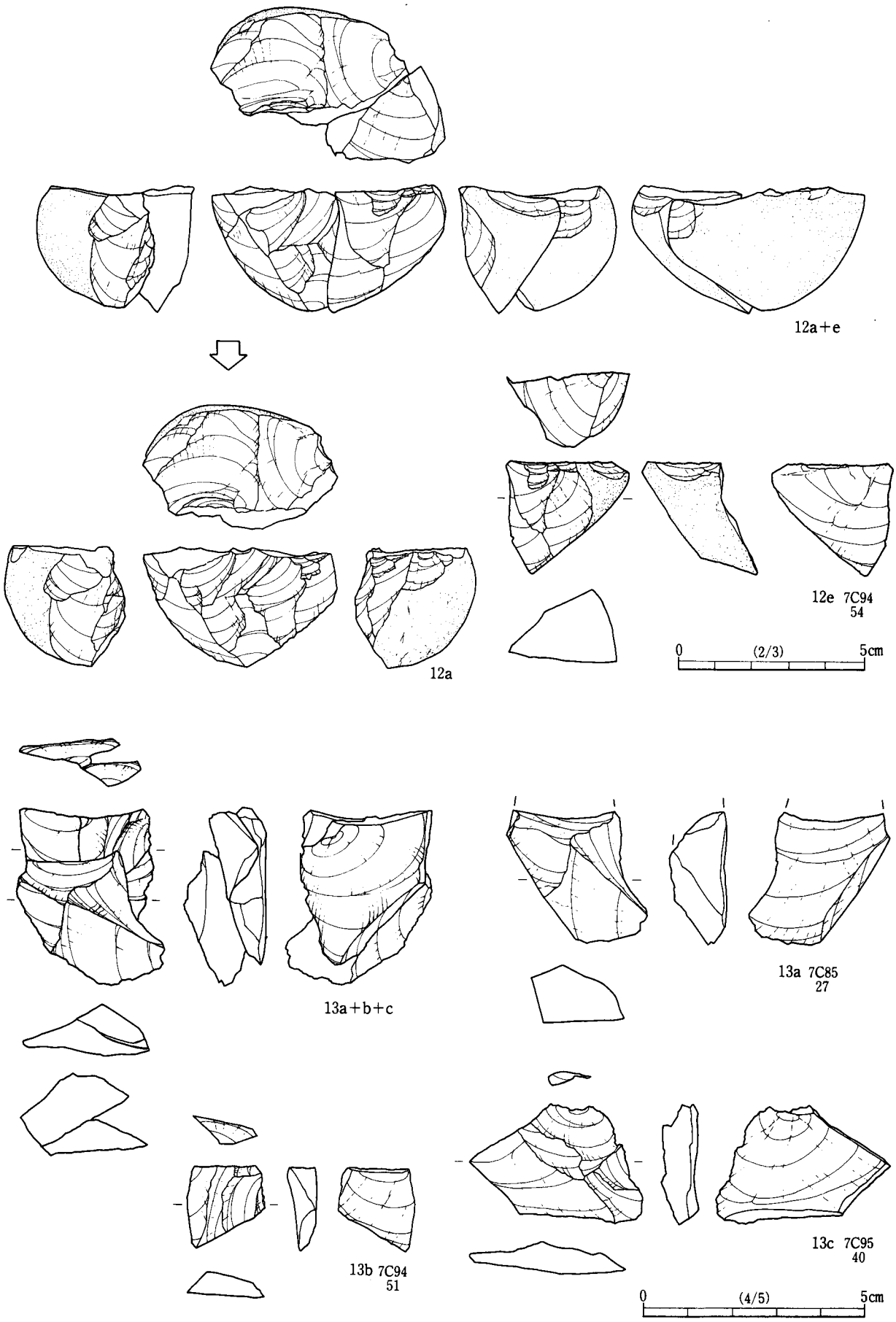
第86図　第1ブロック出土石器（1）



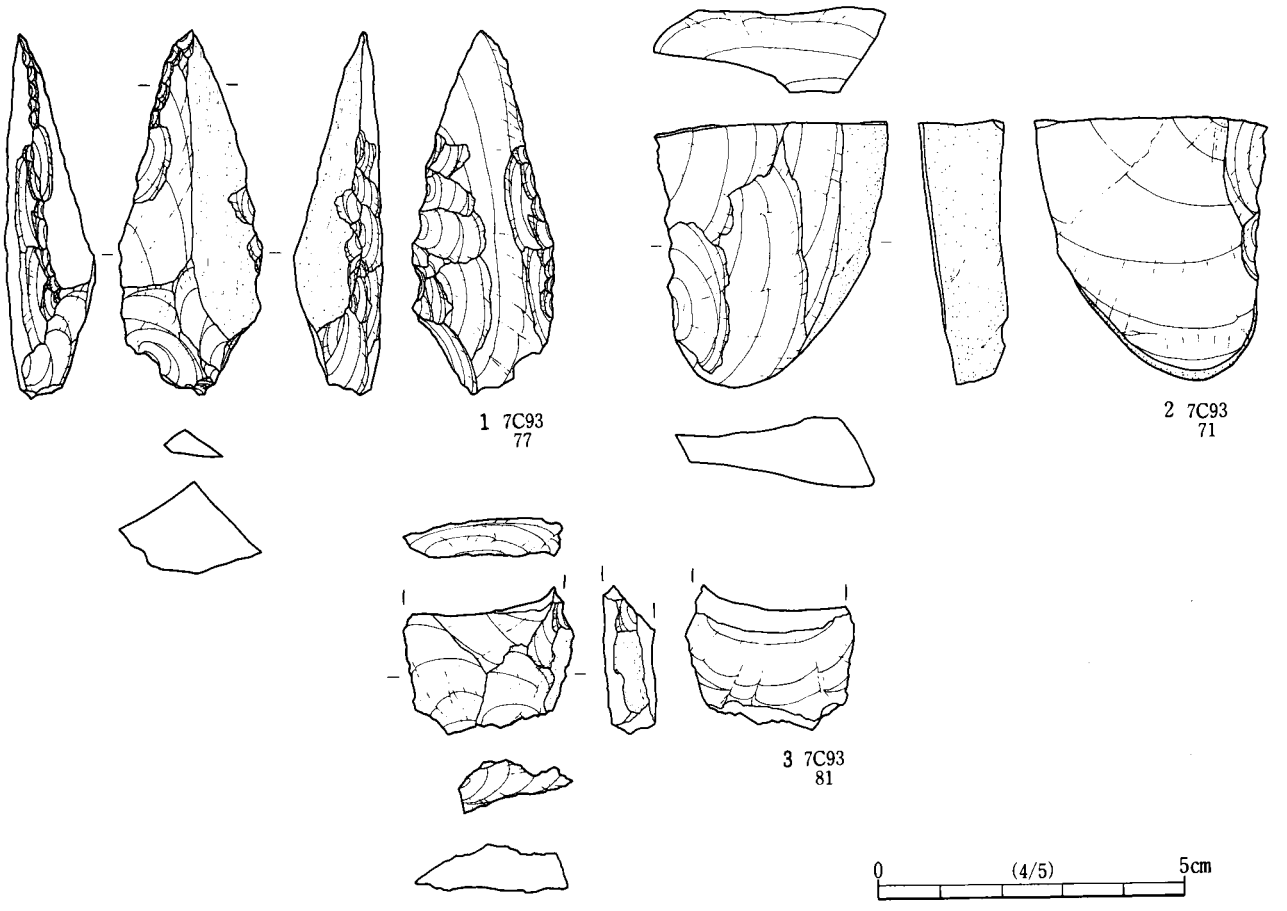
第87図　第１ブロック出土石器（2）



第88図　第１ブロック出土石器（3）



第89図　第１ブロック出土石器（4）



第90図　第２ブロック出土石器

第９表　第１ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母岩
1	7C840059	剥片	71.1	23.1	6.7	9.0	7	H			○							S		珪質頁岩1
2	7C850020	剥片	24.8	20.0	9.1	4.2	10a	H			○							F	L	安山岩A1
3	7C850023	剥片	24.9	24.0	8.8	4.9	10b	H			○							F	R	安山岩A1
4	7C850027	剥片	29.3	32.0	12.7	9.8	13a	−	−	−		1		2				H		安山岩A1
5	7C850033	剥片	29.6	20.7	6.7	3.4	5	H			○	2		2	1			F		安山岩A1
6	7C850037	R剥片	47.9	42.9	15.9	24.1	3	H	○	○	○	2		2			LB、B			珪質頁岩2
7	7C850039	石核	31.5	52.5	32.7	58.5	12a													安山岩A1
8	7C940051	剥片	17.9	17.7	6.4	1.8	13b	H				1		3				H		安山岩A1
9	7C940052	剥片	18.9	30.7	6.0	2.8	9	−	−	−	○	1	2					−	HM	安山岩A1
10	7C940053	ナイフ形石器	62.9	28.4	11.7	14.6	1													安山岩B1
11	7C940054	剥片	30.2	34.0	31.6	20.4	12e													安山岩A1
12	7C940061	剥片	41.2	24.8	10.0	9.8	12c	H			○		1					F		安山岩A1
13	7C940062	剥片	30.5	22.0	8.0	4.4	6	H		○		2		1	1			H		安山岩A1
14	7C950001	砕片	11.3	19.4	5.7	0.8														安山岩A1
15	7C950003	R剥片	45.3	69.9	10.4	23.8	4			○	○	1	1	1			B	F		凝灰岩1
16	7C950005	剥片	37.7	35.1	14.4	18.9	12d	H			○							F		安山岩A1
17	7C950014	剥片	42.4	47.0	16.9	20.2	12b	C			○			1				F		安山岩A1
18	7C950040	剥片	26.5	39.4	8.4	6.7	13c	H				3		2				−	B	安山岩A1
19	7C950041	剥片	22.8	30.4	8.1	3.8	2b	H				1	1		1			S		安山岩A1
20	7C950042	搔器	58.3	36.8	19.9	35.6	2a													安山岩A1
21	7C950043	剥片	23.0	21.7	7.2	4.1	11				○			2				F		安山岩A1
22	7C950046	剥片	45.2	29.3	15.0	15.6	8	2			○	1						S		凝灰岩1

第10表　第２ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母岩
1	7C930071	R剥片	43.0	38.2	14.0	23.2	2	H			○				3		L	O		安山岩A1
2	7C930077	ナイフ形石器	59.2	23.4	14.5	15.7	1													凝灰岩1
3	7C930081	R剥片	23.1	27.9	8.5	5.3	3	−	−	−	○	1	2	1				O		珪質頁岩3

の高低差がある。第１ブロックより標高がやや低く投影されるが、立川ローム層の堆積が北西方向に傾斜しているためで、第１ブロックと同様にⅣ・Ⅴ層とⅢ層の境界付近に遺物集中が見られる。

母岩別資料　３母岩が認められる。すべてブロック内では単独母岩である。第１ブロックと母岩を共有する母岩には安山岩Ａ１・凝灰岩１がある。ナイフ形石器は凝灰岩１の母岩から生産される。

出土遺物　小規模なブロックであるが、主要な器種はナイフ形石器１点、Ｒ剝片２点と多い。

１はナイフ形石器である。横長剝片を素材として、背面で左側縁上半部と基部に平坦加工と細かな調整加工が見られ、裏面で両側縁下半部に平坦加工と細部加工が認められる。平面形状は器体先端部が鋭利に尖るいわゆる「刺突タイプ」の形状を示し、器体の横断面形は三角形状になる。２・３はＲ剝片である。２は厚味のある縦長剝片の左側縁下端部と裏面の上端部に幅広な調整加工が見られる。３は上端部を欠損し形状が明確ではないが、右側縁に急角度の調整加工が認められる。

礫群（第91図、第11・12表）

本遺跡からは２か所で礫の集中分布が確認された、それらの礫の集中分布に対して、通例の名称である礫群と呼称する。２か所の礫群は、第１・第２ブロックに対応するように分布し、それぞれ１号礫群・２号礫群とした。

礫群を構成する礫の属性分類に当たっては、器種、母岩、遺存度、復元度、石化、付着物、計測（最大長、最大幅、最大厚、重量）別に分類を行った。分類の基準は以下の通りである。

器種　焼成完形礫（Ａ）、焼成破損礫（Ｂ）、自然礫（無焼成完形礫）（Ｃ）、破損礫（無焼成破礫）（Ｄ）の大きく４つに分類した。

母岩　礫群の礫についても母岩分類を行った。流紋岩、石英斑岩の石材判別に当たっては赤化すると峻別が難しいものがあり、特徴的に石英の斑晶が著しいもの以外は流紋岩とした。

遺存度　各礫の出土した遺存状態を完形を100％として、100％（Ａ）、80％以上100％未満（Ｂ）、50％以上80％未満（Ｃ）、50％未満（Ｄ）のランクに分類した。

復元度　各礫の接合により復元された状態を分類した。分類基準は遺存度と同様である。

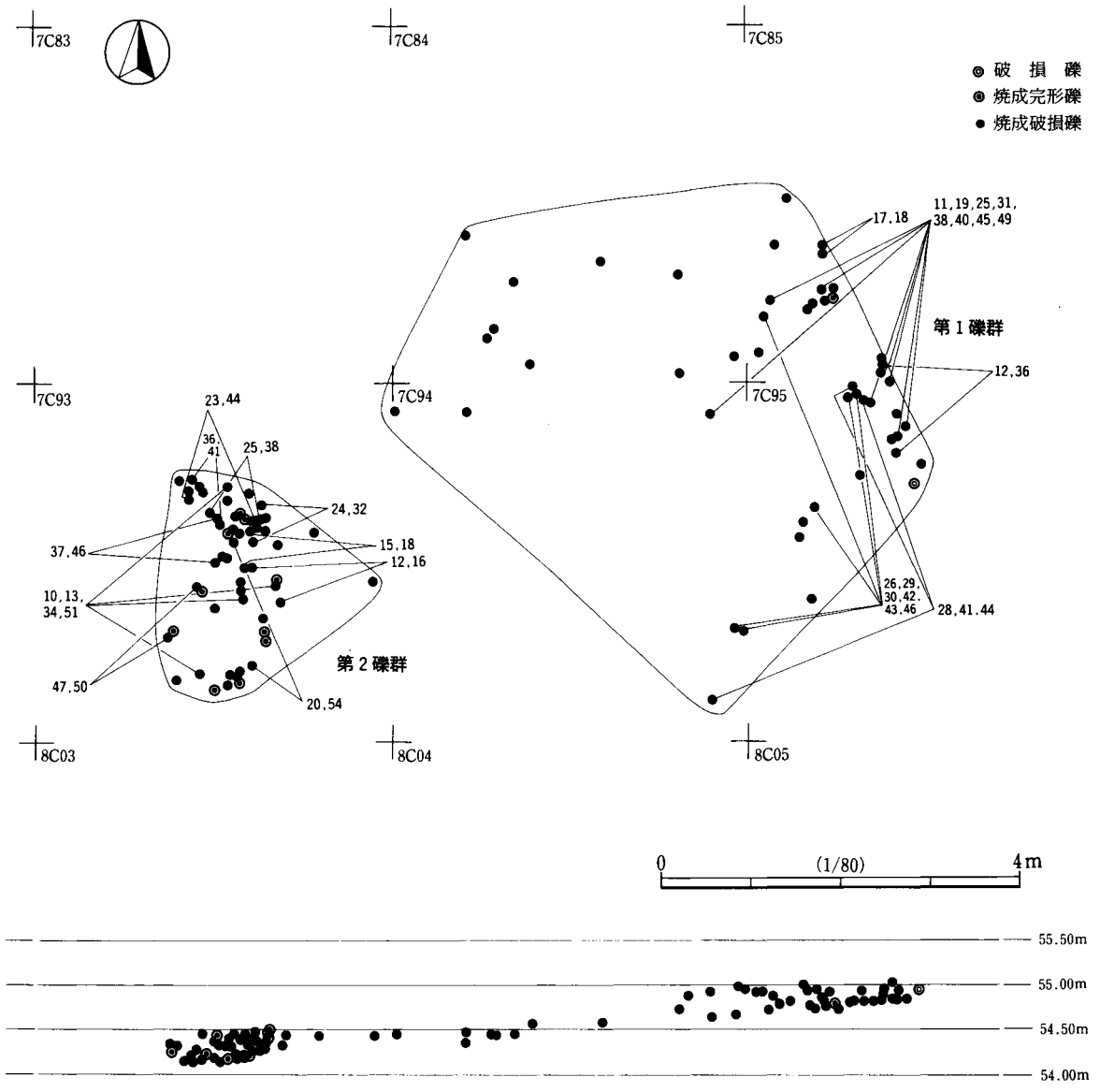
赤化　赤化の度合いを、著しく赤化しているもの（ａ）、薄く赤化しているもの（ｂ）、その中間のもの（ｃ）のランクに分類した。また、表面（自然面）と割れ面に分けて赤化の度合いを観察した。

付着物　スス状付着物（ｓ）、タール状付着物（ｔ）について付着物の有無を観察した。

１号礫群　分布範囲は南北5.9m、東西6.1mを測り、第１ブロックと分布が重複する。やや散漫な分布状況を呈している。垂直分布も第１ブロックと同様に、地形の傾斜に沿って出土していることが看取される。

総点数は50点、総重量は1,915.2ｇである。焼成破損礫を主体に組成し、焼成完形礫・無焼成破損礫を若干含む。礫の属性を見ると、礫の重量は、最大153.2ｇ、最小0.4ｇで平均重量は39.1ｇである。石材が流紋岩８母岩37点（76％）、砂岩３母岩8点（16％）、安山岩Ｃ３母岩3点（6％）、珪質頁岩１個体１点（２％）であり、流紋岩が主体をしめる。遺存度はＤランク44点（90％）で、多くが完形礫50％以下の破損状態となっている。赤化度はｂ・ｃランクが主体をしめ、著しく赤化している資料は少ない。接合関係は５個体22点で確認された。接合分布は１号礫群内で収束し、第１ブロックに近接する東側に集中して見られる。

２号礫群　分布範囲は南北2.5m、東西2.5mを測り、第２ブロックと分布が重複する。１号礫群とは対照的に、密集した分布状況を呈している。



第91図　第1礫群・第2礫群出土分布

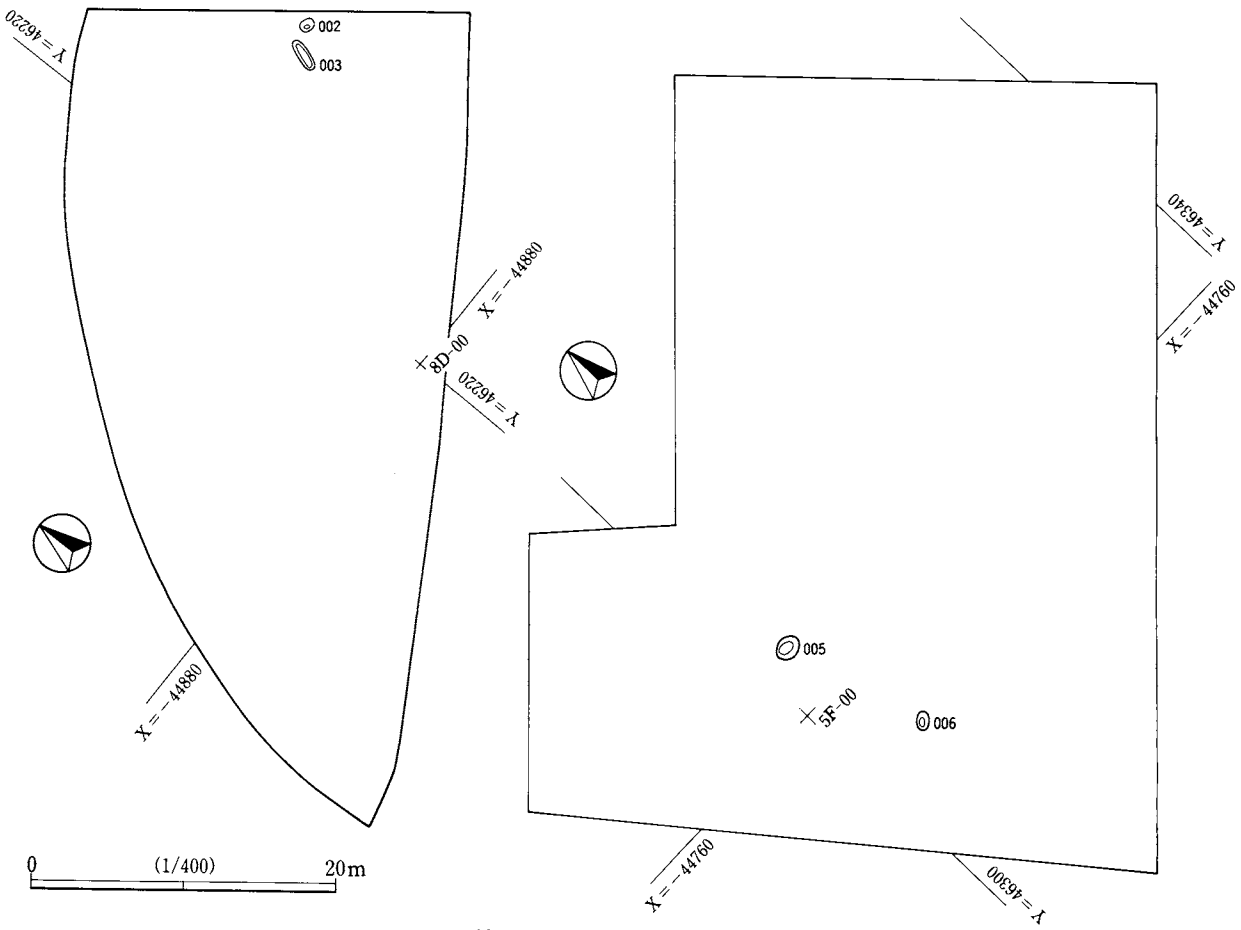
総点数は、59点、総重量は2,587.9ｇである。焼成破損礫を主体に組成し、完形焼成礫を若干含む。礫の属性を見ると、礫の重量は、最大191.0ｇ、最小0.5ｇで平均重量は43.9ｇである。石材が流紋岩13母岩20点（34%）、チャート8母岩11点（19%）、砂岩4母岩7点（12%）、珪質頁岩2母岩6点（10%）の他に、安山岩、石英斑岩、凝灰岩、メノウであり、流紋岩が主体を占める。1号礫群に比較して、礫種が豊富である。遺存度はＡランク11点（19%）、Ｄランク34点（58%）で多くが完形礫50%以下の破損状態となっている。赤化度はａ・ｂランクが主体を占め、1号礫群と比較して礫の焼成度は高い。接合関係は、10個体22点で確認された。接合分布は2号礫群内で収束している。また、流紋岩8・珪質頁岩4は1号礫群内にも分布し、両礫群内で共通する個体が見られる。

第11表　第１号礫群属性表

番号	遺物番号	分類	母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	遺存	復元	表面赤化	割面赤化	付着	接合
1	7 C84-056	B	砂岩２	69.3	49.9	22.1	71.7	D		a	b	s	
2	7 C84-057	B	流紋岩１	32.3	24.0	18.1	15.0	D		c	c		
3	7 C84-058	B	流紋岩１	20.6	20.4	10.6	4.3	D		c	c		
4	7 C84-060	B	砂岩３	34.0	19.5	11.8	7.6	D		c	a		
5	7 C84-063	B	安山岩C１	43.0	30.8	23.0	32.8	D		b	－		
6	7 C84-064	B	流紋岩１	24.4	13.2	13.0	3.1	D		c	c		
7	7 C84-065	B	流紋岩１	33.6	25.5	17.8	18.2	D		b	c		
8	7 C84-066	B	流紋岩２	64.9	52.9	24.0	82.8	D		b	c	s	
9	7 C84-067	B	砂岩３	57.1	52.8	16.4	58.5	C		a	b		
10	7 C85-002	B	流紋岩３	37.6	27.0	25.5	25.8	D		c	c		12.36
11	7 C85-017	B	流紋岩３	30.5	23.7	24.2	19.0	D		c	c		19.25.31.38.40.45.49
12	7 C85-018	B	安山岩C２	45.3	38.2	28.8	37.7	D		－	b		10.36
13	7 C85-019	B	流紋岩３	44.2	32.5	26.9	29.1	D		c	c	s	
14	7 C85-021	B	流紋岩６	20.1	12.5	6.5	1.6	D		c	c		
15	7 C85-022												
16	7 C85-024	B	砂岩２	39.2	29.9	15.4	18.5	D		a	a		
17	7 C85-025	B	砂岩４	50.2	32.0	15.2	32.6	D		b	c	s	18
18	7 C85-026	B	砂岩４	76.7	57.5	18.7	99.9	C		b	c	s	17
19	7 C85-028	B	流紋岩３	36.9	30.2	31.7	44.1	D		b	c		11.25.31.38.40.45.49
20	7 C85-029	B	流紋岩５	59.0	46.8	30.0	92.3	C		a	b	s	
21	7 C85-030	A	流紋岩４	64.8	51.5	25.1	100.4	A		b	－	s	
22	7 C85-031	B	流紋岩３	24.8	20.5	9.0	4.1	D		c	c		
23	7 C85-032	B	流紋岩３	69.3	65.8	44.6	100.6	D		c	c		
24	7 C85-034	B	流紋岩３	17.4	14.6	9.0	2.0	D		－	c		
25	7 C85-035	B	流紋岩３	28.2	18.8	17.5	10.8	D		c	c		11.19.31.38.40.45.49
26	7 C85-036	B	流紋岩６	42.5	30.4	29.3	31.4	D		c	c		29.30.42.43.46
27	7 C85-038	B	流紋岩２	17.2	16.7	6.8	2.2	D		a	c		
28	7 C94-048	B	流紋岩６	49.6	50.3	39.7	70.1	D		b	c		41.44
29	7 C94-049	B	流紋岩６	35.8	20.5	26.9	17.6	D		c	c		26.30.42.43.46
30	7 C94-050	B	流紋岩６	39.0	29.0	24.2	33.5	D		c	c	s	26.29.42.43.46
31	7 C94-055	B	流紋岩３	33.9	19.9	18.0	9.2	D		c	c		11.19.25.38.40.45.49
32	7 C94-068	B	流紋岩８	37.3	26.1	15.5	19.0	D		b	c		
33	7 C94-069	B	珪質頁岩４	28.9	24.2	11.1	5.9	D		b	b		
34	7 C95-002	D	流紋岩６	15.0	9.5	4.7	0.4	D		－	－		
35	7 C95-004	B	流紋岩６	26.2	19.7	13.2	6.2	D		c	c	s	
36	7 C95-006	B	流紋岩３	42.5	31.6	19.6	18.9	D		b	c		10.12
37	7 C95-007	B	砂岩１	48.4	26.3	11.1	15.5	D		a	a		
38	7 C95-008	B	流紋岩３	50.5	41.2	40.3	103.3	D		c	c		11.19.25.31.40.45.49
39	7 C95-009	B	砂岩１	79.1	47.5	32.8	71.4	D		a	b		
40	7 C95-010	B	流紋岩６	32.0	25.7	21.5	17.5	D		c	c		11.19.25.31.38.45.49
41	7 C95-011	B	流紋岩６	44.8	31.7	22.9	32.8	D		b	c		28.44
42	7 C95-012	B	流紋岩６	47.0	43.6	29.8	70.3	D		b	c		26.29.30.43.46
43	7 C95-013	B	流紋岩６	51.0	36.5	31.7	55.8	D		b	c		26.29.30.42.46
44	7 C95-015	B	流紋岩６	33.0	25.3	11.0	8.8	D		c	c		28.41
45	7 C95-016	B	流紋岩３	61.0	50.3	35.1	76.7	D		b	c	s	11.19.25.31.38.40.49
46	7 C95-044	B	流紋岩６	56.9	41.1	32.1	81.1	D		b	c		26.29.30.42.43
47	7 C95-045	B	安山岩C３	74.5	47.8	27.8	153.2	B		a	a		
48	7 C95-047	B	流紋岩７	43.0	38.8	19.3	31.8	D		a	c		
49	7 C95-130	B	流紋岩３	49.6	40.0	31.0	55.9	D		b	c		11.19.25.31.38.40.45
50	7 C95-131	B	流紋岩６	34.5	22.8	23.4	14.2	D		b	c		

第12表　第２号礫群属性表

番号	遺物番号	分類	母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	遺存	復元	表面赤化	割面赤化	付着	接合
1	7C93-070	B	チャート1	36.5	32.3	22.2	31.7	C		c	c		
2	7C93-072	B	安山岩B2	64.2	55.2	17.5	52.1	C		b	c	s	
3	7C93-073	B	安山岩B3	60.5	44.7	17.1	41.5	B		b	c		
4	7C93-074	B	チャート2	45.2	45.0	26.8	70.4	B		a	−		
5	7C93-075	B	砂岩5	58.2	49.5	18.0	53.6	C		c	a		
6	7C93-076	B	メノウ1	55.3	50.0	29.0	93.6	B		a	c	T	
7	7C93-078	A	チャート3	65.5	28.8	24.8	80.4	A		b	−		
8	7C93-079	A	チャート4	60.9	49.0	23.4	106.6	A		b	−		
9	7C93-080	A	チャート5	57.2	39.3	16.2	51.9	A		a	−		
10	7C93-082	B	珪質頁岩4	44.9	44.1	24.7	42.8	D		b	a		13.34.51
11	7C93-083	B	メノウ2	44.9	36.7	15.1	24.1	D		a	c		
12	7C93-084	B	チャート6	36.6	35.6	22.0	33.5	D		a	b		16
13	7C93-085	B	珪質頁岩4	22.0	17.4	9.4	4.9	D		b	a		10.34.51
14	7C93-086	B	チャート7	17.1	16.5	9.2	2.6	D		c	c		
15	7C93-087	B	流紋岩8	39.1	25.5	12.5	10.9	D		a	a		18
16	7C93-088	B	チャート6	29.8	22.3	11.1	5.7	D		a	b		12
17	7C93-089	B	砂岩8	15.8	13.0	6.3	1.2	B		a	b		
18	7C93-090	B	流紋岩8	47.8	38.5	32.6	72.6	C		a	b	s	15
19	7C93-091	B	チャート6	18.0	16.5	5.9	1.4	D		−	c		
20	7C93-092	B	砂岩7	62.1	33.1	26.5	56.4	D		a	c	s	54
21	7C93-093	B	流紋岩9	33.8	20.9	15.0	9.0	D		a	b		
22	7C93-094	B	流紋岩10	68.9	53.5	20.8	91.6	B		a	c		
23	7C93-095	B	流紋岩11	79.8	47.7	24.6	134.1	C		a	a		44
24	7C93-096	B	流紋岩12	68.6	37.5	18.3	49.5	D		a	c		32
25	7C93-097	B	流紋岩13	46.4	31.3	23.1	32.2	D		a	c		38
26	7C93-098	B	流紋岩9	49.6	46.1	24.7	45.9	C		a	c		
27	7C93-099	B	安山岩2	38.5	26.5	23.9	12.6	D		b	c		
28	7C93-100	A	流紋岩14	52.8	42.4	21.0	63.6	A		a	−		
29	7C93-101	A	流紋岩15	50.1	42.0	23.3	66.2	A		b	−		
30	7C93-102	A	流紋岩16	71.8	47.1	15.7	80.0	A		a	−		
31	7C93-103	B	砂岩8	48.0	46.0	25.5	58.2	D		b	c		
32	7C93-104	B	流紋岩12	53.0	44.2	19.0	41.5	C		a	c		24
33	7C93-105	B	石英斑岩1	31.5	23.1	21.8	14.8	D		a	c		
34	7C93-106	B	珪質頁岩4	37.0	24.0	10.0	7.3	D		c	b		10.13.51
35	7C93-107	B	流紋岩17	55.7	42.0	16.0	32.0	D		a	b		
36	7C93-108	B	流紋岩8	44.1	34.1	23.5	35.8	D		c	c	s	41
37	7C93-109	B	凝灰岩2	67.7	42.8	22.3	66.1	A		b	c	s	46
38	7C93-110	B	流紋岩13	39.3	26.0	17.0	21.5	D		a	b		25
39	7C93-111	B	安山岩B2	25.9	15.6	4.4	1.6	D		a	b		
40	7C93-112	B	チャート8	43.0	29.8	17.5	30.6	C		a	c		
41	7C93-113	B	流紋岩8	59.4	39.4	27.1	68.1	D		c	c	s	36
42	7C93-114	B	珪質頁岩5	62.3	55.5	9.7	28.6	D		a	a		
43	7C93-115	B	凝灰岩3	49.7	26.0	24.8	24.5	D		a	c		
44	7C93-116	B	流紋岩11	35.2	19.5	19.2	13.5	D		a	b		23
45	7C93-117	B	チャート6	22.5	19.7	9.5	4.7	D		a	c		
46	7C93-118	B	凝灰岩2	20.5	17.0	8.7	3.4	D		b	c		37
47	7C93-119	B	石英斑岩2	59.7	46.6	20.5	48.1	C		a	c		50
48	7C93-120	A	流紋岩18	72.8	40.8	26.3	114.3	A		b	−	s	
49	7C93-121	B	珪質頁岩5	21.8	13.2	2.0	0.5	D		b	c		
50	7C93-122	B	石英斑岩2	38.9	28.0	19.0	25.9	D		a	c		47
51	7C93-123	B	珪質頁岩4	23.5	15.2	11.2	3.3	D		c	b		10.13.34
52	7C93-124	B	石英斑岩1	41.0	25.4	22.2	21.0	D		b	c		
53	7C93-125	A	流紋岩19	74.8	36.4	19.1	70.7	A		b	−	T	
54	7C93-126	B	砂岩7	61.8	31.7	22.3	49.9	D		a	c		20
55	7C93-127	A	流紋岩20	51.4	42.2	15.4	47.8	A		b	−	s	
56	7C93-128	A	安山岩C4	64.7	47.4	20.0	87.4	A		c	−		
57	7C93-129	B	安山岩C4	88.8	48.7	35.2	191.0	D		c	c		
58	7C93-132	B	チャート6	24.1	18.1	13.5	4.1	D		b	c		
59	7C93-133	B	砂岩6	70.0	39.0	14.1	49.1	D		b	c		



第92図　遺構等配置図

遺構

００１陥穴（第93図）

本遺構は油谷（１）遺跡の、７Ｄ－35グリッドに位置する。規模は1.5m×0.8mで、隅丸長方形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北東を向き、掘り込みの深さは約0.9mである。底面の形状は1.2m×0.4mの台形を呈し、中央に小ピットが一つある。ピットの大きさは直径0.2m、深さ0.3mほどである。掘り込みは、地表から底面にかけてほぼ垂直に掘り込まれている。

００２土坑（第93図）

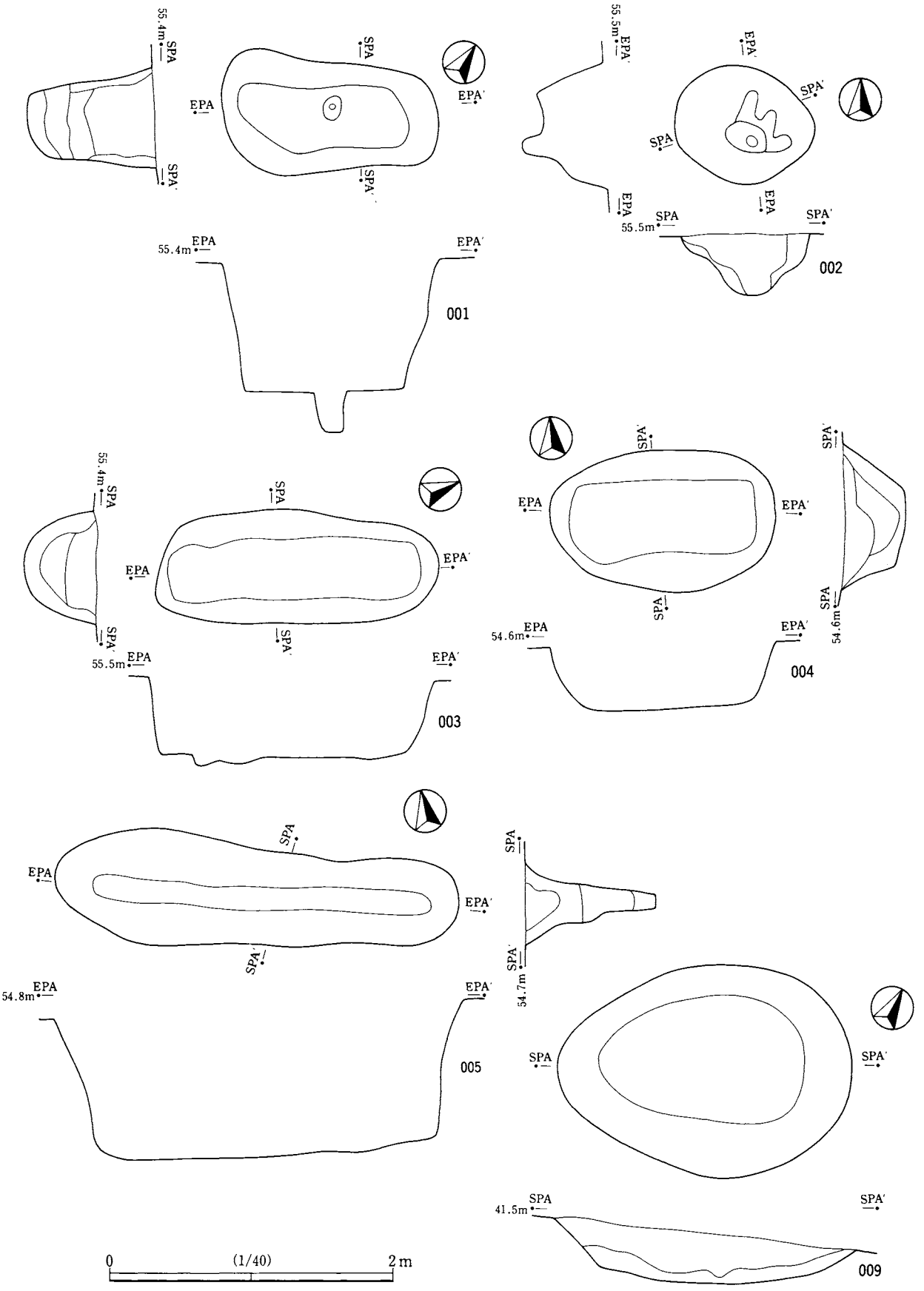
本遺構は油谷（１）遺跡の、７Ｄ－53グリッドに位置する。規模は1.0m×0.8mで、ほぼ円形である。掘り込みの深さは約0.4mで、全体的に丸くくぼむように掘り込まれている。底面にある小ピットは0.2m×0.3m、深さ0.2mほどである。

００３陥穴（第93図）

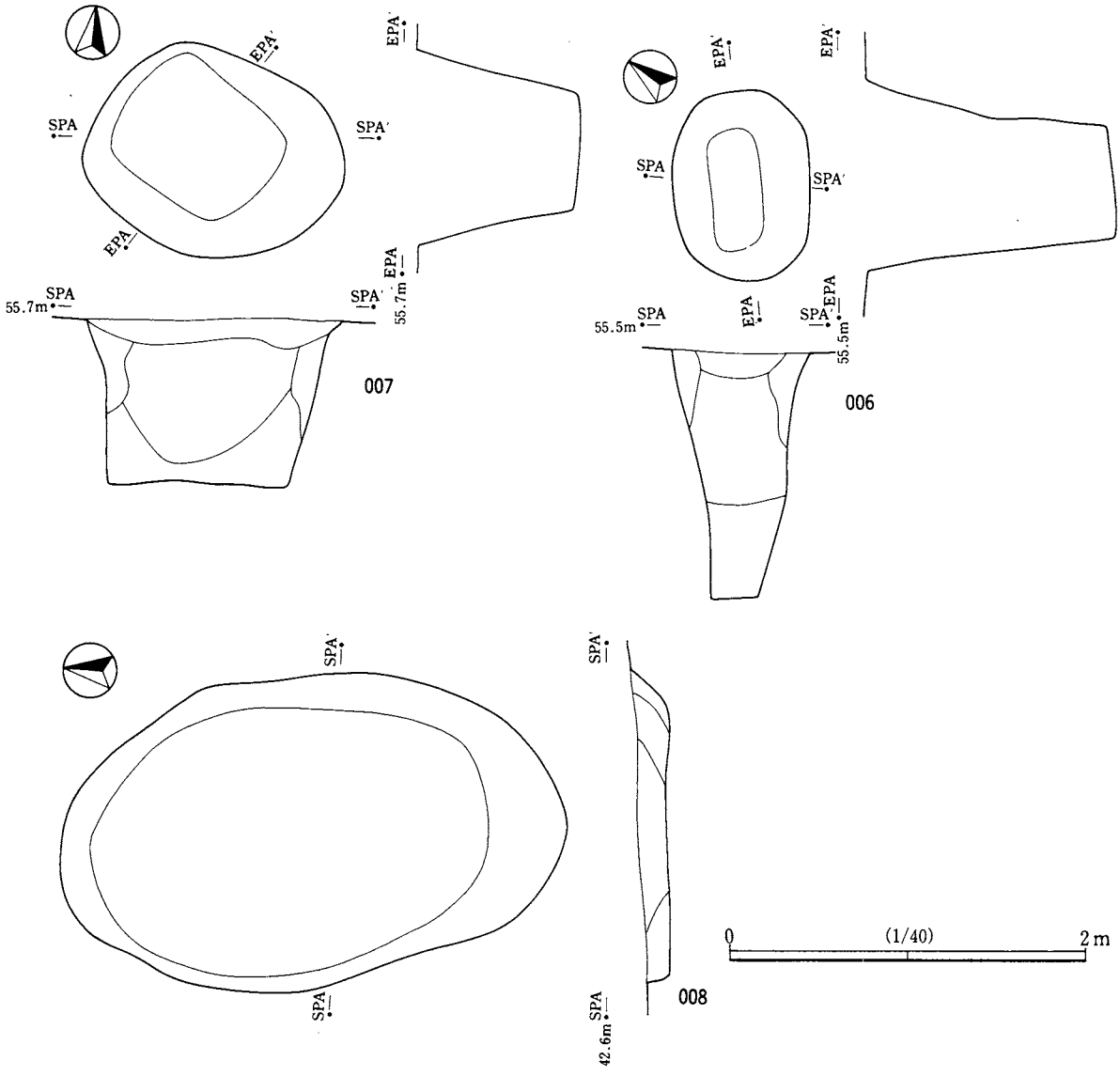
本遺構は油谷（１）遺跡の、７Ｄ－52グリッドに位置する。規模は1.9m×0.8mで、長楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北東を向き、掘り込みの深さは約0.5mである。底面の形状は1.7m×0.4mの隅丸長方形を呈し、土層断面からみると丸みを帯びて掘られているが、縦断面両端は急角度で掘り込まれている。

００４陥穴（第93図）

本遺構は油谷（１）遺跡の、６Ｄ－88グリッドに位置する。規模は1.6m×1.0mで、楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ東を向き、掘り込みの深さは約0.5mである。底面の形状は


001
002
003
004
005
009
55.4m
55.5m
54.6m
54.8m
54.7m
41.5m
SPA
SPA'
EPA
EPA'
0
(1/40)
2m

第93図　土坑等（1）



第94図　土坑等（2）

1.3m×0.5mの隅丸長方形を呈し、縦断面両端は急角度で掘り込まれている。

００５陥穴（第93図）

本遺構は油谷（１）遺跡の、６Ｅ－79グリッドに位置する。規模は2.9m×0.9mで、長楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向は北西よりやや南に傾き、掘り込みの深さは約1mである。底面の形状も2.4m×0.2mの長楕円形を呈し、短軸方向からみるとＴピットよばれる形に掘り込まれている。縦断面両端もほとんど垂直である。

００６陥穴（第94図）

本遺構は油谷（１）遺跡の、５Ｆ－11グリッドに位置する。規模は1.1m×0.8mで、楕円形を呈する縄文時代早期の陥穴とみられる。土層断面図より、掘り込み上部の崩落が観察されることから、元の幅はもっと狭かったものと考えられる。長軸方向はほぼ北東を向き、掘り込みの深さは約1.4mである。底面の形状は0.7m×0.2mの隅丸長方形を呈し、短軸方向からも縦断面からも掘り込みはほぼ垂直である。

００７陥穴（第94図、図版22）

本遺構は油谷（１）遺跡の、４Ｆ－90グリッドに位置する。規模は1.5m×1.2mで、隅丸四角形を呈す

る縄文時代早期の陥穴とみられる。長軸方向はほぼ北西を向き、掘り込みの深さは約1mである。底面の形状も0.9m×0.7mの隅丸四角形を呈し、短軸方向からも縦断面からも掘り込みはほぼ垂直である。

００８土坑（第94図）

本遺構は油谷（２）遺跡の、２Ｈ－96グリッドに位置する。規模は2.4m×1.7mで、楕円形を呈する土坑である。長軸方向はほぼ北を向き、掘り込みの深さは約0.15mと浅い。底面の形状も2.2m×1.4mの楕円形を呈する。覆土の中央部にあたる層より、焼土と炭化物を多く検出したが、遺構の形状より土坑とした。

００９土坑（第93図）

本遺構は油谷（２）遺跡の、２Ｈ－28グリッドに位置する。規模は2.1m×1.5mで、楕円形を呈する土坑である。長軸方向はほぼ北東を向き、掘り込みの深さは最大で0.35mである。底面の形状も1.5m×0.9mの楕円形を呈するが、丸く掘りくぼめられている。

遺物

縄文土器（第95～99図、図版53～56）

全部で約640点の土器が出土しており、そのほとんどが調査区北側の遺物包含層からの出土である。確認面上では遺構の存在は把握できなかったが、遺物の散布状況や遺存状況から考えて、何らかの遺構が包含層中に構築されていた可能性が強い。

第Ⅰ群（１～80）

撚糸文土器を一括する。総出土量約450点を数え、当遺跡中最大多数である。ほとんどが井草式に相当するものであるが、ここでは施文技法の違いをもとに、いくつかに分類した。

１類（１～69）

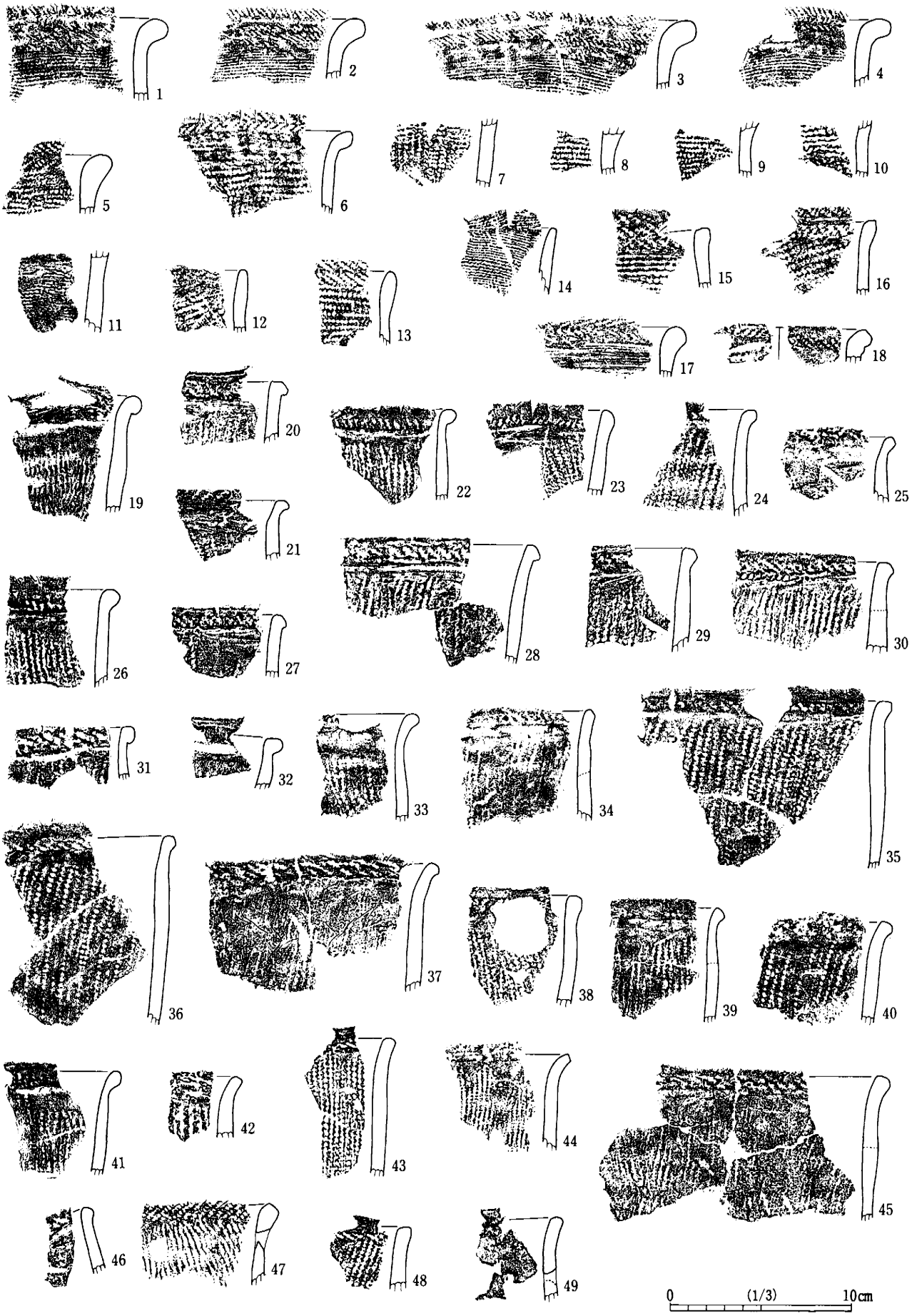
井草式である。口縁部の形態と施文技法をもとにいくつかに分類した。

Ａ種（１～11）

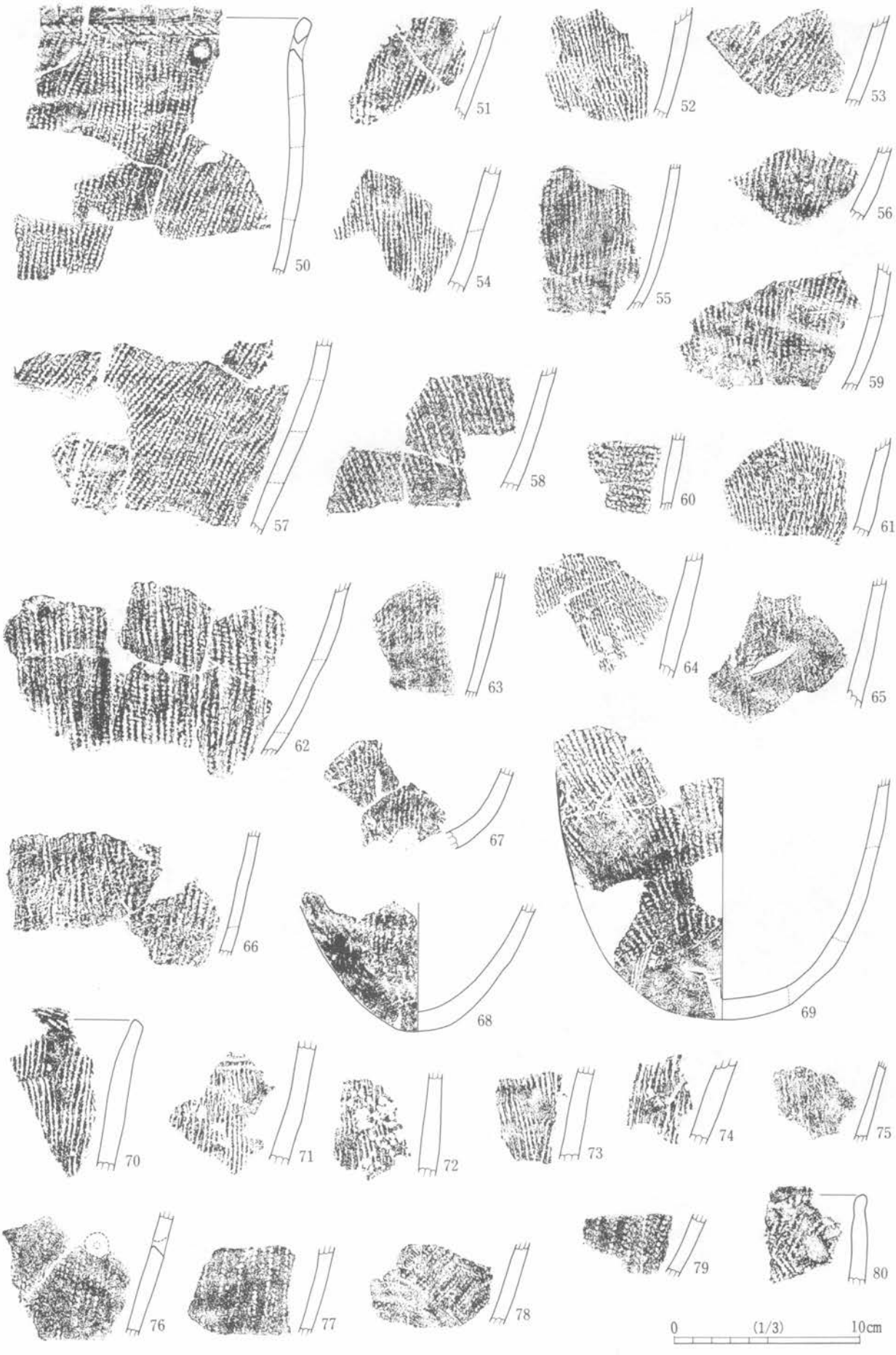
肥厚する口唇部の上面もしくは外面に縄文が施文され、口唇直下に文様帯が構成されるもの。井草Ⅰ式の典型例とされるものである。１～５は同一個体で、胎土は粒子が粗く砂粒を大量に含む。口唇部上面に縄文を施し、その外側の口唇端部に原体を圧痕し、外面にもう一度縄文を施す。口唇直下は横方向に縄文を施す。内面側はヘラ状の工具で丁寧に面取りして整形している。６は口唇部の内面、上面、外面に縄文を施文する。内面、外面の縄文はＲＬ、上面の縄文はＬＲ原体を使用し、全体で羽状縄文を構成している。７～11は口唇直下の破片で、端部が破損しているものの、文様構成から考えてここに含まれると判断したものである。いずれも横方向の縄文が施される。

Ｂ種（12～16）

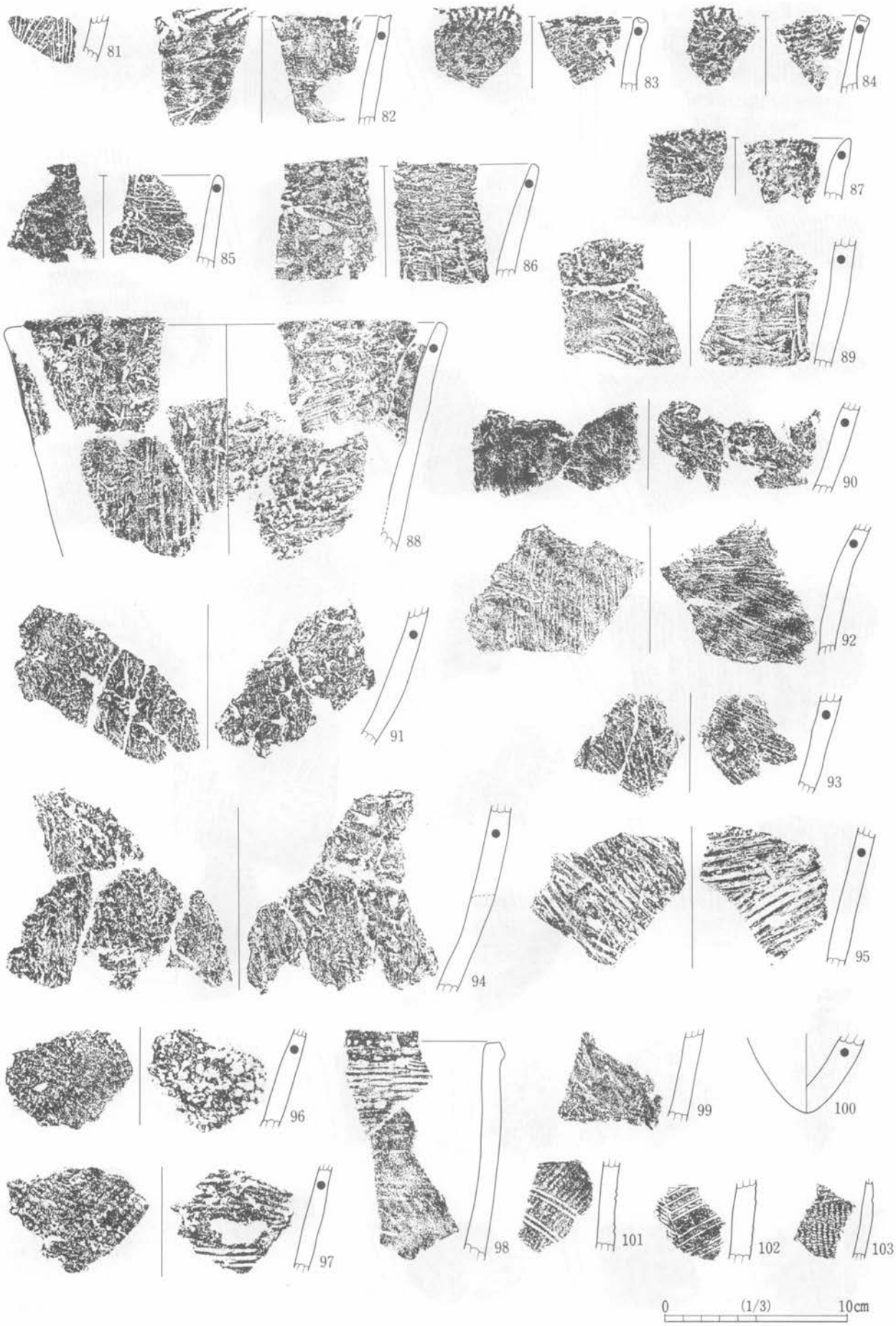
口唇部はあまり肥厚せず、口唇部内面まで縄文施文が及んでいるもの。断面形態などは井草式の範疇から大きく外れるが、文様構成などから考えて井草式に属すると判断したものである。12はほとんど肥厚しない口縁の外面に横方向の縄文が施され、胴部側に縦方向の縄文が施される。13は口唇部の肥厚は弱く、端部が丸く整形され、内面と外面に縄文が施される。口唇直下はやはり間をあけずに横方向の縄文が施される。14は口唇部が薄くなり、口唇部内面と上面に縄文が施される。外面は口唇端部からすぐに横方向の縄文が施され、胴部には縦方向の縄文が施される。15は口唇部内面、上面、外面に縄文を施文し、口唇直下に間をあけずに横方向の縄文を施す。口唇部の縄文は同一原体である。16は15と似るが、口唇部上面には縄文が施されない。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
(1/3)
10cm

第95図　縄文土器（1）


50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
0
(1/3)
10cm

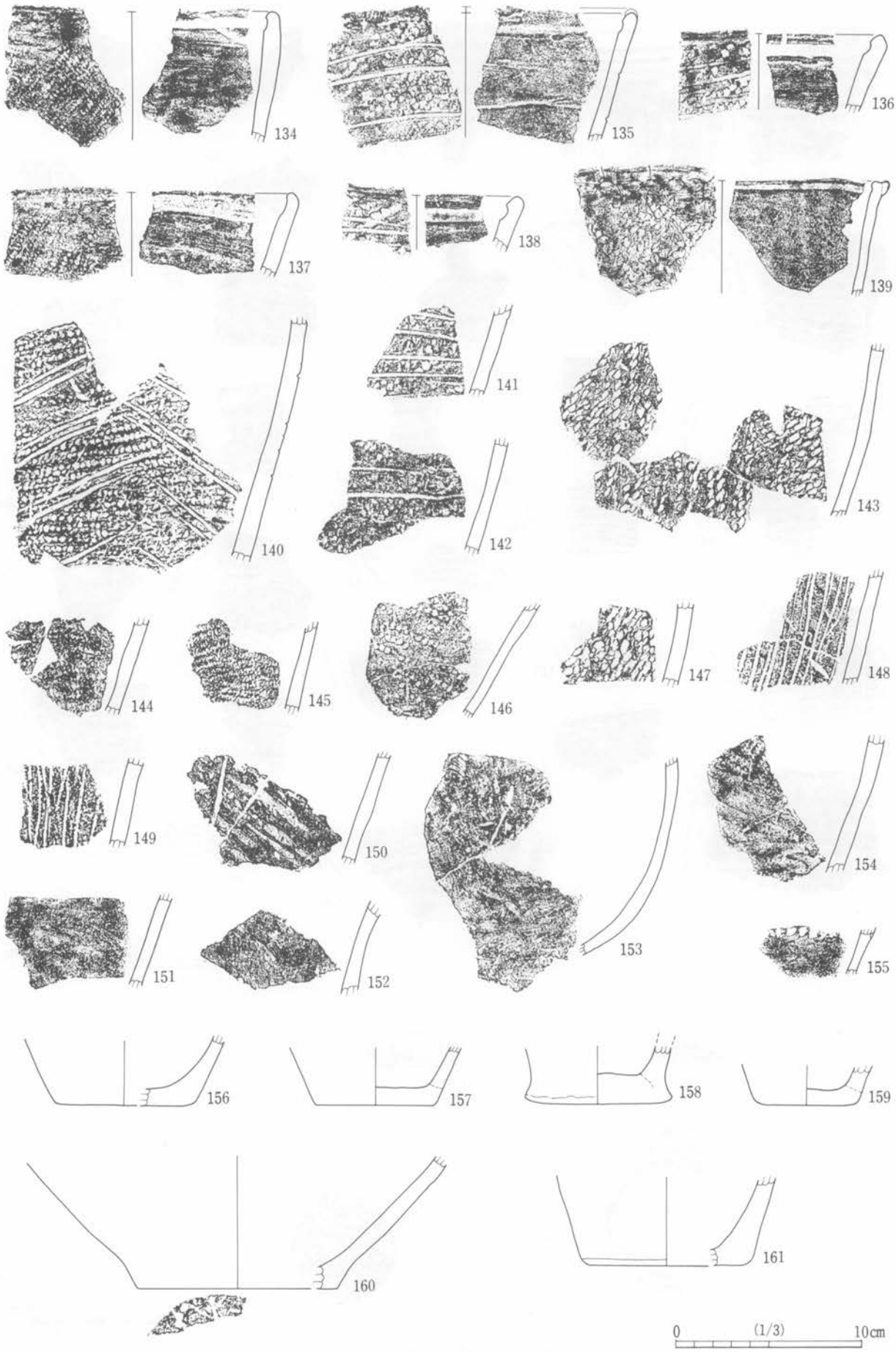
第96図　縄文土器（2）


81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
0
(1/3)
10cm

第97図　縄文土器（3）

104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
0　(1/3)　10cm
132
133
0　(1/4)　10cm

第98図　縄文土器（4）


134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
0
(1/3)
10cm

第99図　縄文土器（5）

C種（17～29、31～39、41、42、44～46）

A種と似た形態をとるが、口唇直下は無文帯となるもの。胴部文様施文後に口唇直下に横方向のナデもしくはケズリが入るもの、あるいは肥厚した口唇の下から胴部文様までおおよそ1cm以上の空白があけられるものをここに含めた。また、口唇部を整形するためと考えられる指頭によるナゾリもここに含めたが、あるいは細分される可能性もある。17、19、37、45は口唇部上面と外面に縄文が施されるもので、胎土は粒子が粗く砂粒が多量に混入する。口唇直下は17はヘラ状の工具によるケズリが入り、19は指頭もしくはヘラ状工具による横ナデが入る。18は口唇部内面と外面に縄文が施文されるもので、口唇直下は無文帯になるとみられる。20～29、31～36、38、39、41、42、46は口唇部外面のみに縄文が施されるものである。20、22、26～29、31、39は、口唇直下にヘラ状工具による横方向の強いケズリが観察される。いずれも口唇部上面および内面は、ヘラによって成形されており、角頭状を呈している。21、32、33、35、36、41は、口唇直下は指頭によってゆるやかにカーブを描くように成形される。25は口唇部上面に縄文が施されるものであるが、全体に摩滅しており詳細は不明。37と45は同一個体である。39は口唇直下の横方向のケズリが途中で止まっている。38はほぼ直立する口縁部の口唇直下に横方向のケズリを入れて、結果的に口縁部を肥厚させたような効果を上げている。42は唯一撚糸施文と断定できるものである。44は口縁部がかなり強く外反し、口唇部内面と外面に縄文が施される。口唇直下には空白が存在するが、胴部縄文の端部はナデ消されておらず、次のD種との区別はあいまいになってくる。

D種（30、40、43、47、48、50）

口縁部の肥厚が弱くなり、口唇直下からすぐに胴部へ縄文あるいは撚糸文が施文されるもの。井草II式の典型例である。30は口唇部外面に縄文が施されるもので、胴部は無節縄文である。口唇部に胴部施文時についたとみられる原体の末端の痕跡が観察される。40はまばらな撚糸文を胴部に施す。43はかなり密な縄文が胴部に施文される。47は口唇部上面全体にＬＲ縄文が施され、ほとんど間をあけずに胴部に向かって縄文が施される。48は口唇部外面にＲＬ縄文が、胴部にはＬＲ縄文が施される。50は口唇部も胴部も同一原体によるＲＬ縄文が施される。

E種（49）

無文のもの。無文の口縁部はこの資料含め5点だけである。口唇直下に幅2cmほどの横方向のケズリが入り、その下に縦方向のケズリが見られるため井草式に含まれるものと判断した。ただし胴部には文様が施されている可能性がある。口唇部上面は平らに削がれている。

F種（51～63、66、68、69）

胴部および底部で、縄文のもの。全部で270点近くを数え、ほとんどが井草式に属すると考えられる。60は横方向に施文されるもので、口唇直下とは考えられないもの。全体がどのように施文されていたかは不明である。

G種（64、65、67）

同じく胴部および底部で、撚糸文のもの。総数40点強で、縄文に比べてかなり少なく、また、明らかに夏島式以降に比定されるものもほとんどなかった。

なお、図示しなかったが、この時期に比定されると考えられる無文土器が40点ほど出土している。ただし器面が摩滅しているものもあるため、実数はもっと少ない。

2類（70～75）

夏島式である。胎土は細かいがスコリアの混入が顕著で、赤褐色に発色している。口縁部はやや外反し、口唇部から胴部にかけて細い撚糸文が縦に施文される。

3類（76～79）

稲荷台式と考えられるものである。施文技法そのものは井草式の撚糸施文土器の胴部と大きく違わないが、器面にミガキがかけられてまばらな撚糸文が施されるものをここに分類した。ただし口縁部資料が出土していないため、確定できない。

4類（80）

上記のいずれにも分類できないもの。図示したもの1点のみである。80は胎土にはやや砂粒が多く混入し、外面には撚りが反対の単節縄文を上下二段に施して羽状縄文としている。成形は全体に雑で、内面は剝落が著しい。文様構成は花輪台式を想起させるが、胎土などが異質で断定はできない。

第Ⅱ群（82～103）

沈線文以降の早期と前期を一括した。

1類（81）

沈線文土器である。図示したもの1点のみの出土である。胎土はやや粗く雲母片や石英粒を多量に含み、焼成は良好である。細い棒状工具を使用して鋸歯状に沈線を施す。田戸下層式に属すると考えられる。

2類（82～100）

条痕文土器を主体とする早期後半の土器である。約70点出土しているが、ほとんどが条痕もしくは擦痕のみである。そのため分類するに当たって判断に迷うものもあったが、器面の調整や胎土への繊維の混入量などを目安に、以下の通りに分類した。

A種（82～95、100）

器面に擦痕が施されるもの。82は口縁部で、口唇部上面が平らに削ぎ落とされて、縄文原体が斜めに圧痕されてキザミ状になっている。胎土は細かく繊維の混入量は少ない。器面はヘラ状の工具によるとみられる擦痕が観察される。83、84は口縁部で、やはり口唇部上面は平らに削ぎ落とされ、細くて幅の狭いヘラ状の工具によるキザミが施される。胴部は同じ工具を使用したとみられる擦痕が観察される。85～88は口縁部でキザミがないものである。器面はいずれも外面縦方向、内面横方向の擦痕が観察される。89～94は胴部である。やはり外面縦方向、内面横方向の擦痕調整がなされる。92、93は他の土器より胎土が粗く、繊維の混入量も少ない。100は底部である。

B種（95）

器面に条痕が施されるもの。アナダラ属の貝殻を使用して施文する、いわゆる条痕文土器の典型的なものであるが、当遺跡では極めて少なかった。95は胎土に繊維が多量に混入するが、焼成は良好。

C種（96、97）

外面に縄文、内面に条痕が施されるもの。早期末葉に位置づけられるもので、図示したものがすべてである。96、97は同一個体で、胎土はやや粗く繊維を多量に含む。外面にＬＲ縄文、内面には貝殻条痕が施される。

D種（98、99）

いわゆる条痕文土器とは全く異質な資料である。胎土は粒子が細かいが石英、長石粒が多量に混入し、濃茶褐色を呈する。繊維は全く含まれない。口唇部上面は平らに削がれ、外縁部にキザミが入る。口唇直

下には隆帯が貼り付けられ、胴部は横方向の条痕が施される。時期の判断は難しいが、胎土は西関東の早期末の土器に似ており、早期末に位置づけておく[1]。

3類（101～103）

前期の土器である。出土したのは図示した3点のみである。いずれも前期後半の竹管文系土器である。縄文地紋に半截竹管による沈線が施される。

第Ⅲ群（104～154、156～161）

後期加曽利B式を一括する。全部で約110点出土しており、撚糸文土器に次ぐ量である。

1類

精製土器を一括する。施文技法別にさらに細分する。

A種（104～106、108～115、132）

磨消縄文を主体とするもの。104は波状口縁の深鉢で、口縁部に帯縄文をめぐらし縦位区画沈線が配される。口唇部は外そぎ状になり、先端部にキザミが入る。内面は平行沈線が施される。105、106は口縁部にやや幅広の縄文帯が配されるものである。108、112は口縁部が無文帯になり胴部に縄文が施される深鉢で、いずれも胴部と口縁部の境の屈曲部である。いずれも器面は丁寧に研磨されている。110は同じ文様構成をとる浅鉢で、縄文と無文帯との境には竹管による連続刺突が施される。111はソロバン玉状を呈する深鉢の屈曲部である。113は沈線を境に縄文を磨り消しているが、一部が消えずに残っている。114、115は同一個体と考えられる深鉢で、枠状の磨消縄文を主文様とする。内面はかなり丁寧なミガキ調整がなされる。132は台付き浅鉢である。台部の推定底径は6.5cmで、残存器高は5.3cmである。胎土は他の加曽利B式に比べるとやや粒子が粗い。胴部は帯縄文とS字状沈線によって構成され、台部は外面が横方向のミガキ、内面がケズリ調整されている。

B種（107、116～126、131、133）

沈線を主体とするもの。107は突起を持つ口縁部である。116～120、123は同一個体と考えられる浅鉢で、口縁部を無文帯とし、その下に集合沈線を配する。120は底部で、台付きになる可能性がある。121、131は同一個体の注口土器である。121の左上側が注口との接合部である。133は椀型の浅鉢である。口径は推定19.6cm、底径は7.4cm、器高は10.1cmである。胎土は粒子が細かく、石英や黒雲母の小粒の混入がやや目立つ。口縁に添って沈線を5本めぐらせ、縦位の区画沈線をおよそ5cm間隔で配置する。沈線より下側は横方向のケズリで調整し、内面はミガキ状の調整を施す。底面にはアンペラの圧痕がみられる。

C種（127～130）

無文土器である。いずれも浅鉢の口縁部になるもので、深鉢は次の2類に分類した。127は口縁が内そぎ状になるもので、内面は特に丁寧に研磨されている。128は胴部に屈曲があるもので、底部に向かって急速にすぼまる器形をしている。129は口縁が外そぎ状になるもの。130は小型の浅鉢で、口径は推定16.2cmである。口唇直下に幅2cmほどのケズリが入っており、弱い屈曲が生成される。

2類（134～149）

粗製土器を一括する。134～139は口縁部である。縄文施文のものと、それに条線が加わるものとに分類できる。加曽利B式特有の、口縁部に添って紐線文が貼り付けられる資料は139だけであった。140～149は胴部である。135と142、136と138、143と147、148と149がそれぞれ同一個体である。

3類（150～154、156～161）

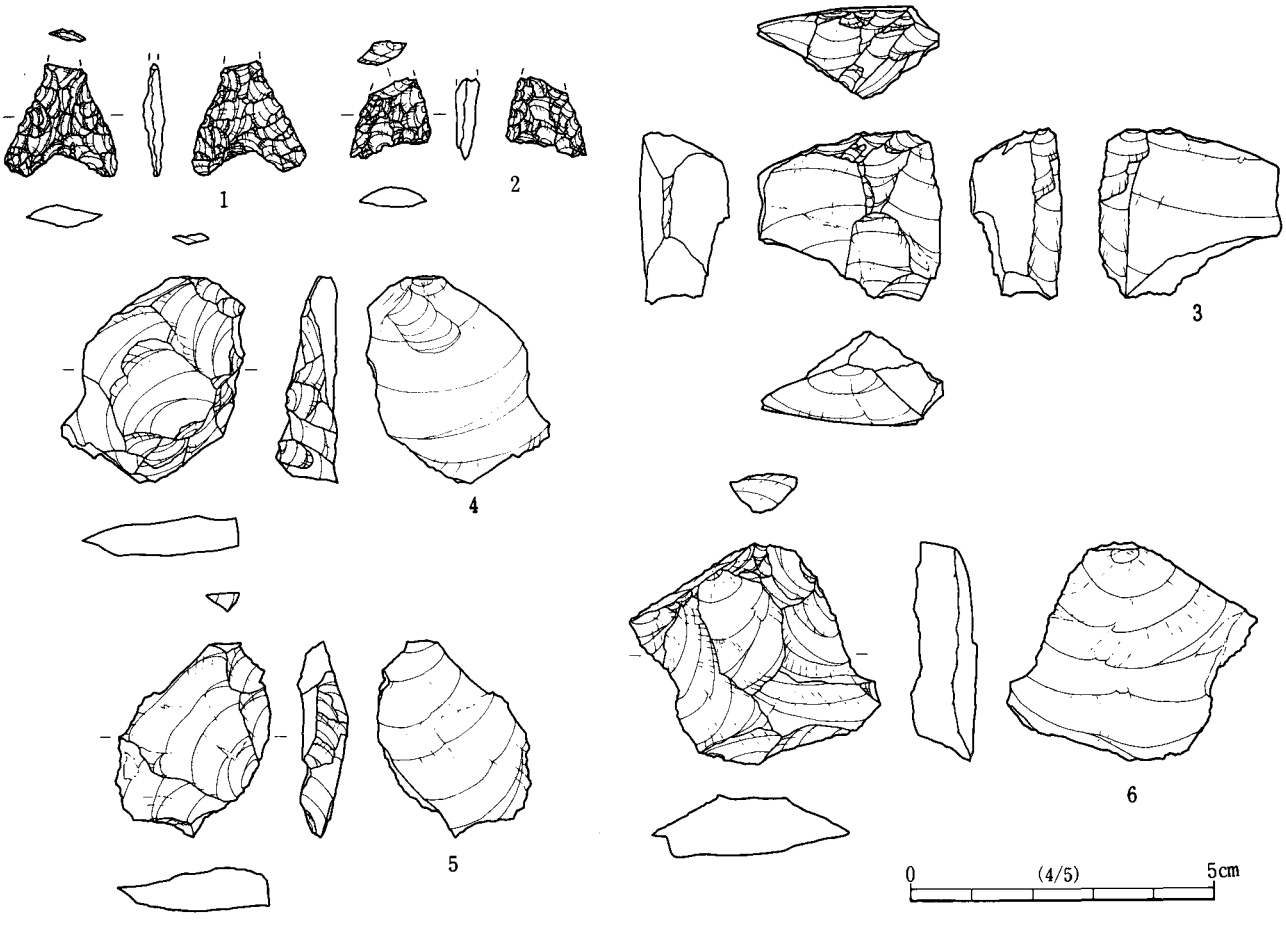
粗製か精製か不明な無文深鉢の胴部と、無文の底部を一括した。150、153、154は縄文が磨り消されたような痕跡が確認できる。151、152は全くの無文土器で、深鉢の底部付近と考えられる。156～161は底部である。推定底径は156が8.2cm、157が6.2cm、158が7.0cm、159が5.2cm、160が10.6cm、161が7.4cmである。160は口縁が大きく開く浅鉢になると考えられるが、それ以外は深鉢になるものとみられる。なお、156～159は粒子の細かい胎土を使用し、器面にも丁寧なミガキ調整が施されるが、161は胎土が粗く石英、長石粒が多量に混入し、器面の調整も粗いという違いが見られる。156～159は精製土器、161は粗製土器と考えられる。

第Ⅳ群（155）

弥生土器である。１点のみ出土した。155は甕型土器の頸部である。後期前葉と考えられる。

縄文時代石器（第100図、図版44、第13表）

本遺跡より出土した石器はごくわずかである。石器総点数は35点を数える。器種組成は石鏃２点、石核１点、砥石２点、剥片６点、礫24点である。



第100図　縄文時代石器

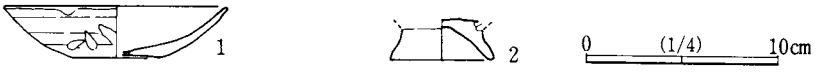
第13表　縄文時代石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号	No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号
1	石鏃	黒曜石	18.2	18.7	3.4	1.2	4トレンチ3	4	剥片	石英	33.0	30.0	10.0	7.6	5 F02-342
2	石鏃	黒曜石	12.5	13.3	3.8	0.8	4 E77-21	5	剥片	石英	31.3	25.1	7.9	5.4	4 F92-230
3	石核	メノウ	27.1	30.0	14.7	11.2	5 F24-354	6	剥片	珪質頁岩	35.2	41.4	10.8	14.1	7 C79-18

1・2は石鏃である。1は先端部を欠損するが、両側縁上半部が抉れ下半部が膨らむ。基部は逆V字状に浅く抉れる。2は先端部と片脚部を欠損し形状は明確ではないが、両側縁が直線的で脚部が尖る形状を呈するようである。基部は1と同様に浅く抉れる。3は石核とした。厚味のある縦長剝片を石核の素材としている。切断面を打面としてその小口から右側縁に細長い剝片剝離が行われる。石核としたが、或いは彫器の可能性もある。4～6は剝片である。4・5は同一母岩の石英を石材とする縦長剝片で、背面構成から、打点を90度転移させる剝片剝離作業が看取される。6は珪質頁岩を石材とする縦長剝片である。

グリッド出土遺物（第101図）

1は確認トレンチからの出土である。磁器で、口径は11.7cm、器高2.6cmを測る。内面に施釉が施され、外面口唇部には黒色の油煙が付着し灯明皿として使用されたものと見られる。近世のものであろう。2は4E－69グリッド出土の土師器の椀の高台部である。底径5.5cm、胎土は細かく、内面は黒色磨研処理されている。



第101図　グリッド出土遺物

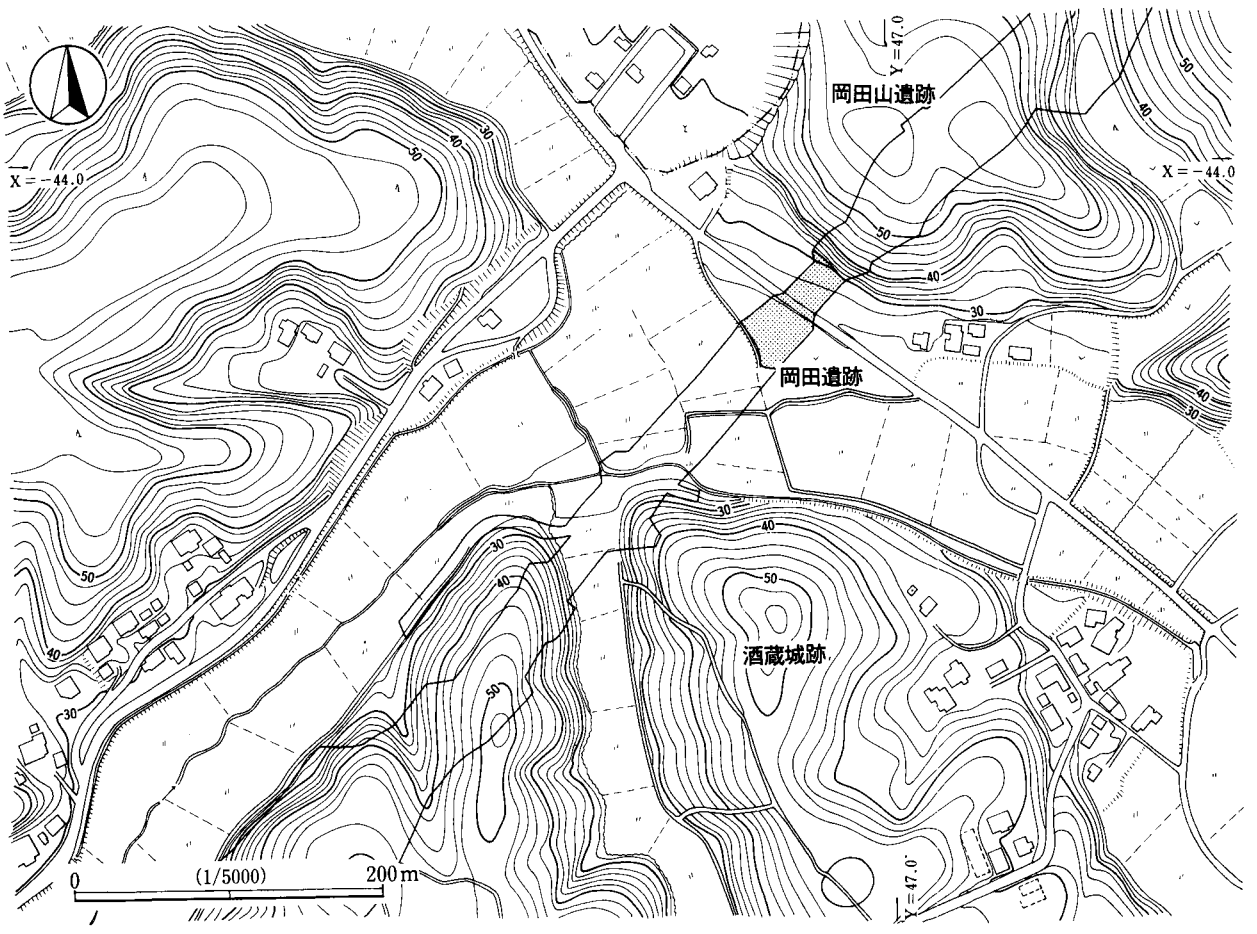
注1　石橋宏克氏の御教示による。

IX　岡田遺跡

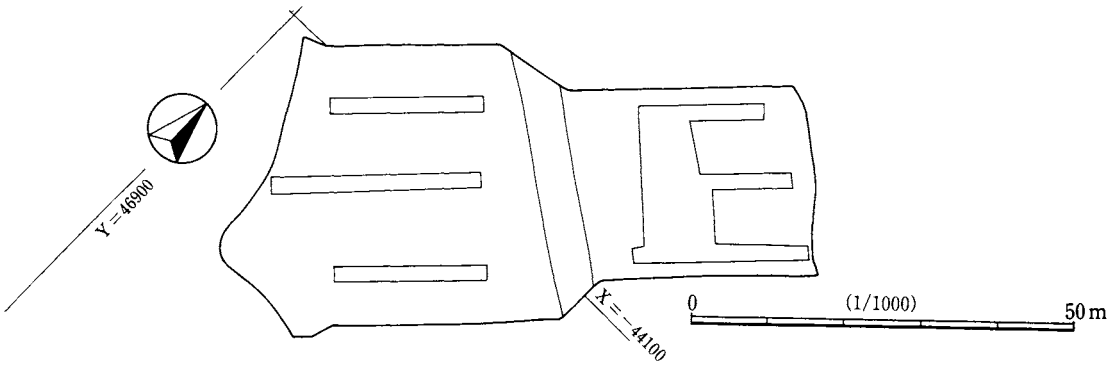
1　遺跡の概要（第102・103図、図版22）

本遺跡は、東金市酒蔵字岡田126他に位置する。調査対象面積は2,200㎡で、上層の確認調査を行ったところ新期テフラである黒褐色土層中に遺物包含層を検出し、古墳時代から奈良・平安時代にかけての土師器を検出したので、その周囲を拡張して確認調査を行った。しかし、遺構は検出されなかった。また、調査範囲の南側からは、現水田面の続きが検出されただけで、遺物の出土は希薄であった。そのため、本調査は実施されなかった。下層の確認調査においては、調査範囲である斜面上部まで表土の下が砂地となっておりローム層が存在しないため行われなかった。調査期間は、平成６年６月１日から平成６年６月16日までであった。

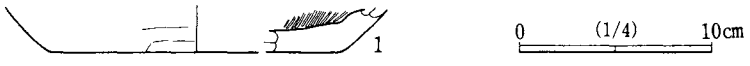
遺跡は、九十九里平野を経て太平洋に流入する真亀川の上流部、十文字川に開析された十文字谷の奥部滝沢支谷と三ケ尻支谷の中間に位置し、下総台地の東端にあたる極楽寺台の南側に位置している。前述の油谷遺跡は谷をへだてた北東１㎞に所在し、本遺跡と川をはさんだすぐ南が酒蔵城跡となっている。また北側は台地となっており、岡田山遺跡が位置している。地形的には、谷部を流れる川の北側微高地が本遺跡となっており、今回の調査範囲はその中央部である。標高は24～30ｍで川の流域にある水田面から一段高くなっている段丘面の畑地に位置する。



第102図　岡田遺跡周辺地形図



第103図　調査状況図



第104図　出土遺物

2　検出した遺構・遺物（第104図）

遺構は検出されず、図示できるような遺物はほとんど出土しなかった。包含層中から１が検出された程度である。１は常滑焼の擂鉢の破片である。底径15.0cmを測り、胎土は比較的大きめの白色の石英粒を多く含み、色調は赤みを帯びた褐色である。内面には刻線がみられる。

X　岡田山遺跡

1　遺跡の概要（第105～107図、図版23）

本遺跡は、東金市酒蔵字岡田山147－1他に位置する。調査対象面積は6,200㎡で、上層の確認調査により奈良・平安時代竪穴住居跡4軒と近世の溝状遺構1条を検出した。さらに、この周辺に設定したグリッドからも同時期の土器が検出されたので、ほかにも遺構の存在が想定されたため、本調査を実施し、周辺を精査した。その結果、新たに竪穴住居跡2軒と土坑・炭焼窯を検出した。なお本遺跡では住居が広い範囲にわたって検出されたため、調査区域外にも住居跡が存在することが考えられる。また遺跡の東部からは縄文時代早期の土器の散布を検出したが、少量で遺構等は検出されなかった。下層の確認調査では、調査範囲の東部1か所において石器1点を検出し、その周囲を拡張したところ石器2点が検出されたが、それ以上、遺物は検出されず、また分布も狭い範囲にとどまるため、確認調査の範囲で終了とした。調査期間は、平成6年11月21日から平成7年3月30日までであった。

遺跡は、九十九里平野を経て太平洋に流入する真亀川の上流部、十文字川に開析された十文字谷の奥部滝沢支谷と三ケ尻支谷の中間に位置し、下総台地の東端にあたる極楽寺谷の南側に位置している。前述の岡田遺跡と接して、その北側になるが、地形的には台地の南斜面上になる。酒蔵城跡とは谷をはさんで向かいあっているが、岡田遺跡のように酒蔵城跡と関係した遺物は今回の調査で検出されなかった。標高は53mを測り、南側斜面下の水田とは比高30mを測る。

2　検出した遺構・遺物

旧石器時代

旧石器時代調査は、6,200㎡の調査対象面積のうち、280㎡の確認調査を実施した。ブロックは調査対象範囲の北西側で検出され、1か所のブロックが検出された。このブロックを第1ブロックと呼称する。第1ブロックは出土層位が立川ローム層Ⅵ層にあたり、このブロックは1か所の検出ではあるが便宜的に第Ⅰ文化層を設定して説明していく。

第1ブロック（第108・109図、第14表、図版41）

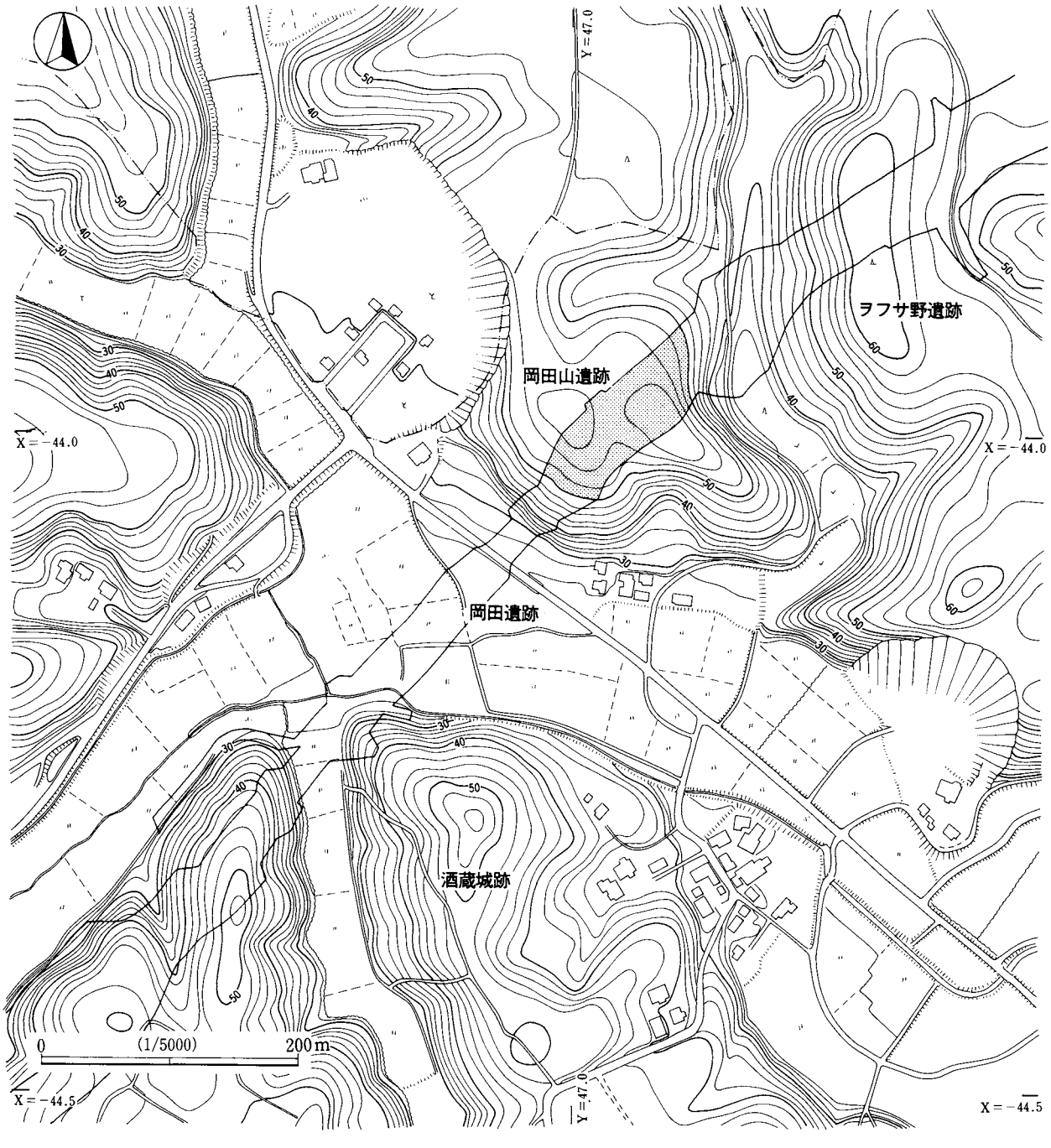
分布状況　調査区北西側で調査されたブロックである。2Cグリッド北側に位置しており、調査区の北方向から延びる台地先端部が独立丘状になった部分の頂部に当たる。

遺物総数は3点である。3点が並んで分布している。2C－34・35グリッドに東西方向に一直線上に分布する。分布範囲は南北1.0m、東西2.8mを測る。垂直分布ではほぼ同一レベルに分布する。土層断面への投影では、Ⅵ層中位に遺物集中がある。

母岩別資料　2母岩が認められ、点数のまとまる母岩は、瑪瑙1の母岩が2点で、他は黒曜石1が単独母岩の点数構成となっている。母岩と器種の関係は、黒曜石1からナイフ形石器が搬入されている。

出土遺物　小規模なブロックであり、主要な器種はナイフ形石器1点のみである。

1はナイフ形石器である。下半部を大きく欠損するが、ナイフ形石器の先端部と推定される。良質の黒曜石を石材としており、石刃状の縦長剝片を素材として、素材の打面部を基部側に設定している。器体の先端部の両側縁に細かなブランディングが施されている。2・3は剝片である。それぞれ瑪瑙1を母岩と



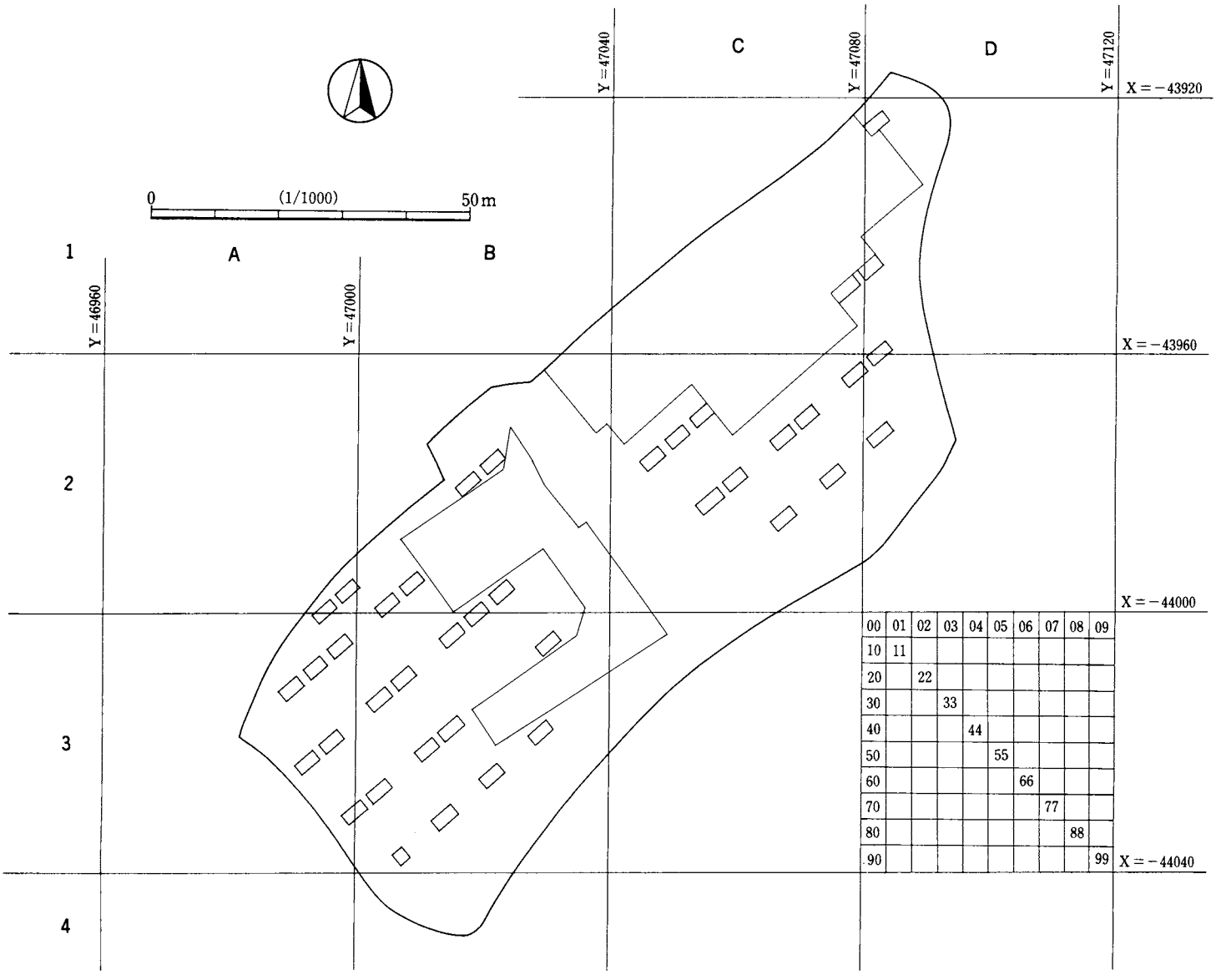
第105図　岡田山遺跡周辺地形図

した比較的厚味のある縦長剝片である。

遺構

００１土坑（第111図）

本遺構は、１Ｃ－72グリッドに位置する。規模は2.1m×1.3mで、楕円形を呈するが長軸北側が膨らんだ形となっている。長軸方向は東からやや北を向き、掘り込みの深さは約0.4mである。底面には西側に一つ小ピットがあり、直径0.2m、深さ0.5mを測る。掘り込みはなだらかで、底面もやや丸くなっている。



第106図　上層調査状況・遺構等配置図

００７土坑（第111図、図版27）

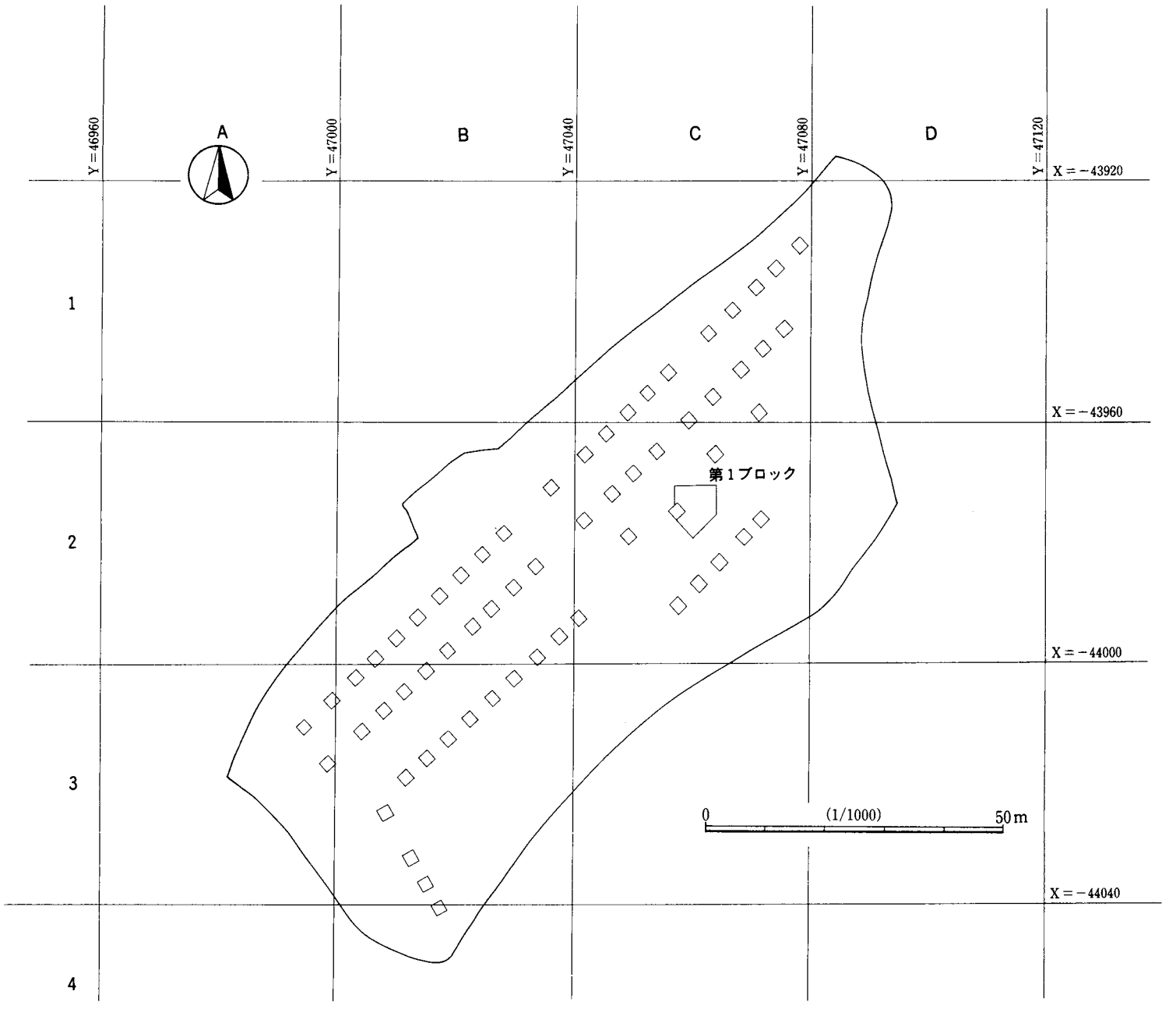
本遺構は、１Ｃ－64グリッドに位置する。規模は1.5m×1.3mで、楕円形を呈する。掘り込みの深さは約1.8mで、掘り方は上からだんだんと狭くなり、下側0.7mほどで丸く膨らむという、鍵穴状をしている。底部近くになっても粘土層が検出されず湛水力に疑問があることから、井戸ではないと考えられる。

０１２土坑（第111図、図版27）

本遺構は、２Ｃ－90グリッドに位置する。規模は1.8m×1.4mで、台形を呈する。掘り込みの深さは約1.1mで、底面西側に一つ小ピットがあり、直径0.15m、深さ0.4mを測る。掘り込みは急角度で、陥穴の可能性が考えられる。

０１３土坑（第111図、図版27）

本遺構は、１Ｄ－70グリッドに位置する。規模は長軸方向で3mを測るが、二つの丸い土坑がつながり８の字状を呈している。北に位置する円形のものは、直径1.3m、深さ0.2mを測る。南に位置する一回り大きな円形のものは、直径1.6m、深さ0.7mを測る。この中心部には小ピットが一つあり、直径0.2m、深さ



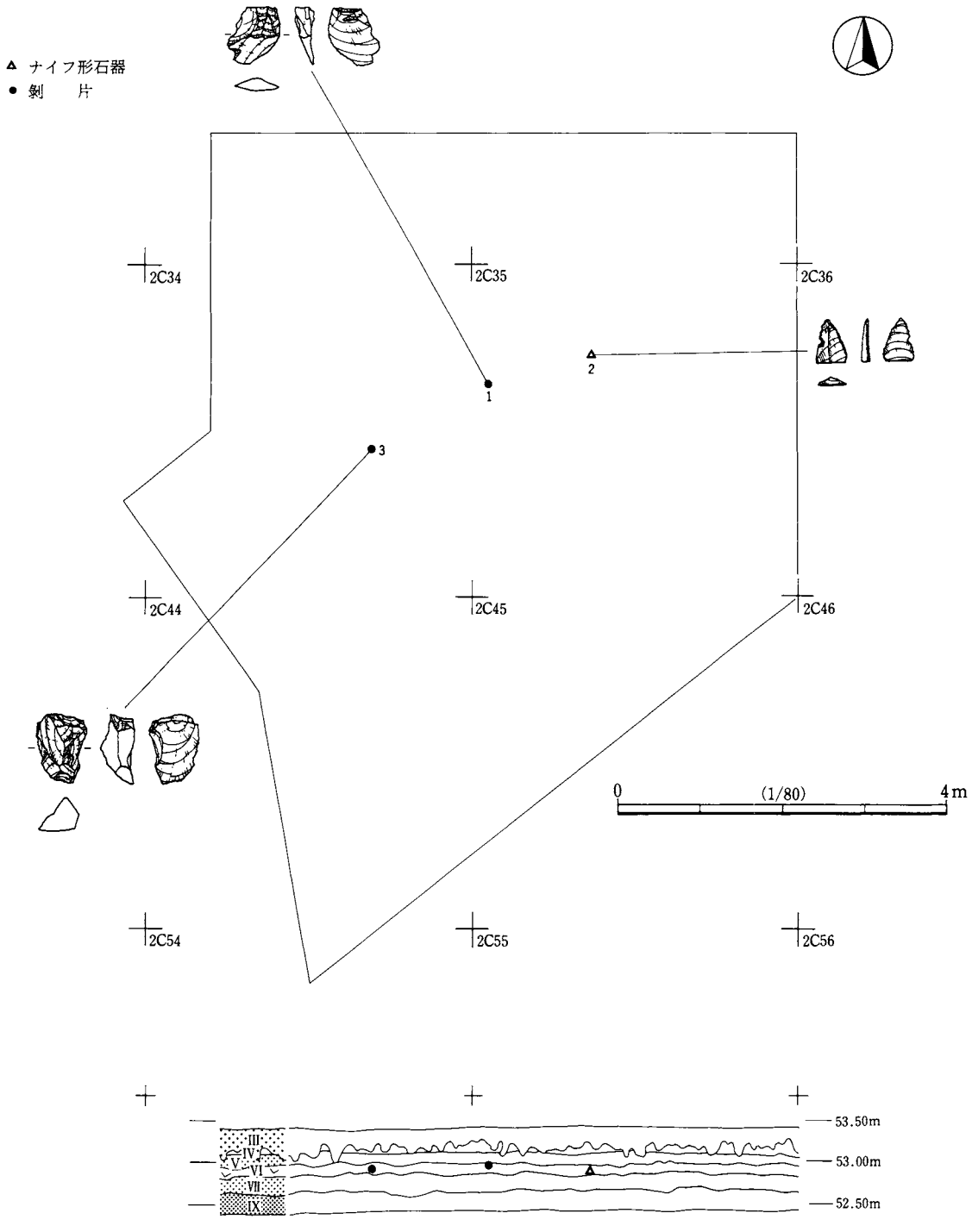
第107図　下層調査状況図

0.1mを測る。

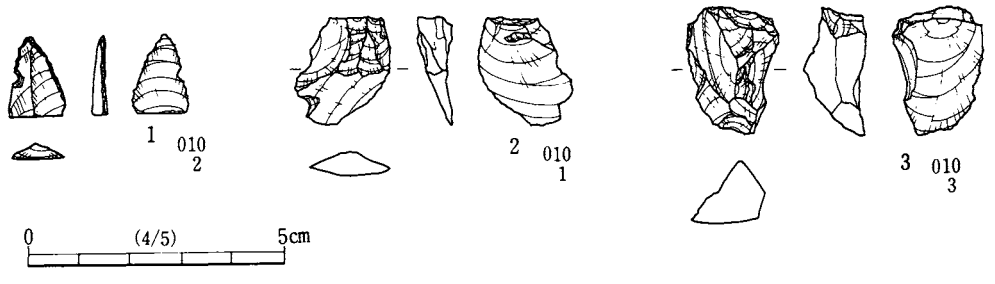
００２住居跡（第112・113図、図版23・24・64・66）

本遺構は１Ｃ－38グリッドに位置し、調査した住居跡群の中では最東端に位置する住居跡である。形態は隅丸方形で隅の部分はかなり丸くなっている。主軸は北東を向き、一辺3.5mを測る。掘り込みはやや緩やかに掘り込まれ、深さ0.4m～0.45mを測る。床面はほぼ平坦で、中央部は踏み固めによって硬化している。西側辺の壁際に一部で壁溝が検出されたが、それ以外は柱穴、貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。カマドは白色粘質土を主体とした大きめの袖でしっかりしていた。袖の内側に瓦片が左右袖に各１点ずつ瓦外面を燃焼部に向けて立てて袖が構築され、内面の補強用として用いられていた。周辺の住居跡群からも寺院関連遺物が検出されており、本遺構の瓦片も入手の経路は同一かと考えられる。火床は焼けており、煙道は不明瞭であった。

遺物は少な目で、図示できたのは以下の通りである。１は土師器の椀で、口径16.8cm、底径9.0cm、器高



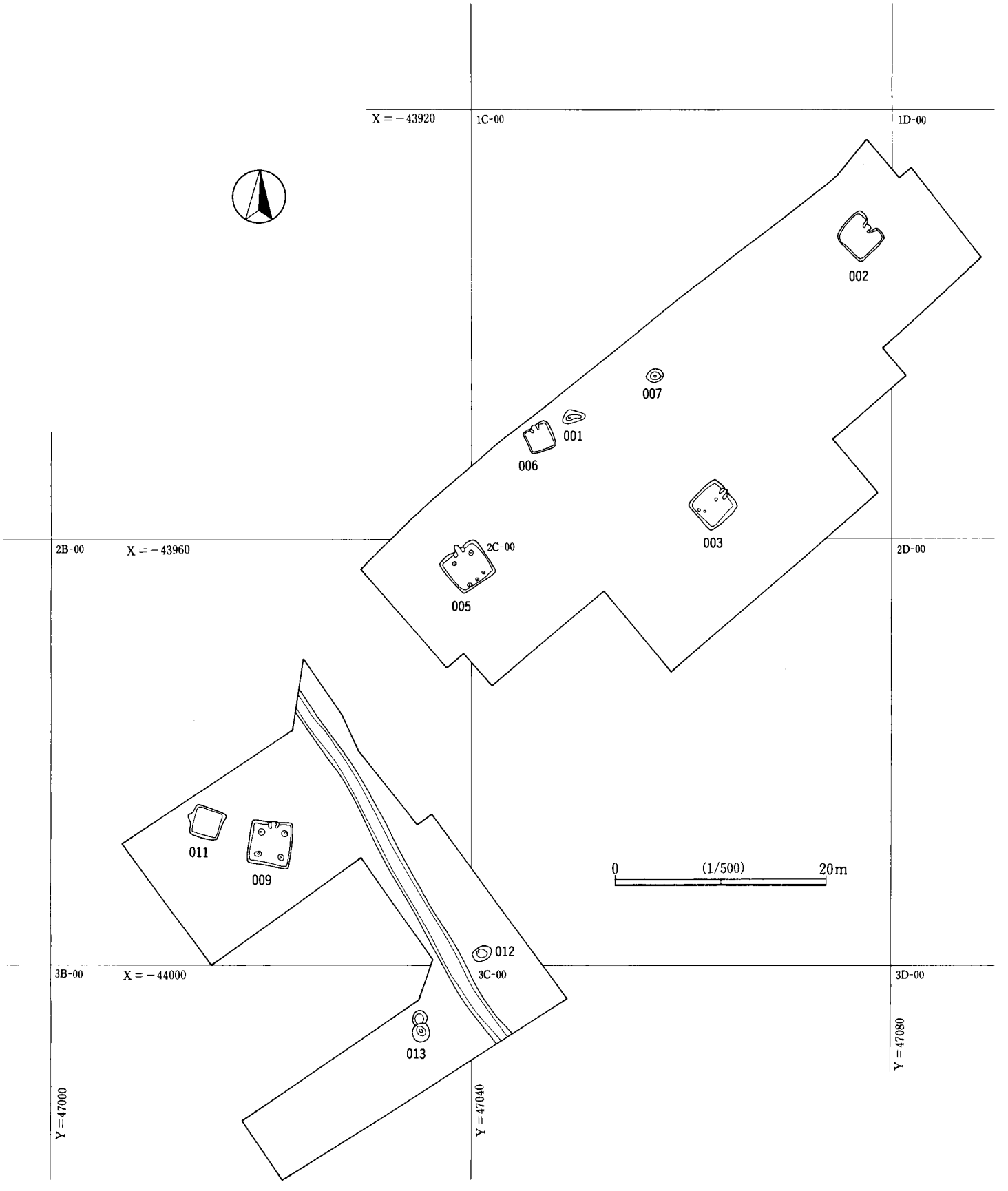
第108図　第１ブロック出土状況



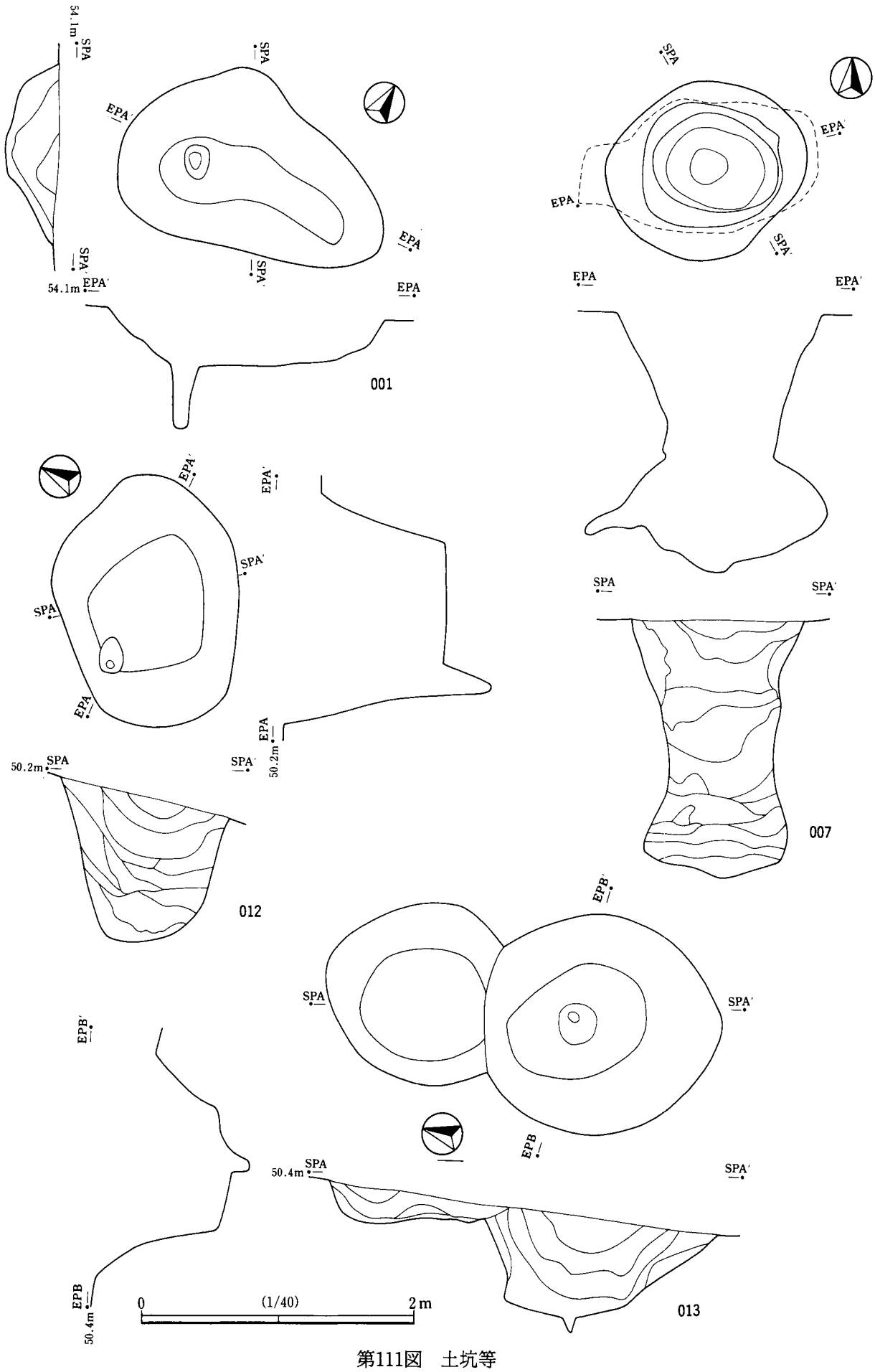
第109図　第１ブロック出土石器

第14表　第１ブロック石器属性表

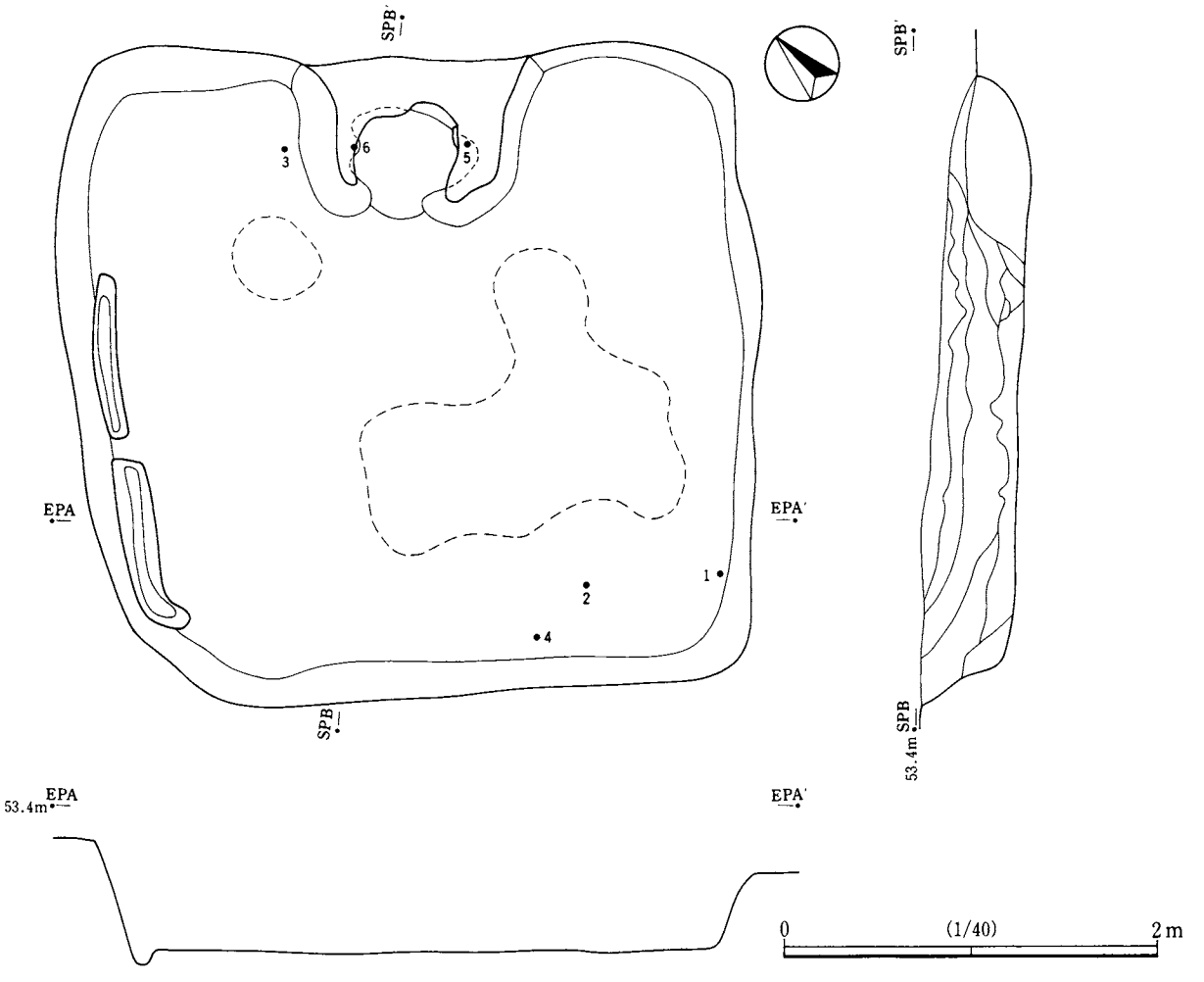
番号	遺物番号	器　種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母　岩
1	010－1	剥片	27.8	25.0	9.4	1.7	2	H				3		1	1			F		メノウ1
2	010－2	ナイフ形石器	20.5	15.2	4.2	0.4	1													黒曜石1
3	010－3	剥片	32.9	24.2	16.4	4.4	3	H		○		2	2	2	2			F		メノウ1



第110図　遺構配置図



第111図　土坑等

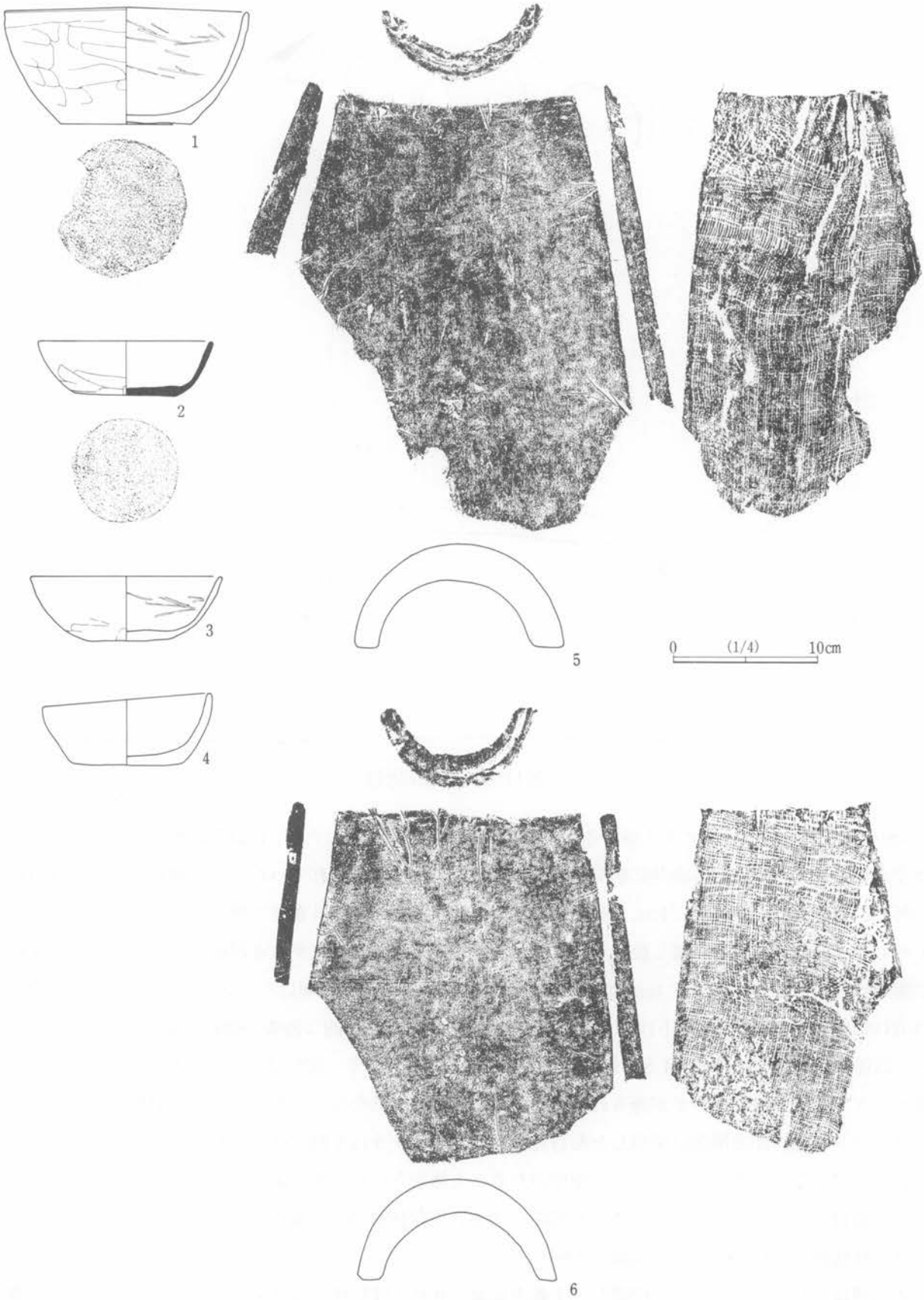


第112図　002住居跡

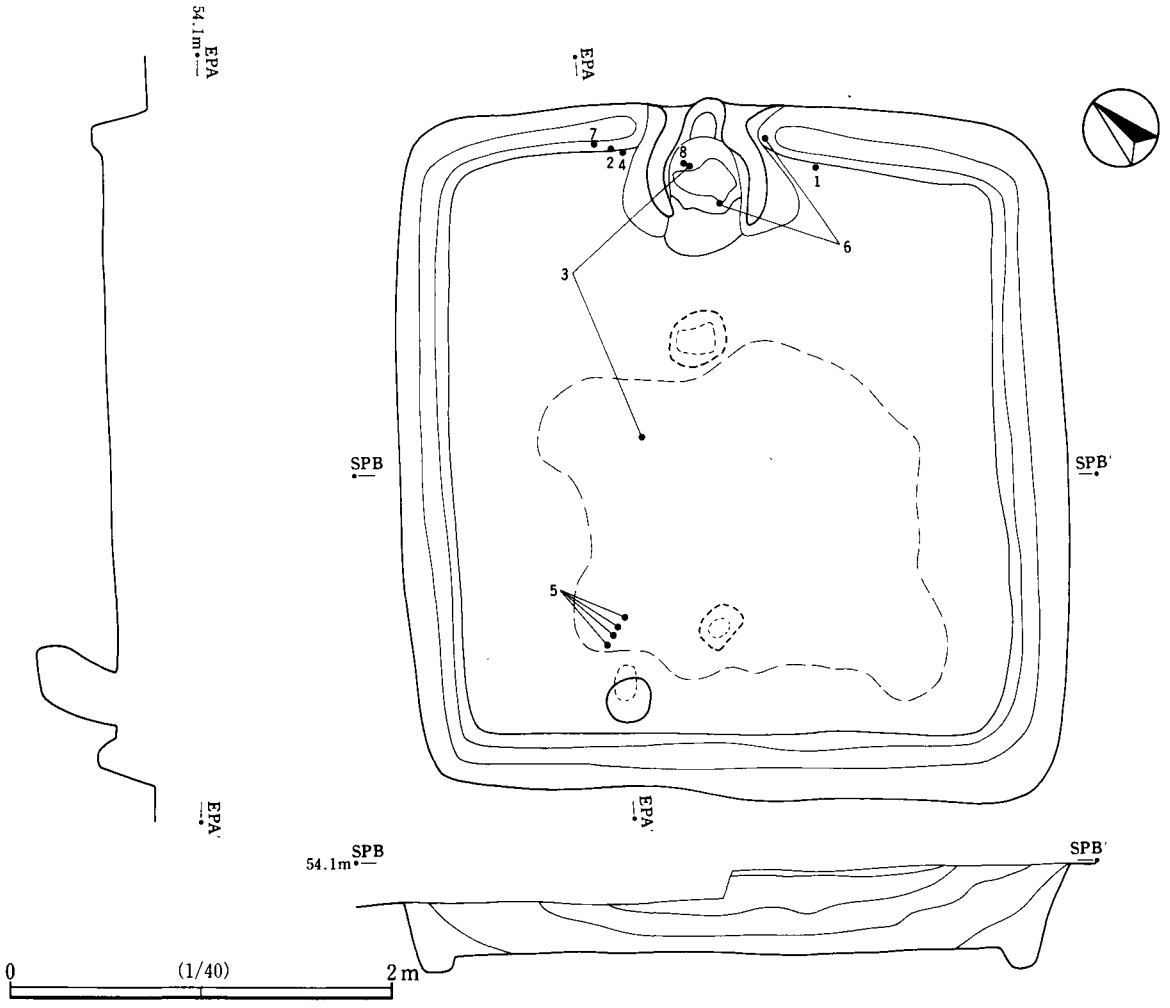
8.1cmを測る。底部はヘラケズリがなされ、体部外面はヘラケズリ後ナデ、口縁部は横ナデ、内面はヘラミガキが施されている。内外面共に油煙が付着し灯明皿として用いられていたことが窺われる。2は須恵器の杯で、口径11.8cm、底径7.1cm、器高3.7cmを測る。内面はナデ、外面は下部がヘラケズリ、上部はナデが施され、底部は回転切り離し後ヘラケズリされている。内外面に火ダスキが掛かっている。3・4は土師器の杯である。3は口径13.0cm、底径6.0cm、器高4.5cmを測り、底部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ、外面は口縁部がナデ、それ以下はヘラケズリが施されている。全体的に器表の磨耗が激しい。4は口径11.4cm、底径7.6cm、器高3.9cm～4.8cmを測る。器形のゆがみが大きく、底部はヘラケズリ、内面はナデ、外面はヘラケズリ、口縁部はナデが施されている。二次焼成の火熱を受け、器表が著しく磨耗している。5・6はカマドの袖内面の補強に使用した布目瓦の破片である。5は左袖に使用したもので、6は右袖に使用したものである。両者共にカマドでの使用のために火熱をうけている。両者共丸瓦で、半円状の形態で5は端部幅11.5cm、現存長29.0cm、6は端部幅11.0cm、現存長24.0cmを測る。

００３住居跡（第114・115図、図版24・66）

本遺構は１Ｃ－96グリッドに位置し、主軸を北東と００２住居跡とほぼ同じ方向に向けている。形態は隅丸方形で、一辺3.6mを測る。掘り込みはしっかりしており、壁の立ち上がりは垂直に近く深さ0.45mを測る。床面は平坦で、中央は踏み固めによって硬化し、壁際には深さ0.1mの壁溝が全周する。明瞭な柱穴



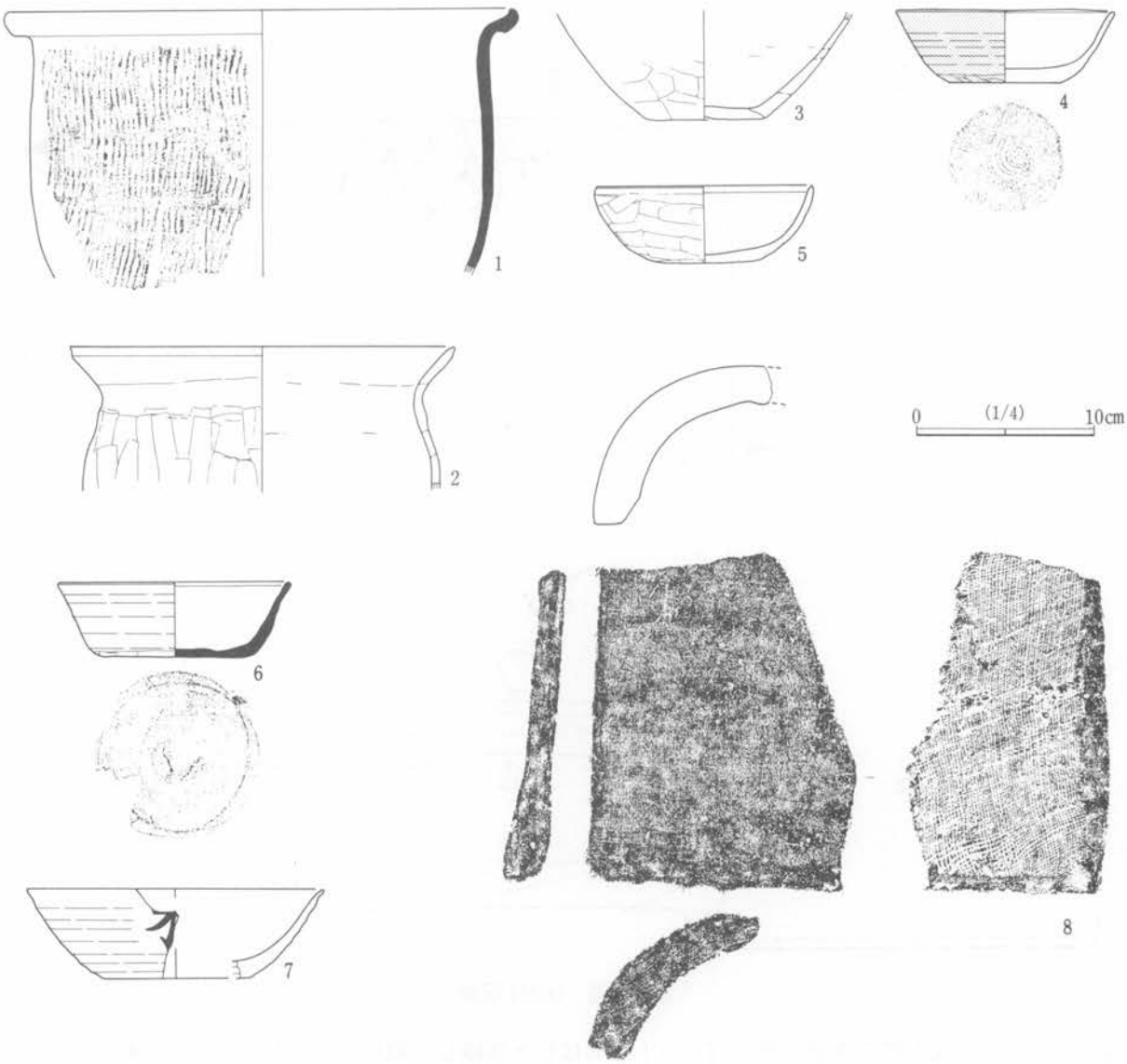
第113図　002住居跡出土遺物



第114図　003住居跡

はなく、カマドの反対側の壁際に梯子穴ピットとおぼしき外傾した掘り込みのピットが１基検出された。径0.2m、深さ0.4mを測る。貼り床を除去したところ、硬化面周辺からピットが２基検出され、各径0.4m、0.2mを測る。カマドは白色粘土系の袖が構築され、遺存の比較的よい状態で火床、煙道も確認できた。火床部では布目瓦が１点検出され、００２住居跡と同様にカマドの袖の補強に瓦を用いたものと見られる。

遺物はカマド周辺にやや多く検出され、１は須恵器の甕か甑の上半部である。口径28.4cmを測り、外面はタタキ目が全面にみられ、内面はナデが施されている。口唇部はナデがなされている。２は土師器の甕で、口径21.6cmを測り、外面の口縁部はナデ、体部はヘラケズリ、内面はナデが施される。３は土師器の甕の底部である。底径6.6cmで、底部はヘラケズリ、外面はヘラケズリが施される。４・５・７は土師器の杯で、４は口径12.2cm、底径6.2cm、器高4.2cmを測る。ロクロ成形で内面はナデ、外面は下部がヘラケズリがなされる。底部は回転糸切りの後周辺部のみヘラケズリが施される。外面全面は赤色塗彩が行われている。５は底部と体部の稜が不明瞭な形態で、口径12.2cm、底径6.4cm、器高4.4cmを測る。底部はヘラケズリ、内面はナデ、外面はヘラケズリ後ナデが施され、口縁部はナデが行われている。６は須恵器の杯で、口径13.0cm、底径8.8cm、器高4.2を測る。ロクロ成形で、底部はヘラ切り離し後ヘラケズリが、体下部はヘラケズリが施されている。内外面共に黒色処理が施されている。７は墨書のある土師器の杯で、口径16.2cm、底径8.2cm、器高4.9cmを測る。ロクロ成形で内面は黒色磨研処理がなされている。体部外面には墨書



第115図　003住居跡出土遺物

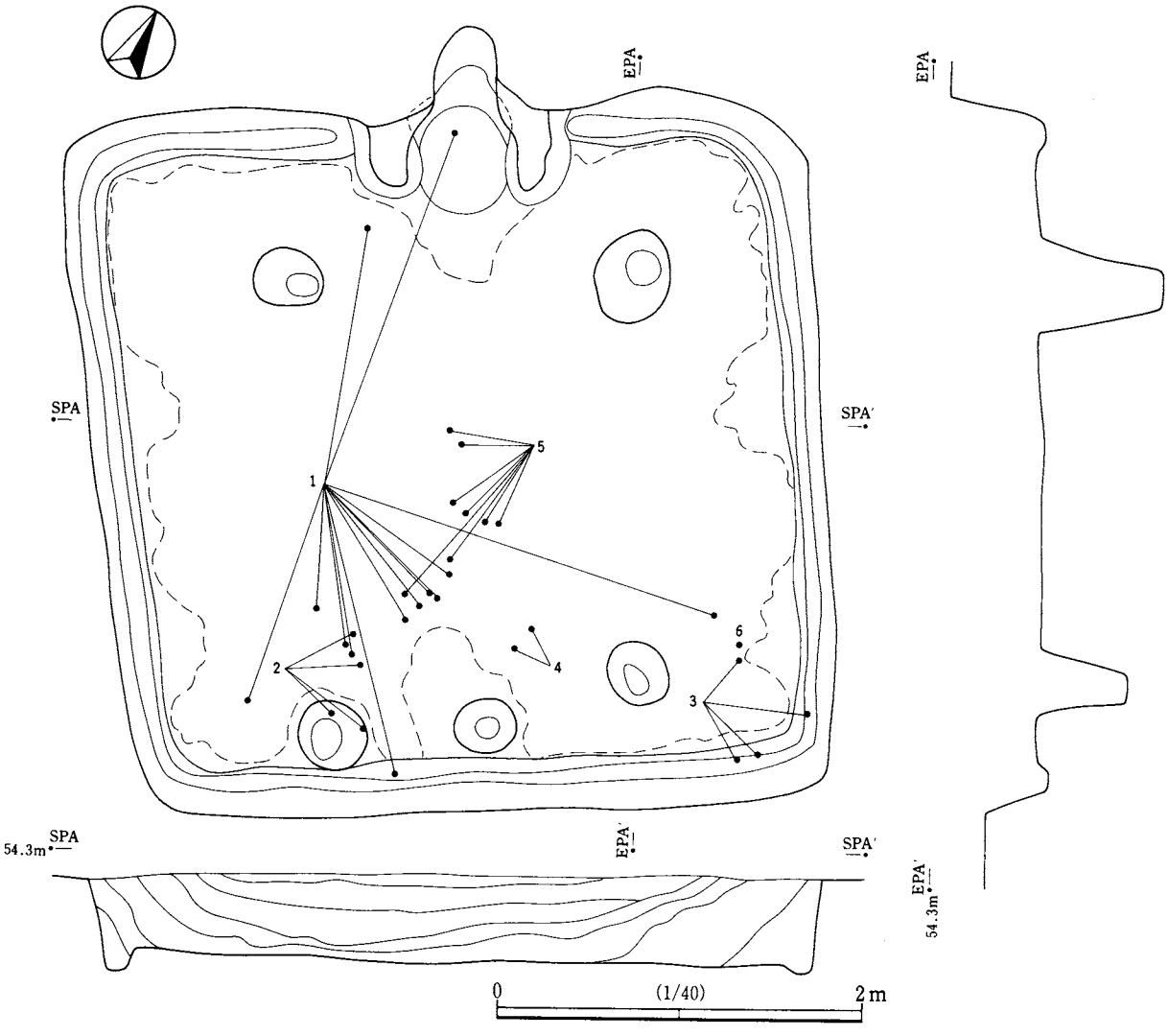
が認められ、破損によって文字の全画は欠けてしまって窺えないが、「万」の左下側の一部のように看て取れる。8はカマドの補強に使われたとみられる丸瓦の破片である。現存で幅9.3cm、長さ18.5cmを測る。

００５住居跡（第116・117図、図版25・66）

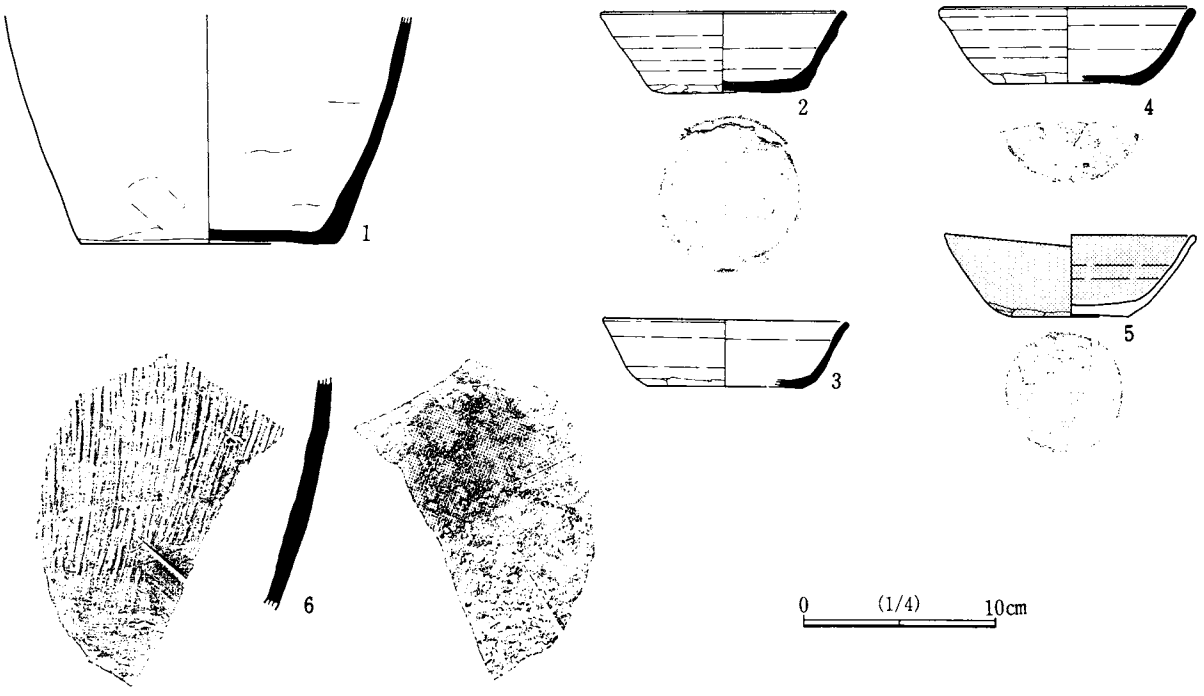
本遺構は、２Ｃ－00グリッド周辺に位置し、調査区内の住居群ではほぼ中心に位置する。形態はほぼ隅丸方形で、規模は4.0m×3.8mを測る。主軸を北西に向け、掘り込みはしっかりしており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みの深さは、0.3m～0.45mを測る。床面は堅緻に踏み固められ、ほぼ全面が硬化している。壁際には深さ0.05m～0.1mの壁溝が全周に巡り、カマド反対側の壁際中心には、梯子穴ピットが１基検出され、径0.3m、深さ0.3mを測る。柱穴は、カマド側はほぼ対角線上に２基、反対側は対角線よりはずれて壁際にかなり寄って２基の計４基が検出され、径0.3m～0.5m、深さはカマド側２基は0.6m～0.7mとやや深めで、反対側は0.5mとそれよりはやや浅めである。

カマドは、北西側の壁の中央に位置し、白色粘土質のしっかりした袖が検出された。火床は火熱によってよく焼けており、煙道の壁外への掘り込みも深く大きかった。

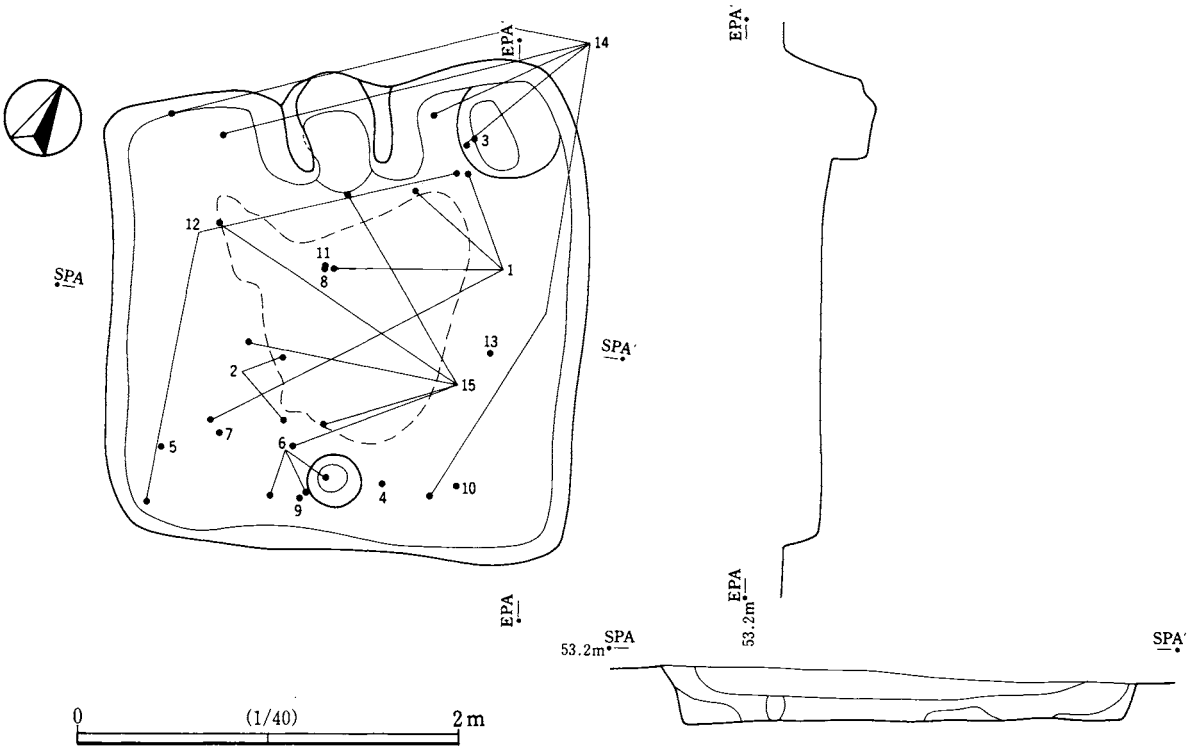
遺物は、焼成の不良な須恵器の出土が目立った。１は焼成の不良な土師質に近い須恵器の甕の底部であ



第116図　005住居跡



第117図　005住居跡出土遺物



第118図　006住居跡

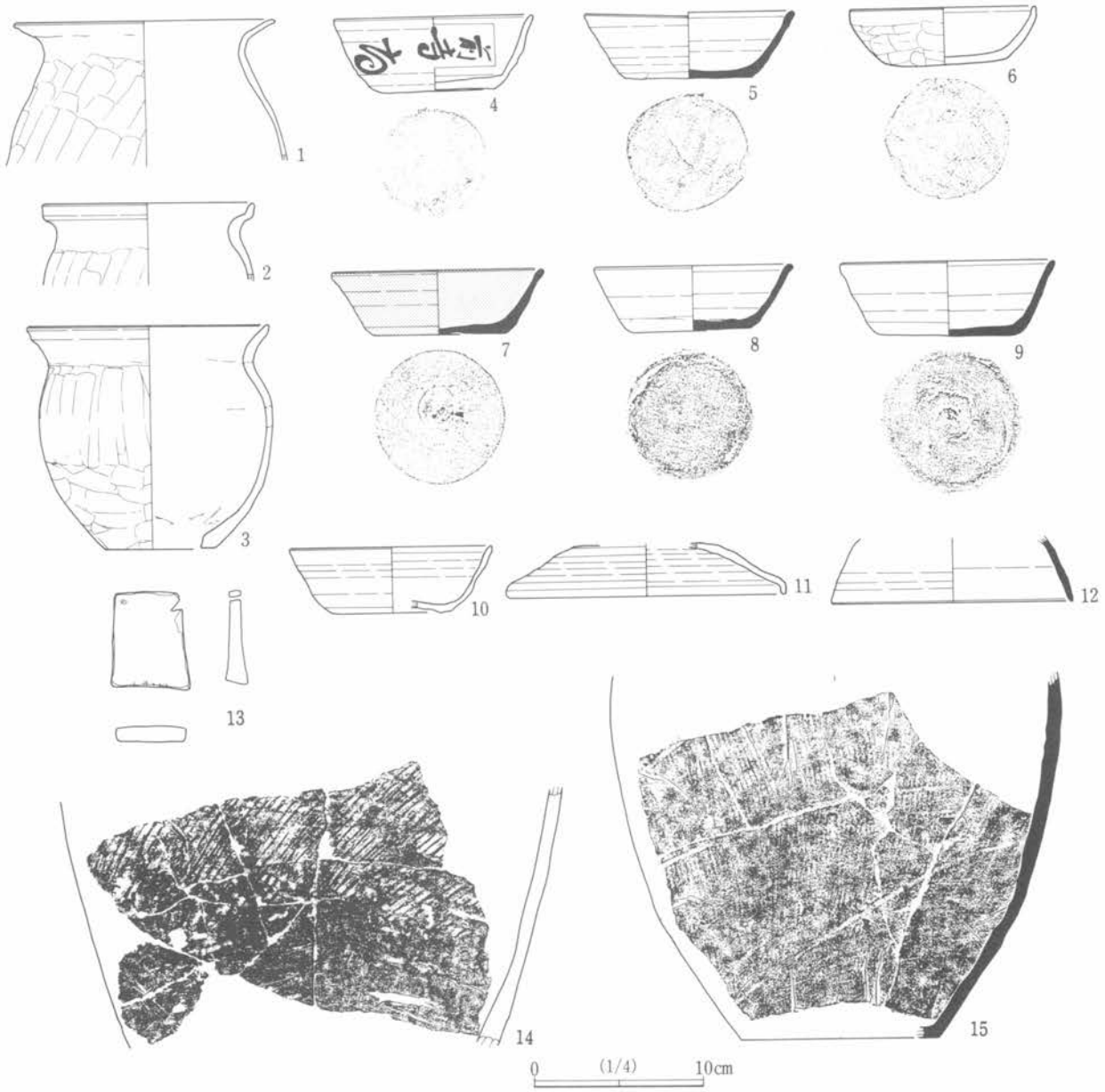
る。底径13.2cmを測り、底部はナデ、内面はナデ、外面は上部はタタキ目底部付近はヘラケズリが施される。一部にススが付着している。2・3・4は、須恵器の杯であるが、2・4は焼成が悪く土師質に近い黒色のものである。2は口径12.6cm、底径7.4cm、器高4.2cmを測り、ロクロ成形で底部はヘラケズリ、内面は黒色処理が施されている。3は口径12.8cm、底径8.2cm、器高3.6cmを測り、ロクロ成形で底部はヘラケズリが施されている。これはやや焼成がよく暗灰色である。4は口径12.8cm、底径7.6cm、器高4.0cmを測る。焼成が悪く色調は黒色系である。底部はヘラケズリがなされている。外部に一部ススの付着がみられる。5は土師器の杯で、形状がいびつである。口径は12.9cm～13.4cmで、底径は6.2cm、器高は3.7cm～4.2cmを測る。内外面に赤色塗彩がされ、底部はヘラケズリ、内面はナデ、外面上部はナデ、底部近くはヘラケズリがなされている。6は須恵器の破片で、転用硯として用いられたものでる。外面はタタキ目、内面の一部に円形に磨耗による平滑面が認められる。

００６住居跡（第118・119図、図版25・26・66）

本遺構は、１Ｃ－81グリッドに位置し、調査区の北側に近い。やや小振りな住居跡で形態は、ややいびつな隅丸方形を示す。主軸を北北西に向け、規模は2.2m～2.5m×2.5mを測り、西側辺がややすぼまるように細くなっている。掘り込み深さは、0.2m～0.3mと浅めであるが、壁の立ち上がりは比較的垂直に近い。床面は平坦でほぼ中央の狭い部分のみ踏み固めによって硬化していた。壁溝はなく、柱穴に相当するピットもなく、カマド反対側の辺中央付近に梯子穴ピットが１基、カマド東脇に貯蔵穴とみられるピットが１基検出された。梯子穴ピットは径0.3m、深さ0.1m、貯蔵穴は径0.6m、深さ0.2mを測る。

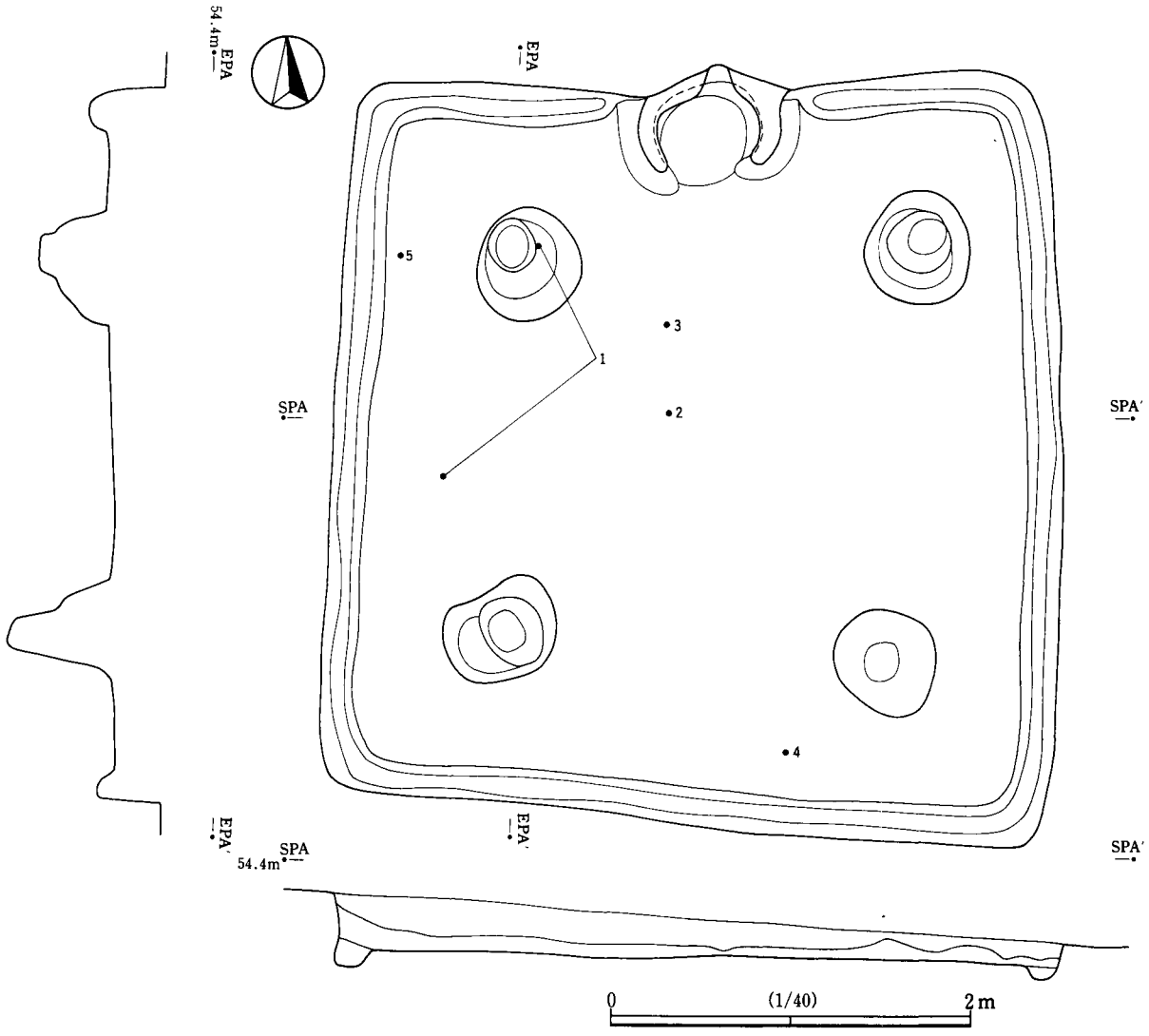
カマドは、北辺の中央に白色粘質土を用いて構築され、比較的遺存がよかった。火床はあまり焼けておらず焼土も少なかった。

遺物は遺跡の中では、比較的多めであった。１・２・３は土師器の甕である。１は口径15.2cm、口縁部はナデ、体部はヘラケズリが施される。２は口径6.2cm、器表の剝落が著しいが、口縁部はナデ、体部はヘ



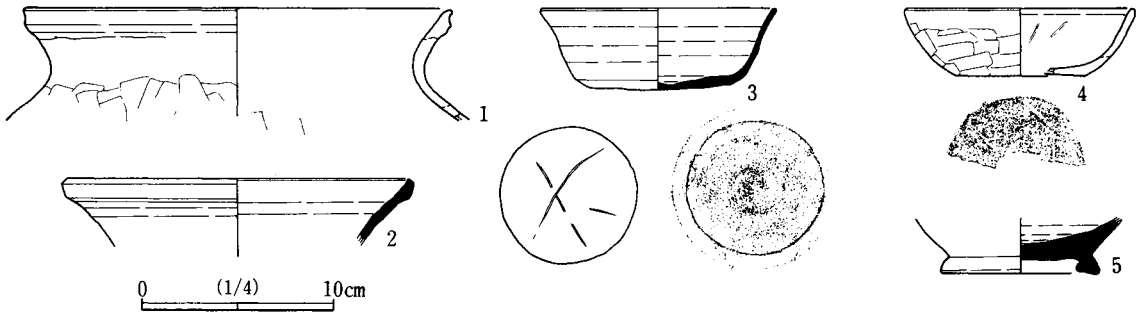
第119図　006住居跡出土遺物

ラケズリが施される。3は完形に近く口径13.9cm、底径6.4cm、器高13.0cmを測る。底部には10.8cmほどの大きな穿孔がなされ、甕を甑に転用したものとみられる。口縁部はナデ、体上部は縦ヘラケズリ、体下部は横ヘラケズリがなされる。内面はナデが全面に認められる。最大径となる体部中央付近は磨耗が激しく、甕の上に架設して甑として用いたとみるのが妥当なようである。4～10は杯である。4は土師器の杯で、体部外面には墨書で文字が描かれている。口径11.6cm、底径6.6cm、器高4.4cmを測り、内面はナデ、外面は底部はヘラケズリ後ナデ、体部はナデ、底部近くはヘラケズリが施される。体部外面の墨書は横方向に縦書きで描かれ、右から左へ「前寺□」の3文字が描かれているが、3文字目は「前寺」の2文字の草書体と比べ急に書体が異なり、やや文字間も広く行書体風に更に崩れ記号化されたような印象を受ける。つまり「前寺」の後に少し空間が空き何らかの文字風の記号が描かれるという描き方である。5はいびつな須恵器の杯で、口径12.2cm、底径7.3cm、器高3.7cm～3.9cmを測る。焼成が悪く色調は黒色系で、ロクロ成形で、外面は底部近くがヘラケズリ、底部は回転ヘラ切り後ヘラケズリが施される。6は土師器の杯で、



第120図　009住居跡

口径10.9cm、底径7.2cm、器高3.4cmを測る。底部はヘラケズリ、外面体部はヘラケズリ後ナデ、稜で区切られる口縁部は横ナデが施される。内面はナデの後ミガキが施されている。口唇部には油煙が付着し、灯明皿としての使用が窺われる。7・8・9は須恵器の杯である。7は口径12.3cm、底径7.9cm、器高3.7cmを測り、ロクロ成形の底部は、回転ヘラ切り離し後周縁をヘラケズリ、体下部はヘラケズリが施される。内外面共に赤色塗彩が施されている。8は口径11.4cm、底径6.9cm、器高3.8cmを測り、底部は回転ヘラ切り離し後ヘラケズリ、体下部はヘラケズリ、上部はナデが施される。9は口径12.4cm、底径7.8cm、器高4.3cmを測る。ロクロ成形で、底部は回転ヘラ切り離し後ナデ、体下部はヘラケズリ、上部はナデが施されている。10は土師器の杯で、口径11.8cm、底径7.0cm、器高3.8cmを測る。ロクロ成形で、底部は回転糸切り離し後周縁をヘラケズリ、体下部をヘラケズリが施され、底部は上に反り返る。11は土師器の蓋で、口径16.4cmを測る。ロクロ成形で、頂部のつまみは欠損している。ヘラケズリがなされる。内外面共に黒色処理がなされている。香炉の蓋かもしれない。12は須恵器の蓋で、口径14.0cmを測り、外面には火ダスキ痕が認められる。13は砥石で、現存長5.7cm、幅4.6cmを測り、凝灰岩製で、研ぎ減りした角に穿孔が1か所認められ、紐を通して垂下したものであろう。14は土師器の大形の甕で胴下部のみである。外面はタタキ目が上方に、下方はヘラケズリが施される。15は須恵器の甕の胴下部である。底径11.6cmを測り、胴部は



第121図　009住居跡出土遺物

タタキ目、下部から底部はヘラケズリが施される。

００９住居跡（第120・121図、図版26・66）

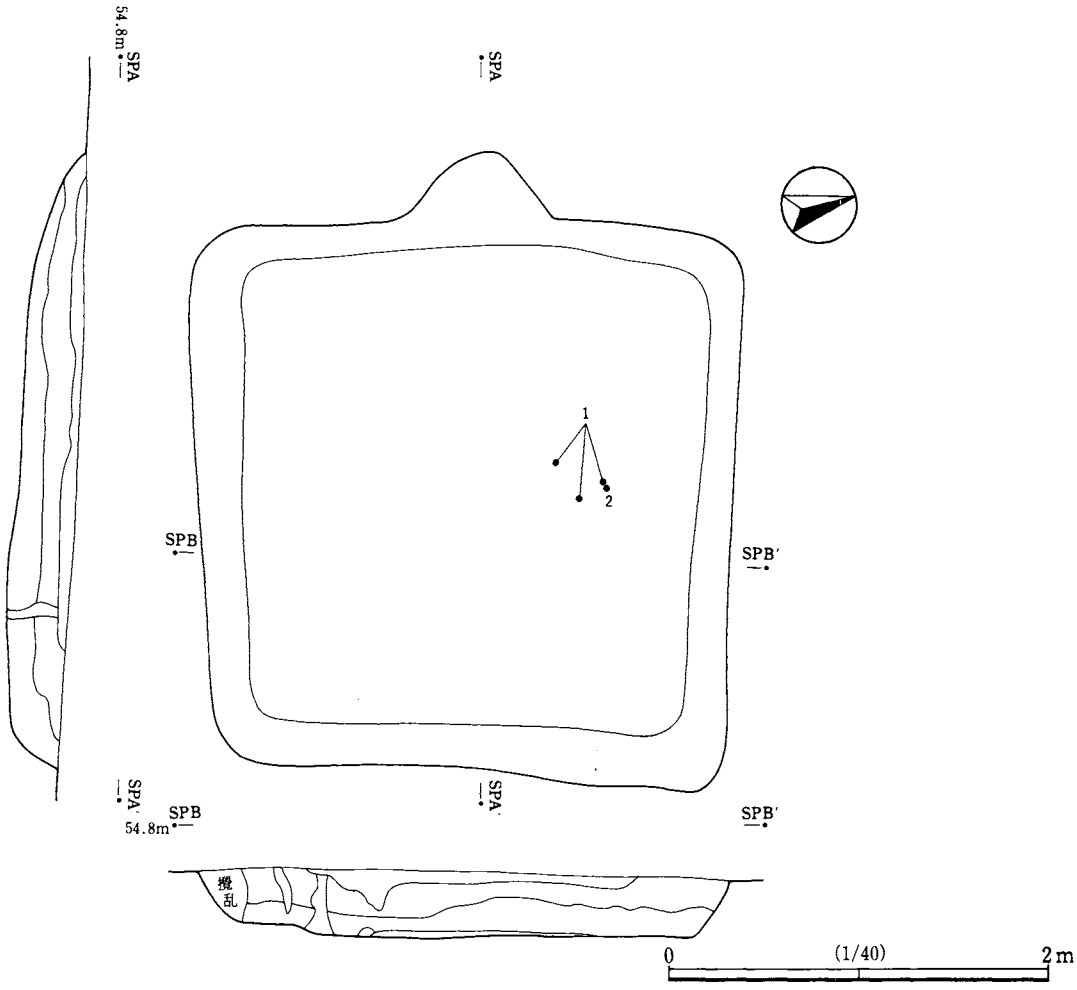
本遺構は２Ｂ－75グリッドに位置し、西側約５ｍに０１１住居跡が所在する。主軸はほぼ北を向き、形態は形の整った隅丸方形を示す。規模は3.9m×4.0mを測り、北辺の中央にカマドが所在する。床面は平坦で、全面にわたり硬化し、よく踏み固められている。壁際には壁溝が全周し、壁溝は幅0.2m、深さ0.1mの浅いものである。柱穴は対角線上に規則正しく４本所在し、径約0.6m、深さ0.35m～0.6mを測る。１基を除いて２段に掘り込まれ、底面は柱痕による硬化部分が認められた。貯蔵穴、梯子穴は検出されなかった。カマドは北辺の中央に所在し、山砂系の粘土で構築したしっかりした作りのものであった。火床はよく焼けており、煙道へ至る部分もよく確認できた。

遺物は少なく、１は土師器の甕の口縁部片である。口径22.2cmを測り、口縁部はナデ、体部外面はヘラケズリが施される。２は須恵器の甕の破片で、口径17.8cmを測る。３は須恵器、４は土師器の杯で、３は口径12.2cm、底径7.3cm、器高4.3cmを測り、焼成の不良な黒色の須恵器である。ロクロ成形で、内面はナデ、外面は底部は切り離し後ヘラケズリ、底部近くはヘラケズリを施している。底面は平坦ではなくやや起伏があり安定しない。底部にヘラによる３本の細い線刻があるが、文字ではなく何らかの記号であろう。４は土師器の杯で、口径11.9cm、底径6.7cm、器高3.5cmを測る。内面はナデ、外面は口唇部はナデ、体部はヘラケズリ後ナデ、底部はヘラケズリが施される。一部火熱を受けている。５は須恵器の壺もしくは瓶の底部である。暗灰色の胎土で、内面底部に焼成時に降下した自然釉が付着している。底径8.1cmを測る。

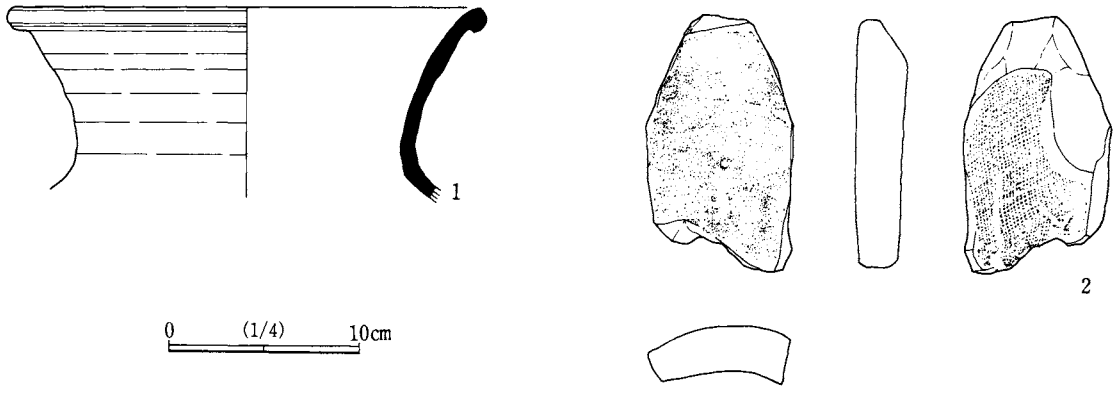
０１１住居跡（第122・123図、図版26・67）

本遺構は２Ｂ－63グリッドに位置し、東約５ｍに００９住居跡が存在する。主軸は西北西を向きかなり西へ傾いたという感がする住居跡である。形態は隅丸方形で、一辺2.8mほどである。掘り方は緩やかで、深さは0.3mを測る。床面は平坦ではなくやや擂鉢状に中央が窪み、壁溝、柱穴、梯子穴、貯蔵穴等は検出できなかった。カマドは明瞭なものはなく、北西辺の中央が三角形に掘り込まれ、カマドの煙道の掘り込み状に観察されたが、袖、火床、煙道等は確認できなかった。覆土は緩やかにレンズ状に堆積し、自然堆積の状態を示すとみられる。カマドに相当する部分を、カマドの痕跡とみれば、破壊してそのまま放置した住居跡とみることができよう。

遺物は少なく、１は須恵器の大形の甕の口縁部である。口径24.6cmを測り、ナデが施される。焼成はやや不良で器表の剝離部分が認められる。２は瓦片である。丸瓦の破片で、一部に布目が認められ、現存長13.1cmを測る。火熱を受けているが、カマド内から出土しているのではなく、１と近接して出土している。１と同時に廃棄されたものであろう。



第122図　011住居跡



第123図　011住居跡出土遺物

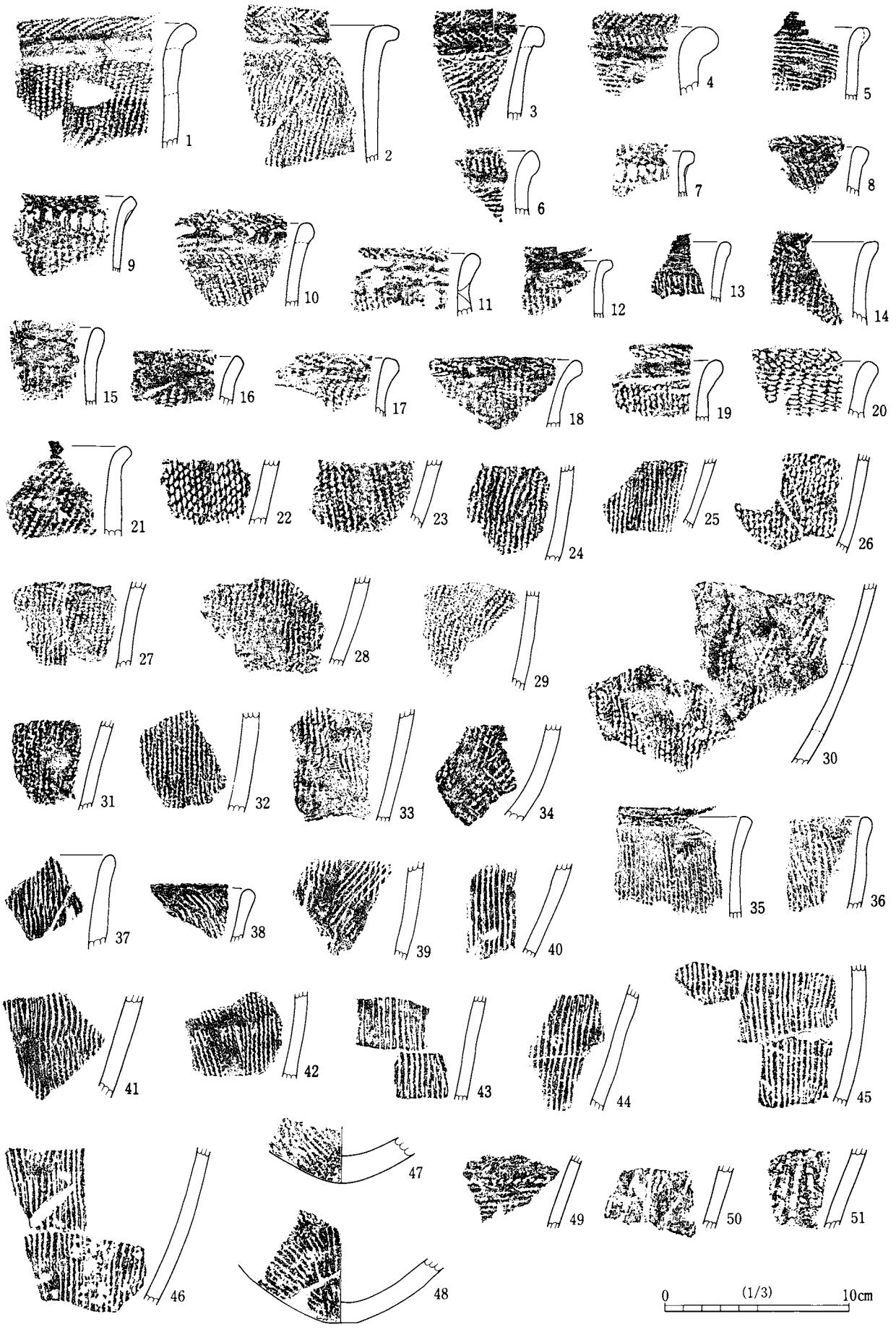
遺物

縄文土器（第124図、図版56）

全部で130点余りの土器が出土しているが、すべて包含層出土である。ほとんどの遺物が早期撚糸文土器である。

第Ⅰ群（1～49）

早期撚糸文土器である。時期によって類別した。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
0
(1/3)
10cm

第124図　縄文土器

第1類（1～34）

井草式に属するものを一括した。全部で80点余り出土しており、本遺跡で最大多数を占める。口唇部形態など様々で判断に迷うものもあったが、口唇部に縄文施文が見られるもの、口唇直下に文様帯が意識されるもの（無文帯も含む）といった点に留意して選別した。胴部破片については判別が難しいものが多いため、確実に第2類（夏島式）に属するものを除いては、すべてここに含めた。以下、口縁部の形態と文様をもとに、いくつかに分類しながら説明する。

A種（2～9）　口唇部に縄文が施文され、口唇直下に文様帯が形成されるもの。2、3は口唇直下と胴部にそれぞれ撚りが反対の縄文が施されるものである。口唇部上面は同じく撚りが反対の原体を使用して内寄りと外寄りもしくは外面に帯状の縄文を施す。4～6は口唇直下に横方向の縄文が施文されるものである。4は胎土に石英や長石粒を多量に含む。7～9は口唇部の肥厚がやや弱くなり、口唇直下にヘラ状の工具による刺突が観察される。7、9は同一個体と考えられる。

B種（1、10～16）　口唇直下が無文帯となるもの。ある程度文様帯が意識されたものと考えられるため、Ⅰ群に含めた。1、11～16は胴部施文後に口唇直下に横ナデ調整が施されて無文化されるものである。10は逆に口唇直下に空白をあけて、胴部に縄文を施している。12、13、15は口唇部に文様が施されない。

C種（17～21）　口唇直下からすぐに縦方向の縄文が施されるもの。17、18は口唇部外面に、19は上面に縄文が施される。20は極めて太い撚り紐を用いて原体を作成しているもので、特に胴部及び口唇部内寄りに施文しているＬＲ原体は太い。

D種（22～34）　胴部破片を一括した。胎土に砂粒を多く含み、内面は縦方向のヘラケズリが顕著である。文様はほぼ器面全体に密に施されるが、30、33などは一部ナデ消されている。27は2と同一個体である。

第2類（35～48）

夏島式に属するものを一括した。全部で30点強出土している。同一個体がかなり多いと考えられるが、あまり接合しなかった。胎土はⅠ群よりかなり細かくなる。35～38は口縁部資料である。若干外反するような形状を呈し、口唇上は丸く成形される。35は口唇部上面に撚糸文が施される。39～46は胴部破片である。39は縦方向だけでなく斜めにも撚糸文が施され、斜格子状の文様を呈する。41は37と同一個体で、複数回にわたって施文される。47、48は底部である。いずれも熱によるとみられる剝落が著しい。

第3類（49）

夏島式より後の撚糸文土器を一括する。数は極めて少なく図示したものがすべてである。49は摩耗が著しいが、横あるいは斜め方向の縄文が観察されるもので、花輪台式に属する可能性がある。

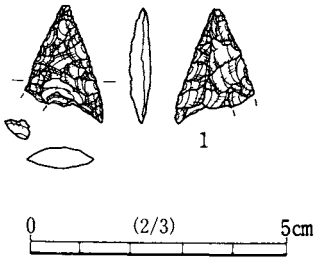
第Ⅱ群（50、51）

沈線文土器である。数は極めて少なく3点のみであった。50、51はいずれも胎土に石英粒や長石粒を多量に含むもので、焼成は良好である。棒状工具による沈線が施されるほか、ヘラ状工具による調整が顕著である。田戸下層式に属するものである。

縄文時代以降石器（第125図、第15集、図版64）

本遺跡より出土した石器は石鏃が1点のみである。

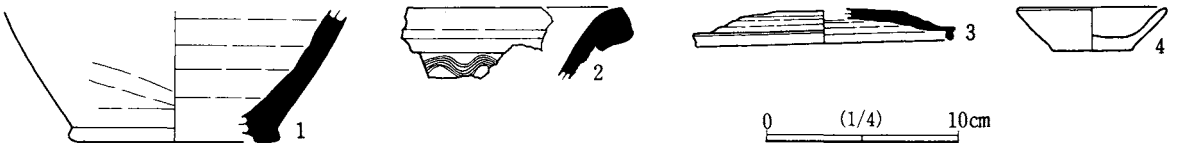
1は石鏃である。器体は片脚を欠損する。両側縁が直線的であり、基部は弧を描いて括れ、脚部が尖る形状を呈している。



第125図　縄文時代石器

第15表　縄文時代石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号
1	石鏃	黒曜石	23.0	15.5	4.1	1.0	004-4



第126図　グリッド出土遺物

グリッド出土遺物（第126図）

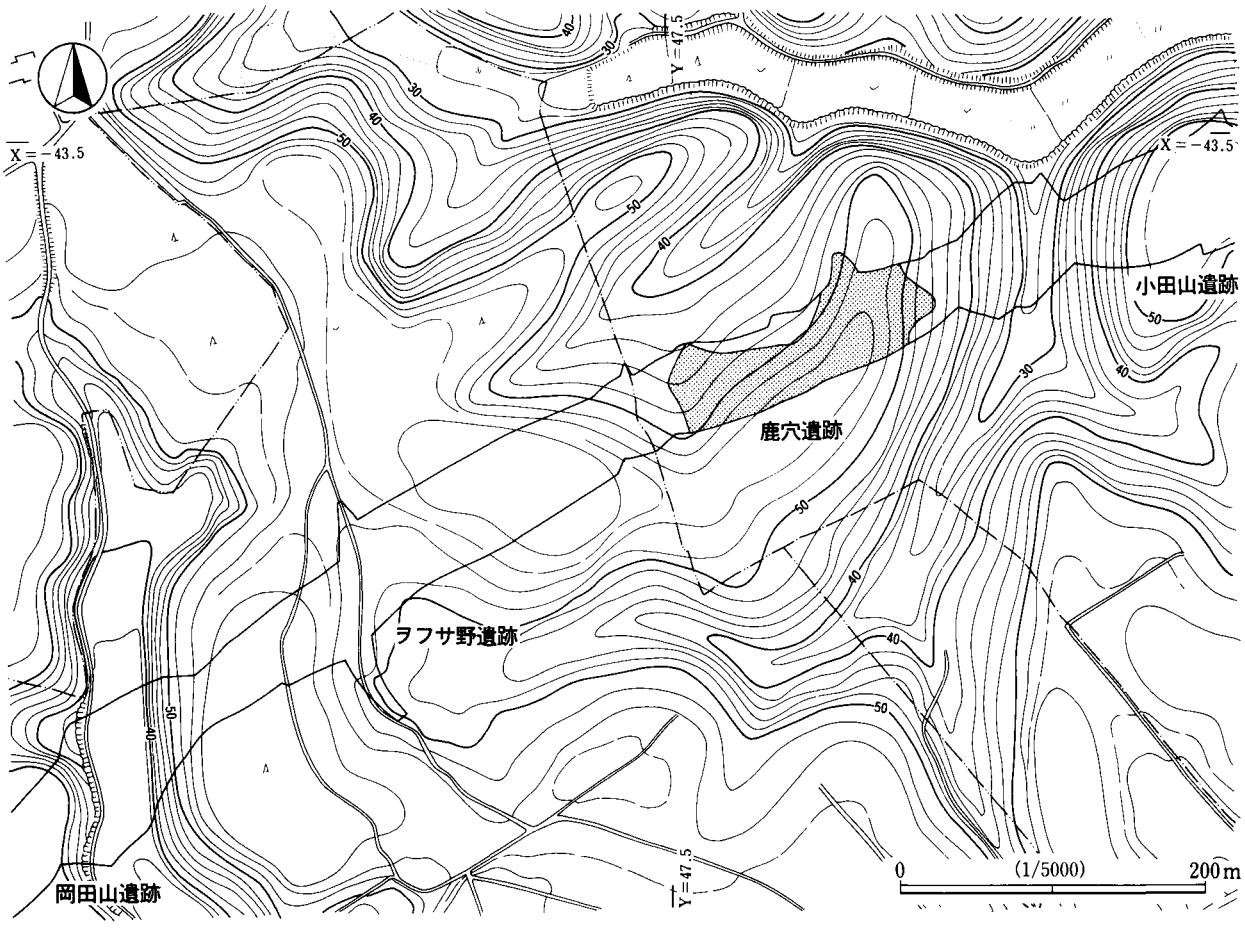
その他の遺構に属さない遺物をここにあげる。1は須恵器の壺の底部で遺存は悪い。2は須恵器の甕の口縁部の破片である。波状の櫛描き文がみられる。3は須恵器の蓋で、口径13.2cmを測る。００９住居跡・０１１住居跡に近い２Ｂ－64グリッドからの出土である。4は土師質の土器の皿である。口径7.6cm、底径4.1cm、器高2.2cmを測り、底部は回転糸切りのままで無調整である。

ＸＩ　鹿穴遺跡

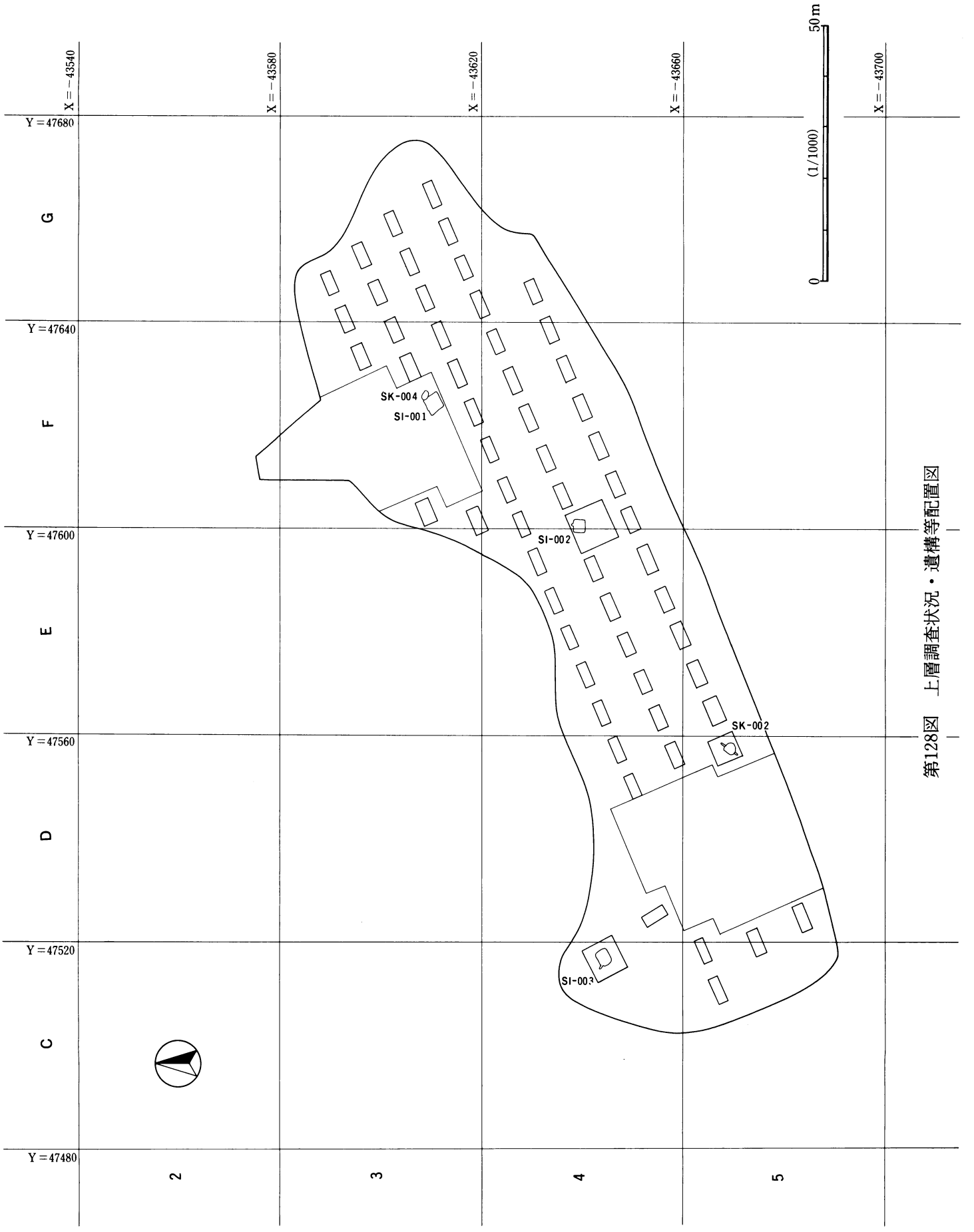
1　遺跡の概要（第127～129図）

本遺跡は、山武郡山武町森字鹿穴1,811他に位置する。調査対象面積は8,000㎡で、上層の確認調査を行ったところ、古墳時代の竪穴住居跡３軒と縄文時代早期遺物包含層２か所を検出した。竪穴住居跡は調査範囲内に点在しており、住居跡周辺以外では土師器・須恵器の出土をみなかったので遺構は希薄であると考えられた。また縄文時代中期の土器も遺跡全体に散布していたが、少量であり遺構も検出されなかった。そのため、竪穴住居跡３軒と縄文時代早期遺物包含層２か所を本調査した。本調査の結果、新たな遺構等は検出されなかったが、遺物包含層の調査においては土器の散布が調査範囲の北東部と西部に広がり、調査区域外にまで及ぶ、範囲の大きなものと判断されるに到った。下層の確認調査においては、旧石器類を検出することができなかったので、本調査は不要と判断された。調査期間は、平成６年７月13日から平成６年10月31日までであった。

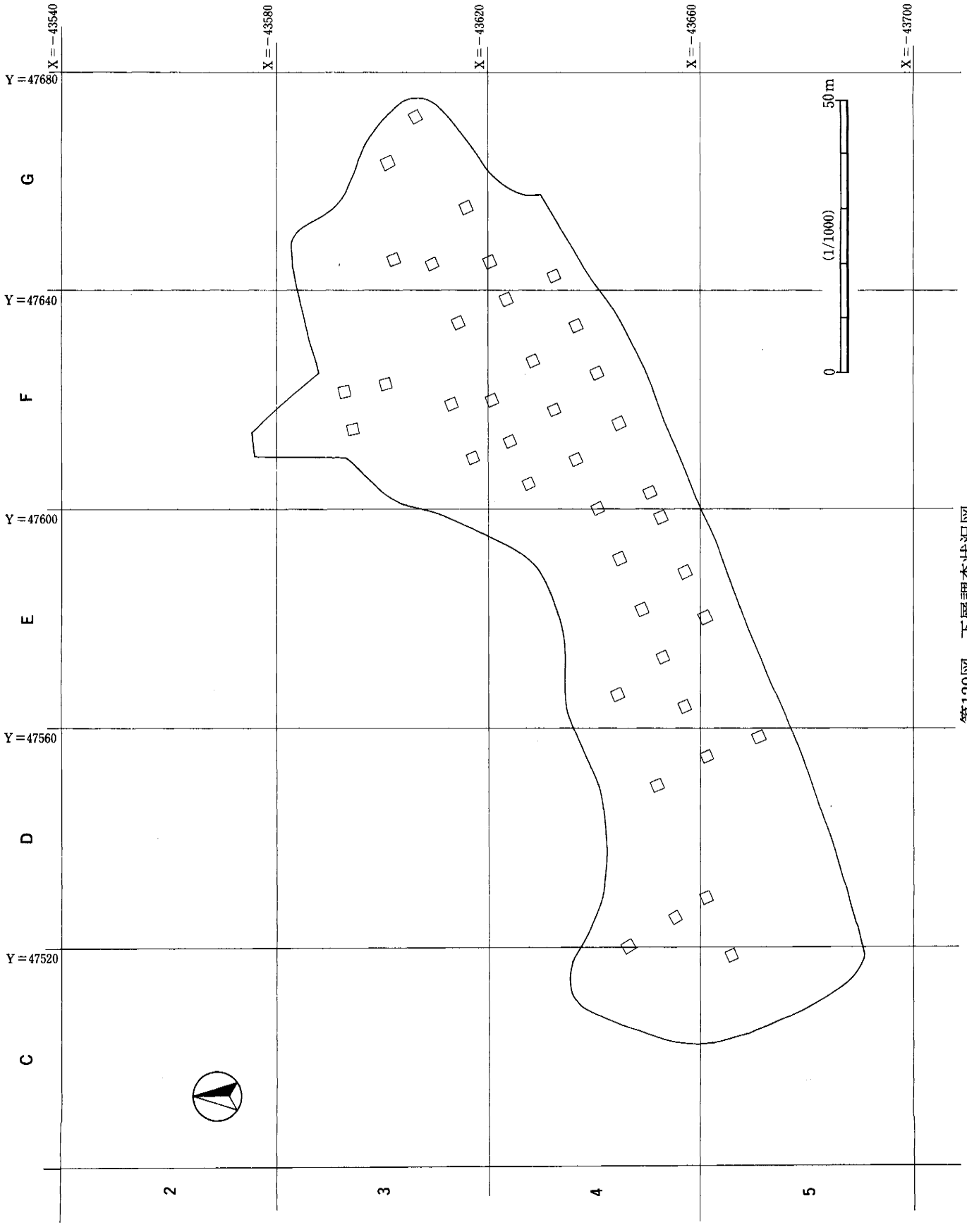
遺跡は、九十九里平野を経て、太平洋に流入する真亀川の上流部、十文字川によって開析された十文字谷の上流部に位置し、この十文字谷と作田川によって開析された作田川谷がはさむようにして作った極楽寺台の北西部に位置する。前述の岡田山遺跡から、北東約700ｍのところに位置している。調査範囲は遺跡



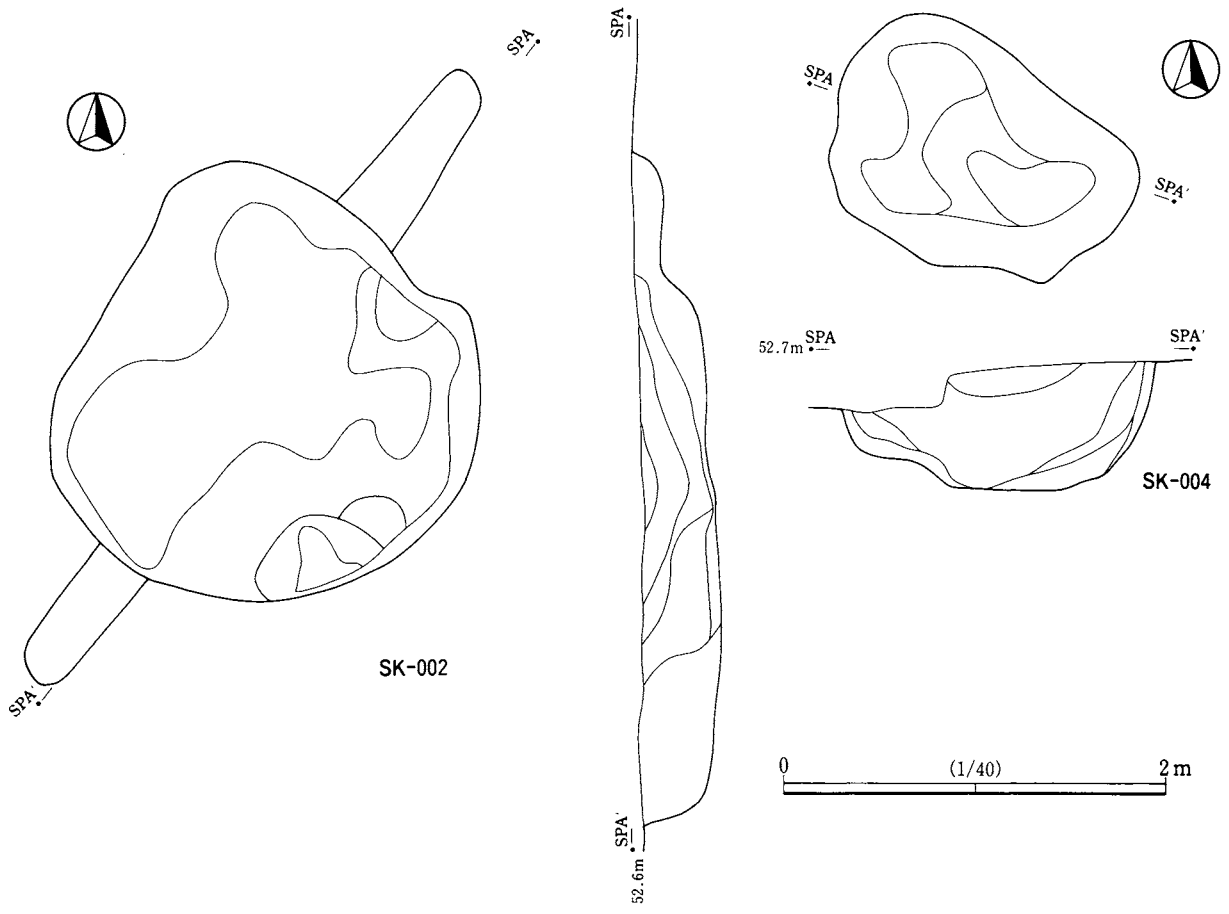
第127図　鹿穴遺跡周辺地形図



第128図　上層調査状況・遺構等配置図



第129図　下層調査状況図



第130図　土坑等

の北部であり、北向きに下がる斜面に接している。標高は53mで、荒蕪地となっている谷部との比高は20mを測る。

2　検出した遺構・遺物

遺構

ＳＫ－００２土坑（第130図、図版29）

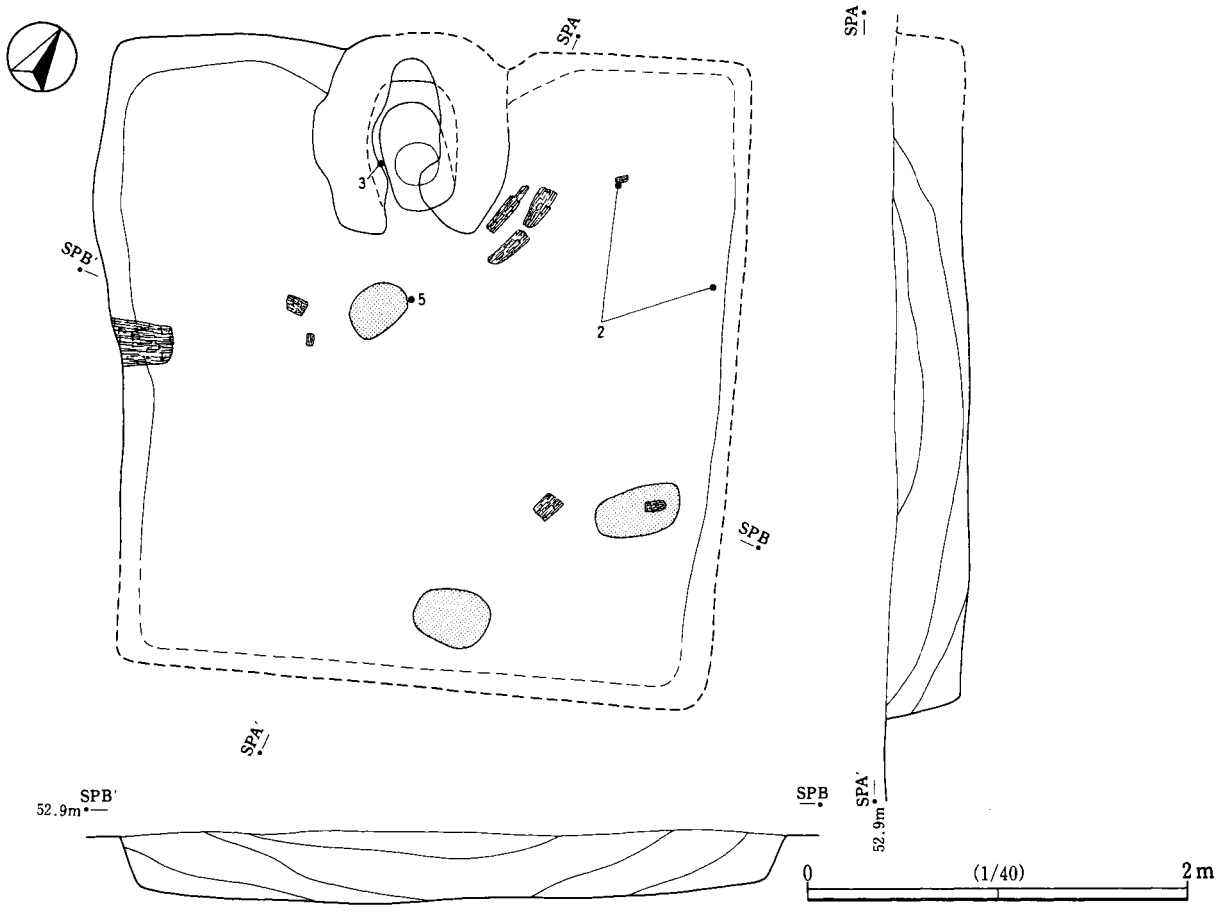
本遺構は、５Ｄ－29グリッドに位置する。本遺構は不整形であるが、2m四方の土坑の中央部に、南西から北東にはしる3.9m×0.4mの溝が重なったものということが言える。掘り込みの深さは約0.4mで、底面の南東側と北東側にそれぞれ一つ不整形なピットがあり深さは0.1m程度である。2m四方の形を呈する土坑からは、広く焼土と炭化物を検出したので、炭焼窯の可能性が考えられる。

ＳＫ－００４土坑（第130図、図版29）

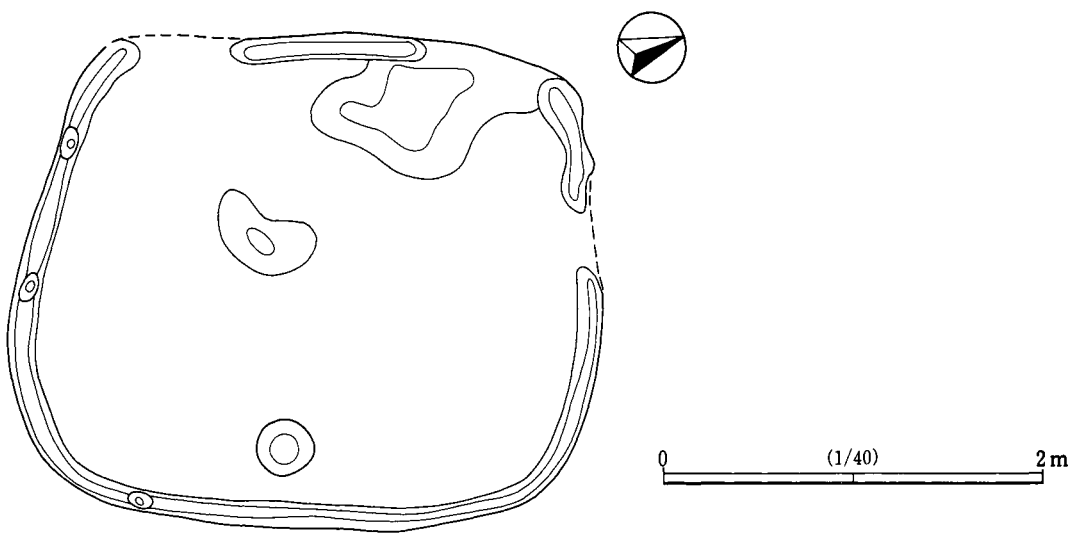
本遺構は、３Ｆ－76グリッドに位置する。規模は1.6m×1.1mで、不整形である。掘り込みの深さは最大で0.65mで、底面はほぼ丸く掘りくぼめられている。本遺構は、ＳＩ－００１住居の南東端に接しているので住居との関連が考えられる。

ＳＩ－００１住居跡（第131・133図、図版28・67）

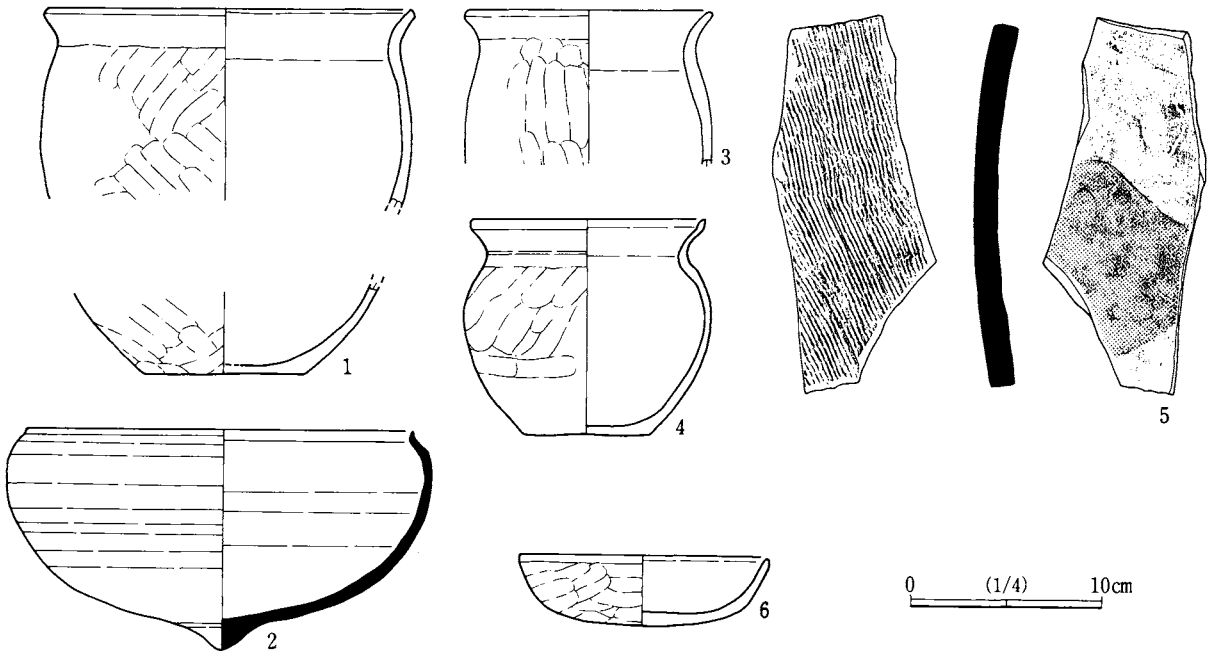
本遺構は３Ｆ－86グリッドに位置し、周辺に住居跡は存在せず孤立した立地の住居跡である。主軸は北北西を向き、一部遺存が悪く下層に古い住居跡が残りＳＩ-００１Ｂとした。形態は隅丸方形を呈し、一辺3.2mを測る。掘り込みはやや緩やかで、００１Ｂとの覆土の差がわからずに調査時に掘りすぎた部分もあ



第131図　ＳＩ－001住居跡



第132図　ＳＩ－001(Ｂ)住居跡



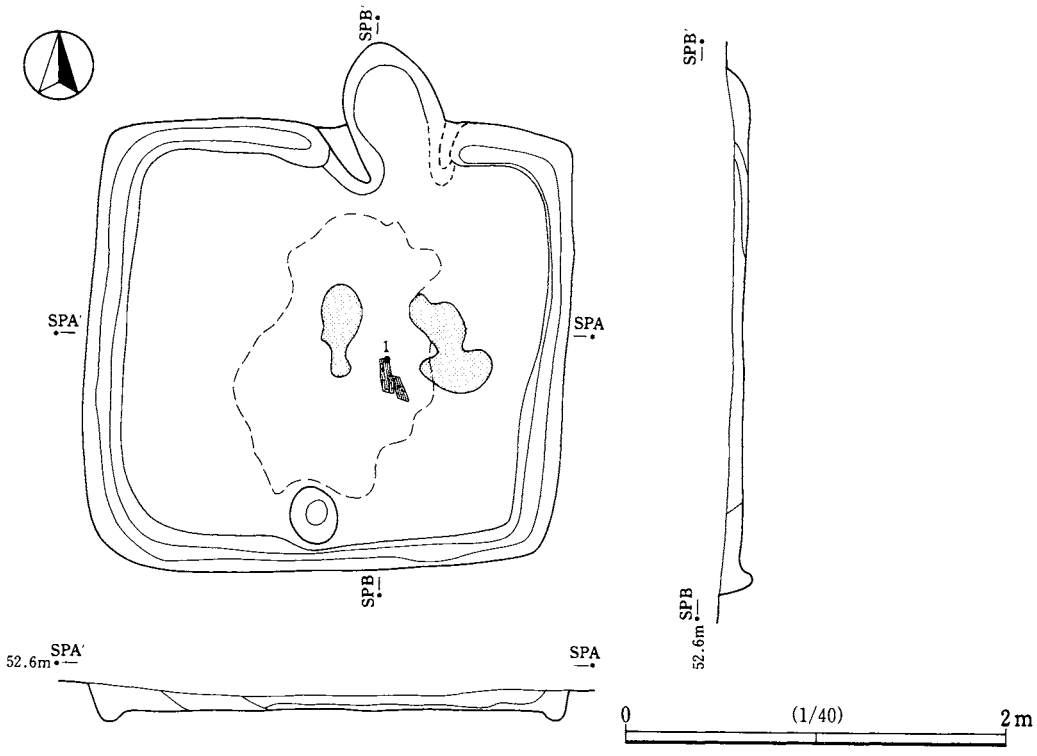
第133図　ＳＩ－001住居跡出土遺物

った。床面はやや軟弱で、柱穴、梯子穴、貯蔵穴等は確認できなかった。北辺中央にカマドが検出され、遺存がよく粘質土の袖が確認された。床面には焼土、炭化材が検出され、焼失住居跡であることがわかる。

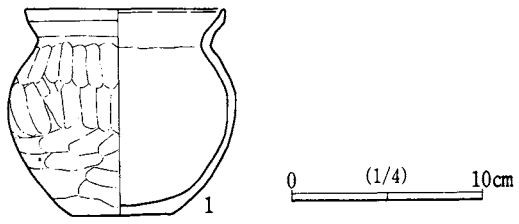
遺物はあまり多くない。１は土師器の甕である。口縁部を含む上半部と底部とが接合しないが同一個体とみられるのでここ取り上げる。口径は19.6cm、底径8.4cmで、口縁部はナデ、外面体部はヘラケズリ、底部はヘラケズリ、内面はナデが施される。火熱によって二次焼成を受け、一部で器表が剥落している。２は須恵器の鉄鉢形鉢である。口径は20.3cm、最大径22.3cm、器高は11.4cmを測る。口唇部は強く内側へ内湾しながら急に垂直に細く立ち上がっている。内面には強い稜がみられ、外面はくびれ状に傾斜を変換している。底部は単純な丸底ではなく、丸底の最下部中央、つまり中心にあたる部分が下側にこぶ状に径４cm、高さ約１cm突出している。底部のこぶのために器台なしでは自立せず、全く不安定な形態である。胎土は白色の長石を多く含み、色調は灰褐色である。内外面共に全体にナデが施される。主要な破片は住居跡出土であるが、一部の破片は周辺の包含層中からも出土し接合している。３は土師器の甕である。口縁を含む上半部で口径13.0cm、口縁部はナデ、体部はヘラケズリ、内面はナデが施される。４も土師器の甕である。口径12.5cm、底径6.6cm、器高11.0cmを測り、口縁部はナデ、体部はヘラケズリ、底部もヘラケズリが施される。５は須恵器の大形の甕の破片で、内面が転用硯として用いられている。外面は縦方向のタタキ目、内面は丁寧なオサエによる破片の内側を広く硯として二次利用したものである。使用の度合いによって平滑な部分と、非常に平滑な部分との２段階に大きく分けられる。６は土師器の杯である。口径は13.3cm、器高3.5cmを測り、体部と底部との稜のない形態である。体部はヘラケズリ、内面はナデが施される。内面口唇部には油煙が付着し灯明皿としての使用が窺われる。

ＳＩ－００１Ｂ住居跡（第132図）

本遺構はＳＩ－００１住居跡の下層に検出された住居跡である。形態は非常に丸い隅丸方形で、3.0m×2.6mを測る。床面は平坦で壁溝がほぼ全周し、ピットが３基検出されている。遺物は無く、カマド、炉等の施設も確認できなかった。



第134図　ＳＩ－002住居跡



第135図　ＳＩ－002住居跡出土遺物

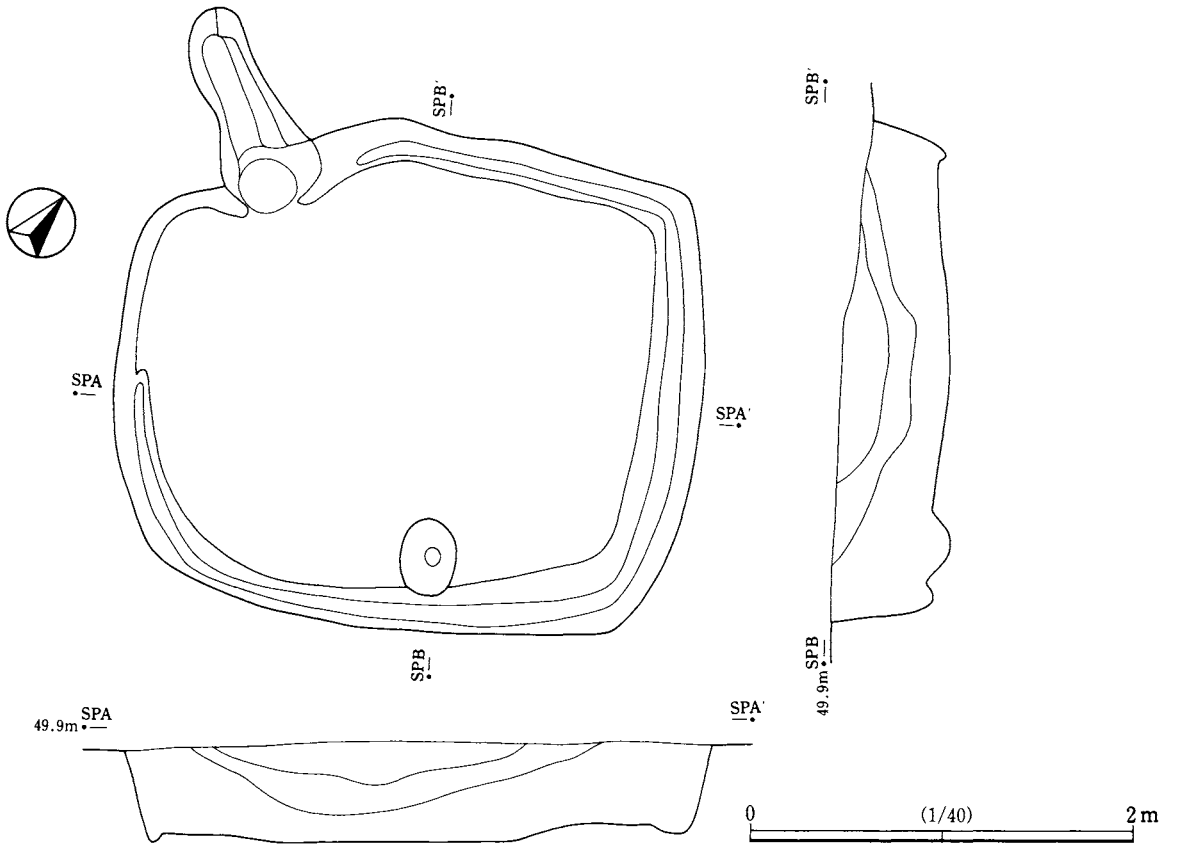
ＳＩ－００２住居跡（第134・135図、図版28・67）

本遺構は４Ｆ－50グリッド付近に位置し、孤立した存在である。主軸はほぼ真北に向き、形態は隅丸方形、規模は2.5m×2.4mで、掘り込みが浅く深さは約0.1mしかない。床面は中央部が堅く踏み固められて硬化している。カマドの反対側に梯子穴ピットが１基検出され、径0.3m、非常に浅く窪んでいる程度である。それ以外のピット、柱穴類は検出されなかった。床面には焼土と炭化材が検出され、焼失住居跡とみることができる。北辺中央にカマドが検出され、全体的に浅く遺存が悪いが、攪乱により更に遺存の悪い右袖とカマドの方向がやや西に傾くような左袖が検出されている。

遺物は遺構が浅く、遺存が悪いため非常に少ない。１は土師器の小型の甕である。口径10.3cm、底径5.3cm、器高10.5cmを測り、口縁部はナデ、体部はヘラケズリ、底部はヘラケズリが施される。

ＳＩ－００３住居跡（第136図、図版28）

本遺構は４Ｃ－69グリッド周辺に位置し、単独で存在している。形態はゆがんだ隅丸長方形で、3.1m×2.6mの規模である。カマドが北西の角に近く位置し、隅にカマドが位置する住居跡であるのでカマドは北西を向く。掘り込みはやや深めで深さ0.5mを測り、壁溝がカマド周辺を除いてほぼ全周する。カマドの反



第136図　ＳＩ－003住居跡

対側の長辺中央にピットが１基検出され、径0.3m×0.4m、深さ0.1mと浅いが、多分梯子穴ピットになるものであろう。床面は硬化しておらず、軟弱であった。柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは北西の角に近い部分に位置し、袖はほとんど遺存していなかった。火床はやや掘りくぼめられていたが、あまり焼けていなかった。煙道が外部へ長さ約１m、深さ0.2mにわたって長く掘り込まれており、煙道の長い形態のカマドであったとみられる。

遺物は図示できるようなものは出土しなかった。

遺物

縄文土器（第137～145図、図版57～62）

全部で700点余りの遺物が出土しているが、すべてグリッド出土で遺構出土のものはない。

第Ｉ群

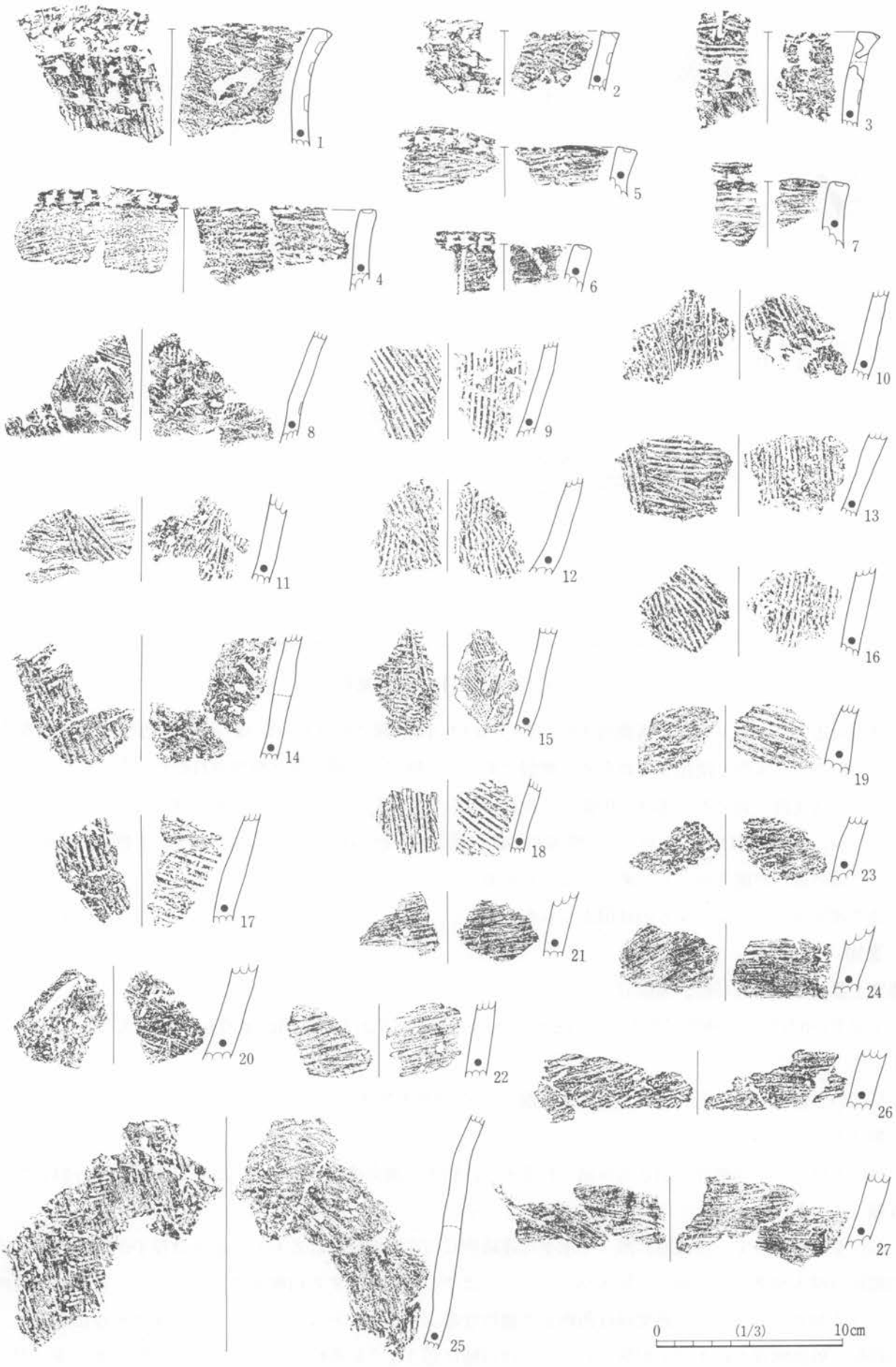
早期の土器を一括する。すべて条痕文土器で、100点余り出土している。

１類（１～８、25）

棒状工具による連続押し引き文が施されるもの。胎土と施文法の違いから、さらに２種類に分類した。

Ａ種（１～３、８、25）

条痕を地紋として、口縁部に添って水平に連続押し引き文が施されるもの。胎土は粒子が細かいが、植物繊維の混入が著しく、器面の剝落が目立つ。１はやや強く外反する口縁部に添うように、３条の連続押し引き文がめぐらされる。施文具は角棒か半截竹管のようなものと考えられる。口唇部は平らに削がれ、内縁側と外縁側双方にキザミが施される。３は口縁に添うように条痕が施され、その下側に連続押し引き


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
(1/3)
10cm

第137図　縄文土器（1）

文が施される。8、25は胴部破片で、同一個体である。底部に向かって急速にすぼまっている。

B種（4～7）

器面は擦痕が観察されるのみで、連続押し引き文も口唇上のみに施されるもの。胎土は粒子が粗くなるが、植物繊維は少ない。4、6は同一個体で、いずれも平らに削がれた口唇上に、連続押し引き文が観察される。7は口縁に添って条痕が施される。

2類（9～24、26、27）

条痕ないしは擦痕のみのもの。これも先ほどの分類に準じて2種類に分けた。

A種（9～19）

条痕が施されるもの。いずれも胎土は細かいが植物繊維の混入が顕著で、器面の剝落が目立つ。

B種（20～24、26、27）

擦痕が施されるもの。胎土はやや粗くなるが植物繊維は少ない。

第II群

前期の土器を一括する。いずれも後半に属するものである。

1類（28～43）

半裁竹管を施文具とする文様が施されるもの。三角文や平行沈線文などが観察されるが、主体となる文様から、以下に分類した。なお、連続爪形文の資料と連続刺突文の資料が、各1点づつ出土しているが、小破片のため省略した。

A種（28～33）

半截竹管による三角文が施されるもので、全部で18点出土した。28、29は口縁部、30～33は胴部で、同一個体とみられる。胎土は粒子が細かく橙色に発色し、焼成は良好である。口唇部は小波状を呈し、横方向に施された三角文が重層化する。内面は横方向のミガキ調整がなされる。32は底部付近で、三角文の下側には縦方向のミガキ調整がなされている。

B種（34～37、39）

平行沈線と押し引き沈線が組み合わされるもので、総数46点と、この群では最大多数を占める。34～37は口縁部、39は胴部である。胎土は粒子がやや粗く、橙色もしくは赤褐色に発色し、焼成は良好である。口唇上は丸く成形され、棒状工具によるキザミが施される。口縁は若干肥厚し、押し引き文が横方向に施され、その下側に平行沈線がやはり横方向に施文される。

C種（38、40～43）

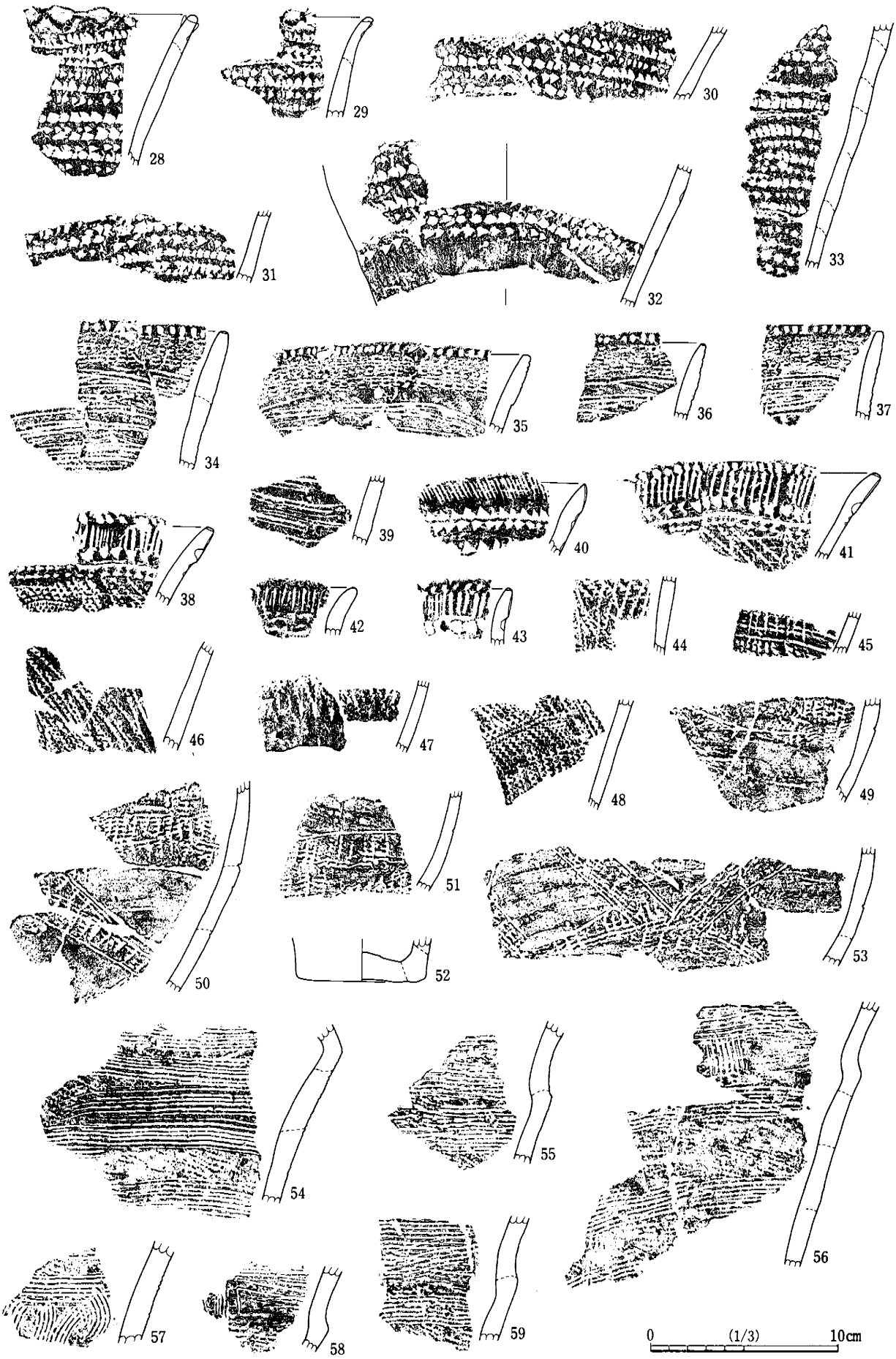
口唇直下に縦位の短沈線が施されるもので、7点出土している。胎土は粒子が細かく雲母片の混入がやや目立つ。淡褐色に発色し、焼成は良好である。口唇上は丸く成形され、棒状工具によるキザミが施され、口縁部に棒状工具による縦位の縦沈線がめぐらされる。38、41～43はその下側に半裁竹管による連続刺突文と連続爪形文がペアでめぐらされ、胴部には波状貝殻文が施される。40は胴部に三角文が配される。

2類（44～51、53）

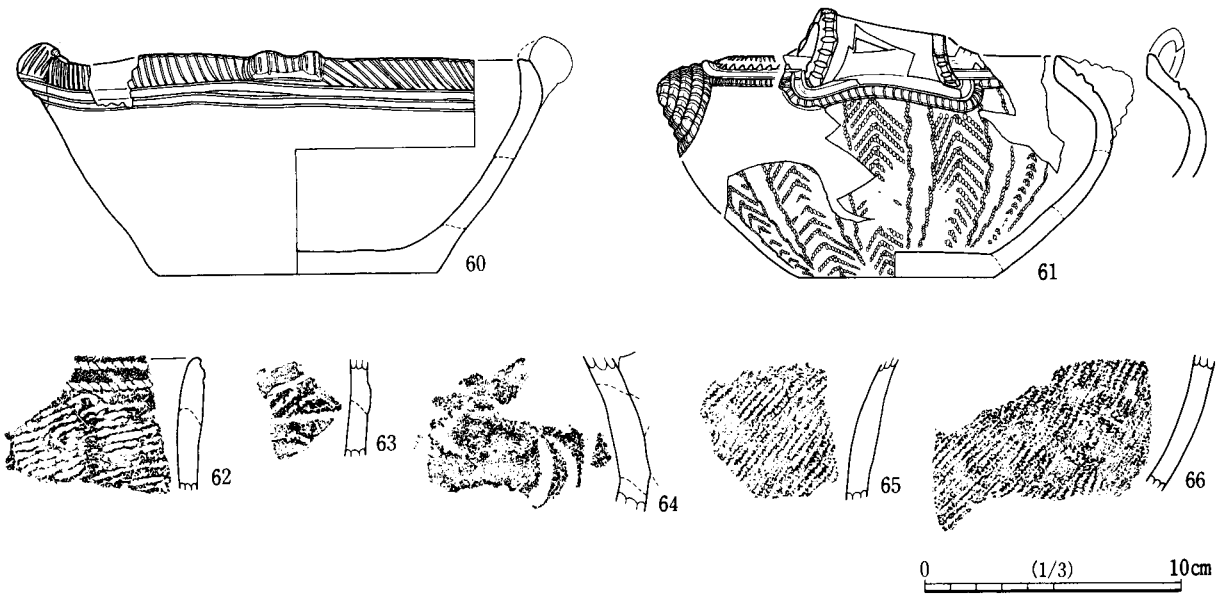
貝殻文が施される胴部破片である。口縁部は1類C種になる個体も含まれよう。

A種（44～48）

波状貝殻文が施されるもので、16点出土している。44～48はいずれも胎土は粒子が細かいが、長石粒や雲母片の混入がやや目立つ。44と46は同一個体で、38、41などとも同一になる可能性が強い。47、48は内


28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
(1/3)
10cm

第138図　縄文土器（2）



第139図　縄文土器（3）

面が丁寧にミガキ調整されるもので、47は黒色に発色している。

B種（49～51、53）

充塡貝殻文が施されるもので、7点のみの出土である。図示した資料はすべて同一個体である。胎土は粒子が粗く、スコリア粒の混入がやや目立つ。濃褐色に発色し焼成は良好である。胴部に菱形を基調とした2本一組の沈線が配され、その間に貝殻による押し引き文が充塡される。

3類（54～59）

貝殻背による条痕が施されるもので、全部で13点出土している。胎土は粒子が細かいが、かなり大きな石英粒の混入も見られる。淡褐色に発色し、焼成は非常に良好で硬質である。底部から器壁が開き気味に立ち上がり、胴部の段状の屈曲を経て、口縁に向かって開いていく器形を呈すると考えられる。縄文を地紋とし、全体に横方向の条痕が施される。56、58は屈曲直上に縦方向の条痕が施され、57は双弧状の条痕が施される。

なお、無文であるが胎土や焼成から第II群に属すると考えられる底部が1点出土している(52)。同じく胴部破片も11点出土しているが、小破片のため割愛した。

第III群

中期の土器を一括する。数は極めて少なく、図示したものを含めて全部で12点しか出土していないが、かなり珍しい資料が出土している。

60、61は器形復元のできる浅鉢である。3F64、65グリッドから集中的に出土しており、この付近に住居跡ないしは土坑（土壙墓？）が存在した可能性が極めて強いが、調査時には確認できなかったようである。60は口径18.6cm、器高8.5cm、底径11.0cmで、80%以上が残存している。胎土は粒子が粗く、石英、長石粒が多量に混入する。濃褐色に発色し、焼成は良好である。口縁部はやや内湾し、半裁竹管による斜位の短沈線がめぐらされる。外側に4対の小突起が貼り付けられるが、ふた瘤状のものとひと瘤状のものがそれぞれ対向するように配置される。短沈線の下側は、やはり半裁竹管による平行沈線が2条めぐらされる。その下側は底部まで無文で、横方向のケズリ調整が観察される。内面は横方向のミガキ調整がなされ、

外側よりも丁寧である。61は口径約12.6cm、器高8.7cm、底径7.5cmで、70％程度残存している。胎土はやはり粒子が粗く、石英、長石粒が多量に混入する。淡褐色に発色し焼成は良好であるが、内面は器壁の剝落が顕著である。口縁部は強く内湾し、内そぎ状に成形される。口唇部に半裁竹管による連続爪形状の短いキザミが施され、１cmほどおいて三角形の連続刺突がめぐらされる。その下側は半裁竹管による横方向の沈線と、連続爪形文がめぐらされ、そこから下は底部まで縦方向の結束文が施される。口縁部４か所に飾り突起がつけられている。正面（もしくは背面）は板状の粘土をブリッジ状に貼り付けている。この突起は左右非対称で、両端にキザミの入った枠状の隆帯が貼り付けられ、正面と上面に三角形の透かし穴があけられる。残りの３か所には、粘土紐を巻き貝の形に積み上げて、連続爪形文を施した突起が貼り付けられる。形態としては十三菩提式に特徴的なものである。60とセットで出土したため中期初頭と位置づけたが、前期末の様相を色濃く残すもので、極めて珍しい優品である。62は口縁部に添って無節縄文１の原体が２条圧痕され、その下側に同じ原体を使用した縄文が施される。64は胎土に石英、長石粒を多量に含む。飾り把手がつけられていたが、すべて剝落している。65、66は縄文施文の土器で、第II群や後述する第IV群以降の土器とは明らかに異なるものをここに含めた。いずれも胎土は粗く砂っぽい。

第IV群

後期堀之内式を一括する。全部で390点ほど出土しており、当遺跡中最大多数を占める。施文法をもとに分類したが、小破片についてはあくまで目安程度のものであることを断っておく。

１類（67～69、72～98、100～105、107～118、122～129）

縄文を地紋とするものを一括した。器形としては底部からゆるやかに開くように立ち上がり、頚部が弱くくびれたあと口縁部に向かってゆるやかに開くものが多数を占める。胴部は沈線による文様が組み合わされるものと、縄文のみのものとに大きく分けられる。堀之内１式に分類されるものである。なお、口縁部は図示に耐えない小破片を除いてすべて掲載している。

Ａ種（72）

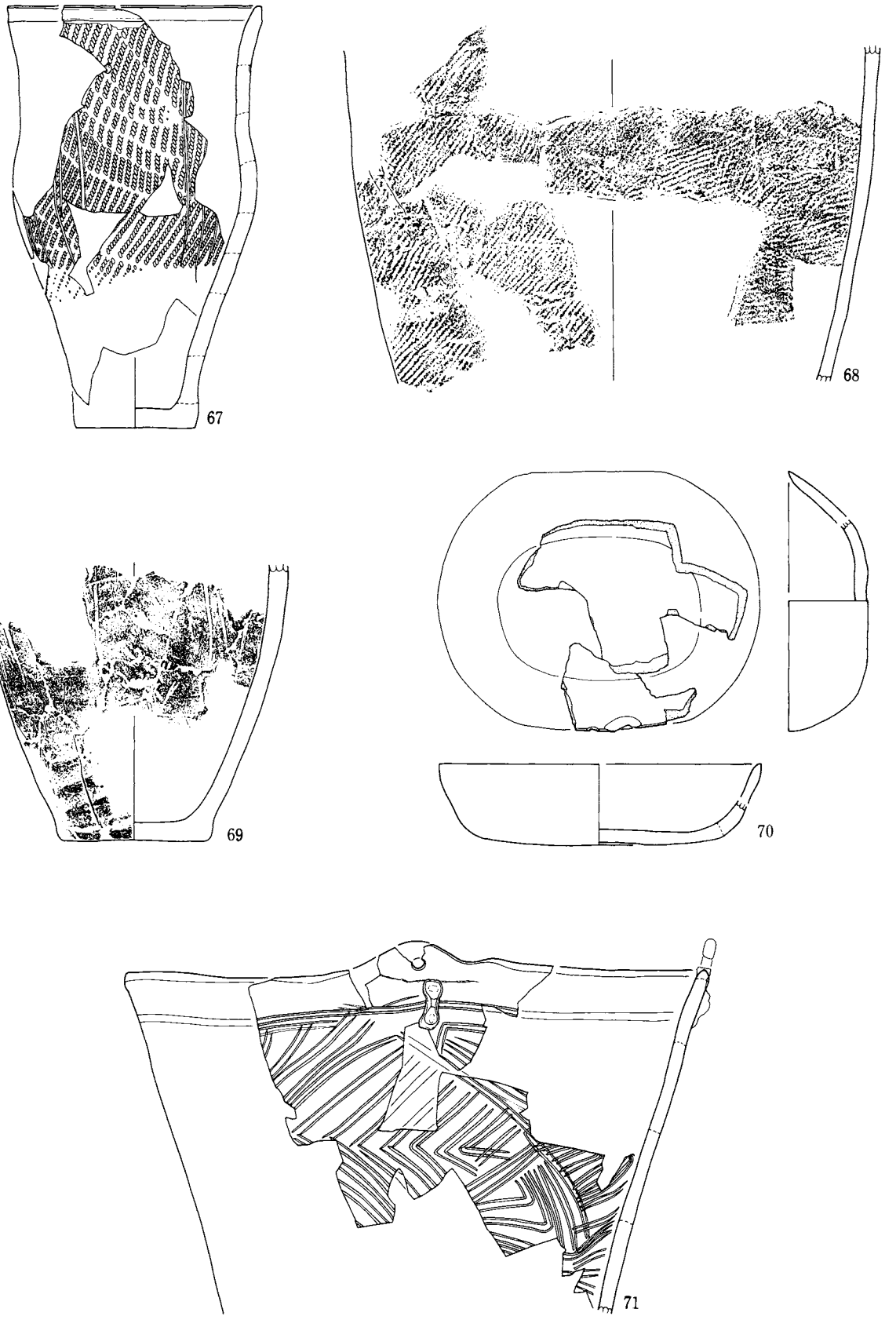
明確な口縁部文様帯が存在するもの。確定できるものは図示した個体のみである。72は波状口縁の深鉢で、口唇に添ってナゾリ状の太い沈線が施され、波頂部に円形刺突が加えられる。頚部にくびれを持ち、平行沈線がめぐらされる。口縁部と平行沈線の間はＬＲ縄文が施されるが、軽く転がされたようであまりはっきりしない。波頂部直下の平行沈線上に円形の貼り付け文が配され、その下に双弧状の集合沈線が施される。

Ｂ種

口縁部文様帯と胴部文様帯との区別が付かないもので、平口縁のものをここに含めた。口唇部上面に沈線が施されるもの、口唇直下に沈線がめぐらされもの、沈線ではなくナゾリになるものなどが観察されるが、ここでは細分しなかった。

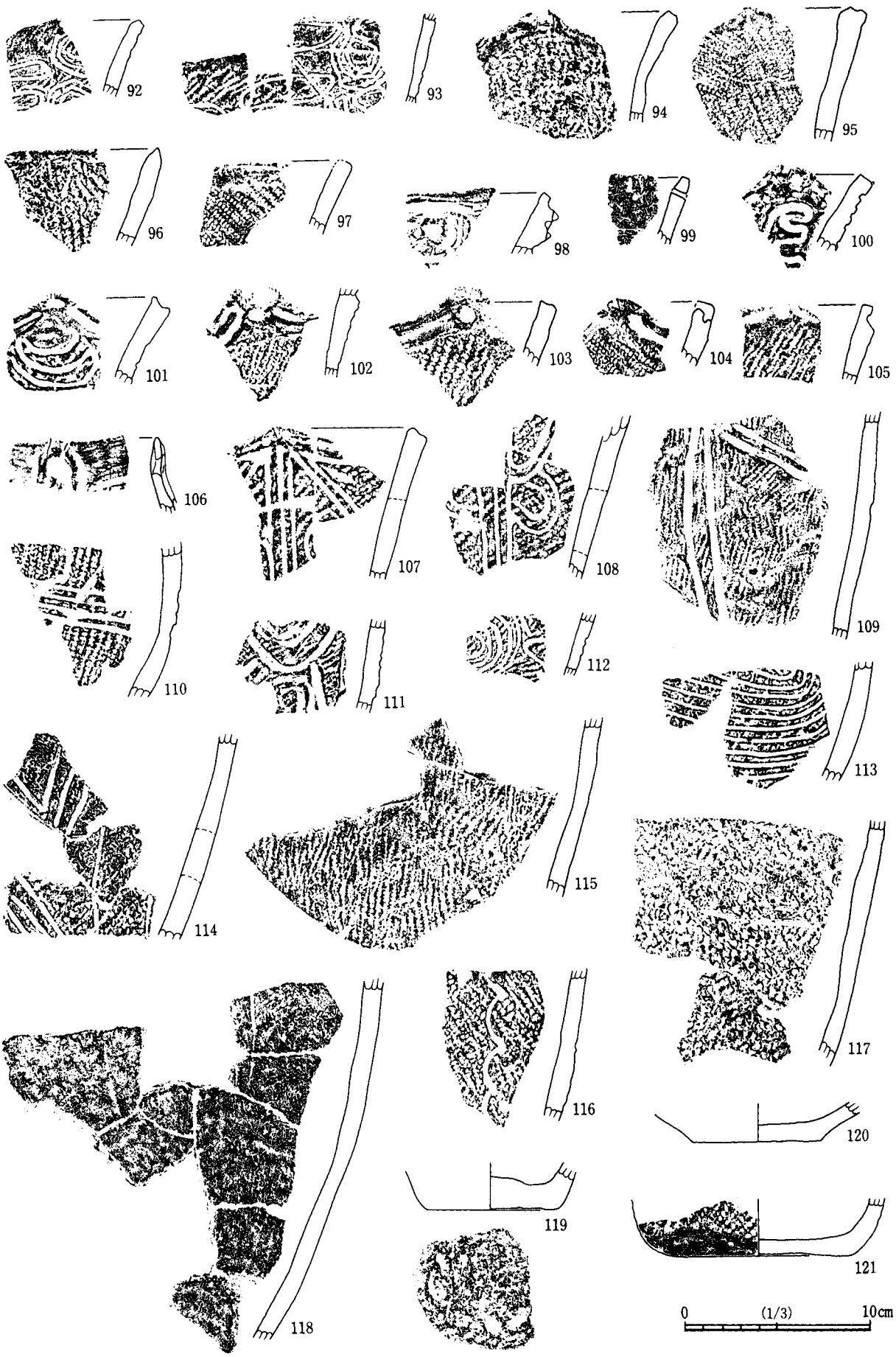
Ｂ－１種（67、73、74、76、79、82、83）

口縁部から沈線が垂下されるもの。沈線は４本一単位となるものが多いが、コンパス文になるものもある。67は器形が復元できる小型の深鉢で、口径約16.6cm、器高約28.0cm、底径約7.8cmである。胎土はやや粗いが焼成は良好で、赤褐色に発色する。底部からやや開き気味に立ち上がり、胴部でいったんすぼまったあと口縁にかけてゆるやかに開く器形を呈する。口縁部は外面がナゾリ状に成形されている。胴部は縄文施文で、５本一組の沈線が垂下される。縄文は重ねて施文されており、判別しづらい。底部付近は縦方

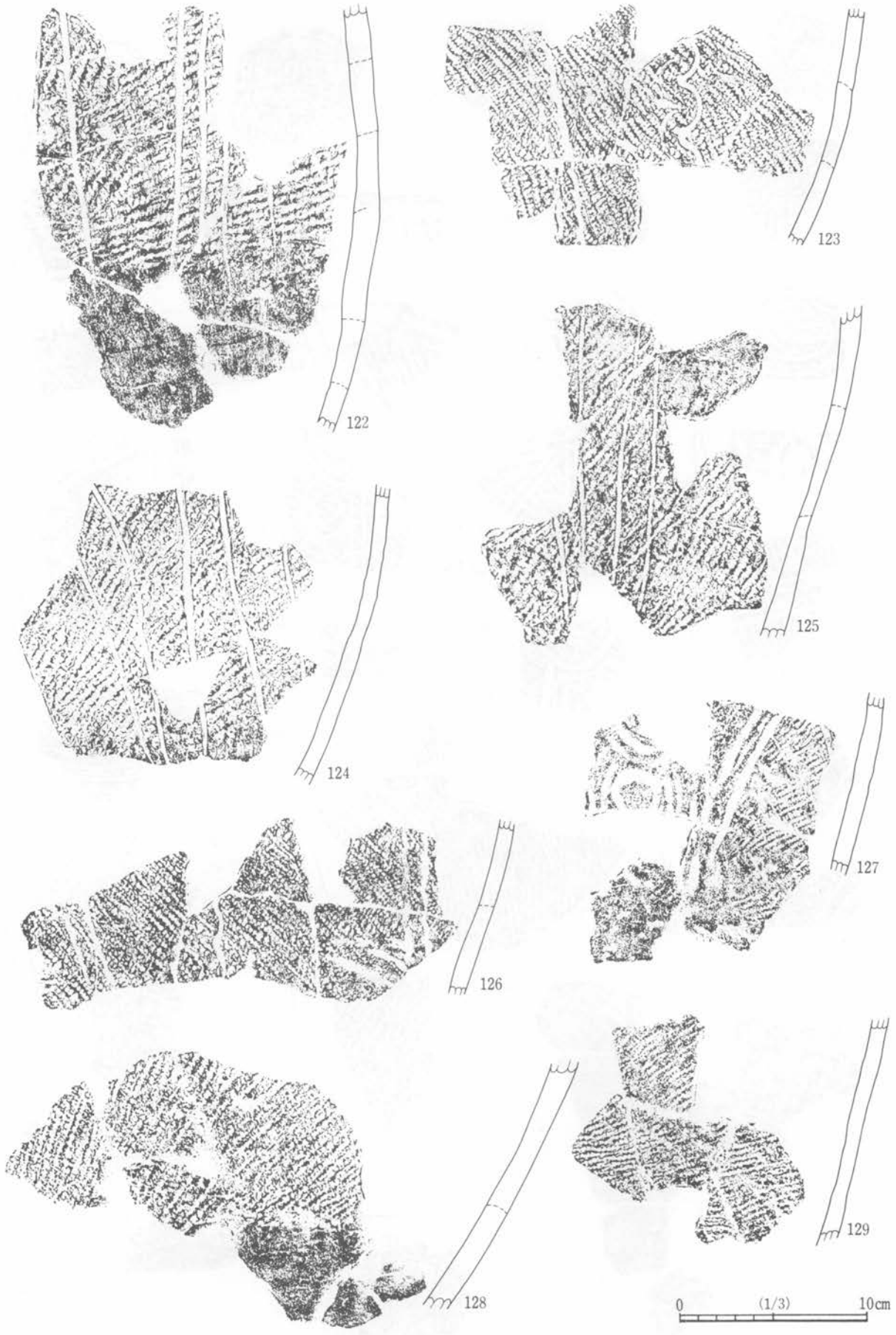


第140図　縄文土器（4）

第141図　縄文土器（5）


92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
0
(1/3)
10cm

第142図　縄文土器（6）



第143図　縄文土器（7）

向のケズリ調整がなされ、縄文も磨り消されている。内面は縦方向の丁寧なケズリ調整がされている。73はキャリパー状を呈する深鉢である。垂下する平行沈線と斜行する平行沈線とが組み合わされ、垂下する平行沈線の間には２対のコンパス文が施される。74は垂下する平行沈線が紡錘形に閉塞しているものである。76は平行沈線の間に連続刺突が施されるものである。79は口唇上に沈線が施されるが、その後ミガキ調整によって半分磨り消されている。

Ｂ－２種（75、77、78、80、85～91、96、97）

平口縁で胴部は縄文施文のみのもの。ただし小破片についてはＢ－１種に含まれるものも存在するとみられる。75は口縁部がやや強く外反し、口唇上に沈線が施される。77は口唇直下に２本の沈線が施される。96は口唇部に沈線もしくはナゾリが施されないものである。

Ｂ－３種（98）

口唇直下に円形貼り付け文が配されるもの。98は口唇直下に粘土をボタン状に貼り付け、中心に円形刺突を加えている。周囲は貼り付け文に添って沈線が施される。

Ｃ種

口縁部文様帯と胴部文様帯との区別が付かないもので、波状口縁になるものである。口唇部についてはＢ種と同様であるが、それに加えて波頂部上に円形刺突が施されるもの、波頂部直下に円形刺突が施されるもの、円形刺突ではなく押圧が施されるものに分けられる。

Ｃ－１種（81、84、100、101、107）

縄文地紋に沈線による文様が組み合わされるもの。100は蛇行する懸垂文が、101は弧状の集合沈線が施される。84、107は波頂部から垂下する直線と斜行する沈線とが組み合わされる。

Ｃ－２種（92、93）

小型の深鉢で直線状に開く器形を呈するもの。口唇部には沈線もしくはナゾリは施されない。器壁は薄く、胎土も粒子はやや細かい。92と93は同一個体である。縄文地紋に細沈線による楕円もしくは同心円が描かれるが、描き方は稚拙で雑な印象が強い。

Ｃ－３種（94、95、102～105）

波状口縁で縄文施文のみのもの。104は波頂部の口唇上に押圧が加えられ、その両側に円形刺突が施される。

Ｄ種

胴部破片を一括する。

Ｄ－１種（69、108～114、116、118、122～127）

縄文地紋に沈線による文様が施されるもの。110点近く出土している。沈線の文様は垂下させた直線に斜行ないしは横走する直線を組み合わせるもの（69、109、110、114、118、122、124、125）、円弧ないしは同心円を描くもの（108、111～113、127）、コンパス文（116、123、126）などに分けられる。69は深鉢の胴部から底部にかけてで、底径約9.5cm、残存器高は18cmである。胎土は粗く砂っぽいが、焼成は良好である。底部からゆるやかに開いていく器形を呈する。残存している部分は上側が縦方向の、底部側が横方向のケズリ調整が施される。文様は縦方向の沈線しか観察されないが、上側には縄文が施されていると考えられる。108は107と、111は82とそれぞれ同一個体と考えられる。

Ｄ－２種（68、115、117、128、129）

縄文施文のみのもの。170点余り出土している。68は大型の深鉢胴部で、残存部の最大径は約36cmである。胎土は砂粒の混入が顕著でかなり粒子が粗く、赤色スコリアがやや多く混入する。焼成はあまり良くなく、器面の摩滅も著しい。外面にはＬＲ縄文が施される。128は底部付近と考えられるもので、下側はケズリ調整によって縄文が磨り消されている。

２類（71）

沈線のみのものを一括したが、図示したもの以外は７点しか出土していない。71は大型の深鉢で、口径約38.4cm、残存器高は22.5cmである。胎土は粒子がやや粗いが焼成は良好で、外面濃褐色、内面赤褐色に発色する。胴部から口縁に向かって直線状に開くような器形を呈する。口唇部はやや尖り気味に成形され、内側はわずかに肥厚する。口縁部は３cmほどの無文帯をおき、その下に半裁竹管による平行沈線を水平にめぐらせる。波状の小突起が１か所つけられ、その下の平行沈線上に８の字状貼り付け文がつけられる。平行沈線の下側は、同じ施文具によって矢羽状の文様が描かれる。本来は菱形を意識したものと思われるが、配置は不規則でかなりルーズな印象を受ける。下側は水平な平行沈線が描かれており、その下は無文になると考えられる。内面は横方向のケズリ調整が施される。堀之内２式に属するものである。

３類（70、99）

無文土器を一括する。全部で80点余り出土しているが、ほとんどが縄文施文の土器の無文部と考えられる。70は浅鉢である。遺存状況は悪く、特に口縁部がほとんど残されていなかったが、底部の成形や調整などから、楕円形の皿形の浅鉢になるものと考えた。長径約22cm、短径約17cm、器高約５cmで推定復元したが、長軸と短軸の器壁の傾斜がかなり異なることや、傾斜の変化点と軸とが一致しないことから、あるいは三角形や方形になる可能性もある。胎土は粒子が粗く、赤色スコリアが多量に混入する。焼成は良好で淡褐色に発色する。内面、外面とも長軸方向のケズリ調整が施される。99はやや小型の土器で、焼成前に穿孔されているものである。

４類（106）

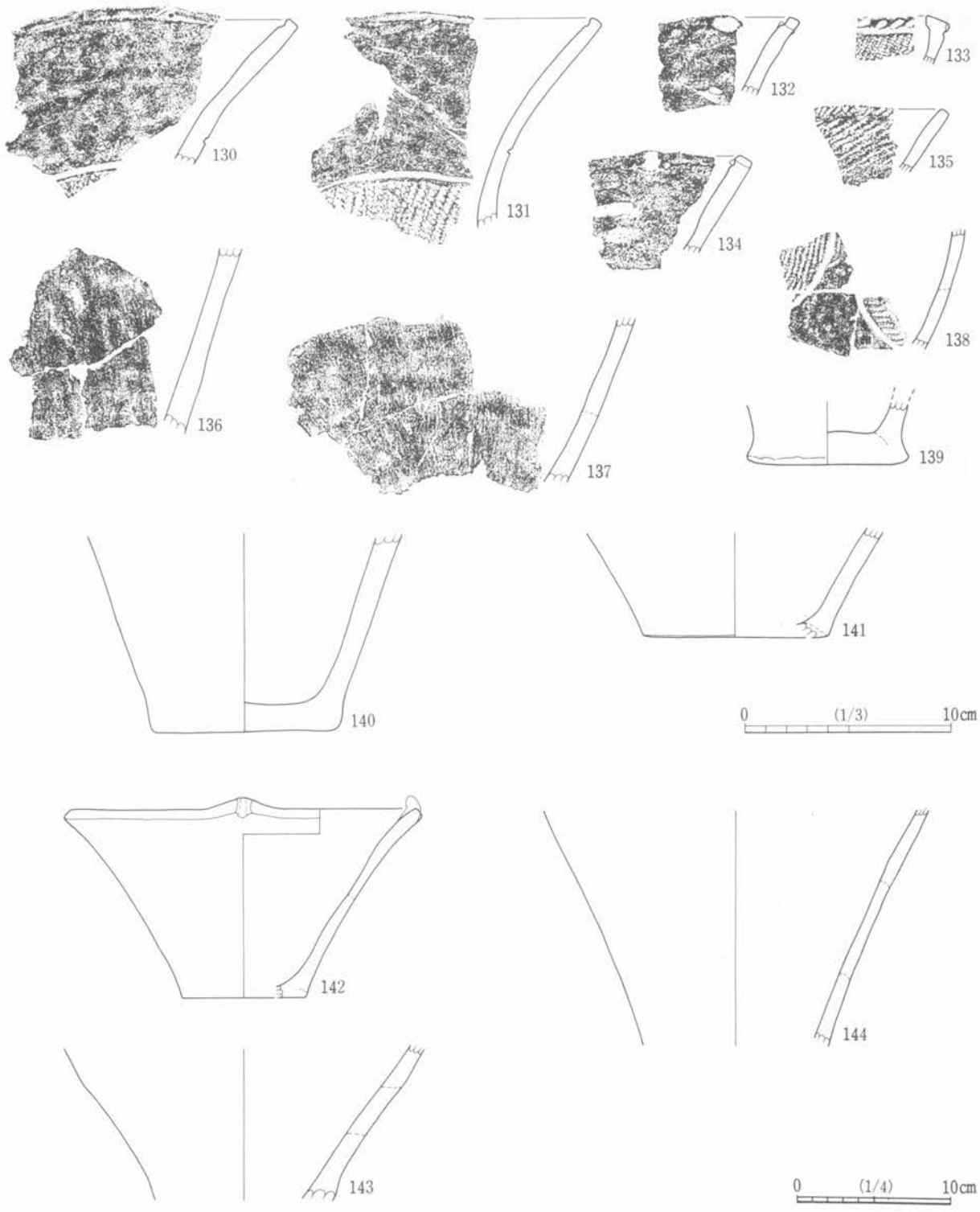
いずれにも当てはまらない特殊なものである。106は注口土器の口縁部とみられる資料である。胎土は他の深鉢などと異なって、粒子はかなり細かい。焼成は良好で乳褐色に発色する。口縁部は幅２cmほど無文帯となり、その下側に横走する沈線が観察される。その下側に胴部文様帯が配されると考えられる。図に見られる穴は焼成前に穿孔されたもので、それを取り囲むように隆起線が貼り付けられている。

５類（119～121）

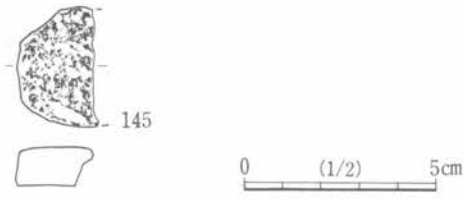
底部を一括する。全部で12点出土している。119は底径約7.0cmで、胎土は砂粒が多量に混入して粗い。120は底径約6.8cmで、浅鉢と考えられる。121は底径約10.2cmで、胴部に縄文が施文される。全体にミガキ調整される。

第Ｖ群（130～144）

後期加曽利Ｂ式を一括する。全部で50点出土している。130～132、134は口縁部が無文帯になるもので、いずれも大きく外反する器形を呈する。口唇部上面は平らに削がれ、内側に沈線がめぐらされる。胴部には水平に沈線が配され、その下側に縄文が施される。133は口唇部に紐線状のキザミと沈線がめぐらされ、その下側に縄文が施されるもの、135は平らに削がれた口唇上に、縄文が施されるものである。138は楕円形の磨消縄文が配される深鉢胴部である。136、137、139～144は無文土器である。胎土や焼成などからこの群に属するものとみなした。142は浅鉢、それ以外はすべて深鉢である。いずれも外面は縦方向のケズリ



第144図　縄文土器（8）



第145図　土製品

調整が顕著で、焼成も良好である。136、137は内面にススが付着している。139～141は底部が残存しているもので、底径は139が約8.0cm、140が約8.7cm、141が約9.0cmである。142は朝顔形を呈する浅鉢で、口径約22.5cm、器高12.1cm、底径約8.0cmである。胎土は粒子がやや粗く砂っぽく、淡褐色に発色する。焼成は良好であるが、二次的な被熱による摩耗が目立つ部分もある。外面は上半分が横方向の、下半分は縦方向のケズリ調整が施され、内面は横方向のケズリ調整が施される。平口縁であるが、２か所につまみ出されたような小突起がつけられる。143、144は輪積部分から破損したもので、特に143は底部がそっくり欠損している。

土製品（第145図）

有孔円盤の未成品とみられる土製品が１点出土している。直径約30.8mm、最大厚10.1mm、重量7.5ｇである。堀之内式の縄文施文土器片を素材として、内面側から穿孔しているが、貫通する前に破損してしまったとみられる。周縁は打ち欠き調整だけで、研磨痕は観察されない。

縄文時代以降石器（第146図、第16表、図版45）

本遺跡より出土した石器はわずかで、石器総点数は15点を数える。器種組成は石鏃・石鏃未成品６点、石錐１点、磨石１点、剝片２点、礫５点である。

１～６は石鏃・石鏃未成品である。１～３は石鏃である。１は器体がやや細身のものである。両側縁が直線的で、基部は逆Ｖ字状に浅く抉れ脚部が尖る。２も両側縁が直線的であるが、下端部は内湾し、基部は逆Ｕ字状に深く抉れ脚部は棒状に延びる。３は上半部を欠損し、片脚が突出する。４～６は石鏃未成品である。４は自然面を表面に残置する横長剝片を素材として、先端部を尖らせるような平坦加工が見られる。５は貝殻状の幅広な剝片を素材として、素材の打面部に疎らに調整加工が認められる。６は素材の周縁に細部加工が連続し、素材を三角形状に整形している。

７は石錐である。器体の両側縁の細部加工により、下端部が抉入するように棒状に細くなる。下端部の横断面形は三角形状であり、細部加工の端部には使用痕が看取される。

８は磨石である。全面が擦り面となるものであるが、側縁の擦りは疎らである。

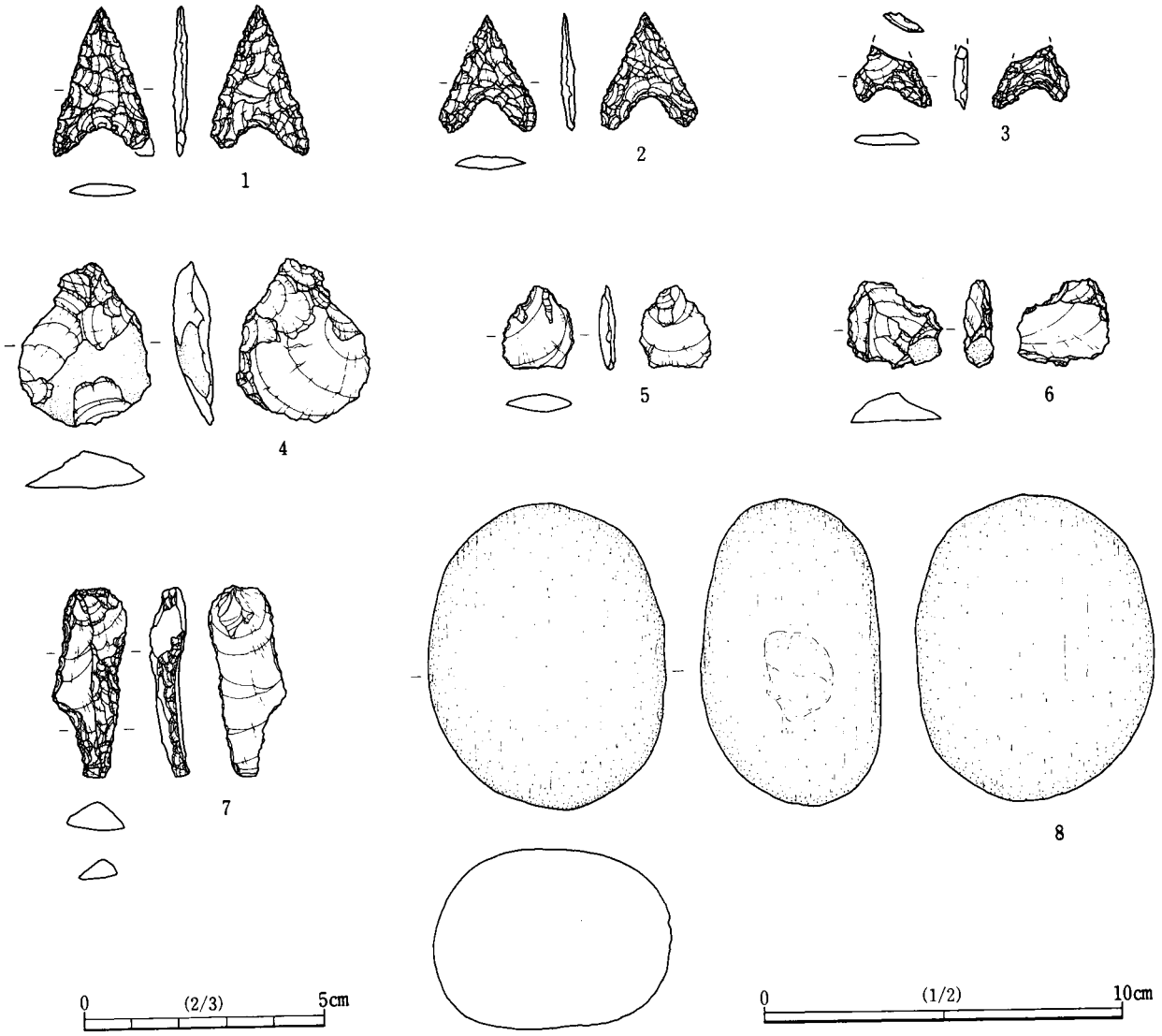
グリッド出土遺物（第147図、図版67）

グリッド出土遺物をここに取り上げる。１は土師器の甕である。口径22.2cm、底径9.0cm、器高23.5cmを測り、口縁部に特徴があり、頸部でほぼ直立しそこから２回にわたって外反しほぼ水平に開いている。最後に口唇部は、小さく細く垂直につまみ上げられ縁を形成している。内面は頸部から緩やかに外反しながら最後の縁まで弧状に開いている。口縁部はナデによって調整され、体部外面はヘラケズリ後ナデが行われる。内面はナデが施されている。４Ｃ－59グリッド出土でＳＩ－００３住居跡に近接し遺構に関連する遺物であろう。２は土師器の甕の口縁部である。口径13.0cmを測り、口縁部が稜を持っている。口縁部はナデ、体部はヘラケズリが施される。３は土師器の杯である。口径15.6cm、底径8.8cmになるとみられ、器高は5.0cmを測る。外面に強いロクロ目状の窪みを５条持たせている。内面はナデが施され外面に比して平坦である。内外面共に赤色塗彩が行われている。１と同様に４Ｃ－59グリッド出土である。４は須恵器の杯か盤状杯の杯部分である。口径は19.0cmになるとみられ、広がってきた杯部が口縁部近くで急に段を持って上方に折れ曲がる。５は土師器の杯で、３に類似した形態である。破片が小さいが、口径14.6cm、底径11.0cm、器高3.4cmになると思われる。外面は強いナデによるロクロ目状の窪みが５条みられ、内面はナデが施されている。３と同様に内外面共に赤色塗彩が施される。６は土師器の杯で、底部と体部の境の稜が

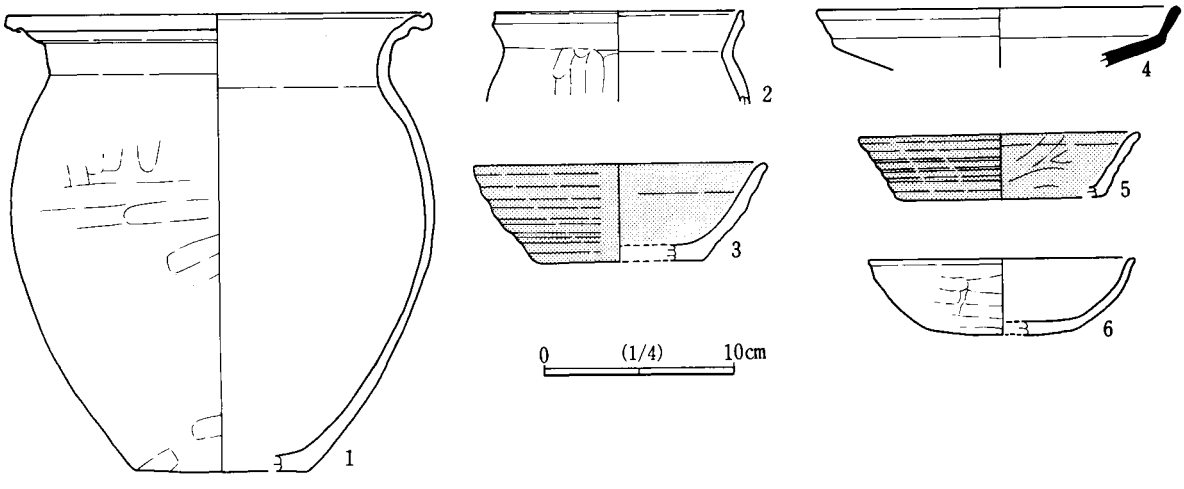
ない形態のものである。遺存が悪いが、口径14.0cm、器高3.9cmになるとみられる。口唇部の縁が最後に小さく外反している。

第16表　縄文時代石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号	No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号
1	石鏃	チャート	30.9	20.4	3.8	1.3	5 D44-10	5	石鏃未成品	チャート	17.1	14.9	3.3	0.9	3 F52-7
2	石鏃	安山岩	24.1	20.3	2.6	0.8	5 D01-2	6	石鏃未成品	チャート	17.9	19.7	6.0	2.3	3 F52-6
3	石鏃	チャート	12.8	15.9	2.4	0.5	5 D42-32	7	石錐	黒曜石	39.2	15.4	7.9	3.2	3 F44-24
4	石鏃未成品	凝灰岩	33.6	27.5	7.6	5.6	3 F74-15	8	磨石	砂岩	84.4	66.5	50.5	411.1	3 F45-34



第146図　縄文時代石器



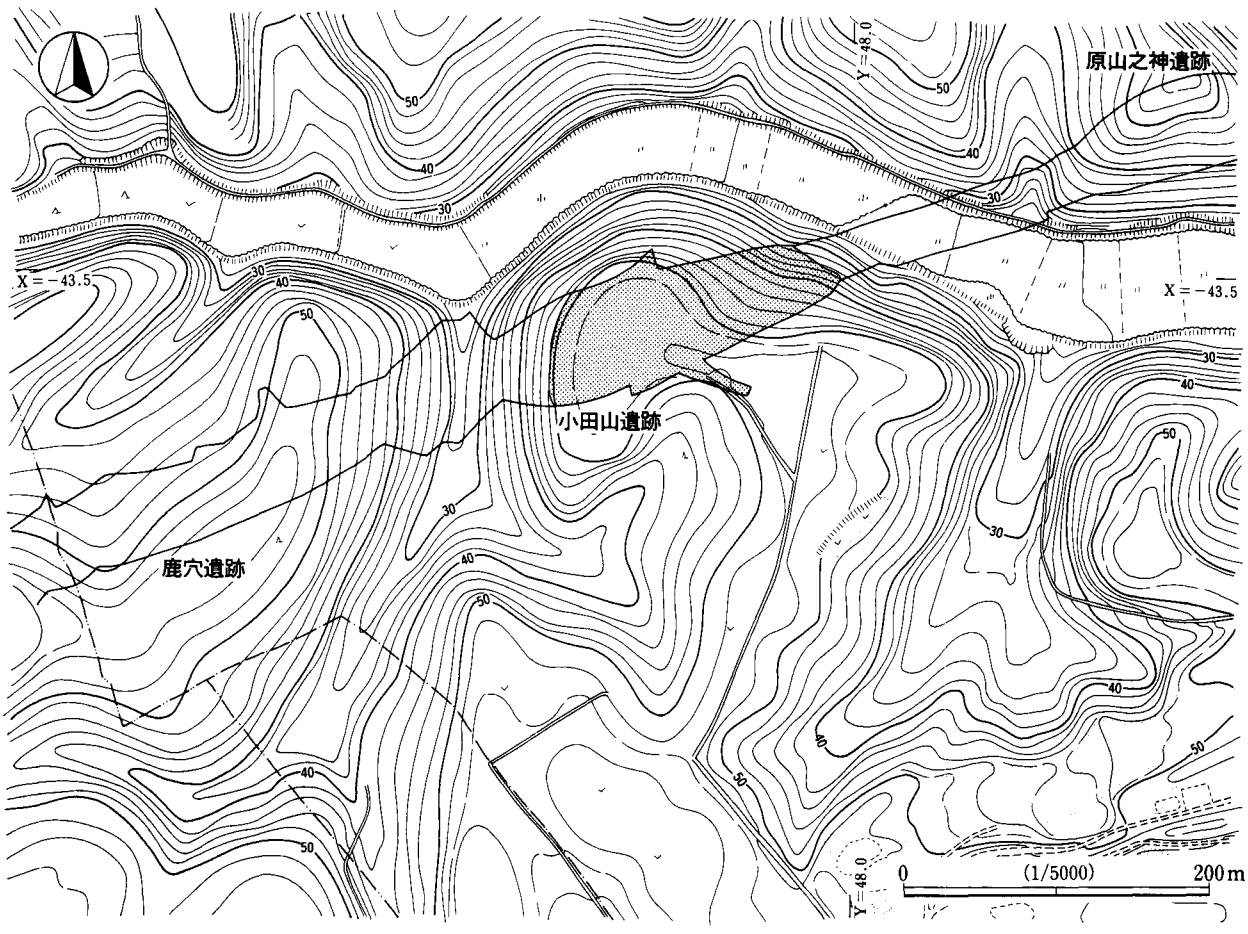
第147図　グリッド出土遺物

XII　小田山遺跡

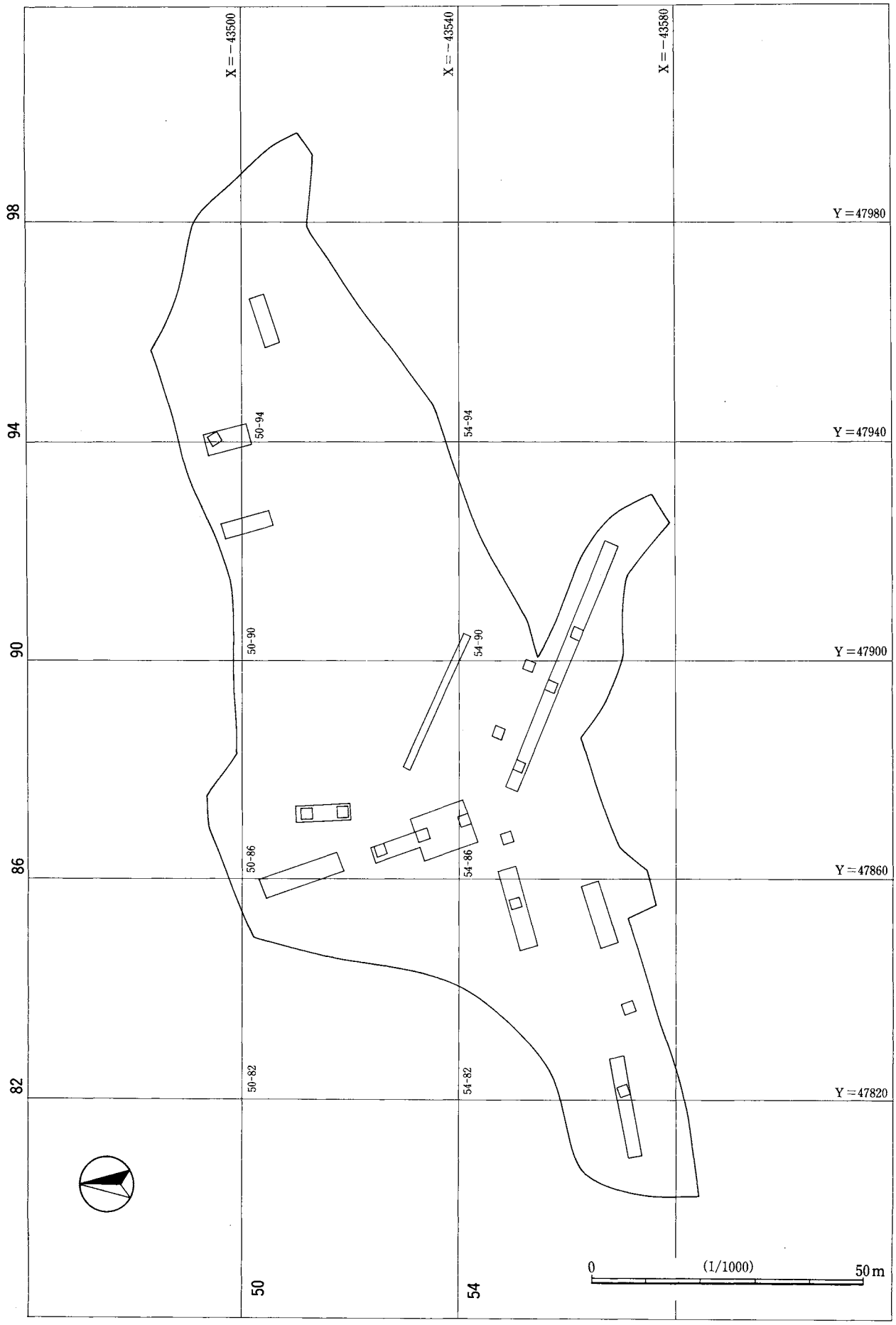
1　遺跡の概要（第148・149図、図版30）

本遺跡は、山武郡山武町植草字小田山1795他に位置する。調査対象面積は5,800㎡で、上層の確認調査を対象面積の10％である580㎡で行ったところ、調査範囲の中央部において縄文時代早期の遺物包含層を検出した。そこで周囲を60㎡拡張し、遺物の分布と遺構の有無の調査を実施した。包含層は、この拡張した範囲で広がりを確認することができ、また遺構などは確認されなかった。この縄文時代早期の遺物包含層については、遺跡の立地条件などから、前述した鹿穴遺跡が隣り合って位置しているため関連性が考えられる。その他の確認グリッドでは、古墳時代の土師器を検出したが、遺物の出土が少なく、また遺構も検出されなかったため、確認調査のみとされた。下層の確認調査では、対象面積の１％の58㎡で遺物の調査を行ったが、旧石器類を検出することはできなかった。調査期間は、平成６年６月６日から平成６年８月１日までであった。

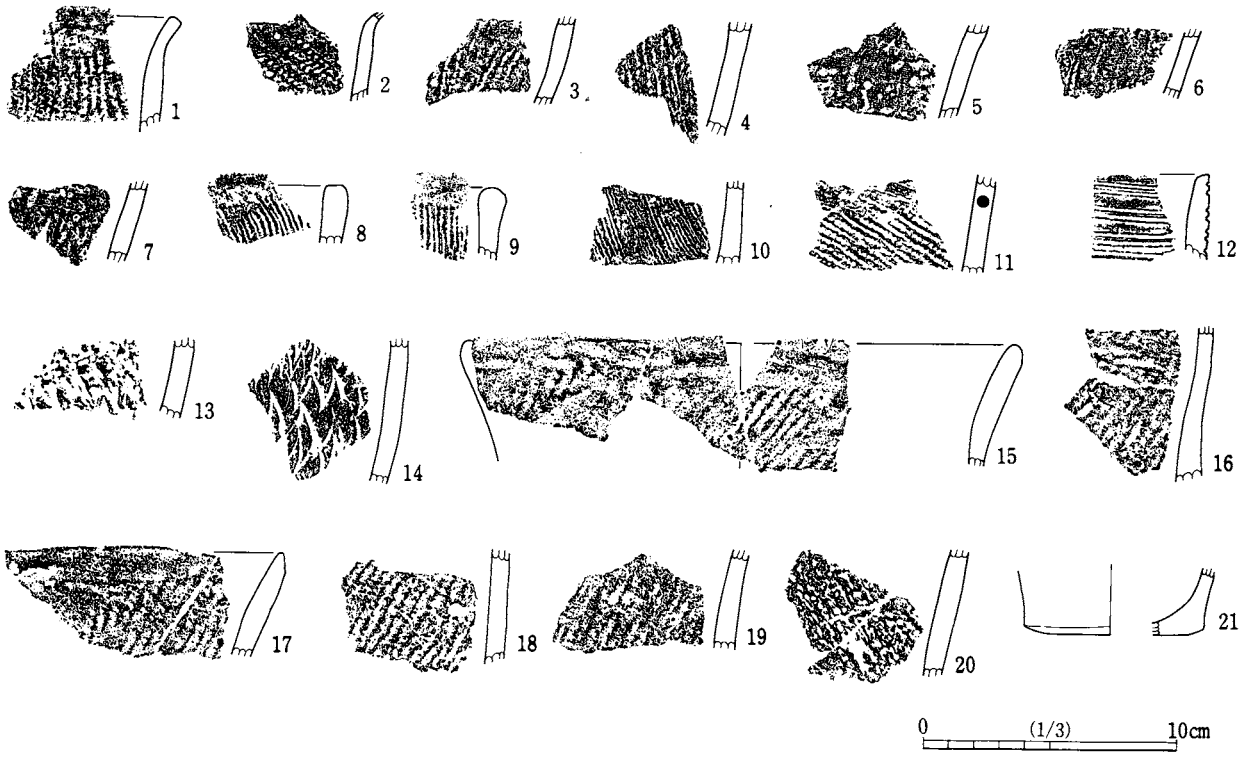
遺跡は、九十九里平野を経て、太平洋に流入する作田川によって開析された作田川谷の南側に位置する。これは、真亀川の上流部、十文字川によって開析された十文字谷と、作田川谷がはさむようにして作った極楽寺台の北西部にあたり、北側は作田川谷の武勝支谷に接している。前述の鹿穴遺跡とは荒蕪地となっている小さな谷をはさんだ、すぐ東側約200mのところに位置する。調査範囲は遺跡の北部にあたり、中央



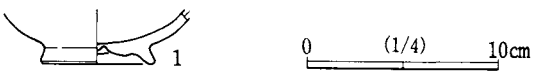
第148図　小田山遺跡周辺地形図



第149図　上層・下層調査状況図



第150図　縄文土器



第151図　グリッド出土遺物

部と西部が台地上で、東部は北東に落ち込む谷の斜面となっている。標高は台地上で52m、斜面下部では40mであり、水田面の標高は20mを測る。

2　検出した遺構・遺物

縄文土器（第150図、図版63）

全部で60点強の遺物が出土している。すべてグリッド出土であり、遺構出土のものはない。

1～10は撚糸文土器である。1、2は口縁部がやや強く外反するもので、撚糸は1は縦位に、2は斜位に施文される。井草II式と考えられる。3、4は同じ時期と考えられる胴部破片である。5～7はまばらな撚糸が縦位に施文されるもので、稲荷台式と考えられる。8～10は夏島式である。8、9は口縁部で、口唇部は外反しないものの若干の肥厚が見られる。11は黒浜式土器と考えられるもので、胎土は植物繊維を多量に含む。12～14は前期後半に属するものである。11は半截竹管による沈線が施される。12、13は波状貝殻文が施されるもので、内面は縦方向のヘラケズリが見られる。15～19は加曽利E式に属すると考えられる深鉢である。胎土は粒子がかなり粗く、器表面の摩滅も著しい。胴部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、口唇部は外そぎ状に成形される。20は後期に属すると考えられる胴部破片、21も同じく後期のものと思われる底部破片である。

グリッド出土遺物（第151図）

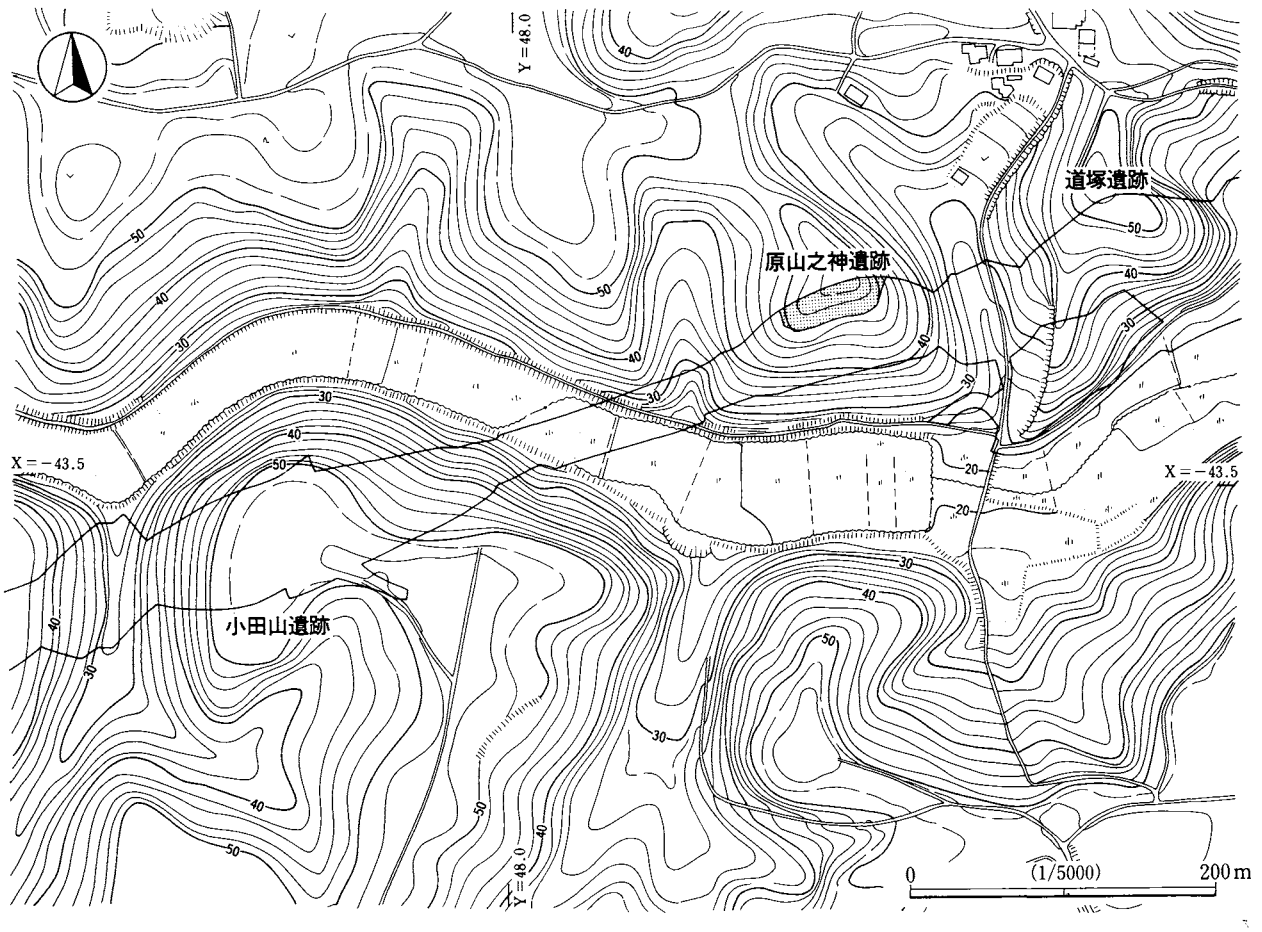
グリッド出土遺物を取り上げる。1は土師器の椀である。ロクロ成形の高台の付いた椀で、高台の径5.8cmを測る。

XIII　原山之神遺跡

1　遺跡の概要（第152～154図）

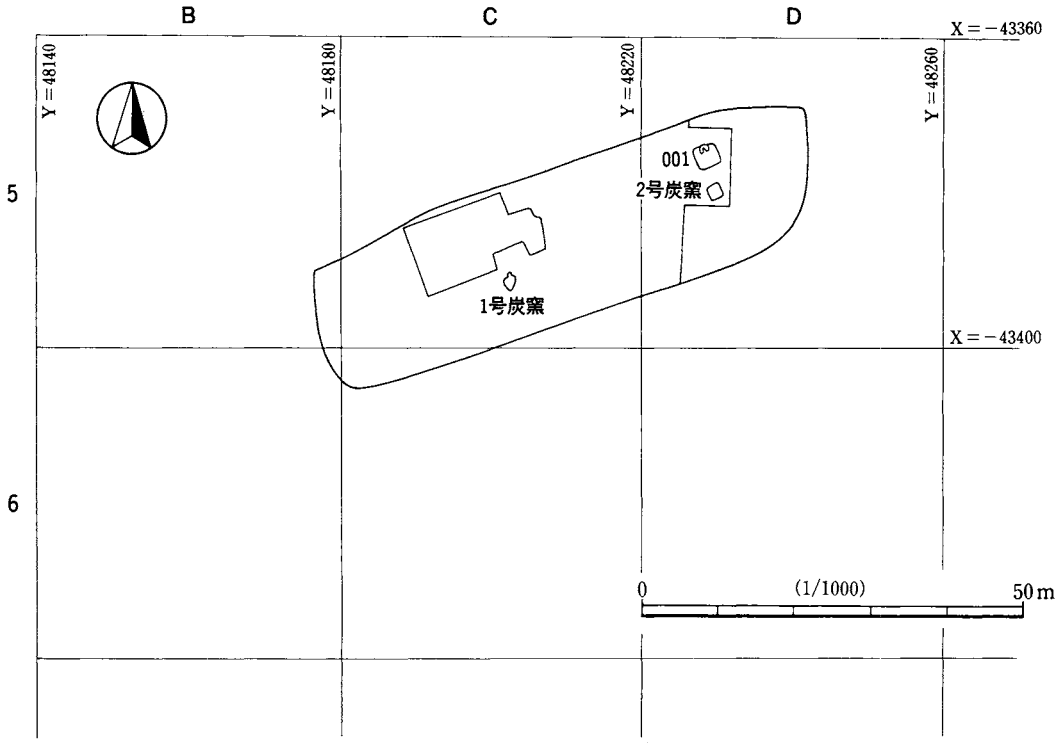
本遺跡は、山武郡山武町森字原野山801-1に位置する。調査対象面積は1,200㎡で、上層の確認調査においては、奈良・平安時代竪穴住居跡1軒と、確認グリッドの広い範囲において縄文時代早期遺物包含層を検出した。そこで上の2つの遺構について、本調査を948㎡の面積で実施した。新たな遺構は検出されなかったが調査範囲は台地の南側であるため、竪穴住居跡や縄文時代遺物包含層はさらに北側にも続いて存在する可能性が強いことが判明した。上層の本調査の終了後、下層の確認調査を行った。調査範囲の北側1か所において石器を検出したので周囲を拡張した結果、旧石器ブロックは上層と同じようにさらに調査範囲の北側に続くことがわかった。その他のグリッドでは、旧石器類は検出されなかったので、本調査は不要と判断された。調査期間は、平成6年4月6日から平成6年6月3日までであった。

遺跡は、九十九里平野を経て、太平洋に流入する作田川によって開析された作田川谷の中流部から南に入りこむ城府支谷の先端部に位置し、北総台地の東端にあたる極楽寺台がその北部で枝分かれして形成した雨坪支台と森支台の付け根に位置する。小支谷が複雑に入りくんでいるため、この付近では遺跡の南側が谷になっている。水田となっているこの谷をはさんで南西約400mに前述した小田山遺跡が位置する。小田山遺跡、鹿穴遺跡とも極楽寺台の北部に位置し、本遺跡と同じように縄文時代早期の遺物包含層を検出

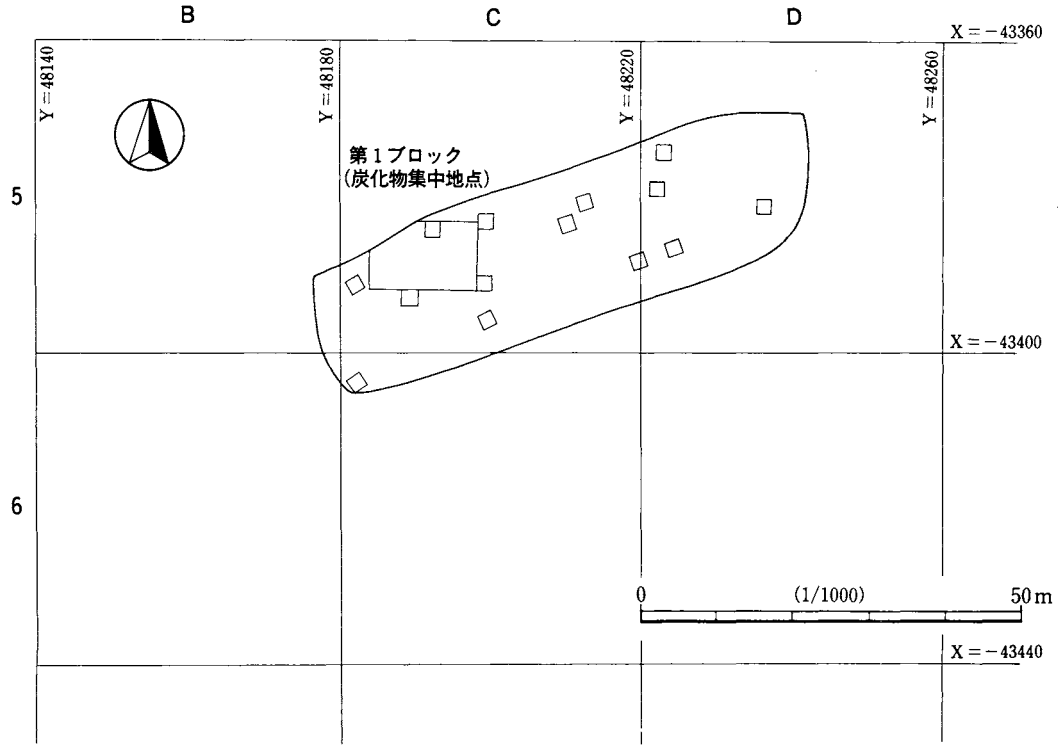


第152図　原山之神遺跡周辺地形図

ことから、遺跡間に関連があることが考えられる。遺跡の標高は52mで、谷部の水田との比高は33mを測る。



第153図　上層調査状況・遺構等配置図



第154図　下層調査状況図

2　検出した遺構・遺物

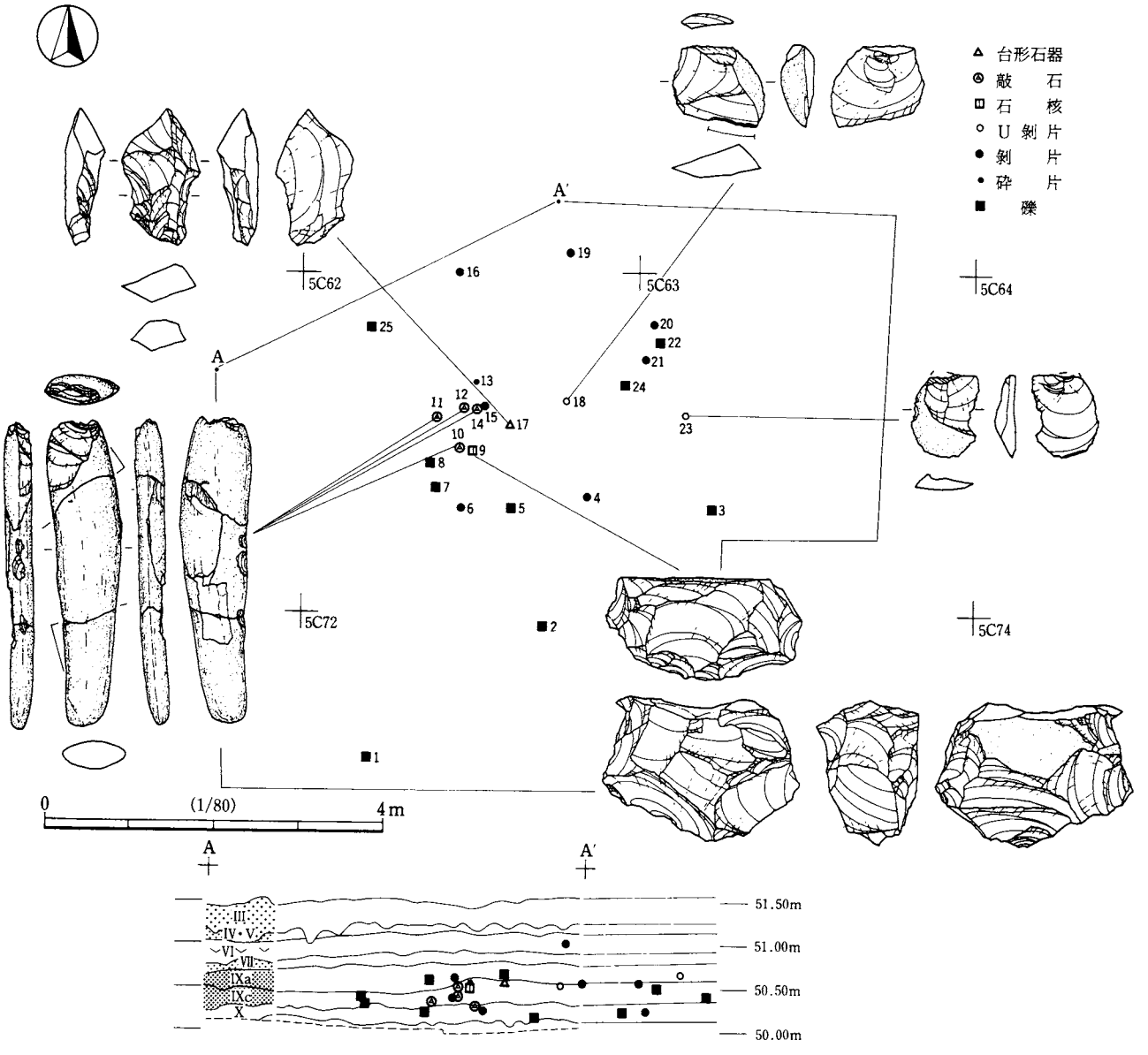
旧石器時代

旧石器時代調査は、1,200m²の調査対象面積のうち、186m²の確認調査を実施した。ブロックは調査対象範囲の西側で検出され、１か所のブロックと１か所の炭化物集中地点が検出された。それぞれを第１ブロック、第１炭化物集中地点と呼称する。第１ブロック・第１炭化物集中地点とも出土層位が立川ローム層IX層にあたり、分布地点も重複することから同一の文化層と把握される。これらのブロック・炭化物集中地点は１か所ずつの検出ではあるが便宜的に第Ⅰ文化層を設定して説明していく。

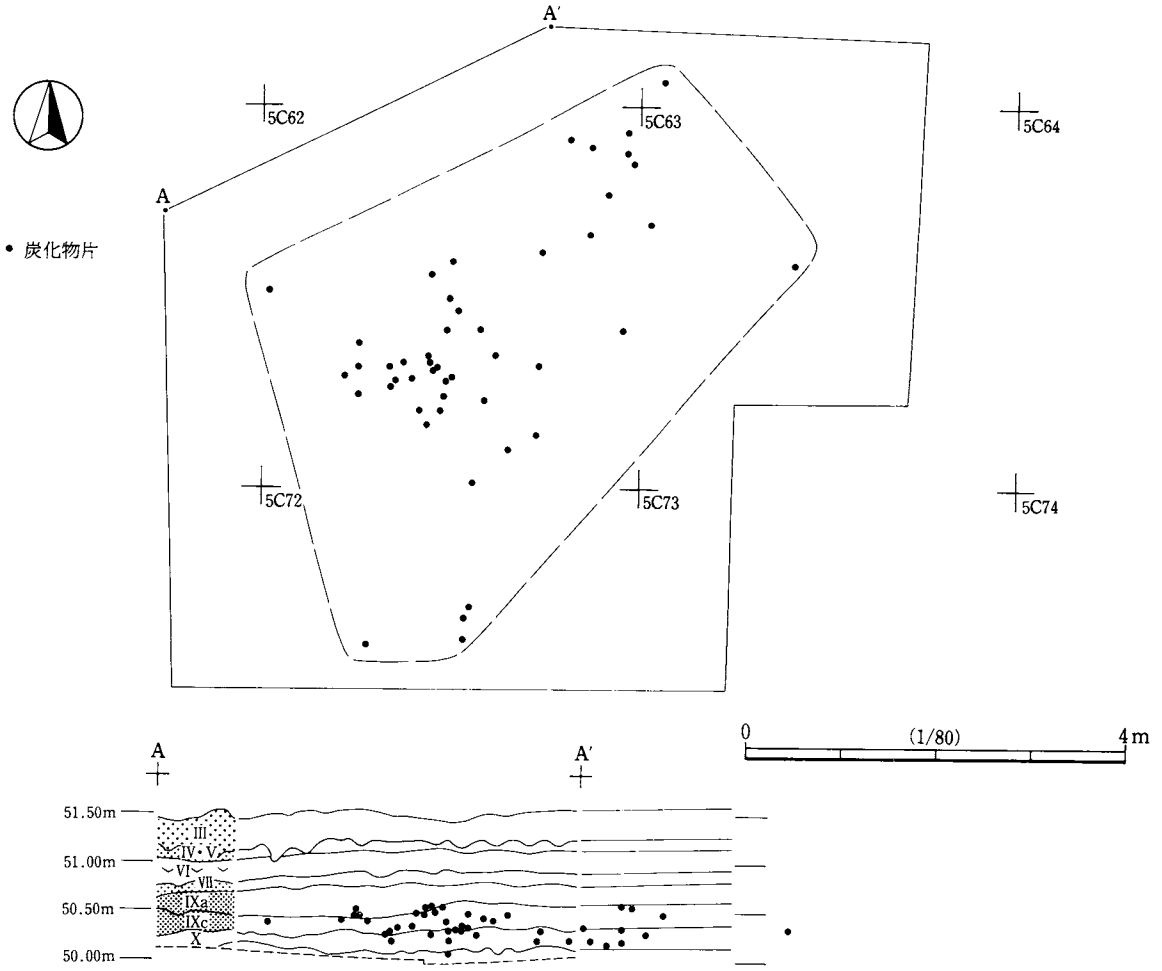
第１ブロック（第155～158図、第17表、図版42）

分布状況　調査区西側で調査されたブロックである。５Ｃグリッド南西側に位置しており、調査区の北方向から延びる舌状台地の先端部西側縁辺部に当たる。

遺物総数は26点である。分布は比較的まとまっている。ブロックの北東側と南西側にやや密集して分布し、他は散漫に分布する。５Ｃ－52・53グリッドから５Ｃ－62・63・72グリッドにかけて北東から南西方



第155図　第１ブロック器種別分布



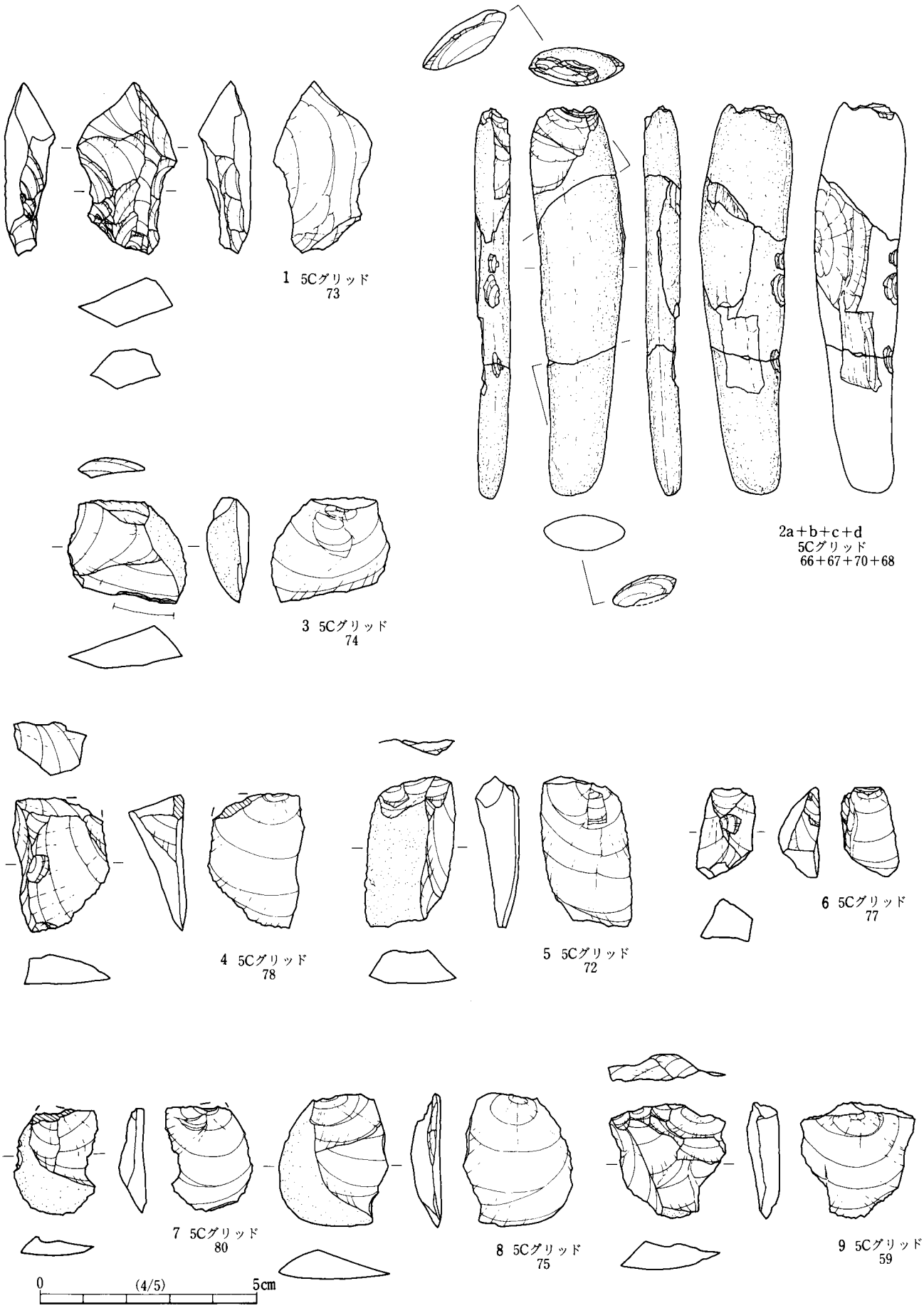
第156図　第１炭化物集中地点分布

向にやや長い楕円形状に分布する。分布範囲は南北6.1m、東西3.6mを測る。垂直分布ではおよそ0.8mの高低差がある。土層断面への投影では、X層からVI層下部にかけて分布し、IXａ層とIXｂ層の境界（IX層中位）に遺物集中がある。

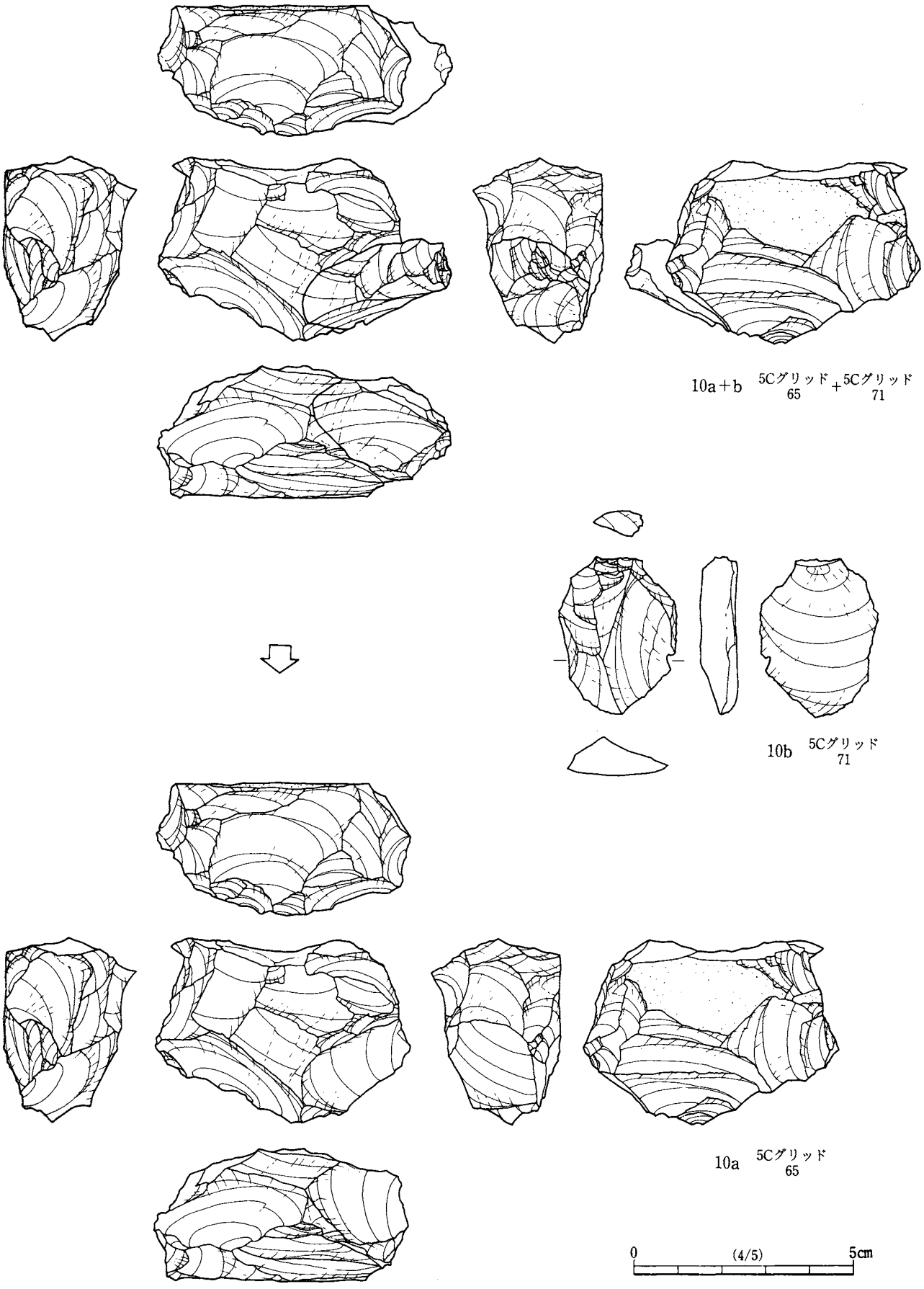
母岩別資料　16母岩が認められ、点数のまとまる母岩は流紋岩１の５点、粘板岩１の４点である。他の母岩は単独母岩あるいは２点ほどの点数構成となっている。流紋岩１・粘板岩１はブロック南西部の遺物の密集した範囲を中心に分布している。母岩と器種の関係は、流紋岩１から剥片が生産されている。また、台形石器はホルンフェルス１の単独母岩となっている。

出土遺物　中規模なブロックであるが、主要な器種は台形石器１点、敲石（ハンマー）１点、U剥片１点と少なく、礫主体のブロックである。

１は台形石器である。横長剥片を横位に用い、両側縁基部側に抉り込むような調整加工が施されている。先端両側縁に尖った刃部が見られ、いわゆる「ペン先タイプ」と呼ばれる形状を示す。２は敲石である。棒状ハンマーの形状を呈し、上端部に敲打による剥離が集中する。側縁にも疎らな敲打による小剥離が看取される。裏面右側縁の敲打により２ｄが剥がれ、その後３分割され最終的には４点に破損している。３はU剥片である。末端の鋭利な縁辺に刃こぼれ状の微細剥離痕が連続する。４～９は剥片である。４～８は縦長剥片で、４は流紋岩１を石材としている。９は安山岩Ａ１を石材とする横長剥片である。10ａ・ｂは流紋岩１を石材とする石核と剥片の接合資料である。正面向かって右側面からの剥離により10ｂが剥が



第157図　第1ブロック出土石器（1）



第158図　第１ブロック出土石器（２）

第17表　第1ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母岩
1	5C720056	礫	25.3	19.7	12.8	63.0														チャート4
2	5C720057	礫	13.7	6.5	3.5	0.3														砂岩1
3	5C636058	礫	13.0	14.0	9.7	2.5														チャート5
4	5C620059	剝片	25.7	26.3	7.1	4.2	9	2		○	○	3			1	105		F		安山岩A1
5	5C620060	礫	25.5	17.8	5.1	5.9														チャート6
6	5C620061	剝片	19.4	13.9	4.8	1.2		−		−		2						H		流紋岩1
7	5C620062	礫	26.0	14.9	3.7	5.5														チャート7
8	5C620063	礫	16.8	17.3	4.6	1.7														砂岩2
9	5C620065	石核	40.6	57.6	30.6	83.6	10a													流紋岩1
10	5C620066	棒状礫	37.8	23.6	10.3	9.3	2a													粘板岩1
11	5C620067	棒状礫	32.5	15.7	3.5	2.1	2b													粘板岩1
12	5C620068	棒状礫	41.5	19.4	8.5	9.6	2d													粘板岩1
13	5C620069	砕片	6.2	7.4	1.3	0.1														流紋岩1
14	5C620070	棒状礫	50.4	23.3	8.7	14.8	2c													粘板岩1
15	5C620071	剝片	35.2	26.9	8.3	8.4	10b	H		○		4		2	2	100		H		流紋岩1
16	5C620072	剝片	33.7	20.7	10.0	6.5	5	H		○	○	1		2		64		S		安山岩A1
17	5C620073	台形石器	39.2	22.6	12.1	6.7	1													ホルンフェルス1
18	5C620074	U剝片	23.6	26.8	19.5	6.1	3	H			○	2			1	136	B	F		安山岩B1
19	5C520075	剝片	29.8	15.1	6.8	4.0	8	L		○		2						F		安山岩B1
20	5C630077	剝片	20.1	13.0	19.4	2.2	6	L				3	2							チャート1
21	5C630078	剝片	30.1	22.0	12.7	6.5	4	H				1	1	2	2	73		F		流紋岩1
22	5C630079	礫	14.6	11.7	6.0	1.4														珪質頁岩1
23	5C630080	U剝片	23.6	19.4	5.9	2.0	7	−	−	−		2						S		粘板岩2
24	5C530081	礫	62.6	42.8	31.3	79.8														石英斑岩1
25	5C620082	礫	17.8	15.1	5.9	1.5														チャート2
26	5C620083	礫	16.2	12.7	4.0	1.2														チャート3

されている。10aの石核は90度を基調とする打面転移が認められる。

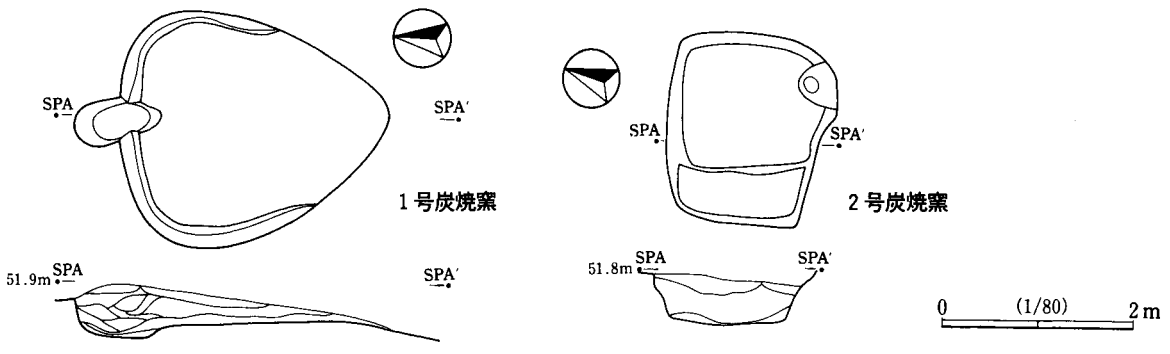
第1炭化物集中地点（第156図）

分布状況　第1ブロックと同一の地点で検出された炭化物集中地点である。5Cグリッド南西側に位置している。5㎜以上の比較的大きな炭化物片をドット調査したが、ドッティング数は46点を数える。分布は第1ブロックとほぼ重複するように集中するが、南西側の密集度が第1ブロックよりさらに高くなっている。分布範囲は南北5.8m、東西5.6mを測る。垂直分布は0.5mの高低差がある。土層断面への投影では、X層からIX層にかけて分布し、X層とIXc層の境界に集中がみられ、第1ブロックの垂直分布の下限に沿うように垂直分布の集中が認められる。

遺構

1号炭焼窯（第159図）

本遺構は、5C−75グリッド付近に位置する。規模は3.1m×2.5mで、丸みを帯びた三角形を呈する。掘り込みの深さは最大で0.6mを測り、底面はほぼ平坦になっている。炭焼窯の煙道は北を向いており、窯



第159図　炭焼窯

全体も北向きに作られたものである。覆土は、大きく分けると上から粘土層、焼土層、炭化物層となっており、粘土を固めて窯を作り、何度か炭焼きを行ったことがわかる。形態的に見て、時期的に新しいものとみられる。

2号炭焼窯（第159図、図版31）

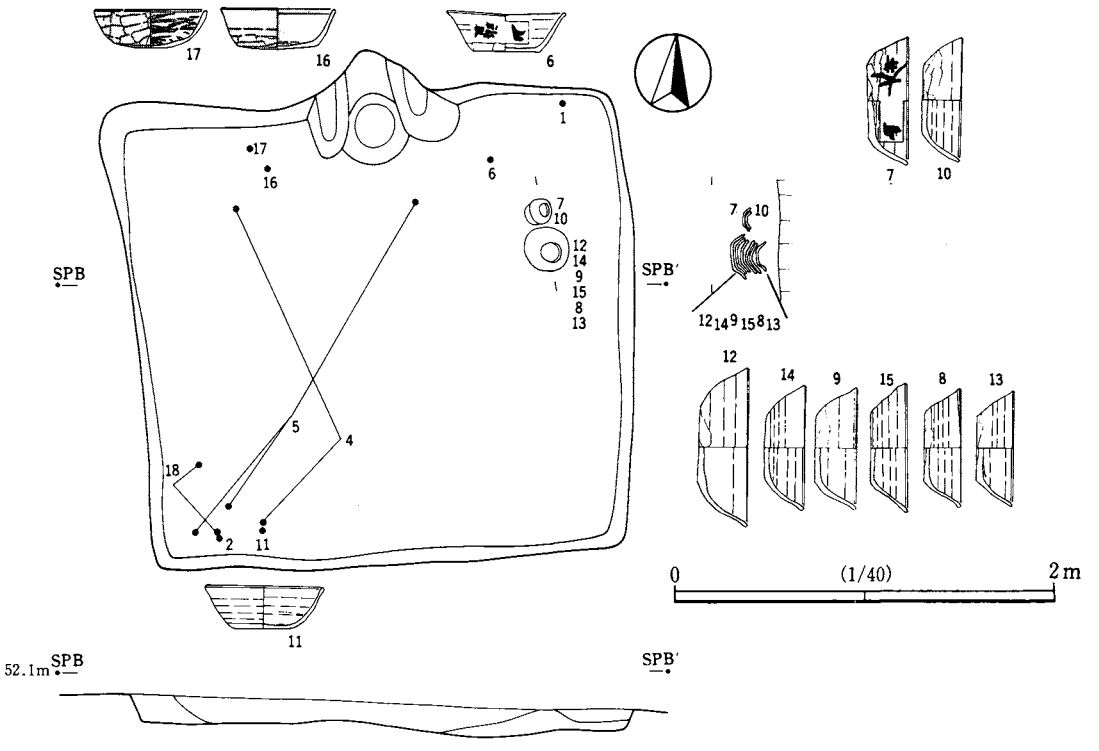
本遺構は、5D－52グリッド付近に位置する。規模は2.2m×2mで、隅丸長方形を呈する。掘り込みの深さは約0.5mで、底面はほぼ平坦であり、底面に近い層から炭化物と焼土を多く検出した。

1号住居跡（第160～162図、図版31・67・68）

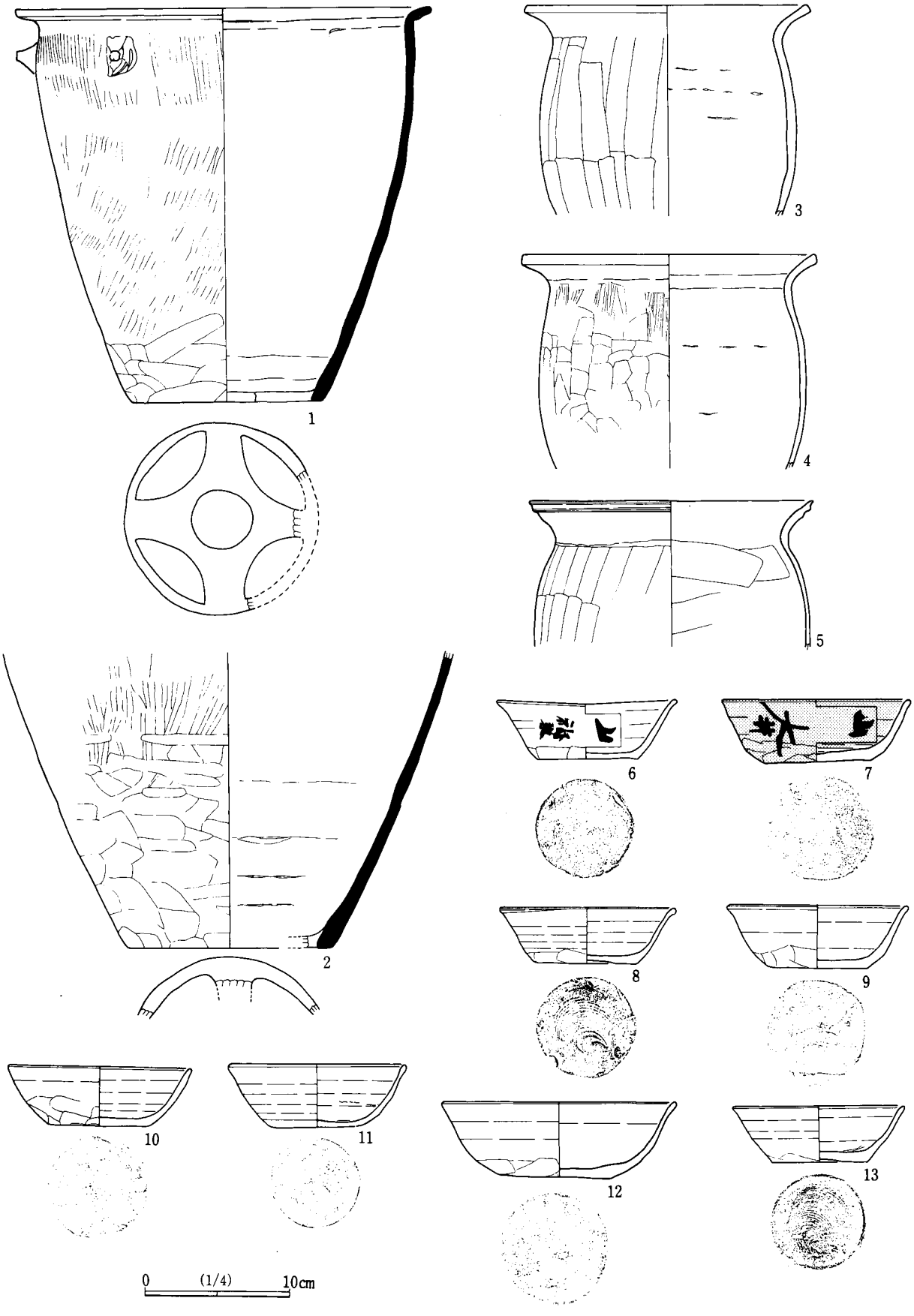
本遺跡内唯一の住居跡である。調査区の中央やや東側の5D－32グリッド付近に位置し、狭い台地上の南端に位置する住居跡である。主軸をほぼ真北に向け、形態は隅丸方形、規模は2.5m×2.6mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、掘り込みは浅く深さは最大で0.2mしかない。床面は堅緻に踏み固められており、壁溝は存在しない。柱穴、貯蔵穴、梯子穴等の掘り込みは確認できなかった。北辺の中央にカマドが検出され、浅く遺存が悪い中では白色粘土による袖が確認できた。火床はよく焼けており、焼土、灰も多く含まれていた。

遺物は浅い遺構の割には遺物の遺存が非常に多く、ここでも多くの遺物を図示できる。特に住居跡東側カマド寄りから多くの杯が2列に逆位に重ねられて出土している。北側は7・10の2枚が、南側は床面からみると13・8・15・9・14・12の6枚が重ねられていた。杯の収納を示すものと考えられようか。

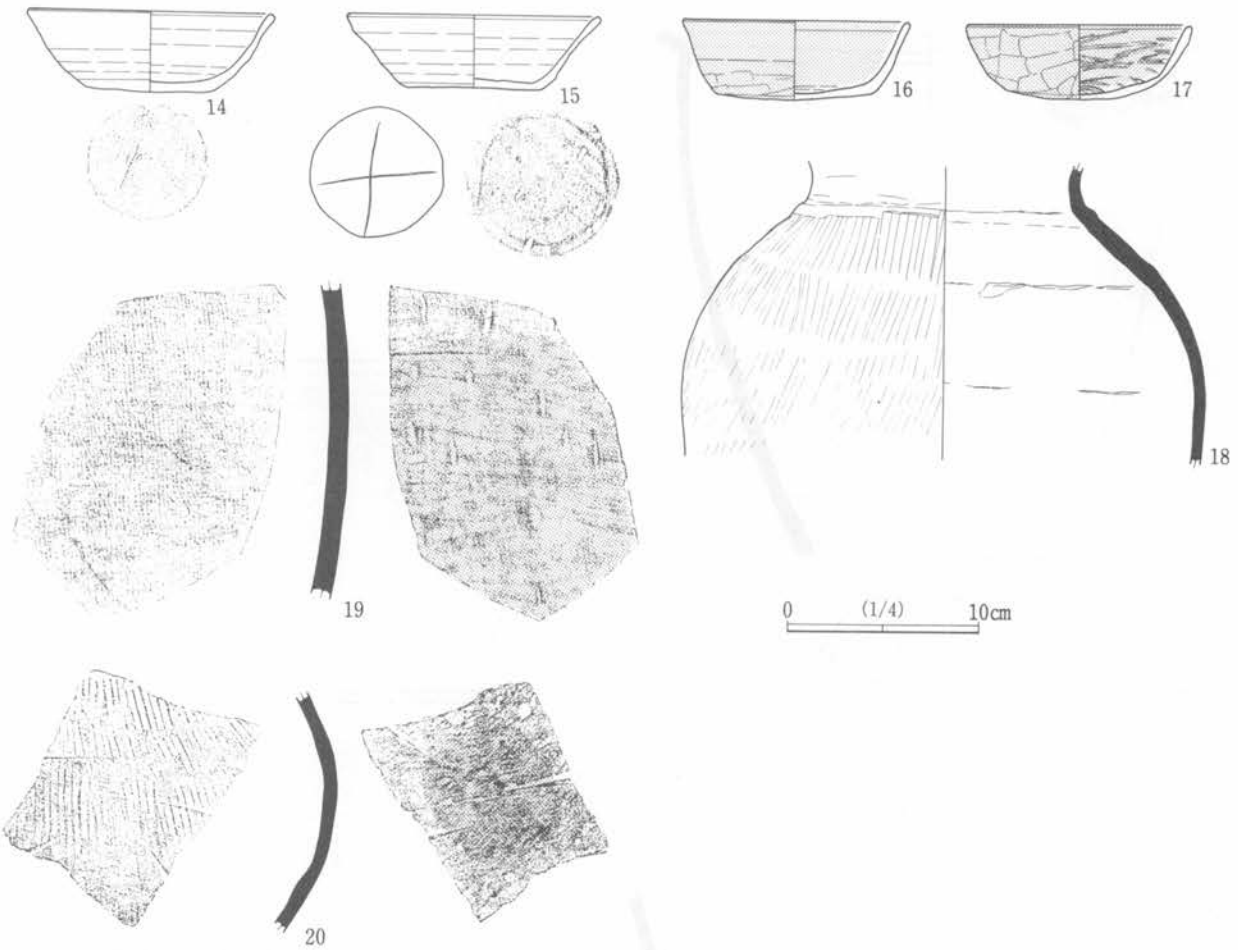
1は須恵器の甑である。口径28.8cm、底径13.2cm、器高27.4cmを測る。外面はタタキ目後ナデ、底部近くはヘラケズリ、内面はナデが施される。底部はスノコ状に切り抜かれ、中心1孔、半月形に4孔の刳り抜きによって穿孔している。胴部最大径は26.0cmで、両端に各1個の突起状のつまみが張り付けられている。2も須恵器の甑で、焼成は不良でだいぶ赤褐色である。破片ながら1よりも大形のものである。底径



第160図　1号住居跡



第161図　1号住居跡出土遺物（1）



第162図　1号住居跡出土遺物（2）

14.2cmを測り、胴上部は粗いタタキ目後ナデ、底部近くはヘラケズリ、内面はヘラケズリ後ナデが施される。底部の穿孔は1と同様と思われる。3・4・5は土師器の甕である。3は口径19.6cmを測り、口縁はナデ、胴部はヘラケズリが施される。4は口径20.3cmを測り、口縁部はナデ、胴部はヘラケズリが施される。5は口径19.6cmを測り、口縁部外面の口唇部近くはナデによる突帯状の稜が認められる。胴部はヘラケズリが施される。

6・7は墨書のある杯で、6は口径12.2cm、底径7.0cm、器高4.1cmを測る。ロクロ成形で、底部は回転切り離し後ヘラケズリ、内面はナデ、外面は底部近くはヘラケズリが施される。体部に右から左に縦書きで墨書が施され、やや墨痕が薄く、「山福□」の3字分が認められる。1字目の「山」は7のものに似ており、下の文字より太く記号的なものかもしれない。下の2文字もよく判読できない。7は口径12.9cm、底径7.4cm、器高4.4cmを測り、ロクロ成形で内面はナデ、底部は切り離し後ヘラケズリ、外面は底部近くがヘラケズリが施される。内外面共に赤色塗彩が施される。体部には右から左に向かって縦書きで「山　大井」と明瞭な墨書で3文字が認められる。1文字目の「山」は6のものに似ておりやや記号的な筆跡である。次に文字間をだいぶあけて「大井」と二文字書かれるが、「大」は大書きされそのはねとはらいの間に「井」が収められている。6・7共に共通する書式と見られ、1文字目と2・3文字目との筆法、筆勢が違うようで1文字目は記号、2・3文字目は文字とみるか、両者は筆者が異なるのはわからない。

8～17は土師器の杯で、8は口径11.9cm、底径7.0cm、器高3.9cmを測る。ロクロ成形で、内面はナデ、

底部は回転糸切り後周縁をヘラケズリ、体下部はヘラケズリが施される。9は口径12.3cm、底径6.8cm、器高4.3cmを測り、ロクロ成形で、底部は切り離し後ヘラケズリ、体下部はヘラケズリがなされる。口縁部に一部被熱した部分がみられる。10は口径12.6cm、底径7.1cm、器高4.1cmを測る。内面はナデ、外面上部はナデ、下部はヘラケズリ、底部はヘラケズリが施される。外面一部に被熱が認められる。11は口径12.1cm、底径6.4cm、器高4.4cmを測る。ロクロ成形で底部は切り離し後ヘラケズリ、内面はナデ、外面下部はヘラケズリが施される。12は口径16.0cm、底径7.7cm、器高5.3cmを測る大形の杯である。内面はナデ後ミガキ、外面は上部がナデ、下部はヘラケズリ、底部は切り離し後ヘラケズリが施される。器表が磨耗している。13は口径11.8cm、底径6.6cm、器高3.9cmを測る。ロクロ成形で、底部は回転糸切り後周縁部をヘラケズリ、内面はナデ、外面下部はヘラケズリが施される。14は口径12.6cm、底径6.6cm、器高4.3cmを測る。ロクロ成形で底部は切り離し後回転ヘラケズリ、内面はナデ、外面下部はヘラケズリが施される。15は口径13.0cm、底径7.0cm、器高3.9cmを測り、ロクロ成形で、内面はナデ、外面下部はヘラケズリが施される。底部は切り離し後ヘラケズリがみられ、ヘラによる細い十字に交差する線刻が認められる。16・17は内外面赤色塗彩された土師器の杯である。16は口径11.6cm、底径8.2cm、器高4.2cmを測り、ロクロ成形で、底部は切り離し後ヘラケズリ、外面上部はナデ、下部はヘラケズリ、内面はナデが施される。底部は緩く上反し平坦ではない。内外面共に赤色塗彩され、内面には油煙の付着が認められ灯明皿として使用されたことが窺える。17は口径11.5cm、底径7.5cm、器高3.9cmを測り、底部と体部の境界が不明瞭で底部が緩く上反している。底部はヘラケズリ、体部はヘラケズリ後ナデ、口唇部はナデ、内面はヘラミガキが施される。16同様に内外面共に赤色塗彩され、更に内面の口唇部に油煙の付着が認められ灯明皿としての使用が窺われる。18は須恵器の甕の胴部の破片である。最大径27.5cmを測る。焼成が悪く外面はタタキ目後粗いナデ、内面はタタキ後ナデ、口縁部はナデが施される。火熱を受けて器表が一部剥離している。19・20は須恵器の破片を利用した転用硯である。19は大甕の破片で破片はかなり平坦である。外面は細かいタタキ目、内面はほぼ全面にわたって硯として使用され、磨耗によって平滑になっている。20はやや小型の甕の破片で、外面はタタキ目、内面は中央部分が硯としての使用によって平滑になっている。火熱を受け器表が荒れている。

遺物

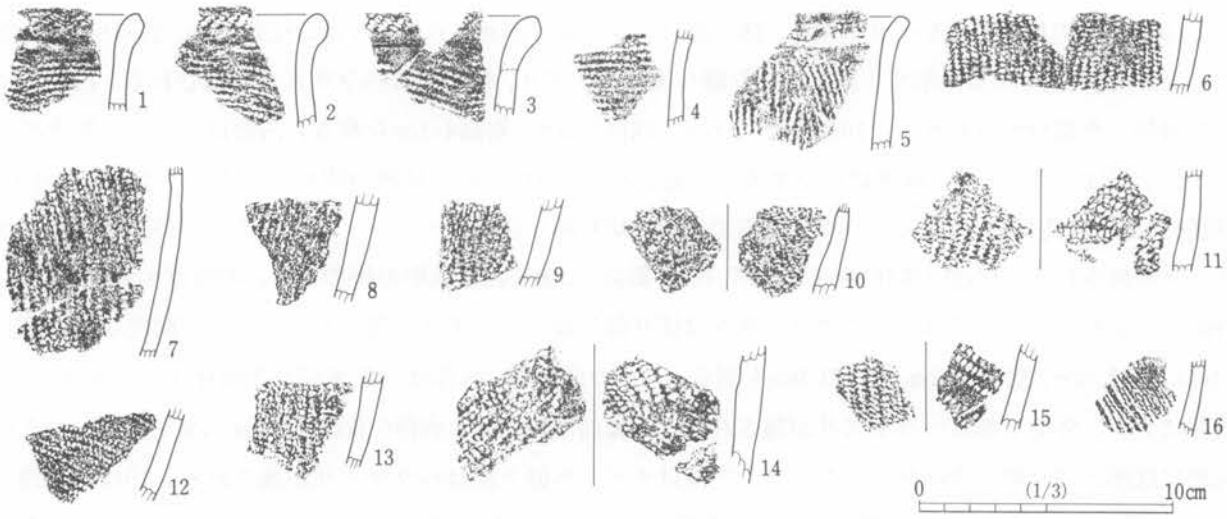
縄文土器（第163図、図版63）

全部で30点弱出土している。すべてグリッド出土で遺構出土のものはない。

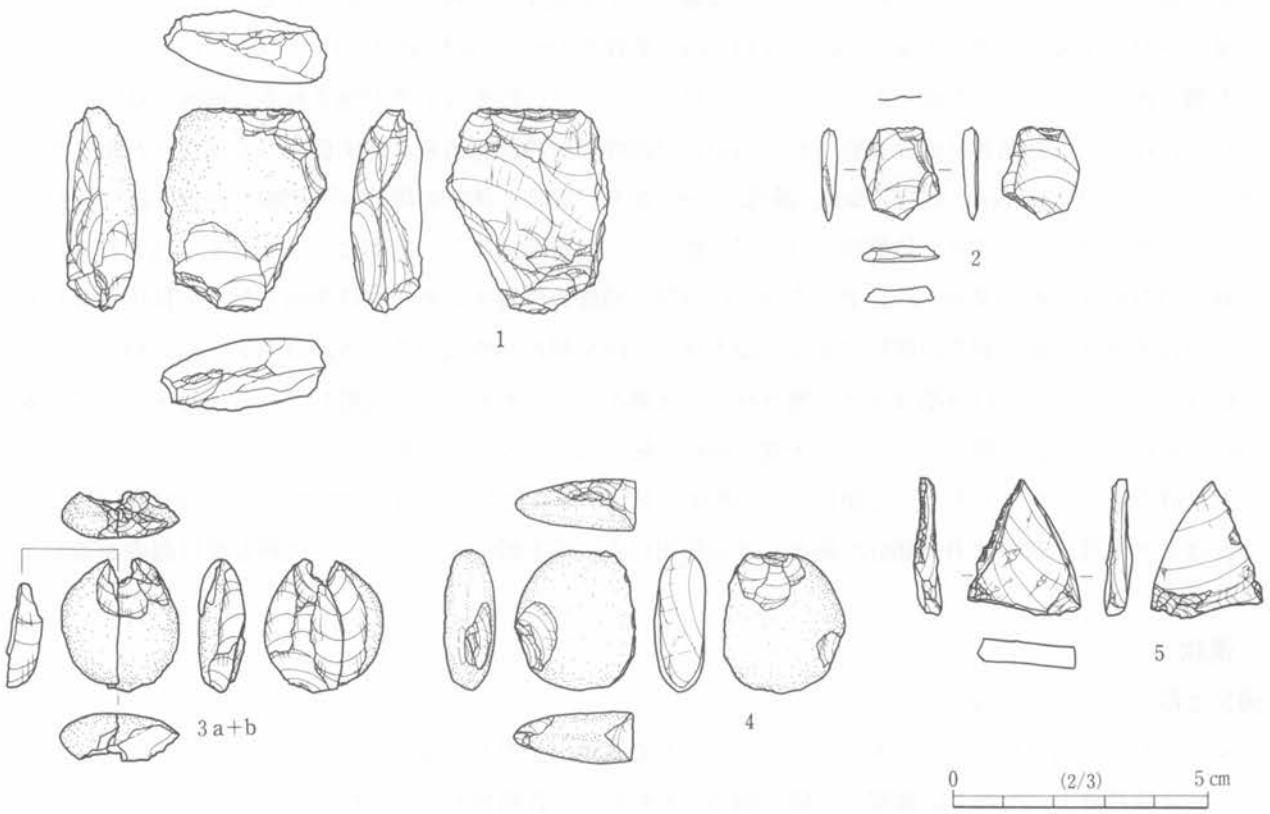
1～3は井草Ⅰ式土器の口縁部で、同一個体と思われる。乳褐色を呈し、粒子はやや粗く砂っぽい。大きく外反する口唇部外側に *l* 原体を圧痕し、口唇直下で横方向に施文される。4も同一個体の口縁部付近であるが、口唇部が欠損しているものである。5は井草Ⅱ式の口縁部である。口唇直下より縦方向に縄文が施工される。6～15は井草式に属すると思われる胴部破片である。10、11、14、15は内面にも施文されるもので、10、11、15は外面縦位、内面斜位に施文され、14は外面斜位、内面縦位に施文される。16は夏島式土器の胴部破片である。

縄文時代以降石器（第164・165図、第18表、図版45）

本遺跡より出土した石器はごくわずかである。石器総点数は53点を数える。器種組成は楔形石器5点、R剥片1点、磨製石斧1点、磨石3点、剥片7点、礫36点である。特徴的な分布状況は認められないが、チャートを素材とする楔形石器はすべて5Cグリッドより検出されている。



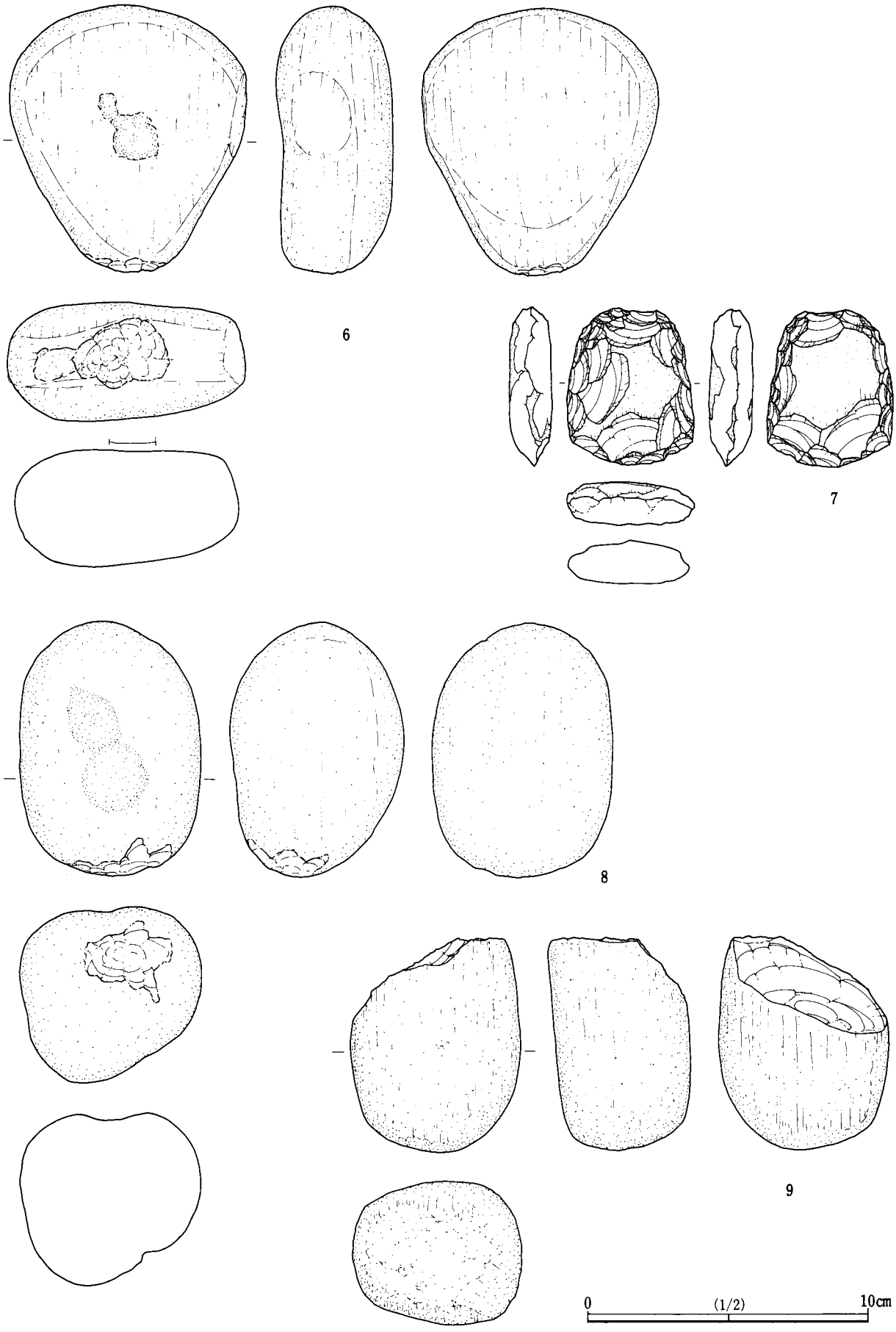
第163図　縄文土器



第164図　縄文時代石器（1）

1～4は楔形石器である。1は大形のもので、上端部は線状となり、下端部が点状に近くなる。裏面には上下端部からの階段状剝離が顕著である。2は小形のもので、上下端部からの微細な階段状剝離が認められる。表面右側縁にも微細階段状剝離が看取される。3は小惰円礫を素材とする楔形石器の接合資料である。素材の上下端部からの両極技法により2個体に分割される。裏面の剝離痕から先行する数回の加撃が看取される。4も小惰円礫を素材とするものである。上端部裏面階段状剝離痕が顕著であるが、さらに横位からの両極剝離が認められる。5はR剝片である。三角形状に折断された素材の背面右側縁及び裏面下端部に微細な調整加工が見られる。R剝片としたが石鏃未成品の可能性もある。

7は打製石斧である。偏平な楕円礫の表裏に礫面を残しながら、周縁に調整を施している。礫面には光



第165図　縄文時代石器（2）

第18表　縄文時代石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号	No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号
1	楔形石器	メノウ	39.6	32.0	14.0	18.8	5Cグリッド45	6	磨石	砂岩	96.0	84.9	42.0	494.0	表採
2	楔形石器	頁岩	18.3	15.0	2.9	1.0	5Cグリッド	7	打製石斧	粘板岩	55.3	45.4	15.3	56.6	表採
3	楔形石器	チャート	25.5	23.0	9.0	6.1	5Cグリッド34+39	8	磨石	安山岩	89.9	64.9	61.9	472.0	5Cグリッド13
4	楔形石器	凝灰岩	27.0	23.8	9.9	9.2	5Cグリッド6	9	磨石	磨石	75.2	61.3	50.3	346.0	5Cグリッド49
5	R剥片	黒曜石	26.8	22.6	15.7	2.7	5Cグリッド41								

沢痕が観察されるが、おそらくは柄との装着に伴うものと考える。

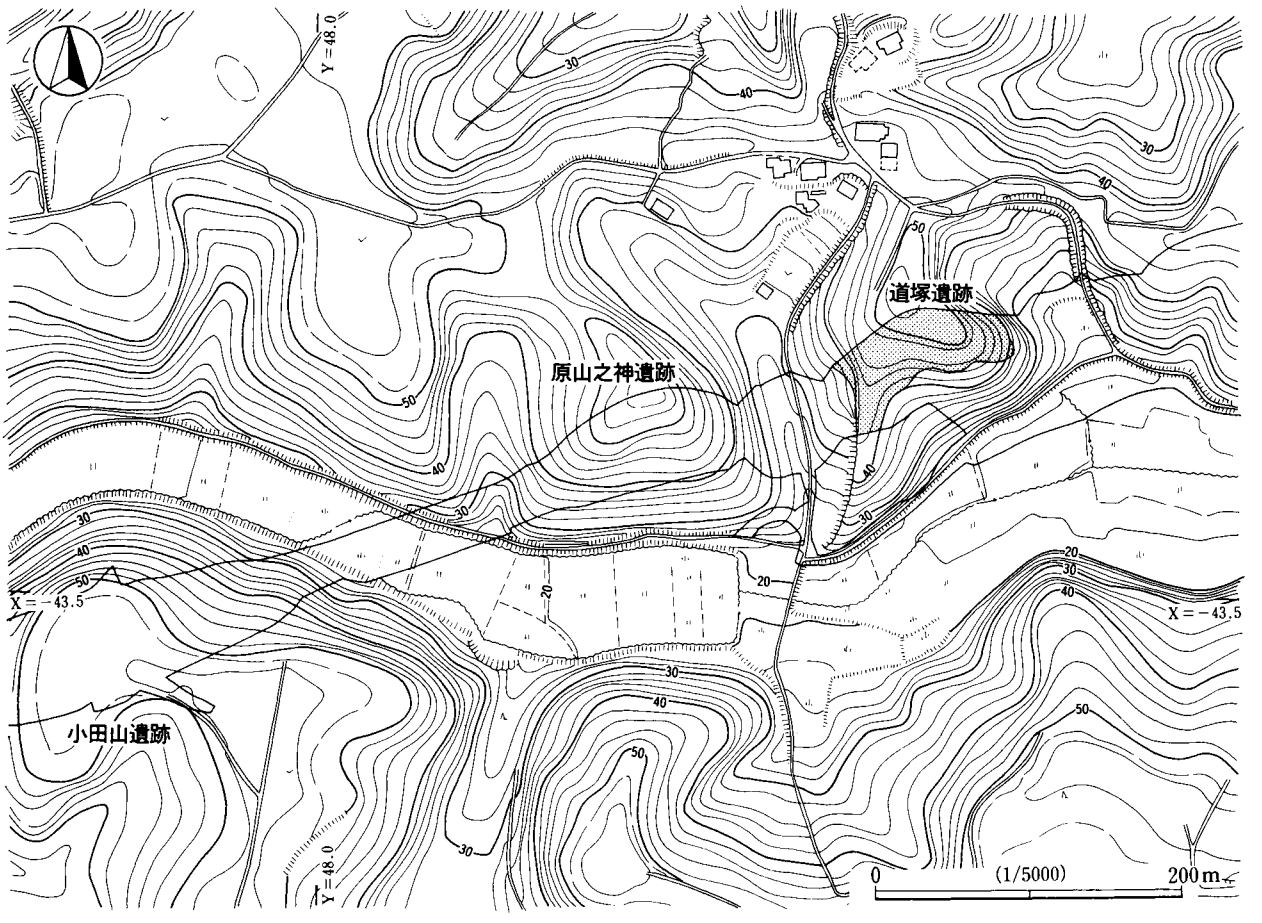
6・8・9は磨石である。6は全面が擦り面となっている磨石で、表面に窪みが1か所とやや尖った下端部に敲打痕が認められる。凹石と敲石の機能を合わせ持ったものである。8も同様のものであるが、やや厚味があり表面の窪みは2か所認められる。9は上端部を欠損するが、擦り面だけで構成される。

XIV　道塚遺跡

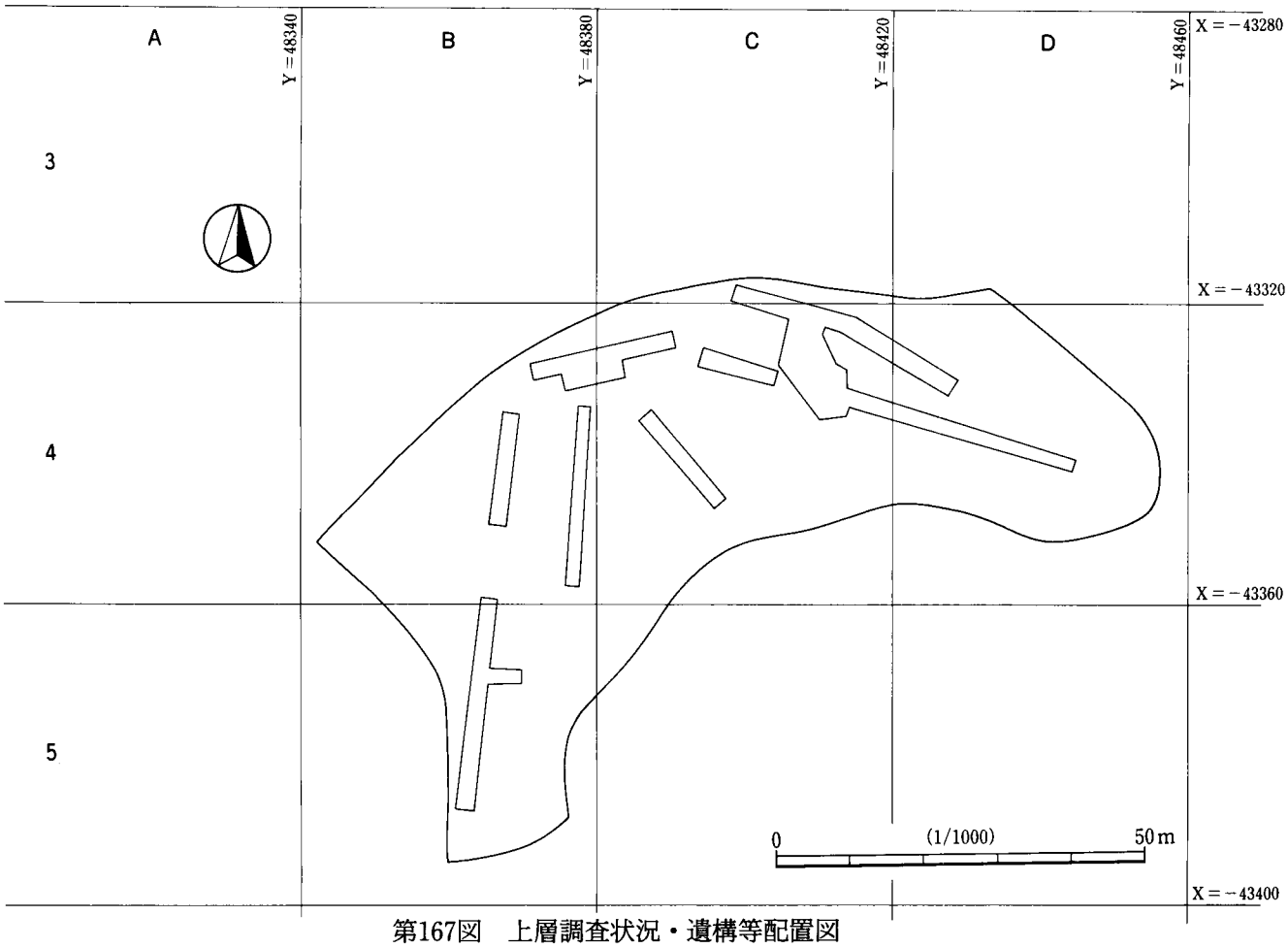
1　遺跡の概要（第166～168図）

本遺跡は、山武郡山武町森字道塚244-1他に位置する。調査対象面積は4,000㎡で、上層の確認調査を10％の面積にあたる400㎡で実施したところ、確認グリッド1か所において縄文時代早期遺物包含層を検出した。そこで、周囲を拡張し遺物包含層の範囲を確認した結果、広がりはあまり大きくならなかったが、縄文時代早期の土器の他に石器を検出することができた。他のグリッドからは、奈良・平安時代の須恵器を少量検出したが、分布が希薄であり遺構等も検出されなかったので、本調査を実施することはしなかった。その後行った下層の確認調査においては、4％の面積にあたる160㎡で調査したところ1か所で旧石器時代石器を検出したので、周囲を拡張したが他に遺物は検出されなかった。そのため本遺跡では、上層・下層とも確認調査のみで本調査は実施されなかった。調査期間は平成6年4月6日から平成6年5月20日までであった。

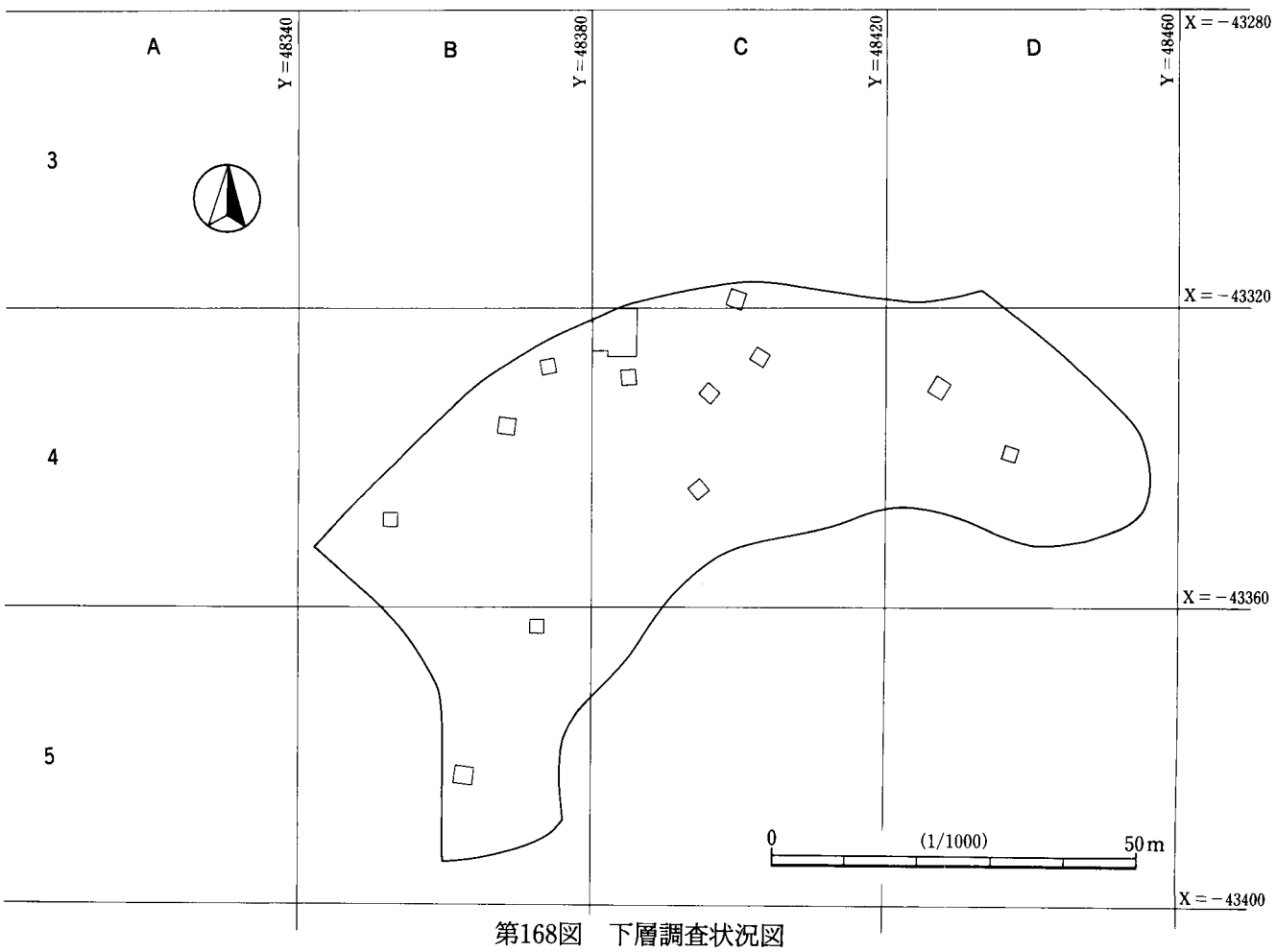
遺跡は、九十九里平野を経て、太平洋に流入する作田川によって開析された作田川谷の中流部から南に入り込む城府支谷の先端部に位置し、下総台地の東端にあたる極楽寺台がその北部で枝分かれして形成した雨坪支台と森支台の付け根に位置する。前述の原山之神遺跡より北東百数十mの地点に位置するが、間



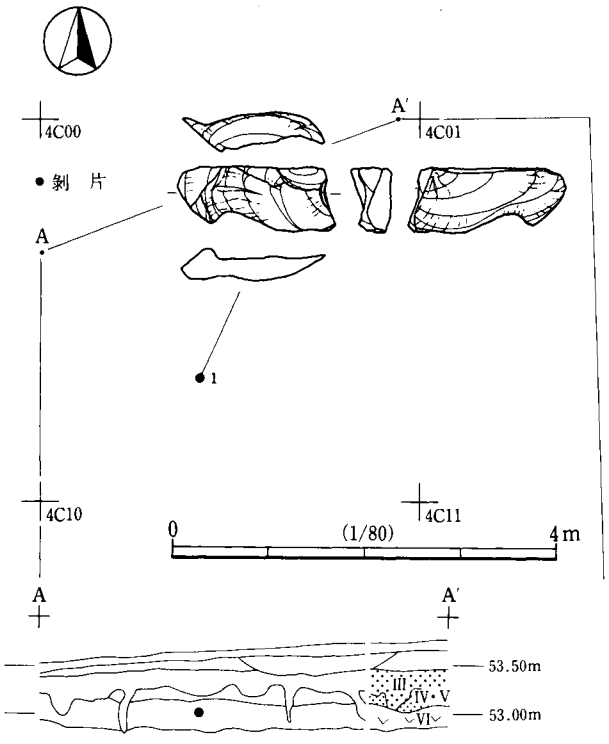
第166図　道塚遺跡周辺地形図



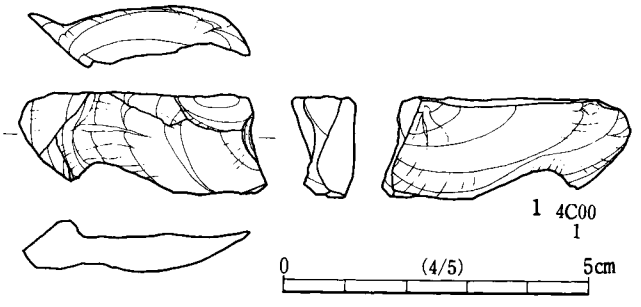
第167図　上層調査状況・遺構等配置図



第168図　下層調査状況図



第169図　単独石器出土状況



第170図　単独出土石器

第19表　単独出土石器属性表

番号	遺物番号	器　種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母　岩
1	4C00－1	剥片	16.5	40.5	10.2	5.5	1	H				1		3				H		ホルンフェルス1

には小さな谷が入り込んでいる。調査範囲は、遺跡の南側であり斜面上の台地である。標高は51mで、谷部の水田面との比高は34mを測る。

2　検出した遺構・遺物

旧石器時代

確認調査で調査区の立川ローム層のVI層より１点石器が検出され、拡張して調査を行ったが、他に遺物は検出されず単独出土であった。これを単独出土石器としてここで扱う。

単独出土石器（第169・170図、第19表）

分布状況　調査区北西側で調査されたブロックである。４Ｃグリッド北西隅に位置しており、調査区の北方向から延びる台地先端部が独立丘状になった部分の頂部に当たる。

遺物総数は１点である。４Ｃ－00グリッドに分布する。土層断面への投影では、VI層上部に投影される。

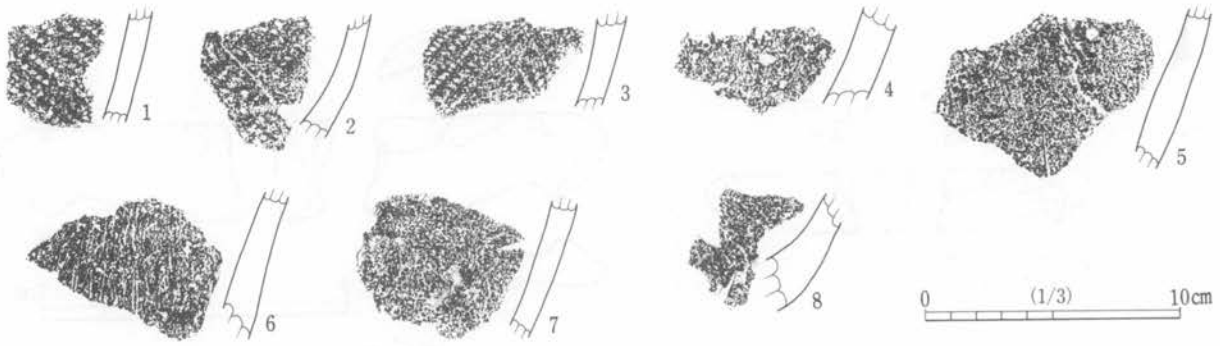
出土遺物　１はホルンフェルスを石材とする剥片である。幅広な平坦打面をもつ横長剥片である。背面構成から90度打面を移動した剥片剥離が想定される。

遺物

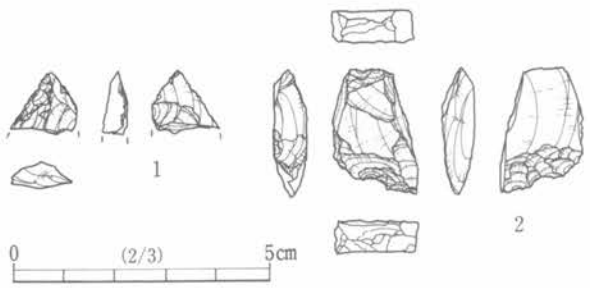
縄文土器（第171図、図版63）

全部で10点の遺物が出土している。すべてグリッド出土であり、遺構出土のものはない。

１～８はいずれも花輪台式に属すると考えられるもので、胎土は粒子がやや粗く、器表面の摩耗も目立



第171図　縄文土器



第172図　縄文時代石器

第20表　縄文時代石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号	No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号
1	石鏃	黒曜石	11.8	13.0	4.6	0.4	東斜面7	2	楔形石器	黒曜石	24.2	16.5	6.2	2.9	東斜面8

つ。1～3は縄文が施されるもので、3は羽状縄文である。4～8は無文土器である。いずれも縦方向のヘラケズリが顕著である。

縄文時代以降石器（第172図、第20表、図版64）

本遺跡より出土した石器はわずかで、総点数は9点を数える。器種組成は石鏃1点、楔形石器1点、剝片3点、礫4点である。

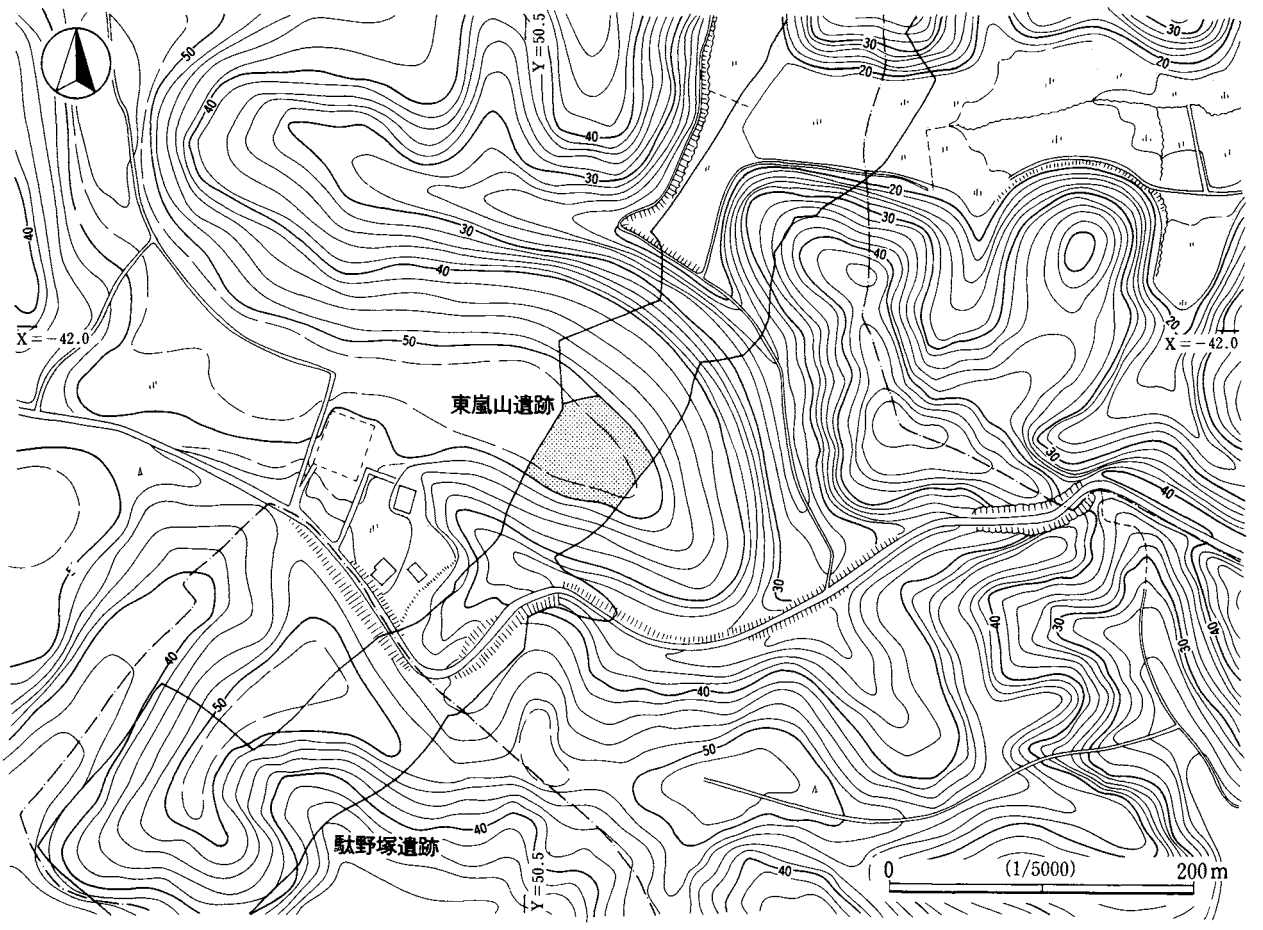
1は石鏃である。1は石鏃先端部片と思われる。形状は不明であるが、裏面に調整があまり及んでいないことから石鏃未成品かもしれない。2は楔形石器である。素材を切断した後、素材の両側縁を上下端部に設定して、両極技法が行われ、階段状剝離痕が顕著である。上下端部とも打点部は線状になるが、下端部の形状は抉入するように斜めになる。

ＸＶ　東嵐山遺跡

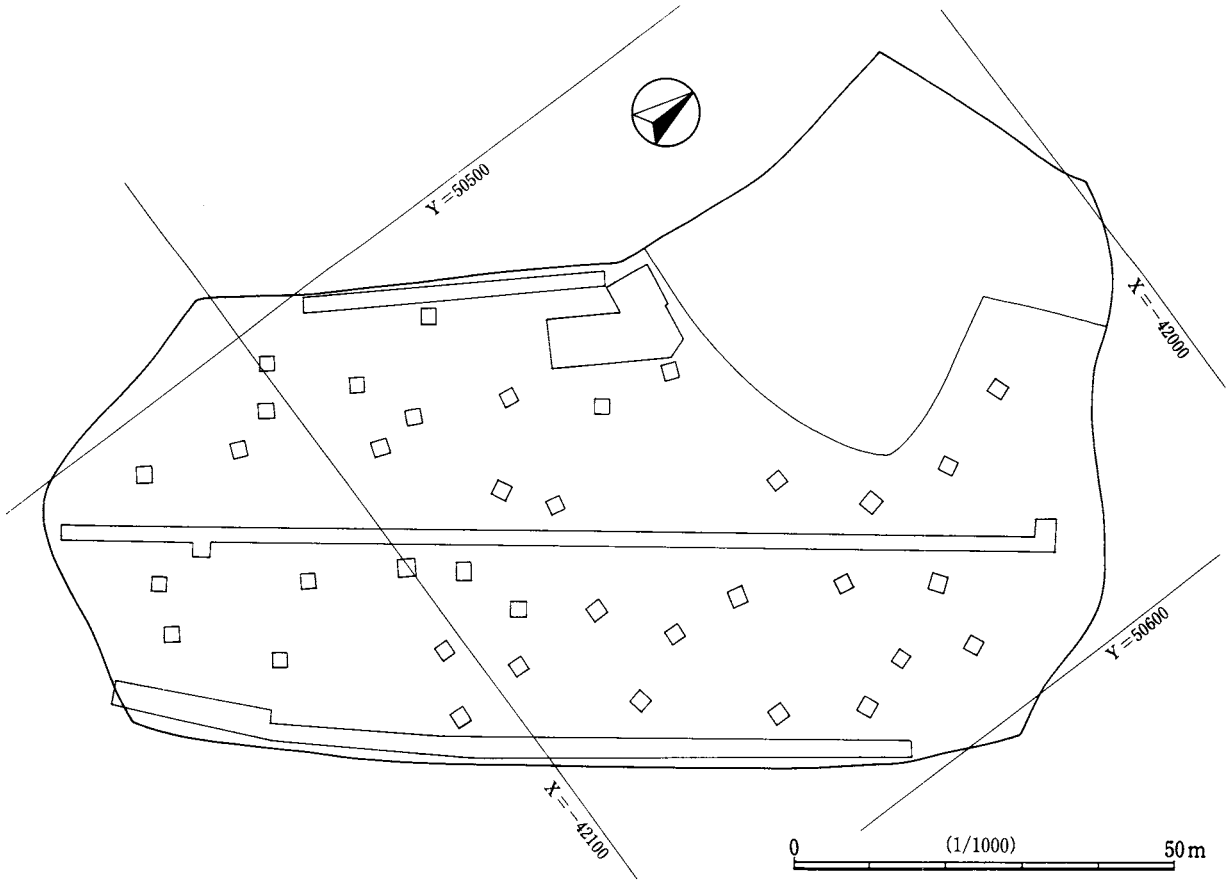
1　遺跡の概要（第173～175図、図版32）

本遺跡は、山武郡山武町椎崎字東嵐山1,585他に位置する。調査対象面積は5,800㎡で、確認調査は現地が山林であったため、調査範囲をほぼ東西に横切る３本の長いトレンチを設定し、残りの範囲は調査範囲に平均してグリッドをもうけて調査を行った。上層の確認調査を10％の面積にあたる580㎡で実施したところ、調査範囲の東北部にあるグリッド１か所より土師器・須恵器を検出したので、拡張して精査したが他に遺物や遺構は検出されなかった。それ以外のところでは遺構は検出されず、遺物の分布も希薄であったため本調査を実施することはしなかった。その後行った下層の確認調査においては、２％の面積で調査したところ、１か所で旧石器時代石器を検出した。周囲を拡張して精査したが他に遺物は検出されなかった。そのため、本遺跡の調査は確認調査をもって終了した。調査期間は平成５年５月６日から平成５年６月30日までであった。

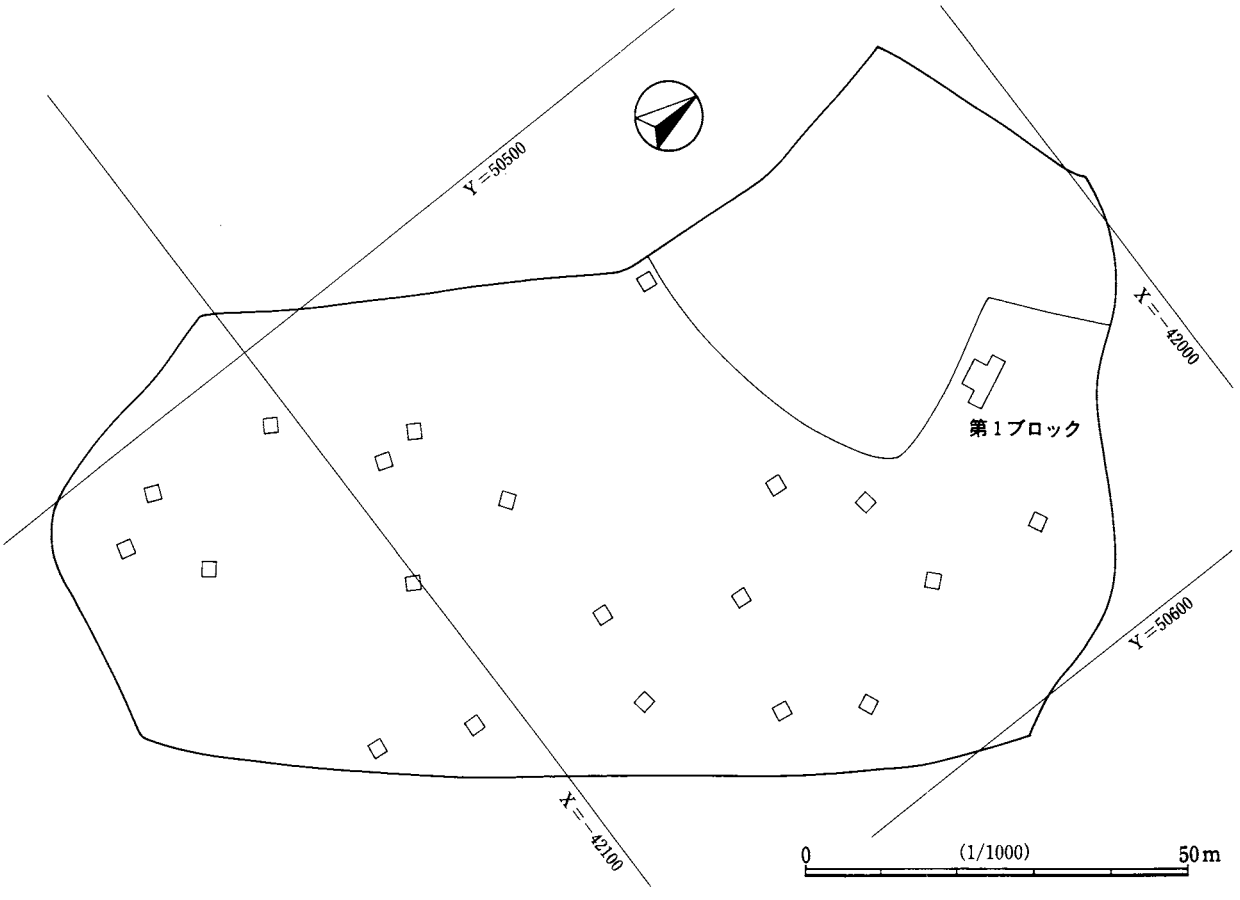
遺跡は、九十九里平野を経て、太平洋に流入する作田川によって開析された作田川谷の右岸に開けた板附支谷の奥に位置し、作田川の開析した作田川谷と境川谷にはさまれて形成された椎崎台の東端にある板附支台と津辺支台の付け根に位置している。本遺跡の周辺では、小さな谷と尾根が入り組んでおり、遺跡はその尾根上に開けた台地となっており、調査範囲はこの台地の北東側の斜面際となっている。標高は50ｍで、最も傾斜のある北斜面下の荒蕪地との比高は30ｍを測る。



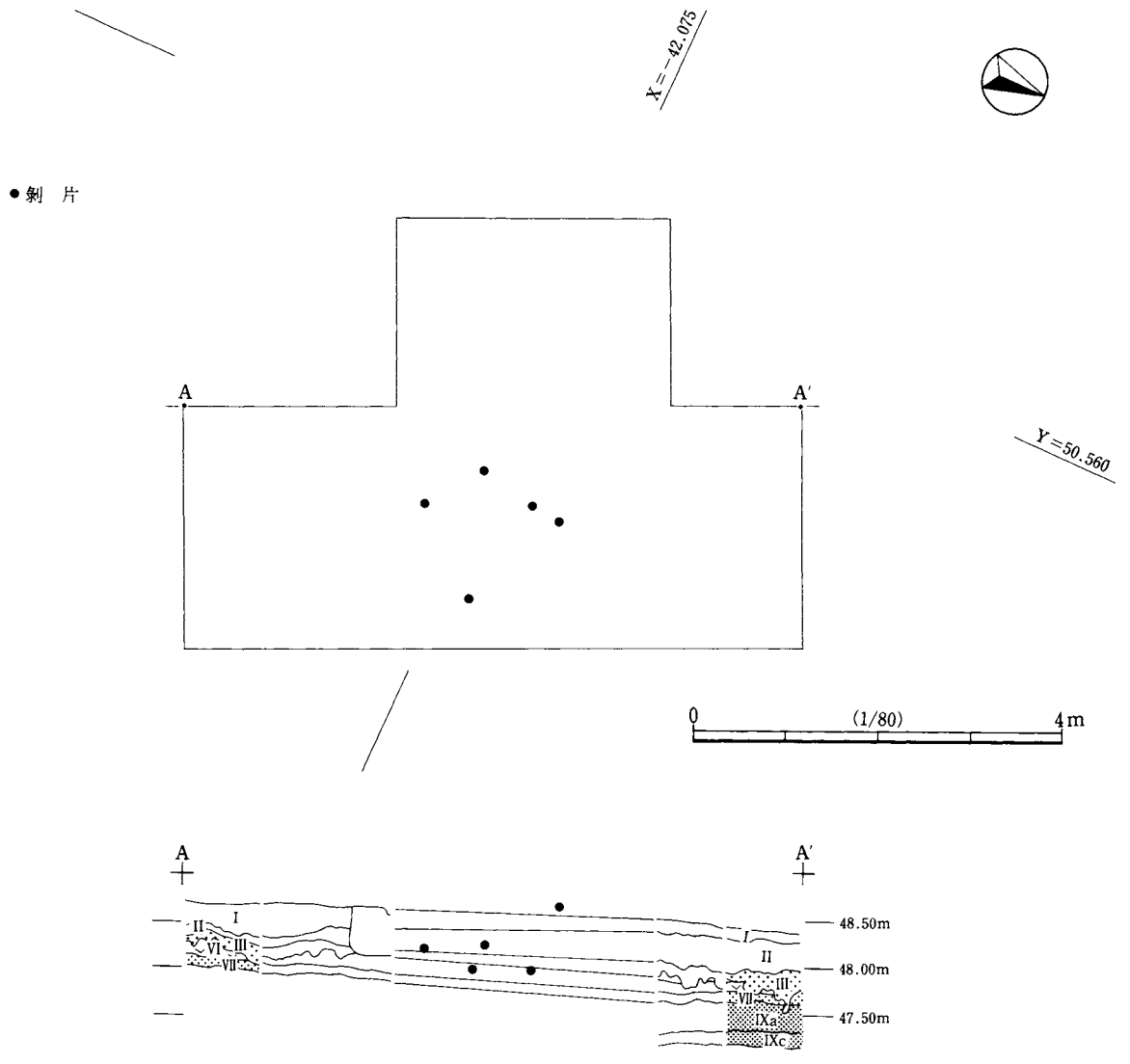
第173図　東嵐山遺跡周辺地形図



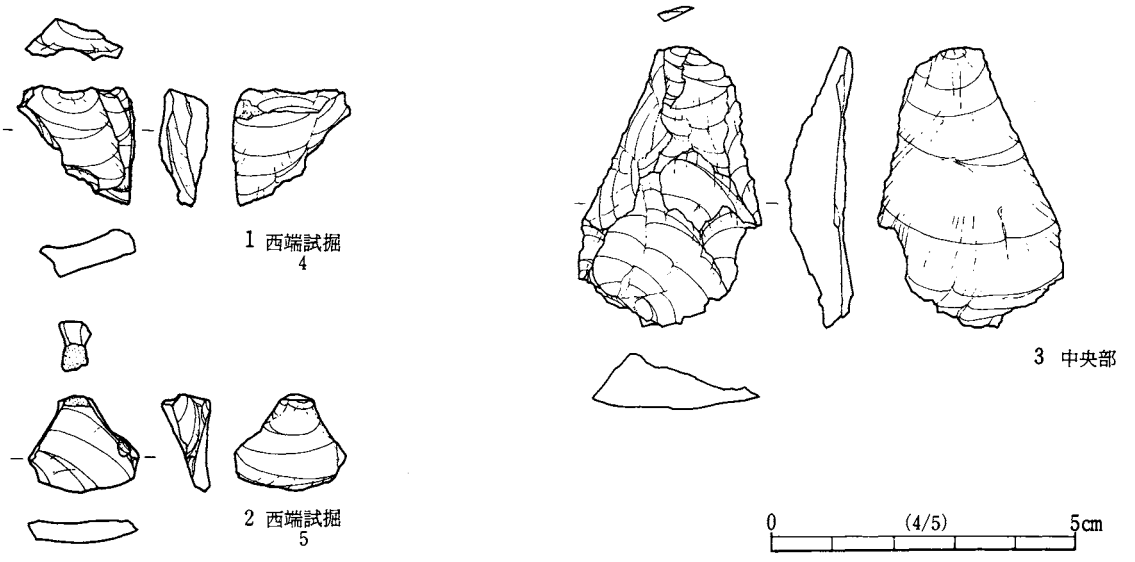
第174図　上層調査状況・遺構等配置図



第175図　下層調査状況図



第176図　第１ブロック出土状況



第177図　第１ブロック出土石器（３は単独出土石器）

第21表　第１ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母岩
1	西端試掘-1	剥片	21.8	13.6	7.0	1.4		－	－	－		1		2	1			F	H	メノウ１
2	西端試掘-2	剥片	19.3	11.0	3.9	0.7		2				1	2					F		メノウ１
3	西端試掘-3	剥片	9.7	18.3	2.8	0.5		H		O		3		1						メノウ１
4	西端試掘-4	剥片	19.4	18.8	6.0	1.7	1	H				2							L	メノウ２
5	西端試掘-5	剥片	15.6	17.9	7.7	1.3	2	H				1			1			H		メノウ１

第22表　単独出土石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母岩
1	中央部	剥片	45.0	39.0	10.0	9.1	3	H		○		2	2	1				H		凝灰岩

2　検出した遺構・遺物

旧石器時代

旧石器時代調査は、5,800㎡の調査対象面積のうち、112㎡の確認調査を実施した。ブロックは調査対象範囲の北東側で、１か所のブロックが検出された。このブロックを第１ブロックと呼称する。第１ブロックは出土層位が立川ローム層III層にあたり、このブロックは１か所の検出ではあるが便宜的に第Ｉ文化層を設定して説明していく。また、上層調査の過程で、調査区中央部より旧石器時代石器が検出されている。これを単独出土石器としてここで報告する。

第１ブロック（第176・177図、第21表、図版32）

分布状況　調査区北東側で調査されたブロックである。調査区の北方向から延びる台地先端部が独立丘状になった部分の頂部に当たる。

遺物総数は４点である。比較的狭い範囲にまとまっている。南北にやや長い楕円形状に分布する。分布範囲は南北1.4m、東西1.3mを測る。垂直分布では１点が高く分布するが、他は0.4mの高低差に収まる。土層断面への投影では、立川ローム層のIV・Ｖ層から表土層のＩ層にまで及んでるが、III層に遺物集中のレベルを求めることができる。

母岩別資料　２母岩が認められる。点数のまとまる母岩は、メノウ１の母岩が４点で、他は単独母岩の点数構成となっている。

出土遺物　小規模なブロックであり、すべて剥片の器種構成となっている。

１・２は剥片である。１はメノウ２、２はメノウ１を母岩としている。２点とも小形の剥片で、１は平坦打面をもつ縦長剥片である。２は自然面打面をもつ横長剥片である。

単独出土石器（第177図、第22表、図版41）

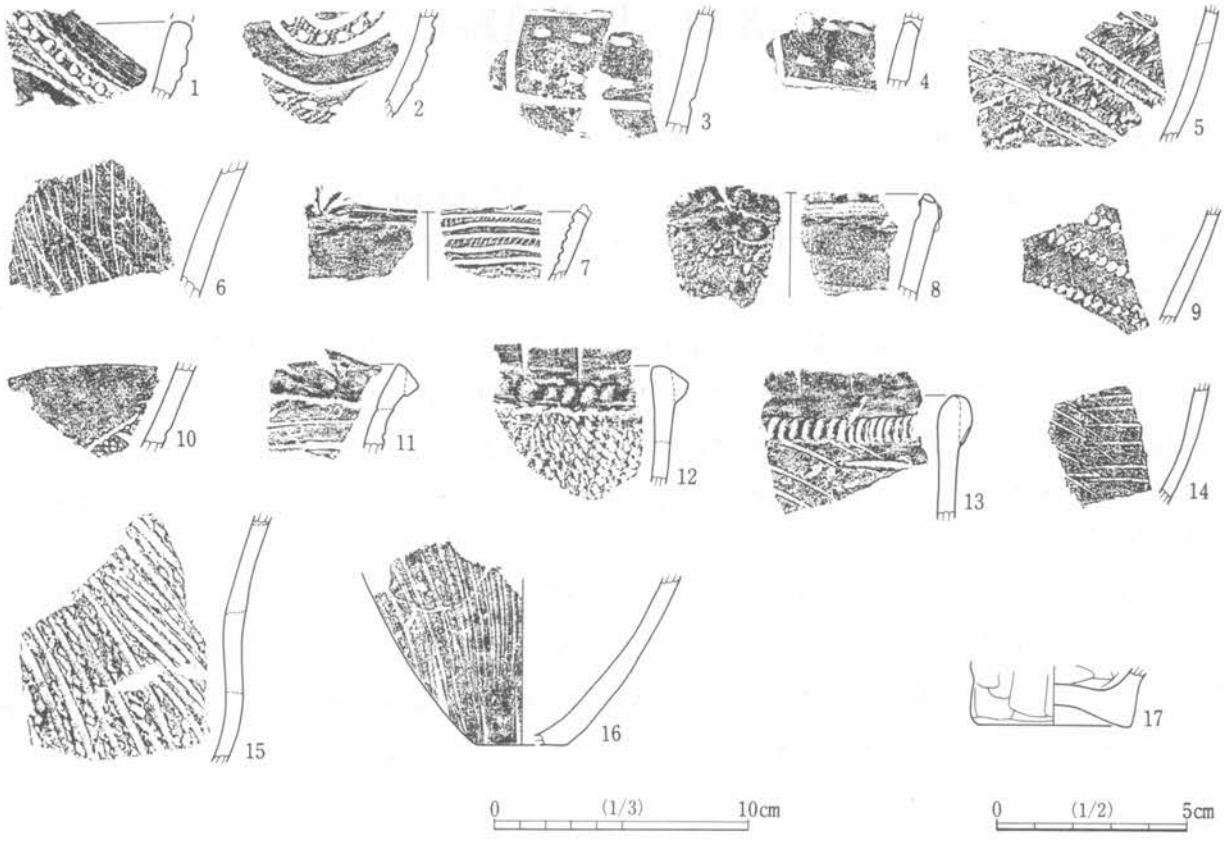
３は、グリッド拡張区から、凝灰岩製の縦長剥片が検出された。背面には下方からの剥離痕が観察されることから上下に打面が設定されていたと推定される。

遺物

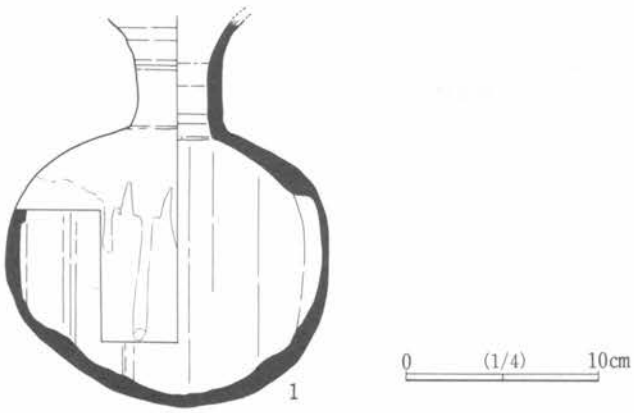
縄文土器（第178図、図版63）

全部で50点強の遺物が出土している。すべてグリッド出土で遺構出土のものはない。

１～４は後期称名寺式に属するものである。１は波状口縁になるもので、磨消縄文と棒状工具による連続刺突が観察される。３、４はいずれも沈線と棒状工具による連続刺突が施されるもので、熱を受けた痕跡が著しく煤の付着も観察される。５、６は堀之内式に属すると考えられる深鉢胴部である。７～12、15は加曽利Ｂ式に属すると考えられるものである。７は小型浅鉢の口縁部と思われるもので、外面は無文で



第178図　縄文土器



第179図　グリッド出土遺物

あるが、口唇上に飾り突起が貼り付けられ、内面に沈線とキザミによる文様が施される。粒子はやや粗いが焼成はきわめて良好である。8は口唇直下に紐線文に似た隆起線の貼り付けが見られるもので、口唇上には指頭成形が、内面には口唇に平行になるように太い沈線が施される。11、12は粗製深鉢の口縁部である。15は粗製深鉢の胴部である。縄文地文に沈線に似たやや太めの条線が施される。13、14、16は安行系土器の粗製深鉢である。17はミニチュア土器である。縄文時代に属するものかどうかはこれだけでは判断できないが、他の時代の遺物がきわめて少ないため、縄文時代のものとした。内・外面ともヘラ状工具によって成形されている。胎土は粒子がやや粗く、焼成はやや不良である。

グリッド出土の遺物（第179図、図版68）

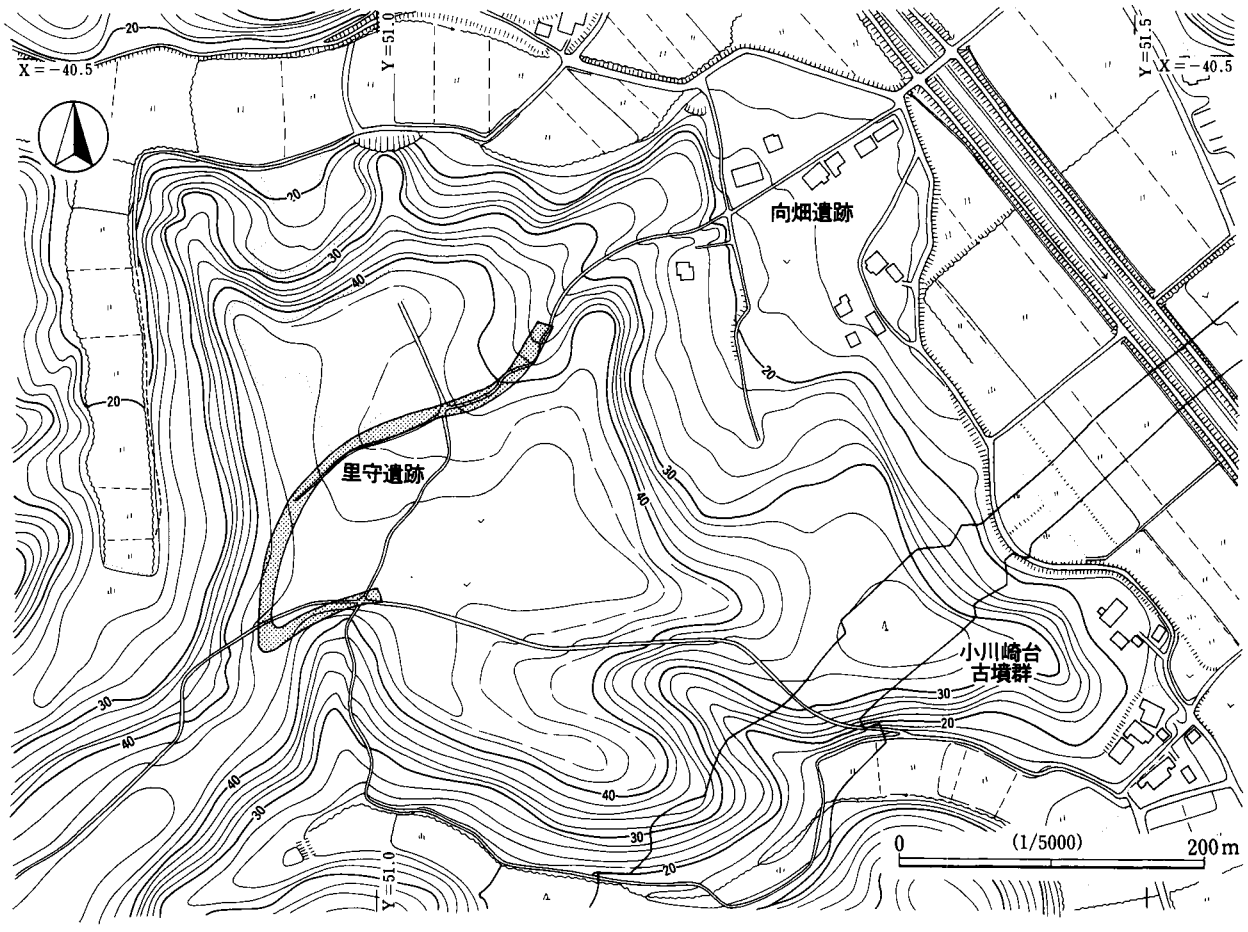
1は確認調査で検出された須恵器の瓶である。いわゆるフラスコ瓶で、球形に近い胴部と上部の頸部とからなる。内面は強いロクロ目が観察され、外面は焼成時の濃緑色の自然釉が流れ落ちるように掛かるのが観察される。

XVI　里守遺跡

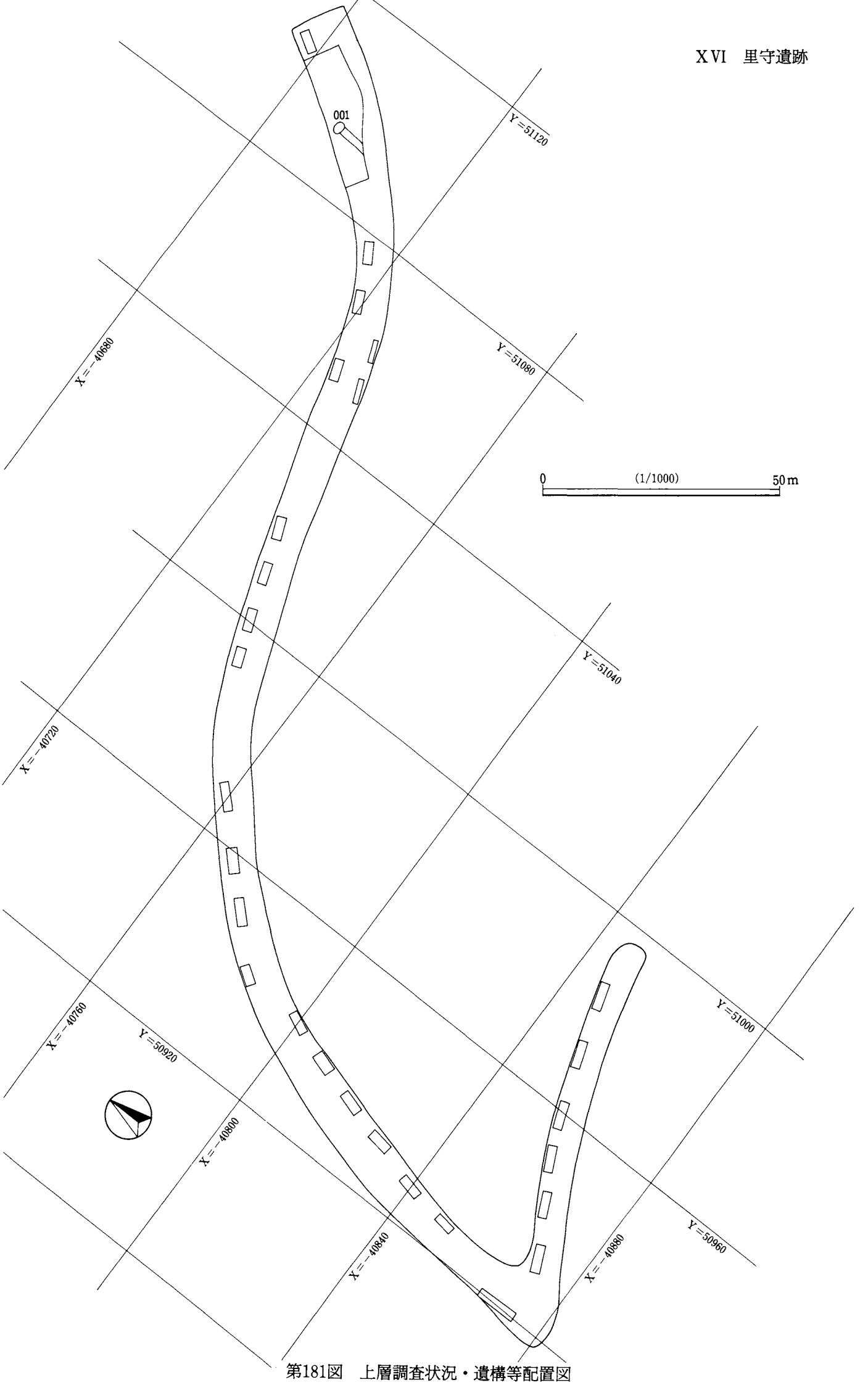
1　遺跡の概要（第180～182図）

本遺跡は、山武郡山武町戸田字里守835-3他に位置する。調査対象面積は2,930m²で、千葉東金道路（二期）建設にともなう工事用取り付け道路のための、町道西花岡向畑線を拡幅することによる調査である。上層の確認調査においては、調査対象面積の10％を2m×5mのグリッドとして設定し、遺構・遺物の調査を行った。その結果、土坑１基と溝状遺構１条を検出したので拡張して精査した。他のグリッドでは、縄文時代の石器と、古墳時代の土師器・須恵器を検出したが、密度が薄く、また遺構も検出されなかったので、確認調査をもって終了した。下層の確認調査は、調査対象面積の４％を上層確認のために設けたグリッド内に設定し調査した。しかし、石器類は検出されず、確認調査をもって終了した。調査期間は平成５年11月１日から平成５年12月24日までであった。

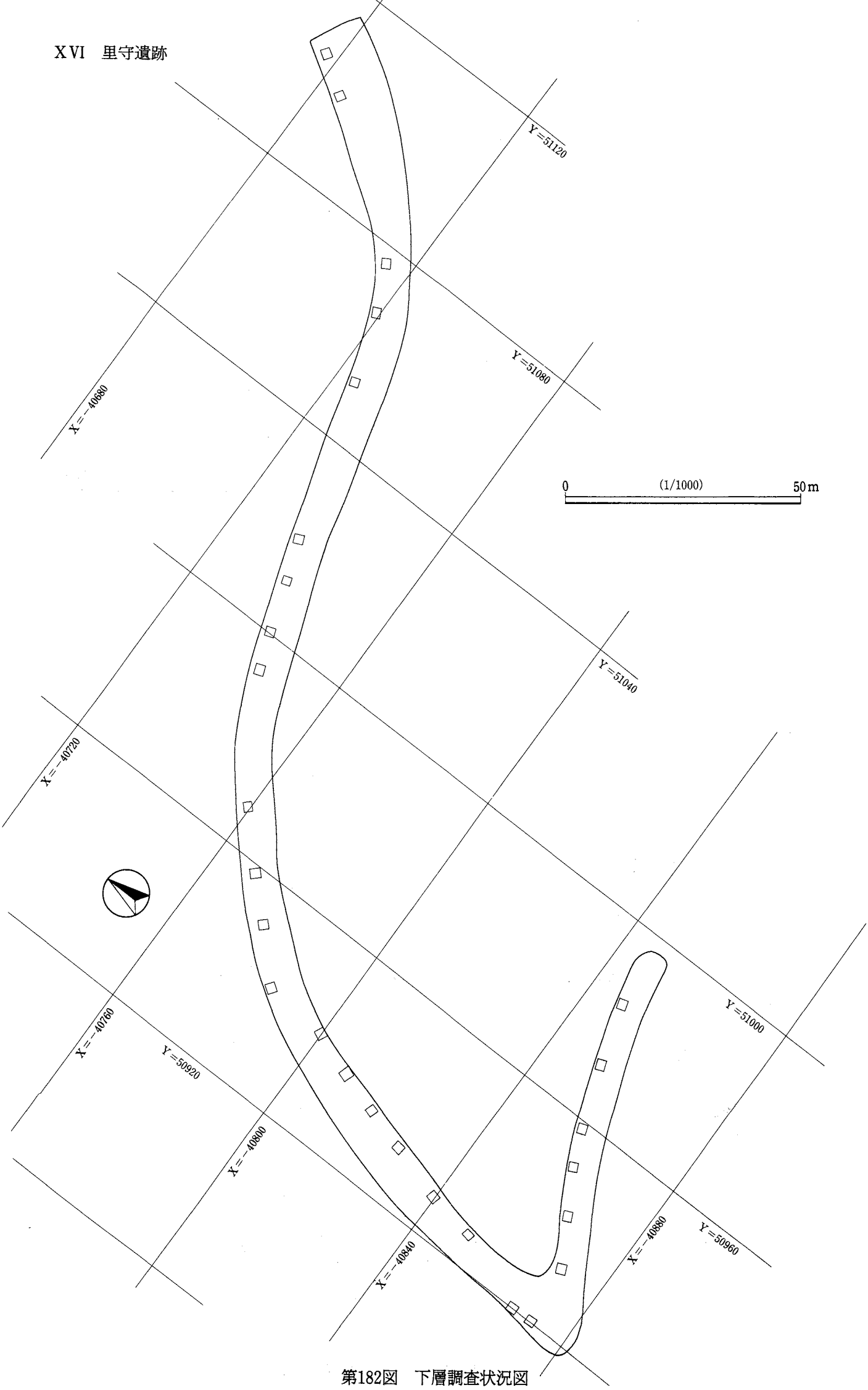
遺跡は、九十九里平野を経て太平洋に流入する作田川が上流で分岐して境川となる、この境川によって開かれた境川谷の南側に位置し、作田川の開析した作田川谷と境川谷にはさまれて形成された椎崎台の北部に位置している。前述の東嵐山遺跡とは、同じ椎崎台に位置し、東嵐山遺跡の北東１km強に本遺跡が位置する。また、次に述べる向畑遺跡は本遺跡の北側で台地下の微高地となっている。小川崎台古墳群は遺



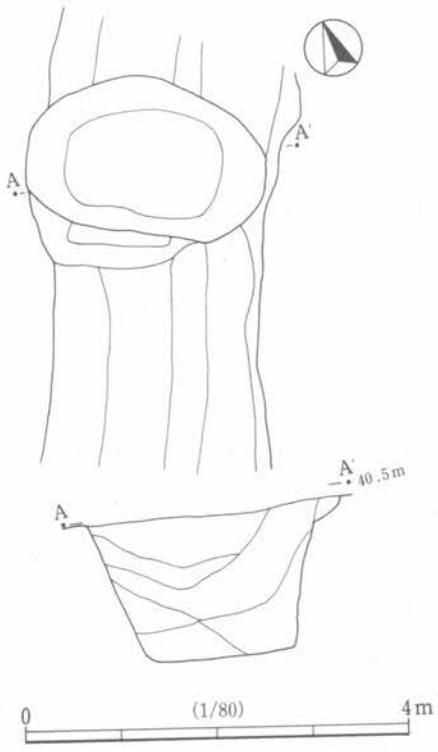
第180図　里守遺跡周辺地形図



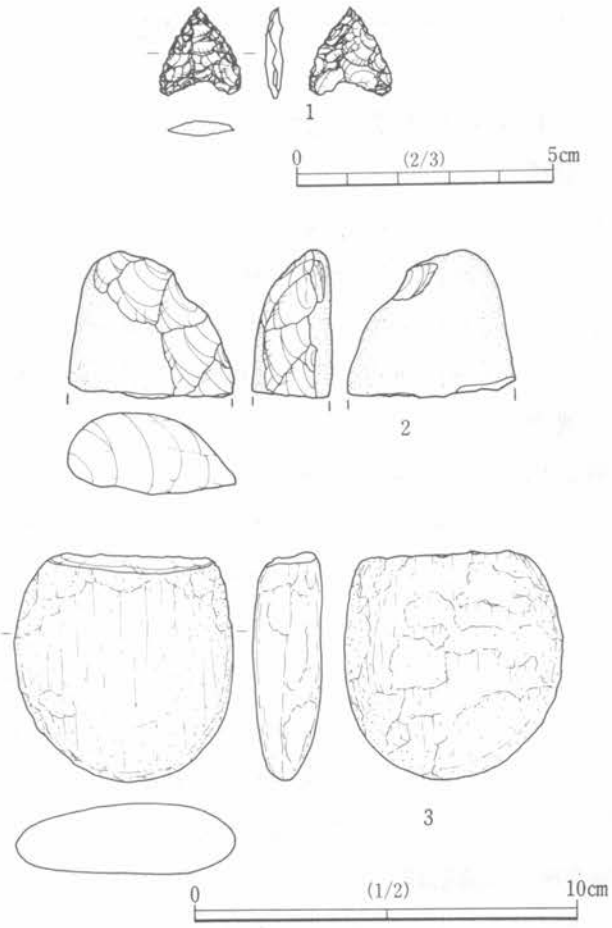
第181図　上層調査状況・遺構等配置図



第182図　下層調査状況図



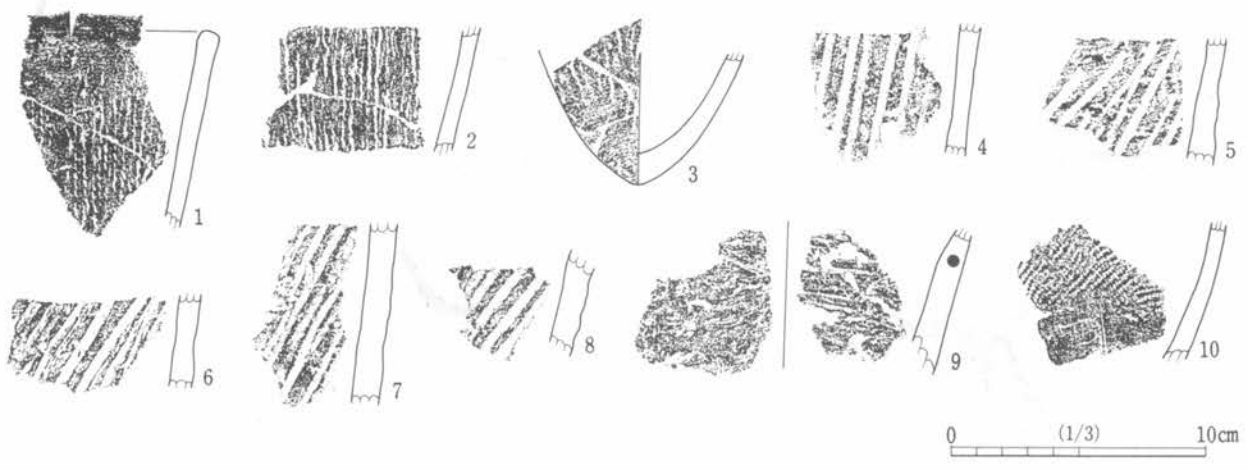
第183図　001土坑



第185図　縄文時代石器

第23表　縄文時代石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号	No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号
1	石鏃	黒曜石	17.3	16.0	3.1		10トレンチ1	3	磨石	砂岩	59.4	57.5	18.1	93.2	6トレンチ1
2	石斧	安山岩	37.1	44.1	20.6	80.0	27トレンチ								



第184図　縄文土器

跡の北東に位置するが、今回の調査では関連した遺構等は検出されなかった。標高は45mで、調査範囲周辺は平坦な台地となっているが、北東数百mほどにある水田との比高は30mを測る。

2　検出した遺構・遺物

遺構

００１土坑（第183図、図版33）

調査区北側端に近い地点で検出された土坑である。幅約2.4m、深さ約0.5mのほぼ南北方向に走る溝の中に掘り込まれたもので、形態は長楕円形で溝とほぼ直行している。長軸長は2.5m、短軸長は1.6mを測り、深さ1.5mを測る。覆土は短時間で一気に埋めたような状況を示していた。遺物は検出されなかった。

遺物

縄文土器（第184図、図版64）

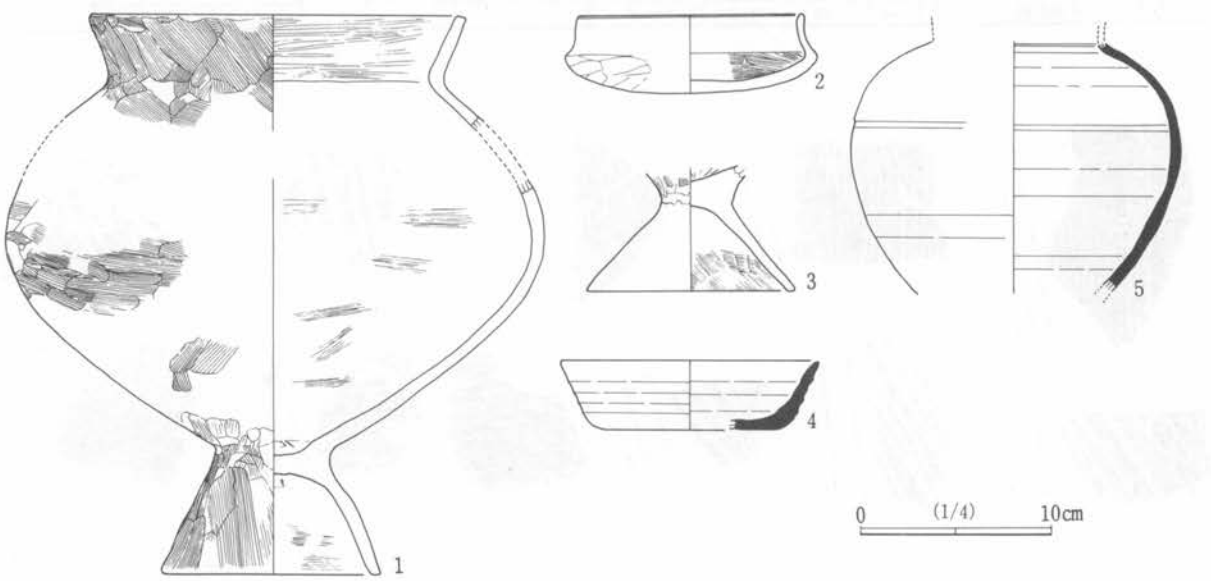
全部で20点弱の遺物が出土している。すべてグリッド出土であり、遺構出土のものはない。

１～３は夏島式と考えられる撚糸文土器である。１は口縁部である。口唇が若干肥厚し、胴部にかけてまばらなｒ撚糸が施文される。２は同一個体と思われる胴部破片、３はやはり同一個体と思われる底部破片である。４～８は同一個体と考えられる田戸下層式土器である。外面は斜め方向の太い沈線が施され、内面は縦方向のヘラケズリが施される。９は条痕文土器である。胎土に繊維を多量に含む。外面は横方向のナデ、内面は横方向の条痕が施される。10は加曽利Ｂ式の小型深鉢である。外面にＬＲ縄文が施され、内面は丁寧なヘラミガキが施される。

縄文時代以降石器（第185図、第23表、図版64）

本遺跡より出土した石器はわずかである。石器総点数は12点である。器種組成は、石鏃１点、磨石１点、石斧１点、砥石１点、礫８点のみである。

１は石鏃である。両側縁は丸味をもって膨らみ、基部は浅く括れる。平面形はハート形に近い形状を呈している。２は偏平礫を利用した打製石斧の基部端である。片刃礫器状に片側縁からの調整しか施されておらず、未製品であるかもしれない。３は磨石である。上端部を欠損するが、偏平な楕円礫の表裏面に擦



第186図　グリッド出土遺物

り面が顕著である。

グリッド出土遺物（第186図、図版68）

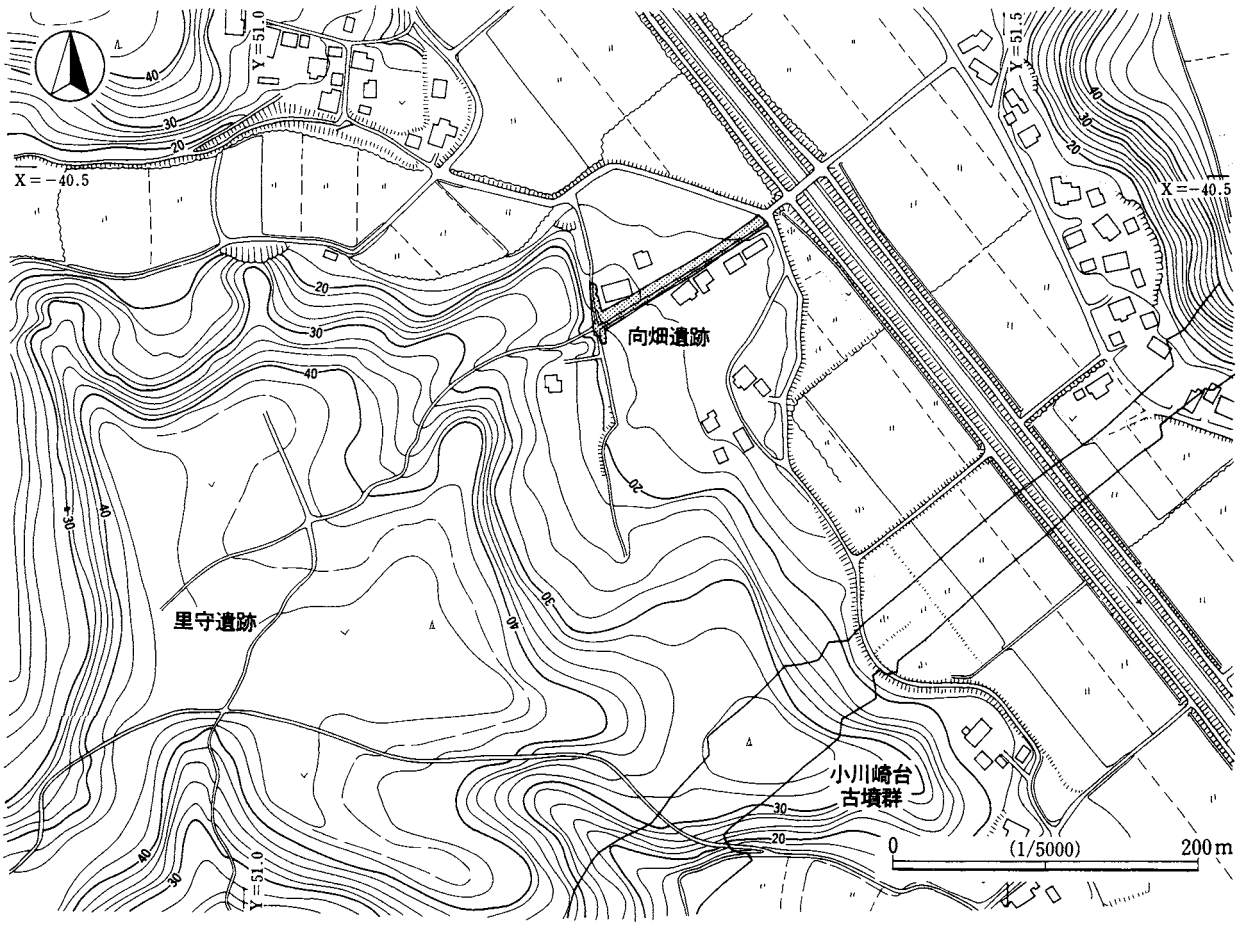
1は土師器の台付甕である。破片で遺存が悪いが口径19.5cm、最大径28.2cm、底径11.4cm、器高29.0cmを測る。外面はほぼ全面にハケメがみられ、内面は口縁部はハケメ後横ナデ、胴部は横ハケメ後粗いミガキが施される。脚内部もハケメ後ナデが施される。2は土師器の杯である。口径11.8cm、器高4.0cmを測る。外面口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリ後ナデ、内面は口縁部横ナデ、体部はヘラミガキ後ナデが施される。3は台付甕の脚部である。底径11.0cmを測り、体部と脚内部にはハケメがみられる。4は須恵器の杯で、口径13.4cm、底径9.0cm、器高3.6cmを測る。底部はヘラケズリが施される。5は須恵器の長頸壺である。遺存が悪く破片なので詳細は不明である。自然釉が焼成時に垂れ流れているのが観察される。頸部より上は不明である。

XVII　向畑遺跡

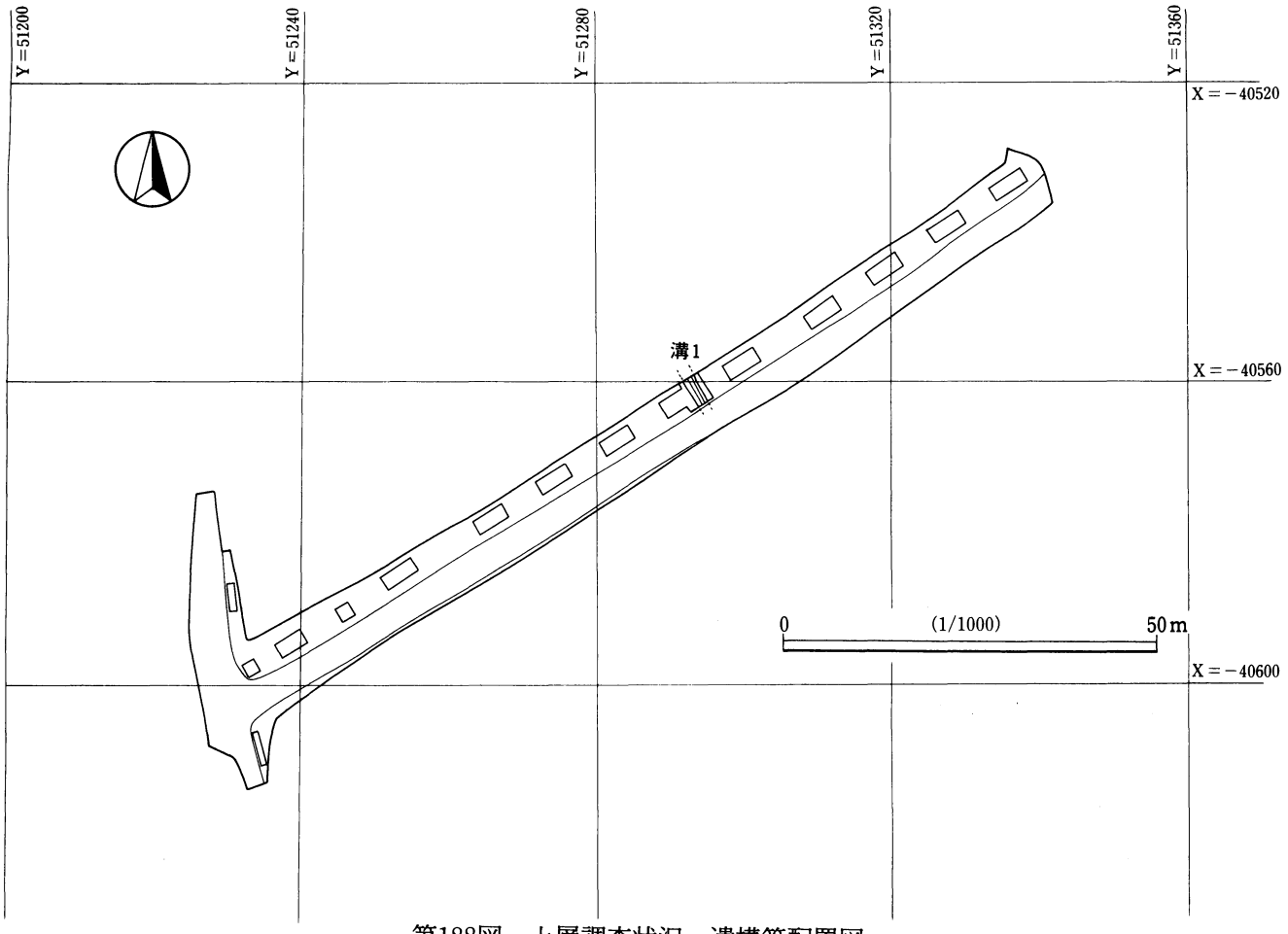
1　遺跡の概要（第187～189図、図版33）

本遺跡は、山武郡山武町戸田字向畑425-1他に位置する。調査対象面積は1,310㎡で、前述の里守遺跡と同様、千葉東金道路（二期）建設にともなう工事用取り付け道路のため、町道西花岡向畑線を拡幅することによる調査である。上層の確認調査では、道路と平行して調査対象面積の10％を2m×5mのグリッドとして設定し、中世の溝状遺構１条を検出した。周囲を拡大して精査したが、溝状遺構は道路と直交していたため、広い範囲を調査することはできなかった。この他には、縄文時代後期の土器と石器、古墳時代の土師器・須恵器を検出したが、密度が薄く、遺構なども検出されなかったので、本調査は実施されなかった。下層の確認調査においても、石器類を検出することができず、確認調査で終了した。調査期間は、平成５年10月18日から平成５年11月15日までであった。

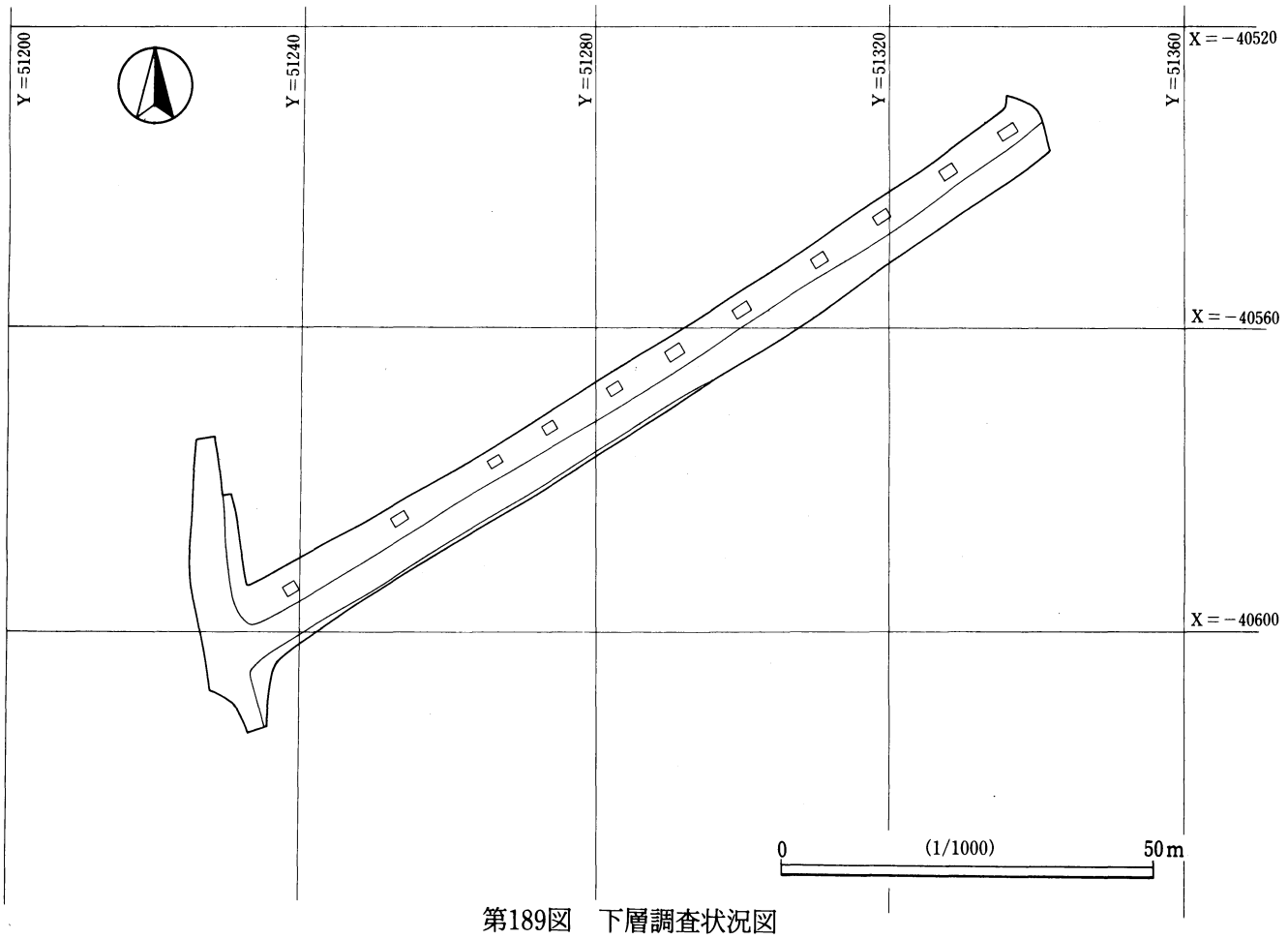
遺跡は、九十九里平野を経て太平洋に流入する作田川が上流で分岐して境川となる、この境川によって開かれた境川谷の南側に位置している。また作田川の開析した作田川谷と境川谷にはさまれて形成された椎崎台の北部にあたり、河岸段丘により形成された微高地に位置している。前述した里守遺跡は台地上であり本遺跡の南西側となっている。小川崎台古墳群は本遺跡のすぐ南側に位置しているが、古墳群に関す



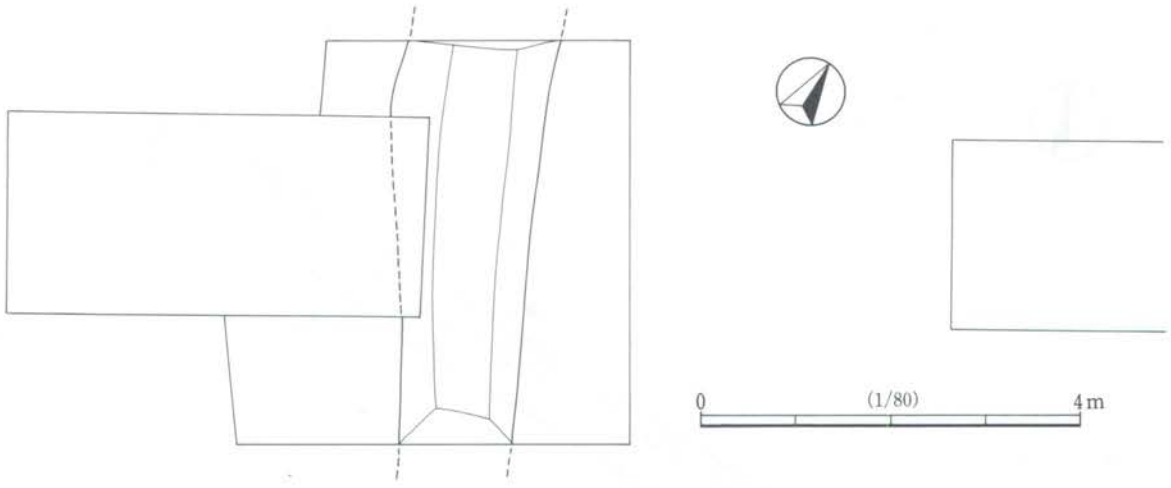
第187図　向畑遺跡周辺地形図



第188図　上層調査状況・遺構等配置図



第189図　下層調査状況図



第190図　溝１

る遺構等は今回の調査では検出されなかった。標高は約14mで水田との比高は数m程度である。

2　検出した遺構・遺物

遺構

溝１（第190図）

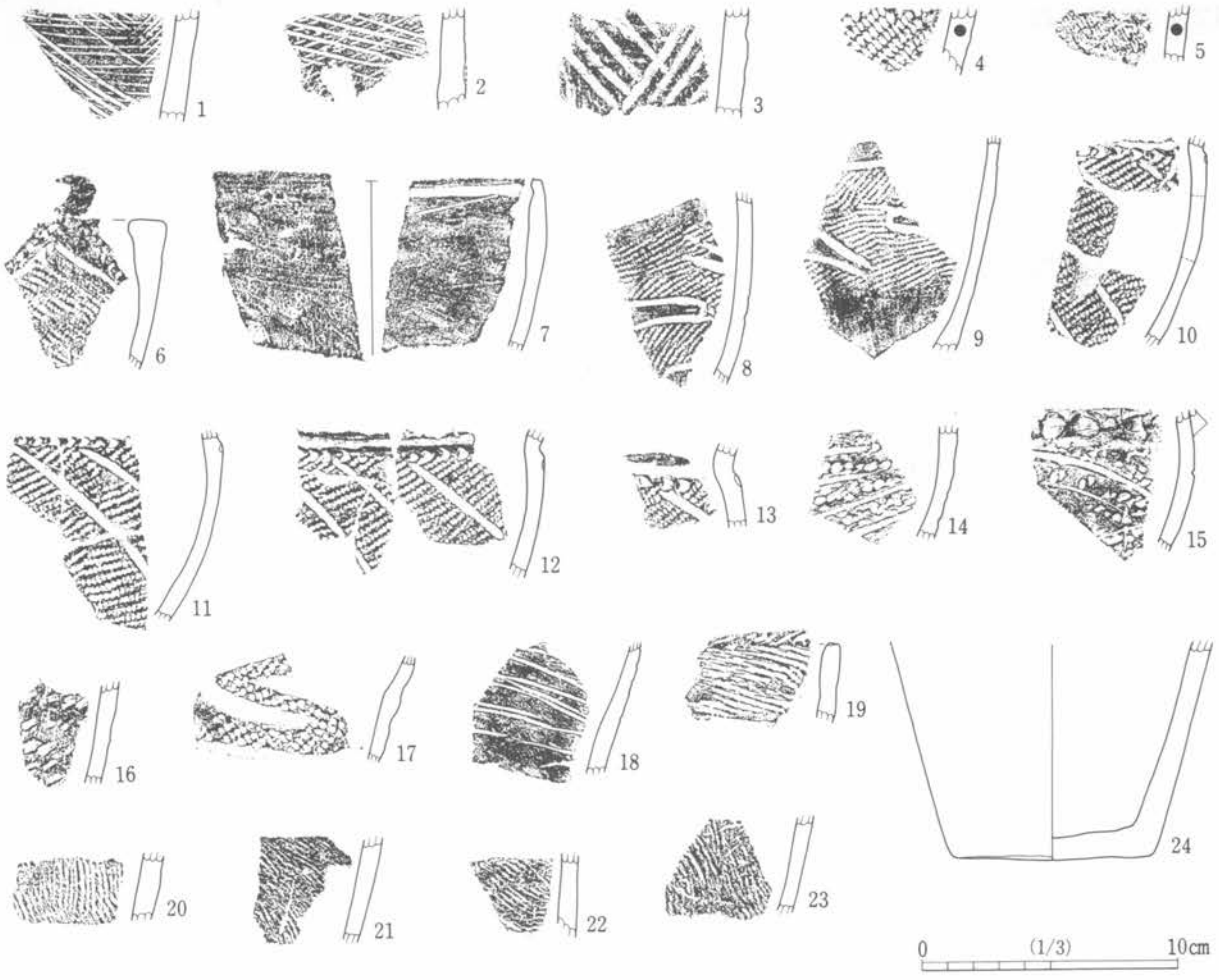
細長い調査区のほぼ中央付近で検出された溝である。ほぼ調査区と直交し、調査できた部分は少なく長さ４mほどである。調査区外に更に直線上に延びている。幅1.2m～1.6mで、深さ0.6mを測る。掘り込みは逆台形に掘り込まれ、底面は平坦である。図示できるような遺物は検出されなかった。

遺物

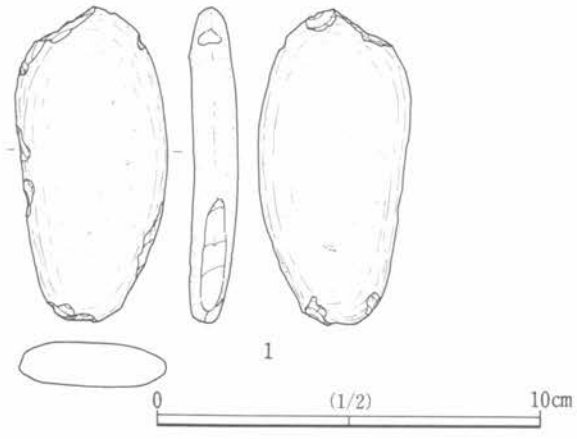
縄文土器（第191図、図版64）

全部で35点ほどの遺物が出土している。すべてグリッド出土であり、遺構出土のものはない。

１、２は細沈線が水平ないしは斜めに施されるもので、２では格子状になっている。三戸式に属するものである。３は太い沈線が綾杉状に施されるもので、胎土には赤色スコリアを多量に含む。田戸下層式に属するものである。４、５は単節縄文が施されるもので、いずれも胎土には植物繊維を多量に含む。黒浜式に属するものであろう。６～16は加曽利Ｂ式に属すると考えられるもので、いずれもキメの細かい胎土と内面の丁寧なヘラミガキを特徴とする。６は波状口縁になるもので、波頂部に突起がつけられている。口唇部にはキザミが観察される。７は無文の口縁部破片で、内面には口唇に平行するように太い沈線が施される。外面には煤が付着している。８、９は同一個体と思われる深鉢の胴下半部で、磨消縄文が観察される。10～13も同一個体と思われる深鉢胴部である。胴部中央がくびれ、その部分に横走する太沈線と半截竹管による連続刺突が施される。14～16は粗製深鉢である。14、15は縄文施文に条線が施されるもので、15には紐線文が貼り付けられているのが観察される。16は縄文施文のみのものである。17～23は晩期に属すると考えられるものである。17は「の」の字文あるいは入組三叉文と思われる文様が観察される浅鉢で、安行３ａあるいは３ｂ式に平行するものと考えられる。18は条線のみが施される粗製深鉢である。19～23は晩期終末期に属すると考えられるもので、いずれも撚糸文が施される。19は口縁部で、口唇上にキザミが施される。24は加曽利Ｂ式に属すると考えられる深鉢の底部である。文様は施されないが、全面にわたって丁寧なヘラミガキが施される。



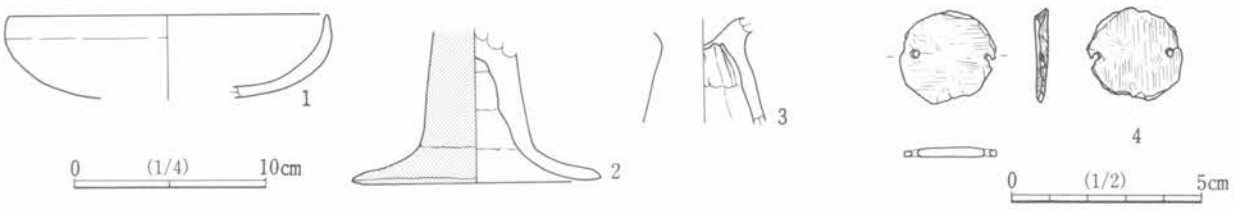
第191図　縄文土器



第192図　縄文時代石器

第24表　縄文時代石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号
1	敲石	砂岩	81.1	39.3	12.8	61.9	E～Fトレンチ



第193図　グリッド出土遺物

縄文時代以降石器（第192図、第24表、図版64）

本遺跡より出土した石器はわずかである。石器総点数は43点である。器種組成は敲石１点、礫42点である。

１は敲石である。偏平な細長い礫の両端部に敲打による剝離痕がみられる。左側縁にも疎らに剝離痕が認められる。

グリッド出土遺物（第193図、図版68）

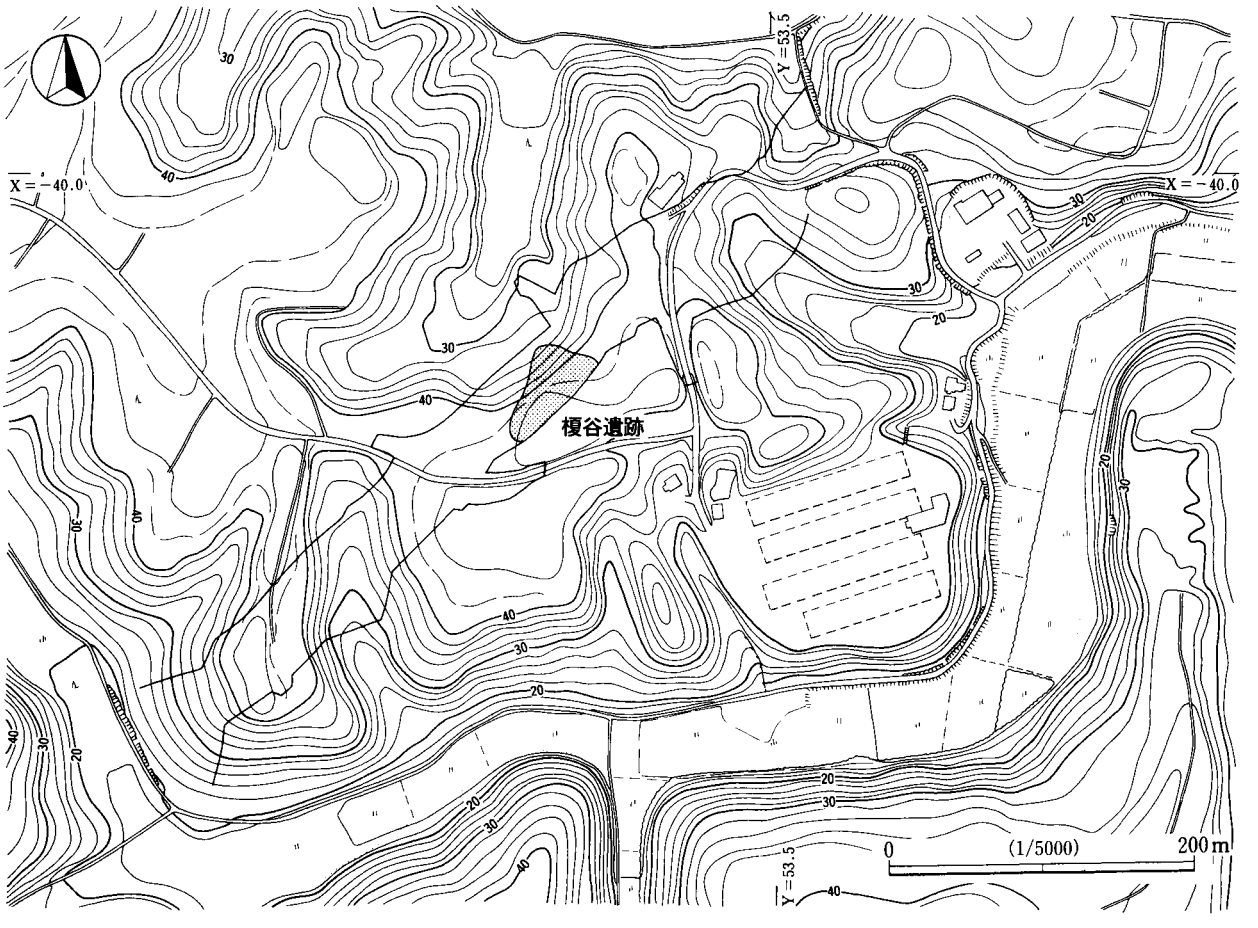
１は土師器の杯である。小破片で口径は16.6cmになるとみられ、口縁部は横ナデ、体部はナデが施される。２は土師器の高杯の脚部で、底径12.9cmを測る。外面は赤色塗彩が施される。３も土師器の高杯の脚部である。内面はヘラケズリとナデが認められる。４は滑石製の有孔円盤である。周辺を破損するが径2.5cm、厚さ0.25cmで両端に各１孔穿孔されている。片側の穿孔の際に縁辺部を破損したようである。両平面には研磨痕が残り、周縁部にも細かい単位の研磨の痕跡が認められる。

XVIII　榎谷遺跡

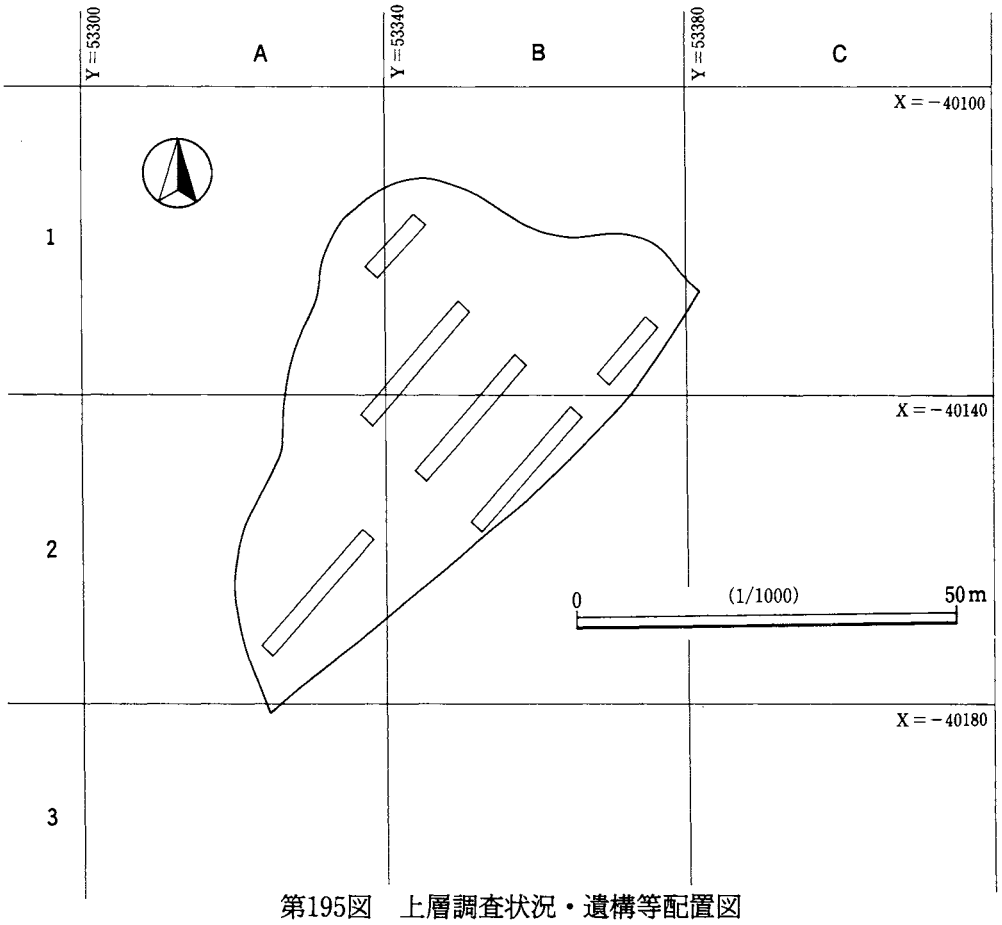
1　遺跡の概要（第194～196図、図版34）

本遺跡は、山武郡松尾町古和字外台565-1他に位置する。調査対象面積は2,050㎡で、上層の確認調査を対象面積の10％にあたる205㎡で実施したところ、奈良・平安時代の土師器・須恵器の散布を検出したが分布が薄く、また遺構等を検出することができなかった。そのため本調査を実施することはしなかった。下層の確認調査については、対象面積の４％にあたる82㎡についてグリッドを設定し旧石器類の確認を行った。その結果、１か所で旧石器時代石器を検出したので、周囲を拡張して精査したが他には検出することができなかった。そのため下層についても本調査を実施することはしなかった。調査期間は平成６年８月２日から平成６年９月22日までであった。

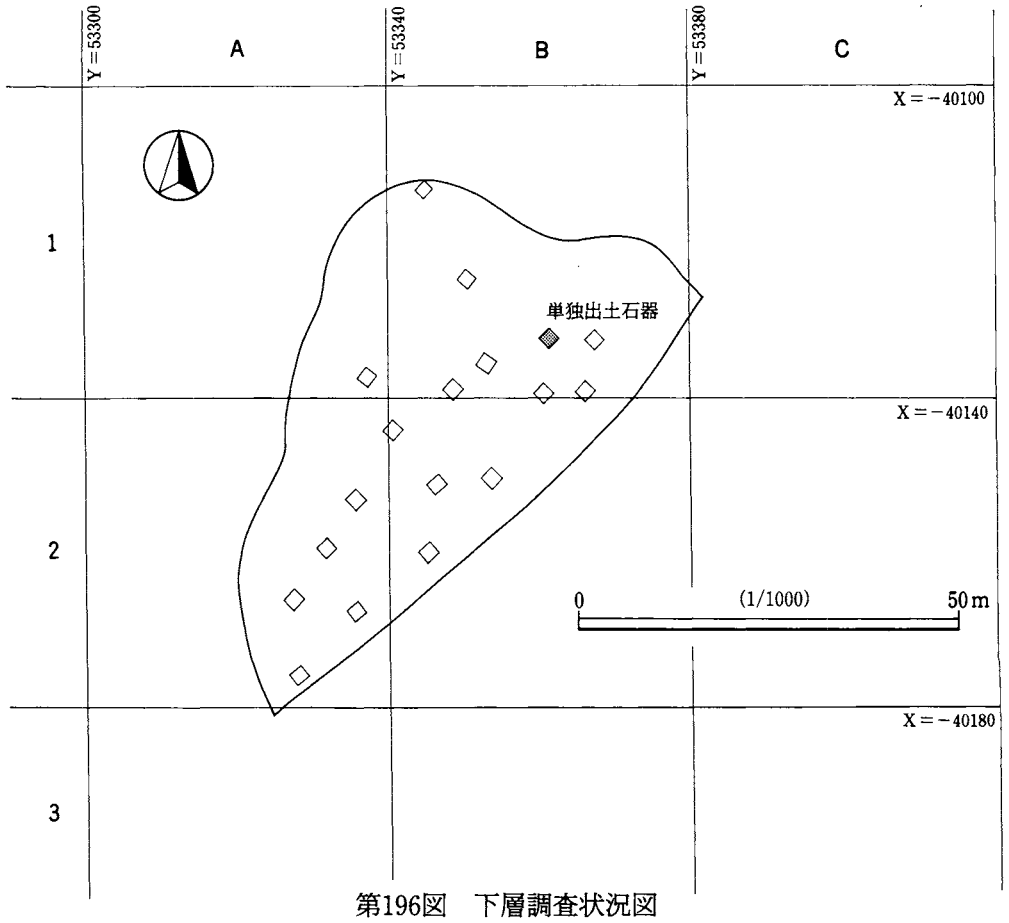
遺跡は、九十九里平野を経て太平洋に流入する木戸川が北総台地に入り込んで形成する木戸川谷の中下流部右岸の台地上に位置する。この台地は、下総台地東端にあたる麻生新田台が小支谷によって開析された金尾支台で、本遺跡は金尾支台の北側中程に位置している。大山遺跡は、本遺跡から小さな谷を一つ隔てたすぐ北東で台地の北東端に位置している。大山遺跡では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡と石器類が大規模に検出されたが、本遺跡ではそれと対照的であることから、台地上での生活範囲がこの地点までは及ばなかったことがうかがわれる。標高は42mで、北東にある谷部との比高は17mを測る。



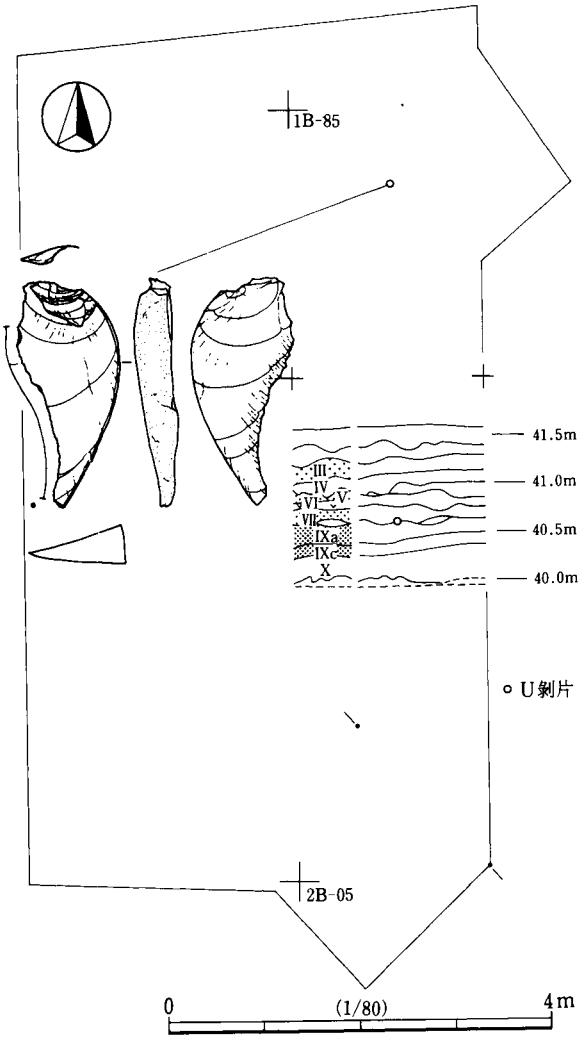
第194図　榎谷遺跡周辺地形図



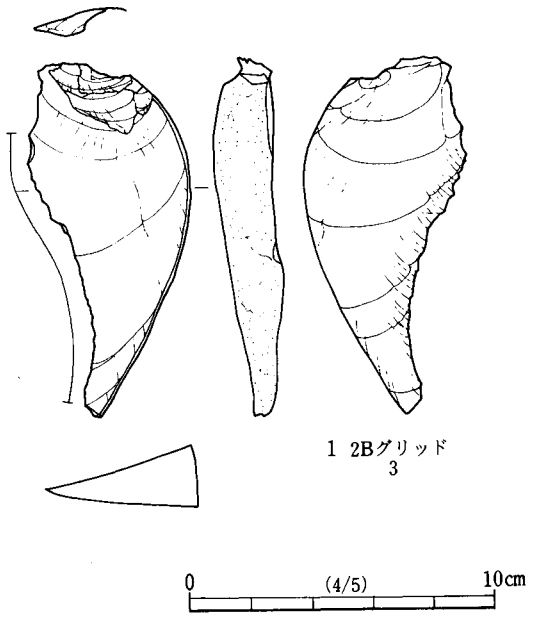
第195図　上層調査状況・遺構等配置図



第196図　下層調査状況図



第197図　単独石器出土状況



第198図　単独出土石器

第25表　単独出土石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図番号	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成 C	H	T	R	L	打角 °	調整部位	末端形状	折面部位	母岩
1	2Bグリッド3	U剥片	55.0	29.5	9.0	10.9	1	H		○		3						F		珪質頁岩

2　検出した遺構・遺物

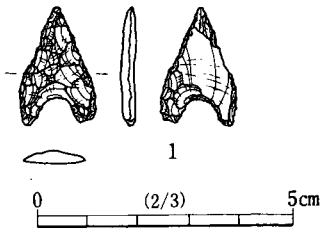
旧石器時代

下層確認調査の際に1点の剥片が検出された。周囲を拡張したが石器群の広がりを確認することはできなかった。これを単独出土石器としてここで扱う。

単独出土石器（第197・198図、第25表、図版64）

分布状況　調査区北東寄りの確認調査グリッドから検出された。出土層位は記載がないため不明であるが、投影図からはⅦ層の蓋然性が高い。投影図に使った土層断面図は、位置的に離れているためそれも断定はできない。

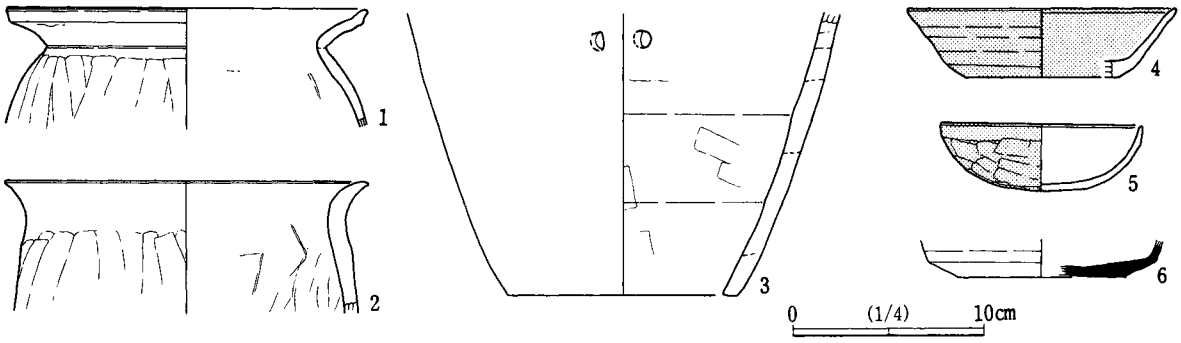
遺物総数は1点である。1は珪質頁岩製のU剥片である。右側面に背面を残し、左側縁には微細な剥離痕が観察される。円礫状の原石を半割したような平坦な剥離痕が背面に残る。打面は平坦打面を呈する。



第199図　縄文時代石器

第26表　縄文時代石器属性表

No.	器種	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	遺物番号
1	石鏃	チャート	23.3	15.2	3.0	0.7	2Bグリッド2



第200図　グリッド出土遺物

遺物

縄文時代以降石器（第199図、第26表、図版64）

本遺跡より出土した石器総点数は石鏃が1点のみである。

1は石鏃である。横長剝片を素材として、素材を横位に用いている。両側縁は基部側で丸味をもち、基部はコの字状に括れる形状を呈している。

グリッド出土遺物（第200図、図版68）

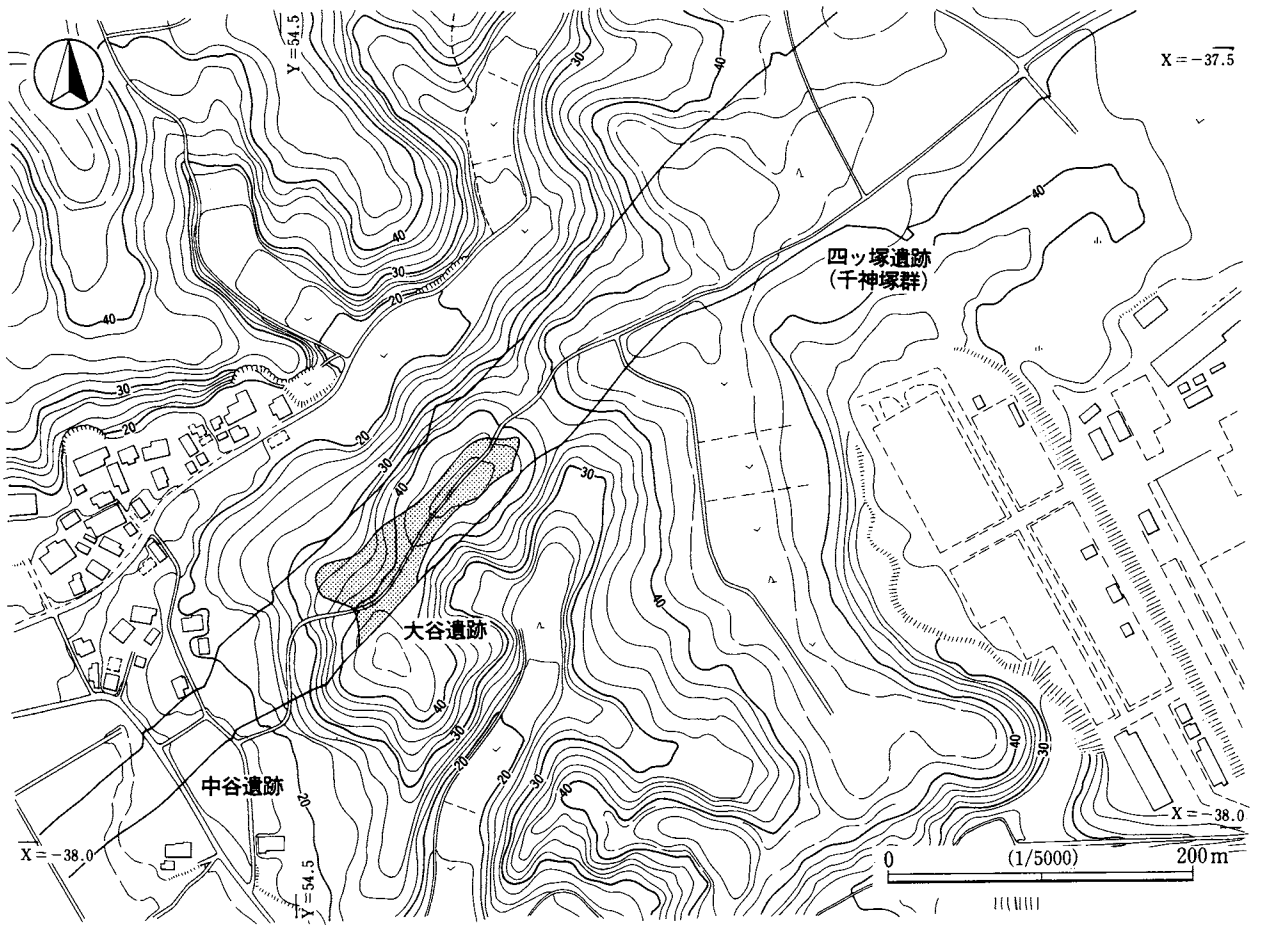
1は土師器の甕の口縁部である。口径18.6cmを測り、頸部から口縁部が大きく屈曲し急激に開いている。口縁部はナデ、胴部はヘラケズリ後ナデが施される。2は土師器の甕である。口径は18.5cm、口縁部はナデ、胴部はヘラケズリ後ナデが行われる。3は土師器の甑の下半部である。底径12.2cmを測り、内面はナデ、外面はヘラケズリ後ナデが行われるが、ススの付着や火熱などで器表の剝離が著しい。胴部に焼成後の穿孔が1孔認められる。4は土師器の杯で、器高3.5cmを測る。器面の磨耗が激しいが、外面はナデ、内面はミガキ後ナデが施される。内外面とも赤色塗彩が施される。5も土師器の杯で、口径10.6cm、器高3.4cmを測る。杯蓋形状の杯で底部と体部の境界はない。内面はナデ、外面はヘラケズリ、口縁部はナデが施される。内面にススが付着し灯明皿として使用されていたことが窺われる。また4同様に内外面共に赤色塗彩されている。6は須恵器の高台付の杯である。内外面共にナデが施され、底部に2～3条沈線の刻みを付けて張り付けた高台は破損し残っていない。底部はヘラケズリが施される。

XIX　大谷遺跡

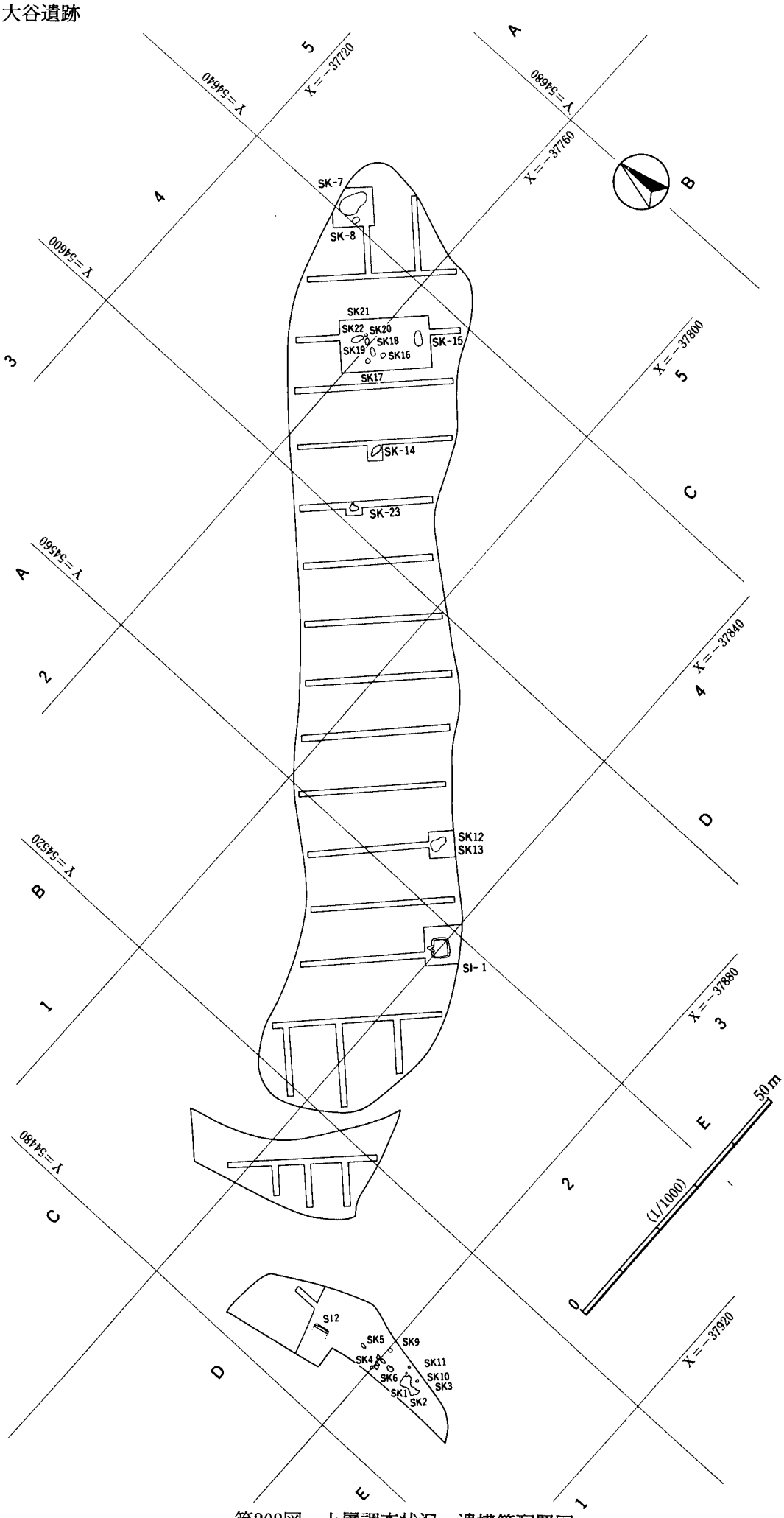
1　遺跡の概要（第201～203図）

本遺跡は、山武郡松尾町谷津字大谷279他に位置する。調査対象面積は5,900㎡で、上層の確認調査を10％の面積にあたる590㎡で行ったところ、奈良時代の竪穴住居跡１軒、中世の道状遺構１条、その他に土坑、炉穴、炭焼窯を数基検出した。そこで、これら遺構の検出された地点で本調査を実施した。その結果、さらに竪穴住居跡１軒と土坑４基を検出した。上層の調査で、ローム層の様子を観察したところ本遺跡は東西に細長い痩せ尾根になっているためローム層の流出が見られ、下層の確認調査は2,390㎡の２％の面積で実施されることとなった。しかし石器類は検出されず、確認調査をもって終了した。調査期間は、平成７年１月23日から平成７年３月30日までであった。

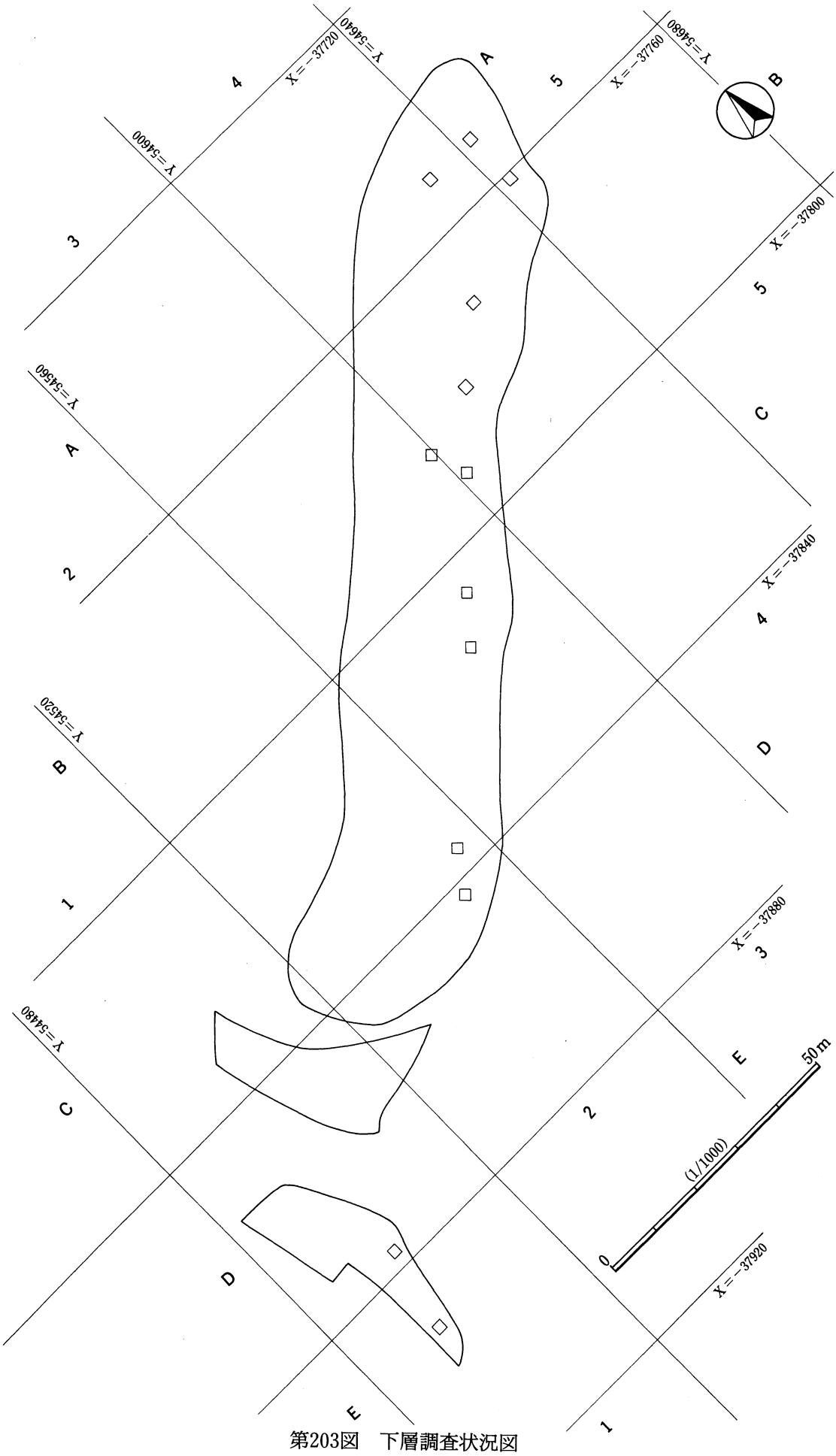
遺跡は、九十九里平野を経て太平洋に流入する木戸川が下総台地に入り込んで形成する木戸川谷の中下流部左岸の台地上に位置する。この台地は、下総台地東端にあたる松尾台であり、その南部東寄りに本遺跡が位置している。前述した榎谷遺跡は木戸川の対岸にある。また本遺跡で検出された中世の遺構は調査区の南西であり、隣接する中谷遺跡と時期的につながるものである。四ツ塚遺跡は、本遺跡のさらに北東に位置するのだが、ここからは塚数十基と多数の旧石器類を検出したが、同じ台地上でしかも本遺跡のほうが台地南端に面しているのに、これらに関した遺構が検出されなかったのは痩せ尾根であることが関係



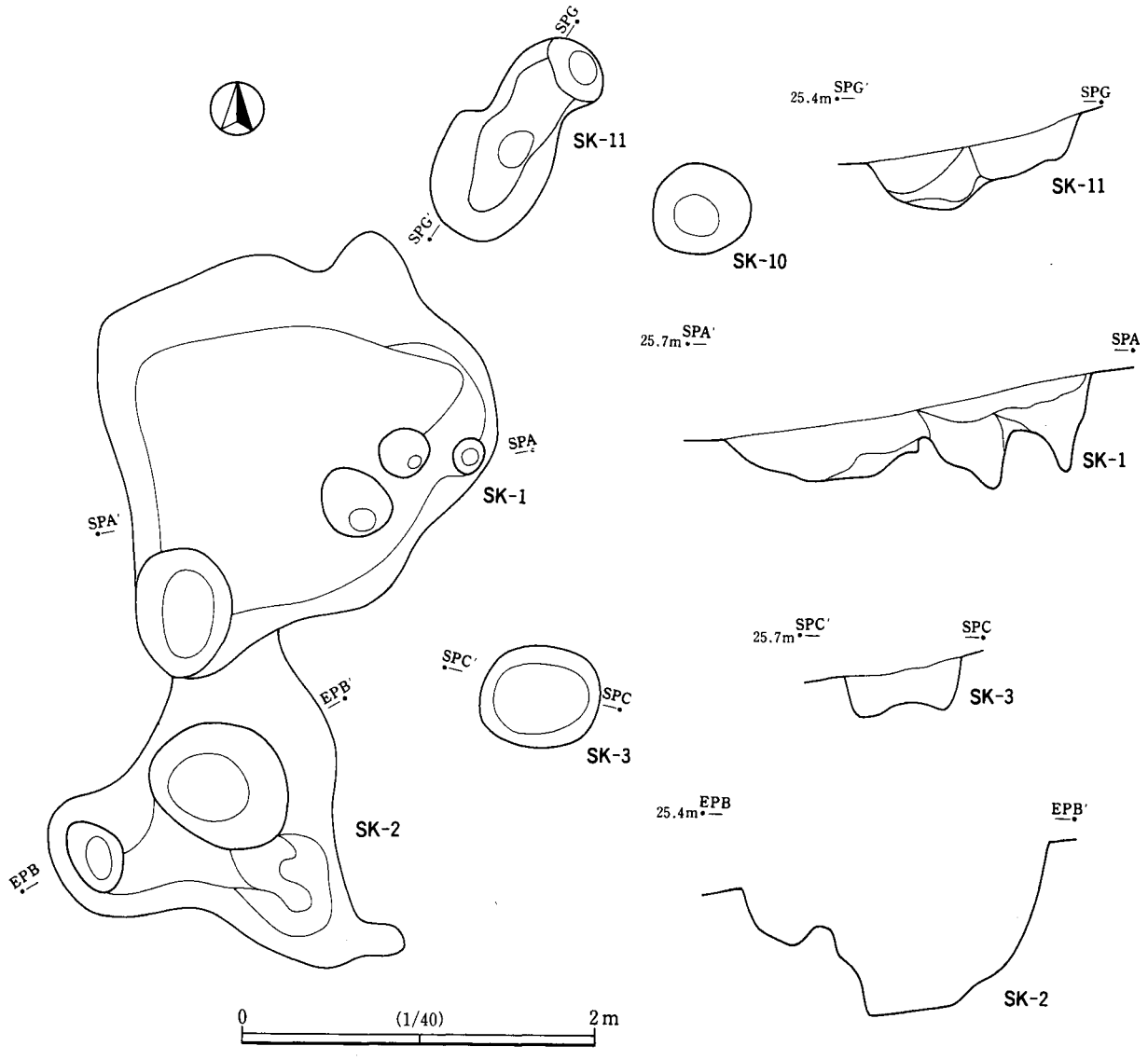
第201図　大谷遺跡周辺地形図



第202図　上層調査状況・遺構等配置図



第203図　下層調査状況図



第204図　土坑等（1）

すると思われる。標高は32～40mで、南斜面下の水田との比高は約20mを測る。

2　検出した遺構・遺物

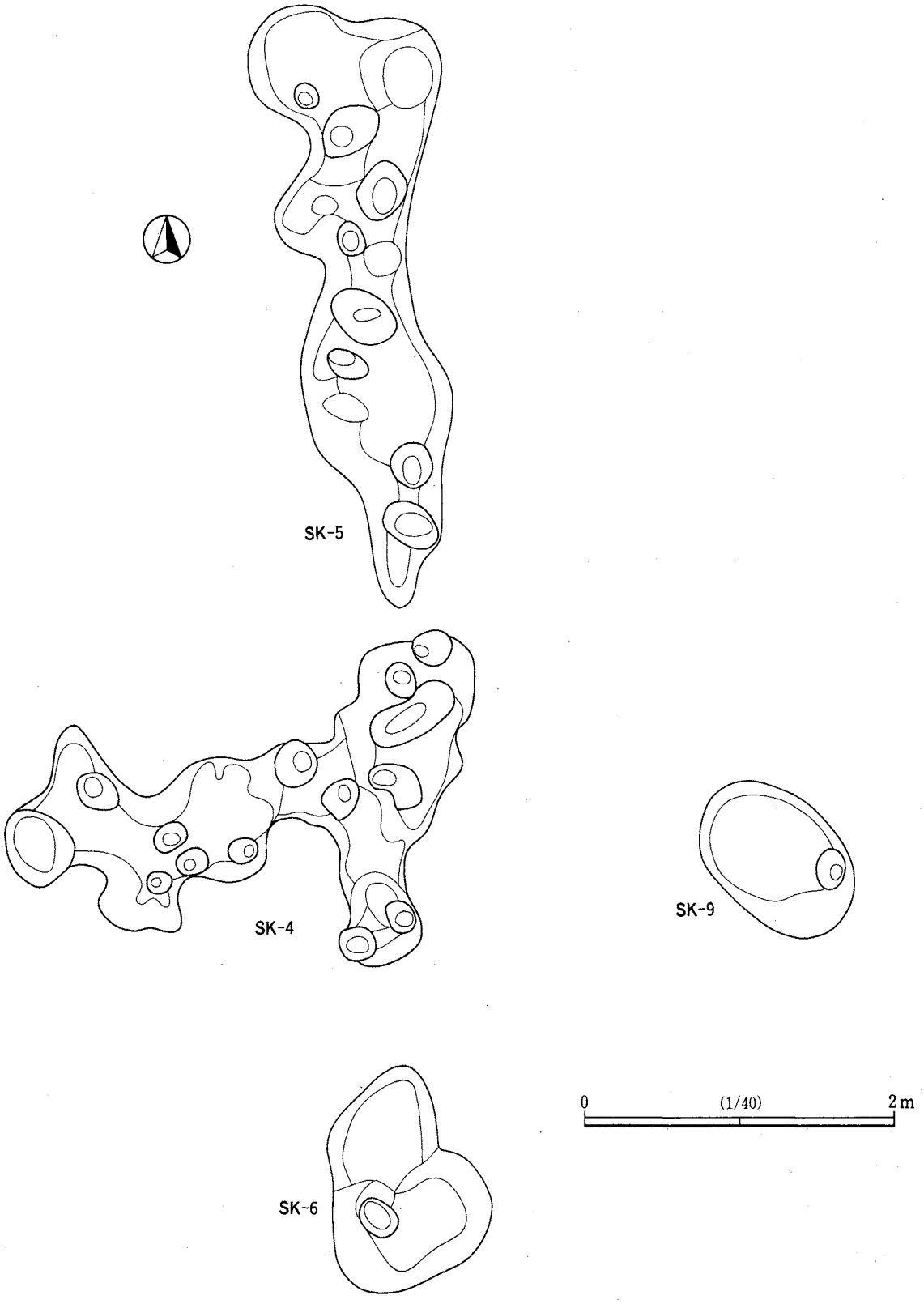
遺構

ＳＫ－１土坑（第204図、図版35）

本遺構は、１Ｅ－13グリッドに位置する。規模は2.2m×2.0mで、丸みを帯びた三角形を呈する。掘り込みの深さは東側で約0.7m、西側で約0.3mであるが、遺構が斜面にあるため底面はほぼ水平で平らである。掘り込みの南西部から北東部にかけてピットが四つあり、小さいものは直径0.2mで大きいものは直径0.6mほどあり、深さは0.15m～0.3m程度を測る。

ＳＫ－２土坑（第204図）

本遺構は、１Ｅ－23グリッドに位置する。規模は2m×1.5mで、三角形を呈する。底面を三つのピットが形作っており、小さいものは直径0.4mで大きいものは直径0.8mを測る。掘り込みの深さは最大で約1mである。本遺構の北に、ＳＫ－１土坑が接して位置している。



第205図　土坑等（2）

ＳＫ－３土坑（第204図）

本遺構は、１Ｅ－23グリッドに位置する。規模は0.7m×0.6mで、楕円形を呈する。掘り込みの深さは約0.2mであり、底面に向けて急角度に掘り込まれている。本遺構の西側約1mのところに、ＳＫ－２土坑が位置する。

ＳＫ－４土坑（第205図）

本遺構は、１Ｅ－12グリッドに位置する。規模は2.8m×2.1mで、不整形である。直径0.15m～0.4mの小さなピット14個が底面を形作っている土坑であり、掘り込みの深さは最大0.8mを測る。

ＳＫ－５土坑（第205図）

本遺構は、１Ｅ－03グリッドに位置する。規模は3.8m×1.2mで、不整形である。直径0.15m～0.5mの小さなピット12個が底面を形作っている土坑であり、掘り込みの深さは最大0.6mを測る。本遺構の南に接するようにして、ＳＫ－４土坑が位置する。

ＳＫ－６土坑（第205図）

本遺構は、１Ｅ－12グリッドに位置する。規模は1.5m×1.0mで、二つの円形の土坑がつながった８の字型を呈する。北に位置する円形のものは直径0.7m、深さ0.4mを測り、南に位置するものは直径1.0m、深さ0.9mを測る。また本遺構の南0.5mのところにＳＫ－４土坑が位置している。

ＳＫ－７土坑（第206図、図版36）

本遺構は、５Ａ－51グリッド付近に位置する。規模は5.5m×3.0mで、楕円形を呈する。掘り込みの深さは最大で0.8mほどあり、丸みを帯びて掘り込まれている。土層観察では、人為的な埋め戻しが認められた。覆土中から土器が検出され、土坑墓と考えられ、遺物は縄文土器の項で別に取り上げる。

ＳＫ－８土坑（第206図）

本遺構は、５Ａ－51グリッドに位置する。規模は1.3m×1.2mで、ほぼ円形を呈する。底面も0.8m×0.8mの円形で、掘り込みは、底部に向けて急角度になっている。本遺構の北0.5mのところにＳＫ－７土坑が位置する。

ＳＫ－９土坑（第205図）

本遺構は、１Ｅ－04グリッド付近に位置する。規模は1.1m×0.8mで、楕円形を呈する。底面も0.8m×0.6mの楕円形で、底面の南東部に直径0.2m、深さ0.1mほどの小ピットが一つある。

ＳＫ－１０土坑（第204図）

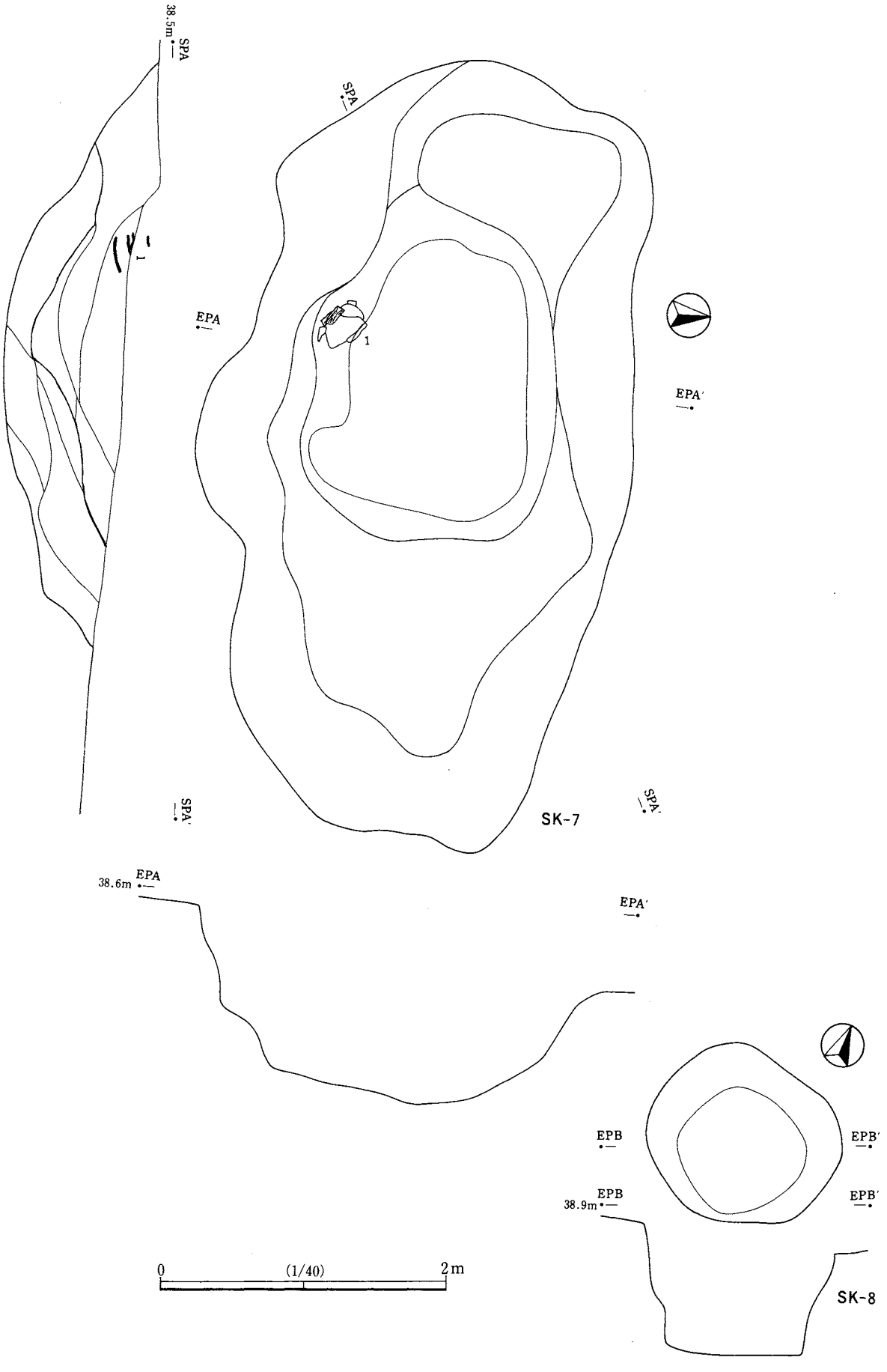
本遺構は、１Ｅ－13グリッドに位置する。規模は0.5m×0.5mで、円形を呈する。底面も0.25m×0.25mの円形で、掘り込みの深さは最大で0.4mを測る。

ＳＫ－１１土坑（第204図）

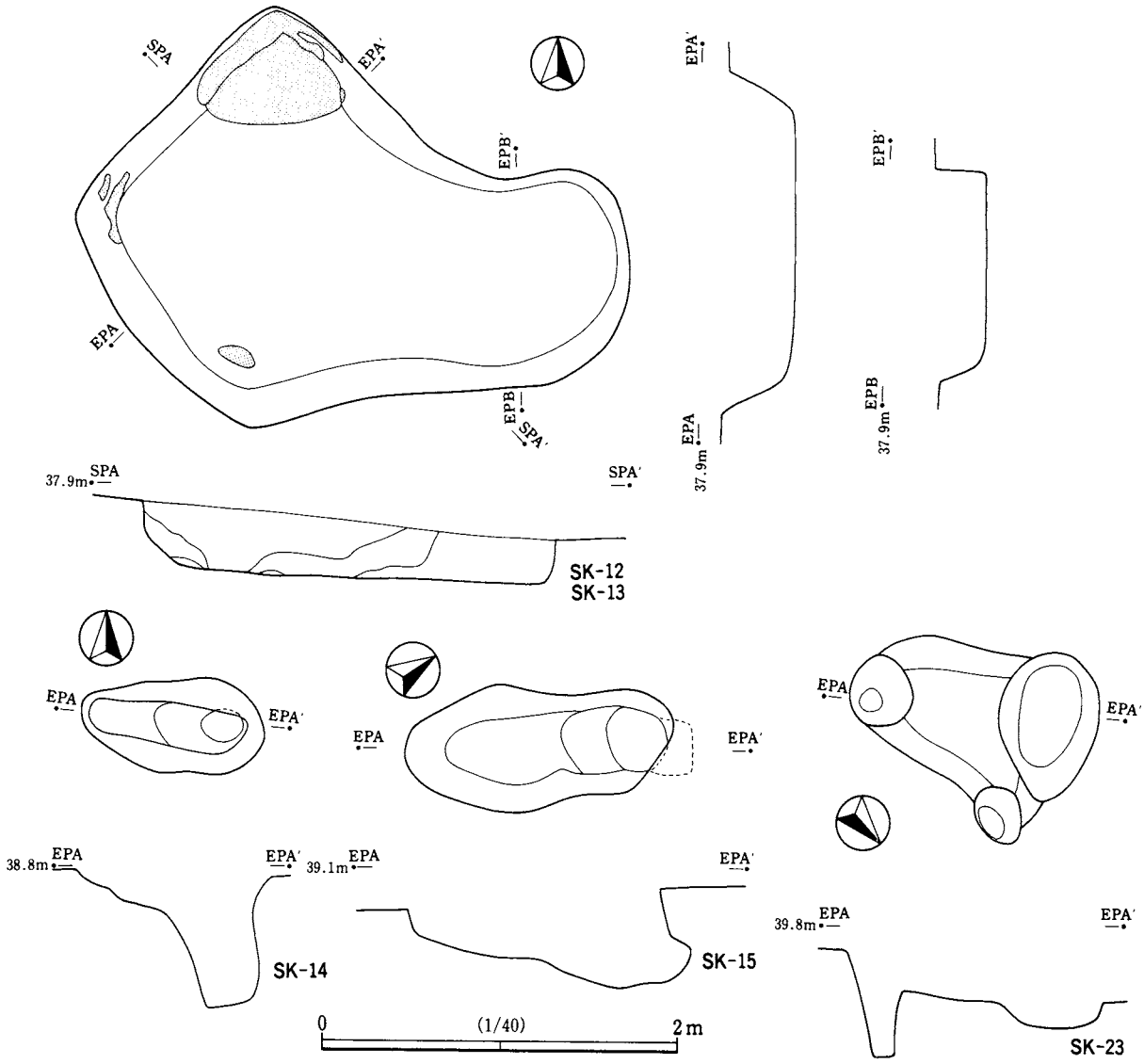
本遺構は、１Ｅ－13グリッドに位置する。規模は1.3m×0.7mで、細長いが不整形である。円形と楕円形の二つの掘り込みによってできた土坑という形をしている。北側にある円形のものは、0.4m×0.3mの規模で深さは0.4m程度である。南側にある楕円形のものは、1m×0.7mの規模で深さは0.6m程度である。本遺構の東にＳＫ－１０土坑が、南西にＳＫ－１土坑が位置する。

ＳＫ－１２炭焼窯（第207図、図版36）

ＳＫ－１２土坑とＳＫ１３土坑は、つながって位置しているが、そのうち北西部にある四角形を呈したものをＳＫ－１２土坑とする。場所は３Ｃ－72グリッドに位置し、規模は約1.7m四方で、掘り込みの深さ


38.5m
SPA
SPA
1
EPA
1
EPA'
SPA'
SPA'
SK-7
38.6m
EPA
EPA'
EPB
EPB'
38.9m
EPB
EPB'
SK-8
0
(1/40)
2m

第206図　土坑等（3）



第207図　土坑等（４）

は0.4m程度である。底面付近から焼土および炭化物を検出したことから炭焼窯とみられる。

ＳＫ－１３土坑（第207図、図版36）

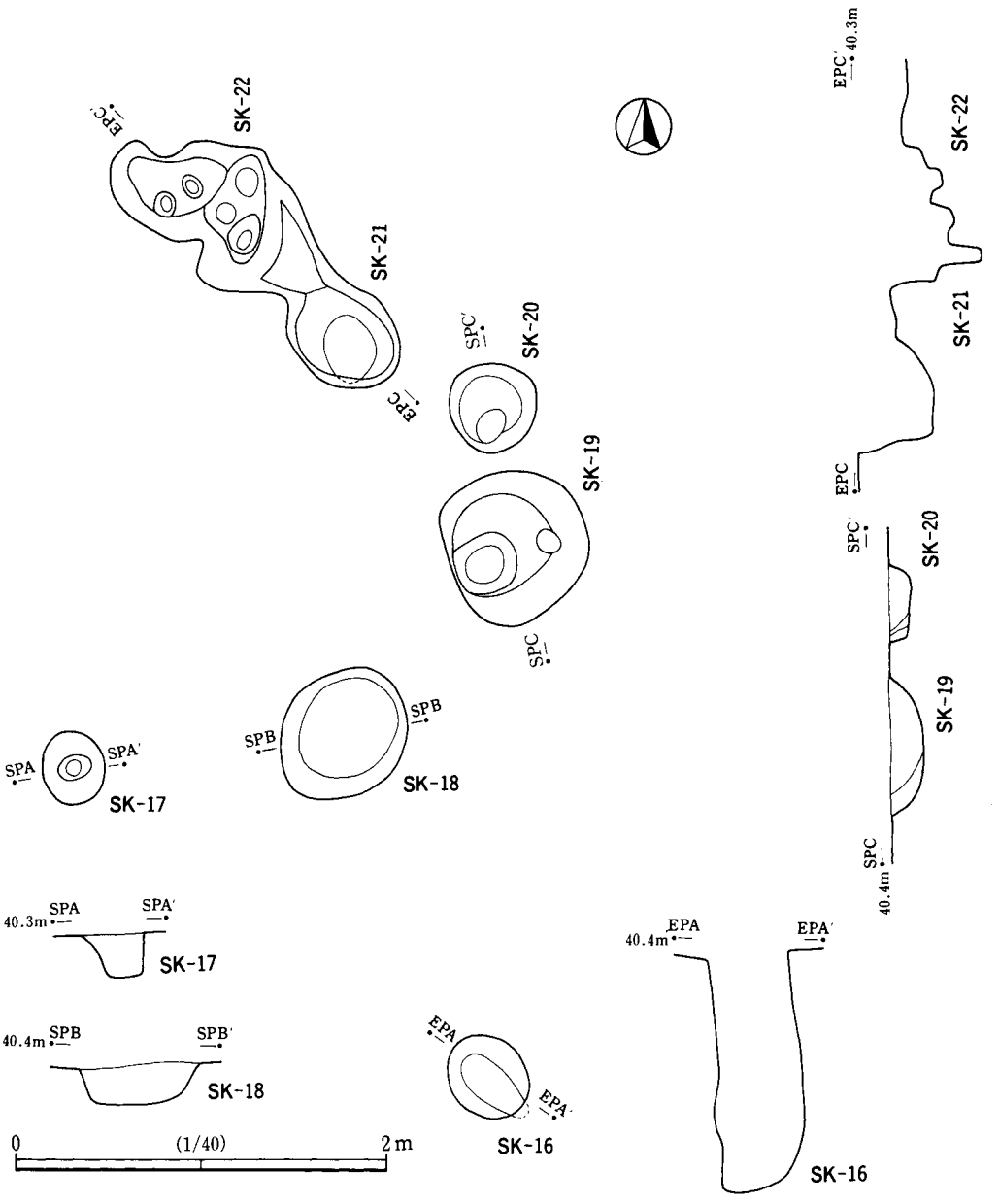
本遺構は、３Ｃ－72グリッドに位置する。規模は約1.3m×1.3mで、円形である。掘り込みの深さは約0.3mで、ＳＫ－１２炭焼窯とつながり底面はほぼ平坦である。

ＳＫ－１４陥穴（第207図、図版36）

本遺構は、４Ｂ－33グリッドに位置する。規模は2m×1mで、楕円形を呈する。長軸方向はほぼ東を向く。掘り込みは東が深く西が浅いが、東側では底面に向けてほぼ垂直に掘り込まれており、深さは最大0.7mを測る。また、短軸方向からみるとＴピットとよばれる形に掘り込まれているので、陥穴とみられる。

ＳＫ－１５土坑（第207図）

本遺構は、３Ｃ－17グリッドに位置する。規模は1.5m×0.7mで、0.5m四方の四角形と0.9m×0.7mの楕円形がつながった形をしている。四角形の掘り込みは本遺構の北側に位置し、深さは約1mを測る。それにつながって掘り込みが段々と浅くなってつながっているのが南側の楕円形の部分である。四角形の掘り



第208図　土坑等（５）

込み部分には底面で広く焼土が検出されたことから、炭焼窯より規模が小さいものの炭焼きに使われた遺構であるとみられる。

ＳＫ－１６土坑（第208図）

本遺構は、４Ｂ－06グリッドに位置する。規模は0.5m×0.4mで、ほぼ円形を呈する。深さは1.5mを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。ＳＫ－１７・１８・１９と本遺構から3m以内に位置するが、本遺構だけ掘り込み方が異なっている。

ＳＫ－１７炉穴（第208図）

本遺構は、４Ｂ－05グリッドに位置する。規模は0.3m×0.4mで、ほぼ円形を呈する。掘り込みの深さは約0.2mを測り、底面に向けて急角度に掘り込まれている。覆土中からは、広く焼土と炭化物を検出し、土もしまっており、炉穴とみられる。また、本遺構の3m以内に位置するＳＫ－２０炉穴からも、焼土や炭化物が検出されている。

ＳＫ－１８土坑（第208図）

本遺構は、４Ｂ－06グリッドに位置する。規模は0.8m×0.7mで、楕円形を呈する。掘り込みの深さは約0.2mで、0.6m×0.5mの楕円形を呈する底面に向けて緩やかな角度で掘り込まれている。

ＳＫ－１９土坑（第208図）

本遺構は、３Ｂ－96グリッドに位置する。規模は0.8m×0.8mで、ほぼ円形を呈する。底面に二つのピットがあり、西側にあるものは直径0.3m、深さ0.25mを測り、東側にあるものは直径0.1m、深さ0.2mを測る。

ＳＫ－２０炉穴（第208図）

本遺構は、３Ｂ－96グリッドに位置する。規模は0.5m×0.5mで、円形を呈する。掘り込みの深さは約0.15mであり、覆土はほとんど炭化物であり、底面に焼土が観察され、炉穴とみられる。ＳＫ－１９・２０・２１・２２と、ほぼ一直線に並び、間隔も0.1mから0.2mと接している。

ＳＫ－２１炉穴（第208図）

本遺構は、３Ｂ－96グリッドに位置する。規模は0.7m×0.5mで、楕円形である。ＳＫ－２２土坑とは遺構の北西部を接しているが、底面の形状や覆土の違いから別遺構としたものである。掘り込みは約0.1mと浅く、覆土はほとんどが焼土となっており、炉穴とみられる。

ＳＫ－２２土坑（第208図）

本遺構は、３Ｂ－96グリッドに位置する。規模は1.2m×0.7mで、不整形である。底面には五つの小ピットがあり、直径はおよそ0.1mほどで、深さは最大0.5mを測る。

ＳＫ－２３炉穴（第207図）

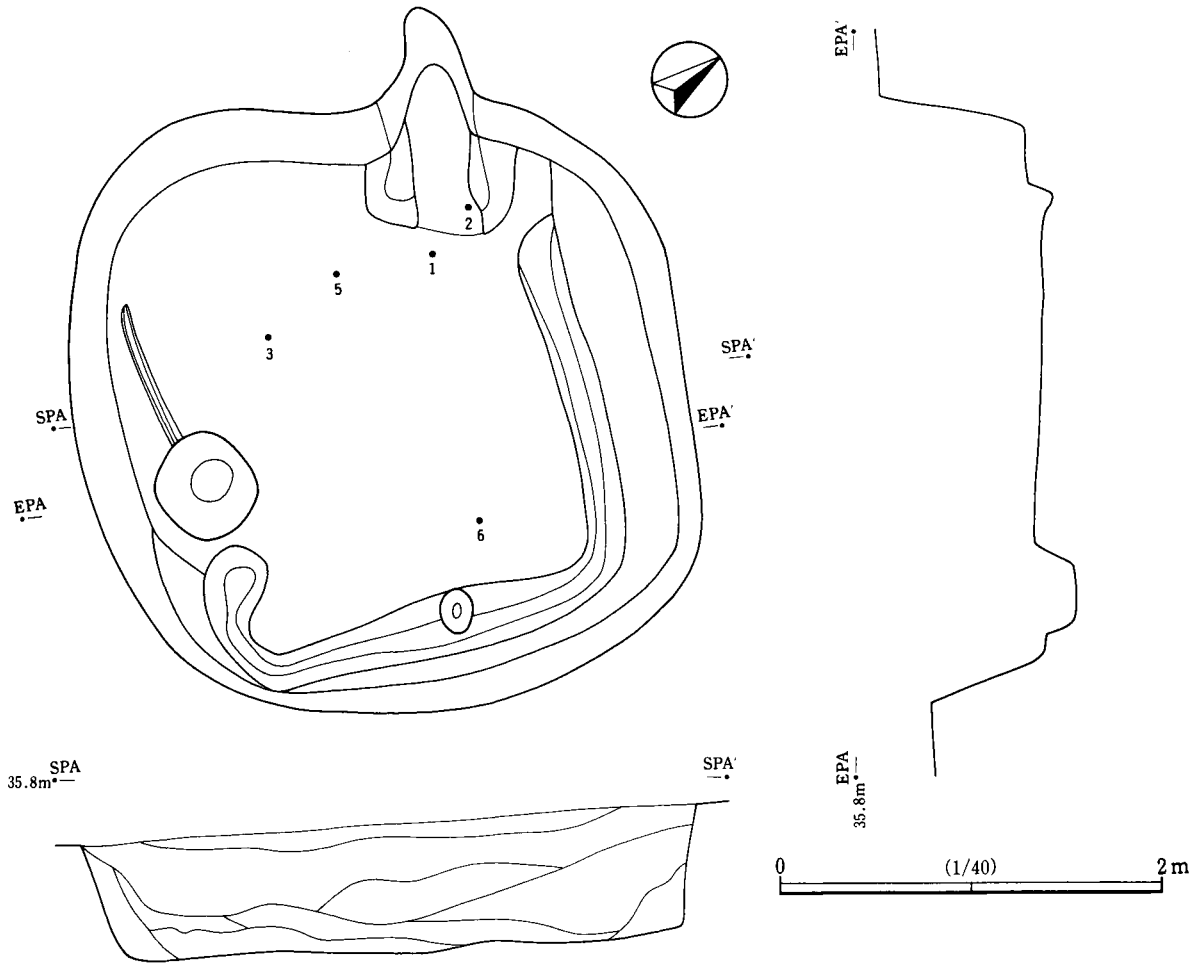
本遺構は、４Ｂ－40グリッドに位置する。規模は1.4m×1.0mで、不整形である。遺構の隅にピットが計三つあり、それが遺構の底面を形作っている。ピットの直径は、0.3mから0.7mで、深さは0.2mから0.6mを測る。覆土はほとんどの層で炭化物を多く含んでおり、底面中央部からは焼土を検出したので、炉穴とみられる。

ＳＩ－１住居跡（第209・210図、図版35）

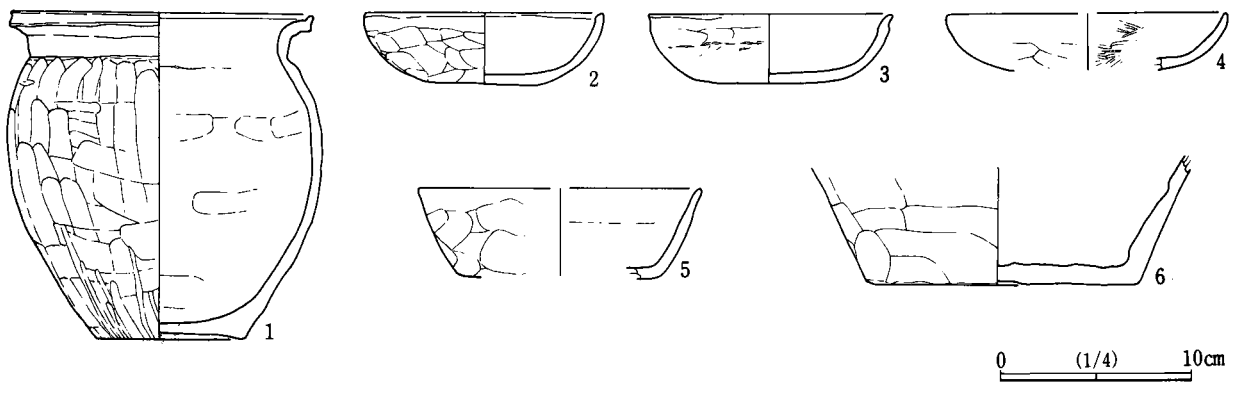
本遺構は２Ｄ－09グリッドに位置する。主軸を北西に向ける住居跡で、形態は円形に近い隅丸方形である。規模は径3.2mで、掘り込みは0.6m～0.8mと深いが形態がやや不明瞭で、掘り込みと床面の形状がうまく合致していない。掘り込みは円形に近く、床面には壁溝が隅丸方形に巡り床の形状を窺わせるが、それと掘り込みは一致していない。形態はやや不確定的である。床面は貼り床がなされ踏み固められ硬化していた。柱穴にあたるものはなく、南西辺に径0.5m、深さ0.25mのピットが検出された。貯蔵穴にでもなろうか。床面壁近くには壁溝と見られる溝がカマド側以外の３辺に巡るが、北東辺は壁際から約0.3m内側に入り込んで巡り、北西辺も壁際から内側に約0.2m入り込んで巡る。南東辺はほぼ壁際を巡っている。壁溝の巡る位置は住居跡の形態からは整っているように見え、壁の立ち上がりと覆土の境界が不明瞭な状態での調査で、掘り込みの形状を誤った可能性も考えられる。

カマドは北西辺に中央よりやや東寄りに検出され、暗褐色山砂で構築された袖が確認され、煙道部の掘り込みは確認されたが、構築材は確認できなかった。また火床はあまり焼けておらず焼土炭化物の検出も少なかった。

遺物はカマド寄りから出土している。１はほぼ完形の土師器の甕で、口径15.8cm、器高16.8cm、底径7.8

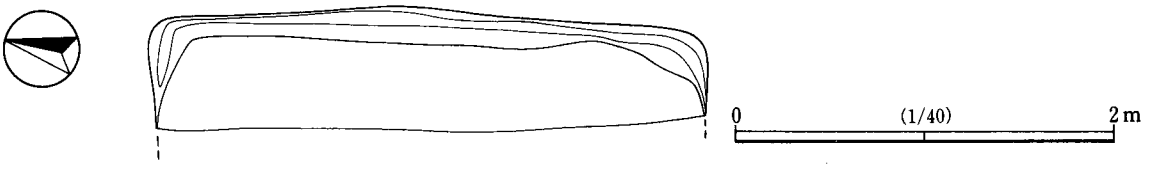


第209図　ＳＩ－１住居跡



第210図　ＳＩ－１住居跡出土遺物

cmを測る。大きく外反する口唇部は直立し、内外面共に横ナデが施される。胴部はヘラケズリ後粗いナデが施される。底部近くには一部ミガキが認められる。２、３、４は土師器の杯で、２は完形である。２は口径12.4cm、器高3.6cmを測り、二次焼成で器表は荒れている。外面はヘラケズリが施され、口縁近くはナデが施される。胴部と底部の境界は不明確である。３は、復元径12.8cm、器高3.5cmを測り、口唇部は細くやや外反するようにつまみ上げられている。４は復元径14.8cmで、外面はヘラケズリ後ナデ、内面はミガキが施される。５は復元径14.8cm、器高4.6cmを測り、体部と底部の稜のはっきりした杯である。外面はヘ



第211図　ＳＩ－２住居跡

ラケズリ後ナデ、内面はナデが施されるが、器表は摩耗している。６は土師器の甕の底部で、器厚は厚く約１cmほどある。底径14.2cmを測り、全体的に二次焼成を受けている。外面はヘラケズリ後ナデが施される。

ＳＩ－２住居跡（第211図、図版35）

調査区の南側１Ｄ－73グリッド周辺に位置し、上面を削平されほんの少ししか遺存していない。調査できた部分は長さ３m、幅0.65mの細長い部分で、これからみると隅丸方形の住居跡の東側の辺を調査したような格好となる。とすると、方向はほぼ南北に向く住居跡で一辺が３mの隅丸方形の形態の住居跡であったとみられる。掘り込みの深さは、0.15mで、西側は削平されて壁も床も消失してしまう。東側では壁溝が巡り全周していたものとみられる。床面には柱穴等の施設は何も検出されなかった。遺物も少なく図示できるようなものは出土していない。

遺物

縄文土器（第211～214図、図版62）

ＳＫ－７出土遺物

１は器形復元できる大型の浅鉢で、底部はすべてが、口縁部も半分近くが残存している。口径は約35.2cm、器高は14.2cm～14.9cm、底径は6.5cmである。比較的小さい底部から器壁が大きく外反するように立ち上がり、口縁部で直立する形状を呈する。口唇部は下膨れ状に肥厚し、その下側は内面、外面とも屈曲を強調するような横方向のケズリもしくはナゾリが施される。胎土は粒子が粗く、石英、長石粒が多量に混入する。色調は内面が橙色もしくは淡褐色、外面が乳褐色に発色する。焼成は悪く、全体にもろい。地紋は施されず、胴部上半部に微隆起状の水平な浮線文が上下に２本めぐらされ、その間にレンズ状の浮線文が施される。このレンズ状の浮線文は外周45度につき１単位づつ施されており、全体で８単位施されるものと考えられる。口唇上の小突起は、このレンズ状の浮線文１単位につきおおよそ２か所つけられているが、配置はあまり厳密ではない。各単位間のつながりはかなり希薄で、連結部にも刺突や貼り付け瘤などは一切なく、上下の浮線にもつながらない。また、横走する各浮線間の陰刻は、ケズリやナゾリというよりは沈線に近い印象を受ける。晩期終末期の千網式に比定されるが、後述するIII群２類の資料により古い段階に属する可能性が強い。

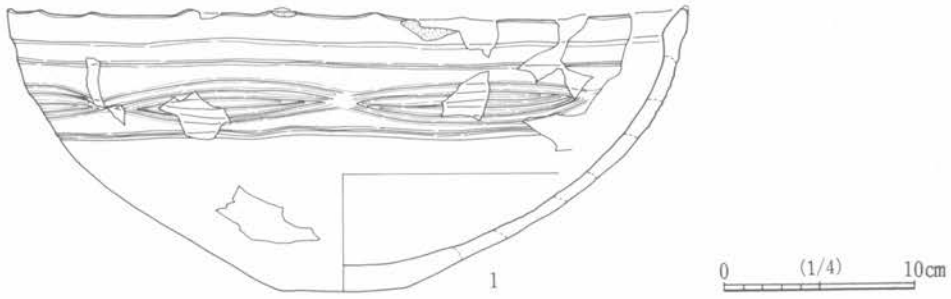
グリッド出土遺物

全部で80点弱出土している。グリッド出土が大多数であるが、いくつか遺構出土のものもある。ただし、先述した晩期の浅鉢を除いて確実に遺構に伴うといえるものはない。

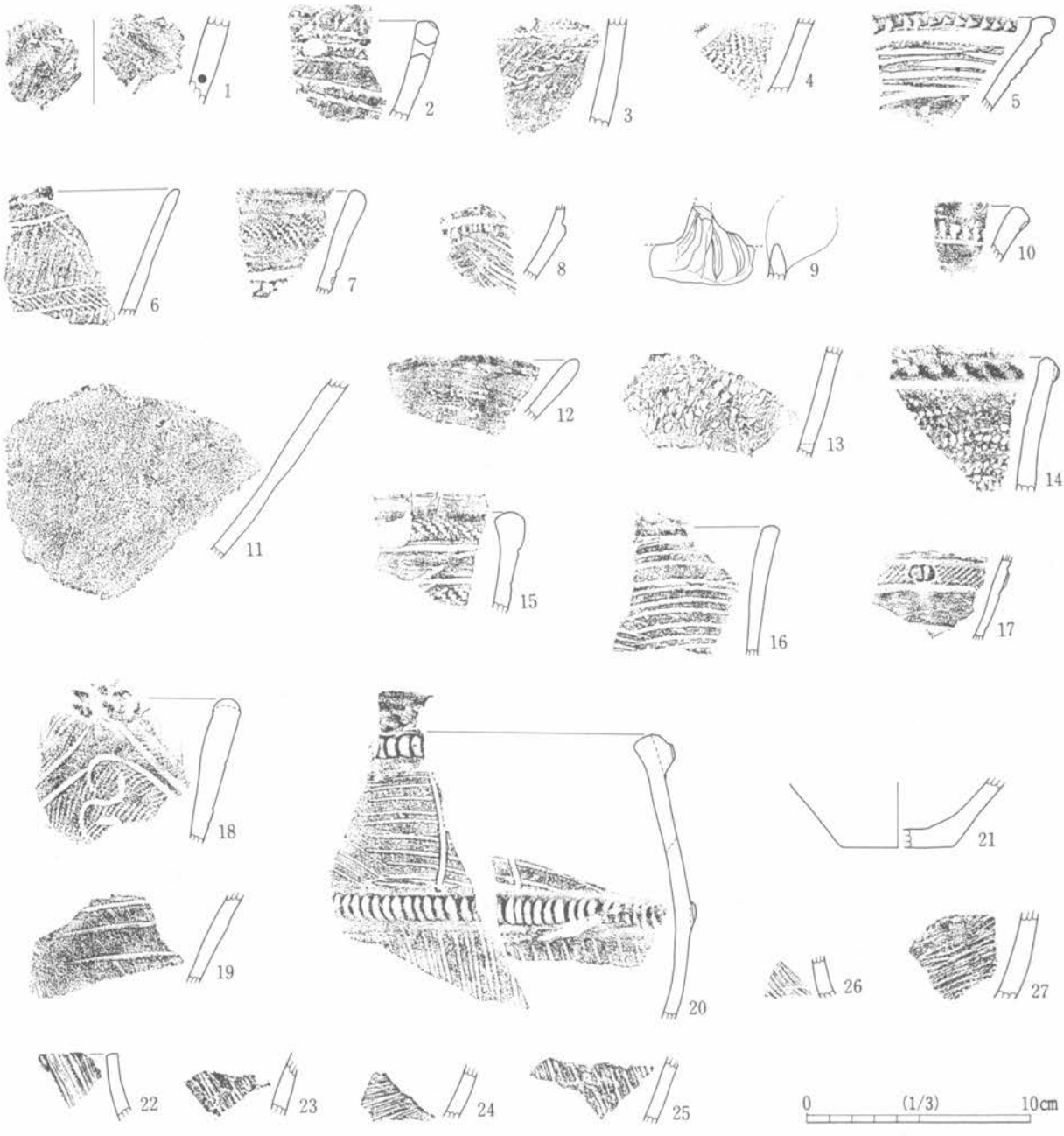
第Ｉ群（１～４）

早期から後期初頭を一括する。図示したものがすべてである。

１は胎土がやや粗く植物繊維を多量に含み、内・外面とも擦痕が顕著である。早期条痕文土器である。２、３は半截竹管による連続爪形文が施されるものである。２は口唇部上面にハの字状のキザミが観察さ



第212図　ＳＫ－７土坑出土土器



第213図　縄文土器

れる。3は連続爪形文の下に結束を持つ単節縄文が施される。前期浮島式である。4は胎土が粗く全体に摩滅している。縄文施文のあと太い棒状工具による沈線が入り、そこを境に縄文が磨り消されている。中期末から後期初頭のものであろう。

第II群（5～16）

後期中葉から末にかけての土器を一括する。全部で60点近く出土しており、最大多数を占める。

1類（5～10）

加曽利B式の精製土器である。5は口縁部が大きく開く深鉢で、口唇部は内側に肥厚する。口唇部外側に刺突文がつけられ、その下側に横方向の沈線が施される。6は波状口縁の深鉢で、縄文施文のあと平行沈線が施され、その間を残して縄文が磨り消されている。7は口縁に添って帯縄文が配され、その下に横方向の沈線と刺突文が施される。8は深鉢の胴部で、比較的小さい底部から大きく開くように立ち上がってきた器壁が屈曲する部分にあたる。屈曲部に添って沈線と刺突文がめぐらされ、下側に条線が施される。9は把手を持つ口縁部である。薄い円盤状の把手が口縁に直交するようにつけられ、脇に棒状工具による沈線が入った瘤が貼り付けられる。内面側には円形刺突がつけられる。10は口唇直下に刺突文と平行沈線が施される。

2類（11～14）

加曽利B式に属すると考えられる無文土器と粗製土器である。11、12は無文土器である。いずれも底部から口縁部に向かって大きく開く器形を呈する。13、14は加曽利B式の粗製土器である。13は縄文施文の胴部である。14は口縁部で、口縁に添って紐線文を配し、下側に縄文を施す。内面には沈線が2条入る。

3類（15、16）

後期安行式である。15は精製土器の口縁部で、帯縄文を水平に配する。16は粗製土器の口縁部で、横方向に条線が施される。

III群

晩期の土器を一括する。図示したものがすべてである。

1類（17～21）

晩期前半の土器である。17は精製土器の胴部で、沈線に区切られた帯状の磨消縄文上に、ブタの鼻状の貼り付け瘤が観察される。安行3a式である。18は精製土器で、波状口縁である。波頂部に小突起が貼り付けられ、口唇に添って帯縄文が配される。波頂部の下には縦列に入り組むようにS字状の沈線が入る。姥山式である。19、20は粗製土器の下半部である。19は後期安行の粗製土器との判別は難しいが、傾きなどから晩期の粗製土器と考えた。20は口縁部と胴部に貼り付け紐線文をめぐらせ、その間に横位の条線を、下側に縦位の条線を施文する。上半部には双弧状の縦沈線が入るが、その間は磨り消されない。図示した2個体は接合しないが、同一個体のため並べて掲載した。21は底部である。底径は約5.0cmである。

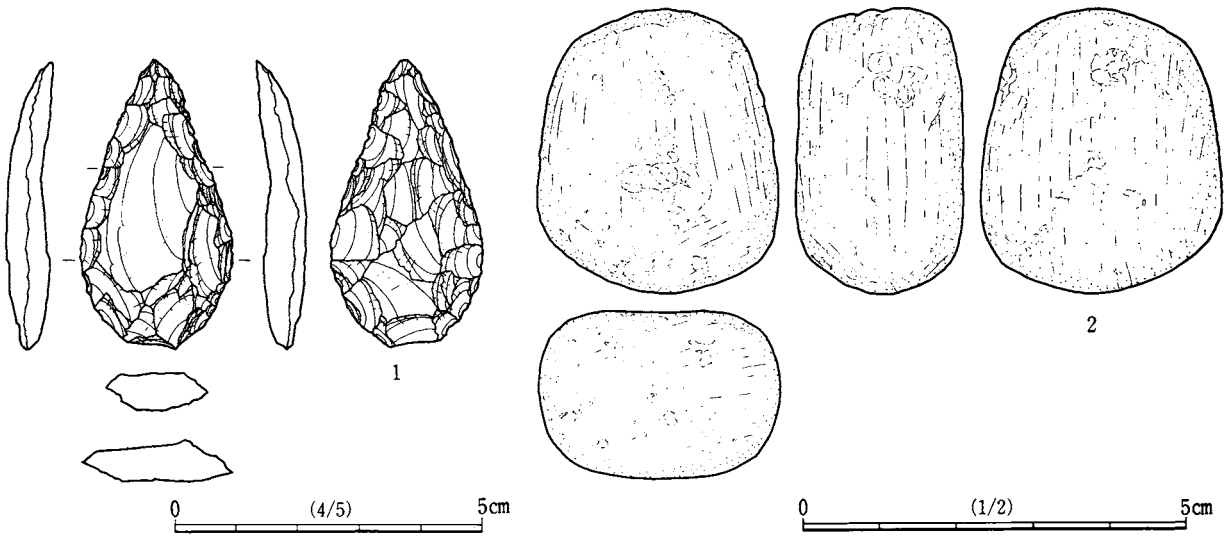
2類（22～28）

晩期後半の土器である。22～26は条痕が施される土器であるが、摩滅が著しい。全体の形状を伺うのは難しいが、22の口縁部の形態などから、壺型土器の可能性が強い。27は撚糸文の土器で、条痕文の土器に比べて粒子が粗く器肉も厚い。

縄文時代石器（第214図、第27表）

本遺跡より出土した石器総点数は9点である。器種は尖頭器1点、磨石1点、礫7点のみである。

1は尖頭器である。おそらく横長剝片を素材として、素材の打面部を右側縁に設定している。背面では器体周縁を中心とした階段状剝離と平坦加工が見られ、素材の剝離面を広く残置する。腹面ではやや広い平坦加工で器体を整形する。形状は先端部が直線的で、基部側に最大幅を持ち、基部は平坦になる。縄文時代草創期の所産と思われる。2は磨石である。全面が擦り面となるもので、両側縁及び下端部にも擦痕が認められるが、表裏面の擦痕が顕著で平坦になる。



第214図　縄文時代石器

第27表　縄文時代石器属性表

No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号	No.	器　種	石　材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	遺物番号
1	尖頭器	安山岩A	46.2	25.2	8.1	7.8	4 B07-0001	2	磨石	安山岩C	73.7	63.8	44.0	302.2	3 C17-0001

XX　ま　と　め

1　旧石器時代

本書所収の18遺跡の内、旧石器時代の遺物を出土した遺跡は7遺跡である。その内、石器集中地点が検出された遺跡は市谷・岡田山・油谷・原山之神・東嵐山遺跡の5遺跡で、他に単独出土の遺跡が2遺跡である。ここでは、この5遺跡を中心にその様相を簡単にまとめていく。ブロックが多数存在する遺跡はなく、同一文化層で複数のブロックが存在するのは油谷遺跡のみであり、他の遺跡はすべて同一文化層内で1か所のブロックとなっている。また、市谷遺跡では文化層を違えてブロックが存在している。

市谷遺跡では2つの文化層が設定された。第Ⅰ文化層は第2黒色帯下部（立川ロームIX層）を出土層準とする石器群である。総点数5点という少数で構成される単独のブロックであるが、珪質頁岩製の石刃及び安山岩製の石刃状剝片などの素材のみで器種構成される特異なものである。九十九里地域の旧石器時代の調査例が少なく比較対象となる遺跡としては、大網山田台№8遺跡文化層Vが該期の唯一のものである。大網山田台№8遺跡[1]では武蔵野台地IX層下部期に一般的に見られる石斧が存在し、定型化された石器が少なく使用痕を有する剝片が卓越する。さらに使用石材は黒曜石が主体となる。市谷遺跡は少数の資料で構成されるため安易な比較はできないが、石刃技法が存在すること、使用石材が珪質頁岩・安山岩ことなど様相の違いが認められる。しかし、この違いはIX層期の根本的な違いではなく二極構造の両側面を表していると考えられる。第II文化層はIII層を出土層準とする石器群である。小型の石刃状剝片と礫製品が目立つ、さらに拳大の楕円礫をチョッピング・ツール状に剝片剝離する石核が認められる。同種の石器群として大網山田台遺跡群IVａ期、砂田中台遺跡文化層IIａの石器群[2]が対比される。時期的には幅があろうが、武蔵野台地IV層上部期の石器群に対比されると考えられる。

油谷遺跡第Ⅰ文化層は立川ロームIV・V層を出土層準とする石器群である。ブロックが2か所、礫群が2か所それぞれ検出された。横長剝片を素材とする切出タイプ・刺突タイプのナイフ形石器、端部のみを調整加工した掻器が認められる。使用石材は安山岩Aと分類したいわゆる緻密黒色安山岩が主体となり、ブロック内で原石からの剝片生産が看取される。油谷遺跡第Ⅰ文化層は特徴的なナイフ形石器の形態や掻器が器種組成すること、礫群が存在することから武蔵野台地IV層下部・V層期の石器群に対比される。天神峰奥之台遺跡（空港№65遺跡）の報文で[3]、下総台地における該期の石器群で使用石材が緻密黒色安山岩が主体を占める遺跡では、礫群が共伴する傾向が強いことを指摘した。油谷遺跡の資料はその傾向がさらに追認されたものとして注目される。

岡田山遺跡第Ⅰ文化層は立川ロームVI層を出土層準とする石器群である。小規模なブロックが単独で検出された。信州系黒曜石のナイフ形石器先端部が出土している。時期的には武蔵野VI層期の石器群と同一時期と見てよい。

原山之神遺跡第Ⅰ文化層は立川ロームIX層中位を出土層準とする石器群である。ブロックと炭化物集中地点がそれぞれ1か所検出された。ペン先タイプの台形石器と敲石（ハンマー）が認められる。使用石材は流紋岩・粘板岩が主体となり、流紋岩製の多面体石核からの剝片生産が見られる。時期的には市谷遺跡第Ⅰ文化層と概ね同一時期の武蔵野台地IX層下部期に比定される。

東嵐山遺跡第Ⅰ文化層は立川ロームIII層を出土層準とする石器群である。小規模なブロックが単独で検

出された。小剝片だけで器種構成しており明確な利器を伴わない。使用石材はメノウのみの母岩となる。時期的には石器群に時期認定の材料が乏しく判然としない。

旧石器時代の石器群を概観してきた。九十九里浜に面した下総台地東南部（九十九里地域）の旧石器時代の調査は、大網山田台遺跡群の大規模な調査例以外は資料に乏しく、空白部であった。千葉東金道路(二期）における調査により、九十九里浜に平行してこの縁辺部を横断するように広域的調査が加わり、当該地域においても少なからず旧石器時代の遺跡が、後期旧石器時代初期の時期から連綿と存在することが明らかとなった。あくまで概観的であるが、資料の豊富な北総地域の様相と比較すると、本報告書に掲載された石器群は様相の大きな違いはないように思える。

2　縄文時代

縄文時代の遺物を出土した遺跡は全部で14遺跡であるが､大谷遺跡を除いてすべて包含層出土であった。中には遺構の存在をうかがわせるような出土状況を示していた遺跡もあるが、それも大規模な集落などを構成するものではなく、全体としては散漫な状況を呈している。しかし、出土遺物には山武地域の縄文時代を考える上で重要な知見を示すものが含まれている。ここでは時期毎に概括し、まとめとしたい。

山武郡域では草創期前半の遺物の存在はほとんど知られておらず、その意味では大谷台遺跡の微隆起線文土器は重要な発見といえよう。文様は波状微隆起線、多段の直線微隆起線ともすべて横方向にめぐらせており、少なくとも出土した範囲では胴部すべてに多段の微隆起線がめぐらされている。微隆起線文土器群の中でも新しい段階に位置づけられる。

早期の資料では、油谷遺跡と岡田山遺跡の撚糸文土器が目を引く。特に油谷遺跡の資料は井草Ⅰ式からⅡ式にかけての一括資料として注目されよう。しかしおしなべて資料は少なく、沈線文系土器はごくわずかしか出土していない。どのような遺跡からでも出土が観察される条痕文土器も、遺物の全体量からすれば少ないといえる。なお、油谷遺跡では早期末の資料も出土している。

前期前半では、やはり大谷台遺跡の関山式から黒浜式土器の資料が第一にあげられよう。黒浜式はいわゆる肋骨文などはほとんどなく、中部地方の有尾式の影響と考えられる菱形文が多量に出土したことは注目される。なお、大網白里町の砂田中台遺跡は黒浜式の集落跡であり、大谷台遺跡との関連が想定される。前期後半になると鹿穴遺跡に、浮島Ⅲ式から興津式にかけてのまとまった資料がみられる。また、大谷台遺跡からは、大木系土器の強い影響を受けている深鉢や、残念ながら類例は調べられなかったが、中部地方の前期後半の影響を受けたと考えられる資料が出土した。

中期初頭は、鹿穴遺跡の浅鉢２点が注目されよう。前期末と中期初頭との接点と言えるような資料である。また、市谷遺跡では下小野式と考えられる資料が出土している。両遺跡とも、前期後半の資料も出土しており、連続性がうかがえる。ただしそれ以降は、新堀遺跡で阿玉台式土器が若干出土しているぐらいで、加曽利Ｅ式になると全遺跡ともわずかの出土が見られるに過ぎない。

後期前半は、鹿穴遺跡で堀之内式土器がまとまって出土している。大多数が堀之内１式で、個体数としてはかなりのものになるが、堀之内２式は器形復元ができたものがほとんどである。中葉の加曽利Ｂ式は油谷遺跡や鹿穴遺跡でまとまって出土しているほか、ほとんどの遺跡で少しずつ出土している。後期安行式になると、極めて少なくなる。

晩期は数こそ少ないものの、いくつか注目すべき資料が出土している。大谷遺跡では浮線文が施された

大型の浅鉢が出土しており、土壙墓が存在した可能性が強い。また、小破片ながら条痕文土器も出土している。市谷遺跡では塚の下に晩期の包含層が残存しており、工字文が施された浅鉢や、撚糸文が施された壺形土器の破片などが出土している。向畑遺跡でも撚糸文土器が出土している。なお、これらの遺跡からは晩期前半の安行式もしくは前浦式の資料も出土している。

簡単にまとめると、搬入品もしくはその影響を受けたと考えられる資料が極めて多い。地理的にはかなり辺鄙な地域と考えられがちであるが、実際には各地と盛んに交流が行われていたことを示している。その一方で、県内の縄文集落遺跡の頂点にあたる中期末から後期初頭の資料が全くと言っていいほど欠落している。他地域の影響を示す資料が遺構のほとんどない散布地から出土する事実とあわせて、当時の社会組織と遺跡の立地との関係を考える上で、問題を提起しているともいえる。

3　奈良・平安時代

今回報告の18遺跡のうち該期の遺構が検出された遺跡は、大谷台遺跡、新堀遺跡、岡田山遺跡、鹿穴遺跡、原山之神遺跡、大谷遺跡の計６遺跡である。大谷台遺跡は調査区の端に竪穴住居跡１軒の隅部がごく一部調査できたのみで、ほとんど調査できなかった。新堀遺跡では竪穴住居跡４軒が検出され、岡田山遺跡では竪穴住居跡６軒が検出された。鹿穴遺跡では竪穴住居跡３軒が検出され、原山之神遺跡は１軒、大谷遺跡では竪穴住居跡２軒が検出された。

大谷台遺跡の竪穴住居跡は形状は不明確で、遺物も時期の判明するものはない状態なのでここではこれ以上触れない。大谷遺跡の住居跡は出土遺物が非常に少なく、ここでは触れないこととする。

新堀遺跡の竪穴住居跡を個々にみていくと、注目すべき遺物が何点か見受けられる。まず須恵器の転用硯であるが、００２住居跡から１点、０１１住居跡から１点の２点があげられる。次に、硯と関連のある墨書土器は０１２住居跡から１点、グリッド出土遺物で１点があげられる。共に文字は判読できなかった。杯に煤の付着した灯明皿は、００２住居跡から２点出土し、０１２住居跡から１点出土している。これらは仏教の法灯用の灯明皿としての利用が想定される。さらに特徴的な土器としては０１１住居跡出土の鉄鉢形鉢（磁鉢）があげられよう。この遺物は仏教関連遺物としてメルクマール的にみられている土器であり、本住居跡が仏教施設そのものとは考えにくいことから、仏教関連施設としてみることはできようし、さらに周辺に仏教施設である寺院の存在を想定することが可能となろう。

岡田山遺跡は６軒の竪穴住居跡が検出され、各遺構出土の特徴的な遺物をあげると、００２住居跡はカマド両袖の補強材として用いた瓦と灯明皿の出土、００３住居跡もカマドの袖の補強材として用いられた瓦と、「万」とみられる墨書土器の出土、００５住居跡では須恵器の転用硯、００６住居跡では「前寺　□」の墨書土器と灯明皿、香炉の蓋状の土師器の出土があげられる。ここでは灯明皿の出土が目にとまるし、さらには００６住居跡にみられる「前寺　□」の墨書土師器と灯明皿の出土が注目される。墨書の「前寺□」は、前寺という寺名と何らかの記号か文字と考えられる。つまり、墨書は前寺という寺が存在したことを示し、その杯が寺の調度品の１つだったことを物語っている。また灯明皿は、仏への献灯のための灯火器として用いられたとみられる。調査した範囲内に寺の遺構がないことから、寺に関連した者の住居跡か、それとも寺から何らかの理由で流出したものを入手したというようなことが考えられる。

鹿穴遺跡は３軒の竪穴住居跡が検出され、各遺構の特徴的な遺物は、ＳＩ００１住居跡は須恵器の鉄鉢形鉢と灯明皿、須恵器片の転用硯があげられる。これらは共に、仏僧の持物としての用途が想定される遺

物であるが、出土した遺構は何の変哲もない竪穴住居跡であり、この竪穴住居跡を寺院遺構そのものとみることは到底できない。先述の岡田山遺跡と数百mしか隔たっていないこともあり、先に述べた岡田山遺跡と同様な由来で招来されたものであろうし、鹿穴遺跡・岡田山遺跡を含めた周辺地区に寺院の存在を想定できる遺物といってよいだろう。

原山之神遺跡は竪穴住居跡1軒であるが出土遺物は豊富である。その中で特徴的な遺物をあげれば、2点の墨書土器、2点の灯明皿、2点の須恵器の転用硯がある。墨書土器は「山ヵ　大井」、「山ヵ　福□」の2種類が墨書されているが、共に初字の「山」は二字目・三字目の筆勢・筆法と異なり、文字ではなく記号の可能性がある。灯明皿2点は灯火具で、須恵器の転用硯は筆記具であろう。

以上の4遺跡の竪穴住居跡出土の特徴的な遺物を列記しながらみてきたが、共通することは仏教関連遺物の出土例の多さである。灯明皿・鉄鉢形鉢（磁鉢）の出土は、寺僧の持物として指摘できる遺物で、墨書土器の「前寺　□」は寺院そのものの所在を示している。これらの遺物の出土遺構は、大規模な集落内の竪穴住居跡ではなく、小規模なもしくは、ほぼ独立して所在する竪穴住居跡からの出土ということができる。旧来は、大規模な集落調査の際に、村落内に寺院とみられる遺構が検出され(村落内寺院)、その周辺から寺院に関連した遺物が出土し遺構の性格を決定付けるといった例が大半であった。ここでの検出例はそれらと異なり、集落内には寺院の存在する可能性は低く、近隣もしくは周辺地域まで視点を広げた際には、寺院の存在がうかがわれる遺跡からの出土例ばかりであった。今までは、寺院遺構の検出と同様に希有な例として寺院関連遺物の出土をみてきたが、ここでの出土例を考えると、それほど希有ではないように見受けられる。8世紀後半から9世紀代にかけての集落内寺院の数多くの建立例に示唆される仏教の隆盛と時を同じくして、また一方、別の観点からは仏教関連遺物の出土が小規模な集落にまで広がってみられるようになるということからも、仏教の隆盛と在地への浸透・定着という構図が読み取れるようである。

4　結語

本報告書に掲載した18遺跡は、南側は東金市に始まり、北は松尾町に至るまでの16km程の長い距離にわたり、点々と調査された遺跡の調査成果である。調査地点は山武郡内の下総台地上に位置し、今まで発掘調査の手が余り及ばない地域であった。今まで調査の及ばなかった地域にも今回調査のメスが入れられ、台地上の遺跡の分布・時期・様相などがおぼろげながらつかめるようになってきた。

そうした状況の中で旧石器時代は、7遺跡から遺物の出土をみた。7遺跡のうち5遺跡でまとまった遺物が検出され、市谷遺跡では第2黒色帯とソフトローム層中からの2つの文化層が検出された。油谷遺跡では同一文化層中に石器群・礫群が検出され、岡田山遺跡、原山之神遺跡、東嵐山遺跡からも狭い調査範囲ながら小規模な石器群が検出されている。これらの資料は、今まで調査例に乏しかった九十九里地域の旧石器時代文化の解明の手がかりとして、非常に有効な資料となることと思われる。

縄文時代では今回の調査地区の南端に近い東金市大谷台遺跡からは、縄文時代早期の土器包含層の中から草創期の微隆起線文土器片を、今までよりもかなりまとまった状態で検出できたことは特筆してよかろう。検出したのは遺物のみで、それに伴う遺構は検出できなかったが、今までの調査例と比較して、破片が比較的大きく接合できたことだけでも十分な成果と言えよう。県内では出土量の少ない草創期の土器であり、房総の草創期文化の解明の一助として、この資料の出土した価値は高いものと思われる。さらに大

谷台遺跡で、前期前半の黒浜式土器で肋骨文がほとんどみられず、菱形文土器が大量に出土したことは、中部地方の有尾式の搬入品か、もしくはその影響を大きく受けていると考えられる。同様に大木式の影響を受けた深鉢、中部地方の前期後半の影響を受けた資料が出土していることも併記したい。今回報告の遺跡では、県内では縄文集落の中心をなす時期の中期後半から後期にかけての資料が少ない一方で、搬入品やその影響を強く受けた土器が比較的多く検出されているという事実が今回の調査成果として得られている。縄文時代の本地域の特質が反映され、何らかの問題提起がされているのかもしれない。

奈良・平安時代は、大集落や目を引く遺物の出土はなかったが、小規模な村落の状態を示す小集落遺跡である新堀遺跡・岡田山遺跡・鹿穴遺跡・原山之神遺跡から、集落内寺院に関連するとみられる鉄鉢形土器、「□□　寺」の墨書土器などが出土している。それらの調査範囲からは寺院跡遺構の検出はなかったものの、周辺地域に仏教寺院の存在が窺われる状況といえる。いずれの遺跡も寺院を支えるような大規模な集落という見方は出来ないが、周辺に所在したとみられる「村落内寺院」と言われる仏教施設の存在から、当概期の仏教の下層民への浸透の程度が深かったことを窺うには十分な資料となるとみられる。初期寺院の建立から郡寺の成立・国分寺の建立という一時の仏教の隆盛は、当該地域のような辺鄙な台地上の小集落にまで至り、末端への浸透という表現で帰結されるような状況が窺える。

注１　田村　隆ほか　1994　『大網山田台遺跡群Ⅰ－旧石器時代篇－』山武考古資料刊行会

２　田村　隆ほか　1994　『砂田中台遺跡（旧石器・縄文時代篇）』東京急行電鉄株式会社、財団法人　山武郡市文化財センター

３　矢本節朗　1997　「第５章　まとめ　第１節　旧石器時代」『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書－天神峰奥之台遺跡（空港№65遺跡）－』新東京国際空港公団、財団法人　千葉県文化財センター

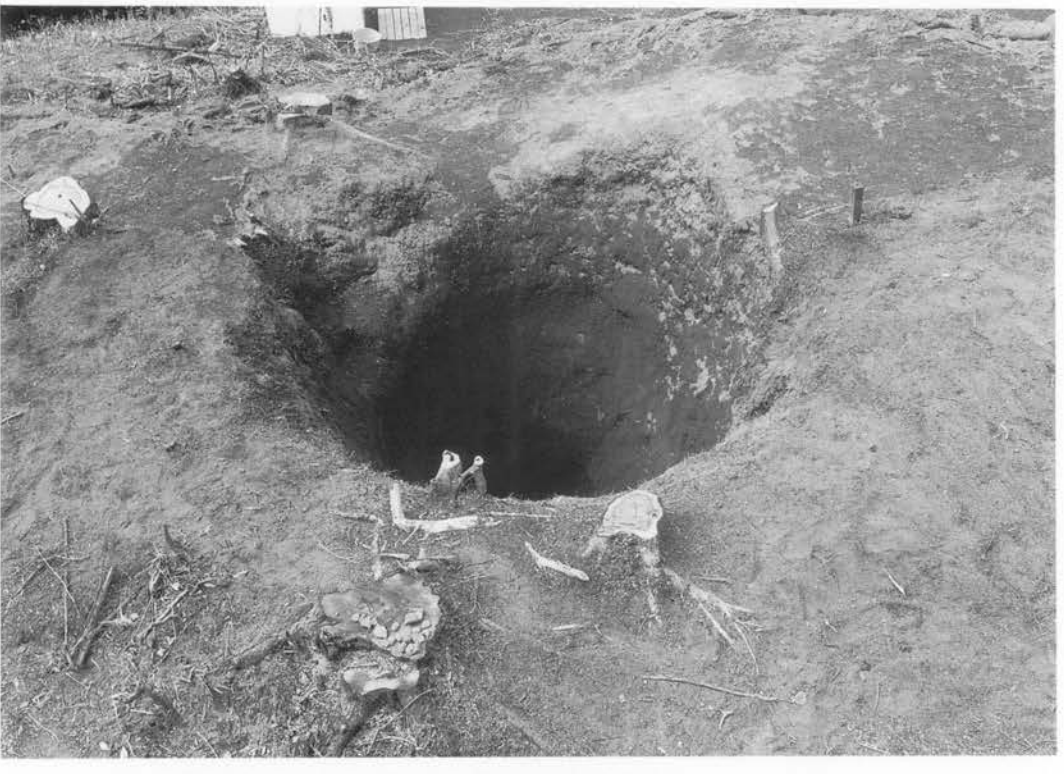
写真図版

大谷台遺跡
全景

大谷台遺跡
シシ穴群

大谷台遺跡
南斜面シシ穴

大谷台遺跡
No. 6 シシ穴



大谷台遺跡
No. 9 シシ穴

大谷台遺跡
シシ穴

大谷台遺跡
土坑群

大谷台遺跡
竪穴住居跡

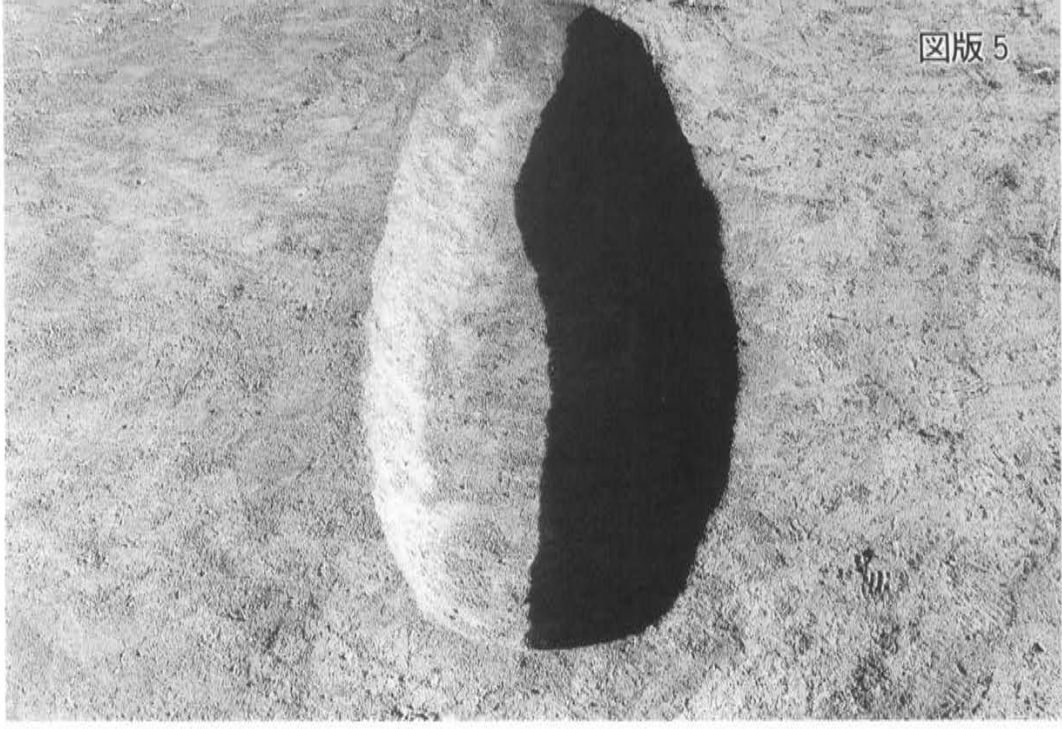
大谷台遺跡
包含層調査風景

図版 4

大谷台遺跡
SK－4、5土坑

大谷台遺跡
SK－6土坑

大谷台遺跡
SK－7土坑



大谷台遺跡
SK－8 土坑

大谷台遺跡
SK-13、14、15土坑

大谷台遺跡
SK-16、17、18土坑

丹尾台遺跡
野馬土手　東トレンチ

丹尾台遺跡
野馬土手　東トレンチ

丹尾台遺跡
野馬土手　中トレンチ

丹尾台遺跡
SK-1 陥穴

丹尾台遺跡
SK-2 陥穴

丹尾台遺跡
SK-3 陥穴

図版 8

万才楽遺跡
遠景

万才楽遺跡
002土坑

万谷遺跡
遠景

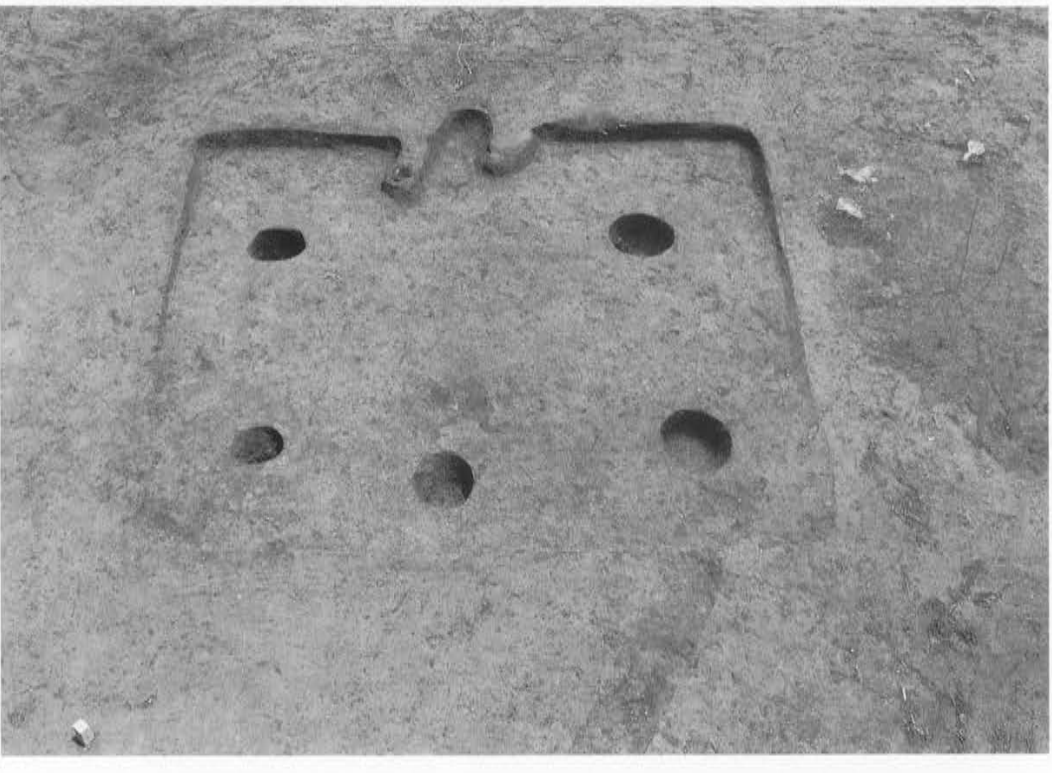
新堀遺跡
遠景

新堀遺跡
標準土層（5D-58グリッド）

新堀遺跡
002住居跡

図版10

新堀遺跡
002住居跡カマド



新堀遺跡
003住居跡

新堀遺跡
011・012住居跡

新堀遺跡
011住居跡カマド

新堀遺跡
012住居跡

新堀遺跡
012住居跡カマド

図版12

新堀遺跡
001井戸

新堀遺跡
004、005、006土坑

新堀遺跡
007土坑

新堀遺跡
008土坑

新堀遺跡
009陥穴

新堀遺跡
013井戸

図版14

新堀遺跡
014土坑

新堀遺跡
015土坑

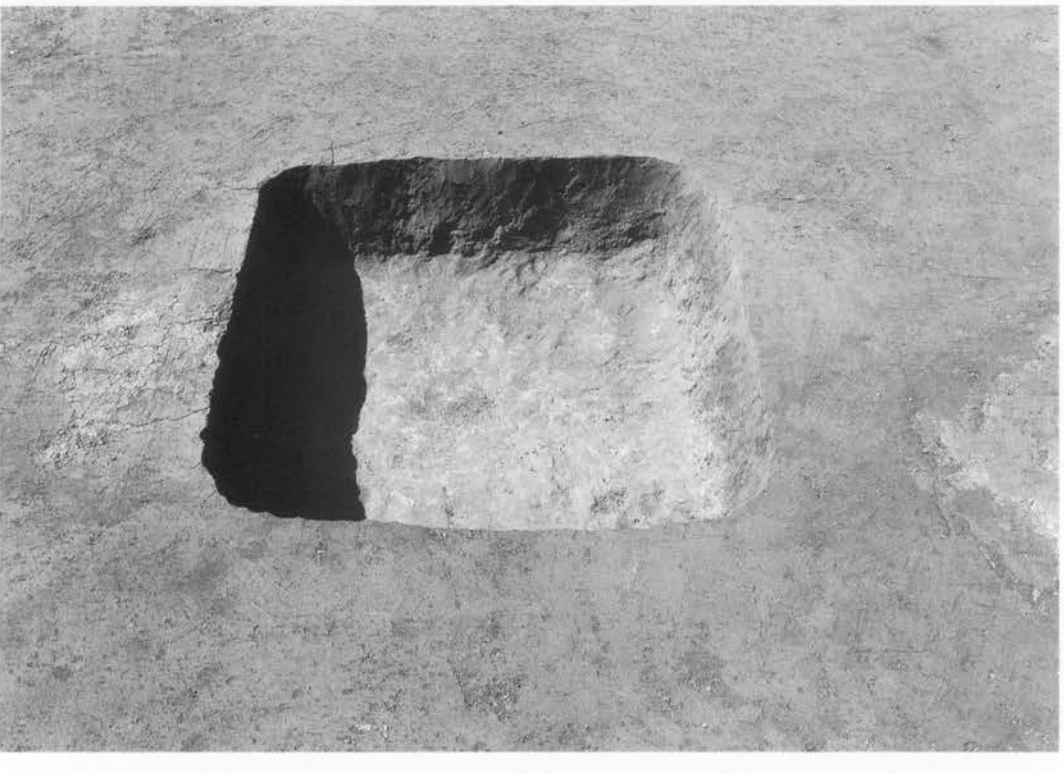
新堀遺跡
016土坑

新堀遺跡
017土坑

新堀遺跡
018土坑

新堀遺跡
019土坑

新堀遺跡
020土坑



新堀遺跡
023土坑

新堀遺跡
029土坑

市谷遺跡
003塚全景

市谷遺跡
003塚全景

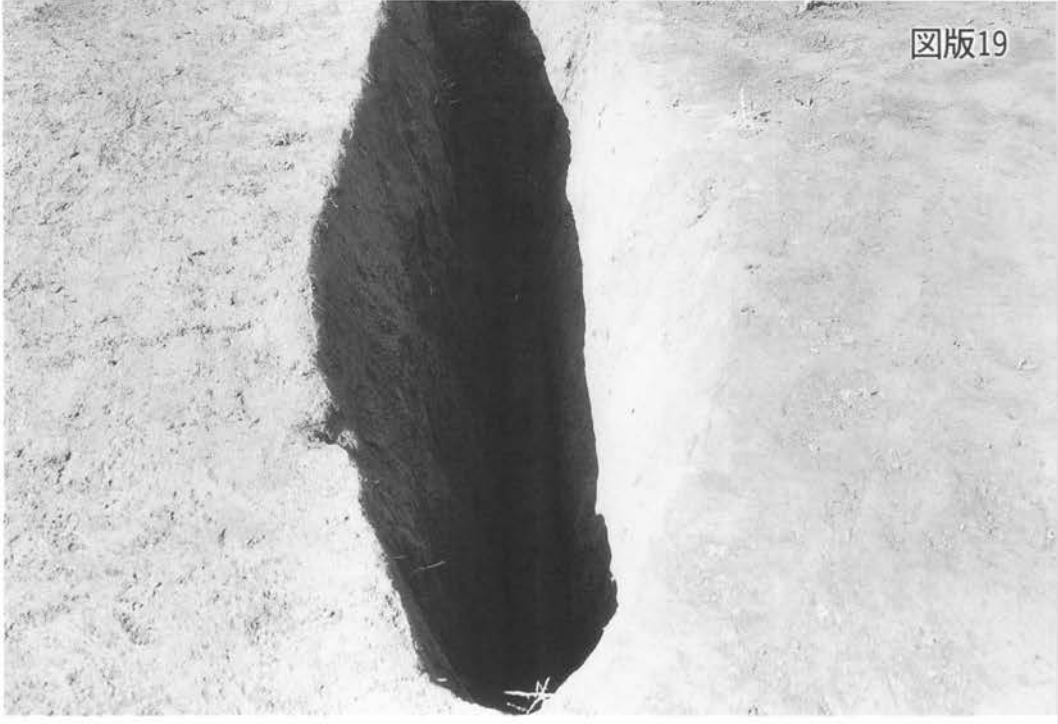
市谷遺跡
003塚セクション

図版18

市谷遺跡
003塚セクション

市谷遺跡
001土坑

市谷遺跡
003土坑



市谷遺跡
004土坑

市谷遺跡
005土坑

市谷遺跡
008土坑

図版20

市谷遺跡
009土坑

市谷遺跡
011土坑

市谷遺跡
012土坑

市谷遺跡
018土坑

市谷遺跡
縄文包含層

市谷遺跡
旧石器第２ブロック

図版22

油谷遺跡
縄文包含層

油谷遺跡
007土坑

岡田遺跡
遠景

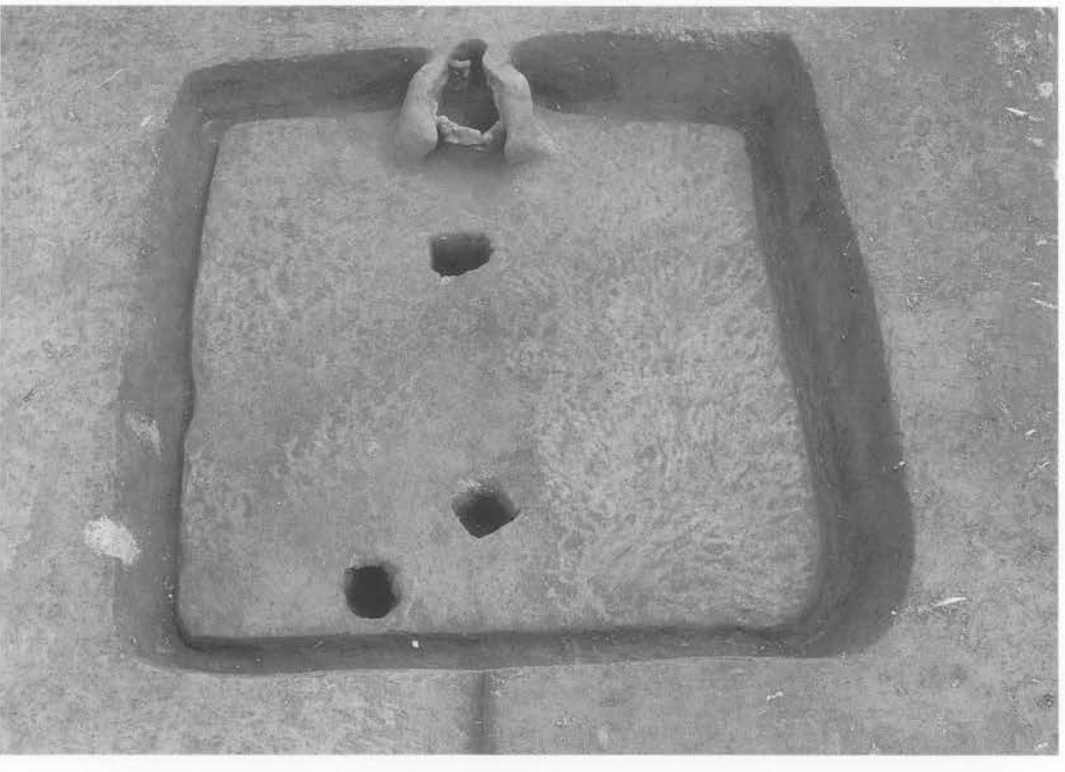
岡田山遺跡
遠景

岡田山遺跡
遺跡全景

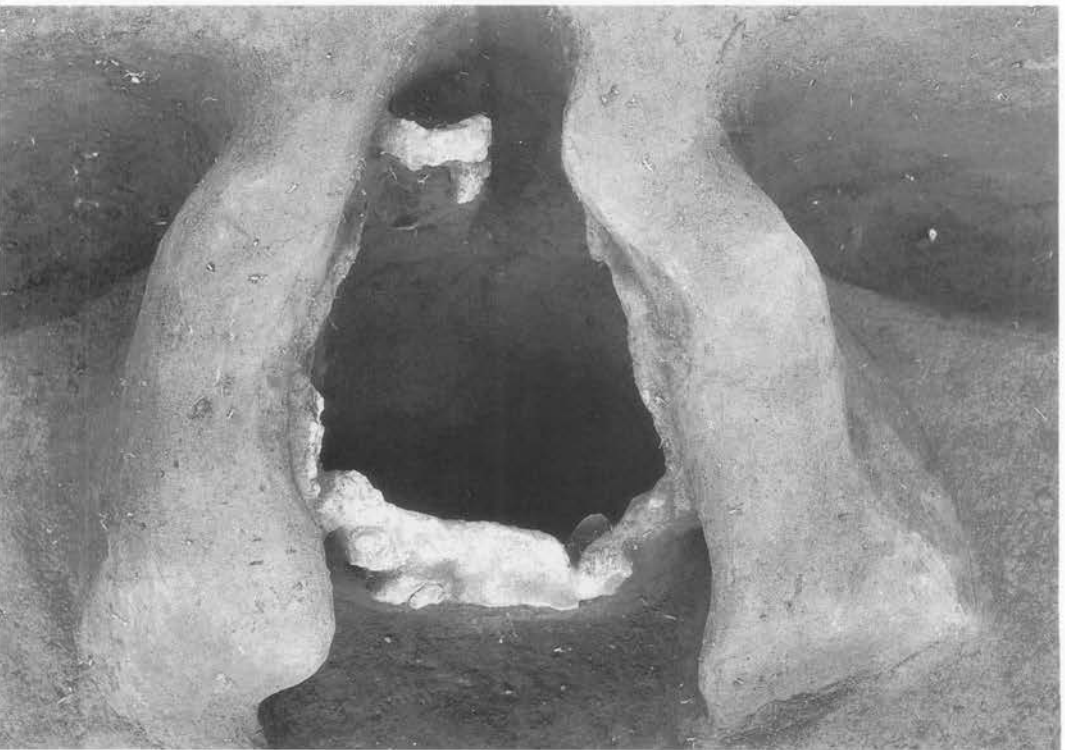
岡田山遺跡
002住居跡
炭化材・遺物出土状況

図版24

岡田山遺跡
002住居跡

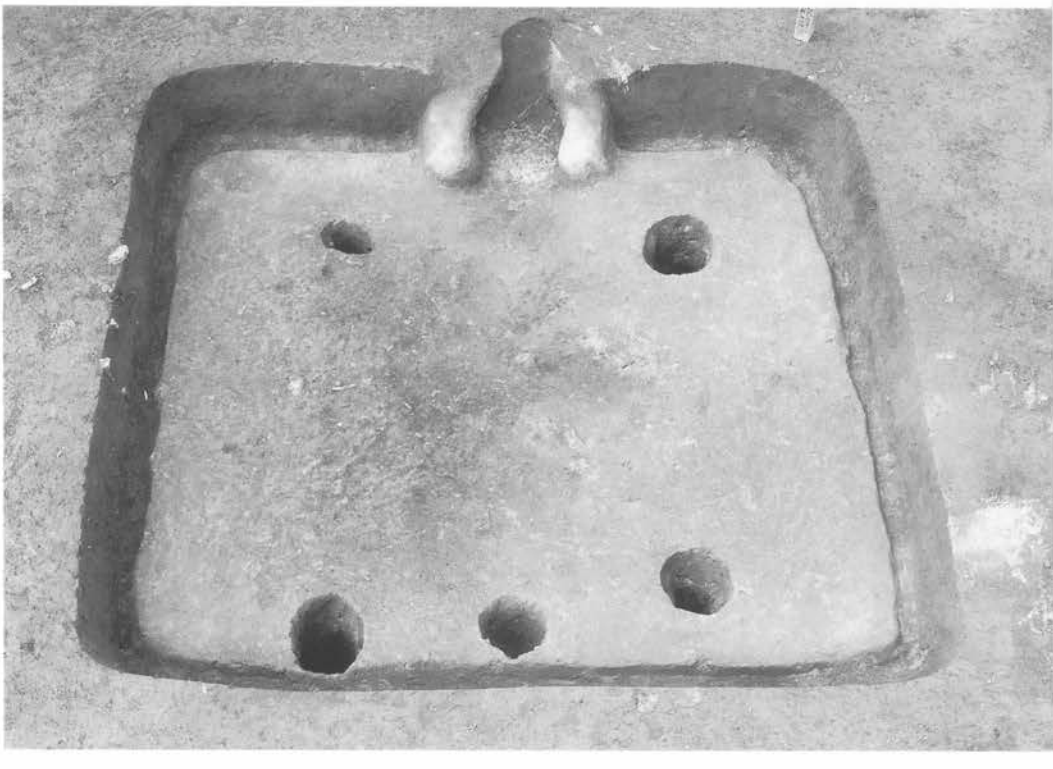


岡田山遺跡
003住居跡



岡田山遺跡
003住居跡カマド

岡田山遺跡
005住居跡遺物出土状況

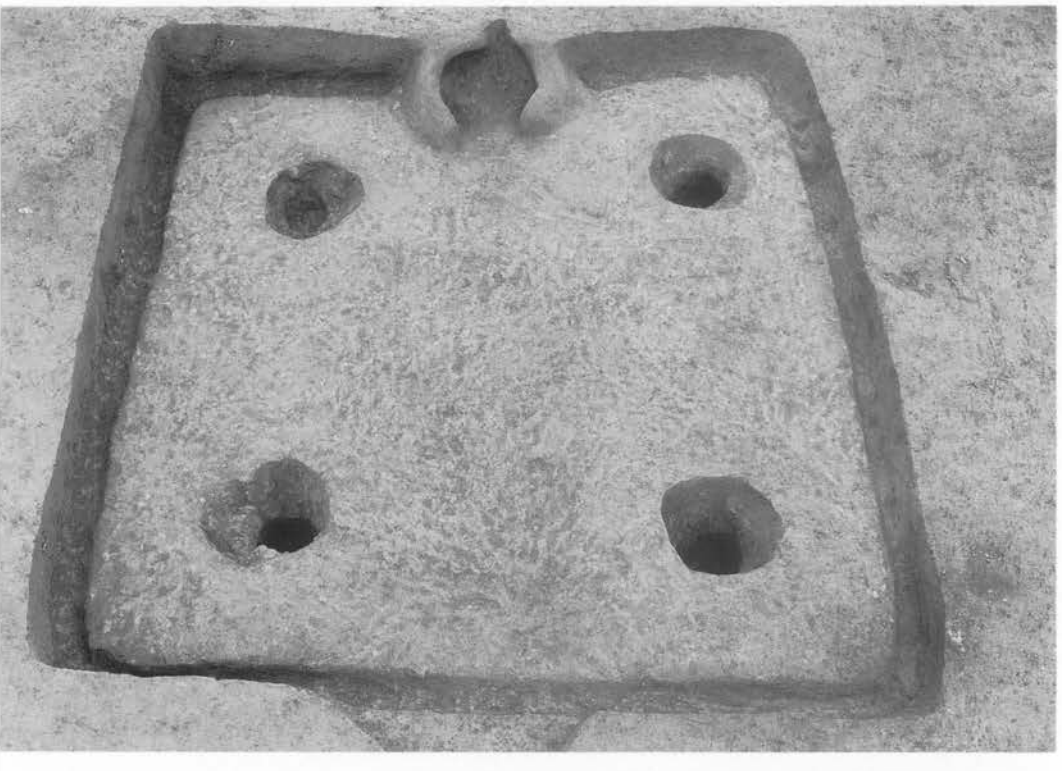


岡田山遺跡
005住居跡

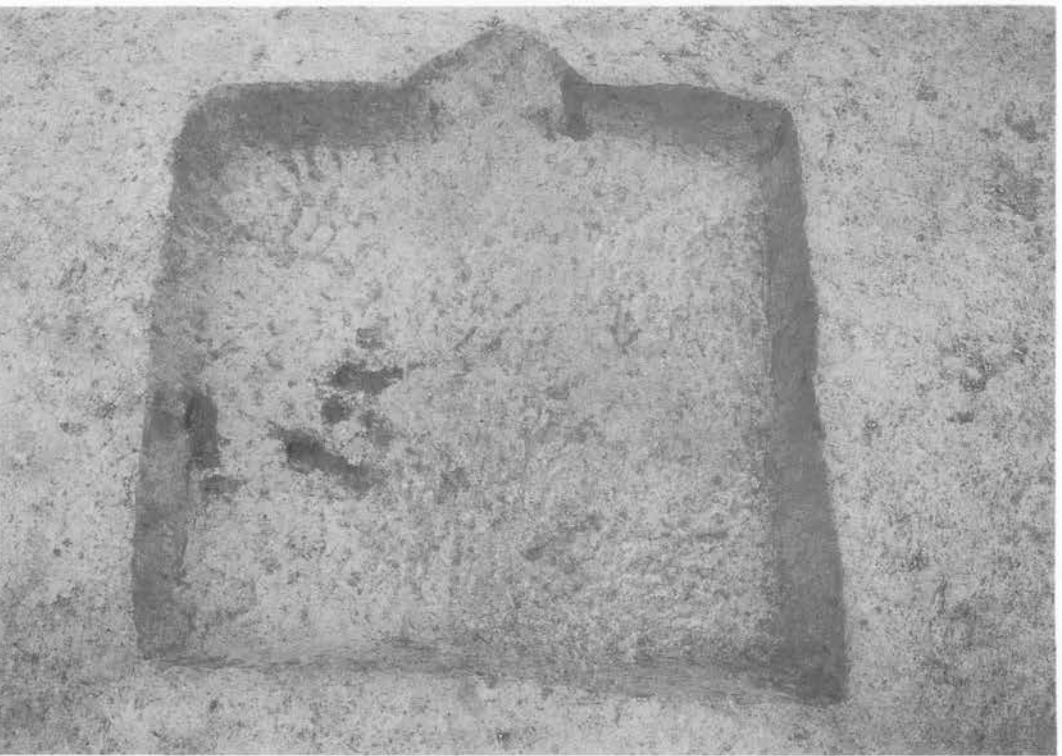
岡田山遺跡
006住居跡

図版26

岡田山遺跡
006住居跡



岡田山遺跡
009住居跡



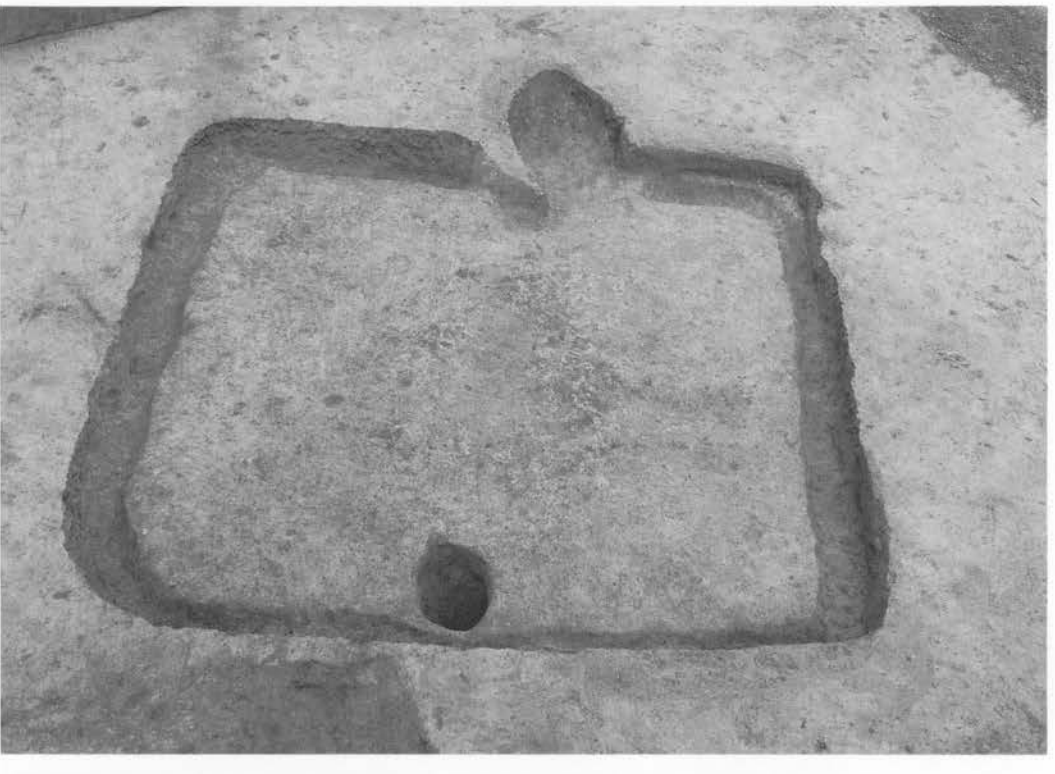
岡田山遺跡
011住居跡

岡田山遺跡
007土坑

岡田山遺跡
012土坑

岡田山遺跡
013土坑

鹿穴遺跡
001住居跡



鹿穴遺跡
002住居跡

鹿穴遺跡
003住居跡

鹿穴遺跡
001土坑

鹿穴遺跡
002土坑

鹿穴遺跡
003土坑

鹿穴遺跡
包含層遺物出土状況

小田山遺跡
遠景

小田山遺跡
トレンチ遺物出土状況

原山之神遺跡
1号住居跡
遺物出土状況

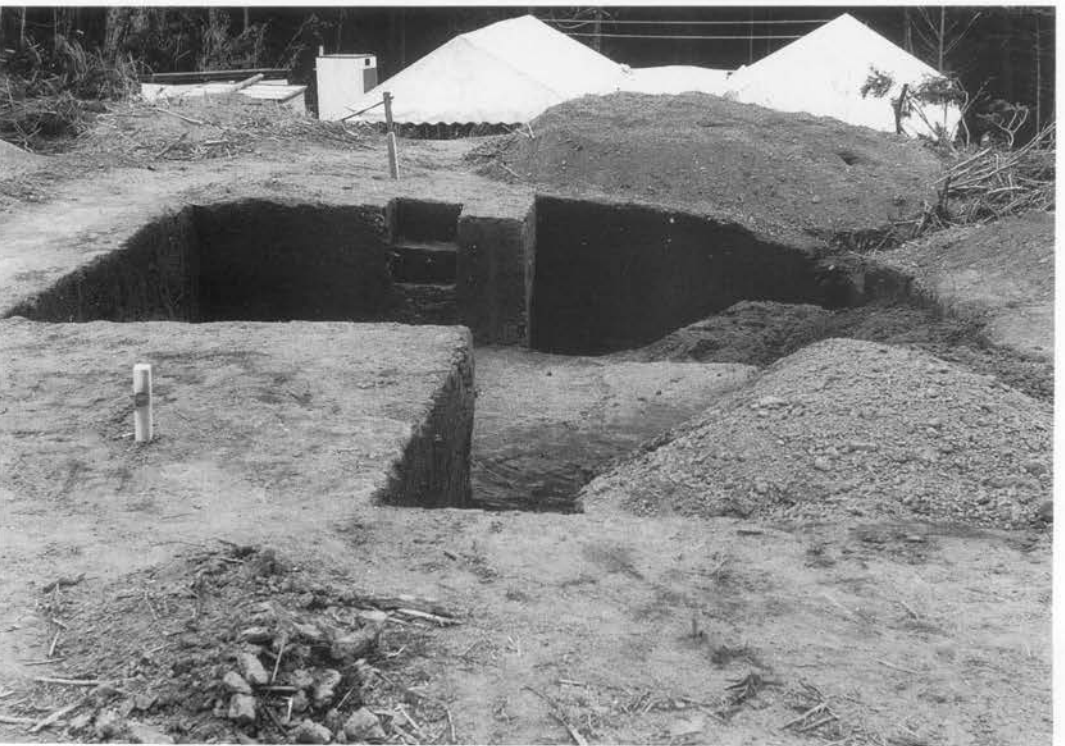
原山之神遺跡
1号住居跡

原山之神遺跡
2号炭焼窯

図版32

道塚遺跡
遺物出土状況

東嵐山遺跡
全景



東嵐山遺跡
旧石器調査区

里守遺跡
001土坑

向畑遺跡
発掘調査前状況

向畑遺跡
発掘調査風景

榎谷遺跡
全景

榎谷遺跡
遺物出土状況

榎谷遺跡
下層確認調査風景

大谷遺跡
SI-1住居跡

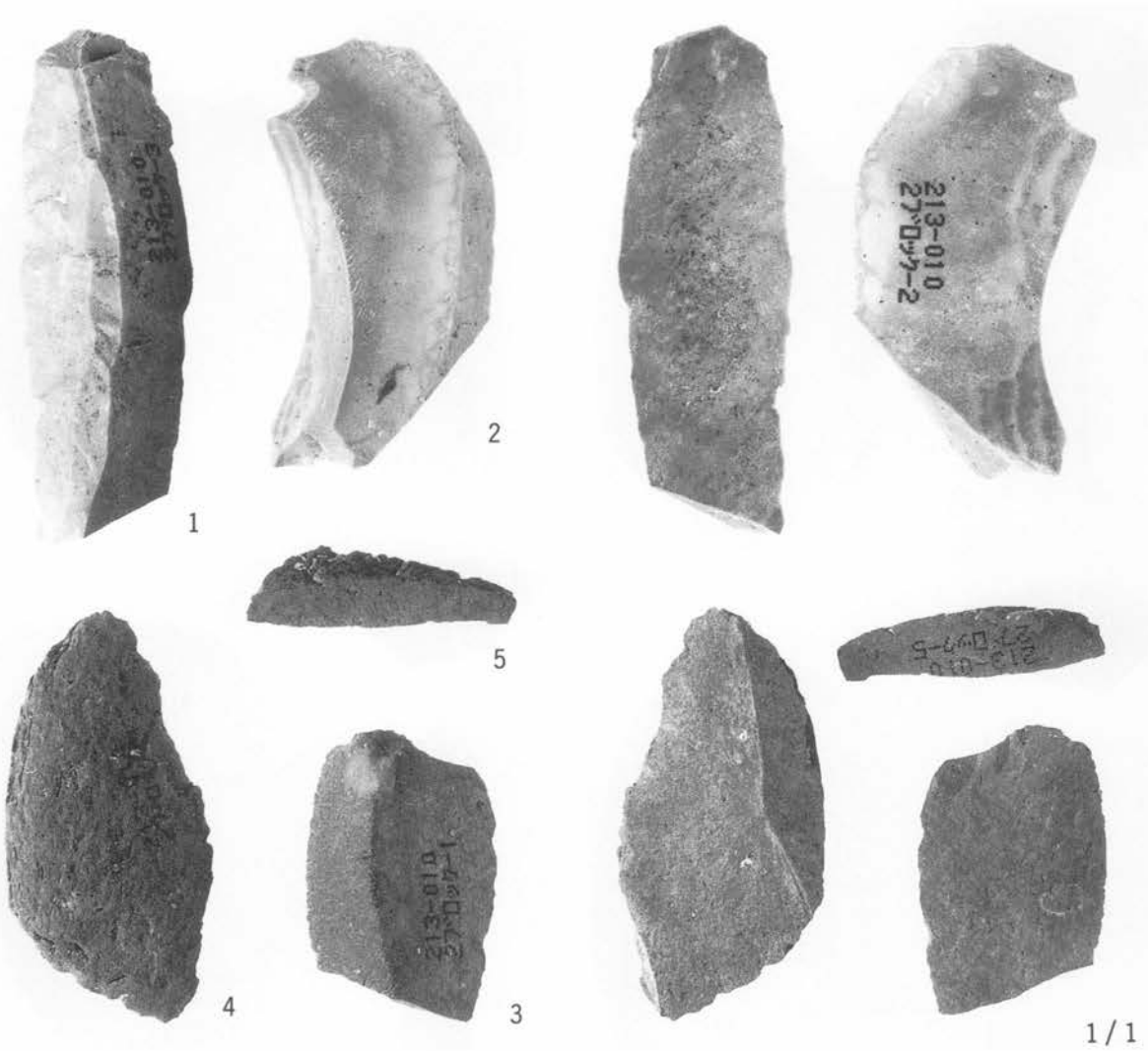
大谷遺跡
SI-2住居跡

大谷遺跡
SK-1土坑

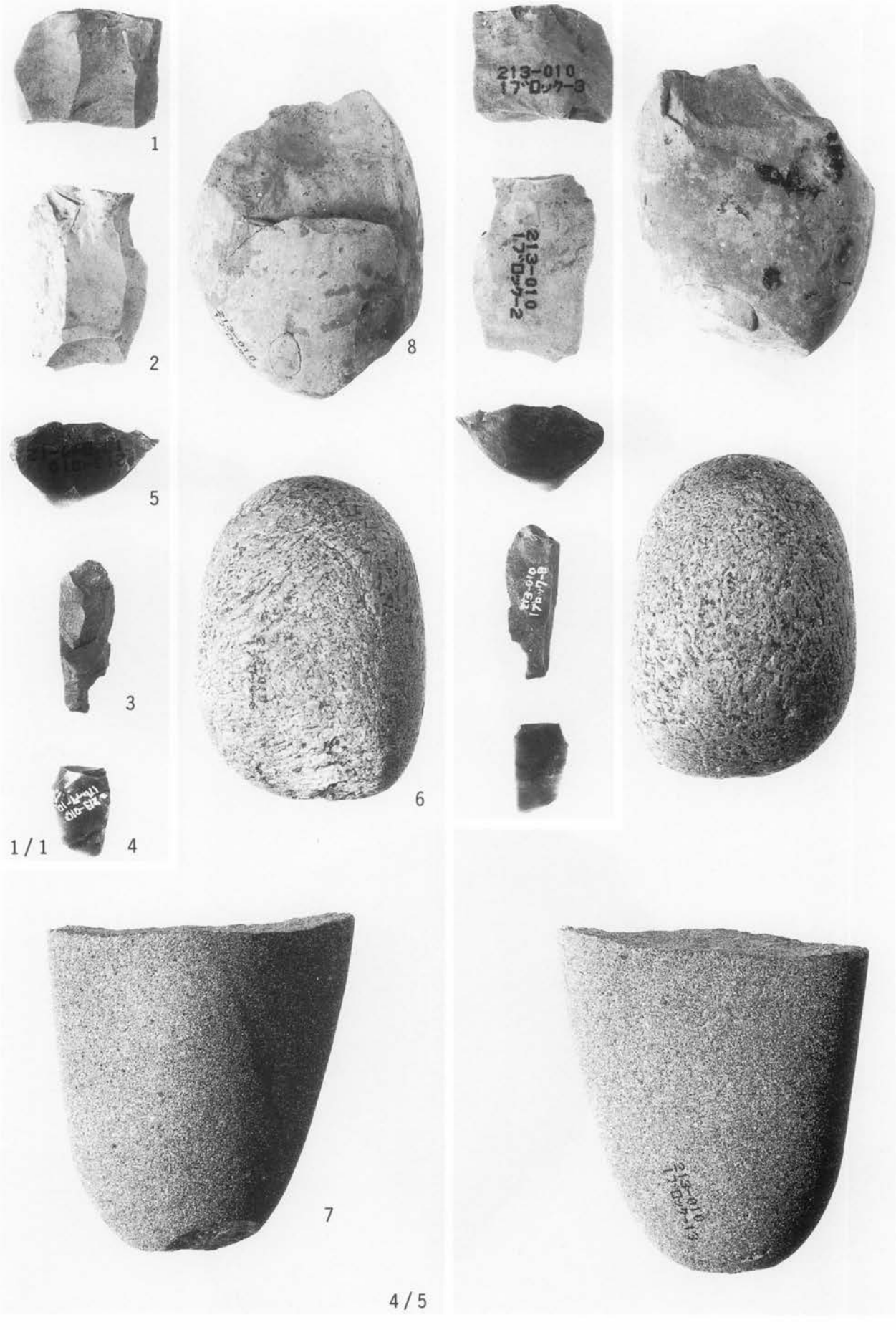
大谷遺跡
SK－7 土坑

大谷遺跡
SK-12、13土坑

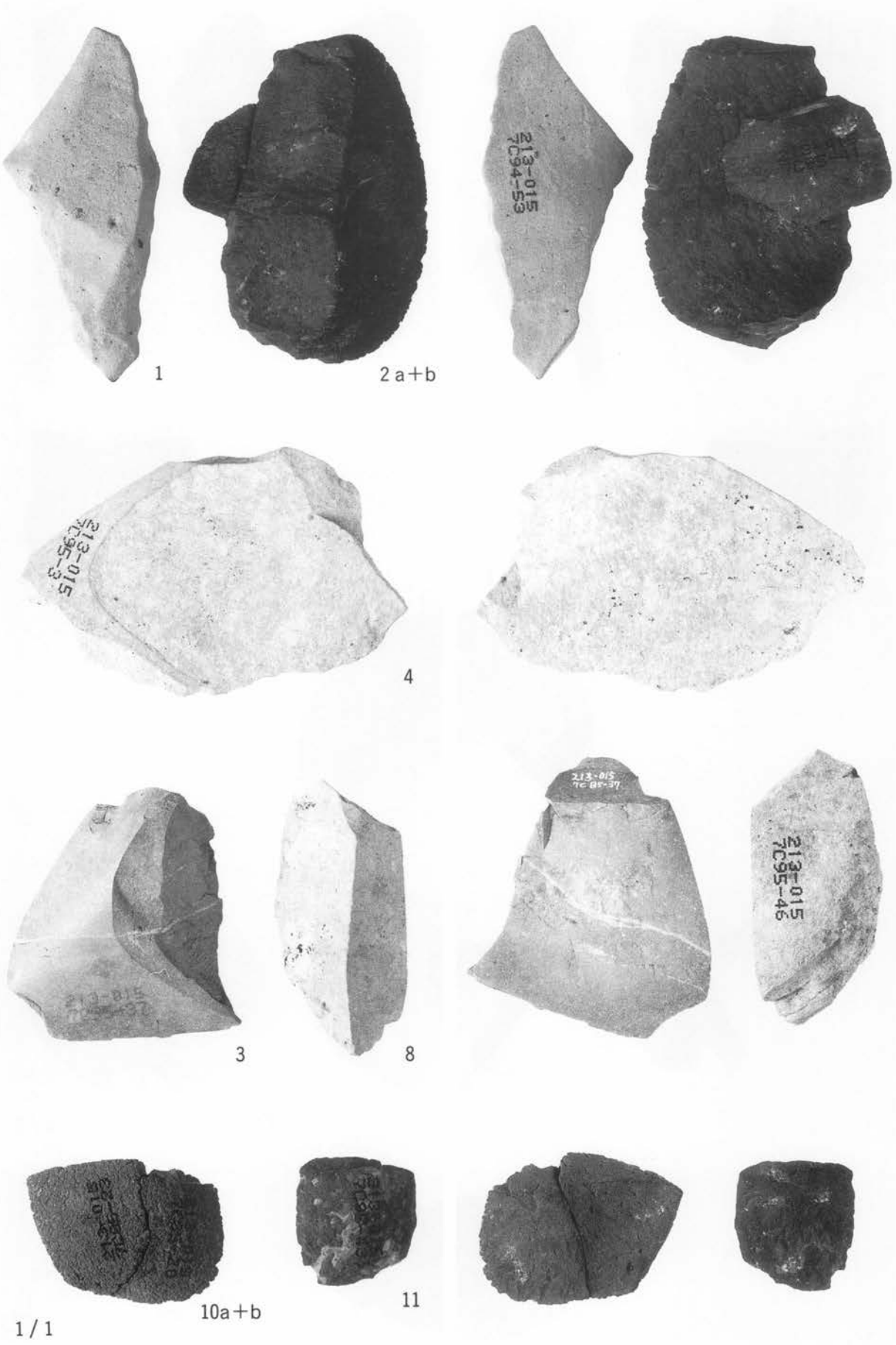
大谷遺跡
SK-14土坑



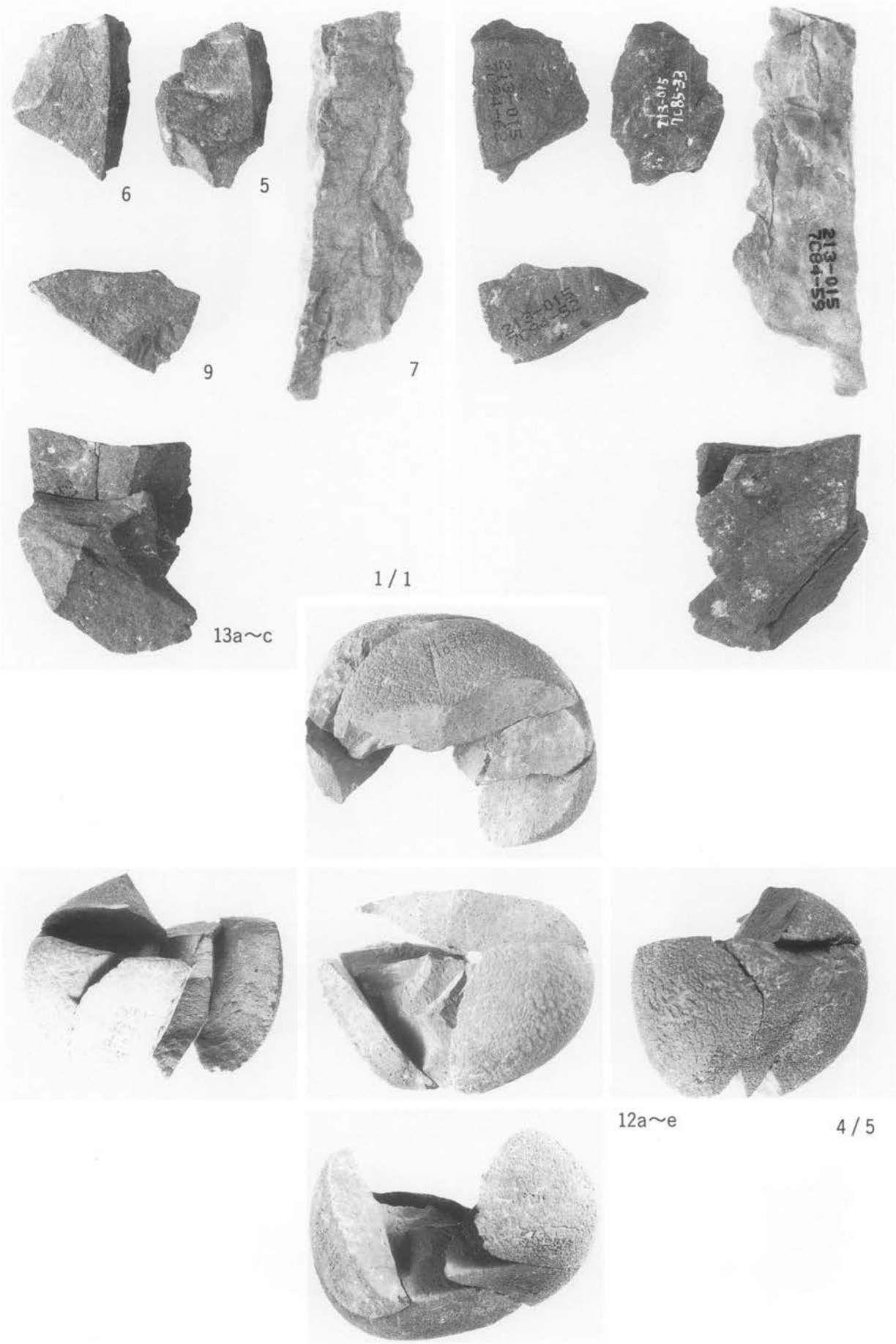
市谷遺跡旧石器時代第1ブロック(上)・第2ブロック(1)(下)



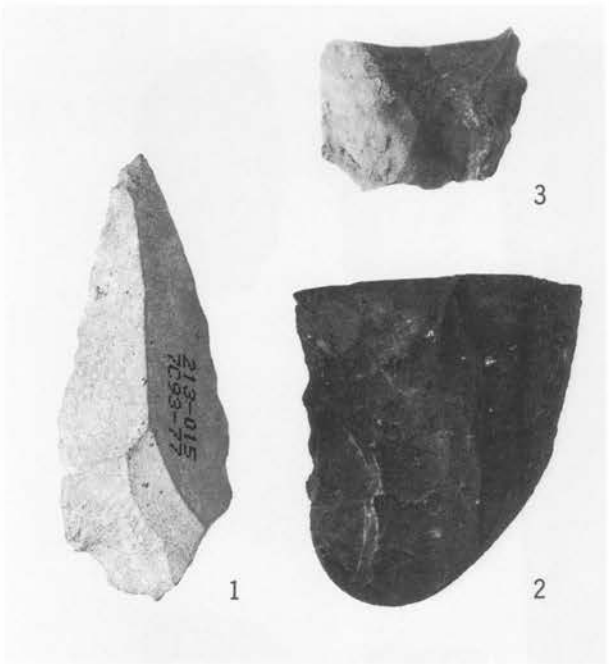
市谷遺跡旧石器時代第２ブロック(2)



油谷遺跡旧石器時代第１ブロック(1)

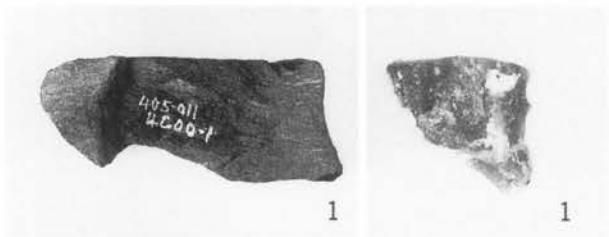


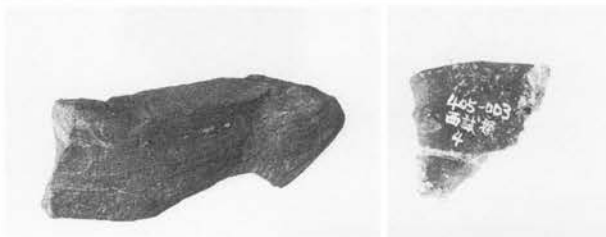
油谷遺跡旧石器時代第１ブロック(2)



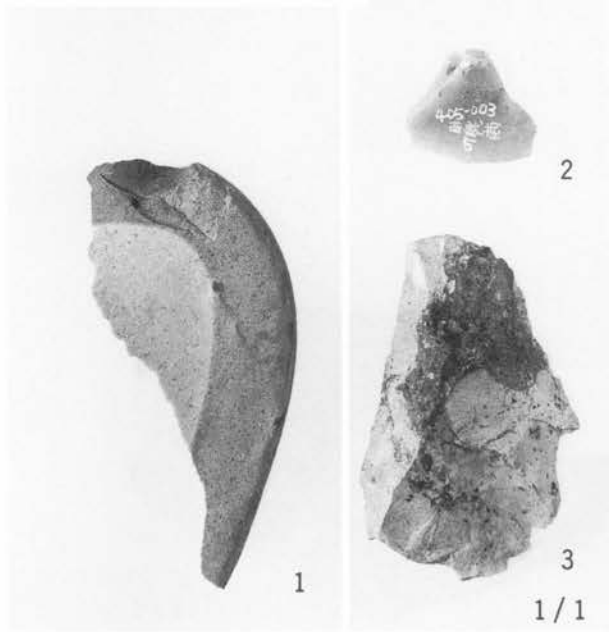
油谷遺跡
第2ブロック

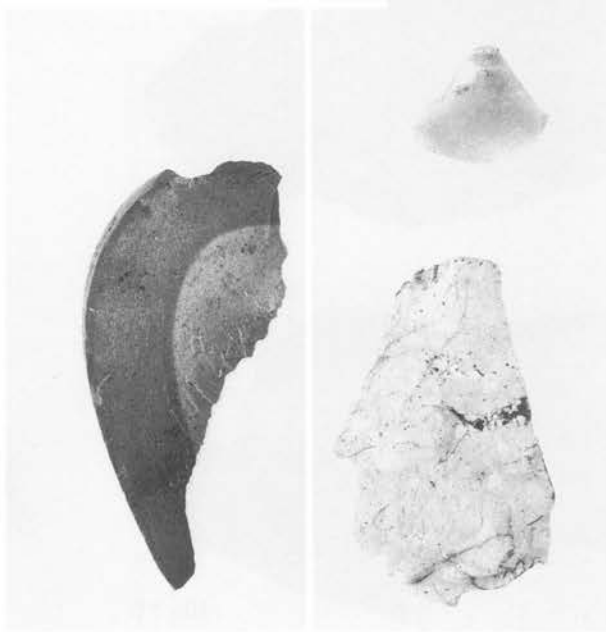
岡田山遺跡





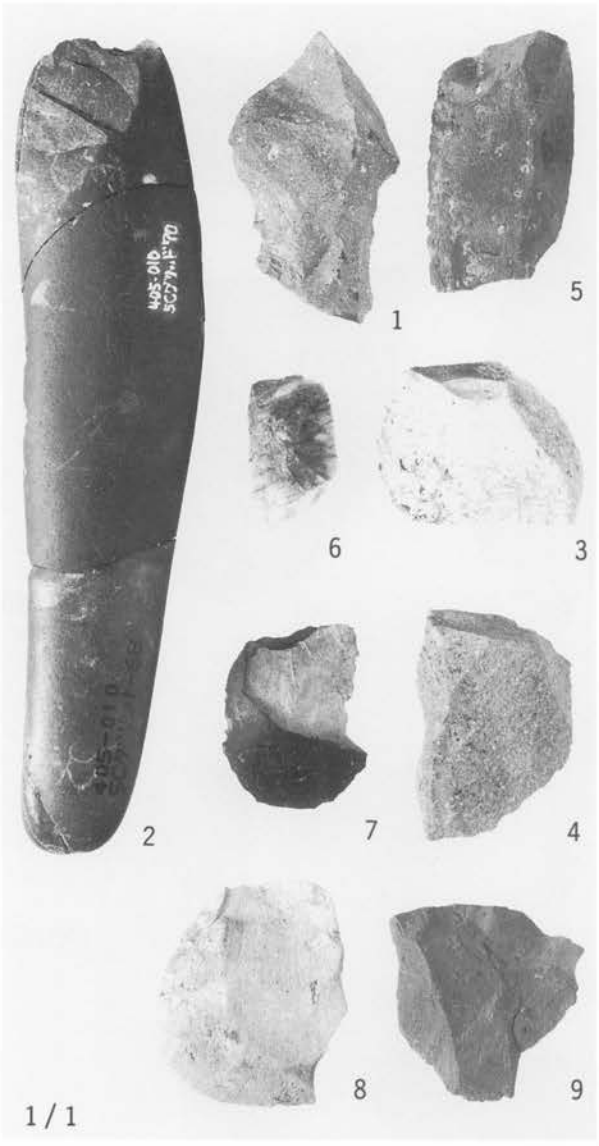
道塚遺跡（左）

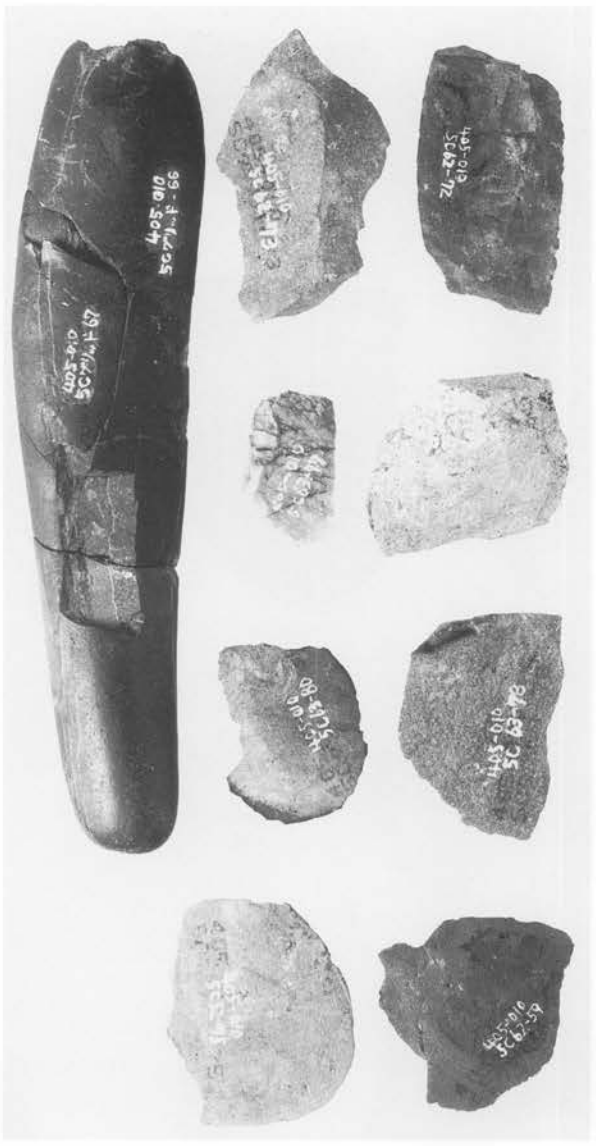




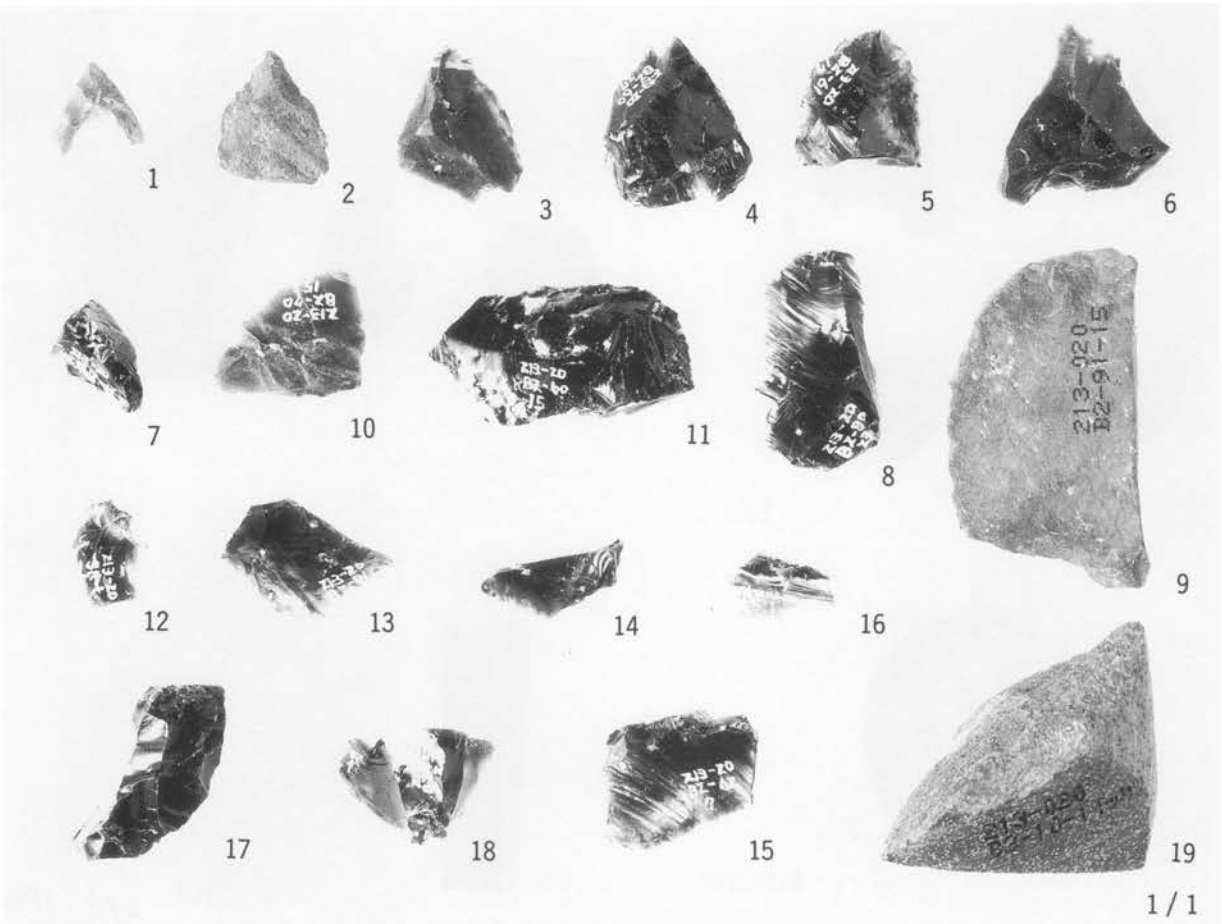
榎谷遺跡（左）
東嵐山遺跡（右）

油谷遺跡・岡田山遺跡・道塚遺跡・榎谷遺跡・東嵐山遺跡旧石器時代





原山之神遺跡旧石器時代第1ブロック

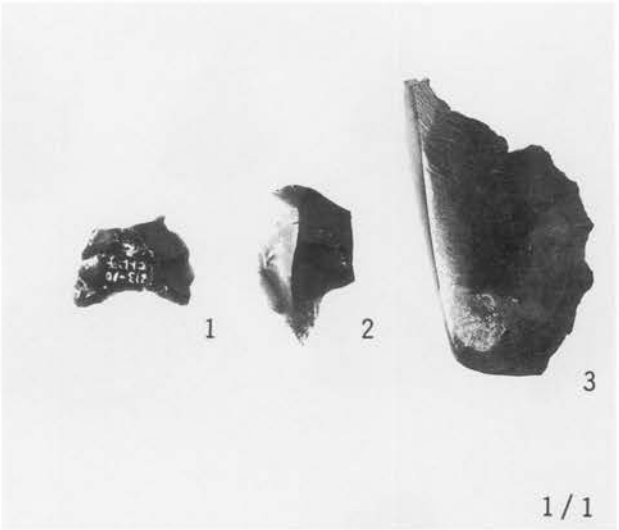


1 / 1

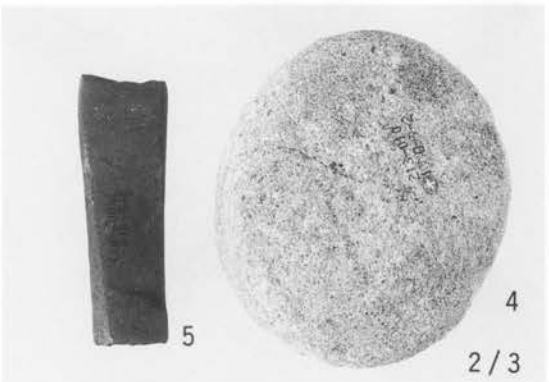
2 / 3

2 / 5

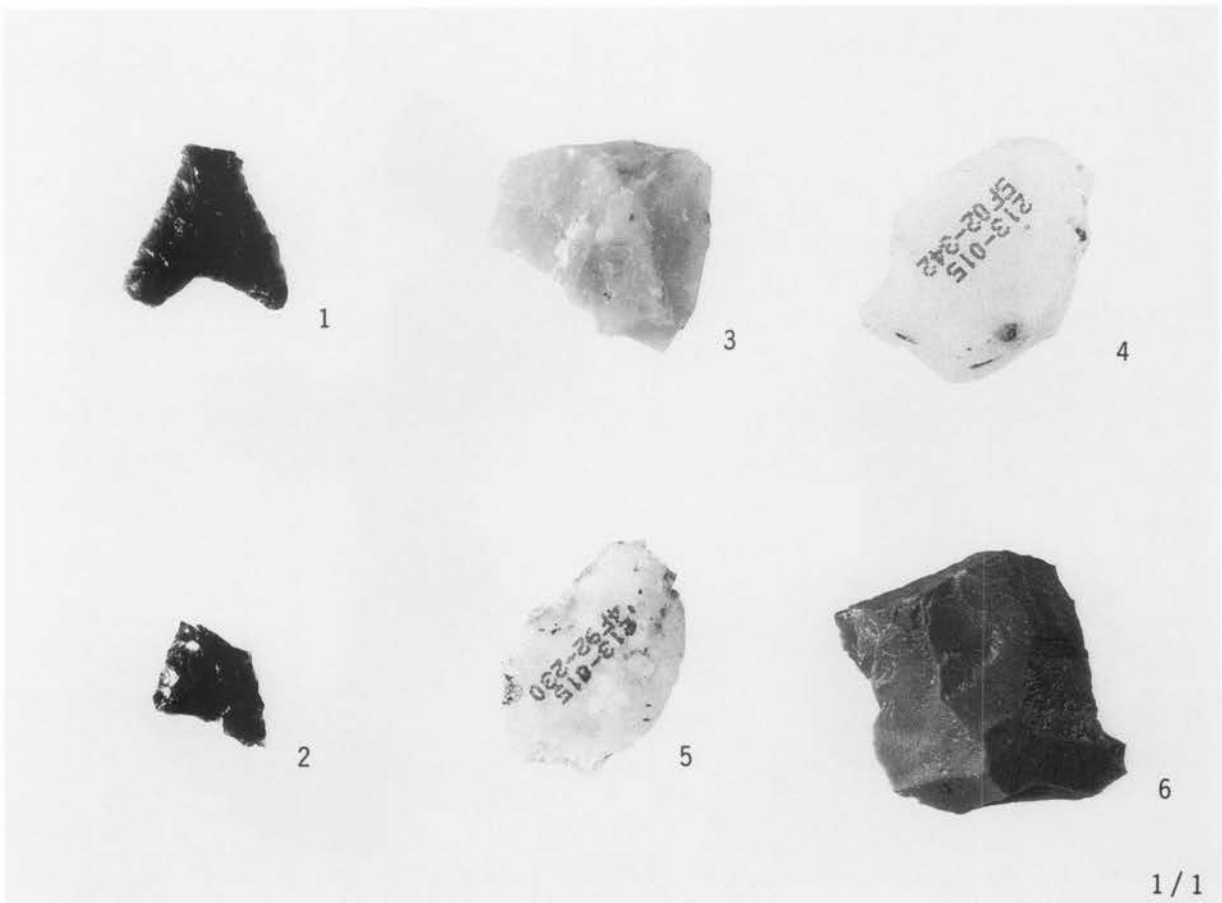
大谷台遺跡縄文時代石器



新堀遺跡

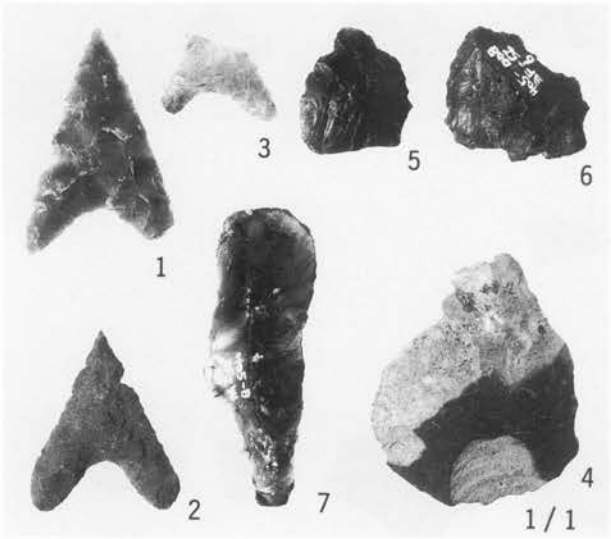


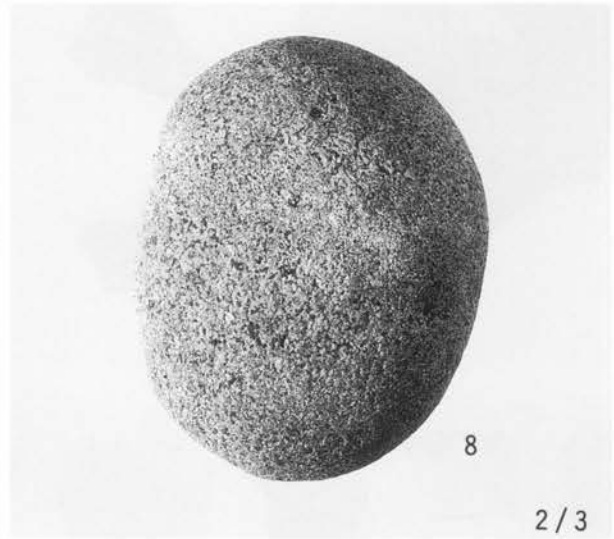
市谷遺跡



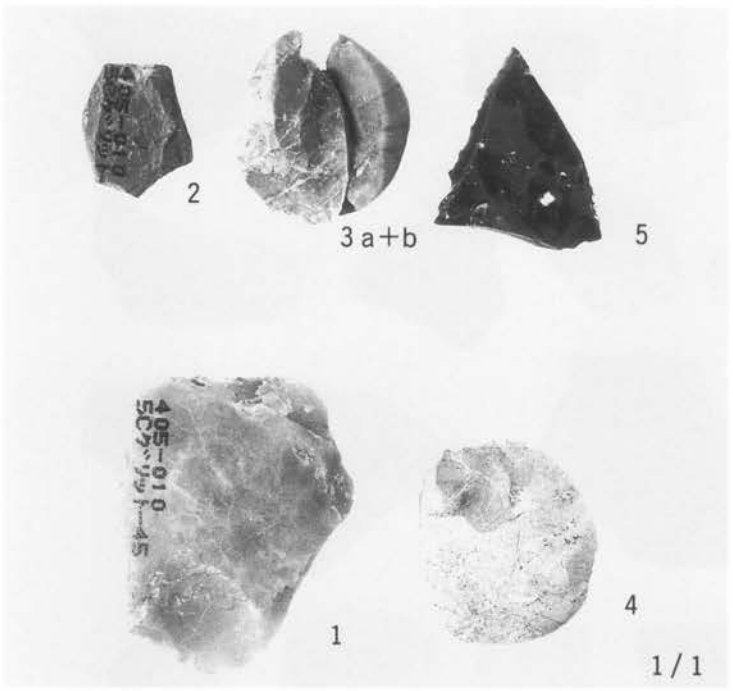
油谷遺跡

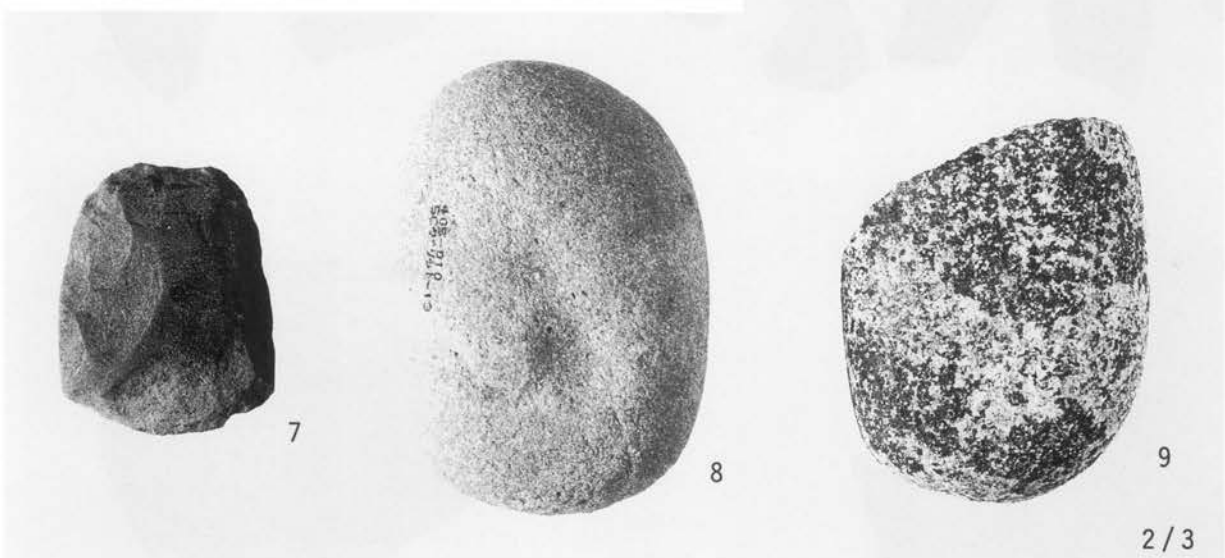
新堀遺跡・市谷遺跡・油谷遺跡縄文時代石器





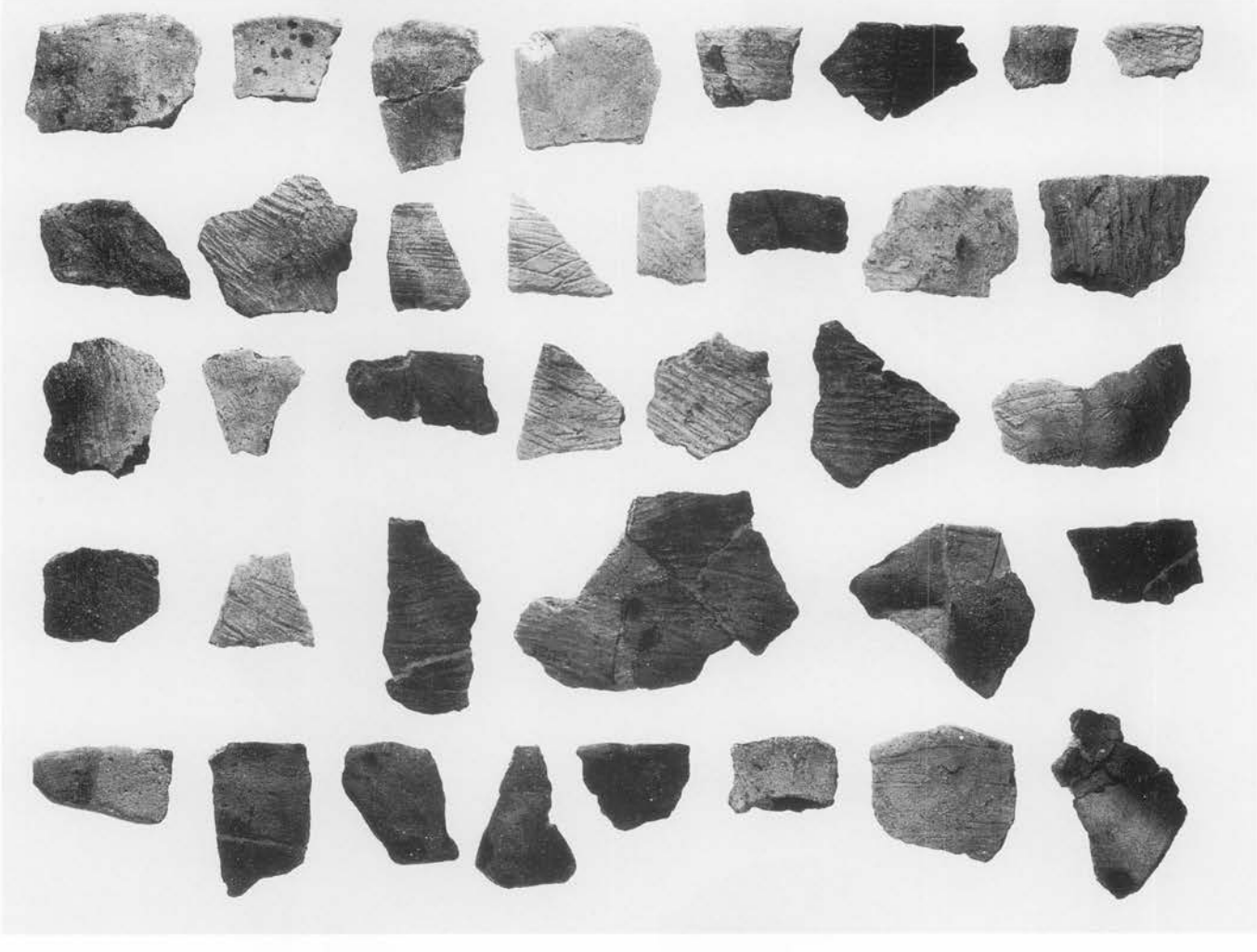
鹿穴遺跡

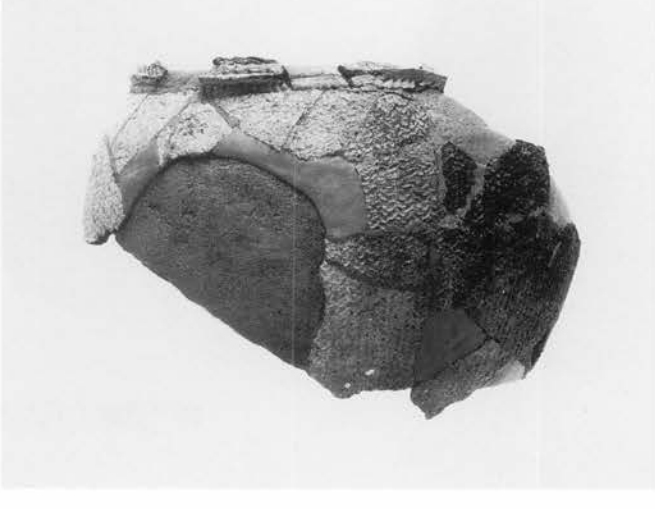




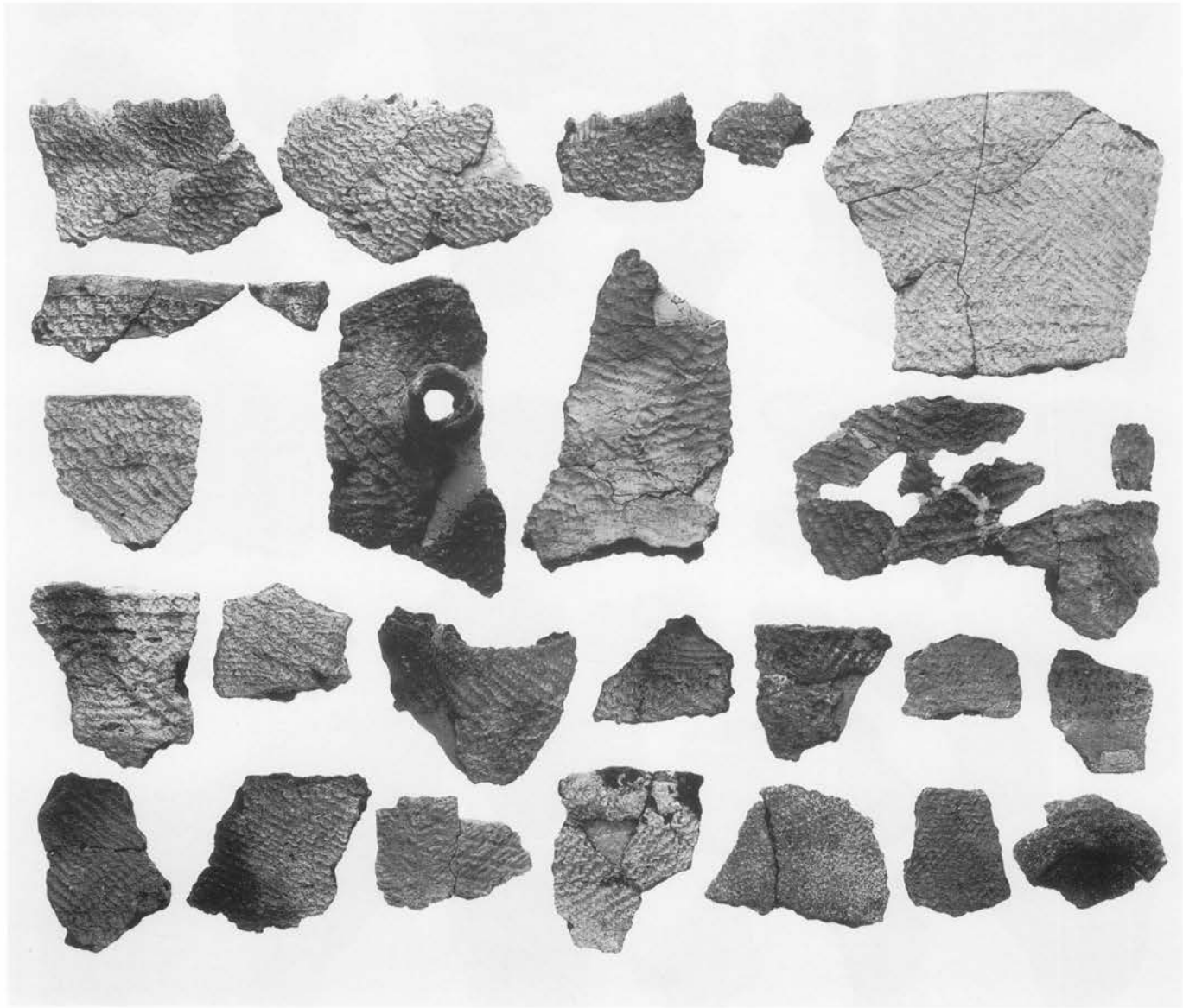
原山之神遺跡

鹿穴遺跡・原山之神遺跡縄文時代石器

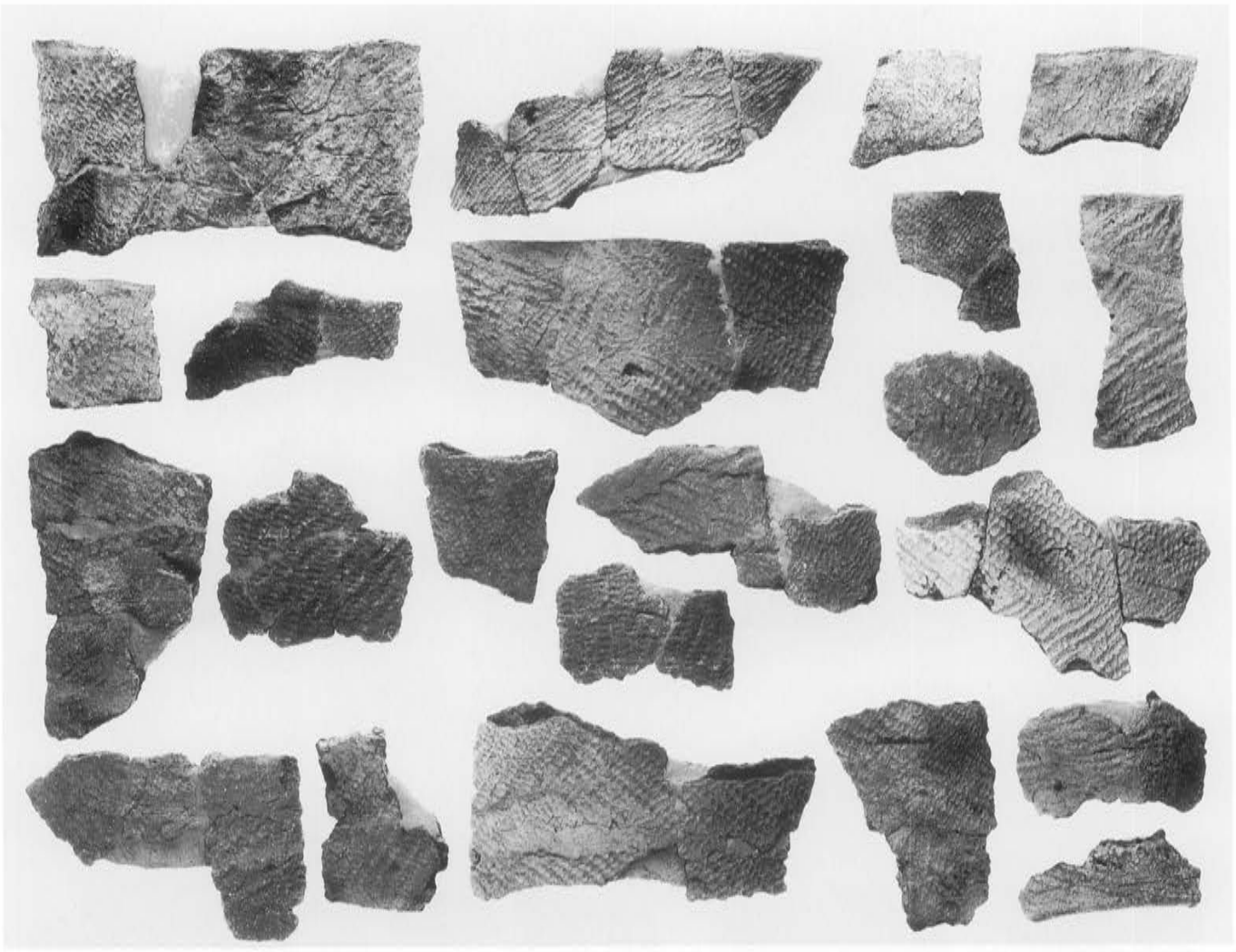


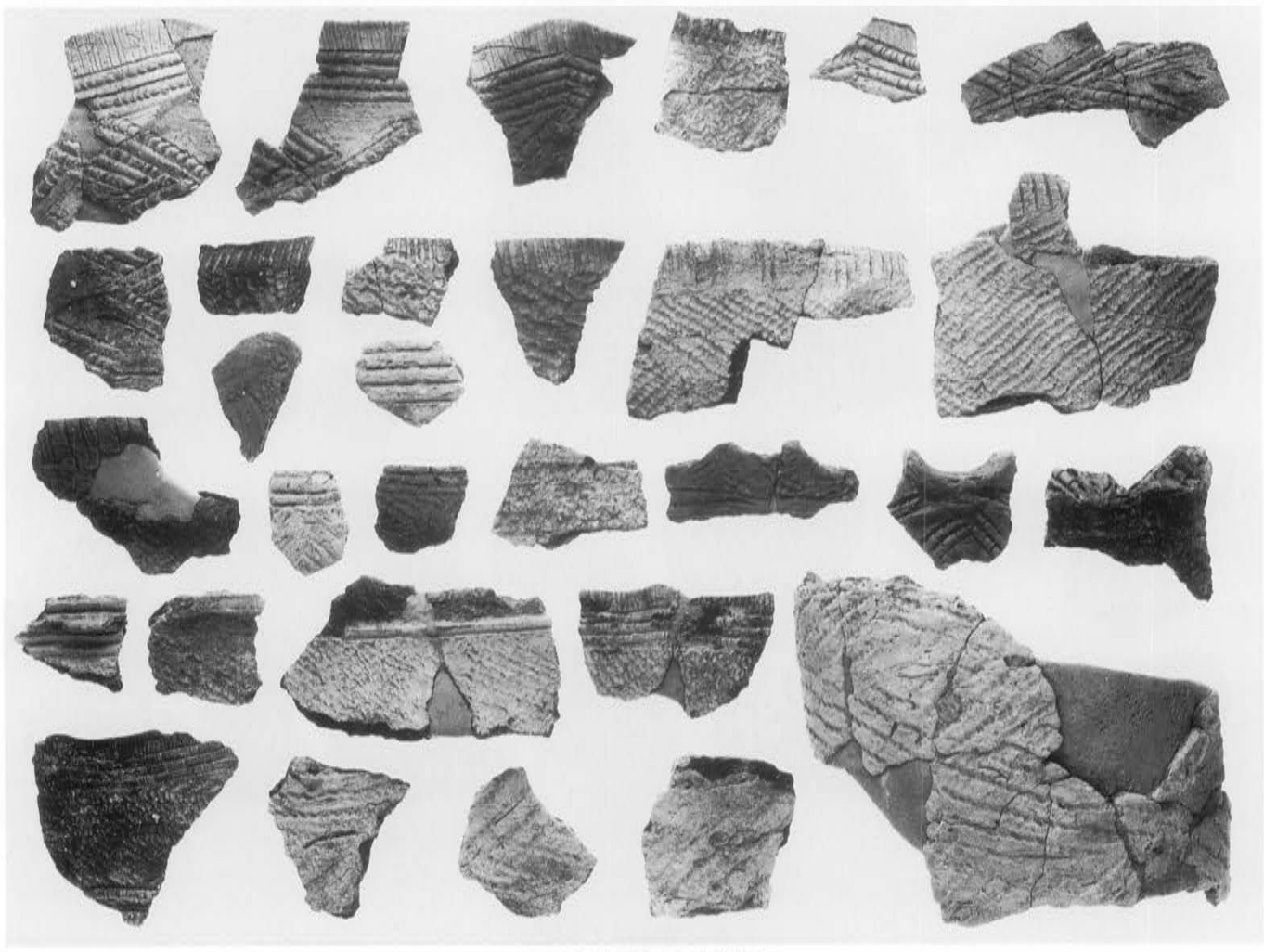


大谷台遺跡縄文土器(1)

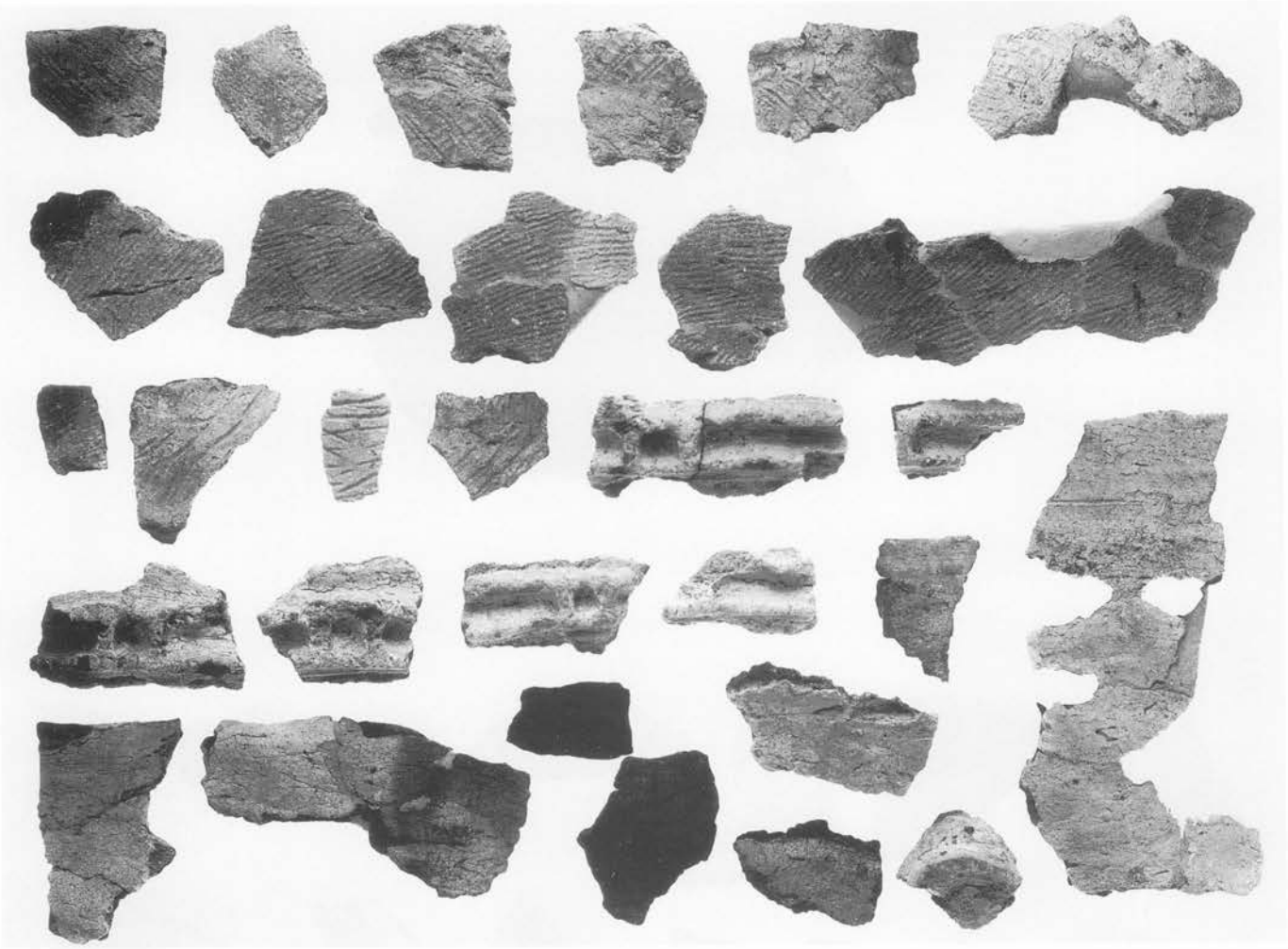


大谷台遺跡縄文土器(2)



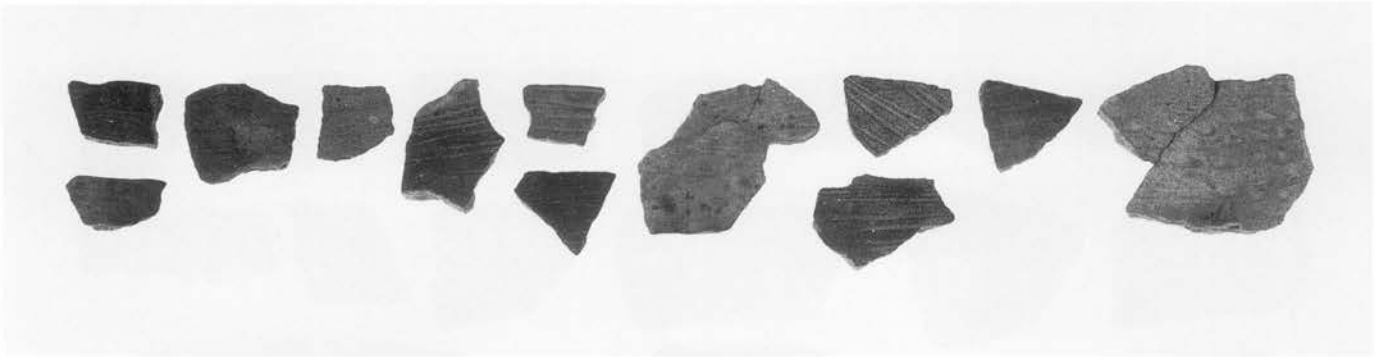


大谷台遺跡縄文土器(3)

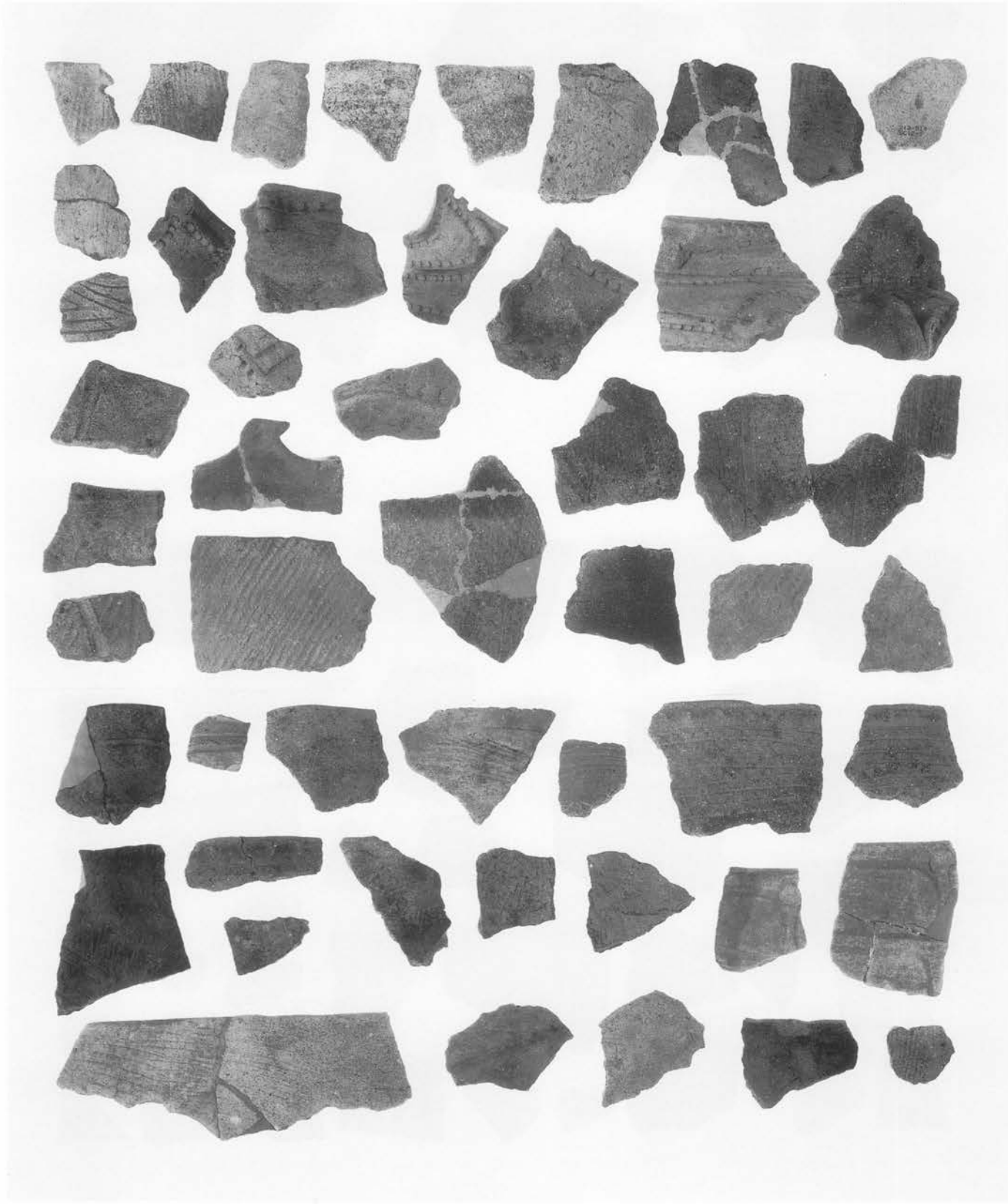


大谷台遺跡縄文土器(4)

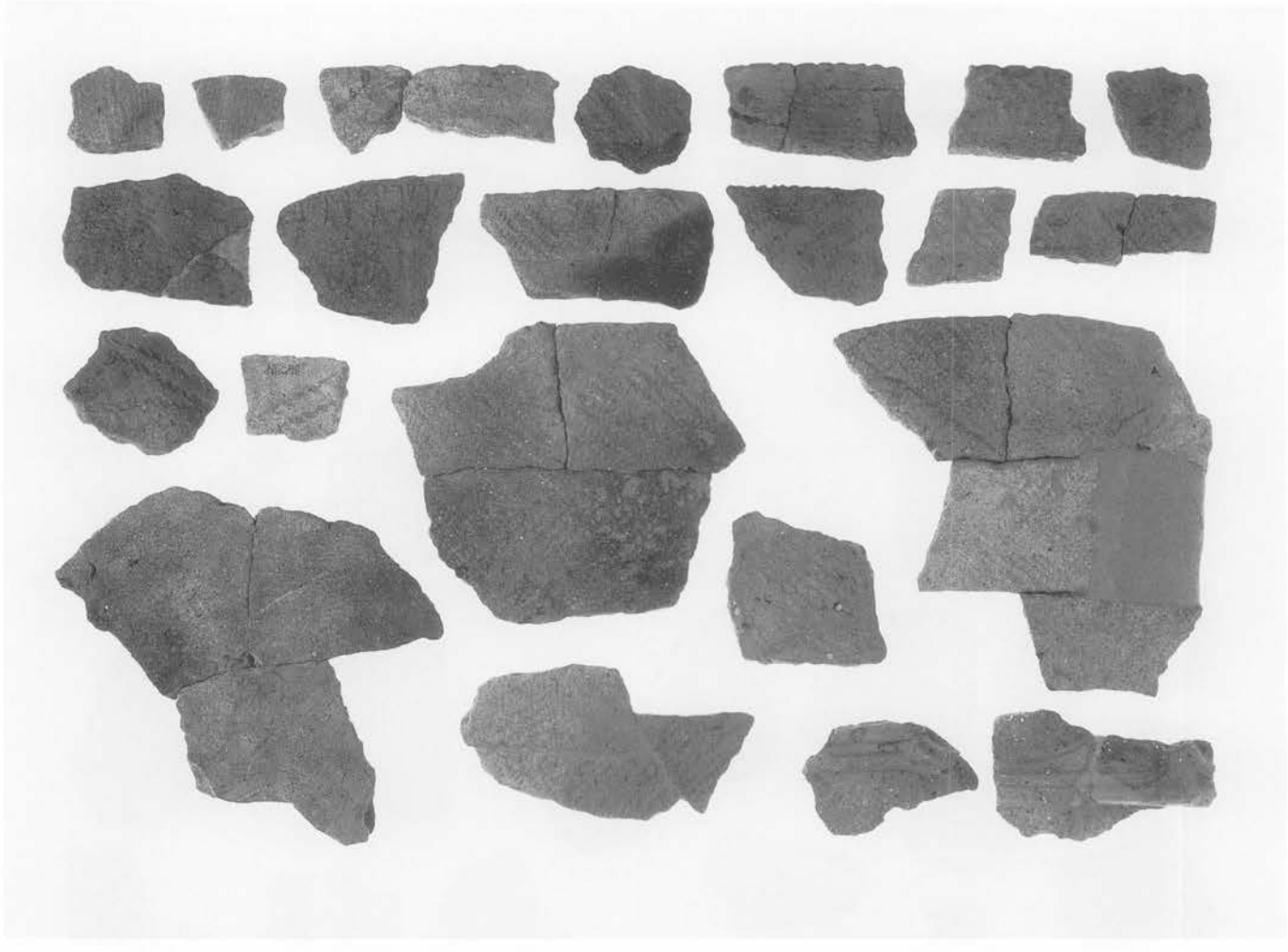
大谷台遺跡縄文土器(5)

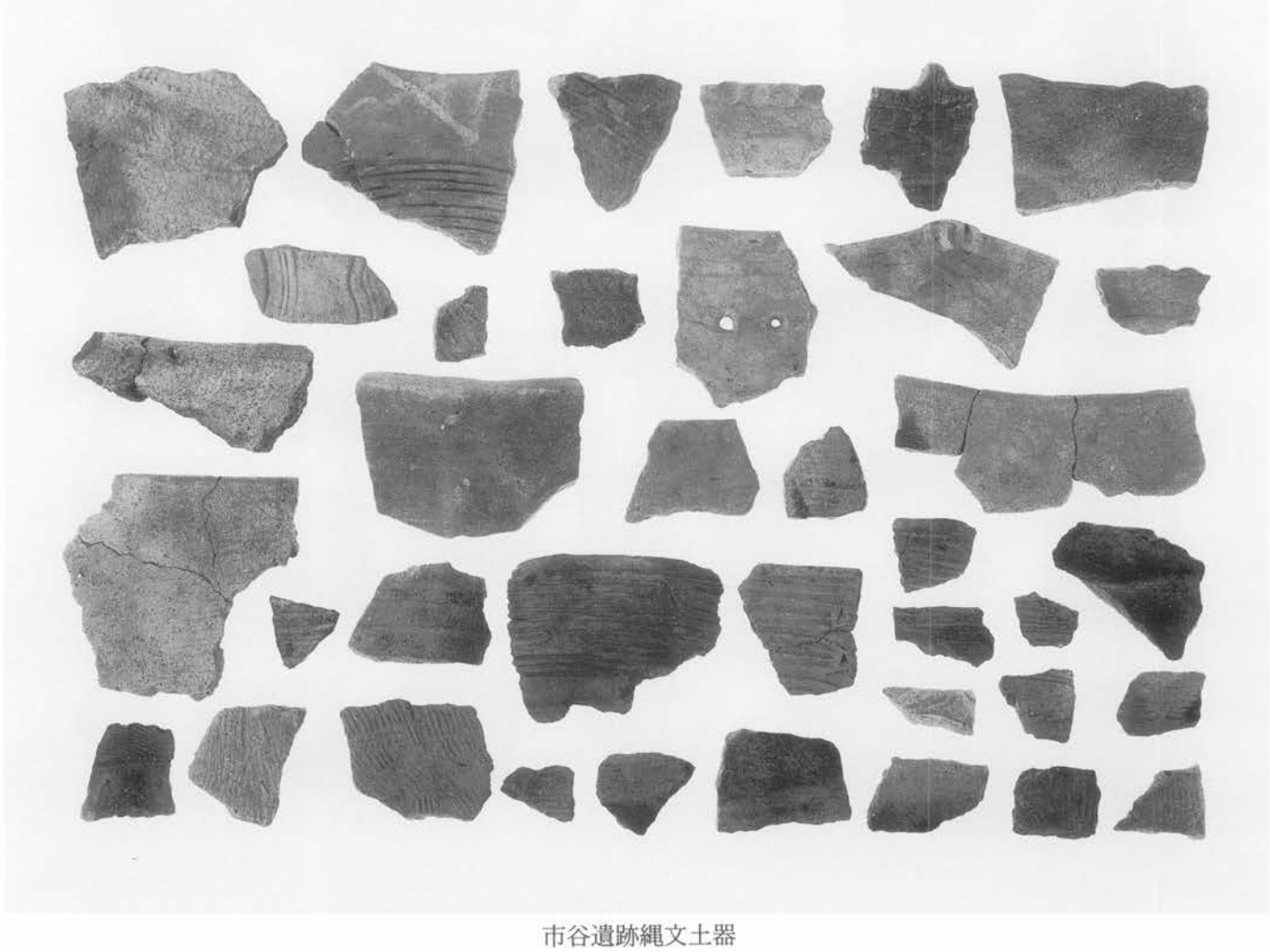


万才楽遺跡縄文土器

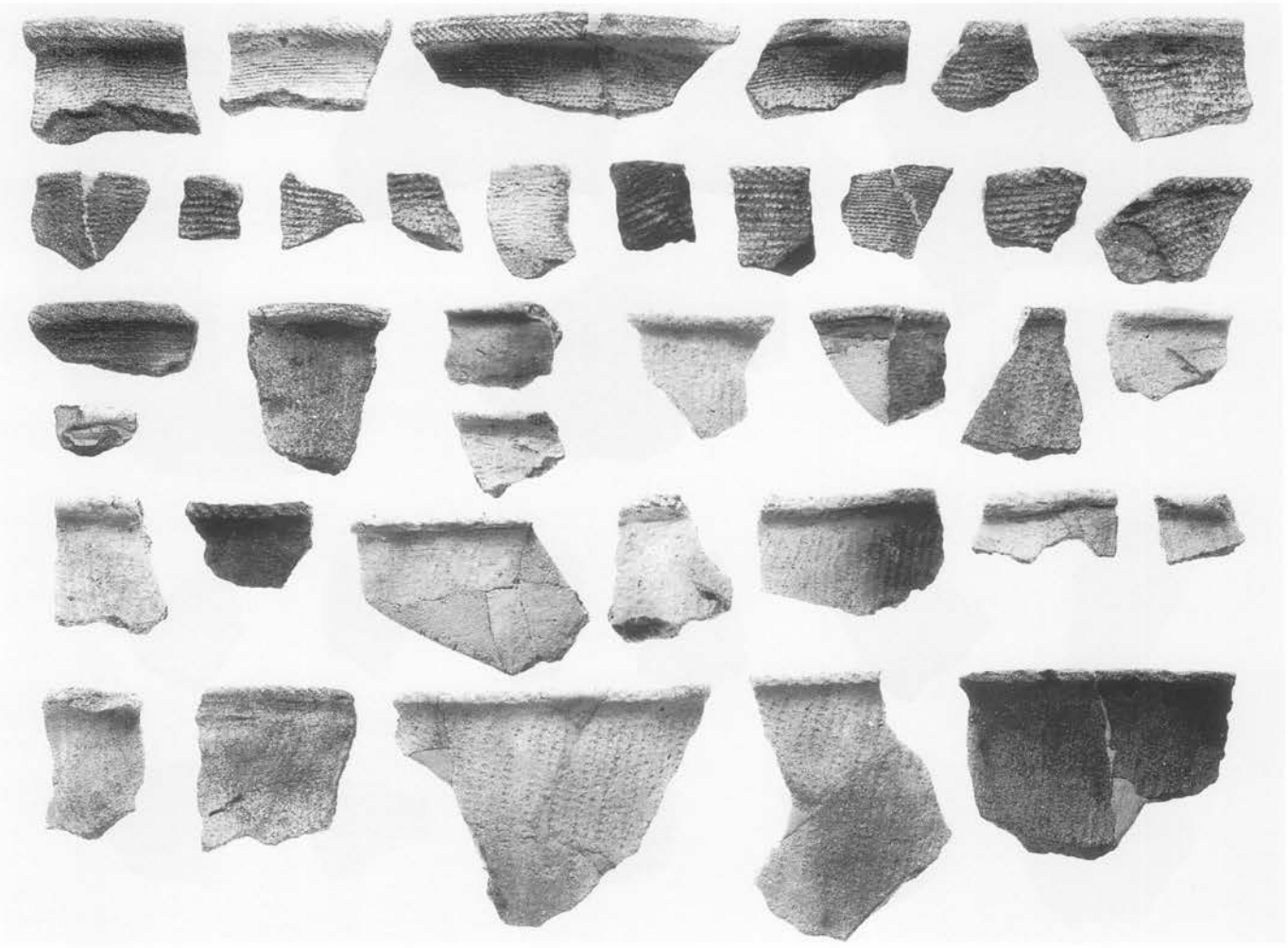


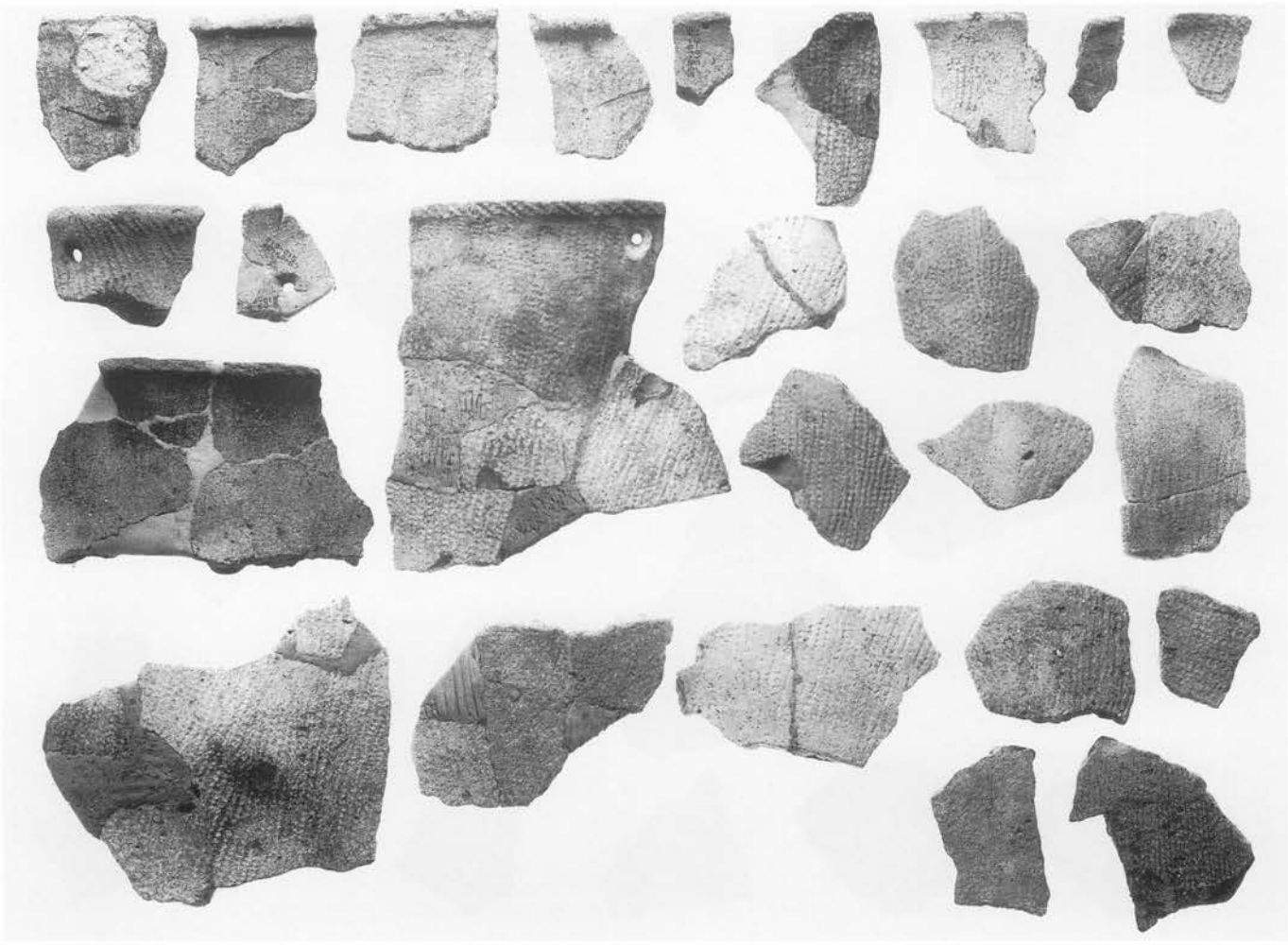
新堀遺跡縄文土器



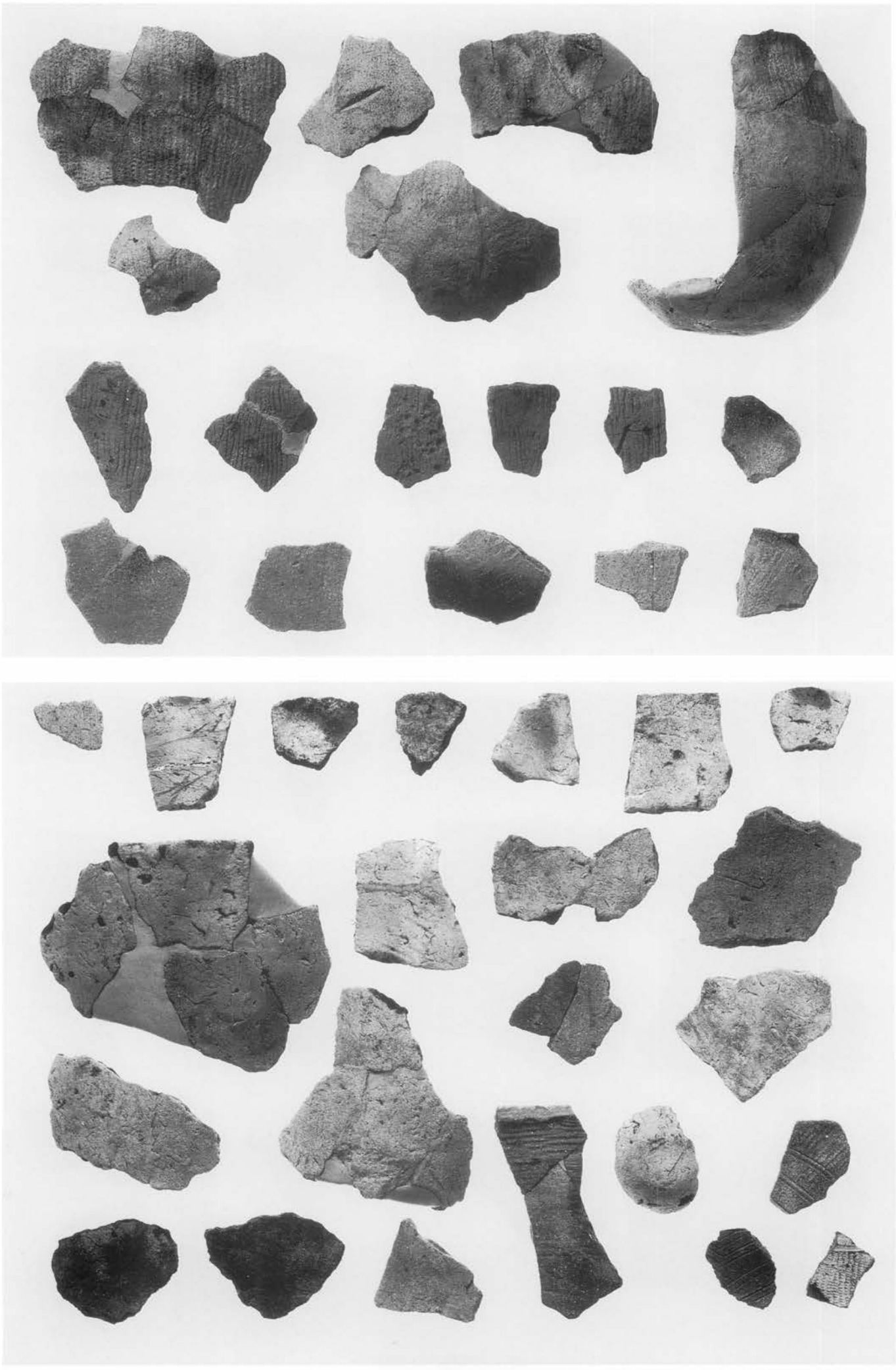


市谷遺跡縄文土器

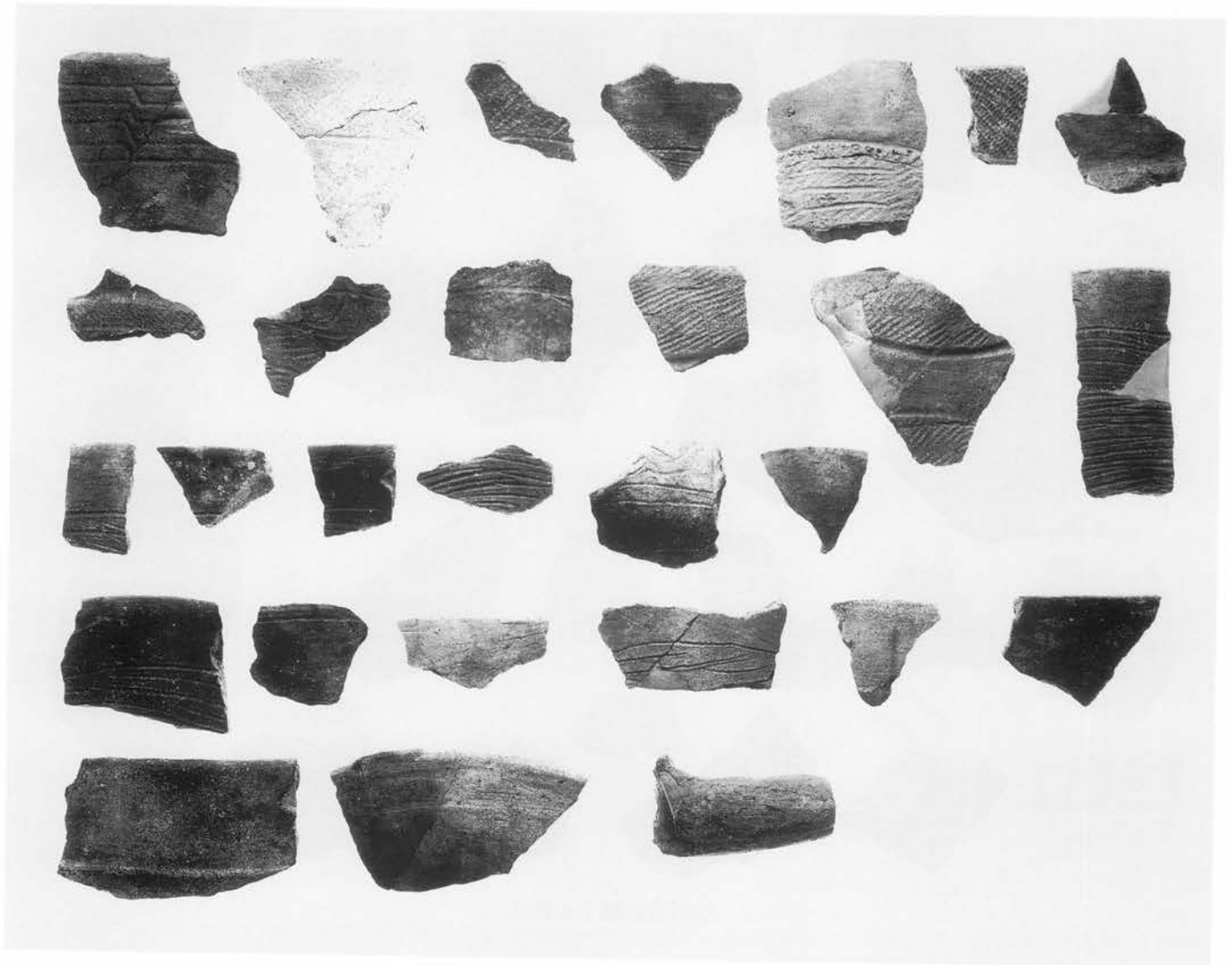




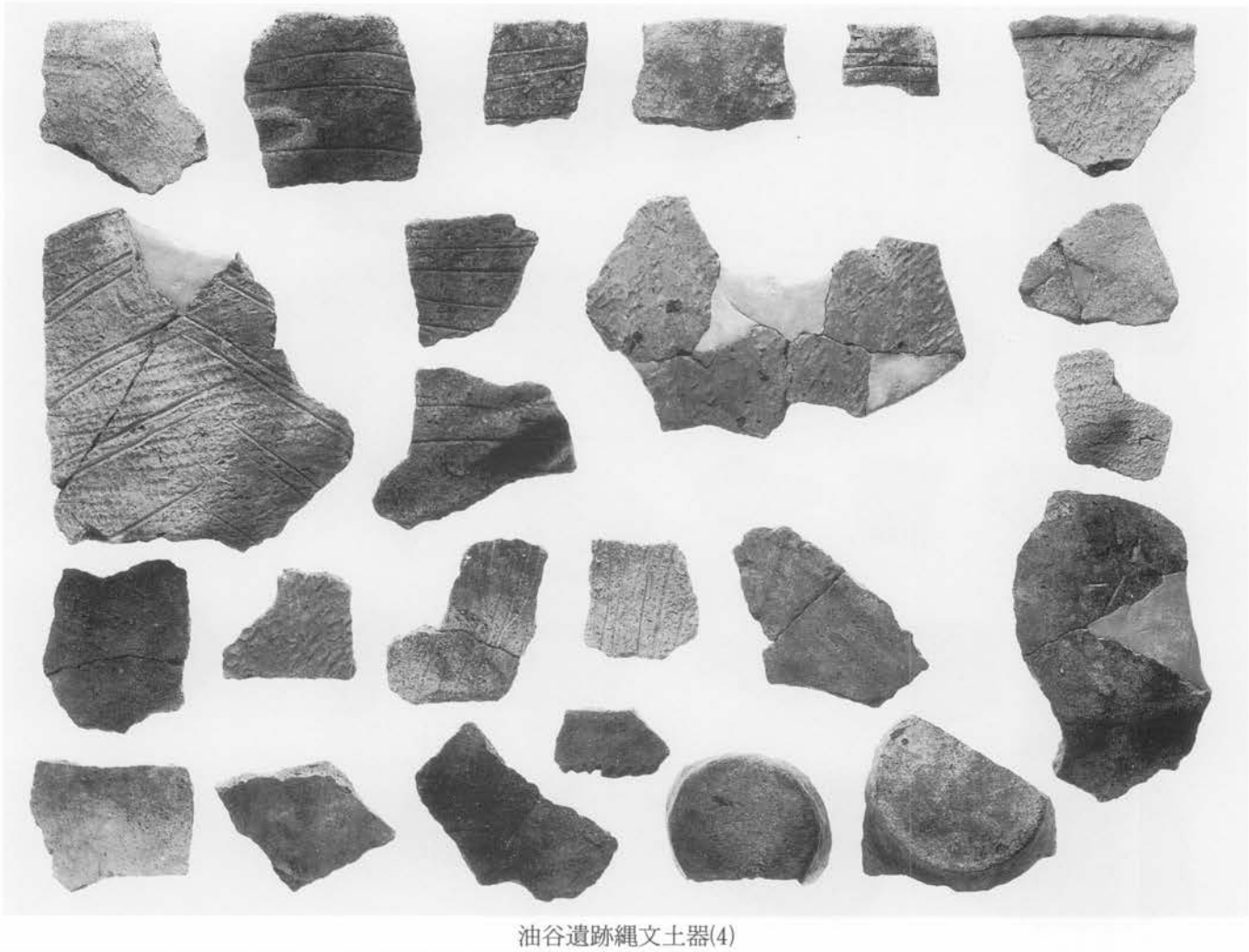
油谷遺跡縄文土器(1)



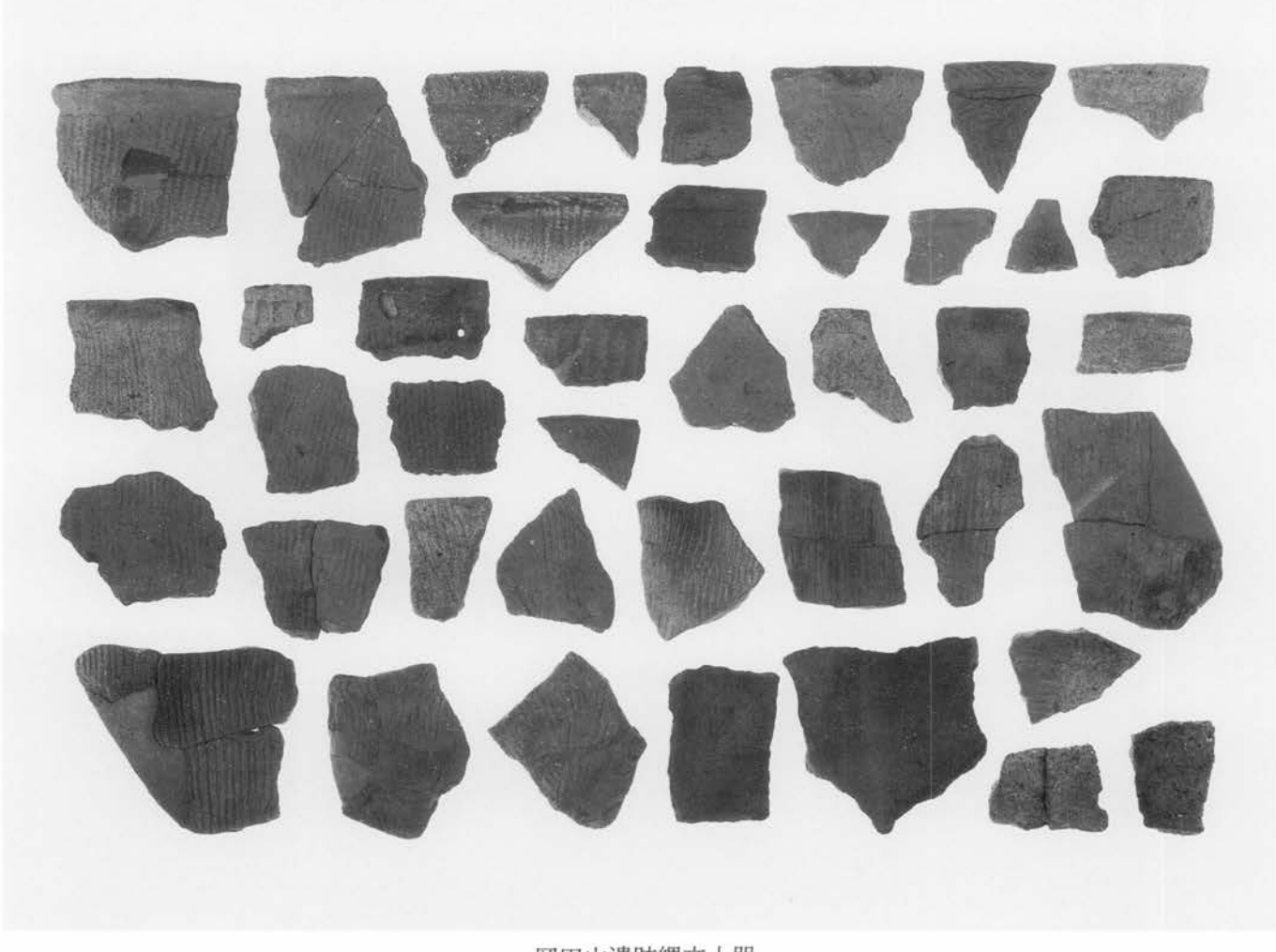
油谷遺跡縄文土器(2)



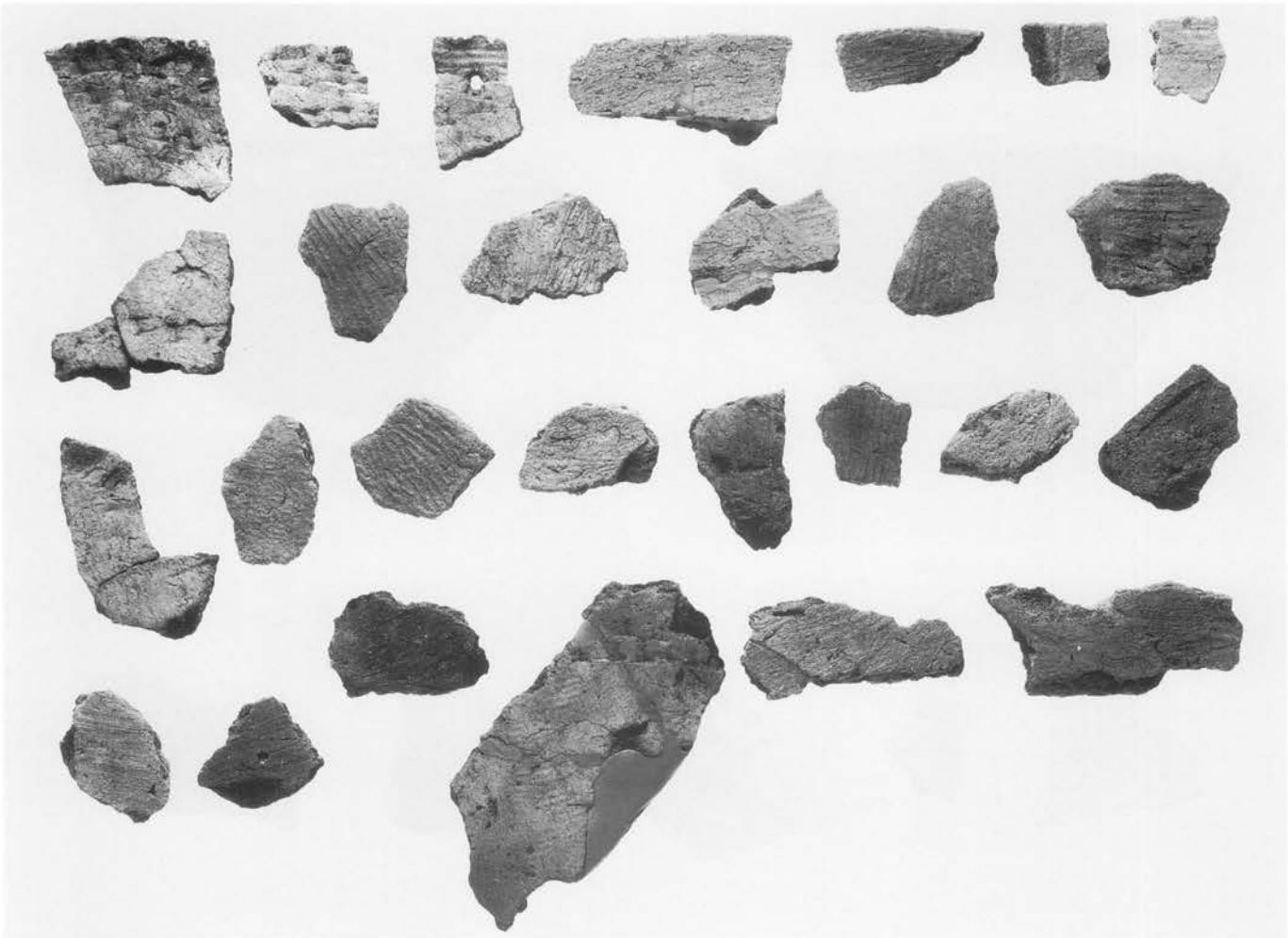
油谷遺跡縄文土器(3)

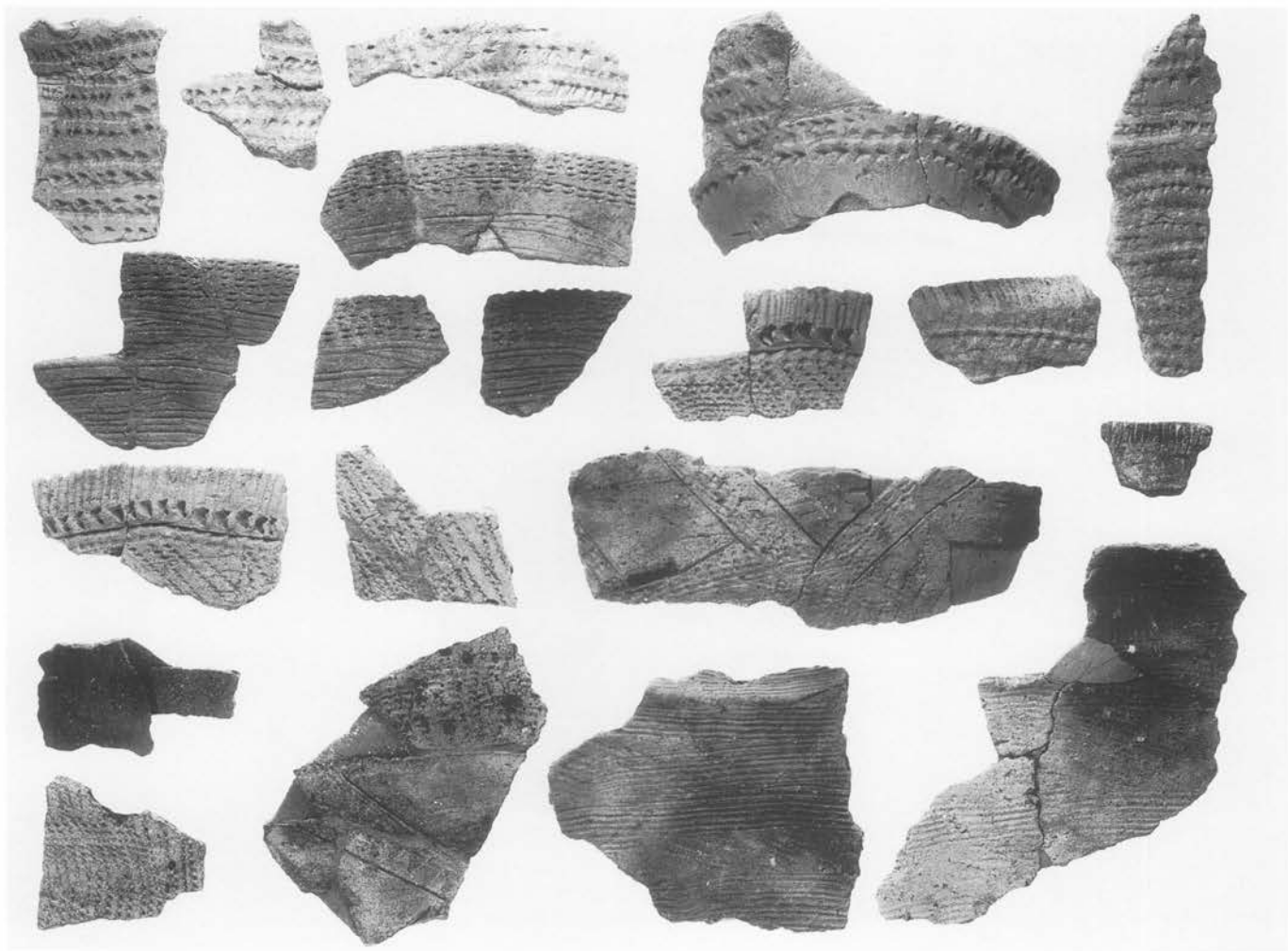


油谷遺跡縄文土器(4)

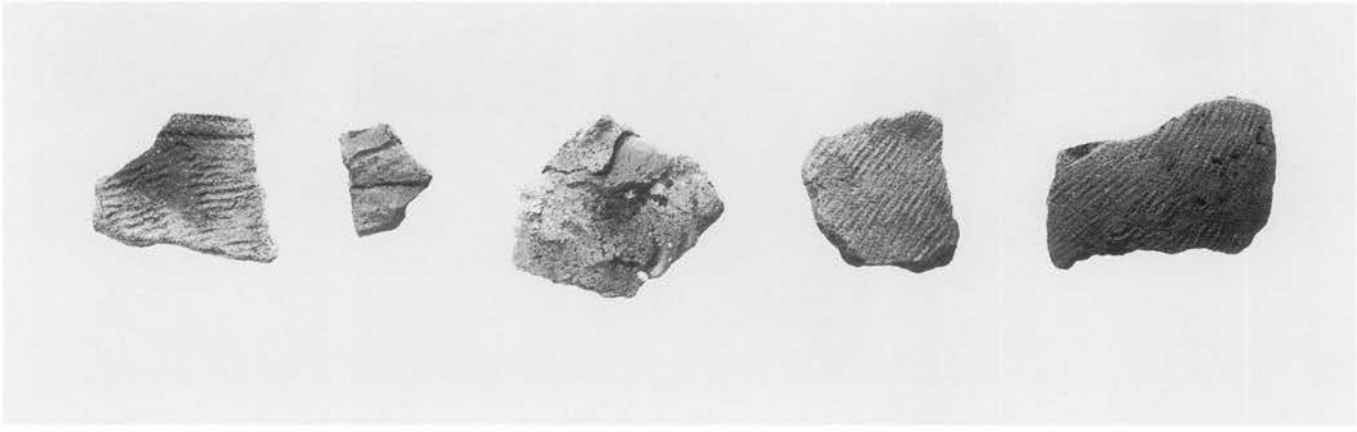


岡田山遺跡縄文土器

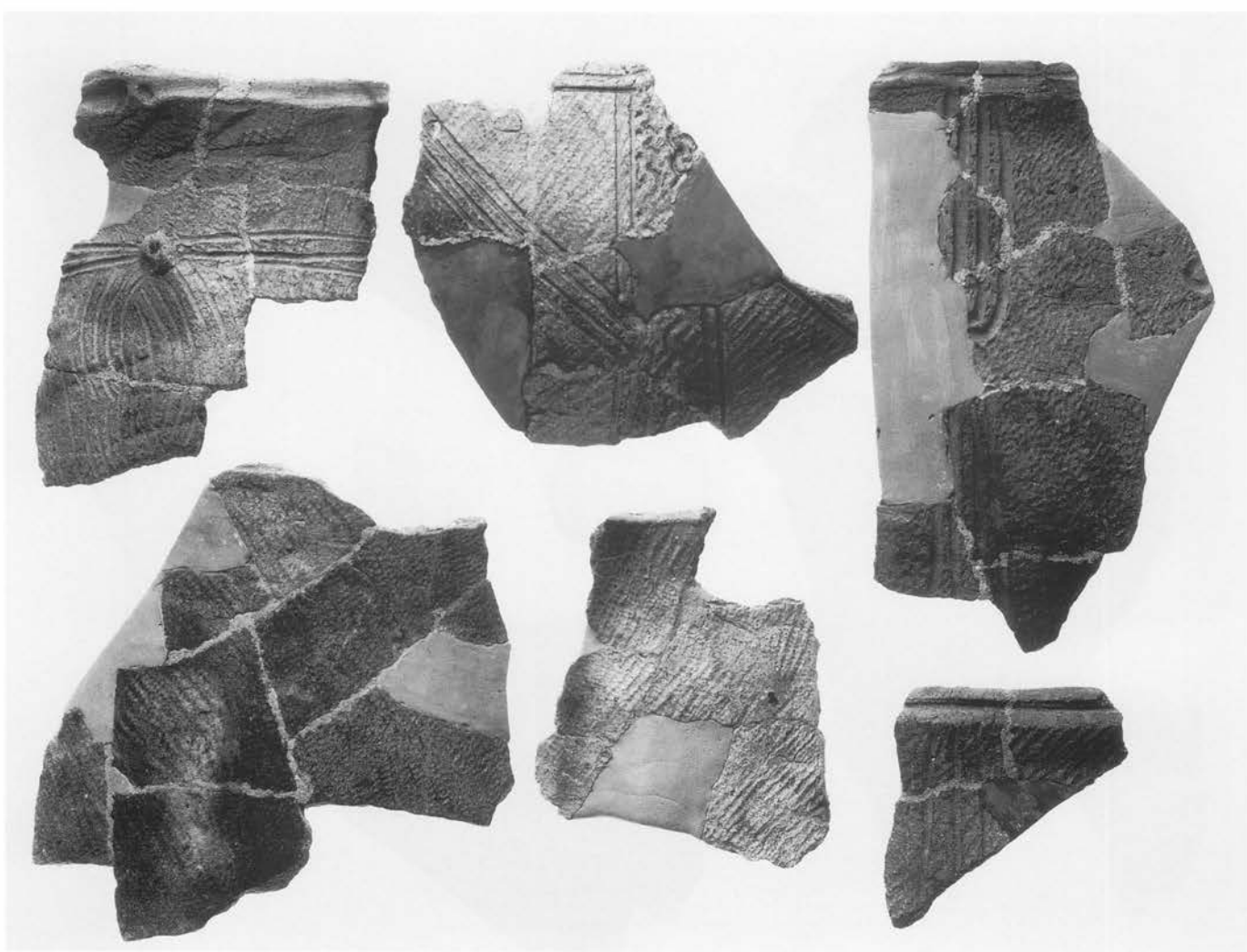




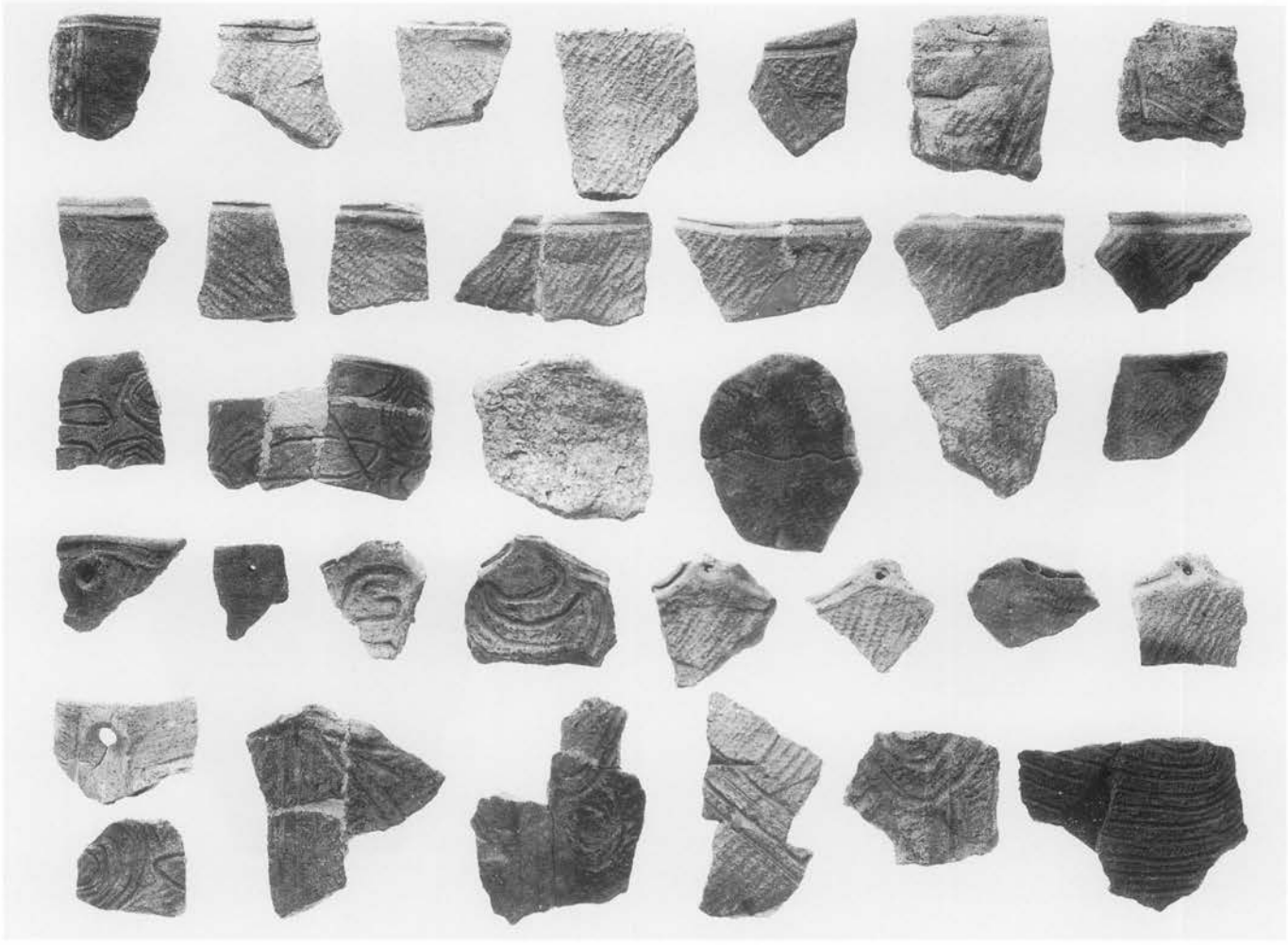
鹿穴遺跡縄文土器(1)

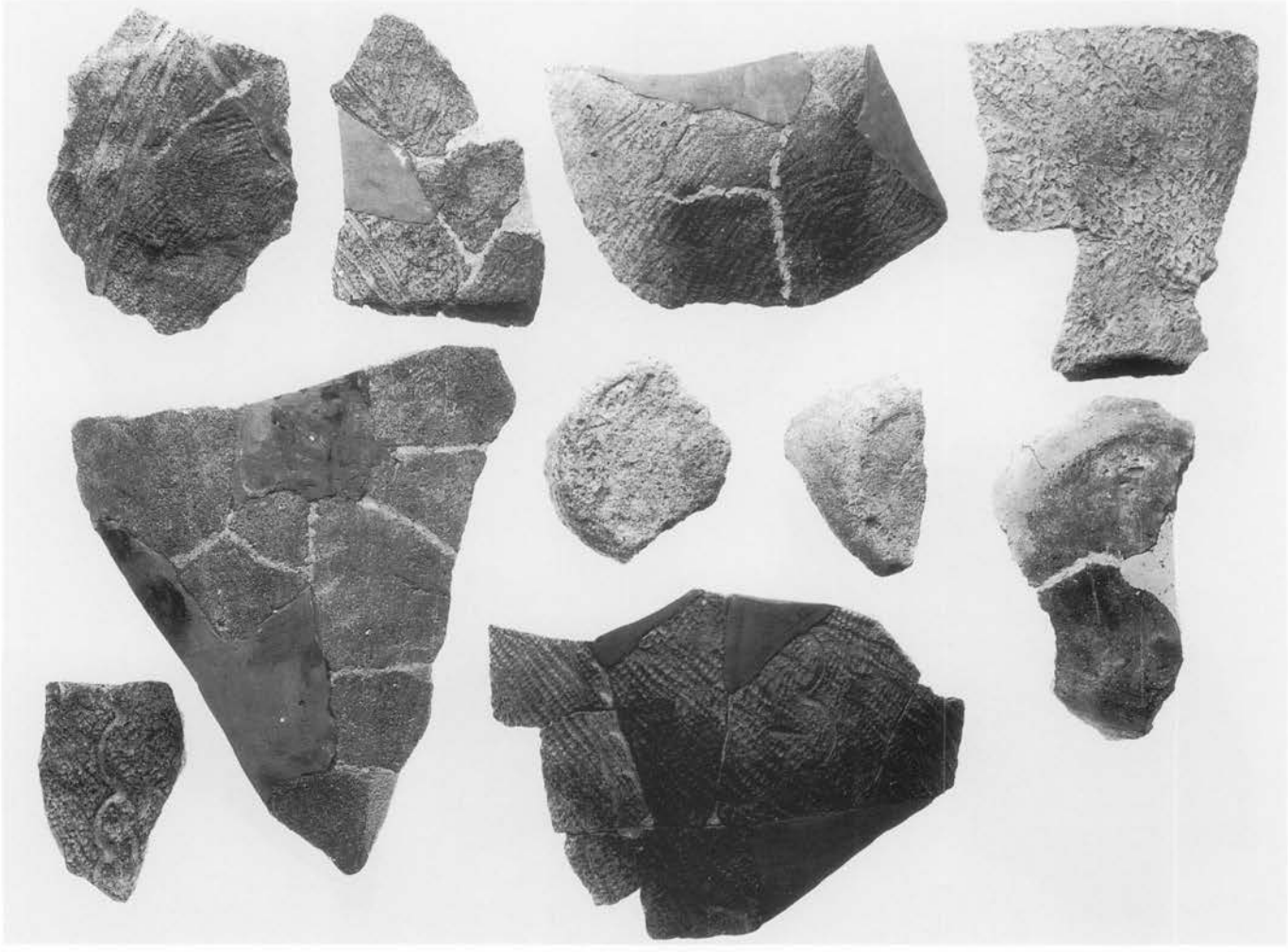


鹿穴遺跡縄文土器(2)

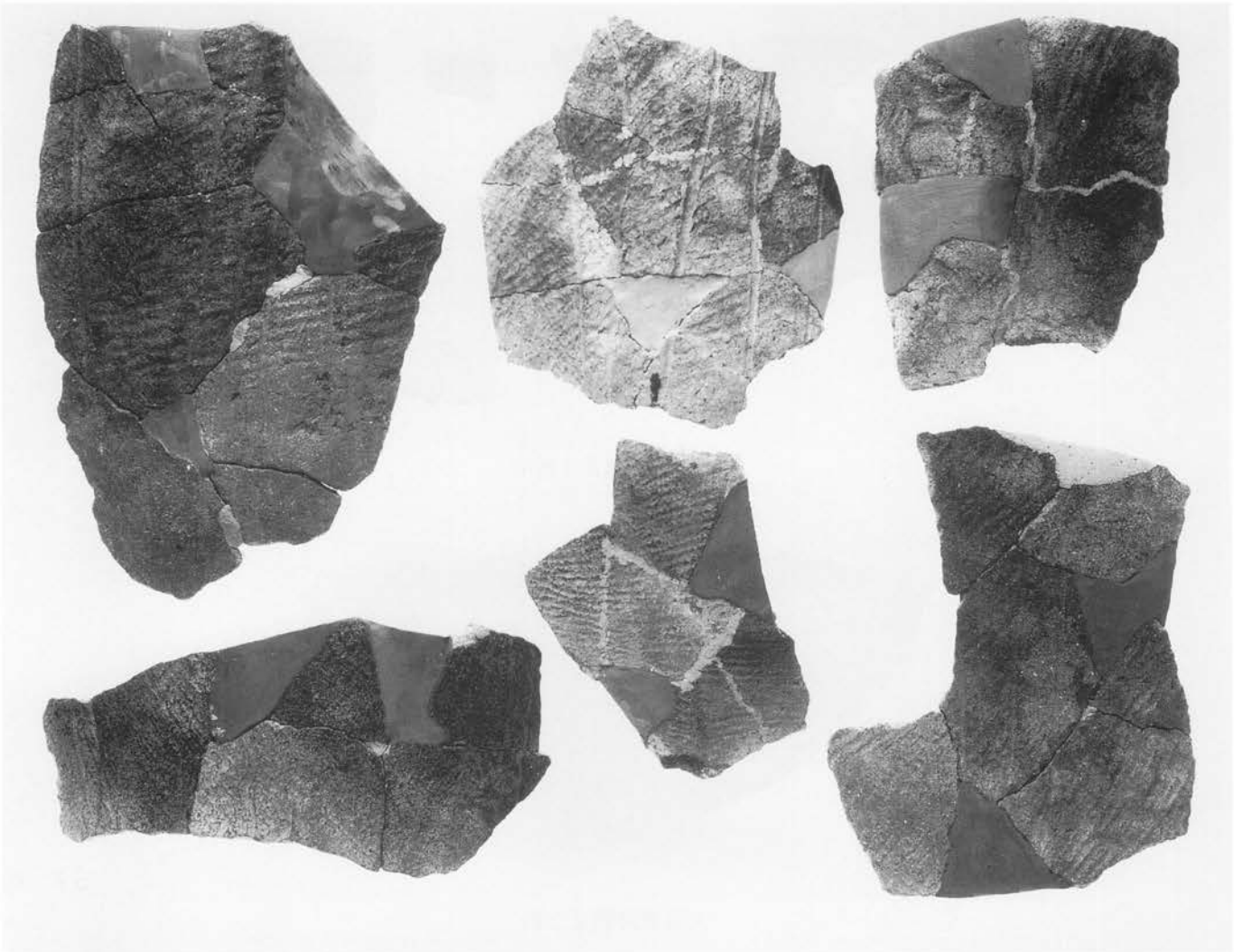


鹿穴遺跡縄文土器(3)





鹿穴遺跡縄文土器(4)

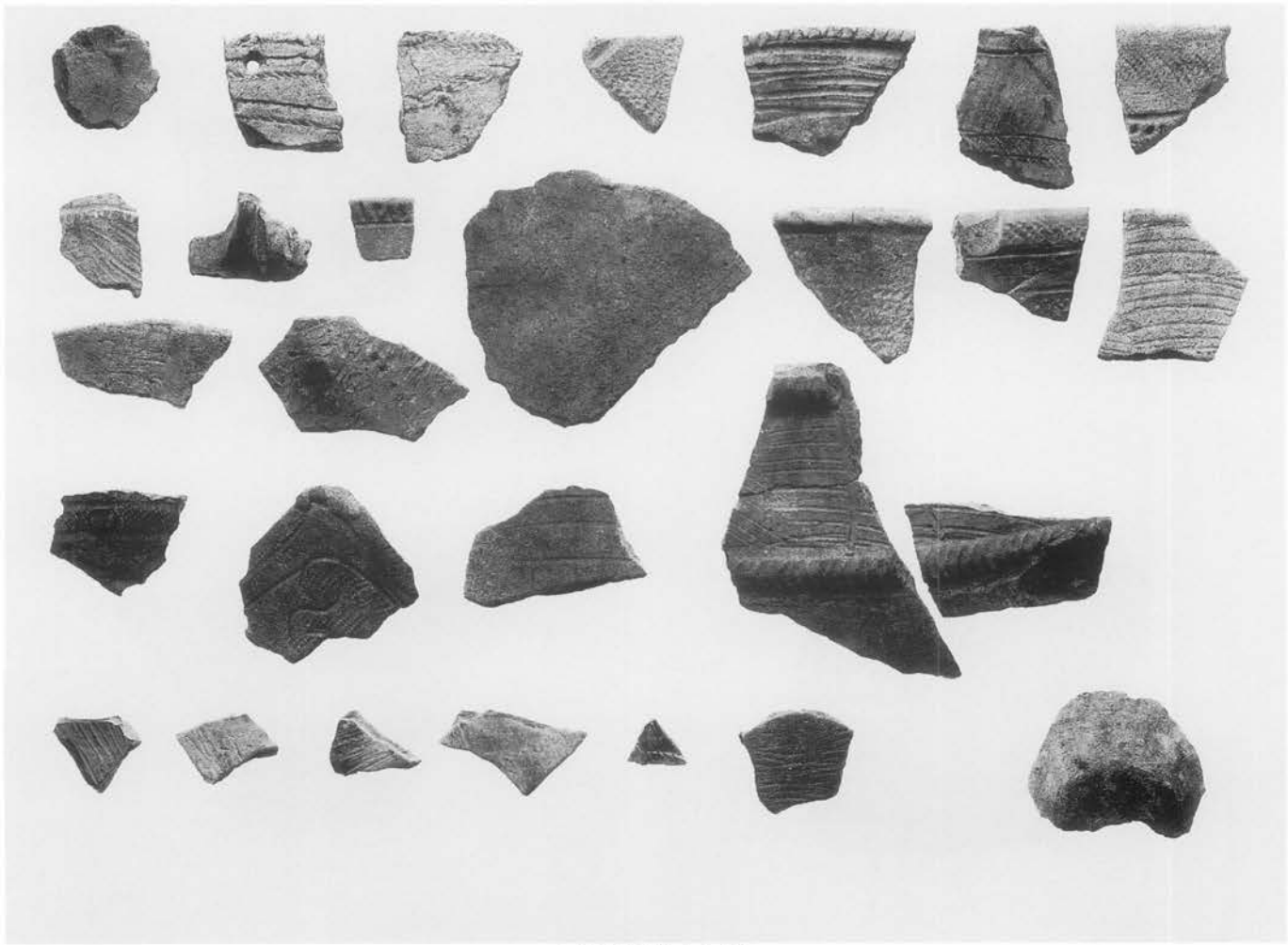


鹿穴遺跡縄文土器(5)

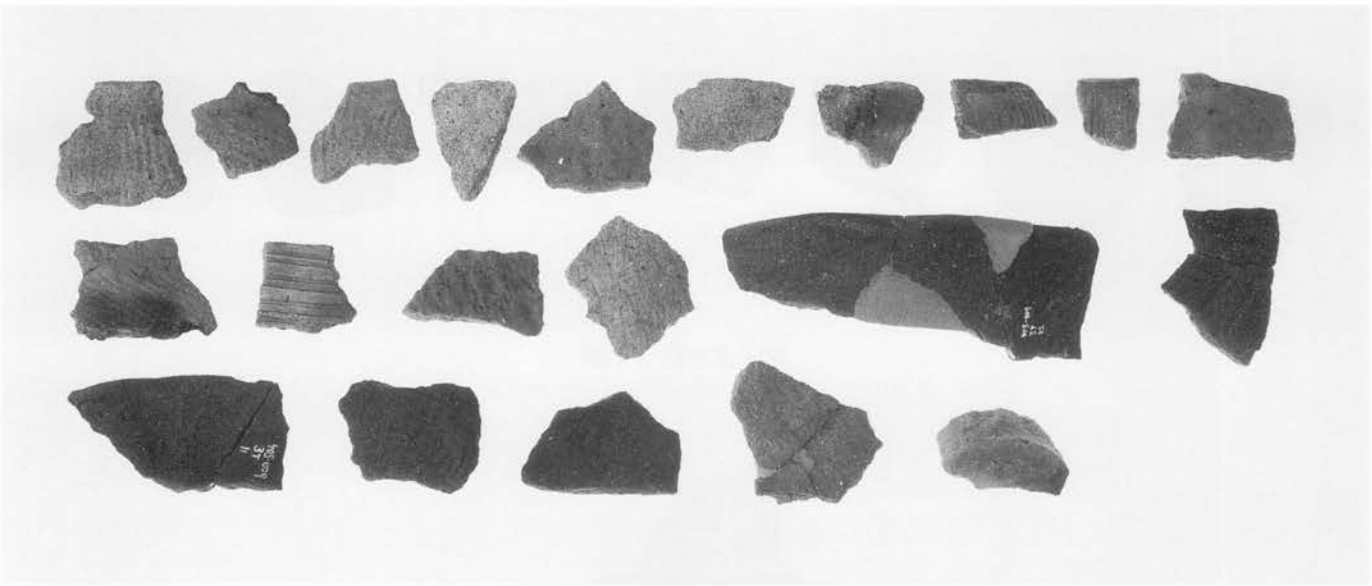
鹿穴遺跡縄文土器(6)

SK－007

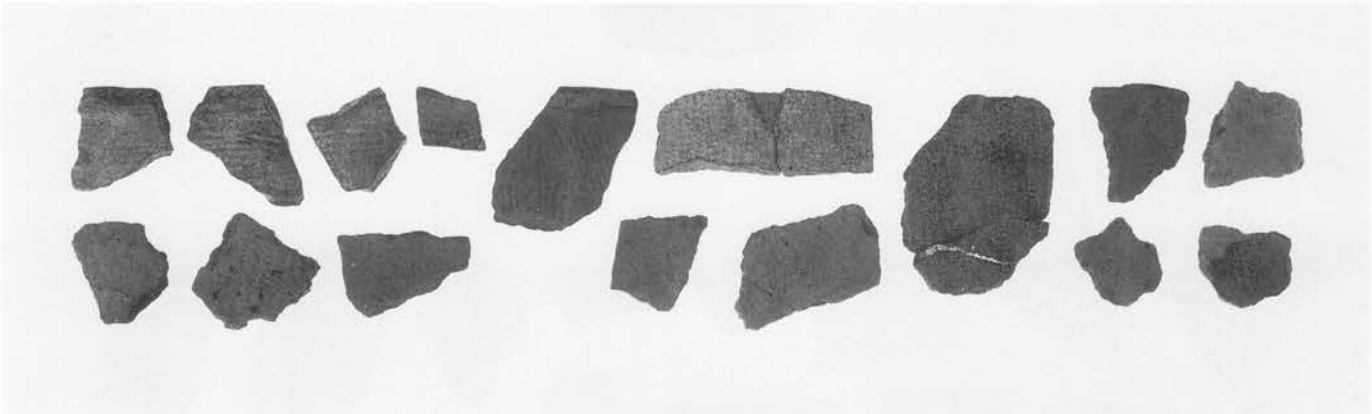
大谷遺跡縄文土器



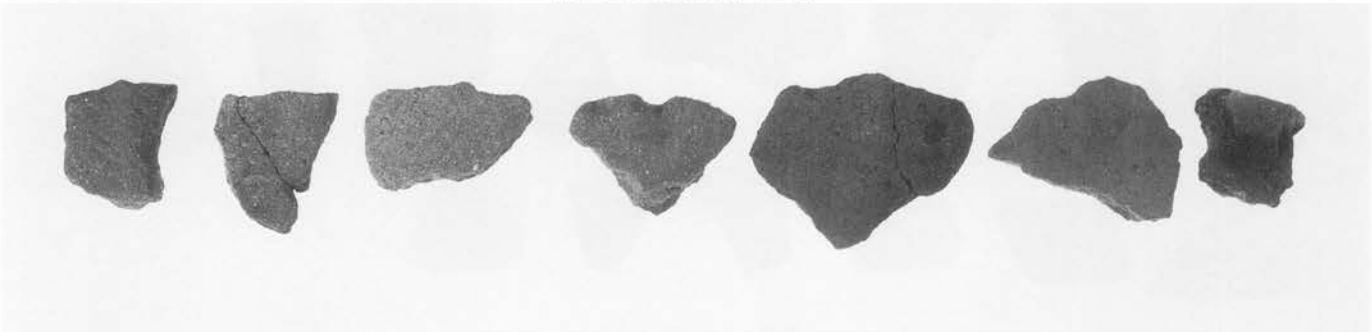
大谷遺跡縄文土器



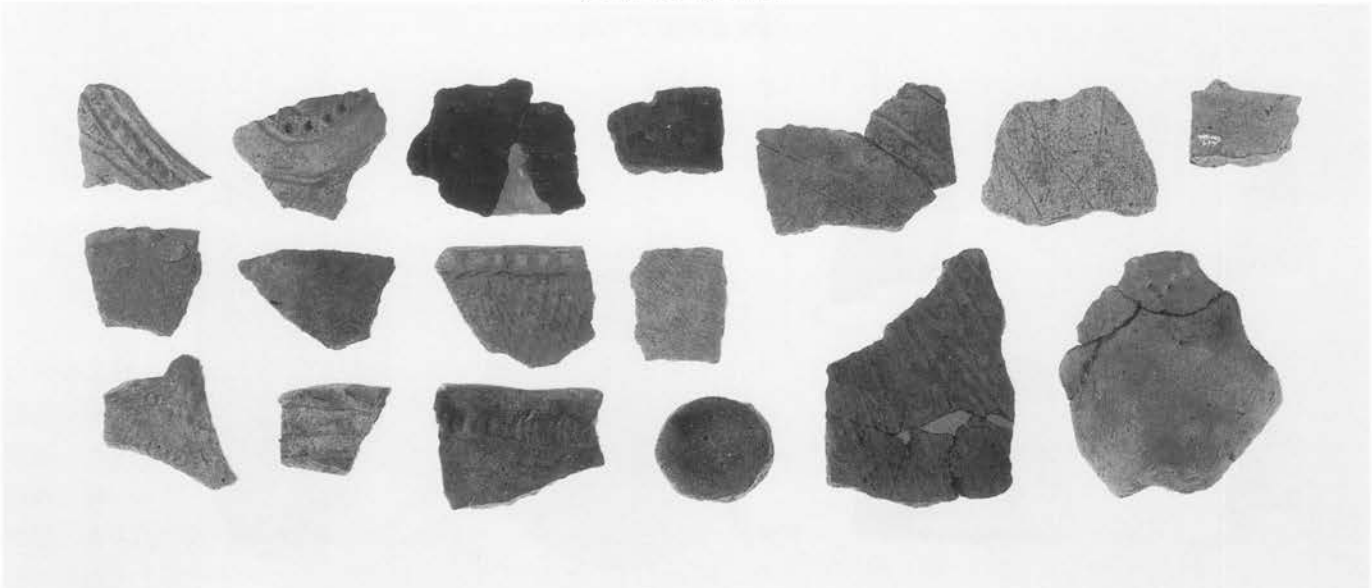
小田山遺跡縄文土器



原山之神遺跡縄文土器



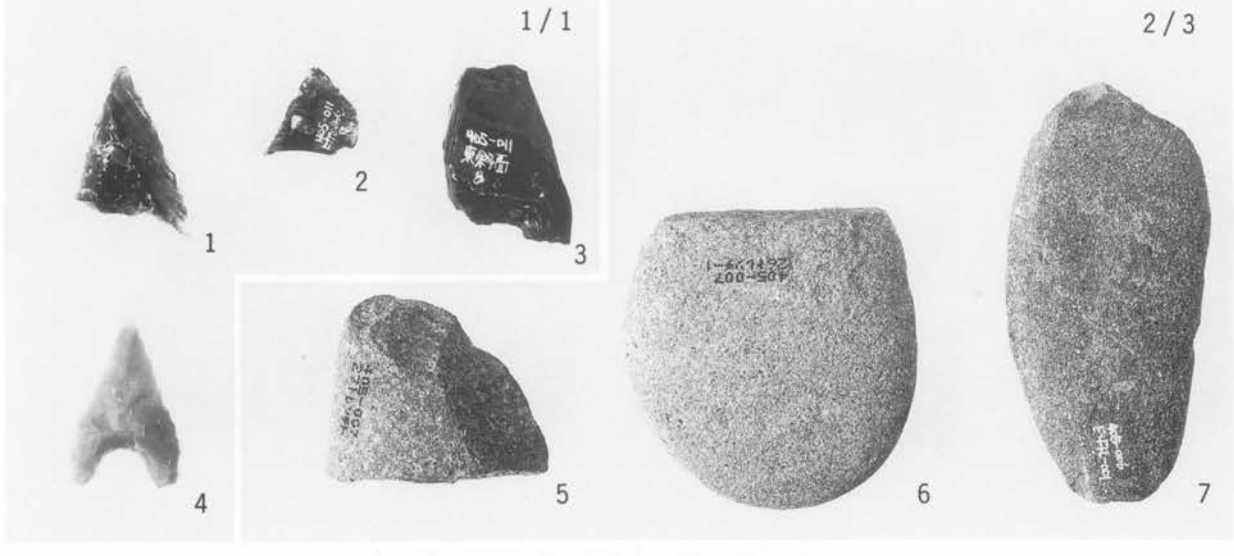
道塚遺跡縄文土器



東嵐山遺跡縄文土器

里守遺跡縄文土器

向畑遺跡縄文土器



縄文時代石器
1　岡田山遺跡
2・3　道塚遺跡
4　榎谷遺跡
5・6　里守遺跡
7　向畑遺跡

岡田山遺跡・道塚遺跡・榎谷遺跡・里守遺跡・向畑遺跡縄文土器、石器

新堀遺跡

002-1

002-2

002-4

002-3

003-1

011-3

011-7

新堀遺跡

011-8

011-6

011-5

011-9

012-3

4E-71-1

下は赤外線写真

新堀遺跡

012-2

012-2

下は赤外線写真

5C-33-2

岡田山遺跡

002-2

002-4

002-3

新堀遺跡・岡田山遺跡出土土器

岡田山遺跡

002-1

003-7

下は赤外線写真

003-6

003-4

003-5

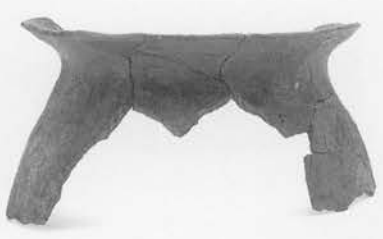
005-2

005-5

岡田山遺跡

005-1

006-3



006-1

006-8

006-9

006-5

006-7

岡田山遺跡

006-6

006-4

下は赤外線写真

009-3

009-4

岡田山遺跡出土土器

岡田山遺跡

011-1

鹿穴遺跡

4C-59-3

原山之神遺跡

1住-6

鹿穴遺跡

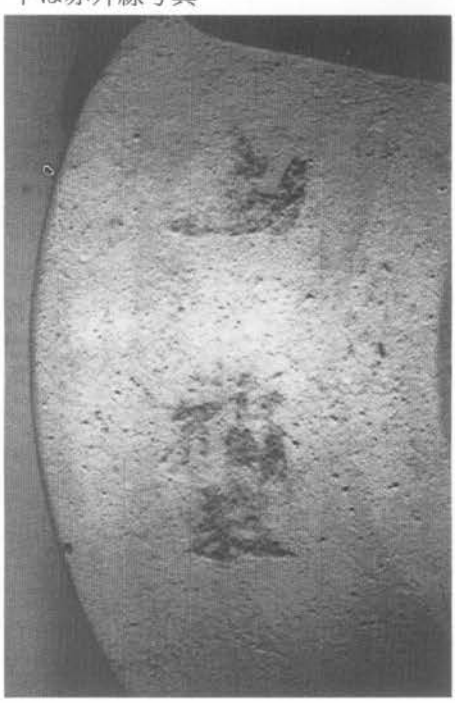
SI-001-2

原山之神遺跡

1住-3

1住-6

下は赤外線写真



SI-001-6

1住-1

SI-002-1

SI-001-4

1住-5

1住-15

1住-10

SI-001-1

1住-18

1住-17

岡田山遺跡・鹿穴遺跡・原山之神遺跡出土土器

原山之神遺跡

1住-7

下は赤外線写真

1住-11

1住-12

1住-16

原山之神遺跡

1住-8

1住-13

1住-14

東嵐山遺跡

A001-1

里守遺跡

27トレンチ-3

里守遺跡

27トレンチ-4

26トレンチ-1

向畑遺跡

表採-2

Eトレンチ-3

榎谷遺跡

2A・2Bグリッド-5

原山之神遺跡・東嵐山遺跡・里守遺跡・向畑遺跡・榎谷遺跡出土土器

報告書抄録

ふりがな	ちばとうがねどうろ（にき）まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ　2
書名	千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書　2
副書名	東金市大谷台遺跡他18遺跡
巻次	2
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第331集
編著者名	加藤正信・矢本節朗・安井健一・廣瀬和之
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809－2番地　　Tel　043-422-8811
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおたにだい 大谷台	ちばけんとうがねしたき 千葉県東金市滝 あざおおたにだい 字大谷台144ほか	12213	020	35° 34′ 44″	140° 19′ 04″	19950904～ 19951016	2,800㎡	千葉東金道路（二期）建設事業に伴う事前調査
たんのおだい 丹尾台	ちばけんとうがねしたき 千葉県東金市滝 あざおおやまだい 字大山台151-1ほか	12213	019	35° 34′ 54″	140° 19′ 04″	19950703～ 19951011	10,017㎡	
まんざいらく 万才楽	ちばけんとうがねしたき 千葉県東金市滝 ざわあざたかみつか 沢字高見塚620-1ほか	12213	012	35° 35′ 32″	140° 19′ 57″	19940708～ 19940818	3,850㎡	
まんやつ 万谷	ちばけんとうがねしたき 千葉県東金市滝 ざわあざしみずた 沢字清水田559-1ほか	12213	013	35° 35′ 33″	140° 20′ 09″	19940606～ 19940615	600㎡	
にいぼり 新堀	ちばけんとうがねしたき 千葉県東金市滝 ざわあざにいぼり 沢字新堀546-1ほか	12213	014	35° 35′ 34″	140° 20′ 17″	19940401～ 19940708	10,000㎡	
いちたに 市谷	ちばけんとうがねしたき 千葉県東金市滝 ざわあざいちたに 沢字市谷481ほか	12213	010	35° 35′ 39″	140° 20′ 29″	19931001～ 19940218 19940406～ 19940525 19941108～ 19941221	9,300㎡ 5,400㎡ 490㎡ 合計 15,190㎡	
あぶらやつ 油谷（1）（2）	ちばけんとうがねしたき 千葉県東金市滝 ざわあざあぶらやつ 沢字油谷498-1ほか	12213	015	35° 35′ 47″	140° 20′ 41″	19940606～ 19941128	13,500㎡	
おかだ 岡田	ちばけんとうがねししゆ 千葉県東金市酒 ぞうあざおかだ 蔵字岡田126ほか	12213	016	35° 36′ 06″	140° 21′ 04″	19940601～ 19940616	2,200㎡	
おかだやま 岡田山	ちばけんとうがねししゆ 千葉県東金市酒 ぞうあざおかだやま 蔵字岡田山147-1ほか	12213	017	35° 36′ 11″	140° 21′ 09″	19941121～ 19950330	6,200㎡	

鹿穴	千葉県山武郡山武町森字鹿穴1811ほか	12405	008	35°36′21″	140°21′25″	19940713～19941031	8,000㎡
小田山	千葉県山武郡山武町植草字小田山1795ほか	12405	009	35°36′23″	140°21′31″	19940606～19940801	5,800㎡
原山之神	千葉県山武郡山武町森字原野山801-1ほか	12405	010	35°36′29″	140°21′52″	19940406～19940603	1,200㎡
道塚	千葉県山武郡山武町森字道塚244-1ほか	12405	011	35°36′30″	140°22′04″	19940406～19940520	4,000㎡
東嵐山	千葉県山武郡山武町椎崎字東嵐山1585ほか	12405	003	35°37′13″	140°23′26″	19930506～19930630	5,800㎡
里守	千葉県山武郡山武町戸田字里守835-3ほか	12405	007	35°37′52″	140°23′45″	19931101～19931224	2,930㎡
向畑	千葉県山武郡山武町戸田字向畑425-1ほか	12405	006	35°38′06″	140°23′57″	19931018～19931115	1,310㎡
榎谷	千葉県山武郡松尾町古和字外台565-1ほか	12407	005	35°39′02″	140°25′16″	19940802～19940922	2,050㎡
大谷	千葉県山武郡松尾町谷津字大谷279ほか	12407	010	35°39′30″	140°26′08″	19950123～19950330	5,900㎡

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大谷台	集落跡	縄文時代	炉穴5基 土坑14基 陥穴1基	縄文土器（草創期・早期・前期）、石器、土製品	縄文草創期の良好な土器片が出土
		古墳時代	竪穴住居跡1軒		
		近世	シシ穴18基 炭焼窯1基		
丹尾台	包蔵地	縄文時代	陥穴8基 土坑4基		
		近世	馬土手1条		
万才楽	包蔵地	縄文時代	陥穴1基	縄文時代（前期）	
万谷	包蔵地	縄文時代	なし	なし	
新堀	集落跡	縄文時代	土坑3基 陥穴11基	縄文土器（早期～晩期）、石器	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡4軒 井戸2基	土師器、須恵器、墨書土器	鉄鉢形土師器が出土
市谷	包蔵地 塚群	旧石器時代	石器集中地点2地点	石刃、削器、石核、剝片、台石、敲石他	
		縄文時代	陥穴6基 土坑10基	縄文土器（早期、前期・中期・後期）、石器、土製品	
		弥生時代	なし	弥生土器	

		近世	塚3基 炭焼窯1基		
油谷（1） （2）	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点2地点 礫群2地点	掻器、石核、礫、剝片、ナイフ型石器	
		縄文時代	土坑3基 陥穴6基	縄文土器（早期、前期、後期）、石器	
岡田	包蔵地	縄文時代	なし	陶磁器	
岡田山	集落跡	旧石器時代	石器集中地点1地点	剝片、ナイフ型石器	
		縄文時代	土坑4基	縄文土器（早期、中期）、石器	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡6軒	土師器、須恵器、瓦、墨書土器	「前寺」の墨書土器が出土
鹿穴	集落跡	縄文時代	なし	縄文土器（早期、前期、中期）、石器	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡4軒 土坑1基	土師器、須恵器	鉄鉢形須恵器が出土
		近世	炭焼窯1基		
小田山	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器（早期、前期、中期、後期）	
		古墳時代	なし	土師器	
原山之神	集落跡	旧石器時代	石器集中地点1地点 炭化物集中地点1地点	ナイフ形石器､敲石、剝片、礫、石核	
		縄文時代	なし	縄文土器(早期)、石器	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡1軒	土師器、須恵器、墨書土器、	
		近世	炭焼窯2基		
道塚	包蔵地	旧石器時代		剝片	
		縄文時代	なし	縄文土器(早期)、石器	
東嵐山	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点1地点	剝片	
		縄文時代	なし	縄文土器（後期）	
		奈良・平安時代	なし	土師器、須恵器	
里守	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器（早期、後期）、石器	
		古墳時代	なし	土師器、須恵器	
		近世	土坑1基	なし	
向畑	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器（早期、後期）、石器	
		古墳時代	溝1条	土師器、石製模造品	
榎谷	包蔵地	旧石器時代		剝片	
		縄文時代	なし	石器	
		奈良・平安時代	なし	土師器、須恵器	
大谷	包蔵地	縄文時代	土坑6基 陥穴1基 炉穴4基	縄文土器（早期、前期、中期、後期、晩期）、石器	
		古墳時代	竪穴住居跡1軒	なし	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡1軒 土坑2基	土師器	
		中世	土坑10基	なし	
		近世	炭焼窯1基	なし	

千葉県文化財センター調査報告　第331集

千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書　2

東金市大谷台遺跡他18遺跡

平成10年３月31日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　　日　本　道　路　公　団

千葉市若葉区みつわ台二丁目34番１号

東京第一建設局　千葉工事事務所

財団法人　千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809番地2

印　　刷　　株式会社　太　陽　堂　印　刷　所

千葉市中央区末広1-4-27